
魔法少女リリカルなのは ~ その拳で護る者 ~

不知火

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ～その拳で護る者～

【Nコード】

N5838R

【作者名】

不知火

【あらすじ】

輪廻転生、神様に殺された、等々、色々な二次小説を読んできて、自分にも起こったら楽しそうだな～って思ってたけど、まさか本当に自分の身に降りかかるとは思わなかった。朝起きたら子供のころに戻ってて、リリカルでマジカルで全力全壊な世界にいて、だから神様にも会ってないし、特殊な能力も貰ってない！どうすりゃいいんだ？

無印突入しました。

A、s 編突入しました。

主人公設定（随時更新） 5 / 27 付けたし（前書き）

小説初投稿です。作者の自己満足のために書いているので過度な期待はしない出ください（笑）誤字、脱字、などあるかと思いますが、広い心で読んでいただけたら幸いです。アドバイス等ありましたらよろしく願います。

主人公設定（随時更新） 5 / 27 付けたし

主人公設定（随時更新）

無印開始時の5年前

名前 前 斎藤 サイトウ 一樹 カスキ

性別 男

年齢 27 9 になり無印開始時は14

身長 無印開始時175cm

出身 第97管理外世界 地球 日本

経歴

基本的に真面目ではあるが、お祭り好きの騒がしいタイプ。戦闘スタイルは素手がメイン。中国拳法を流れに汲む格闘技を習っている。そのため体格は比較的がっしりとしている。黒眼、黒髪で短髪ツンツン頭。能力のため格闘系の漫画などをかなりの量で読み漁っている。クロノと士官学校の同僚にして悪友。いつもクロノを巻き込む。クロノが主席に対し、下から二番目という成績でなんとか卒業した。実技面では問題ないが魔法と座学で壊滅的な成績だった。本人いわく「クロノとエイミイがいなかったら卒業出来なかった」とのこと。

朝起きたらリリカルでマジカルで全力全壊な世界に居て大混乱したのは良い思い出。この世界に来る前は警察官をしており、SATで訓練した経験を持つ。父親が日本出身の魔導師で、母親が地球出身の警察官。父親が魔導師なの以外はいたって普通の一般家庭。両親も前の世界と一緒になので安心した。今は二度目の学生生活を満喫中。私立聖祥大学付属中学校2年生。最近のマイブームは感謝の正拳突き一万回。

デバイス 「スサノオ」

インテリジェントデバイス 「スサノオ」 ベルカ式カートリッジシステム搭載の格闘型デバイス。両手、両足に装着。ごつごつしたものではありませんスマートなシルエツトで着けた感覚は素手に近く、薄いグローブの様になる。手首から肘の手前まで装甲で覆われていて防御などでもできる。待機フォームはドックタグである。術者の魔法発動の際の補助に特化したデバイス。本人いわく「スサノオがなかったら魔法なんかまともに使えないんじゃないかね？」というほどである。何重にも嚴重にプロテクトされたブラックボックスがある。性格は冷静、口調は丁寧だが一樹の事を クソ野郎 と呼ぶ。

能力

総合魔力量 A

魔導師ランク A

空 戦 A

陸 戦 SS

ラーニング

一度見た技、受けた技は自分の技として使うことができる。ただし自分のスタイルに合った技でなければラーニング出来ても使えないうえ、ある一定量訓練しなければ使いこなすことは出来ない。しかし訓練を続けることによりその技をさらに昇華させることができる。

格闘特化

格闘戦闘に特化しており、格闘技であれば漫画でもアニメでもラーニング出来る。ただし一定量の訓練は必要。

心意六合しんいごくろくごう

主人公がメインで使う格闘技。「相手が武器を持っていて当たり

前』というコンセプトの元磨き上げられた武術。対武器格闘専門武術。一対一であればまず負けることはない。

肉体強化

魔力で身体能力を強化する能力。少量の魔力で大幅な強化が可能。スサノオのサポートのおかげで

家族

父親 齋藤 一馬

日本出身の管理局員。デバイスマスターの資格を持ち、その技術は管理局トップレベル。魔導端末整備開発課の課長。デバイスの開発については賛否両論。結構な親馬鹿。過去に何らかの事故を経験している当事者。

妹 齋藤 亜夜

齋藤家の末っ子。肘まである黒髪を首のあたりで纏めており、正面から見るとショートカットの様に見える。母親似の優しい顔立ちで将来は美人になる（一馬談）と言われている。なのはと同級生ではやて、アリサ、すずかとも仲良し。性格は温厚。一樹に突っ込む際は手加減抜きで突っ込む。（肉体言語風に）剣術においては高町士郎が認めるほどの天才。一樹のレベルを軽く凌駕する（剣術において）。今は「高町道場」において基礎訓練の真っ最中。

デバイス 「アマテラス」

非常に高性能なデバイスだが、人格？面で非常に問題のある「高性能欠陥機」亜夜の事は少し認めている？待機フォームは日本刀のアクセサリー、起動すると通常の日本刀とほぼ同じ感じだが若干鞘が大きめに出来ている。カートリッジシステムは未搭載。

母 齋藤 明子 警察官

兄 齋藤 晃

魔導端末整備開発課

Device Maintenance Development Division
別名「DMD」職員

スーツの男 ヒューズ・アレックス 主に企業に対して行動する。
白衣の男 バニ・モラウタ 主にデータ等を管理している。

作業着の男 エドワード・サックス 主にパーツなどを作ったり、
強化している。一馬とは親友。

制服の女 ノーラ・レミング 一馬の補佐

士官学校

五味俊介教官 男性 既婚者

教官職をする前は、銀制服シルバーにいた経歴を持つ。ベン隊長とは同期、
ジェイクは教え子である。シルバー時代に死の淵を彷徨う事故に遭
うが生還する。しかし現役は無理と判断されそのまま引退して教官
をしている。日本で消防のレスキューをしていたところをスカウト
された。リンカーコアがあったというのもある。

第一話（前書き）

初投稿です。感想、アドバイスよろしくお願いします！

第一話

ピピピ・・・ピピピ・・・ピピピ・・・

いつもの時間になる目覚まし時計。まどろみの中から意識が浮上する。寝ぼけ眼をこすりつつ、耳障りな電子音を鳴らす目覚ましを探しその音を止める。ベットからでて上着を羽織ると、二階から下のリビングに向かいすでに起きている両親に挨拶をする。

「おはよう、父さん、母さん」

朝食の準備をしていた母さんが、

「あら、今日は早いね、何かあるの？」

と言ってきた。

「ん？そうか？いつも通りだと思うけど？」

すると母さんがポカンとした顔をして

「何言ってるの。いつも時間ギリギリまで寝てる癖に。それならいつもこの時間に起きなさいな。いつも慌ただしいんだから」

・・・ん？何を言っているのだろうか？社会人になってからというものの遅刻ギリギリまで寝ていた事なんてない。社会人になるとやることが多いのだ。朝は部屋の掃除から始まり、机の掃除、配布物、お茶くみ等々、しかもそれを最近入ってきた新人に教えなければいけないのだ。だからこそ遅刻ギリギリまで寝ていたらそれらの仕事は

全部できず、俺が先輩から説教をくらってしまつ。それは御免こうむりたい。と思つていると

「どうしたんだ、ポカンとして。早くご飯を食べて準備をしたらどうだ？」

ポカンとしていた俺を見て、会話に入ってきた父さんがいつてk・
・あれ？なんだか父さん若くなつてないか？具体的に言つと頭頂部付近が。ふと母さんを見るとこちらも若くなつてないか？

「どしたの？いくら早く起きたからつて、のんびりしていると『学校』に遅刻するわよ？」

「……………は？今母さんは何と言つた？『学校』？こちらら最後に学校に行つたのは9年前の高校の卒業式だ。しかもそのときは両親揃つて卒業式に出会つただろうに、からかつているのかと思つて顔を見たが、からかつている様子なくいたつてまじめだつた。いつたい何が起きているのだと混乱し始める。何かないかと思つてキョロキョロしている目と目に止まつたものがあつた。新聞だ。そうだこんな時こそ情報だ。新聞を読んで現状を把握してこの異常を打開する。ああ素晴らしきかな紙媒体！ここで取り乱すのは馬鹿だ。冷静になれば道は開ける！そうなれば行動だ！

「と、父さん。新聞とつてくれる？」

「ん？ああ、まだ父さんが読んでるから待つてくれ。」

ガッテム！！早々に道が閉ざされてしまつた！なんてこつた！どうすりゃいいんだ！他に、他にないのか？何か情報収集できるものは！とさらに部屋を探すと見落としていたものがあつた。そうだ、

テレビだ。ニュースを見れば何かわかるはず！そうすれば現状を開ける！そう思いリモコンに手を伸ばしテレビの電源を入れニュースをつける。すると女子アナがにこやかにこう伝えてきた。

「おはようございます。3月1日6時のニュースをお伝えします。まず始めに……」

日付だけ！！ガツテム！なんて世の中だ！肝心の年号が分かんないじゃないか！これじゃ意味ないじゃん！と頭を抱え悩んでいると目の前に座る父さんが読んでいる新聞の一面に載っている日付が目に入った。

新暦60年3月1日

……新暦？平成じゃなくて？は？いつの間が変わったんだ？いやいや、あり得ない。昨日今日変わったのであれば新暦元年とかになってるはず。新暦60年。少なくとも新暦に代わってから60年が経過していることになる。平成がどっか行った！なんだいったい何が起きてんだ！情報収集して状況を打開するどころか絶賛大混乱である。そんなふうに唸っていると母さんが父さんに言った。

「ほら、あなたも新聞読んでないで支度しないと遅刻しますよ。今日は『ミッド』に行くんでしょ？」

「ん？もうそんな時間か？じゃあ支度するか。ほれ一樹、新聞」

そういうと、父さんはおれの目の前にポンと新聞を置き支度しに行った。

「あ、ありがとう……」

かるうじて言う事が出来たが、他のことで頭がいつぱいだった。・
・『ミッド』?どこかで聞いた気がするが思い出せない。そもそも
ここは日本であり海外ではない。27年間日本で暮らしてきたが、
ミッドなる名前の都道府県、市区町村なんて聞いたことがない。い
つたい何がどうなってるんだ?混乱を通り越してもはやパニックで
ある。頭が働かないまま最後の手段として恐る恐る母さんに尋ねる。

「か、母さん。さっき言った『ミッド』って?」

すると母さんが「どしたんだ」と言わんばかりの顔で、

「何言ってるの?『ミッド』っていったら『ミッドチルダ』の事で
しょ?お父さんの仕事場がある。それにあんたも去年行ったでしょ
?」

と言ってきた。

「ウン、ソウダッタネ」

そう言われて俺は考えるのをやめた。もう俺の理解力が天元突破で
す。わけわかめです。

「なんだが、分かってなさそうだけどまあ善いわ。早く食べて、
『小学校』行ってきなさい」

「ウン、ソウダネ」

そう言われて俺は自分の部屋に戻った。状況を整理するとどうやら
俺は『小学生』で父さんの職場である『ミッドチルダ』なる場所に

は行ったことがあるようだ。部屋に戻ってから気がついたのだが、身長が縮んでいた。叫びそうなのをこらえつつ学校に行くための準備をする。まず通学カバン。中身を確認し忘れ物がないか確認する。次に携帯電話。机の上にあったので、開けて確認したところ自分のもの様だ。最後に制服。白色がメインの制服だった。つーか小学校で制服って、どっかの私立なのかな？しかし、上着はいいんだが、下が短パンって・・・なんか泣けてきた。準備もできたので、下に向かい母さんに行ってきますと声をかけ、学校に向かうのだった。

第二話

斎藤一樹

あの大混乱した日から一週間が経過した。あの後、道に迷い遅刻ギリギリで何とか学校にたどり着けた。そこで見たものは、ちっちゃくなつた友人達。予想はしていたが実際に見るとやはり頭を抱えなくなる。何人か知らない顔が混じっているが概ね俺の知っている連中ばかりだ。そのため、普段通り？（過去の小学校時代を参考に）過ごすことが出来たと思う。出来たと信じたい！時々担任の先生が首を傾げていたが気のせいだ！

そしてただいま週末、つまり土日だ。ここ一週間で分かったことを整理すると次のような感じだ。

名前 斎藤一樹 9歳 小学3年生だ。身長は友達より背が高く140?ある。まあこのあたりはあまり変わらない。

勉強面は、もともとは悪くないようだ。部屋をひっくり返したら、テストの答案なんかが出てきたからそれを参考にすると、だいたい中の上ぐらいだと分かった。これもある程度制限というか同じ状態をキープする方向で行こうと思う。まあ、あんまり頭は良い方じゃなかったから高校に行ったらみんなと同じぐらいになると思うけど。身体能力は意識が俺に代わってからか鰻登りに上昇中の様だ。この辺りは出来る限り抑えた方が良さだろう。試しに全力で動いたところ、成人並みの動きが出来たが、次の日は全身筋肉痛で動くのもやっとの状態になってしまった。まあ、やっぱり人外の様な力は発揮されなかった。

しかし、ひとつだけ思いがけない収穫があった。それは、たまたま格闘技の番組を見ていた時だった。選手が「技」を出したときにその技の情報が頭に流れ込んできたのだ。初めは何だと思ったが試しに体を動かしたところぎこちないながらもなんとか形になってい

た。その後も繰り返し練習していくと、よりスムーズに、より速く、より重くなっていた。神様に会ってなかったから特殊能力なんかないと思っていたけどそんなことはなかったぜ！某RPGゲームの能力とほぼ一緒だった。

「ラーニング」それが俺の能力の様だ。

それがわかったので、格闘技、スポーツ、音楽等々いろいろ「ラーニング」してやる！と意気込んだものの「ラーニング」が反応するのは主に格闘技、これは反応が一番強かった。次に剣道、弱かったけど一応反応したのが野球。なんでだ？と思ったらこれは前の世界で俺が経験したスポーツや武道だった。反応も経験年数が長い順で強くなっている。しかし一番驚いたのは「漫画」を読んだ時だった。まさか漫画の中の「技」をラーニングするとは思わなかった。まあ確かに経験年数はダントツで一番長いのだが・・・良いのかね？ちなみに男の子ならだれもがやった事があるであろう「かめめ波」は出なかった。これは期待していただけにちよつとショックだった。

これなら他にも能力があるかもしれないと思いきドキドキしたが、それ以外の能力は発動することがなかった。まあないと決まった訳ではないので気長に待とうと思う。

さて、次は家族についてかな？両親共に健在。五つ上に兄、五つ下に妹がいて三人兄妹のど真ん中だ。そして、父さんが日本出身の「管理局員」母さんが日本出身の一般人だ。

そう「管理局員」なのだ。ようやく思い出したが「ミッドチルダ」「管理局」とくればこの世界は「魔法少女」で「リリカル」で「なのは」な世界の様だ。まったく未だに信じられない。こんな事になるならもつと真剣に、アニメの内容を覚えるべきだった。原作に介入するか、否か。確かまだ時間があつたはずだ。ゆっくり考えようと思う。

さて、これからどうするかが問題だ。まず自分の能力が分かった事は大きい。これから武道場を探して自分を鍛えていこう。後は漫画だな。「ラーニング」でコピー出来る「技」は片っ端から覚えていこう。お小遣いの大半はこれに消えそうだ。

そして、「魔法」だ。こればかりは俺だけじゃどうしようもない。少なくとも親父の説得が必要になってくるし、魔法訓練も必要になってくるだろうし、うん今の状況を説明しても信じてもらえないだろうしなあ。たまに「ミッドチルダ」には行くからその時に説得できるかな。

そう悩んでいると、コンコンと部屋のドアをノックする音が聞こえた。

「は〜い。だれ？」

「お父さんだけど、ちょっと良いかな？」

そう言って、ドアを開け顔をヒョコッと出してくる

「どしたの？父さん」

「なに、明日ミッドチルダに行くことになったんだが、仕事はすぐ終わるからそのあと観光でもと思ってな。」

「母さんは行くの？」

「お母さんは明日こっちで近所のお母さん達と買物だってさ。」

「兄ちゃんは？」

「お兄ちゃんは友達と約束があるから行けないってさ。」

おお、なんとというタイミング。俺が最後なのは納得いかんが、これが御都合主義とでもいうのか？まあ行ったことがないから行きたいんだけどね。あれ？仕事もあるという事は管理局も見られるのかな？そういえば、父さんはどんな仕事してんだ？

「父さん、仕事あるの？どんな仕事？」

「なんだ？父さんの仕事が気になるのか？」

父さんが嬉しそうに、ニコニコしながら答えてくる。お？これは仕事場見学出来るやもしれん。興味もあるしお願いしてみるか。

「うん！俺、父さんがどんな仕事してるのか知りたい！」

と小学生ぼく答えると、

「そうかそうか、そんなに興味があるのか！じゃあお父さんの仕事も見学するか！」

と満面の笑みで答えてきた。相変わらずわかりやしーなおい！しかないのか？そんなに簡単に許して？まあ、自分の子供だし問題ないんだろうな。

「やったー！絶対だよ！」

これまた、小学生ぼく答える。

「おう、大丈夫だ！問題ないぞ！じゃあ明日はちょっと早いから、そろそろ風呂に入って、歯磨いて寝なさい」

「何か急に不安になってきた……」

「何で!？」

と言いつつ父さんは部屋から出て行った。出たのを確認すると「ふう」とため息をつき明日の準備をし始める。もしかしたらトラブルに巻き込まれるかもしれないから注意しよう。あのセリフを聞くところもなあ。でも管理局を見学出来るのは大収穫だ!いろいろ調べてみよう。そう思い風呂に入るため下に降りるのだった。

翌日

「ふえ〜〜。でつけ〜なあ〜」

ただいま、父さんとミッドチルダに来ています。で目の前に何があるかというと、超高層タワーと、その周囲のやや低い(超高層タワーのおよそ半分程度の高さだが、市街地のビル群よりは遙かに高い)建物があります。そうです。『時空管理局地上本部』があります。ここはミッドチルダ中央区画首都クラナガンです。『Strikaers』の後半の舞台で、スカさんにボツコンボツにされた地上本部です。まさか父さんがここに勤務しているとは……信じられん。

「お〜い、いつまで眺めてんの?中に入るよ?」

と、父さんが声をかけてくる。

「は、は〜い。ねえ父さん。マジにここで働いてんの?」

若干信じられないので聞いてみる。

「何だ？信じてないのか？ここは真正銘お父さんの仕事してるところだぞ」

「こんなでかいところで何してんのさ？」

「それは着いてからの楽しみだ」

父さんは、子供っぽい笑みを浮かべ俺の手を引いて「本部」の中に入っていく。「本部」の中はすごかった。入って正面に受付のような場所があり、ロビーは吹き抜けになっていて、足元には管理局のエンブレムが描かれていた。すごかった。圧倒的だった。入る前と同じ様にポカンと眺めていた。

「どうだ？すごいだろ」

と父さんがニヤニヤしながら言ってくる。チクシヨウ。答えなんか聞かなくてもわかってる癖に！

「うん、すごいや。想像以上だ」

すると父さんは、ニコニコしながら頭をグシャグシャなでてくる。頭が左右に振られるが何となく心地よかった。

（何か、久しぶりだな。こんなふうに頭なでられるの）

そう思っていると、父さんは頭から手を離し、俺の手を引き受付の後方にあるエレベーターに向かって歩いていく。下行きのボタンを押すと、ちょうど待機していたエレベータのドアが開きそれに乗

り込んだ。若干の浮遊感があり、エレベーターが下に向かっているのがわかる。30秒程だろうか？「ポーン」と音が鳴りドアが開く。エレベーターを出ると通路がありいくつかのドアがあった。そのうちの一つのドアの前に立つ。

（魔導端末整備開発課？）

「ここがお父さんの仕事場だよ」

と言い、ドアを開け中に入っていく。それに続き部屋に入るとそこは不思議な空間だった。若干薄暗い空間に様々な機械が並び明滅しており、円筒形の入れ物の様な機械に浮いている宝石のようなもの。壁に並べてある様々な武器。そこでやっと思い当った。デバイスだ。ここはデバイスのメンテナンスおよび開発を行うところで、どうやら父さんは戦闘要員ではないようだ。研究員の様なものなのだろう。

「じゃあ、父さんは仕事してくるから大人しくしてくれ。周りの物には触らないようにね。」

そういうと、父さんは奥にあるドアに向かい、ドアを開け部屋の中に入って行った。俺はしばらく部屋の中のものを観察してたりしてチヨロチヨロしていたが、父さんが入って行ったドアの横に、長方形のはめ込み型の窓ガラスがあつたのでそこを覗いてみた。ガラスの向こうは広い四角い空間だった。野球場ぐらいあるのでは？と思っているとその中で二つの動く影があつた。気になり目を凝らしてみようと、啞然とした。俺と同じぐらいの男の子が、猫耳をはやしたお姉さんと空を飛びながら戦闘しているではないか。あまりの事に啞然としていると後ろから声をかけられた。

「どうしたのボク？こんなところで何してるの？」

「!?!」

某蛇の傭兵のゲームの様に驚きつつ、恐る恐る振り返るとそこには原作キャラがいた。その女性は、ポニーテールになっている髪は腰辺りまで届いており、整った顔、スタイルのいい身体に管理局の制服を着ており、全体的に優しい雰囲気にも包まれている。そう、「リンディ・ハラウン」その人である。なぜここに?と思ったが、思い当たる事があった。先ほど猫耳のお姉さんと戦闘していた男の子の方だ。「クロノ・ハラウン」リンディさんの一人息子。その付添にでもきたのだろうか?それならば此処にいるのも納得である。それならば猫耳のお姉さんは、クロノの師匠、リーゼ姉妹の「アリア」か「ロツテ」なのだろう。しかしまあ、こんな小さいときから戦闘訓練とは恐れ入る。よくやるね、ほんとに。そんな事を思っているリンディさんが更に声をかけてきた。

「どうしたのかな?」

更に優しい顔をして訪ねてきた。思わずドキっとしたがこれで俺と同じくらいの年の一児の母なのだから信じられん。まだ女子大生でも通じるんじゃないかと思う。家の母さんとは大違いである。また考え込んでしまったが自己紹介位しないと失礼だと思いやつと口を開く。

「え」と、はじめまして。斎藤一樹です。今日は父が職場を見せてくれる言っただので着いてきました」

軽くお辞儀をしつつ答える。するとリンディさんも律儀に頭をさげ、

「あら、カズマ課長の息子さんなの?礼儀正しいのね。はじめまし

てリンディ・ハラオウンです。今日は息子と一緒に来てるの、後で紹介するわね」

「そうですか、楽しみにして……え？課長？」

「あら、知らなかったの？カズキ君のお父さんはこの魔導端末整備開発課の課長。つまり一番偉い人よ」

……なん……だと？父さんが課長？あり得ない。つつか想像できん。マジか。冗談なのかどうかリンディさんの顔を見るがニコニコしているだけでわからねえーし。そんな事を思っていると、父さんが入って行った部屋のドアが開き、父さんが戻ってきた。リンディさんに気づき声をかける。

「あれ？リンディさん来てたんですか？」

「ええ、先ほど来たばかりです。どうですかクロノのデバイスは？」

「S2Uですか？ええ今のところ問題ないですよ。こまめに整備もしてあるみたいだし。大事に使ってもらえて何よりです」

「そうですか。調整ありがとうございます」

「いえいえ、こちらはそれが仕事ですからね」

そう言っつて、父さんはこちらを見た。

「それと、紹介します。息子の一樹です」

「ええ、先ほど声をかけたら自己紹介されましたよ。礼儀正しい息

子さんですね」

そう言われると父さんはニヘラと顔を綻ばせニコニコし始めた。父さん、息子が褒められたのがそんなに嬉しいのか。と頭を抱えていると、父さんが戻ってきたドアから3人が入ってきた。1人はさつき戦闘していた男の子クロノ・ハラオウン。そして残りの二人は、猫耳をはやしたお姉さん。クロノの師匠アリアとロツテだろう。気のせいか幾分クロノが煤けていたが？

「母さん訓練終了しました。」

「御苦労さま。どうだった？」

「はい、問題ありませんでした。処理速度もいい感じですよ」

そう事務的な話をしていると、俺に近づいてくる2つの気配。リーゼ姉妹だ。

「ん？誰この子？クロスケの友達？」

「駄目だよクロノ友達連れてきちゃ」

「初対面だよ！」

そういうとクロノはこちらを向き話しかけてきた。

「クロノ・ハラオウンだ。ここは関係者以外は入って来れないはずだけど、君は？」

「ああ、斎藤一樹です。あそこでリンディさんと話してニヤニヤし

てるのの息子だよ。」

言い方はアレだが事実を客観的にみるとそうなるのでそのまま話してみた。が、クロノは特に反応もなく実にあっさり返してきた。

「そうなのか。カズマ課長にはお世話になってるよ。」

「そうなの？いまいち父さんが役に立ってる姿が想像出来ないんだけど？父さんってどんな感じなの？」

クロノは、少し考えてから答えてきた。

「僕もあまり詳しくは知らないけど、デバイスマスターとしてはトップレベルだつて聞いているよ。今も僕のデバイス見てもらったけど調子が悪かったところがあっさり治ったし。ただ……」

「ただ？」

「開発方面では賛否両論らしい。ガラクタばかりかと思えば、たまにすごい物を作るらしい」

「そ、そいつはまた……」

「でも、優秀なものには変わりないよ。」

「そう言っていただけとありがたい。しかし、さっきはすごかったな！空飛んでビームみたいなのバンバン撃つて。」

「あれ？君は魔導師じゃないのかい？」

「うん。魔導師じゃないし魔導師って何？」

そういうとクロノは考え出してしまった。まあ知ってるには知っているけど、それを言う訳にもいかないしね。俺は考え込むクロノに話しかけた。

「おいクロノ？どうしたんだ？」

クロノは、ハツとなり

「すまない。少し考え事をしてしまった。リンカーコアがあったからってつきり魔導師かと思って」

・・・マジか！リンカーコアあんのか俺！イエス！御都合主義万歳！テンションあがってきた！

「えー！じゃあ、俺もリンカーコアってのがあから、さっきみたいに空飛んだり、ビーム撃ったり出来んの！？」

若干興奮気味にクロノに詰め寄り質問する。

「あ、ああ。資質の問題もあるからわからないけど、努力次第で結構出来るようになるよ。」

体を引きつつ答える。

「どうやったなら出来るようになるんだ！やっぱり特殊な訓練が必要なのか！」

「いや、デバイスがあればある程度で来るようになるけど。」

「マジで！よっしゃ！そうとわかれば、父さん！」

未だ、リンディさんと話している父さんを大声で呼ぶ。

「ん？何だ一樹？」

「さっき、クロノから聞いたんだけど、俺にもリンカーコアがあつて魔導師になれるかもしれないだつて！だからデバイスくれ！」

自分で言つてアレだが、何という暴論。隣にいるクロノも唾然としている。これでもらえるとは思っていないが何か別の方向で考えてくれるかもしれない。そう期待した目で見てみると、

「うーん、流石にあげるのは無理だけど、デバイス使ってみるか？さっきクロノ君が使つてた部屋で。」

「うん！」

キターーーーーー(。(-----!

顔のニヤニヤが止まりません！かつてこのようなテンションになった事があつただろうか！否である！人生最高の日になるかもしれない！そうと分かればこうしちゃおれん！父さんの手を引き部屋に向かうのだった。まあ結論から言うと、人生最高というには余りにも微妙だったが。

同士の全力戦闘にくらいなら耐えられるように設計されているよ。」

と父さんが答える。俺に部屋の説明をしていた時だ、意外だったのかロツテが反応する。

「え、そうなの？そうと知ってたら手加減なんかするんじゃないかなあ。」

とロツテが言う。若干クロノの顔が引きつっている。

「そうなのかい？じゃあこれから一樹に魔法を教えるんだけど、私じゃうまく教えられないから余裕があつたら教えてもらえるかな？」

するとロツテは少し考えた後、実に良い感じ「ニヤ」としながら了承した。それを見たクロノが慌てて父さんに進言するが、

「か、カズマ課長！ちょっと待ってくださいs・・・もが」

後ろに回り込んでいたロツテに口をふさがれる。それに気づかず父さんはロツテに

「クロノ君の師匠をしているんだろ？クロノ君と同じ感じで構わないから。」

そういうと、クロノが顔を青くして、ロツテが更に「ニヤ」とし、横にいたアリアがため息をつく。アレ？なんか変なフラグだった？するとロツテが俺の首根っこをつかみ、「さあ、ガンガン行こうね！」と満面の笑みでテストルームに引きずっていく。引きずられていく時、アリアの横を通り過ぎたとき、「御愁傷さま」と言われ、クロノからは「頑張れ」とため息交じりに言われた。俺は

と言つと、きつと何を言つても俺に拒否権はないんだろつなあ。と思いつつ引きずられて行つた。きつとBGMがあるのなら「ドナ」が流れているだろう。そして今に至る。流石に何発か被弾はしたがまだ体は動く。慣れてきたのもあるのだろう何となくコツみたいなのが分かつてきた。するとロツテが攻撃をやめ俺に言つてくる。

「よく避けるねえ、それだけ避けられるならもう魔力を感じ始めたかな？」

そこで言われてハツとする。そうかこの感じが魔力か。そういえば胸のあたりから何か感じるな。

「おお、これが魔力か！すげえ！俺、てっきりストレス発散で弾幕避けさせられてんのかと思つた！」

ガラスの向こうでクロノが感心して「そうだったのか！」と言わんばかりの顔をしている。

「いや、初めはそのつもりだったんだけどね。ずいぶん避けるから気になって聞いたんだけど当たったみたいだね。」

ガラスの向こうでクロノが「だあ！」と言いながらすつ転んだ。芸人かおまえは。

「結局ストレス発散だった訳かい！で、何で弾幕やめたんだ？」

「うーん、結構きれいに避けられるもんだからね、ちょっと本気出そうと思つて。」

そういつとロツテは自然体で構える。体に馴染んでいて、さつきとはまとう空気が違う。鳥肌が立ち、自然と体が後ずさる。

「ちょ、おま、待て待て！俺は今日魔法を初めて知った初心者だぞ！何でいきなり上級者みたいな扱いになってんだ！？」

「決まってるじゃない！私のストレス解消のためよ！」

ざけんな！見る！向こうでアリアとクロノが頭抱えてんぞ！そんなこと堂々と宣言するな！あゝ、何で俺こんな目にあってんだ？何かイラつときた。次の日は筋肉痛確定だけど全力でいってみつか。相手は俺より数段上、まさに桁違いだしな。遠慮はいらんだろ！

「じゃあ、俺も全力で行くからな！覚悟しとけよ！」

ロツテは相変わらずニヤニヤしながら、

「どうぞ、全力出してみたら？」

……あゝ、絶対泣かす！そう決意すると、俺は左半身を引き右こぶしを前に出し軽く腰を落とす。呼吸を落ち着かせ深く深呼吸する。すると胸から全身に、感じとしては血液の循環の様に全身をめぐる。それを数回繰り返す。するとだんだん感覚が鋭くなつていく。行ける。自然とそう思った。

「行きます。」

そう短く答えると地面を蹴った。

初めは、からかいながら遊んでテキストに魔法でも教えればいいかと思っていた。話からすると魔法は初心者の様だし。自分が魔法を使えるようになればそれではしゃぐだろうし。最近クロノはからかい過ぎて良い反応してくれなくてつまらないのだ。そこに降って湧いたように現れた子だ。精々からかい倒してやろう。私のストレスも取れて、あの子も魔法が使えるようになって一石二鳥じゃん！そう思っていたが、開始早々に驚かされた。私の射撃魔法の弾幕をほとんど被弾せずにかわすじゃないか。いくら手加減してるとはいえ、初心者がかわせる様な数ではない。クロノでさえ初めは被弾しまくったのだ。少しムツとしつつも感心する。が、しかしこのままだと面白くないので少し本気を出そうと思った。私の得意分野は格闘戦だ。これなら絶対にはずさない。そう思い射撃魔法をやめ、気になる事もあるので声をかけた。

「よく避けるねえ、それだけ避けられるならもう魔力を感じ始めたかな？」

すると男の子はハツとなり、

「おお、これが魔力か！すげえ！俺、てっきりストレス発散で弾幕避けさせられてんのかと思った！」

うっ！流石にそれが目的だったので言い当てられて困ってしまいそのまま言ってしまった。

「いや、初めはそのつもりだったんだけどね。ずいぶん避けるから気になって聞いたんだけど当たったみたいだね。」

流石にそうくるとは思ってたのか突っ込んできた。

「結局ストレス発散だった訳かい！で、何で弾幕やめたんだ？」

「うーん、結構きれいに避けられるもんだからね、ちょっと本気出そうと思って。」

そう、本気だ。全力ではないにしろ私の得意分野ださつきみたい
に避けられる事はまずあり得ない。私は言つと同時に自然体に構え
た。威圧するの忘れない。空気が変わったのを感じたのか慌てて
言ってきた。

「ちょ、おま、待て待て！俺は今日魔法を初めて知った初心者だぞ
！何でいきなり上級者みたいな扱いになってんだ！？」

ふふふ、何そんな当たり前のことを聞いているのかしら？私は堂々と
胸を張って答えた。

「決まってるじゃない！私のストレス解消のためよ！」

そう、本来の目的はこれなのだ。向こうもうすうす気づいてたみ
たいだし隠す必要なんてないわ！すると男の子は面白い事を言っ
てきた。

「じゃあ、俺も全力で行くからな！覚悟しとけよ！」

あらあら、強がっちゃってまあ、そんなこと言われたらからかい
たくなるじゃない！

「どつぞ、全力出してみたら？」

ニヤニヤの止まらない顔をしている私とは対照的に、真剣な顔になって、半身になり右こぶしを前に出し腰を落とした構えをとる男の子。始めてみる構えだなと思っていると、ゆっくり深く深呼吸を始めた。次の光景に私は目を疑った。男の子のリンカーコアが活性化し、魔力が体を包んでいく。魔力自体は大した量じゃないけど、決して魔法を初めて使う人間に出来る芸当ではなかった。呆然としている私に、男の子が言ってきた。

「行きます。」

その後私の意識は暗闇に包まれた。

斎藤一樹

相手までの距離は約5メートル前後、ちょっと遠いが覚悟を決め踏み込んだ。全力で踏み込んだにも関わらず周囲はゆっくり進む。異常なほど遅い。しかしそこからが異常だった。着地出来ないのだ。地面を滑るように移動し、構えを崩さず相手の眼の前まで行く。これ以上は相手とぶつかる。そう思い意識的に左足を地面につけようとする。すると自然と左足全体が地面をとらえる。その位置は俺にとってのベストポジション。右腕を伸ばせば相手の額に届く距離。若干肘に余裕が出来る程度まで伸ばし額の手前で止める。そして宙に浮いている右足で思いつきり地面を踏みぬく。右足から地面を踏みぬいたエネルギーが這い上がる。そのエネルギーを左腕を引き、右腕に流す。そこから一気に右腕を伸ばし相手の額を掌打で打ち抜く。

ズドン！

とてつもなく重い音が響き渡る。それは地面を踏みぬいた音なの

か、ロツテの額を打ち抜いた音なのか分からない。感じたのは右腕にしっかりとした手ごたえ。見えたのはゆっくり崩れ落ちるロツテ。そして俺は、

「ざまあみる・・・」

そう言っただけ意識を手放した。

クロノ・ハラウン

僕は頭を抱えていた。ロツテの悪い癖がまた出てしまった。しかもそれが向けられているのがカズマ課長の息子、カズキといったかな？に向けられていることだ。弾幕で攻撃し始めた時は流石に止めようと思ったが、カズキがさほど被弾せずかわし続けるのでタイミングを逃してしまった。そのあとロツテとカズキの会話を聞いて一瞬感心したが、次の会話を聞いて「感心」が尻尾巻いて逃げだしていった。マイクで拾っていた会話でカズキが強がりを見せ、ロツテがからかっている。僕はどうかカズマ課長に謝ろうか考えていたが、カズキが構えたとき息をのんだ。カズキが魔力を体にまとい始めたのだ。魔力自体はそこまで多いものじゃないが問題はそこじゃない！魔法をつい数時間前に初めて知って、訓練をし始めてまだ一時間も経っていないのだ。普通だったらこんな事出来るはずがない！僕は思わず隣にいるカズマ課長に尋ねた。

「か、カズマ課長。彼は以前魔法を使った事は？」

「いや、あるはずがない。それにデバイスだって今日使うのが初めてなんだ。魔法が使えるはずがない。」

カズマ課長も意外だったのか若干顔が引きつっている。再びカズ

キをみると数回深呼吸をした後、「行きます」といった。次の瞬間カズキの姿が消え、ロツテの目の前にあらわれた。しかもロツテも反応出来ていない。そんな馬鹿な！そう思った次の瞬間、とてつもない轟音。それと同時に崩れ落ちるロツテ、そしてそれと同時に倒れるカズキ。僕達はその場から動けなかった。脳が目の前の事を理解できず、フリーズした状態だ。無理もない。自分の師匠であるロツテが、魔法の訓練を始めて一時間の素人に負けたのだ。いくらロツテが油断していたとしても「あり得ない」結果だった。そう思っている、パンパンと手を鳴らす音が聞こえた。それは母さんからだった。

「はいはい、ボーっとしてないで二人を医務室まで運びましょう。アリアはロツテ、クロノはカズキ君をお願い。一馬課長は医務室に連絡してもらっていいですか？」

僕はハツとして指示された通り、アリアと一緒にテストルームに入ったのだった。

リンディ

クロノ達に指示をした後、医務室に連絡を入れ戻ってきた一馬課長に一樹君の事を聞いた。

「カズマ課長、カズキ君は一体？」

しかしうまく言葉に出来ず曖昧な聞き方になってしまった。私もまだ動揺してるみたいね。

「正直分かりません。ミッドチルダの事は教えていましたが、魔法の事は一切教えていませんでしたし、デバイスを持たせたのも今日

が初めてです。」

そう答えが返ってきた。嘘を言っているようではなかったし、目の前の事を信じられないのは彼も同じのようだ。

「では、どうしますか？正直このまま放ったままではまずいと思うのですが？」

「そうですね、魔法を知り使えると分かった以上は訓練は必要です。魔力のコントロールも出来ていないみたいですし。しかし訓練をさせるにも中途半端なものを教える訳にはいけません。初めは私でも良いかなど思っていました。がこれを見た後では少々荷が重いですね。」

そういうと、考え込んでしまった。しかし幸い私にひとつ良い案があった。

「カズマ課長。カズキ君をミッドの訓練学校に入れてはどうでしょうか？」

「む？確かに良いかもしれませんが、訓練学校だと期間が短いのは？しかもそれだと卒業後すぐに現場に配置されてしまいませんか？一樹はまだ9歳です。将来を決めるにはまだ早すぎます。」

「ええ、そうですね。本人の意思もありますし。それと学校は訓練学校ではなく士官学校です。あそこなら2年間みっちり訓練できます。幸い4月からクロノも入校するので訓練の環境としてはこれが一番だと思います。そして卒業後はしばらくは囑託魔導師として管理局の仕事をさせてみては？」

「うーん、確かにその条件であれば一樹にとってもベストでしょう。」

それで進めた方がいいかもしれませんね。」

少し考え一馬課長はそう結論付けた。途中「なんて説明しよう・・・」
「と言っているのが聞こえたが私は苦笑しかできなかった。しばらくぶつぶつ言っていたが途中思い出したように「医務室に行ってください」と言い部屋から出て行った。やはり一樹君の事が心配なんだろうと思い、私も部屋から出ようとしたが、ふと視界の隅に何か移った。気になったのもう一度見てみると、それはテストルームの中にあつた。私はテストルームの中に入りその場所に行つて驚愕した。その場所は一樹君が倒れが場所、ロツテを攻撃した位置だ。そこはあつたのは床に出来た小さなクレータと、その中心にくつきりと残る小さな足あとだった。

地上本部医務室

ゆっくり、ゆっくりと意識が浮上する。瞼が開き光を感じ目を細める。体を起こそうとしたが右足と右手に痛みが走り起き上がることをあきらめる。しかも体全体が重くだるい。ここはどこだろうと思ひ周りを見る。俺がいるのはベットの、周りはカーテンが閉まっているため分からないが、部屋に漂う医薬品の匂いが鼻をつく。どうやら医務室の様だ。何故ここにいるのかと思ひ記憶をたどっていく。

（確か、魔法を教えてもらつて事になって、ロツテに引きずられて、テストルームでいきなり訓練になったんだっけ。からかわれたのが気に入らなくて、全力で向かって・・・あれ？どうなったんだっけ？）

思い出そうとするがいまいち思い出せない。右手に手ごたえは感じたのだが何の手ごたえなのか分からない。

(いつの間にか医務室に居るって事は負けたのかな？勝つのはやっぱり無理だったかな？ひと泡ぐらい吹かせられたら良かったんだけどなあ〜)

そう思っていると、カーテンが開き人が入ってきた。

「あら気がついたのね、良かった。体は大丈夫？痛いところはないかしら？」

誰かと思ったらリンディさんだった。心配して見に来てくれたみたいだ。とりあえず質問に答えなければ。体を起こそうとするがなかなか力が入らない。するとリンディさんが苦笑しつつ、

「良いわよそのままです」

そう言ってくれたのでお言葉に甘える事にする。

「すみません、え〜と体に力が入らないのと、右足、右腕に痛みがある以外は大丈夫です」

「そう、体の方は体力が戻れば問題なそうだけど、右足と右腕は診察してみないと分からないわね」

「そうですか。という事はやっぱり負けたんでしょうか？」

するとリンディさんは「え？」と言いキョトンとしていた。

「覚えていないの？」

「断片的には思い出せるんですが、結果がどうなったのか分んねーっす」

リンディさんは「うーん」と考え教えてくれた。

「私としては引き分けかなーと思うのよ」

「え？引き分けですか。負けではなくて？」

「ええ、そうよ。カズキ君の攻撃がロツテに当たって、ロツテが倒れてそのあと一樹君が倒れた。だから引き分け」

マジですか？ロツテってクロノの師匠っすよね？油断していたとはいえ倒せたのか？

「えーと、マジですか？」

「マジよ」

「……………えー……………！勝ってないけど大金星じゃないですか！内容が、内容がすごい気になる！どうやったんだ！」

「そこでちよつと提案なんだけど、カズキ君。管理局の士官学校で魔法を真剣に習ってみない？」

とリンディさんが聞いてくる。

「士官学校ですか？何でまた急に？」

「まあ、色々あるけど、魔法を使うのが初めてという事にも関わら

ず、ロツテと引き分けた。これだけでもそう思わせるには十分よ」

他の理由は大方管理局のいつもの理由だろうな。でも魔法を使いたいというのは変わらないしなあ。しかし士官学校でかあ。卒業したら管理局一直線じゃねーか。俺だけの判断じゃ決められないしなあ。いくつか確認しないとな。

「父さんはこの事は知ってるんですか？」

「もちろんよ、お父さんからお願いされてもいるわ」

「士官学校って期間はどのくらいなんですか？卒業した後ってどうなるんですか？」

「期間は二年間、その間寮暮らしになるけれどお給料も出るわよ。卒業後は管理局員になるのもいいし、しばらくの間嘱託魔導師でも良いわ」

む？聞いたただだと結構好条件の様な気がする。どうすつぺ？此処で魔法の力をしっかり鍛えておくのはかなりプラスだと思うんだけど。変に縛りがつくのは勘弁だし。でも嘱託魔導師でも良いのなら、高校出た後でも管理局員になれっかな？まあいつか。管理局やめてもいいわけだし。この話受けますか。

「分かりましたリンディさん。士官学校で魔法習ってみます。」

そう答えると、リンディさんは満面の笑みで答えてきた。

「ありがとう！カズキ君！断られたらどうしようかと思ってたのよ。良かったわ」

「それで、士官学校はいつからなんですか？」

「えーと、今からだいたい一ヶ月後に入校してもらおう事になるわね。寮には入校の一週間前、つまり三週間後には寮に入れるようになるわ」

「ずいぶんと急だな。準備とかもあるし、小学校とかどうすんだ？ まあその辺は父さんに任せちまえば良いか。」

「士官学校にはクロノもいるから大丈夫よ。分からない事があればクロノに聞いてね」

「おお、それは頼もしい。ボロ雑巾の様になるまで頼らせてもらいますか。すると、カーテンを開け入ってくる人達がいた。クロノだ。その後ろにはアリアと父さんがいる。ありゃ？ ロツテは？」

「やあ、目が覚めたのか。大丈夫かい？」

「すごいね君！ ロツテを倒しちゃうなんて」

「一樹、話は聞いたかい？」

「上から、クロノ、アリア、父さんである。」

「体は若干痛いけど大丈夫。ロツテに関しては偶然としか言いようがないよ。父さんリンディさんの話はさっき聞いてこれから二年間士官学校に通わせてもらう事になったよ。」

「父さんが「そうか」と短くいいブツブツ言いながら考え込んだ。」

時折「母さんに」とか「どうしよう」とか聞こえてくるから大方良
い言い訳が思い浮かばないのだろう。ご愁傷様です。そんな父さん
を見ているとクロノが話しかけてきた。

「カズキも士官学校に行くのかい？」

「ああ、さつきその話を聞いて受けたとこ。クロノも行くんだろ？
これから厄介になる、よろしく」

「こちらこそよろしく、同い年だし何かあつたら遠慮なく言つてく
れ」

おや？クロノが俺と同い年とな？確か無印の時のクロノが14だ
つただけ？そうすると今9歳だからあと5年か。時間があるのはい
いことだけど、これで2年つぶれて実質3年か。特に用意するも
のってあるのかな？プレシアさんとアリシア助けられれば良いんだ
けど死者蘇生何ぞ出来ないぞ？それを考えると3年は短いな。まあ
頑張ってみますかね。

「そつえば、あと一人はどしたの？」

ロツテの事だ。まだ姿が見当たらないので気になって聞いてみた。
するとクロノが、

「ああ、ロツテの事か。目は覚めてるんだけど、どうも頭痛がひど
いらしくてベットのうえでうなってるよ。まあ自業自得だ。それと、
紹介が遅れたがこつちにいるのがアリアで、君と戦ったのがロツテ
になる。二人が僕の魔法の師匠だよ」

「自己紹介遅れちゃったね、私がアリアです。ロツテとは双子なん

だ。よろしくね」

「斎藤一樹です。こちらこそよろしく申し上げます。」

そう言って自己紹介をする。まあ後5年もすれば嫌でも関わることだ。それまでに手の内でも分かれば儲けものである。

「じゃあ、そろそろ診察しましょうか右足と右腕。医務官の人も待たせてるし。」

とリンディさんが言ってくる。そういえばそうだった。すっかり忘れてた。

「分かりました」

そう答え体を起こした。幸いそのぐらいの体力は戻ってきたみたいだ。しかし足と腕が痛いのは変わらずヒョコヒョコと歩く。今後体力強化は必須だな、入校までにどれだけ鍛えられるかな。そう思っていたが、この後それが出来なくなるなんてこれっぽっちも思っていなかったのだ。

診察室

『全治3週間!?!』

診察を終え、診察結果を聞くために父さんと一緒に医務官の人のところに行ったら返ってきた答えがこれである。ちよ、何でまたそんなにかかるんだ？

「えー、説明させてもらうと、まず腕。手首の筋肉に炎症が見られ

るね。これ自体は湿布でも貼って安静にしておけば1週間ぐらいで治るね。でも前腕の骨にひびが入っててね。大したことはないけど骨だからね。完治までには3週間ぐらいかかっちゃうかな。足も似たような感じだね、幸い骨は大丈夫みたいだけど足首に炎症があるかな。これは手首と同じで湿布を貼って1週間ぐらいだね。以上が診察結果だよ。何か質問はあるかな？」

うあちゃ〜、こりゃあやっちゃまったなあ〜。入校までなんも出来ないじゃん。あでもでも魔法で何とかなるのでは？

「え〜と、治癒魔法とかなんかないんですか？」

「うーん、あるにはあるけど君ぐらいの年だったら自然治癒した方が良いんだよね。その方が骨なんかも前より丈夫になるし。どうしても早い方がいいなら治癒魔法かけるけど？」

う、どうすっかなあ〜、また同じように怪我すんのも勘弁だし。仕方ないこのままでいいか。ため息を吐きつつ答える。

「このままでいいです」

「はいわかりました。もし必要だったら松葉杖も貸し出してるけどどうする？」

「お願いします」

「分かった持つてくるから待っててね」

そう言い医務官の人は席を立つ、どうしようと思いつつ父さんを見ると、父さんもこっちを見ていた。視線がぶつかり二人で「母さん

になんて言うか」とため息をつくのだった。診察も終わり廊下に出るとハラオウン親子とリーゼ姉妹が待っていた。ロツテの方は若干気分が悪そうだ。クロノが心配そうに聞いてきた。

「松葉杖を借りたのか？そんなに悪かったのか？」

「いや、足首の炎症だった。松葉杖は一日でも早く治すために借りてきた（キリッ）」

「そうなのか。腕のほうは？」

やっぱりというかネタは通じなかった。

「どつちかつつと腕のほうが重傷。骨にひびが入って全治三週間だつて。」

「入校直前だな。士官学校の訓練はハードらしい。前もって体力をつけておいた方が良くないけどそれじゃ無理そうだな」

げ！やっぱりか。筋トレにランニング、それにこの分だと模擬戦なんかもメニューにありそうだな。あー、まさかこんな怪我するとは思わなかったからなー。実際、寮に入ってからの一週間しかないもんなあー。

「しかたねえよ、寮に入ってからの一週間で何とかするしかないよ」

「流石にそれは無茶だろ」

「ですよねー」

実際その一週間しかないのだから悪あがきぐらいはするべきだろう。病み上りだと言って手加減してくれるとは思えないし。出来ることとしたら家と古本屋で格闘系の漫画を読みあさるぐらいか。なんか良い技があったら良いんだけどな。そう思いこれからの事を考えていくのだった。

第三話（後書き）

初めてのキャラ別の視点、初めての戦闘、上手く出来たか分かりません（><）

ロツテってこんな感じでいいのかな？

第四話

士官学校講堂

「であるからして諸君は……………」

……………ZZZ……………ZZZ……………ZZZ

「これから管理局を背負って行く……………」

ZZZ……………ZZZ……………ZZZ……………ムニャ……………

「これから様々な試練が諸君を……………」

そこは長方形の部屋で、映画館の様に固定式の椅子が並んでいて正面の一段高くなっている場所には管理局の旗が下げられている。そこは士官学校講堂。今期の新任のための入校式が行われおり、全員事前に用意された新品の管理局の制服に身を包み、壇上上がったいる学校長の話を聞いている。約一名を除いて。その人物は隠れることなく、ごまかすことなく、最前列で、完膚なきまでに寝ていた。それはもう見事に寝ていた。唯一の救いはいびきをかいていない事である。しかしそこは最前列、壇上に上がっている学校長が気づかないはずがなく、うっすらと米神に血管を浮かばせている。そんな状態だから空気がどんどん悪くなる。周りからは「起きろ」とか「起こせよ」といった視線が集まる。隣の人間はたまったものではない、最前列であるが故全員の視線が背中につき刺さる。それは新任だけでなくサイドにいる教官と思われる人たちからも突き刺さる。そんな視線の中行動を起こさないのは空気を読めない馬鹿だけだ。故に何度か行動した。始めはつついたり、小突いたりした。

その時はまだ本人も起きていたので問題なかった。しかしちよつと目を離れたときに今度は完全に寝てしまった。そんな姿をみてまたかと思いつつ同じようにしたが一向に目覚める気配はなく、今度はちよつと強めに、次は頭を叩いてみたりとしてみたがまったく覚めない。その後も何度か起こそうと努力したものの結果は無残、よつて匙を投げてしまつても仕方のない事だと言えよう。ベットでもないのでよくそこまで熟睡出来るものだと感じる。そうこうしているうちに校長の挨拶も終わってしまった。これで式も終わりになる。するとまるで計っていたように本人に動きがあった。

「うーん、いけね寝ちまつてたか」

「第一声がそれかカズキ」

「ん？なんだ？「おはようクロノ」の方が良かったか？」

「そうじゃない、そもそも式の最中に寝るな。学校長をはじめ、各教官方がずつとお前を見ていたぞ」

「そうなのか？じゃあ、皆さんも話を聞いていなかったようだな。俺と同罪じゃね？」

「モノは言いようだがそれで納得するはずがないだろう。しかしここ一週間でカズキに会った時の印象がまったく変わったよ」

「ガツデム！なんて世の中だ！」

この有様である、反省する気なし、ゼロである。こんな調子で二年間やっていけるのか不安になるクロノだった。

教官室

「今日から、貴様の担任になる五味俊介だ。さて斎藤一樹、色々聞きたい事があるがまずは・・・」

今俺の前には、これから二年間世話になるだろう五味教官が米神に血管を浮かべ引きつった笑みを浮かべている。そしてゆっくりとした口調で聞いてくる。

「言い訳があるなら聞こう」

俺は少し考えてから堂々と言い放った。

「学校長の話が長いのが原因だと思います」

「貴様はその前から寝ていただろうが！！！！」

速攻で突っ込まれた。チツ、と舌打ちをし次の言い訳を考える

「じゃあ、あんなに寝やすい椅子が原因だと思います」

「「じゃあ」ってなんだ！そもそもあの椅子であそこまで熟睡できる方が不思議すぎるわ！」

「ですよー、正直寝辛かったですよ」

「ほんの五秒前に言った事を否定するな！！貴様おちよくっているのか？」

「いやまさか。そんな大それた事俺に出来るんです？そう思ってい

るなら俺は五味教官の評価を修正しなければならぬですよ？」

「念のために聞くが下に修正か？」

「上に決まってるんじゃないですか」

「結局おちよくってんじゃねーか！！！！！！！！」

五味教官がデバイスを起動し、魔力弾を生成し始めたので慌てて教官室から逃げる。ドアに向かおうと思ったが嫌な予感がしたので無理やり起動修正して窓から飛び出す。五味教官も予想外だったのか「な！」と言いながら驚いていた。ここは三階、高くもないが低くもない。着地に失敗すれば大怪我は免れない、が俺は全身をうまく使い着地と同時に前転をし衝撃を逃がす。そしてその勢いを利用してそのまま走り出す。その時の捨て台詞も忘れない。

「あばよ、とつつあ〜ん」

そう言いながら自分の部屋に逃げていく。明日から訓練だが大丈夫だろうか？自分で起こしておいて今になって「やりすぎたかな」と不安になるのであった。

五味教官

私は今非常に気分が悪い、どの位かというとな娘が彼氏を自宅に連れてきた時ぐらい気分が悪い。まだ顔合わせもしてないやつのためだけに学校長に呼び出され、担任教官と言う理由で説教された。私が教えているならまだしも会話すらしていないのだ。そしてその原因が今日の前にいる事も一役買っているのだろう。私も教官を始めてそこそこ経つが此処まで凶太い神経をしたやつは始めてみた。校

長の話の最中、しかも最前列で、周りから突き刺さる視線をモノとせずあそこまで熟睡出来るのだから。確かに凶太い神経はあった方がいいが、あの十分の一もあれば十分だ。さて今は目の前にいる馬鹿に説教せねばなるまい。私は努めて冷静に話しかける。が返ってきた答えは自分に非はありませんと言つかのような答え。まったくもってあきれれるしかなかった。しかも最終的におちよくっているというのが分かり流石の私も堪忍袋の緒が切れた。すばやくデバイスを取り出し退路、この場合やつが入ってきた教官室のドアに見えないようにバインドのトラップを仕掛けつつ、魔力弾を生成したが、やつの行動に思わず声をあげてしまった。途中までは確実にドアに向かっていたが、何を思ったのか急に方向転換し強引に開いている窓から身を乗り出し飛び出したのだ。流石にそんな行動に出るとは思ってたので対処が遅れてしまった。慌てて窓の外を見るがすでに射程外に逃げられていた。その際風に乗ってこんな声が聞こえてきた。

「あはよ、とつつあ〜ん」

最後にわずかに残っていた仏の顔が阿修羅の顔に変わったのを自覚した。訓練では容赦出来そうにないと思うのだった。

斎藤一樹

軽く汗をかきつつ部屋に戻ると先にクロノが待っていた。

「ただいま〜っと」

「帰ってきたか。教官に絞られたか？」

そう言ってきたので事実をありのままに話したところ、

「君は馬鹿か？馬鹿なんだな！」

と言ってきたので、

「何を言う。明日からの訓練が少し厳しくなるぐらいじゃないか。お礼くらい言ったらどうだ」

「ただでさえ厳しい訓練を更に厳しくされて喜べるはずないだろ！？しかもそれ絶対少しじゃ済まないぞ！」

「その通りだ、そんな奴は真正のマゾか変態ぐらいだ。良かったなクロノ君はどちらでもないようだぞ」

「当たり前だ！」

そんなどうでもいい話をしつつ明日の準備をしておく。今日は午前中で終わっていたのでこの後の予定は何もない。トレーニングでもしようかと思いいクロノにも一応声をかける。

「それはともかくクロノ、今からトレーニングするけどどうする？」

「遠慮する。はっきり言って君のトレーニングについていく自信がない。」

「そうか？なんだかんだいって最後までついてきたじゃないか。」

「その代償として、次の日は確実に動けなくなったけどね。明日はそういう訳にはいかないからな。」

それもそうかと納得しタオルとスポーツドリンクをもって部屋から出る。士官学校のグラウンドは広い。それもそのはず、空を飛んだり、魔法なんかぶっ放したりするのだから広くて当たり前である。しかも日本みたいな住宅事情は皆無なのだ。それこそまだまだ余裕ですと言わんばかりだ。その広さに驚き、それと同時にわくわくしている自分がいる。明日から始める訓練を想像すると居ても立っても居られないというのが本音だろう。怪我をしてからというもの漫画を読みふける毎日、その過程で色んな「技」を得る事が出来たのも良かった。そして何より「気功」これを扱えるようになったのが一番大きかった。今できるのが「内気功」「外気功」である。そこからさらにいろいろ分類されるが大きく分けてこの二つである。「内気功」が出来るとなると怪我が予想以上に早く治ったのでトレーニングする時間も出来た。まさに怪我の功名である。そんなわけで今から非常に楽しみでしかたないのだ。体力も日に日に上がっているのが実感できる。この世界に来るまではこんな事は実感できなかった。この世界でどこまでできるか試したくて仕方ないのだ。

(いよいよ明日からか、こんな高揚感はいつ以来だろう?)

グラウンドを走りながらそんな事を思う。これから調べるもの、準備するものも沢山あるだろうしかしそれらは全く苦にならないだろう。全てが未知で未体験、そんな面白そうなものがこれからあるのだ。だから全力で頑張ると誓おう。せめて手の伸ばせる範囲は全力で助けよう。出来る事なんかたかが知れてる。それでも頑張ろうとそう自分に誓うのだった。

翌日 グラウンド

「貴様ら、何をトロトロ走っているんだ！」

罵声が響きわたり、走っている人間はもはや「歩いている」と表現した方が良さそう。体力、身体ともに限界が来ており何人かは走っている最中に気絶し倒れている。倒れている人間は、待機していた医療班に運ばれ手当てを受けている。今残っているのは誰もかれもが壮絶な顔をしている。走り始めて四時間、ペースこそ速くないが永遠と走らされ、まったく終わりが見えない。走りながら「いつ終わるんだ？」とか「もう駄目だ」とか「どうしてこうなった？」やら色々考えるが答えが出るわけでもなくただひたすら走り続ける。そんな中でも二人だけ、ましな顔をしている者がいた。一樹とクロノである。一樹は前の世界でしていた訓練をひたすらやり続けた結果、クロノは二人の師匠に鍛えられた結果だった。そんな中一樹が話しかける。

「なあクロノ。これって俺のせいかな？」

ちよっと申し訳なさそうに聞いてみる。

「はあ、十中八九・・・はあ、はあ・・・君のせいだ。」

息も絶え絶えだが答える余裕はあったようだ。そんな中、更に五味教官の罵声がとぶ。

「どうした！もうおしまいか！貴様らそれでも男か！爺の方がまだ気合いが入っているぞ！」

「おお、ハートン生で聞いたの初めてだ！」

目を輝かせて言う俺にクロノが律儀に突っ込む。

「君は・・・変なところで・・・感動・・・するな」

と言ってきたので

「しかしまだまだ罵りが足りない。本物には程遠いなあ」

そう呟いたら何も言わなくなってしまった。ありや、意外だったのかな？そんなところを見つけたみたいで五味教官から罵声が飛ぶ。

「齋藤ー！貴様しゃべる余裕があるのか？じゃあこれを担いでもらおうか？」

そう言つてニヤニヤしながら出してきたのは砂の詰まったりリュックサックだ。だいたい20キロぐらいありそうだ。ご丁寧にリュックのサイズは子供用だ。五味教官絶対用意してたな。つうか9歳のガキにそんなの持って走らせるか普通？そんな事を思いつつせっかくハー マンを聞いたのだから、それに合わせなきゃつまらないだろう。

「Sir, Yes, Sir！」

そう言つて五味教官からリュックをひつたくりすばやく装着し列に戻っていく。教官も呆気にとられている。まさかさつさと背負つて戻っていくとは思っていなかったんだろう。しかも平然と走っているし。そのせいかほかの連中を仕方なく罵っていた。

「君は・・・本当に・・・化物・・・みたいな・・・体力だな」

「む、化物とは失礼な。日々のトレーニングの結果だと言ってくれ。」

「そもそも・・・そのトレーニングが・・・おかしいんだ」

そうなのか？まだまだ前の世界の全盛期には遠く及ばないのだけど。少し自重した方が良いのかな？それはともかくいつ終わるのかねこのランニングは？気がつけば走っているのは俺とクロノの二人だけになっていた。

寮室

あの後一時間走ってようやく終わった。クロノは終わったと同時に座り込み動けなくなった。俺も流石に20キロを背負って走ったのは効いたらしく息が乱れていた。これから何か背負ってトレーニングするかと悩んだ。とりあえず本日の訓練が終了したので動けないクロノを担いで寮室まで戻ってきたのだ。汗だくのジャージを洗濯かごにぶち込んで、洗面セットを小脇に抱え大浴場まで足を運んだ。俺のひそかな楽しみである。クロノにも声をかけたが今はまだ動けないらしく「後で行く」と言って動かなくなった。日本人だからかやはり一日の終わりはやはり風呂！浴槽につかったときの弛緩する感じは何とも言えない心地よさだ。そんな時前からどっかで見たとような顔が歩いてきた。茶色の髪、背格好は俺よりちょっと大きいくらいで、整った顔をしている。「チクシヨウ、イケメン、爆発シロ」と言いそうになってしまった。それはさて置き、誰だったかな？と必死に考えていると向こうが声をかけてきた。

「お、噂の新任じゃないか。お前も風呂か？」

「そうだけど、噂って？それとあんたは？」

そう答えるとイケメンは慌てたように、

「ああ、ごめんごめん。俺はティード、ティード・ランスターだ。」

それを聞いて思い出した。そうだティード・ランスターだ。「Strikers」に出てくる奴だ。アイキャッチに出てきたのと、葬式のシーンぐらいしか覚えてないけど。へへ、この人もこの時期に士官学校に入ってたんだ。しかしまあ、ティアナにそっくりだね。やっぱり兄妹だな。確か本編に入る前に殉職しちゃうんだよな確か。なんとかして助けたいけど時期が分らんことには介入出来ん。何かヒントでも有れば良いんだけど。なんとかならんかな？

「え〜と俺は、」

「カズキ・サイトウだろ？さつきも言ったが噂になってるぞ」

ニヤッと笑いながら俺の名前を言い当てる。

「非常に気になりますねその噂」

「お前これから風呂だろ？俺もだから風呂に入りながら話してやるよ。」

そう言いながら俺達はのれんをくぐった。

大浴場

カポナー

風呂独特の音があたりに響く。そこは入り口から縦にシャワーが並び、一番奥に浴槽がある。入り口を入り右手にはサウナも完備されていた。いたせりつくせりだ。そんな事を思いつつ体も洗い終わ

り湯船につかる。」

「ふい〜〜」

ああ、風呂はやっぱりこの瞬間が一番好きだな。全身が弛緩して浮力により軽く浮き両手足を伸ばす。幸い今はそんなに人はおらずほぼ貸し切り状態だ。

「お隣邪魔するよ」

そう言いながら俺の横に入ってくるティード。こちらも「ああ」とうなずき横を開け、引き続き風呂を堪能する。やっぱり風呂は良いね。某三佐が「命の洗濯」と言ったのもうなづけるものだ。そんな事を考えていると

「さて、まだ入校して二日目が経ったばかりだが、もうほとんど言っていないぐらいお前の事知れ渡ってるぞ」

「それは良い意味で？悪い意味で？まあ原因は分かっているから良いんだけど」

そう、この二日で起こったことなどたかが知れてる。入校式の時の爆睡、教官に呼び出されなおかつ窓からの逃走、そして走りこみを平然とやってのけた事、これぐらいだ。その内のどれかか、あるいは全部かっつとこだろう。

「まず初日の入校式だな、あそこまで爆睡したやつ見たことないぞ。しかもすっげー睨まれてたのにな。みんな「なぜ起きない？」って首ひねってたぞ？しかもそのあと、呼び出しくらって教官室の窓から飛び出したそうじゃないか。それを見ていたやつがいて次に窓か

ら教官が顔を出したみたいだけど、その教官の顔が忘れられないっ
つってガタガタ震えてたぞ。そんでもって極めつけは毎年恒例の走
りこみ。しかもいつもより厳しくなった状態だ。それをウエイト背
負ってやってのけたってんだ。普通あり得ないぞ？みてた連中は「
人外」でも見てるような顔だったぞ。」

とけらけら笑いながら話す。うわあ〜思ったとおりだったか。他
のクラスにもとぼちり行ってるみたいだし。被害甚大だな。夜道
には気お付けた方がいいかもしれん。

「あと、上の連中この場合二年のやつらだけど、何人残るか賭けて
たみたいで、しかもお前が残ると思わなかったみたいだから結構損
したやつが多かったみたいだぞ？二年の連中には近づかない方が良
いぞ。一人一年で大勝したやつがいたみたいだけど。」

「…………マジで夜道に気おつけなきゃならんかもしれん。まあ
今更だけど目立つのは控えよう。」

「まあこれからも面白いイベント期待してるぞカズキ！じゃ俺そろ
そろ上がるわ。」

「じゃあな、と言いながら出ていくティード。まあ面白いイベント
つてのは賛成だけど出来れば俺中心じゃなければなお良いな。そう
思いながらしばらく風呂につかるのだった。」

第五話

グラウンド

入校から三カ月、授業に魔法の訓練が入りはじめ全員デバイスを使用し射撃魔法や防御魔法を使いながら訓練をしていた。二名一組いわゆるツーマンセルという形になり、相手の撃った射撃魔法を自分の防御魔法で防ぎ、攻守交代をして同じ事をする。その繰り返しだ。いかに安定した魔力で、安定した攻撃、防御を行う。約束動作に近いが慣れてきたものはより早く、より正確に魔法を行使している。今はまだ魔法に慣れさせるといった訓練だ。そんな中グラウンド隅で二人が別メニューをしていた。

「斎藤、もう一度やってみる。」

そう言われ、射撃魔法を行うためデバイスに魔力を流し込みプログラムを起動するが、

「ストップだ。・・・ストップ。おい止める！」

そう言われ慌てて魔法をキャンセルする。

「はあ、斎藤これで何回目だ？」

教官にそう言われ、つい答えてしまった。

「今ので256回目です。おお、ちょうど8bitですね！」

「そういう事を言っているんじゃない！この馬鹿たれが！」

バシン！と軽快で良い音が響く。何人が気にしてこちらを見たが、すぐさま訓練に戻る。その顔は「またやってる」とあきれ顔だ。

「何で出来んのだ。射撃魔法なんだぞ？そこまで魔力を籠めんでも発動するぞ？」

「ええ、それは分かっているんですが、なぜか止められないのですよ。」

「なぜだ？コントロール自体は出来るのだろうか？」

「魔力を体に循環させるのは出来るんですが、外に放出させるとなるとなぜか止まらないんですよ。」

二人で首をひねる。何故こんな事になったかと言うと、初めての魔法の訓練で全員にデバイスが支給され簡単な射撃魔法を教官が実演し、それをまず順番に行う事になった。大抵の人は威力の差はあるものの、しっかりと用意されたまで届いていた。そして俺の番になった時それは起きた。他の人たちと同じように魔力をデバイスに籠めプログラムを発動、射撃魔法を的に向かって放った。すると砲撃魔法になった。何を言っているんだ？と思うだろうが事実その通りなのだ。砲撃魔法は的に向かい一直線に進み破壊し爆発した。あまりの事に声を失っているかと急に虚脱感が襲ってきた。その場に膝をつき倒れそうになる体を必死に支える。すると教官がすっ飛んできた。理由を聞かれたのでそのまま話すと「そんな馬鹿な」と鼻で笑われた。それはそうだろう射撃魔法が砲撃魔法になったのだ。本来ならあり得ない事だ。しかし事実としてそれが起こってしまった。原因を調べるためにもう一度やろうと思ったがさっきの砲撃で魔力がすっからかんになってしまったようでしょうにもできない

い。それなので後日改めてとなったのだ。そして現在グラウンドの隅で特訓中なのだ。

「よし、まずは今まで分かった事を纏めるぞ。まずこの間の砲撃魔法は射撃魔法だったてことだ。異常に魔力が籠められたと補足は着くがな」

そうなのだ。その時は分からなかったがあれは射撃魔法だったのだ。見た目から射撃魔法じゃなく砲撃魔法と思っていただけらしい。

「次に、その射撃魔法には貴様の魔力の大半が籠められていた。」

これもその通り。だから撃ち終わった後虚脱感に襲われ膝をついてしまった。これがほかのオリ主ならお決まりの「手加減しても大出力」なのだろうが、俺の場合魔力量は最大でA A程度、平均でA Bのあたりをさまよっている。残念ながらそんなお決まりの展開ではないようだ。

「そして、貴様は魔力のコントロールが体に循環させる以外ほとんど出来ない」

残念だがその通りなのだ。どうやら俺はコントロールがほとんど出来ないらしい。魔力を放出させればなぜか大量に放出させすぐ魔力がすっからかんになってしまう。しかもそれをカットするには魔法自体をキャンセルしなければならぬ。つまり魔法を撃つたそれまで、一回だけの魔法になってしまった。これは笑えない。が自分では止められないのでどうしようもない。八方ふさがりであった。

「どうしたら良いんですかね？」

はつきり言つて魔法の知識なんぞある訳もなく、学校で習つた事以外対処法も分からない。すると教官が言つてくる。

「もしこのまま対処法がなければ、最悪管理局員にはなれないな。」

はあ、そうなつちゃうよな。魔法が一回しか使えない魔導師。足手まといとかそういうもんじゃなく、そんなのが現場にいたら「邪魔」の一言である。戦闘など出来るはずがない。肉の壁何ぞにもなりたくない。悶々と考えていると教官が、

「そんな顔するな、なんとか対処法を考えてやる。」

そう言つて、頭をポンとなでていく。その時の教官の顔は優しく笑つていた。この感じ何かどつかでされたような・・・ああ、父さんに頭なでられた時と一緒になんだ。なんだか懐かしく思い父さんの事を思い出す。いつも優しく、家では母さんに頭が上がりず、妹の亜夜を超溺愛していて、俺と兄ちゃんの事もちゃんと構ってくれる。いい父親の見本のような感じだ。まあ若干子供に甘すぎる気もするけどな。俺のお願いで職場まで見せてくれ・・・あ、そう言えばデバイスの方で何とかならないのかな？そんな事を思いついたので教官に聞いてみる。

「教官、ちよつと思いつきなんですけど、その放出させる際のコントロール、デバイスでなんとか何ないっすかね？」

俺の隣で考えていた教官に聞いてみた。

「ん？デバイスでか？うん、少なくとも支給されているデバイスだと無理だな。それはあくまでも支給品でそんなにハイスペックではないからな。現行の出ている物でも難しいかもしれないぞ？」

「え〜と、何と言いますか、特化型とでも言うんでしょうか？魔力コントロールに重点を置いたタイプ。」

「う〜ん、出来なくはないと思うが、ブーストデバイスが近いか？しかしあれは召喚師が使っているタイプだぞ？」

「デバイスで出来るなら当てがあるので今日までのデータもらえますか？」

「それは構わんが、当てってどこだ？」

「魔導端末整備開発課、父さんの勤めてるところです。流石に理論すらないようなものを開発するのは無理でしょうが、似たようなデバイスはあります。その改造ぐらいなら大丈夫でしょう。」

「そうか、分かったデータは用意しておこう。訓練終了後、教官室まで来い。あと結果はしっかり報告しに来い。」

「了解です。」

それを聞いた教官はうなずきグラウンドに向け大声で言った。

「よし！訓練やめ！本日の訓練はこれまでとする！各自片付けをし寮に戻れ！以上だ！」

そういうと教官は去って行った。とりあえず後でデータを受け取って、次の休暇にでも連絡して頼んでみるか。それまでは他の方法を探さないとな。デバイスの方が上手くいくとは限らないし。そう思っていると、こちらを見てニヤニヤしている集団がいた何だろう

と思ったが理由はすぐに分かった。

「斎藤！これから俺達と訓練しないか？お前まだ射撃しかしてなかったよな？防御魔法教えてやるよ」

集団のリーダーらしき人物が言ってきた。はあ、どこにでもいるものだなこの手の馬鹿は。大方俺がでかい顔をしているのが気に入らないのだろう。（そんなつもりはさらさらないのだが）今まで体力訓練しかしておらずそこでは俺とクロノの独壇場だった。そこで魔法訓練に入って俺に魔法の才能？がまったくないと知ったのを良い事にこれまでの鬱憤を晴らそうという魂胆なのだろう。何とも器の小さいやつらである。クロノが止めようとしたが手で制してこ
う言い放った。

「だが断る！！」

俺の好きな事の一つに、自分が強いと思っている奴にn・ゲフン、ゲフン。ともかくそんなことしても時間の無駄なのでしつかり断る。スタスタと横を通り過ぎクロノと合流したときそれは来た。

ヒュン！

そう音が聞こえたのでクロノを突き飛ばしつつ俺も横に避ける。飛んできた方向をみるとさっきのリーダーらしき奴がデバイスを起動し、魔力弾を撃ってきた。俺はため息を吐きつつクロノを見る。こちらにも問題ないようだ。

「何の真似だ！」

クロノが叫び構える。

「うるせえ！いつもいつでもでかい顔しやがって！気にいらねえーんだよ！」

おふう、何と言う小物発言！初めて聞きました。そんなもんだからつい言ってしまった。

「おい、そんな小物発言していいのか？程度が知れるぞ？負けフラグだぞ？」

笑いをこらえながら言うと、クロノと言い争っていたリーダーぽいのがピタツと止まる。体は震えていて、顔が赤くなっていく。

「うるせえ！だいたい防御魔法も使えない落ちこぼれのくせにでかい面してんじゃねえ！」

「あゝ、やだやだ。たかだか防御魔法と射撃魔法が俺より使えるっただけで強者気取りですよお前だつて基本の魔法が使えるだけじゃんか、やだねゝちよつと魔法が使えるだけででかい顔する奴は。そう思わねクロノ？」

ここで幾分冷静なクロノに振る。

「確かにそうだが、カズキもいらん挑発はするな！この馬鹿が余計怒るだろ！」

・・・訂正、そんなに冷静じゃなかったようだ。俺の言った事肯定した上に、あいつらの事馬鹿呼ばわりですよ。あゝあゝ、あいつら湯気でそうだよ。

「なあクロノ。お前も挑発してどうすんの？」

そういうとクロノはハツとして馬鹿どもに向き直る。そこにはプルプルと震える馬鹿どもがいた。

「いや〜、流石クロノなだめるかと思いきや、更に挑発するとは、その発想は無かったわ」

ニヤニヤしながら言う俺。するとクロノは、

「そもそも、カズキが挑発するのが悪いんだろ！」

「何を言う！そんなこと言ったらあいつらが先に攻撃してきたぞ！」

「その前を言っているんだ！」

「だって、あんな小物発言聞いたら突っ込みたくなっちゃうだろ！」

「無視してさっさと帰ればよかったじゃないか！馬鹿なんだから明日になつたら忘れてるだろ！」

「そんな事はない！ああいう馬鹿は覚えられたら最後、自分が痛い目にあわないと引き下がらないと相場が決まっているのだよ！」

「どこの相場だ！」

「俺の故郷に決まってんだろ！」

絡んで来た馬鹿どもそつちのけでギヤーギヤーと言い合いをする俺とクロノ。ついに黙っていた馬鹿が切れた。

「俺を無視すんじゃないやねえー！！！！！！」

『うるさいー！』

ボゴツ！という音が聞こえたかと思うと馬鹿が崩れ落ちる。

「やかましいんだよ！俺は今からクロノに故郷の文化（オタク文化）を説明せんといかんだ！邪魔をするな！」

「今カズキに説教してる途中なんだそれが終わってからにしろ！！」

二人が同時にいう。すると二人は言い合いながら寮の方向に歩いて行った。グラウンドに残されたのは無残に崩れ落ちた馬鹿とその取り巻き達であった。

寮室

絡んできたやつをのした後、クロノと寮室でくだらない言い争いをしたが結局結論は出ず次回に持ち越しとなった。そして俺は父さんにデバイスの件を相談していた。

「うん、データも一緒に送るから、・・・うん、今のスタイルが格闘だからグローブタイプで、ごつい感じじゃなくて素手に近い感覚が良いな、後肘あたりまで装甲で覆ってもらえるとありがたい。待機状態はドックタグでお願い。うん、出来たら良いから。必要だったらテストなんかもするから。・・・うん、じゃあ後よろしく急いでないから大丈夫だよ。うん何かあったらまた連絡して。じゃあまた」

そういつと電話を切る。あの後教官からデータを受け取り、その足で父さんに連絡する。データは後で送るので今日は連絡だけとなった。父さんの話だと過去に似た例があるのでそのデータとも比べてみて調整してみるとのことだった。今日ほど父さんが頼もしく思えたのは内緒だ。すると部屋にいたクロノが聞いてきた。

「デバイスの方は大丈夫そうかい？」

「ああ、過去に似たような例があるらしい。それとも比べてから取り掛かってみるってさ」

「そうなのか？過去にデータがあるならデバイスも作られてそうだけど？」

「いやいや、その人物がよほどじゃない限りそれ専用のデバイスなんて開発されないだろ。一から開発なんてしたら金がかかって仕方ないだろ？一人の管理局員のために莫大な予算をかけるよりほかの手段を取った方が全然良いだろ。」

それもそうかと納得しつつクロノと他愛もない話をしていた。そこで部屋のドアがノックされた。

「ん？クロノ来客予定ある？」

「いや僕にはないが？」

「じゃあ誰だ？」

そう言いつつドアに向かう。「どちら様ですか」と言いながらドアを開ける。そこには茶色の瞳に、茶色のシヨートヘアで旋毛

からアホ毛が伸びており、活発そうな女性、クロノの未来の嫁がいた。エイミー・リミエツタ確かそんな名前だったはず。しかし何でまたこんなところにいるんだ？

「え〜と、クロノ彼女が来たみたいだぞ？」

ぶ〜〜〜〜〜！飲んでいたお茶を吹き出しむせるクロノ。苦しそうに何をそんなに慌てているんだ？

「どしたんだクロノ？邪魔なら席をはずすが？」

「どうしてそういう発想になる！」

「いや、だって俺の知り合いじゃなく女性ときたもんだからてつきりクロノの彼女かと」

「飛躍しすぎだ！僕にはまだ彼女はいない！」

だそうですがという感じで改めてエイミーに視線（乗ってこい！と意味を含め）を戻すと、

「そんな！あんなに激しく告白されたのに！あの時の言葉はウソだったの！」

と乗ってきてくれた。クロノはドアに向かってくる最中だったらしく途中でずっこけた。

「クロノ嘘はいけないぞ。彼女なら彼女で俺にも紹介してくれればいいじゃないか！隠す必要なんてないぞ（キリッ！）」

「違う！ホントに彼女はいない！そもそも彼女とは初対面だ！」

「ホントかあ〜？」

とニヤニヤしつつもエイミイに向き直り尋ねる。

「え〜と、はじめましてだよ。俺は斎藤一樹。9歳。こっち風に言うとかズキ・サイトウかな？」

そう自己紹介するとニコツとしながら言ってくる

「え〜、もうおしまい？もうちょっと続けてもよかったのに。」

と言ってくる。ホントにノリのいい子です。

「私はエイミイ、エイミイ・リミエツタ。11よ。みんなエイミイって呼ぶからそう呼んでもらって構わないよ」

「クロノ・ハラオウンだ」

若干ふくれっ面で答える。からかわれたのが気に入らないらしい。

「お〜い、クロノむくれんなよ。いつもの事だろ？」

「いつもの事だから達が悪いんだ！そもそも君たちは本当に初対面なのか！？何でああまで連携出来る！」

「いや〜、それについては俺も予想外だったよ。まさかあそこまで見事に乗ってくれるとは思わなかった」

「ああなつてたら乗らないと失礼だと思つたよ」

はあく、とため息を吐きつつ諦めたような、厄介事が増えたような感じの顔になる。

「で、君は何で僕たちのところに？」

そうクロノが本題を切り出した。確かに俺も気になっていたので大人しくする。

「うん、ここじゃちょっと。部屋の中に入れてくれない？」

「別にかまわないけど、ヤバそうな話し？」

「ヤバくないけど聞かれるとちょっと不味い話かな？」

どうする？とクロノに顔を向けるとしぶしぶながらも頷いたので部屋に案内する。

「ありがとう！じゃあ、お邪魔しまゝす。」

「お邪魔されまゝすw」

「へえ、意外に綺麗にしてるんだね。男の子の部屋ってもっと汚いものだと思つてたよ。」

そこは十畳くらいの部屋で入口から入って正面に窓がありベランダがついている。その窓の横には二段ベットがあり、ベットの向かいに机が置かれている。後は私物が少し置かれているだけで小奇麗になっている。元来俺もクロノも綺麗好きなのでしっかりと片付け

はしているのだ。其れは兎も角、俺はエイミーにお茶を入れつつ聞いてみた。

「で、そちらの要件はなんなんだ？」

「え〜とね、まずはお礼かな。君たちのおかげでお小遣いにずいぶん余裕が出来たので。」

ん？何の話だ？とクロノと顔を見合わせる。

「入校二日目のランニング覚えてるでしょ？その賭けにたまたま参加できて、君たち二人が残るのに賭けて独り勝ちしたんだよ。それでしばらくはお金に困らなくなったので遅くなったけどそのお礼かな？」

「あ〜、思い出した確かティードが言ってたな。一人大勝した一年がいるって。エイミーだったのか」

「な！そんな事してるのか！賭博は禁止されているだろ！」

「あ〜、かたい！かたいよクロノ！確かにルールを守るのは大事だけど、二年間もこんなところに寮生活なんだ。娯楽の一つや二つ有ったって良いだろ。」

「む、確かに一理あるが・・・大丈夫か？」

「大丈夫だよ。別に資金が悪の組織に流れるでも、マネーロンダリングされてる訳でもないんだから。娯楽と割り切れ。」

「君はどのレベルで考えているんだ？たまに不思議になるよ。」

「で、エイミーそれだけじゃないんでしょ？他に何かあるの？」

「そうそう、こっちが本題。今日さ魔法の訓練あったでしょ？その時どっかの男子のグループがカズキ君を指して何か物騒な事言ってたからちよつと注意した方が良くもって思ってたそれを伝えに来たの」

それを聞きクロノと顔を見合わせ苦笑してしまった。

「む、何で笑うかな？せつかく親切に教えに来たのに！」

するとクロノが反応し

「ああ、すまない。そういう意味ではないんだ。ただその情報は少しだけでもらうのが遅かった。ただそれだけだよ」

「もう、絡んで来た後だったからな。とりあえず振り返り討ち？にしたよ」

「でも、まだあるかも知れないから気おつけるに越したことはない。情報ありがとうエイミー」

「なぐんだ。そうだったんだ。でもまあいつか。二人と話せて楽しかったし。クロノ君の反応も面白かったし」

そう言ってくすくす笑うエイミー。あゝクロノにいじられフラグが経った気がするな。将来的には夫婦になるんだから問題ないんだろうけど。

「じゃあ、私の要件はそれだけだから。今日はこれで戻るね。明日からまた頑張ろうね」

「ああ、これからよろしく。」

「おう、こちらこそよろしく。クロノを弄る人間が増えて嬉しい限りだ。」

「うん私も弄りがいのある人が増えて良かったよ」

「なんでだよ!」

律儀にクロノが反応する。その反応がいじられる原因だということに。何故気付かないんだろ?と思わずにはいられなかった。

第六話

魔導端末整備開発課 ミーディングルーム

「・・・そうだ。装甲の部分は現存する物質の中で最高の硬度の物を使用する予定になっている。とりあえず説明は以上だ」

その部屋は、中央に長い机が置かれそれを囲む様に数人の人間が座ってる。ある者は白衣姿、ある者は作業着、ある者はスーツ等々、服装はばらばらだ。その全員が現在正面にあるスクリーンを注視している。そこに映っているのはデバイスのデザインと設計概要、使用者のデータと過去の類似例その対策案それらが映し出されている。それを見ていた内の一人が手を挙げて発言してくる。

「課長、いくら息子さんのデバイスだからってそんなもん使ってたら予算がいくらあっても足りないですよ？それに管理局員にもなっていないのにそんなデバイスの開発許可ありませんよ？」

スーツを着た男が一馬に聞いてくる。男の言い分はもつともだ。一から作るのはどうしたって金がかかる。失敗に失敗を重ね新型は完成するのだ。それをまだ管理局員にもなっていない息子に与えるというのだ。明らかに公私混同の上正気の沙汰ではない。すると一馬は、

「大丈夫だ。開発ではなく改造になる。それと予算は多少ではあるが確保してある。」

「しかしサイトウ、いくら息子のためとはいえこれは些かやりすぎじゃないか？スペックを見てもデバイスに振り回されるのがおちだ

ぞ？」

そう言ってきたのは作業着を着た無愛想な男だ。一目見て職人氣質の人間だと分かる。

「ああ、それは私も承知している。公私混同していないとは言えな
いが、それだけの物を作らないとたない理由があるんだ。みんな、
ちよつと前にテストルームが一部破損したのは知っているだろ？」

「おお、あれか確かだいたい900?くらいのクレーターをつくつ
た奴がいたんだつたな。あのテストルームをぶつ壊す奴どんな奴か
見てみたかつたんだがなあ」

「それと、これがその時の映像だ。」

「なんだ、サイトウ。それがあんなら始めから見せろや」

すると一馬は少し冷たい表情になり

「見ても後悔するなよ。」

そう短く告げて手元のパソコンを操作する。するとモニターが切り替わり映像が流れだす。そこに映つたのは一人の女性と一人の男の子だった。少し会話をしたと思ったら、女性が弾幕で男の子を攻撃し始め、それを慌てながらも回避する男の子。そしてまた会話すると男の子が構えた。数秒後、男の子が消え女性の前に現れたと思つた瞬間、映像が何かの衝撃でぶれる。その後女性と男の子がほぼ同時に倒れ、映像が終わる。全員言葉がない。どんな奴かと思つていたがまさか子供とは思わなかつたのだ。しかも魔法で壊れたのではなく、人の力で壊れたのだ。魔法での攻撃と、人が拳、又は足での

攻撃の威力どちらが強い？と聞かれれば魔法を知る人物ならば十人中十人が「魔法」と答えるだろう。それもそのはず、人が何かしらの手段で攻撃しても衝撃はどう頑張っても1〜2tが限界だろう。それが魔法になればビルの一つや二つがけし飛ぶ威力が出せるのだ。それが今目の前で覆された。10歳にも満たない子供によって。それを見ていた白衣の男がハツとした。

「課長、まさか今の子供が・・・」

「そう、息子の一樹だよ。そして倒れた息子が持っていたデバイスがこれだ。」

そういうと机の上にそつと置いた。そこにはところどころ破損し、融けたような跡があるデバイスだった。一目見て修理が不可能で廃棄処分と判断できる状態だった。

「これは管理局員に支給される一般的なデバイスだ。それが廃棄処分になる程に魔力が流れた。一樹は全身を魔力で覆っていたが、魔力総量は最大でAAクラス。とてもじゃないけどデバイスが廃棄処分になるほどの魔力じゃない。しかし結果としてデバイスは廃棄処分、テストルームは破損、そして原因はいまだ不明。」

ミーティングルームの人間誰もが黙り込んでしまった。それもそうだろう、今目の前にある物は自分たちの常識をぶち壊した数々の証拠である。そしてその現象を起こした「対象」がいて、原因を探るため「研究」出来るというのだ。これに飛びつかないようでは研究者は名乗れない。するとそれまで黙っていた者が次々に動き出す。

「課長、この事はどこまで報告してありますか？」

管理局の制服を着ていた女性が聞いてきた。

「当時ここにいた当事者、リンディ・ハラオウン、クロノ・ハラオウン、クロノの師匠であるグレアム提督の使い魔リーゼ姉妹のみだ。取り合えず関係者には口止めはしてある。グレアム提督は現時点では分からない。」

「外に漏らすのは極力避けた方が良いでしょうね」

「ああ、そうしてくれるとありがたい。あと予算の名目は「デバイスの耐久テスト及び新素材のテスト」となっている」

「じゃあ、こっちは各企業に新素材もしくは高硬度の素材を当たってみます。」

とスーツ姿の男が、

「こっちは、使用者のデータから必要な耐久値を割り出ししてみますわ」

と白衣姿の男が、

「じゃ俺は、各素材の加工方法、鍛造方法でも探ってみるか。」

と作業着の男が順次答える。

「よろしく頼む。各自に出来る最高の行動をしてほしい。なお機密レベルは「5」ここ以外に情報を漏らさないように心得てくれ。」

「「「「了解!」「」「」」

各自が行動し始め出口に向かうが作業着の男が立ち止り、一馬に聞いてくる。

「あ、そう言えばサイトウ、パツとデータを見る限りじゃ今あるコアじゃどれも耐えられそうにないぞ？どうするんだ？」

「ああ、コアは「アレ」を使おうと思う。」

「なんだと？お前正気か？」

「現時点で「アレ」以外耐えられるものがない」

「しかし、危険すぎる！安全が保証できないぞ！俺はもう、二度とあんな事は御免だぞ！」

掴みかかる勢いで一馬に詰め寄る。

「俺だつて御免だ！もう二度とあんな思いはしたくない！」

普段冷静な一馬が叫ぶ。

「じゃあなんだつて「アレ」の封印を解く！あれは危険なものだ！ましてやそれを息子に持たせるのか！」

「安全装置は万全にかける！あのシステムはプロテクトかけ使用できないようにしてある！」

「……本気なんだな？」

「ああ」

しばらくにらみ合っていると作業着の男が頭をガシガシと掻きため息をつく。

「まったく、あの頃から変わってないなお前は。この頑固野郎が」

「すまない。迷惑掛ける」

そういつと一馬は頭を下げる。

「そう言うなら最高の物を仕上げやがれ！俺も最高の物を仕上げてる。」

「……ありがとう」

作業着の男は「ケッ！」と言いながら部屋を出ていく。一馬は部屋に残り一息つく。

（今度は大丈夫だ。前と同じにはならない！）

そう拳を握る一馬の顔は決意に満ちていた。

魔導端末整備開発課 倉庫

そこは、様々なものが置かれていた。様々なデバイスが置いてあると思えば、使い道のわからない変なものまで。しかし倉庫の一番奥に一際嚴重に置かれているトランクがあった。カードを通すリーダーがあり。更に暗証番号を押すための数字のキーが付いている。それだけでなく幾重にも魔法でプロテクトがかけられている。それ

は、誰にも触れさせまいとそれをかけた人の執念すらうかがえる。
しかしそれは今一つずつ解かれ、新たな命が産声を上げようとして
いた。

第六話（後書き）

クレーターは30×30センチくらいです。思いつくまま書いてたらこんな感じになってしまった……。この複線どうしよう？

そらく今回の条件とは「気功」だったのだろう。他にも色々条件がありそうなのでいまいち便利なのか不便なのか分からない能力である。それはさておき、そんな理由で現在カーディナルの後部甲板で教官監修の訓練メニューを黙々と消化中である。

「教官、広い空っすね」

「ああ、そうだな」

「教官、白い雲っすね」

「ああ、そうだな」

「教官、広い海っすね」

「ああ、そうだな」

「教官、何で水着の美女がいないんですか!？」

「訓練中だからに決まっているだろ!！」

「じゃあ、さっさと訓練やめて砂浜行きましょう!水着美女が呼んでますよ!！」

「そうしたいのはやまやまだが、ここからどれだけ時間がかかると思ってるんだ!！」

「アレ?教官既婚者じゃなかったけ?砂浜で女の子引っかけて浮気しようとしてんの?」

「ちょっと乗ってやった結果がこれだ！馬鹿言っていないで、訓練に集中しろ！」

そう言いながら教官との会話を楽しみつつ、訓練をしていると、

《ビーー！ビーー！ビーー！》

艦全体に警報が鳴り響く。生徒たちは「なんだ？」と動きを止め艦を見る。そんな中、教官が通信を開き確認する。

「何事ですか？」

教官の目の前に映像が開かれ、通信員の人に対応する。

「現在、当艦より北西約20キロの地点において、船舶からのSOS信号をキャッチしました。当艦はこれより救助のため現場海域に向かいます。訓練を中止し艦内に戻ってください。」

「了解しました。」

そういうとウィンドウは閉じらる。すると教官が全員に、

「訓練中の全員に通達！訓練中止！速やかに艦に戻り食堂に集合せよ！なお怪我などがある場合サイトウに見てもらってから来る事！以上だ！各員速やかに行動しろ！」

そういうと教官は艦内に姿を消した。そんな中俺は戻ってきた負傷者の手当てを開始するのだった。

そこには既に全員が集合しており、治療のため遅くなった俺はクロノを探し隣に座る。

「よ、クロノ。何か説明有ったか？」

「いや、まだだ。これから教官が来て説明するそうさ。カズキは何か知っているか？教官のそばにいただろ？」

「俺が聞こえたのは、船舶からのSOSをキャッチしたって事と、これからその海域に向かうって事だよ」

「そうか、しかしこの海域に船舶か。あまり聞かないな」

「そうなのか？この海域は航路になってないのか？もしくは何か獲れるものとか無いの？」

「流石にそこまで知らないよ」

ふむ、何か起こりそうな感じだな。どうなるんだろう？そう考えていると教官が入ってきた。

「よし、全員そろっているな。では説明をする。」

教官がそういうと、手元のスイッチを操作する。すると部屋が暗くなりスクリーンに映像が現れる。

「本日1329時、「カーディナル」は北西約20キロの位置からSOS信号をキャッチ、現場海面向かって、30ノット（約60キロ）で進行中、現場到着予想時刻は約20分後1349時になる。」

現場海域には小型船舶の船影を確認していが、現在こちらから呼びかけているものの応答はない。不測の事態が考えられるため、この件は同乗している「特救」が行う事になった。我々はここで待機。幸いにも「特救」の作業内容を見る事が許可されたため各自モニターをしっかりと見ること。以上だ。あと15分程で現場に着くが何か質問は有るか？」

そういうとスイッチを操作し映像が消え部屋が明るくなる。皆現場の雰囲気にもれまれ答える事が出来ない。無理もない。訓練だと思っていたらいきなり実戦に放り込まれたのだ、そんなすぐに切り替えが出来るはずがない。皆一様に顔色が悪い。

「無いようだな。では指示があるまで待機だ」

そう言つて教官は食堂を出ていった。それを確認してから俺はクロノに話しかけた。

「なあ、クロノ外に行つて直接見ないか？」

「な！馬鹿か君は！こんな時ぐらい大人しくしてろ！」

「だってよ、生で見れる機会なんぞめつたにないぞ？しかも「特別救助隊」だぞ？救助のエキスパートだぞ？その活動を生で見れるんだぞ！絶対外に行つた方が良いつて！」

「う、確かにその方が良いかもしれないが・・・」

「良いじゃねえーか。見つかったら怒られるだけだよ。仲良く二人で怒られようぜwww」

「はあ、何でそんなにいさぎ良いんだ」

「後になって後悔したくないだろ？ハツ！俺今良い事言った？」

「いや、それほどの事は言っていない」

「ガツデム！なんて世の中だ！」

そう言いながら俺とクロノは食堂からこっそり抜け出し、甲板を指すのだった。

1258時 ミッドチルダ沖合

そこには、豪華なクルーザーと漁船の様な船が並んでいた。そこには周りに美女を侍らせ、小太りの男がゆったりと椅子に座っていた。その後では執事服の初老の男性が静かにたたずんでいた。そして漁船の様な船には4人の男性が乗っていて、漁船の甲板には布のかかった一抱え程の箱の様な物とトランクケース5つが置かれていた。するとリーダー格らしき男が小太りの男に話しかける。

「よー、ハンスの旦那注文の品きっちり揃えてあるぜ」

男はそう言うのとトランクケースの一つを持ってクルーザーに乗り込みハンスの前で開け中身を見せた。そこにはビニール製の袋に入れた白い粉がぎっしり詰まっていた。横では執事が白い粉を調べハンスに向かって頷く。それを見てハンスは嬉しそうに笑った。

「おお、そうか！チャック！これでまたひと儲け出来る。金はいつもの通りで良いのか？」

「それでよろしく頼むわ。それと旦那にはいつも鼻屑にしてもらってるから今日はちよっとした土産があるんだ。」

「ほう、なんだ？」

「いや、ここに来る途中に偶然捕まえたんだが良かったらと思っ
な。おい。」

チャックと言われた男がそういつて合図する。ハンスの前にトラ
ンクケースの横に置いてあった箱を持ってきてそれにが撫せてあつ
た布を取り払う。

バサア

と音がして中身があらわになる。それは箱ではなく檻になっていて、
中には青いドラゴンの子供が入っていた。胴体は細長く西洋的なド
ラゴンではなく和風のドラゴンだ。檻の中でぐるを巻いており不
意に明るくなったので、顔を持ち上げ周囲を見ている。すると激し
く暴れまわり遠吠えの様な叫び声をあげ威嚇する。

「おお、珍しいな。ウォータードラゴンの子供か」

「でしょう？ペットにするもよし、殺して薬の材料や、剥製にする
もよし。旦那の好きにしてください。」

「そうか、ではこれは貰っておこう。これからも鼻屑にさせてもら
おう」

そう言って握手を交わし、チャックとその仲間が船に戻った時それ
は起こった。

「だ、駄目です！さっきから出力を上げていますが前進しません！」
船長が焦ったように言ってくる。

「な、何だと！ど、ど、どうにかしろ！何のために高い金で雇って
ると思ってるんだ！」

「無理です！最初の衝撃でスクリューが破損したようです！」

「何とかしろ！」

「む、無理です。」

「そ、そうだ！助けを呼べ！どこでも良い！！さっさとしろ！！！」

「わ、分かりました。」

そついうと船長は無線を手にしてSOSを発信した。

カーディナル 甲板

俺とクロノは幸い誰にも見つかる事なく無事に甲板に到着した。
物陰からこっそり様子を窺う。そこには甲板上で慌ただしくも冷静
に、素早く、行動する「特救」の姿があった。運ぶ機材、各自が身
につける装備品、その一つ一つの練度の高さに声を上げる俺とクロ
ノは感心する。

「お、流石に早いな。全員動きに無駄がないな」

「確かに、こういった部分を見れるのは為になるな」

「そうだろう、そうだろう、救助だけ出来れば良いってもんじゃないからな」

ビシツ！と二人の動きが硬直する。俺達以外の第三者の声。ある意味お約束と言えはお約束なのだ。が実際やられるとやはりあまり良いものではない。ギギギ、と二人でゆっくり振り向くとそこには知らないおっさんがいた。あれ？ここは普通教官が良い笑顔で立っているものではないのだろうか？と場違いな事を考えつつおっさんを見る。そのおっさんは190はあるとかという身長に、銀色の制服を着た身体は無駄なく鍛え上げられている事が分かる、厳しい顔をしているが今は心なしに笑っている様に思える。

「え、どちらs・・・ん？ぎ、銀制服だと！？」

「あゝ！？」

二人して驚愕の声をあげる。「銀制服」それは「シルバー」とも呼ばれ、厳しい入隊訓練をクリアした「特別救助隊」の人間のみが袖を通す事が許される制服。その制服を着た人物が今目の前にいる。今一度おっさんを見るとその顔は悪戯が成功した子供の様な顔だった。

「おう、その二人確か食堂で待機のはずじゃなかったか？」

「トイレに行こうとしたら道に迷って甲板まで来てしまいました。」

そう聞かれ答えたは良いものの、もの見事にいつもの通り、脊髄反射並みにしれっと答えてしまったのが問題だった。焦ったクノが小声で、

(こんなときになんて答えするんだ！)

(問題ない、大丈夫だ！)

(大丈夫じゃない！問題だ！)

そんなふうにはソソ話しているとそれを見かねたのか、

「あゝ、そんなに焦るな。別に取って食う訳じゃないんだ。しかし、何でわざわざ甲板に来た？食堂でもモニターできるだろ？」

「それは、えゝつと何て説明すればいいのかな？確かに食堂では現場の活動は見れると思いますが、今見ているところは見えないと思っただのでこつちに来ました。」

「ふむ、「現場」だけでなくその前後も見たかったという事でもいいのか？」

「はい、そんな感じです。現に今見ている「特救」の人たちの動きはとても参考になります」

そう答えるとおっさんは考え出し、クロノは感心したようにこつちを見て言ってきた。

「カズキもちゃんと考えがあつたんだな」

「何を言う！いつもちゃんと考えているぞ！どうしたら「何かイベントがあるかも」という気持ち抑えつつ言い訳が出来るかという・
・ハッ！おのれ！謀ったなクロノ！？」

「どう考えてもカズキの自爆だろ！」

そんな事を言い合ってる内におっさんが聞いてきた。

「それはさて置きお前ら、もつと近くで見たいか？」

会話はしっかり聞かれていたらしいが、そんな事を聞いてきた。

「い、良いんですか？」

とクロノが答える。

「良いのか？ホイホイ誘っちゃまって。俺はシルバーだろうがなんだろうが弄り倒す男なんだぜ？」

と俺が答える。直後、クロノが殴ってきたがヒョイっとかわす。

「おう、その代わり終わったら見た感想を報告書として提出してもらう。後は港に帰るまでの間は艦の清掃だな」

ニヤニヤしながらそんな事を言ってきた。あゝ、こりゃ逃げられそうにないかなと思いつつクロノと一緒ににおっさんの後について行くのだった。

第七話（後書き）

「特級」は漫画（Force）の方の台詞から推測しました。www
まだ、色々な人の名前が決まってもせんがゆつくりと決めたいと思
っています。もし良い名前があつたら教えてください。m（| |）

m
ウォータドラゴンの子供のイメージはポケモンのハクリユウですw
wwでつかい方はハクリユウをそのままでかくしてリアルにした感
じです。

第八話（前書き）

今回、長文になってしまいました。設定や説明がめちゃくちゃかも
知れませんが広い心で読んでくださいwww

第八話

1340時 現場海域付近

「あれ？ベン隊長、その子供はどしたんですか？」

そうやってきたのは若い隊員だった。すべて準備は終わってるらしく後はベン隊長待ちの様だ。

「はじめまして。お父さんの隠し子のカズキだあべし！」

言い終わる前にクロノに叩かれた。

「少しは自重しろ！」

そんな俺達の様子に笑いながらもベン隊長はジェイクに話しかける。

「お、ジェイク準備は終わったか？」

「はい、一通り点検も終了していつでもいけます」

「そうか。その前に紹介しよう。今回カーディナルに士官学校の生徒が乗ってるのは知っているな？この二人はシルバーに憧れていてどうしても俺達の動きを生で見たいと言ってきたのでな。せっかくだから連れてきた。」

「そうですか。了解です。俺はジェイク・フィッシャーよろしく」

「おお、そう言えば自己紹介がまだだったな。俺はベン。ベン・ラ

ンドールだ。」

「クロノ・ハラオウンです。」

「カズキ・ランドヘブシ！……カズキ・サイトウです。」

『よろしくお願いします』

二人で挨拶をする。途中無言でクロノに殴られ、すごい勢いで睨まれた。ジェイクさんが汗をたらしつつクロノに言ってきた。

「面白いやつだね」

そう言われクロノはため息をつき

「馬鹿なだけです。誰でもあんな感じなので手に負えません」

そんな事を言ってきたので

「そんな事を言いつつその状況を楽しんでいるクロノなのです」

と補足を付け加えると、

「そんなわけあるか！」

と突っ込んで来た。その様子を見て横でガハハと大声でわらうベ
ン隊長。とても出発前とは思えない空気だ。しかしその空気が一変
する。

パパパパパ

反応したのは二人、俺とベン隊長だ。クロノとジェイクさんは何だ？と首をかしげている。そんな中俺はベン隊長に聞く。

「ベン隊長、この艦には質量兵器の防御装備、防弾関係はありますか？」

「ああ、とりあえず「特救」の分はある。こりゃ、装備させた方が良いな」

「ですね。音からするに7・62ぐらいだと思います。」

「ほう、お前そんなことまで分かるのか？」

「聞いた事のある音なので。下手するとうちの世界の武器かもしれないです」

「そうか、そろそろ現場だ。今からサーチャーを飛ばす。何か分かったら教えてくれ。そうすりゃ艦の掃除は勘弁してやる」

ニカツと笑い言ってくる。

「お安いご用です」

そう言っつて俺もニカツと笑う。

「こつちだついてこい」

そう言っつて俺はベン隊長について行った。

「え〜と、クロノ君だったけ？」

「はい、何ですか？」

「あのカズキ君って何者？」

「なんて表現したらいいかわかりませんが、ふざけてるだけの奴じゃないはず・・・です」

「そ、そうか」

そう言いながら二人は船内へと消える一樹とベンの背中を見つめるのだった。

カーディナル 管制室

「状況は？」

ベン隊長は、部屋に入ると開口一番にそう聞いた。

「最低ですね。現在、密輸組織と思われる三人がウォータドラゴンと交戦中。一人が魔導師、二人が質量兵器で武装しています。そして、依頼人と思われる方ですが、こちらは全部で7名女性四人に男性四人、交戦はしておらず船内にいますね。」

「そうか、武装はどうだ？」

「魔導師は、通常の杖型デバイスですね。他は銃で武装しています。流石にどんな銃か・・・」

「あれはAK 47。装弾数30発、使用弾頭は7.62mm x 3

9弾丸初速は710m/sec有効射程は約600mセミ・フルオートが可能な銃です。1949年ごろソビエトという国に配備され、その後も様々なところで使用され、今現在テロリスト等に使用され発展途上国で多大な被害をもたらしています。「世界最強の殺人マシン」と言われたり「人類史上最も人を殺した兵器」とも「小さな大量破壊兵器」とも言われています。それはなぜか？非常に安価で多少乱暴に扱っても壊れない銃なんですよ。なので大量に出回り今では一億丁出回っているといわれています」

通信員の言葉をさえぎり銃のスペックを教える。その説明を全員が聞き入っていた。しかし俺にはもつと気がかりな事があった。それはトランクケースの横にある長方形の木箱だ。俺の予想が正しいと結構ヤバめのものだ。

「それより、このトランクケースの横にある木箱、この中身って分かりますか？」

通信員がベン隊長を見る。無言で隊長が頷く。キーボードをたたきサーチャーを操作すると、映像に木箱の中身が映し出される。そしてそこに映ったのは、

「チツ、RPG-7か。」

「何だ。その「あーるぴーじーせぶん」というのは？」

隊長が聞いてくる。

「俗にいうロケットランチャーですよ。個人携帯出来る火器の中では高威力の物です。予備弾さえあれば何発でも撃てます。こちらも単純構造、取扱簡単、安価と三拍子そろっています。最大射程距離

は弾頭に依存しますが500〜700mぐらいです。ですのでカーディナルの防御がどの位強いか分かりませんが、射程内に絶対に入れないでください。ただ初速が115m/s、500mの地点で最大295m/sと若干ですが遅めです。それまでに撃ち落とせる装備があれば撃ち落としてください。それとまだ開けられて無いので絶対にこれに近づけさせないでください。近づいたら優先的に無力化してください」

「分かった、そうしよう。「特救」全員に通達！各員、対質量兵器装備を着用、目標はドラゴンと交戦している三名を無力化、更にトランクケース横の木箱には誰も近づかせるな！近づいたら最優先で無力化しろ！ドラゴンは俺がひきつける！その間に無力化しろ！以上だ！」

ベン隊長はそういうと管制室から出ていった。俺は「ふう」とため息をつき再び映像を見る何か見落としている事は無いか確認する。今のところ特にないようだ。映像を見ている内に「特救」が出撃したようだ。6人ぐらいの隊員が空を飛び向かって行く。しかしドラゴンは何でこんなところにいるんだろう？ふと気になったので通信員の人に聞いてみる。

「すみません。ちょっと聞きたい事があるんですけど。」

「あ、はい。何ですか？」

「え〜と、何でドラゴンがこんな処にいるんですか？いつもこの海域にいるんですか？」

「いえ、ウォータードラゴンもつと北の海域、冷たい海域にいて、温厚で大人しいと言われています。ですので何故あそこまで興奮し

ているか・・・ちょっと分かりません」

ちょっと申し訳なさそうに言ってくる。うーん三人を無力化しても最終的にはドラゴンをどうにかしないと無理だしな。原因は何だろう？そう思って映像を見ていると、「特級」が三人を無力化するのに成功したようだ。恐ろしく手際が良すぎて見逃した（TT）なんてこったい。しかしドラゴンはまだ暴れている。なんでだ？このままだとベン隊長ヤバくね？そう思って再び映像を見ていると、クルーザーの上に檻の様なものがあるのに気がついた。ありやあ何だ？

「すみません、クルーザーの上にある檻みたいなのあれ何ですか？」

「待つてください調べます・・・！」

「何か分かりましたか？」

「大変です！檻の中にウォータードラゴンの子供がいます！しかも負傷しているようです！ドラゴンが怒っているのはこれが原因のようです！」

おふう、何というお約束。どうするか？仕方ない直接現場に行きま
すか。ちょっとクロノに頼みますか。

「すみません、ベン隊長に伝えてください。そっちに行くのもう
ちよっと時間を稼いでください」

「はあ？ちょっとあなた何を言って・・・」

「頼みましたよ」

そう言っただ俺は管制室を出ていった。

甲板

管制室を出て外に出ると、そこにはクロノがいた。策にてをかけた戦闘を食い入るようで見ている。

「ん、カズキ遅かったじゃないか。「特級」がもう制圧し終わったみたいだぞ」

そうクロノが聞いてきたので、お願いしようとしたら、

「おい、カズキどういう事だ！こっちに来るって！」

とベン隊長が通信してきた。

「ベン隊長、至急確認してください。クルーザーの上に檻があつてその中にドラゴンの子供がいます。その子供のドラゴンの容体を確認して教えてください」

「もう確認した。ありゃ、長くないぞ。流れ弾が当たっちゃってる。呼吸がかなり弱い」

「大丈夫です。死んでなければ何とかかります。という訳でクロノ、カズキ・ヴィ・サイトウの名において命じる！全力であそこに向え！」

と言つとクロノは「はあ〜」とため息をつき言ってきた。

「やっぱり巻き込まれた。分かったよ早くつかまれ状況からかなり急がなきゃ不味いんだろ」

「やっぱり通じないよね・・・流石クロノ今の会話を聞いただけで理解するとは、そこに痺れる！嫉妬する！！」

「そんなこと言ってないでさっさと行くぞ」

「スルーはキツイでsぐえ！」

そんな事を言っていると首根っこ掴まれてクロノがクルーザーに向け飛行し始めた。

特級 出発前ブリーフィング

そこには6人の隊員がおり、各々出撃前の調整などをしていた。そこにベンが戻ってきた。

「敬礼！」

と、一人の隊員が声をかける。全員が一斉にベン隊長に敬礼をする。それを見てベンが敬礼を返し、

「楽にしる」

と言い、全員が直る。それを確認しベンが話し始める。

「現場の状況が確認できた。現場には二隻の船舶がおりうち一隻はクルーザー、もう一隻は漁船の様な船だ。状況から密輸の取引最中にドラゴンが現れ交戦そんなところだろう、二隻の船の上で三人が交

戦中。この中の一人は魔導師、残りの二人は質量兵器で武装している。更にクルーザーの中に7人が確認されている。武装はしていないようだ。油断はするな。ここまでで何か質問は？」

するとジエイクが手をあげ質問する。

「交戦中の三人の武装の詳細は？」

「魔導師は通常の杖型デバイスの様だ。他の二人の質量兵器にあつては「AK-47」といわれるマシンガンだそう。さらにトランクケースの横に木箱があるが、これには非常に強力な火器が入っているため、これを取り出そうとするのがいたら最優先で無力化しろ」

更に他の隊員が手をあげ、

「質量兵器の情報の信頼度は？」

「たまたまその武器が使用されている世界の出身者がいてな、情報は信頼できる。他に質問はあるか？」

ベンは全員を見るがこれ以上の質問は無いようだ。

「よし、続けるぞ。現在対象三名はドラゴンと交戦中、よってその後方から近付き奇襲して三人を無力化する。武装した二名には四人、魔導師には二人つけ、魔導師は空から太陽を背に、武装の二人は匍匐飛行で背後から奇襲を仕掛け、ドラゴンの注意は俺がひきつける。攻撃のタイミングは任せる。以上だ。各自全力で事にあたれ！」

「了解！」

そういうと全員が一斉にカーディナルから飛び出した。

現場

チャックは内心毒づいていた。クソ！簡単な仕事だったはずだった。いつも通りの航路、いつも通りに警戒網を潜り抜け、いつも通り依頼人に接触し品物を渡すだけだった。それがちよつとしたサービス精神を出したばかりに取引は御破算。しかも命の危険までついてきた。チクシヨウ！もう二度とサービス精神なんてぞださねえーぞ！そう思いながら必死にドラゴンの攻撃をかわす。すると急にドラゴンの動きが止まり、何かに警戒するように間合いを開ける。その瞬間今までドラゴンのいた場所に魔力弾が着弾する。何だと思い上を見るが、後頭部に衝撃を感じチャックはそのまま意識を手放した。

「隊長、魔導師無力化に成功、デバイスを確保。バインドで拘束しました」

「同じくこちらでも武装した二人を無力化。バインドで拘束、密輸品等全て確保しました」

「クルーザーの乗組員を確保、全員バインドで拘束、現在カーディナルからの転送作業を補助中」

初手の攻撃からどんどん報告が上がる。ドラゴンと対峙しながら指示をする。ドラゴンは未だ警戒して攻撃を仕掛けてこない。じつと睨み合いが続いたころ、カーディナルから通信がくる。

「ベン隊長！報告です！クルーザーの上にある檻の中にドラゴンの子供がいます！ドラゴンが興奮している理由はそれだと思われま

！なお子供は負傷している模様！」

チツ！それが理由だったか。ベンは舌打ちし急ぎ確認をとる。確かに檻の中にいたが、戦闘中に流れ弾が当たったのか出血がひどい既に虫の息だ。不味い。このままではいずれ死ぬ。そしたらドラゴンを止める術は無くなる。そうなる前に何とかしなければと思い、治癒魔法が使える隊員に念話で指示を飛ばす。しかし状況は芳しくない。そんな中更に通信が入る。

「ベン隊長！先ほどの管制室に来た子供の、え〜つと！」

よほどの事か、らしくないほどに慌てている。

「どうした。落ち着け。カズキがどうかしたのか？」

「そつちに行くから時間を稼げと言って管制室から出て行きました！」

何だと？こつちに来る？武装グループは無力化したがまだドラゴンがいるのだ。危険度はまだまだ高い。そんな中に来るとは正気か？そう思いカズキに通信をつなぐように指示をする。

「おい、カズキどういう事だ！こつちに来るって！」

通信がつながり、カズキに問いたです。

「ベン隊長、至急確認してください。クルーザーの上に檻があつてその中にドラゴンの子供がいます。その子供のドラゴンの容体を確認して教えてください」

「もう確認した。ありゃ長くないぞ。流れ弾が当たっちまってる。呼吸がかなり弱い」

「大丈夫です。死んでなければ何とかかなりなす」

とそんな事を言ってきた。正直驚いた。カズキはウソをついている様子はない。この状況下でそんな事を平然と言ったのけた。クツクツク、そんな事を言われたら賭けたくなっちまうだろうが！

「よし！各員に通達！今からここに馬鹿がやってくる！それまで何としてもドラゴンの子供を死なせるな！」

さてここが正念場だな！俺は目の前にいるドラゴンと再び対峙する。

現場上空

クロノに運んでもらい現場上空に到着した。

「クロノ、良いよはなせ」

「分かった」

「ちよつとは躊躇しろよ——————！！」

と、ドップラー効果を残し落下する。ぐんぐん近づく海面、風切り音が鼓膜を鳴らす。とっさに気功で身体を強化し足に「気」をまとつ。

バツシャアアア——————ン！！！！

海面をたたく音と共に水柱が上がる。あまりの事に周りにいた全員が啞然とする。水しぶきが晴れそこに視線が集中する。そこには水面に立つカズキがいた。ゆっくり、ゆっくり船に近づく。船体に手をかけジャンプして勢いを殺さず船体の縁を乗り越え着地する。

「サイトウ。ただいま到着しました」

そういうと檻から出された子ドラゴンの元へ急ぐ。既に動きは無く呼吸は弱い、出血も多い。大口は叩いたものの此処までの大怪我を治した事などない。しかも相手はドラゴンで人間ではないのだ。人間以外にするのは勿論初めてで成功するかどうかも分からない。でもやらなきゃ絶対後悔する。この世界に来て、この力を得て、助ける事が出来る命は助けると決めた。その為に力もつけた。だから絶対に助ける！腹が決まると右腕に「気」を集中した。身体を循環するイメージをつくり、その流れを肩に流し、肘につなげ、拳に溜める。狙うは子ドラゴンの胸、傷口の近く。

「飛翔鳳凰、チャクラ龍門の一つ「龍掌」「」

一樹は小さく呟き、子ドラゴンを思いつきりぶん殴った！！！！

ドン！！！！

と音がし船体が揺れる。ドラゴンと対峙していたベン隊長はあまりの事に声が出ない。対峙していたドラゴンも啞然としている。どうやら状況を多少は理解していたらしい。全員が動けず呆然としている中、クロノが空から降りてきて一樹を思いつきりぶん殴った。

「何やってんだ！カズキ！ドラゴンの子供を治して親に帰すんじゃないのか！それをどうして止めを刺してどうする！！！」

「待て待てクロノ。よく見ろ！死んでないよ！」

「そんな訳あるん……え？」

クロノが視線を戻すと、さっきまで虫の息だったドラゴンの子供がゆっくりではあるものの動きを見せ一樹に近寄ってくる。その場にいた全員が更に呆然とする。何せぶん殴って傷が治ったのだ。信じるという方が無理である。しかし現実にはドラゴンは回復し、カズキにすり寄り首に巻きついてそのまま首を絞めていく。一樹の顔が青くなり、必死に子ドラゴンの体をペシペシ叩いている。声は出ていないが「ギブギブ！」と言っているようだ。すると子ドラゴンも絞めるのを止め、顔をすりよせてきた。少しじゃれた後一樹は立ち上がりウォータードラゴンへ歩み寄る。一步、また一步と、船の縁まで行きそしてドラゴンの正面まで来ると、

「ちょっと乱暴な方法だったけど治せてよかった。あんたの子供は元気だよ」

そう言ってじゃれていた子供を見せる、すると一樹の頭の中に声が届いた。

（感謝する、小さき人よ。確かに乱暴ではあったが我が子の命助けてくれた事感謝する）

「何だよ、お前しゃべれんのか」

（無論だ。喋る位造作もない。しかしお前は驚かないのだな？）

「龍がいる、その時点で俺の世界とは全然違うからね。喋った程度

じゃ驚かないよ」

（そういうものなのか？まあ良い。それと我が子を救ってくれた礼がしたい。我に出来る事なら協力してやろう）

「え？急に言われてもな、うん。あ、そうだちょっと相談なんだけど。……て何とかなんない？」

周りに聞かれても不味いのでそばにより小声で話す。

（それだったら、これを使え）

そういうとウォータードラゴンは目から涙を出し、それを結晶化させた。その数は二つ。それは恐ろしい程の魔力を秘めており神々しい輝きに満ちていた。

「これは？」

（我々の涙を結晶化させたものだ。それを飲ませれば、言伝えでは万病を治し、死者すら生き返らせるといわれているが、実例がないので何とも言えないがな。まあ試してみる価値はあるであろう）

「マジか！サンキュ！恩にきるよ！」

（気にするな。元々此方の礼だ。また何かあったら我を呼べ。出来る限り協力させてもらおう。）

「おう！ありがとな！何かあったら頼りにさせてもらつよ。」

（では、また会おう小さき」一樹」む？）

ウォータドラゴンの言葉をさえぎり自己紹介する

「斎藤一樹だ、こつち風にいうとカズキ・サイトウかな」

（そうか、ではまた会おうカズキ。我はヴァリトラ。水神の一角を担う龍である）

「おう。また会おうなヴァリトラ」

そういつとヴァリトラは子供と一緒に海中に消えていった。それを確認すると俺はその場に座り込んで、大きなため息をついた。今手にあるのは龍の秘宝ともいえる物、それを使う事によりどう影響するかは分からない。でも重要なキーが出来た。まだこれからの事は分からないけど少しずつ良い方向に向かってしていると信じたい。しかしこれからどう言い訳しよう。近づいてくるクロノやベン隊長を見るとそう思わずにはいられなかった。

第八話（後書き）

「特級」の2人の名前は映画「守護神」（洋画、アメリカ版海猿？）から頂きましたWWW

第九話

2034時 カーディナル 甲板

「さつき、ドラゴンと何を話していたんだ？」

警戒態勢も解除され「特級」の後片付けや、押収品の運搬と説明（ほとんどの質量兵器が地球製だったため）更に教官にこの事がばれ正座でクロノと共に説教された。そのあとベン隊長に「卒業後はどうするんだ？」と聞かれたので「18歳になるまで地球で勉強します」と断りを入れておいた。そして今クロノと一緒に甲板に出て缶コーヒーをのみつつ一息ついている所でクロノが聞いてきた。

「ん？子供を助けてくれてありがとうだって。困った事があつたら協力するって言われた。て言うか聞こえてなかったのか」

龍の涙（自分で命名）の事は隠しつつクロノに話す。そこで初めて俺以外は聞こえてないと知ったのだった。

「ああ、はたから見たらドラゴンに向かって一人話したり、驚いたりしていてなかなか見物だったよ」

なん・・・だと？しかしあの会話が聞かれなかったのは不幸中の幸いである。「万病に効く」とか「死者を生き返らせる」とか聞かれていたら確実に取り上げられていただろう。せつかく手に入れた「キー」なのだ、取り上げられてたまるか。

「そんな状態だったとは、ヴァリトラめ！一言断れば良いものを！後で泣かす！」

「まで、君は今何って言った？」

あの野郎と思いなから言っているとクロノが驚いていた。

「ん？後で泣かすって言ったぞ？」

「もうちょっと前だ！」

「そんな状態だったとは？」

「カズキ、わざとだな？わざとなんだな？そうなんだな？」

「期待通りの反応ありがとうwwww」

「いいからっさっさと答える！」

若干キレ気味に言ってくる。やっぱりからかいがいのある奴だww。期待通りの反応もいただいたので素直に答える。

「ヴァリトラか？」

「ホントにそうだったのか？」

「ああ、後「水神の一角を担う」とも言ってたぞ？」

それを聞いてクロノはため息をついた。

「ホントにカズキといると信じられないような事が起きるな」

「で、どの位有名なんだ？ヴァリトラは？」

「有名ね、そんなもんじゃないよ、ほぼ伝説上の生き物だ。」

「え？だつてお前ら「ウォータードラゴン」って言ってなかったか？生息域が分かってるぐらいなんだろ？伝説つてのは言い過ぎなんじゃないか？」

「確かに言ったしヴァリトラ自体も「ウォータードラゴン」だから間違つてはいないんだ。」

「じゃあ、なんだつてんだよ」

「ヴァリトラの名前が出てきているのは古代ベルカ時代より更に前の時代、ざつと計算しただけでも1000年以上前になる。その時語られているのは「大いなる災いから生きとし生けるものを救いし龍神ヴァリトラ」だそうだ。何からどう救ったのかは知られていないが少なくとも実在する事が判明した訳だ」

「なんと！あいつそんなに凄かったのか。どうするかクロノ。出来る事なら協力するって言われたぞ？世界征服とかでも大丈夫かな？」

「馬鹿か君は？もっとマシな事を協力してもらえ」

「ですよね〜」

など軽い会話をしていると、誰かが近づいてくる。二人同時に振り向くとそこにいたのはベン隊長だった。「よう」と言いながら隣に来る。

「昼間は世話になったな。カズキがいたおかげで大分時間が短縮出来た。」

「え？そうなんですか？」

意外だった。別段特別な事はしてないはずだが？

「ああ、押収した質量兵器があるだろ？普段はあれがどの世界の物かというところから始めて、どう造られ、どう使われ、どの位の危険度の物なのか、というのを地道に調べるんだぞ？それが一気に解決したんだ。普段だったらまだ書類整理の真つ最中だ。」

ああ、成程。確かに管理局が管理している世界ならともかく、確かに地球は管理外世界だからな。調べるのにも時間がかかるだろう。そう言った貢献が出来たのなら嬉しい限りである。書類整理の辛さは警察官時代に嫌と言うほど味わっている。

「そうですね。お役に立てて良かったです」

そういつとバンバンと背中をたたかれまたお礼を言われた。それはそうと気になる事が一つあるのだ。

「ベン隊長ちよつと聞いてもいいですか？」

「なんだ？」

「あの質量兵器。若しくは似たようなタイプの物見た事ありますか？それはいつ頃から？」

ちよつとした沈黙の後ベン隊長は答えてくれた。

「ああ、ある。あれと似たようなものなら2〜3年前からチヨロチヨロ見かけるようになったな。まだ調べきってないから押収品倉庫の中に結構な数があると思うがな、まあ今回の事でどの世界で使われているかが分かったただけでも儲けものだ」

ふむ、成程つい最近からという事か。調べたいが情報が少なすぎる。捕まえたのにどの世界の物かも分かってない様じゃ捕まったのは末端も末端だな。これからの捜査に期待ってどこか。

「もし何かあつたら手伝います。いつでも読んでください」

「ああ、その時はよろしく頼む」

そういうとベン隊長は艦内に戻って行った。それを確認してクロノが聞いてくる。

「カズキ、君は士官学校を卒業したらホントに地球に戻るのか？」

「ん？なんだ急に？」

「僕たちは後半年もすれば卒業だ。そしたら僕は執務官になるため本格的に勉強を始めるつもりだ。そう思っていたらカズキはどうするのかな？って思ってた。そしたらさっきベン隊長に言ってただろ。」「18歳になるまで地球で勉強します」って。カズキは空は飛べないし、射撃も防御魔法も出来ない。でも地上での模擬戦は無敗だし、治癒なんか魔法より強力だ。それだけの能力があるのに、力があるのにどうしてすぐに管理局で働かないのかなって思ってた。」

「なんだ、寂しいのか？」ニヤニヤ

「茶化すな。その力があれば助けられる人達が沢山いるかもしれない。救える命が沢山あるかもしれない。そう考えなかったのか？」

「うーん、どうだろうな。正直そこまで考えてなかったし、ベン隊長に言ったのはまあ方便みたいなもんだからな。地球の日本じゃ就職するのは18歳くらいからが一般的だしな。それまでは管理局でアルバイトとか非常勤しながら自分のしたい事を見つけようと思っただけだからな」

「そうなのか？」

「ああ、しかも魔力があっても魔法が碌に使えない。そんなんじやいつ首になってもおかしくないだろ。そしたら日本に戻らなきゃいけないし、その時ある程度の学がなきゃ就職だって出来ないよ。だからどっちにしる俺は18までは日本を拠点に考えてるよ」

「今はその、なりたいたいものとかは無いか？」

「まあ、人助けが出来るものだったら良いなと思ってるよ。だから管理局に就職つても候補のうちの一つだし。その管理局の事だつてまだ全然知らないんだ。どんな部署があつて、どんな仕事があるのか。だからおいそれと簡単に選べないよ。それに簡単に管理局を選べない理由もあるしな。」

「何だその理由って？」

「年端もいかない子供が前線にいる事だよ。はっきり言ってこれは異常だ。少なくとも日本ではありえない事だよ。いくら魔法が使えたって、いくら魔力が強いからって、「人材が足りない」たったそ

れだけの理由で子供に命の危険がある様な仕事をさせる。それが理由だよ。」

「しかし、管理局は多くの世界を守っているそれは仕方ないんじゃないか？」

その言葉を聞いて俺はため息をつく。

「はあ、クロノ話をしよう、そうだな今から10年後ぐらいの話だ。クロノはエイミィと結婚して子供が出来た」

「ブーーーーー！ゲホツゲホツ。どうしてそこでエイミィが出てくる！」

クロノは飲んでいた缶コーヒーを吹き出し抗議してきた。

「もちつけ、まったくいつも期待通りの反応をする。ただたんに年の近い女の友達がエイミィしかいなかっただけだ。特に深い意味は無いよ」

「君ってやつは(怒)」

どうせそのぐらいには結婚するんだからな。

「まあまあ、で話の続きだがエイミィとの間に出来た男の子としておくか、男の子は元気に育っていききました。しかしある時男の子にリンカーコアが有ることが分かり、魔力も巨大なものでした。当然管理局は目をつけ魔導師として育てる。そして魔力が巨大なため任務も当然危険なものになる。クロノお前はそれを許せるのか？」

「・・・・・・・・」

「実感がわかないか？しかしこれは十分にあり得る話だぞ。現にリンディさんはその立場にいるだろうからな」

「あ、・・・・・・・・」

「そして、一番最悪なのはクロノお前がリンディさんに「殺される」事だよ」

流石にこれにはクロノが反応してきた。

「馬鹿な事を言うな！そんな事は絶対にならない！！！」

「クロノお前は勘違いをしていると思うぞ？「殺される」というのはリンディさんがクロノに「死ぬ」と「命令」しなきゃいけない、そういう状況に追いやられる時だ。俺はそんなこと出来そうにない。俺は自分の子供と顔も名前も知らない一万人だったら自分の子供を選ぶよ。それを踏まえたうえでもう一度聞こうクロノ。お前はそれでも管理局が正しいと胸を張って言えるのか？」

「・・・・・・・・」

「意地悪かもしれないが現にクロノ、お前はそういう状況にあるんだ。リンディさんにそんな思いはさせるなよ？」

「ああ、分かったよ」

クロノはかるうじてそう言う事が出来た。

「それにな、「子供」は身体も精神も未発達なんだ。体力は大人より無いし、仲間の生死をみて確実に取り乱すだろう。前線でそんな事になってみる、最悪その一人にせいで部隊が全滅なんて事になりかねないぞ。「子供」ってのはそれだけのリスクを背負ってるんだ。そんな事をしている組織をどうしてそんなに「正しい」と思えるか俺は不思議でならないよ。まあこれは俺の考えだからな、「こんな考えもある」って程度に思っていてくれ」

そう言うのとそれっきり二人で黙り込んでしまった。色々と思うところがあったのだろう。斯く言う俺も父さんにそんな思いはさせないとかーディナルの甲板の上で綺麗に出ている月を見上げながら誓うのだった。

第九話（後書き）

クロノとの会話です。若干説教ぽくなったようなってないよう
な・・・文才なくてすいません。

第十話

新暦62年 2月13日

卒業を間近に控えたその日父さんからメールで連絡が入った。「デバイスの試作機が出来た」簡潔、かつ明瞭に短くそれだけしか書かれていなかった。とりあえず「魔導端末整備開発課」Device Maintenance Development Division 別名「DMD」に行く事にした。地上本部に行きいつか通ったロビ―を通り受付のお姉さんに挨拶して、エレベータに向かい地下に行く、扉の前に立つと物々しい空気が流れていた。なんだ？と不思議に思いながらも扉の前に立つと横にスライドし開く。部屋に入るとそこは薄暗く、人の気配はあるものの動いている様子は無い。電気スイッチを手さぐりで探し、スイッチを付けると、そこには死屍累々と横たわる人たちの姿があった。ある者は机に突っ伏して、ある者は床に、ある者は椅子を並べ、ベットにして等々。いったいどうなっただ？とその人たちを見ていくと、ある共通点に気付いた。皆一様に「やりとげたぜ！」とでも言う様な清々しい顔をして寝ているのだ。とりあえず話を聞かため一番奥の机に突っ伏して寝ていた父さんを起こすことにした。

「おゝい、父さ〜ん起きろ〜。」

と言いながら身体をゆすつても起きない。呼び出しておいて良い笑顔で寝ているので少し「イラッ」とした。なので

「父さ〜ん、何時までも起きないから母さんが良い笑顔で枕元にいるぞ〜？」

と言ったら、

「御免なさい！すぐ起きます！！」

と飛び起きた。母さん、普段父さんをどうやって起こしてんだ？と不安になる。そんな事を考えていると、だんだん覚醒してきた父さんがキョロキョロと周りを見渡している。

「あ、あれ？お母さん？あれ？僕の机？・・・ああ、そっか。昨日はここで寝ちゃったのか。」

「今はもう昼だけど、おはよう父さん」

「ん？ああ、一樹か。おはよう。早かったねもう少しかかると思ってたんだけど」

「やっとデバイスが出来たんだ。楽しみにしてたんだからそりゃ飛んでくるよ」

「そっか、じゃあこっちに来てデバイス渡すから」

そう言うと椅子から立ち上がり円筒形台座の装置の前までにきた。それはその台座の上20cmぐらいの所に浮いていた。銀の数珠の様な紐に二枚の銀のプレート。プレートの周りは黒いゴムの様な物で覆われていた。その形状はドックタグ。軍隊などで兵士が付けているアレだ。

「おお、注文通り！」

「まあ、形状ぐらいなら問題ないよ。後は性能と耐久性も現存する

デバイスではたぶん最高の物だと思うよ」

それを聞いてマジで驚いた。

「父さん？それ、公私混同じゃね？よく作れたね」

「まあ、公私混同は無いとは言えないがお前には普通のデバイスでは耐えられないからな。自然とそれだけの物が出来ちゃったんだ。みんなで何度お前のデータを見直したと思ってるんだ？」

「そ、そうなの？」

「当たり前だ。しかも何度見ても結果は同じ、魔力は普通よりちょっと高いくらいなのに、何度やってもお前に使わせると壊れて帰ってくる、みんなかなり悩んでたぞ？」

そうなのだ、月一位で学校にデバイスが届いていたのだ。それのことごとく訓練でぶっ壊し、送り返していたので流石に「やっぱ無理なのかな？」と思っていた矢先、先の事件、密輸の関係だ。その時のデータを渡したとき「気功」の存在に気付いたのだった。そこから、送られてくるデバイスは今までとは違っていた。損傷はするものの「大破」しなくなった。少しずつだが魔法も使える様になった。そしてあれから半年ついにデバイスが完成したと（試作機だけ）連絡が来たのだ。今度こそはと意気込んできた。

「でも、完成したんでしょ？」

「ああ、やっとだよ。プロトタイプが完成した。みんな最高の仕事をしたって言ってたよ。」

「じゃ、後でお礼しなきゃだな。」

「それなら、まずデバイスを使いこなしてみる事だ。結構なじゃじや馬みたいだから」

「じゃあさっそく使わせてもらいますか。」

そうやって俺はデバイスに手を伸ばし掴んだ。そして掌に載せ話しかける。

「おい、起きてるか？」

すると、男の合成音声で答えが返ってきた。

『起きています。あなたは誰ですか？』

「あゝ、お前のマスターで、斎藤一樹だ」

『マスター？あなたがですか？』

「そうだ、これからテストルームで使うから声を掛けたんだ」

『そうですか。よろしくお願いします。』

「おう、よろしく。そう言えばお前名前あるのか？」

『いいえ、まだつけられていません』

そう聞いたので父さんの方を見ると、父さんも頷く。

「じゃあ「スサノオ」で行こう、それがお前の名前だ。日本に伝わる三貴神の一柱、防災除疫の神様の名前だ」

『了解、私はどのように呼べば宜しいでしょうか？』

「うーん、好きに呼んでもらって良いよ」

『そうですか、ではファツキンシット（クソ野郎）と呼びましょう
ビシッ！とそう音が聞こえた気がした。俺はそのまま体勢で固まり、
父さんは苦笑いしている。』

「あゝ、耳の調子が悪かったのかな？ちょっともう一回言ってくれ
るか？」

『了解、何度でも。クソ野郎』

「よし、テストルーム行くぞ！全力で使っぞ！！父さん良いよね
！！！！」

「まあ、構わないけど壊すなよ？」

「無理！！！！」

そう言うと、俺はテストルームに入っていくのだった。

テストルームは白い空間で、野球場ぐらいの広さの長方形の様な
部屋だ。壁は一辺が1メートル位の正方形のタイルが貼られている。
そこに立つと、俺はスサノオを首にかけ起動する。

「スサノオ起動」

『了解』

スサノオが短く答え、バリアジャケットが構築される。メインカラーは白、周りは黒く縁取りされており、肩から腕、腰から足に向かって赤いラインが入っている。頭部は赤いヘッドギアが装備されている。上着はミリタリー風になっており下はカーゴパンツだ。靴も黒のブーツになっている。腕には黒い小手がついていて内側には何かを入れるスリットがある。手は赤いグローブを付けていて、握る感触は素手に近い。俺は軽く体を動かし感触を確かめる。

「父さん、何かターゲットみたいなの出せる？」

「ああ、待ってる」

そう言われ待っていると目の前に円柱の様なターゲットが出てきた。軽く触る、感触的にはサンドバツクが近い。これなら問題ないだろう。まずウォームアップを兼ねボクシングスタイルでサンドバツクをたたき、ジャブ、ストレート、フック、始めは軽くたたき。

バシ、バシ、バシ

と小気味良い音が鳴る。そこから蹴りも加えていく。ロー、ミドル、ハイ。と順に行い、ハイからミドル、ミドルからローに変化する蹴りも付け加えていく。

バシ、バシ、バシ、ドン

そこから少しずつ威力を高めていく。

ドン、ドン！、ドン！！

サンドバックが撃つたびにくの字に変形する。

ドン、ドン、ズバン！！

更に踏み込みを加え、威力を高めていく。

ズバン！ズバン！ズバン！

構えを変え、ボクシングの様に動きのある構えから空手などの静止した構えに。その際「気」を使い全身を強化し、更に魔力で補強する。

ダン！！

「震脚」。床を踏みぬき、踏み込みからのエネルギーが腰へと伝わり、腰を回転し肩に伝え、肘に送り、拳に流す。その勢いを殺さず一気に目標を打ち抜く。

ドガン！！！！

ターゲットが吹き飛び壁に当たり転がる。ふう、とため息をつき腕のところに着いていたデバイスのコアを見る。そこには黄色く輝きながら変わりにないコアがあった。普段であればこの時点で煙を吹き始め、最終的に強制解除されるのだ。しかし今のところそのような兆候はみあたらない。凄い！気と同時に魔力も流したけど壊れなかった。それどころか魔力の循環が今までよりずっと楽に出来る。これなら少ない魔力で今まで以上の強化が出来そうだ！そう思うと

わくわくが止まらなかった。するとスサノオが

『どうしたんですか？ クソ野郎 もう終わりですか？』

と言ってきた。その言葉を聞きつつ

「冗談、ほんのウォームアップだ。本番はこれからだ。それと「クソ野郎」はやめろ」

『しかし呼び方は何でもいいと』

「限度があるだろ」

『その時点では限度は分かりませんでしたので、このままで良いと思います』

「くあく、信じらんねえーデバイスだな。そんなデバイス聞いたことねーぞ！」

『当然です。 クソ野郎 の為につくられたワン・オフ機なのでから』

「むかつく！絶対その呼び名返させてやるからな！！」

『分かりました クソ野郎 楽しみにしています』

「ぬあああああー！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！絶対ぶっ壊す！！！！」

ガシガシと頭をかき叫ぶ。そして俺はぶっ倒れるまでスサノオのテ

ストを行うのだった。

そんな様子をガラスの向こうから見ると、親である一馬の他「DMD」のメンバーだった。

「まったく、壊すなど言ったのに」

そう一馬が愚痴る。これでまた修理費がかさむ。

「しかし、やっと完成したな一馬」

そう言ったのは作業着を着た男だった。

「ああ、やっとだよエド」

一馬はそう答えた。エドワード・サックス、彼がいなければどれほどの耐久性は出なかっただろう。

「でも良い仕事したよ」

スーツを着た男が言ってくる。

「まったくだヒューズ」

ヒューズ・アレックス。各企業から新素材を調達してきた。

「プログラムも良い感じの様だ」

白衣の男がかけていたメガネを上げて答えた。

「そうなのか？バニ」

バニ・モラウタ。デバイスのプログラム構築を手がけている。

「課長、報告書まとめ終わりました。チェックをお願いします」

制服の女性が報告してきた。

「すまない、仕事が早くて助かるよレミング」

ノーラ・レミング。開発スケジュールや報告等を補佐してくれた。

「みんな、ありがとう。これでようやくひと段落ついた」

「なーに、久しぶりにいい仕事が出来たんだ、不満なんかねーよ。
なあみんな。」

エドの問いに全員が頷く。そこに不満の色は無く皆嬉しそうな顔を
していた。

「ありがとう。よし、今日は久しぶりに飲みに行くか！勿論僕のお
ごりだー！」

『お〜（パチパチ）』

「その前に課長」

「ん？」

レミングが言ってくる。

「息子さん、倒れましたよ?」

「え!?!」

あわててテストルームを見るとそこには前のめりに倒れている一樹がいた。

「あゝ、医務室に運んで行くから。みんなは準備しててくれ」

『了々解』

そう言つと各自ばらばらに散り片付けを始める。その姿を確認してから一馬は息子を医務室に運ぶのだった。

地上本部医務室

人の気配を感じ目が覚める。瞼を開けるとそこには見た事のある天井があった。

「知ってる天井だと!?!」

前回言いそびれただけに今回は言ってみたかったが、あいにく知らない天井ではなかった。

『何を言ってるんですか クソ野郎 』

そう言われ一瞬誰だ!と思ったが思い出したので自分の胸元を見る。そこには自分の新しい相棒の姿があった。

「何でもないこつちの事」

『そうですね、わかりました』

そう言うつと身体を起こし周りを見る。以前運び込まれた医務室の様だ。今回は虚脱感はあるものの身体が動かないという事は無く問題ないようだ。少しベットの上で身体の状態を確かめっていると、父さんが顔を出した。

「お、目が覚めたか。大丈夫か？」

「うん、少し身体が重いけど動けない程じゃない」

「そうか、良かった。とりあえずスサノオに異常は見当たらなかった。一樹の方は一時的な体力と魔力の枯渇だそうだ。あと二〜三時間も休めば大丈夫だそうだ」

「そっか、分かったありがとう。じゃあもう少し休んでから帰るよ。」

「そうしておきなさい。」

そう言うつと俺の頭をくしゃつと撫で医務室から出ていった。その姿をみてベットに倒れこむ、久しぶりに疲れた。魔法もやつと使えるようになったし、それに付け加え気も使える。これなら原作介入しても大丈夫だろう。後はどう進めるかだ。そしてプレシアとアリアを何とか助けたい。そのためにはどうするか・・・まったく良い案が思い浮かばん！！なるようにしかならんのか？とりあえず虚数空間に落ちるところを助けられる様に準備しておかないとな。そう考えな

がら救出プランを練るのだった。

第十話（後書き）

ちよつと無理やりくさいけど、親父の部下の紹介と、課の略称をつけてみました。

第十一話

新暦62年 4月25日 海鳴市

海鳴よ！私は帰ってきた！！WWW

久しぶりに帰ってきた地元はあまり変わっておらず、懐かしさが漂っている。そんなテンションからか、つい某少佐の名台詞を叫んでしまった。士官学校に通った二年間色んなイベントがあり、馬鹿もしたし、無茶もした。そのおかげで想像以上に力がついた。デバイスのスサノオともぼちぼちだ。そんな中自宅に向かって帰る途中に海鳴商店街のさしかかったとき気になるお店を見つけた。

「翠屋」

看板にそう書かれており、ここが戦闘民族高町家の拠点になっていると思うとやっぱりどうも信じられない。お店の中を覗くがやっている様子は無い。開店前か？と思ったが現在はちょうどお昼時、この時間でやってなければ定休日なのだろうと思ったが開店時間が書いてある看板を見るとどうやら定休日とも違うようだ。すると一つのイベント？が頭をよぎる。

（確か、なのはのお父さんが大怪我したんだっけ？）

で、なのはは寂しく公園にいたんだっけか？そんな事を思い出す。まあとりあえず家に帰る前に公園に行ってみるか。と公園に足を向けるのだった。で、公園に向かったけど結果は我らが未来のEースはいなかった。まあ、接触の機会は今日だけじゃないのでちよくちよく公園には行ってみるかと思い自宅に帰る。するとその帰り道、車いすの少女が道の溝にタイヤをとられ身動きが取れないのを発見

する。まさかと思いつつ近づいてみると案の定彼女だった。夜天の書の主にして機動六課創設の立役者

「八神はやて」

御都合主義ってすげーなと思いつつ声をかける。

「大丈夫？」

するとはやてはこちらを見て、

「だ、大丈夫です。一人で何とかできます」

そう言つてタイヤを喰りながら押しているがびくともしない。見てみると溝は思いのほか深くタイヤもがっちりハマってしまったている。断られてしまったのでしばらく後ろで見ていると、はやてがバツが悪そうな顔をしながら言ってきた。

「す、すんまへん、後ろから押ししてもらてええやるか？」

「お安いご用だ」

と答え、車いすのハンドルを握り、てこの原理でハンドルを下げ、タイヤを浮かす。ズル、という音と共にタイヤが溝から抜ける。ちよっと押しして溝の無いところに移動する。

「これで大丈夫？」

「おおきに、いやー始めは何とか出来ると思ったんやけどな、お兄さんが帰らんで良かったわ」

「まあ、誰だって始めは自分で何とかしようと思っただけやもんだろ。仕方ないんじゃないのか？」

「そーやね、そう言ってもらえると助かるわー。うち八神はやて言います。お兄さんは？」

「ああ、俺は斎藤一樹、聖祥大付属小の5年だ」

「うちは、海鳴幼稚園の年長組や」

「車いすで通うのは大変だろう。それとも親に送り迎えしてもらってるのか？」

まあ、理由は知っているが直接聞いておかないと不味いと考えあえて聞いた。

「うち、親はいないんよ。今も独り暮らしやし」

「あ悪い、変なこと・・・は？独り暮らし？八神は6歳だろ？」

「そうなんよ、不思議な事に」

「いやいや、あり得ないでしょ！親戚は？誰か一緒に住んでないの？家事はどうしてるんだ？」

「全部うち一人でやってるで！」

心なしか胸を張って答える。しかしどう考えても驚きである。幼稚園の女の子が独り暮らしとか、普通施設なり、親戚なりと一緒に

住んだりするもんだけどな。

「マジ？」

「せやから、さっきから言ってるやん。信じてないならうちの家に来るか？」

「いやいや、知り合っただばかりの人家に招待するか普通」

「ええやないか、助けてもらったお礼もしたいんよ」

「はあく、分かりました。行きますよ。それで八神んちはどっち？」

「こつちや！それと、うちの事ははやてでええよ！」

そう言って嬉しそうに進む方向をに向けて指をさす。まあちょうど帰り道だ。少少きあうか。そう思いはやての車いすを押して言われた通り進んでいくのだった。

八神家前

歩くこと15分、はやての家の前に着いた、その門扉の横にある「八神」の表札。まぎれもなく「八神家」なのだろう。しかし俺が驚いているのはそんなことではない。「八神家」を正面に置き、その右隣の家、その門扉の横の表札にはこう書かれていた。

「齋藤」

御都合主義もここまでできたらあっぱれである。そんな状況を確認したら脱力し四つん這い、いわゆるorz状態になっていた。それ

が気になったのかはやてが聞いてくる。

「ど、どないしたん？急にしゃがみ込んで？」

「いや、何と言うかアレだ。世間は狭いもんだな」

「どつという意味や？」

「右隣の家の表札見てみー」

そう言うとはやてが俺のうちの表札を見る。すると驚いたような、嬉しい様な、あきれたような顔になった。なかなか面白い顔である。

「あ、理由は分かったんやけどどないする？」

「あ、じゃあ今回は俺んちにするか。ちょうどはやてと同じ年の妹もいるし、紹介するよ」

「え！ほんまか！」

よほど嬉しかったのか満面の笑みで聞いてくる。

「おお、たぶんもう帰ってきてると思うからいると思うんだけど」

そう言って玄関を開けると、

パン！パン！パン！

そう乾いた音が鳴り、紙の紐等が飛んでくる。ポカンとしている俺とはやて。すると家族と一人の女の子が一齐に言ってきた。

『卒業おめでとう一樹（お兄ちゃん）』

と全員でパチパチと拍手までしている。ずるい、不意打ちすぎる。涙をこらえようとするが、家族以外の子がいるのだおいそれと泣く訳には・・・あれ？亜夜の隣に居るのは、だれ・・・え？あれ？何か見覚えのあるツインテールに茶色の髪おどおどしつつも拍手をしてきている。何でここにいんの？と首を傾げ母さんに聞く。

「か、母さん亜夜の隣にいるのはどちらさん？」

「あら、相手に名前を尋ねるときはまず自分からよ」

母さんにそんな事を言われた。確かにその通りだと納得しつつ目線を合わせ自己紹介する。

「こんにちは、斎藤一樹です。聖祥大付属小の5年だよ。君は？」

そう言つと、おずおず出てきて

「なのは、高町なのはです。同じクラスの亜夜ちゃんに誘われてお邪魔しました」

「そうなんだよ！なのちゃん今家に泊まってるんだ！」

『ね〜』

やっぱりそうでした。なぜかうちにいるホワイトデビル・ゲフンゲフン、まさか亜夜と同じクラスとは思わなかった。しかもかなり仲が良いようだし。

「ありがとう。なのちゃん」

「一樹、そちらは？」

「ああ、え」と

そう言い淀んでいるとはやてが自分から言いだした。

「八神はやていいいます。家に帰る途中車いすのタイヤが溝にハマってもうて、そこを助けてもろたんよ。うちがお礼したくて家に招待したら、お隣さんだったんよ」

「あら、そうなの？これからよろしくね」

「ああ、あと亜夜とは同じ年だからなのちゃんともそうなるのかな？二人ともよろしく」

『「こちらこそ」なの！』

そう言うのと、キャツキャ言いながら亜夜が車いすを押ししてリビングに向かう。俺はちよつと気になったので母さんに八神家の事を聞く。するとそんな事知らなかったと言い、何かあったらうちを頼るよ用に言うておくと言うてくれた。なのちゃんの方は、家の方で父さんが事故にあい入院中との事だそれでうちで面倒をみるらしい。はあ、帰ってきてそうそう怒涛の展開に若干ついて行けん。まあ色々手間が省けてラッキーではあるが。そこで母さんに確認をとる。

「母さん、俺ミッドで怪我を治す方法を勉強出来ただけど、なのちゃんのお父さん怪我なんだよね？たぶん治せるけどどうしよう？」

「あら、そうなの？どうしようかしら？でもそれ魔法なのよね？不味くないかしら？」

「いや、怪我を治すのは魔法じゃない別の方法だから大丈夫だと思っけど」

「うーん、でも不思議な力に変わりないのよね？」

「うーん、武術で言う「気功」とかそんな感じだから分かる人には分かるかも？」

「じゃあ、後で桃子さんに相談してみようかしら？」

「ん、了解」

とそんな話を話していると、リビングにある電話が鳴った。何となく嫌なタイミングだと思いつつ母さんが出る。断片的ではあるが会話が聞こえる相手も相当焦っているようだ。母さんがしきりに「落ち着いて」とか「本当に？」とか確認している。嫌な予感がますます広がる。最後に母さんが「分かりました」と言うと言話を切った。そしてなのちゃんに向かい言ってきた。心なしか母さんの顔色が悪い。

「なのはちゃん、落ち着いて聞いて。今美由紀さんから連絡があったわ」

「お姉ちゃんから？」

なのちゃんは不思議そうに首をかしげる。

「そう、それで病院から電話があったらしく、お父さんの容体が悪いそうなの」

「お、お父さんが？」

それを聞いたとたん急に顔色が悪くなる。

「そう、だから今から病院にいく」なのは「・・・え？」

母さんの言葉をさえぎり、震える声でなのはちゃんが言うてくる。

「な、なのは、良い子にしてたよ？お母さん言うてたの、良い子にしてたらお父さんもすぐに帰ってくるって！」

今にも泣きそうな声で、目には涙を浮かべ、そんなのウソだ！と言わんばかりに大きな声で言うてくる。

「なのは、良い子じゃなかった？良い子じゃなかったからお父さん悪くなっちゃたの？」

うつむき、震える声で言う。こらえていた涙が瞳からこぼれ床を濡らす。耐えきれず、嗚咽を上げ、それでも泣かないように、まるでそれが良い子であるために必要だという様に、耐える。ただただ良い子であろうとするために。見かねた亜夜が言葉をかける。

「そんなことない！なのちゃん、良い子にしてたもん！掃除したもん！お料理手伝ってくれたもん！他に「じゃあ！」」

「じゃあ！何でお父さん悪くなっちゃたの！」

「そ、それは・・・」

耐えきれなかったのだろう、その感情を亜夜にぶつけてしまい、亜夜も言葉に詰まる。なのちゃんは亜夜をまっすぐ見ている。その頬は涙に濡れ、眼は既に赤くなり、瞳からは涙が零れ落ちている。それを見た亜夜は、同じように瞳に涙をため今にも泣きだしそうだ。友達のために何もできないのがよほど悔しいのだろう。俺は、もうこれ以上黙ってられなかった。今泣いている子は、父親のため、家族のために良い子でいたのだ。それが辛くても、悲しくても、良い子であろうとした。そんな子に御褒美がないのはいささかおかしいだろう！そう思うと俺は母さんに視線を送る。母さんもそれに気付いたのか頷く。俺はなのちゃんの前に行き目線を合わせ言った。

「なのちゃんは良い子にしてたんだよね？」

さっきは否定していたが、なのちゃんは頷く。

「お掃除したり、お料理も手伝ってくれたんだよね？」

同じように頷く。

「じゃあ、俺から御褒美をあげようと思うんだけど、なのちゃんはなにが良い？」

なのちゃんは驚いたように顔を上げ此方を見る。

「お、お父さんを・・・」

「ん？なに？」

刺激しなように出来るだけ優しく聞く。

「お父さんを助けて!!」

「引き受けた!」

俺は力強くうなずき母さんにいう。

「母さん車出して!俺も一緒に行く!」

「任せなさい!」

母さんも快く承諾してくれた。目指すは海鳴大学病院ここからは遠くないはずだ。そして俺はみんなと共に病院に向かうのだった。

海鳴大学病院 高町士朗病室前

そこは慌ただしかった、医師と看護婦が出たり入ったりしており、
士郎さんの周りで医師が指示を出しているベット横の心電図からは
だんだん感覚が長くなっていく。はたから見てもかなり危険な状態
だ。そんな中になのちゃんと俺は入って行った。ベットの周りは、
家族、高町家の面々があり必死に叫んでいる。

「士郎さん!士郎さん!」

必死に夫の名前を呼ぶ桃子さん。

「父さん死ぬな!まだ教わってない事が沢山ある!」

父のなを必死に呼ぶ恭也さん。

「お父さん！お父さん！」

その横で必死に叫ぶ美由紀さん。三人が必死に呼びとめる。しかし無情にも心臓の音は弱くなっている。そこに、

「お母さん！お兄ちゃん！お姉ちゃん！」

なのちゃんが声をかける。

『なのは！』

三人が同時に振りかえり、桃子さんがなのちゃんを抱き締める。しかし事は一刻を争う。俺は紹介を待つのも無駄にできないと思いつつ、ベットの周りにいる医師に向かって言い放つ。

「じゃま！どいて！」

そう言いながら医師を押しつけベットの横に立つ。

「な、なんだ君は！」

押しのけられた医師はそう答えるが構っている余裕はない！俺は気を練り始め拳に集中させる！

「龍掌！！！！」

バキヤ！！！！

という音がして、顔を殴られた土郎さんはそのままベットから転げ落ちる。それを見た恭也さんが鬼の形相で迫ってくる。それを見て俺は「ああ、今度は俺がヤバいかも」と思いつつ恭也さんに殴られ意識を手放した。病室には心電図の心停止の音が鳴り響いていた。

第十一話（後書き）

高町家総出です。後はやても出しました。色々オリ設定があると思いますがご容赦を。もう少しで無印に入れると思います。

第十二話（前書き）

一日に3話更新。 以外に出来るもんですね W W W

第十二話

海鳴大学病院

うっん、と唸り意識が覚醒していく。ベットに横になったまま周りを確認する。どうやら病院の病室の様だ。そして今度こそ、あのセリフが言える！

「知らないて、あ、起きたんだ」Noooooー！ー！！」

ガツデム！邪魔が入った！頭を抱え唸る。それを見た亜夜が、

「ちょ、お兄ちゃん大丈夫！？」

と慌てて近づいてくる。いかん取り乱した。落ち着いて再度周りを把握する。病室それは間違いないようだ。病院特有の匂いが鼻につく。個室の様で急遽用意した感じだ。痛む左頬は恭也さんに殴られたところだろう。結構腫れている様だ。とそこまで思いだし慌てて亜夜に聞く。

「あ、亜夜！なのちゃんのお父さんどうなった！？」

「落ち着けお兄ちゃん」

そう言うとズビシとチョップしてくる。以外に強力で何気に痛かった。

「了解、落ち着いた」

「よろしい。じゃあお母さん呼んでくるね」

そう言うと母さん呼びに病室から出ていった。仕方ないのでゆっくり待つ事にする。しかし士郎さんの事を考えるとそわそわしてしまう。なのちゃんと約束したためちゃんと最後まで確認したかったのだが、恭也さんにより断念させられてしまった。まあそれも無理もない。危篤の父親を目の前でぶん殴られたのだ。怒らない方がおかしい。しかしホントにどうなったんだ？一人で「うくん」とうなっているとは個室のドアが開いた。そこに母さんに、亜夜、はやての他、高町家総出で訪ねてきた。あれ？何かやゝな感じの汗がでて背中を伝う。そんな俺をみて、察したのか桃子さんが声をかけてくれた。

「はじめまして、一樹君。なのはの母親の桃子です。こっちに立っているのが恭也で、こっちが美由紀ね」

桃子さんがそういうと恭也さんは少し頭を下げ、美由紀さんは手を振ってくる。

「あ、はじめまして斎藤一樹です。聖祥大付属小の5年です」

自己紹介をされたので一応返す。更に桃子さんが言ってくる。

「明子さんとなのはに聞いたわ、ありがとう」

そう言うと桃子さんが泣き出してしまった。ちょ、まだ肝心なところの説明がまだですよ！美由紀さんが後ろから背中をさすっているがその美由紀さんも目に涙を浮かべている。マジでホントにどっちなんよ？ちょっと冷や汗が止まらずだったらと流れる。そんな中恭也さんが言ってくる。

「さつきはすまなかつた。類は大丈夫か？」

「ええ、腫れてるみたいですけど」

「う、すまない。我を忘れてしまって」

「いや、俺が言うのもアレですけど、あの状況じゃ仕方ないんじゃない？
・・て！そんな事はどうでも良いんです！なのちゃんのお父さんは
どうなつたんですか！？」

いい加減答えてくれても良いじゃないですかー！と抗議のつもりで聞いてみる。ホントに状況を聞かないと落ち着かないのだ。あの後どうなつたのか。そんな俺を見て恭也さんと桃子さんが苦笑しつつ答えてくれた。

「ああ、父さんは大丈夫だ。君が殴つた後慌てて駆け寄つたら、「ムク」と起き上がつてな、「どしたんだ恭也」何て言ってきてな。あのときはそこにいた全員驚いていたよ」

「ええ、心電図の音がピーっていう風に変わつたから、もうダメだと思つたらコードが抜けただけだったのよね。」

それを聞いて俺はため息をつきベットに倒れこむ。良かったー！失敗はしてなかった。なのちゃんとの約束も守れたようだ。良かったー、マジで良かったー。そう思うと力が抜ける。そんな様子を心配してか恭也さんが聞いてきた。

「だ、大丈夫か？」

「大丈夫です。問題ないです。結果聞いたら力抜けちゃって。それで親父さん、え〜と士郎さんでしたっけ？その後はどうですか？」

「今は、精密検査をしているよ。その結果次第では明日にでも退院だそうだ。まったく今でも信じられないぞ？さっきまで危篤だった人間が自分の足で歩いて検査に向かうんだぞ？一体君は何をしたんだ？」

「え〜と、それは士郎さんにも言っておきたいので、みんなそろったらで良いですか？」

「それなら大丈夫だよ」

そう声が聞こえたのでそちらを見ると、士郎さんと、士郎さんに抱っこされたなのちゃんが部屋に入ってきた。

「やあ、君が一樹君かい？なのはの父の士郎だ。なのはから話しは聞いているよ。ありがとう助けてくれて。」

「一樹お兄ちゃん、お父さんを助けてくれてありがとうなの！」

そう二人から感謝され、照れる。面と向かって感謝されんの初めてかも。何かすっごくむず痒い！

「い、いえ、俺に出来る事をしただけです。」

「いや、話を聞けばかなり危険な状態だったそうじゃないか。それを助けてくれたんだ。君は命の恩人だ。」

そう言うと士郎さんは手を差し出してくる。俺はその手をおさずお

ずと握り返した。その手は暖かく、大きかった。

「父さん、検査終わったのか？結果はどうだった？」

「いや、それがな、元々の古傷だった所も綺麗さっぱり直ってて医者が驚いてたぞ？」

『そうなのか（んですか）？』

俺と恭也さんの声がかぶる。この報告は俺も驚いていた。てつきり古傷はそのままだと思っていたのだ。これなら恭也さんの傷も治せるかもしれないな。まあ、何はともあれ全員そろったことだし種明かしをしますか。そう思うと俺は説明し始めた。

「え〜とじゃあ、みんなそろったようなので説明します。まず最初に聞きたい事があるんですけど士郎さんは何か武術等をした経験はありますか？」

例によって分かっているが一応聞く。

「ああ、剣術をしている。御神流という流派で私と恭也、美由紀もその剣術をしている」

「じゃあ、「気」若しくは「気功」というものを使える、見た事あるとかありますか？」

「ああ、それもある。似たような技もある。」

「俺が士郎さんにしたのも「気」の一種です。技の名前は「龍掌」これは相手に「気」を送り込み相手の自己治癒能力を極限まで高め

治す技です。自己治癒を高めるので、無くなったもの、たとえば血液なんかは増えないと思うんですけど確認してないのでその辺は分かりません。古傷が直るのは士郎さんの件で初めて分かりました。」

みんな真剣に聞き入っている。

「後、病気は治せるかどうか分かりませんが、試した事がないので。ですのでちゃんと回復するまで、この場合医者のお墨付きかな？それが出るまでなるべく安静にしてください。俺が把握してるのはこのくらいですかね」

そう言い終わると、みんなも「ふう」とため息をつく。まあ普通だったら信じられんよなこんな話。「気」とか「気功」なんて詐欺まがいのもんだし。しかもぶん殴って傷が治るのだ。俺だつて眼を疑うだろう。しかし現実にはそれを見たら話は違ってくるだろう。しかも危篤だった人間が完全に治ったのだから。完全に否定するわけにもいかないだろう。と黙っている士郎さんが、

「そうか、しかし君はすごいな。その年でこんな技を修めているなんて。何かしているのかい？」

ん？気のせいかな士郎さんの瞳があやしい輝きをしつつある。

「ええ、中国拳法の「心意六合」をかじっています。さっきの技の「龍掌」は稽古中に偶然出来た産物なんですけどね」

まさか、漫画を読んで覚えましたが口が裂けても言えない。

「そうか、それなら家の道場に来てみないかい？一度手合わせを試してみたいな。」

はい？今何と言いやがりましたか？さつき安静にしてくれと言ったばかりですよ？

「ああ、それなら俺も賛成だ。君とは手合わせを試みたいな」

……この人たちはホントに戦闘民族だな。あんたらは某格闘家みたいに「俺より強いやつに会いに行く！」みたいなのですか！このままでは俺の身が危ない。何とか切り抜けなくては！そう思い高町家のヒエルキラアの頂点桃子さんに助けを求める。が、

「うーん、手合わせは兎も角、家に招待してお礼をしたいのよね」

と言い出す始末。そこに家の母さんが便乗して、今日やる予定だった卒業祝いの事を話して、「それは良いわね」とか「是非！」とか言っている。おー、神は死んだ！！そんな状況だからもう止める事は無理だった。不可能だった。なので俺は日にちが決まったらお伺いしますと言う事しかできなかった。チクショー！！！！そんな中はやてがぼつりと

「しかしあれやな。この中で一番の重傷者が一樹兄ちゃんとはなんか変な感じやな」

と苦笑いしつつ言ってきたので

「違うない」

俺はをそう答え笑うのだった。

第十二話（後書き）

ちょっと短いですけど土郎さん完治です。無印が近いんですけどいっ
は行ったらいいのやらWWW

第十三話（前書き）

心理的な描写って難しいです。

第十三話

高町なのは

その日なのはは公園のブランコに座っていた。特に誰と遊ぶ訳でもなく、ブランコに座り俯いていた。どうしてそうしているか、その原因は数日前、お父さんが事故で入院して、お母さんはお父さんに付きつきりなって、お兄ちゃんはどこか機嫌が悪いし、お姉ちゃんも落ち込んでいる。話しかけてもどこか上の空で、なのはをみていない。お母さんは朝起きるとご飯をつくって直ぐ何処かに行ってしまう。お兄ちゃんとお姉ちゃんもそうだ。朝起きてリビングに行っても誰もいない。テーブルの上にラップに包まれた朝食と、そのそばに置いてある書き置き。

「お母さんは、びょういんにいってきます。いい子にしててね。」

そう短く書いてあった。それを読んで良い子でいなくちゃいけない。そうすれば良いんだ。そうすればお母さんも、お兄ちゃんも、お姉ちゃんも前みたいに話してくれる。遊んでくれる。そう思ったその日も、その次の日も、その次の日も良い子でいたと思う。ひとりで寝ることも、食器の片付けも、お風呂のお掃除も全部一人でした。それでもみんな前みたいに話してくれない、遊んでくれない。だからなのははお母さんに聞いた。

「お父さんはいつ帰ってくるの？」

そう、お父さんが帰ってくればみんな前みたいに優しくなってくれると思ったから。そしたらお母さんは、

「なのはが良い子にしてたら直ぐに帰ってくるわ」

そう言ってくれた。だからもつといい子でいようと思って今まで以上に頑張った。でも、それでもお父さんは帰ってこなかった。その日も、その次の日も、その次の日も。そして、今はブランコに座ってどうすればもつと良い子でいられるか考えていた。そう思っていたら、声をかけられた。

「なのちゃん、どうしたの？元気がないよ？」

声をかけてきたのは同じクラスの斎藤亜夜ちゃんだった。いつも一緒に遊んでたけど、お父さんが入院してから遊んだ覚えがない。なのははとっさに答えた。

「そんな事ないの。大丈夫なの。」

笑顔でこたえようとしたけど上手く出来たか分からなかった。誰かに心配かけたら良い子じゃなくなっちゃう。そう思ったから。

「むく、そお？」

「そうなの」

ホントに？と言いたげに亜夜ちゃんは見てきたから、そうと答えた。駄目だ。絶対に心配かけちゃだめだ。そう言い聞かせ心配させないように答える。

「むく、分かった。あ、それとなのちゃん今度の土曜日暇？」

「え？暇だけど、何かあるの？」

「うん、今度お兄ちゃんが帰ってくるからお祝いしようって、お母さんが張り切って、準備とかなのちゃんと一緒にしたいなと思って」

「わかった。お母さんに聞いてみる」

「ホント！約束だよ！」

そう言つと亜夜ちゃんは走って公園を出て行ってしまった。その姿を見てなのはもお母さんに聞いてみなきゃと思つて家に帰った。家に帰つてその事を話すとお母さんが「良いわよ」と言つてくれた。その事が嬉しくて直ぐに亜夜ちゃんに電話した。すると電話に出たのは亜夜ちゃんのお母さんで、「お母さんに代わつてくれる？」と言われたのでお母さんと変わると、少し話して電話を切った。なのは「なんだつたの？」と聞くとお母さんが

「亜夜ちゃんのお母さんがお泊りしなかつて言つてくれたの。だから土曜日、日曜日でお願ひしたのよ。でもあんまり迷惑かけちゃだめよ。良い子でね？」

そうお母さんが言つてくれた。そうだ亜夜ちゃんの家でも良い子でいれば、きつとお父さんも帰つてくる。そう思つて亜夜ちゃんの家でも頑張つてお手伝いしようと思つた。そして、亜夜ちゃんの家でのお祝い。お部屋の掃除も手伝つて、飾り付けも、お料理も手伝つた。準備が出来てそこに亜夜ちゃんのお兄ちゃんが女の子と一緒に帰つてきた。話を聞くと途中で知り合つたみたいだった。私の事を見て驚いてたみたいだけどどこかで会つた事あつたかな？そう考えるけど会つた事はないと思う。すると亜夜ちゃんがはやてちゃんの車いすを押し来たので一緒にいて行く。今日は新しく友達も

出来た。お父さんが入院してずっと一人だったから友達という事が嬉しくて、楽しくて、きつと家族でこういう風にまたすごせる。そう思ったその時部屋に置いてあった電話が音を立てて鳴った。それを聞いた亜夜ちゃんがお母さん呼びに行つて亜夜ちゃんのお母さんが入つてきて受話器をとる。少しお話すると電話を切つてなのはに言つてきた。

「お父さんの容体が悪い」

そう聞いた時頭の中が真っ白になった。何で？どうして？なのは良い子にしたよ？お母さんに言われて良い子にしたよ？いっぱいお手伝いもした、一人で出来る事も全部した、それなのにどうして？そう思うともう駄目だった、こぼれた言葉は止まってくれない心配してくれた亜夜ちゃんにもあたっちゃった。もう駄目だ。なのは悪い子になっちゃった。みんなに心配かけて亜夜ちゃんを泣かしちゃった。これじゃあお父さんも帰つてこない。なのはが悪い子になっちゃったからお父さんの容体が悪くなっちゃったんだ。俯いて泣いているとなのはの前に亜夜ちゃんのお兄ちゃんが来て聞いてきた。

「なのちゃんは良い子にしてたんだよね？」

それはとても優しい声だった。その声に頷く。

「じゃあ俺から御褒美をあげようと思うんだけど、なのちゃんは何が良い？」

驚いて顔を上げる。そこにあつた顔はとても優しく、とても暖かく、なのはの事をみていた。その顔を見て言つた。言わずにはいられなかった。無理かもしれない、駄目と言われるかもしれない、そ

れでも助けてと、お父さんを助けて、そう言わずにはいられなかった。その事をお願いすると亜夜ちゃんのお兄ちゃんは一言、

「引き受けた！」

と力強く言ってくれた。

高町桃子

「旦那さんの容体が急変しました」

そう病院から連絡を受けた時はもう何も考えられなかった。そばにいた美由紀に声をかけ、直ぐに病院に向かい病室に駆け込んだ。そこでは担当医がそばについて周りの看護婦に指示を出していた。心電図から規則的に音が聞こえるが、その鼓動がだんだん弱くなっていくのが分かる。あの人が、いつも優しいあの人が私たちを置いて逝ってしまう。それが今現実になるうとしていた。私わよろよるとそばの近づき必死に声をかける。それでも反応は無く心臓の音は弱くなっていく。そこに遅れてきた恭也と美由紀が一緒になつて声をかける。

「お父さん」と

「父さん」と

それでも反応は無かった。そこに思いがけない声が響く。

「お母さん、お兄ちゃん、お姉ちゃん」

私と士郎さんの愛娘、なのはだった。どうして？と思うがなのは

が泣きながら私に向かってくる。私はなのはを抱きしめ、我慢していた涙が頬を伝うのを実感する。今までずっと土郎さんに付きつきりでなのはに構う余裕がなく、今日は知り合いの明子さんをお願いしてしまった。なのはは手がかからず良い子だった。でも今はつきりと理解した。それは私がそう言ったからだ。私がそうすれば土郎さんが早く帰ってくると言ったからだ。だからずっと一人で頑張ってたんだ。なのはの涙を見たときそう理解した。ああ、この子に辛い思いをさせてしまう。この年で父親を亡くすなんてそんなことさせない。そう思い再び声をかけようとしたときそれは起こった。

バキヤ!!!

という音と共に流れる無機質な心電図の音、その音を聞いた時全身の力が抜けた。その音はつけていた人の心臓が止まった音を示す、すなわち土郎さんの心臓が止まったという事だ。その事が信じられなくて信じたくなくて力の限り大きな声で叫んだ。

「土郎さん!!!」

「はい？」

・・・・・・そうすると返事が返ってきた。私は何が起こったのか理解できなかった。

高町恭也

美由紀から、父さんが危篤だと聞かされ、一緒に病院に向かつて、病室で見たものは必死に父さんの名前を呼ぶ母さん、その状況をみて俺は一種の覚悟をきめる。しかしそれでも最後まであきらめず一緒にあって声をかける。まだ父さんから教わる事が山の様にあるの

だ、死なせてたまるか！その思いを言葉にのせ何度も何度も声をかける。そうしているとなのはと一人の男の子が入ってくる。なのは母さんに向かって抱きついた、男の子は事もあるうか治療している医師を、

「じゃま！どいて！」

そう短く言い押しのける。そして次にとった動作は驚くべきものだった。深呼吸をしたかと思うと右手に凄まじい「気」を溜めこんだのだ。何をするつもりだと思いつめようとするが、医師や看護婦が邪魔で近寄れない。すると男の子が短く「龍掌！！！」と言うのと同時に父さんの顔を殴り吹き飛ばした！ただでさえ危ない状況の中、あれほどの攻撃を受けたらその先に待っているのは完全な「死」だ。それを理解した瞬間俺の中で怒りが湧き上がり、子供だろうが関係なく、容赦なく、手加減抜きでその顔をぶん殴った。当然の様に男の子は吹き飛び壁に当たり動かなくなる。そんな中母さんの叫びが聞こえた後、さっきまで危篤だった父さんの声が聞こえた。一瞬耳を疑ったが、ベットから落ちた父さんを見ると上半身を起こしていた。少し周りをみて俺に気付いた父さんは、

「どうしたんだ恭也？」

なんて言ってきたのだった。

高町美由紀

私はその光景を信じられなかった。危篤だったはずのお父さんが、男に子に殴られてベットから落ちたと思ったら、お母さんの叫びに反応して、なおかつ恭也に対して「どうしたんだ？」なんて言ってきた。混乱してる中なのはが、

「お父さん!!」

と言つて抱きついた。その顔は涙と鼻水でグシャグシャになっていたけどとても素敵な笑顔だった。恭也は訳が分からないという顔だがお父さんに近づき話している。お母さんは未だに何が起つたか理解できないようだった。まあ、それは私も一緒だけど。とりあえず私は、さつき恭也に殴られた男の子を介抱することにした。殴られて、壁に叩きつけられピクリともしない。よくよく考えるとかなり危ないんじゃないだろうかと思つて、容体を確認する。脈はある、呼吸もしてる、首も折れた様子は無い、頬は結構腫れているけど、命に別条は無さそうなので安心した。とりあえず抱きかかえ、お父さんのそばに近寄る。

「お父さん、大丈夫なの？」

「ああ、身体は何ともない。」

よくよく見てみると、あれだけの傷が綺麗さっぱり消えていた。流石に傷痕は残っているみたいだけど。そこでお父さんは立ち上がりのなほを抱つこしたままお母さんに近寄つて行く。

「桃子さん、心配かけてしまったね」

「……」

「これからはもう危ない仕事はしないと誓つよ」

「……はい」

「遅くなつてしまつたけど、ただいま」

「・・・お帰りなさい、土郎さん！」

そう言つと三人で抱き合い恥も外聞もなく声をあげて泣いた。それを黙つてみている私と恭也。そして恭也は私に抱っこされている男の子を見ると、

「この子はいつたい何者だ？」

と聞いてくるがそんなのは私だつて知りたい。でも一つだけはつきりしているのは、私達家族を救つてくれたかけがえのない恩人だという事だ。

第十三話（後書き）

桃子さんは最初から最後まで主人公に気づきませんでしたWWW
ちなみに美由紀さんにお姫様だっこされてますWWW

第十四話

プレシア・テストロッサ

「お母さん！」

私を呼ぶ声が聞こえる。それはとても優しく、とても懐かしく、私が一番聞きたかった声。私の最愛の娘アリシア。長く伸びた金髪を左右に揺らし元気よく私に向かって走ってくる。その光景は私が夢見る光景。今では見る事が叶わない光景。しかしアリシアは私の元に着くと同時に抱きついてきた。その腕にしっかりと収まる温もり、しつかりと感じる重さ。それは間違いなく私のアリシアだ。アリシアは私に抱かれながら「えへへ」と微笑んでいる。しばらくそうしているとアリシアが私に言ってきた。

「お母さん！今日ね、リニスとお部屋で遊んでたの！」

そう無邪気に言ってくる。私が家に帰るとアリシアはその日一日何があつたかを教えてくれる。拾ってきたリニスと遊んだ。部屋でお絵かきをした。庭で遊んだ。そういう事を全部話してくれる。その時の笑顔が私は一番好きだった。その笑顔を見るだけで私は幸せだった。そして、その日もアリシアを家に残し仕事に出て行った。そしてそれは起こった。大型魔力駆動炉「ヒュードラ」の暴走。当時勤めていたアレクトロ社でそのプロジェクトの設計主任をしていたが、それは一からの設計ではなく他者からの引き継ぎだった。そして引き継がれた内容を見て私は愕然とした。絶対的に足りない開発時間、何度も複数の人間により変更されたシステム、前任者の杜撰な資料管理、そして徹底して省略された安全管理。その中でも私たちのチームは悪戦苦闘しつつも頑張ってきた。空気中の酸素を消

費し魔力を生み出すという駆動炉に疑問を覚えつつ。しかしそれは本部から来た人間により全てを無駄にされた。そしてその無茶な状況での実験により駆動炉は暴走。

ビーー！ビーー！ビーー！

鳴りやまない警報、奔走するスタッフ、何をしても止まらない駆動炉、もはやどうしようもないところまで来てしまった。そしてそれはあっけなく起こった。駆動炉は私たちの予想をはるかに上回る破壊力を持つて全てをのみこんだ。そして私は最愛の娘を失った。家に帰った私が見たのは、眠るように倒れているアリシアだった。外傷はなく静かに、本当に静かに寝ているようだった。

そこで私は目が覚めた。もう何度目になるだろう？この夢を見るのは？ベットから起き上がると急に胸が苦しくなった。

「ゴホッ、ゴホッ！」

手で口を押さえたが抑えた隙間からポタ、ポタ、と赤い液体が零れ落ちる。血だ。時間がない。私の命の残りはわずかだ。それまでに何としても娘を、アリシアを生き返らせて見せる。それが私の生きる意味なのだから。

リニス

私は、行くあてもなく道を歩いてきた。その姿は猫になっており、残りの魔力ももう残り少ない。一步一步、歩くごとにどんどん身体が重くなっていくように感じる。辛い。このまま歩みを止めて静かに眠ってしまいたい。でもなぜ私は歩いているのだろうか？今まで、フェイトに魔法を教え、新しいカデバイスを造り、その使い方も教

え終わった。主であるプレシアの契約を果たし、その足でどこにも知らない世界へ移動した。全てを知り、私ではどうやってもプレシアを止められないと分かった時、悩み、悔み、絶望した。プレシアを、フェイトを助けられない事が一番つらかった。事故によりアリシアを失い、アリシアを生き返らせる為の狂気じみた実験、自分の身体を蝕む病魔。限られた残り時間。もうプレシアは止まらない。止まらない。それこそ奇跡が起きない限りは。

『だれか・・・』

私は呟く、だれにも聞こえないだろう「念話」で、

『だれでも良い、誰か・・・』

そして願う。それは誰よりも、大事な、大切な主人を、大切な教え子を思い、

『誰か二人を、あの二人を助けてあげて！』

力の限り叫びをあげる。どうせだれにも聞こえないと分かっているてもそうせずにはいらなかった。案の定誰かが私の前に現れる様なそんな都合の良い事が起こる訳もなく、私の魔力は限界だった。もう良い、もう疲れた。そう思うともう駄目だった。横たわった身体はもう動く事も出来ず、浅い呼吸を繰り返すだけだった。

（ああ、もう疲れた・・・）

そう思い、瞼を閉じ、自分が消えるその時を静かに待った。とそんな時話し声が聞こえた。

「あ、一樹兄ちゃん！ぬこ！ぬこがゴロ寝しとる！」

「お、ホントだ。しかし俺としては御免寝、が見たかったのだが」

「流石にそれは無理やる」

「ですよ〜」

と、明らかに勘違いしている会話をしていた。しかしだんだんとその二人、車椅子の女の子とそれを押す男の子は近づいて来て、

「ん？一樹兄ちゃん、なんやこのぬこ弱ってへんか？」

「あ、ホントだ。では、回復してやろう！」

「ルビカンテ乙www」

そんな事を言ってきた。するとその直後、身体に暖かいものが流れ始めた。それは魔力だった。枯渇していた魔力がある程度回復し、起き上がる事が出来そうだった。

「お、起き上がったやん！一樹兄ちゃんホンマに回復出来るんやな
！」

「はやて、結構前だけど、士朗さん治したの知ってるはずじゃん！」

「いや〜、あんときは治った後やったから、いまいち信じられへん
かったんよ」

「ガッテム、なんて世の中だ！」

そんな会話を聞いていると、

『大丈夫？』

と念話が聞こえてきた。吃驚して男の子を見ると、

『さっき助けてと聞こえたもので。このイベントはなのちゃんだけかと思っただけど』

そんな変な事を言ってきた。

『あ、ゴメン、後半は忘れて。まずは自己紹介しましょう。斎藤一樹です。魔法は使えるけど一般人です』

『回復していただいてありがとうございます。私はリニスといいます』

そう自己紹介すると今度はカズキが驚いた顔をした。どうしたんだろうかと思っていると女の子、確かはやてと呼ばれた子が、

「なあ、なあ、一樹兄ちゃん！この子家で飼えへんやろか？」

「良いのかホイホイそんなこと言っちゃまって。俺は野良だろつが飼い猫だろつが飼っちゃまう男なんだぜ？」

「いや、飼い猫はあかんやろ」

「ですよね〜」

「まあ、それは置いて、どうやるか？せめて元気になるまで家に起きたいんやけど？」

「うーん、俺としては後日恩返しに来るといっ方が良い気がするのだが？」

「それはそれで面白そうやけど」

「ちなみに机の引き出しの中からだぞ？」

「青狸の方やつたんかい！」

「はやて、あれでも一応猫型だ。まあそれは良いとして、確かに元気になるまで家に置くのはまあ、良いんじゃないか？」

「ホンマか！よっしゃ！じゃあ名前！名前決めんと！どんなんがええかな？」

「んー、リニスなんてどうだ？」

「うーん、リニスカー、うん！ええ名前や！」

「そうか、気に入ってもらって何よりだ」

「一樹兄ちゃんたまにはええ仕事するんやな！」

「おう、たまにしか仕事しないからな」

「いや、そこは否定するとこやる」

なんだろう。なぜか私そっちのけでどんどん話が進んでいってしまった。

『いや、ごめんごめん。勝手に決めちゃって。まあ、こっちとしてはそれでも良いんだけどそっちはどうする？俺としても少し聞きたい事があるから来てもらえると助かるんだけど』

私は少し考え、

『分かりました。あなた方についていきます』

そう答えた。すると一樹がニカッと笑い、

『こちらこそよろしくなりニス』

そう言ってきたくれた。この後私は知る事になる。この出会いが奇跡の始まりだった事を。

第十四話（後書き）

ちよつと短いですが勘弁を。はやてがネタキャラになりそうな気がしてきたWWW

第十五話

八神はやて

新しい家族が出来たんや！この間、一樹兄ちゃんと散歩しとつたら、弱つたぬこがおつて、それを一樹兄ちゃんが治して、家に連れて帰つたんやけど、そしたらぬこが人型に変身したんよ！そんなとき一樹兄ちゃんが頭抑えてたんやけど、こうなる事を知つとつたみたいや。後できかなああかな。いや、あれを見たときはホンマびつくりや。案外連れて帰らんでも恩返しに来たんやないか？まあ、机の引き出や無かつたみたいやけどwwwでな、一樹兄ちゃんと一緒に話を聞いとるとリニス、拾ってきたぬこの名前なんやけど、リニスは、使い魔さんで、御主人がおつて、訳あつてその主人と離れる事になってもうて弱っている所を一樹兄ちゃんに助けられたと言ふ事らしいんや。使い魔とかついさっきまでは小説や、映画、フィクションの世界やと思つとつたけど、それが目の前でノンフィクションやと分かつてめっちゃテンションあがつたわ！それで、魔法もあるんか聞いてみたら在るんやつて！見せてもらおうと頼んだんやけど、今魔力を使うとリニスが消えてしまふみたいなんよ、せやから一樹兄ちゃんが後で見せてやるって約束してくれたんよ。今から楽しみや！ついでにうちも魔法が使えるか聞いてみたんやけど、リニカーコアっていうんがないから無理みたいなんよ。憧れやつたかは御主人の元に戻りたいらしいんよ。それなんで、一樹兄ちゃんが「仮契約」して、通常生活する分には問題無くなって、その恩返しをしたいってリニスが言ってきたんや。そしたら一樹兄ちゃんが、「はやての家で家政婦、まあお手伝いさんだな。それを頼む」って言うてくれたんよ！リニスは一樹兄ちゃんのお手伝いで無くて良いのか聞いてたんやけど、家が隣同士やから問題ないって言ったら納

得してくれたんよ。そんな事があってリニスは今家族になったんや！今まで一人で寂しかったんやけど、一樹兄ちゃんと知り合ってからガラリと生活が変わったんや、一人でいる事は無くなって、友達も出来て、ご飯もみんなまで食べて、亜夜ちゃんと一緒に寝たりして、ホンマ楽しい事ばかりや。あの時一樹兄ちゃんと会えた事に感謝や。そして今日はまた友達が増える予定や！リニスを紹介したいって、なのはちゃんと、亜夜ちゃんに言うたら、「じゃあ、私も友達連れてきても良い？」て言うてくれたんよ。勿論二つ返事でOKや。ホンマ今から楽しみや。そろそろ来るはずなんやけど・・・

ピンポン

お、来たみたいやな。チャイムがなったからリニスと一緒に玄関に向かうと、そのにはなのはちゃんと亜夜ちゃんの他に、金髪を腰の辺まで伸ばした気の強そうな女の子と、紫髪でこっちも腰まで伸ばしてヘアバンドをして、おっとりしてる感じの女の子がおった。

『お邪魔します』

「待つとたで！なのはちゃん、亜夜ちゃん。えくとそっちの二人が友達やな？」

「ええ、そうよ。私はアリサ・バニングス。アリサで良いわ」

「はじめまして。月村すずかです」

「うん、はじめまして。うちは八神はやて、こっちにいるのがリニスや。よろしゅうな、アリサちゃん、すずかちゃん」

「二人から色々聞いてるわ。こちらこそよろしくね」

「何をどう聞いているのか非常に気になるところやけど今はええわ」

『じゃははは(汗)』

二人して乾いた笑いをしとる。これはホンマに後で聞いとかなああかな。

「みなさん、お茶の準備が出来てますよ。立ち話もなんですから此方に」

そう言うてリニスが案内する。ホンマ出来る子や、と感心する。今日も一日良い日になりそうや。そんな事を思いながらみんなで過ごせる時間をめいっばい楽しむことにした。

斎藤 一樹

昼時、高町家の道場から帰ってくる。士朗さんを助けて以来、週に2、3のペースで道場に通っている。初めこそ恭也さんに首を掴まれ引きずられる様に通っていたが、最近では自分から進んで行くようになってきた。道場に通い始めてからというものの身体能力や戦闘経験値が鰻の滝登り状態なんですよ。技はほとんどん身体になじむし、新しい技も覚えるして俺としては得るモノが多いのですよ。でも未だに士朗さんはおるか、恭也さんにも勝てない。魔力を使えば分かんないけど、身体能力プラス気功でも勝てないって、思わず「高町家の連中は化物か！」って言いそうになったよwww。まあ、士朗さん曰く「身体能力はかなりの物だ、だけど戦い方がなつてない」とのことだった。まあ、圧倒的に経験値がたらんのですよ。そんなこともあり、「高町道場」には通っている。最近やっと恭也さんに一撃入ただけけど、その怪我を治すために「龍掌」使ったんだ

けどそれが不味かった。いや、まあ結果的には良かったのかな？まあ分かるとは思っただけど、

恭也さんの古傷までしっかり完治した「動きが格段に良くなる」俺フルボッコ状態

恭也さんも流石にやり過ぎたと言って謝ってきた。どうやら怪我が治ってテンションが上がってしまったようだった。ちなみに「剣術」も教わったりする。リリカルな世界にくる前は「剣道」もしていたので「ラーニング」の効果もあつたからだ。しかし格闘より習得は遅く、まだまだ三流です。剣道の段で言うと初段〜二段ぐらいかな？まだまだ精進が必要と痛感する日々だけど充実している。そんな感じで無印開始までもう間もなくだ。それまでに出来るだけ強くなっておきたい。そうすればテスタロッサー一家を助ける事も出来るかもしれないし。此方にはリニスという協力者がいるのだ。助けた時はマジで驚いたけどこれで何とかかなると思う。今リニスははやての面倒を見てもらっている。魔法の事はいきなりばれたがそれ以外の人には秘密と言う事ですってあるので大丈夫だろう。それで決戦前にプレシアさんと話して説得できれば良いなと思う。それまではあのちゃんとフェイトちゃんの戦闘をどう面白可笑しくするかが当面の目標である。クロノにも連絡は何時でも出来るから問題ないし、そんな事を考えていると、

『どうしましたか クソ野郎 何か悩み事ですか？』

と何時も道理のスサノオが聞いてくる。しかしそんな問いかけにも慣れた（諦めたとも言っ）もので最初の時ほどイラつかない。

「ん？いや、特に何も。強いて言うなら桃子さんに弟子入りする件をどうするかだな？」

そうなのだ。土朗さんの快気祝いをした際食べたケーキがめっちゃくちや美味かったのだ。こっちに来る前に趣味でお菓子作りをしていたので作り方が非常に気になるのだった。ちなみに他の料理は出来るが味は普通。どっかの弓兵見たいに何でも完璧に出来たら良いのと思ってしまう。もし管理局員になると弟子入りするの、どちらか一方を選べと言われたら相当悩むと思う。下手すると弟子入りしてしまうかもしれん。その位美味しかったのだ。今も片手には翠屋のケーキが入っている箱を持っている。桃子さんがなのはちやんに渡しそびれたらしく、はやての家にいるので持って言うてくれと頼まれてしまった。今頃ははやての家で遊んでいることだろう。まあ、そこで俺も茶でも入れつついただこうと考えていた。そしたら

『管理局員にならないのですか？』

と不思議そうに聞いてきた。

「いや、たぶんなと思うぞ。たぶん。流石に店を持つまで腕を上げたい理由は無いし。まあ極論だよ」

『そうですか』

「流石にお前を造って貰ったんだ。何も返さずにいるのは不味いだろ」

『それもそうですね』

そんな会話をしているうちにはやての家に着いた。チャイムを鳴らすとリニスが出てきた。

「あ、カズキさん。どうしました？」

「桃子さんからの頼まれもの。なのちゃんに渡しそびれたんだった。」

そう言ってケーキの箱を見せる。

「そうですか、では上がって一緒に食べませんか？ちよつどなのはちゃんと亜夜ちゃんが友達を連れてきてみんなで遊んでるんですよ」

む？友達とな？まさか原作キャラか？まあそれは置いて、

「良いの？みんなで遊んでんなら邪魔じゃないか？」

「いえ、そんな事はありませんよ。はやてちゃんも喜びます」

嬉しい事言ってくれるじゃないのwwwそれならお言葉に甘えるとしますか。

「ん、分かった一緒に頂くとしますか」

そう言うてはやての家に上がっていく。居間に行くとき亜夜達がみんなゲームをしていた。しているゲームはみんなで出来るパーティーゲームの様だ。時折「イヤツフウ」とか「マンマミーヤ」とか聞こえてくる。某配管工が頑張っているようだ。そんな中、亜夜が俺に気づき声をかける。

「あ、お兄ちゃんどしたの？」

「よ、桃子さんからの差し入れ持ってきた」

『ホンマ！（ホント！）』

声が重なる。声をあげたのははやてに亜夜。この二人も桃子さんのケーキにはめっぽう弱い。それを見ていたなのちゃんが、

「にやははは／＼／」

と嬉しそうに照れている。まあ、母親が作ったものが評判なので嬉しいのだろう。それはさて置き、俺は知っているけど自己紹介しないとな。

「はじめまして、斎藤一樹だ。その亜夜の兄をやってるよ」

そう言ってアリサちゃんとすずかちゃんに向かって自己紹介する。

「あ、はじめましてアリサ・バニングスよ。それとアリサで良いわ」

「はじめまして。月村すずかです。」

二人とも自己紹介を返してくれた。

「ん？月村？恭也さんの恋人の忍さんも確かそんな名字だったけど、もしかして妹さん？」

「お姉ちゃんを知ってるんですか？」

「うん、俺、恭也さんと土朗さんに師事してもらってるから、恭也さんに紹介された」

「あ、そうですね」

「うん、妹に友達が出来たって嬉しそうに言ってたよ。」

「そうですね／＼／」

おお、顔が真っ赤になるとる。嬉し恥ずかしといったところか。

「じゃあ、自己紹介も終わったしケーキでも食べるか！」

『さんせー』

そう言うと、持っていた箱をテーブルに置き開ける。1、2、3・

「なん・・・だと・・・」

箱の中には綺麗に並んだ美味しそうなケーキが6個。今いるのは、俺、亜夜、はやて、なのちゃん、アリサ、すずか、リニスの七人。ひとつ足らんだと！！固まってしまった俺を見て亜夜が何事かと思っ箱の中を見ると納得したようだ。

「お兄ちゃん、まさかお兄ちゃんが食べるなんてことは無いよね？」

おふう、先手を打たれた。しかし俺だってそんな事をするほど大人げない訳ではない。

「大丈夫だ。俺もそこまではしないよ」

「その割には、俺の様に涙を流しておるんは何でや？」

・・・どうも頭で分かっているけど、身体は無理だったらしい。

「あの、それでしたら私は結構ですよ？」

リニスが気を使ってかそんな事を言ってくれた。リニスが天使に見えた気がした。が、世界は俺が嫌いの様だ。

「駄目だよ！桃子さんのケーキを食べないなんて！お兄ちゃんの仕事はほっといて良いから！」

・・・妹よ、お兄ちゃんはずごく悲しいぞ！そんな事をしていくうちに、なのちゃんがお皿を準備し終えており、ケーキを移し替えていた。何やら俺が食べない方向で着実に準備が整いつつある。まあ仕方ないけどね！！

「リニス、俺は良いからみんなで食べて。そもそも今日は始めから俺はいない予定なんだから」

「ですけど、」

「いいの、いいのリニスはまだ食べた事無いんだから食べとけて」
そう言って、ケーキの乗ったお皿を差し出す。その皿をリニスが受け取るが、

「て、手が離れんだと！」

俺の手は皿をがっちりつかんだまま離れない。

「どんだけ食べたいのよ！お兄ちゃんは！」

「ぶべらー！」

亜夜からの容赦のない一撃が頬を打ち抜く。その反動で手が離れゴロゴロと転がり壁にぶつかり止まる。

「G・J！」

俺は親指をグツと立て力尽きる。そのまま身体を休めるように眠りについた。

次に眼を覚ましたのは畳の部屋に敷かれている布団の上だった。どうやらリニスが進んでくれたらしい。起き上がり廊下に出ると外の景色が眼に入る。どうやら夕方の様だ。ずいぶんと寝てしまったらしい。自分で思っているよりも疲れていた見たいだ。そう思っていると玄関から声が聞こえる。

「またね、はやてちゃん今度一緒に図書館に行こうね」

「うん、今度一緒にいこうな！」

「亜夜、また遊びましょ！今度は負けないわよ！」

「にやはは、アリサちゃんは負けず嫌いな」

「ほほほ、返り討ちにしてあげるわ！」

亜夜よ、なんか悪役みたいだぞ。さて俺も挨拶しておきますか。

「おう、帰るのか。気おつけてな」

「あ、お兄ちゃん起きたんだ」

「ああ、ついさっき」

「あ、一樹さんお邪魔しました」

「おう、まあ俺の家じゃないけどなwww忍さんにあんまりイチヤイチャすんなって言っというて」

「ぜ、善処します／＼／」

「ちょっとあんた！すずかを困らせんじやないわよ！」

「はっはー、元気が良いねアリサちゃん、何か良い事でもあったのかい？」

「そんな訳あるか！」

「まあまあ」

見かねたなのちゃんが仲裁に入る。そんな事していると、車の止まる音がした。どうやら迎えが来たみたいだ。

「あ、アリサちゃん来たみたいだよ」

「うー、覚えてなさい！」

「え、何を？」

「キー！」

そんな事してアリサで遊んでいると、

「やめんか！」

「ふおぐ！」

亜夜の見事なボディーブローが決まり、その場につづくまる。

「ごめんねアリサ。後で言い聞かせておくから」

「ありがと、亜夜。少し気がすんだわ。じゃあね亜夜、はやて、なのは。また今度遊びましょ」

「またね」

そう言うつと二人は外に出て車に乗り込んだ。リムジン間近で見るのは初めてだ。車の窓から手を振ってきたのでみんなで手を振って見送っていた。車が遠ざかり通りにさしかかったその時、

ギヤギヤギヤギヤ！ドガン！

猛スピードで横から黒い乗用車がリムジンに突っ込み走行できなくなる。すると乗用車から数人が降りてきてリムジンから暴れるアリサと動かないはずかを連れ出した。

「アリサちゃん！すずかちゃん！」

なのちゃんが大声で叫ぶ。ち！しまった。何を呆けていた。腑抜けにも程がある。すると降りてきた内の一人が此方に何かを向けてきた。ヤバ！慌てて亜夜達三人を家に向かって突き飛ばす。

パン！

乾いた音が響き身体に衝撃を感じ、俺は地面に倒れた。

第十五話（後書き）

更新少し遅くなりました。ほのぼのので終わらせようと思ってたんだけど気が付いたらこんなになっちゃいましたWWW

第十六話

齋藤亜夜

今日は楽しい一日で終わるはずだった。なのちゃんはやて、アリサにせずちゃんと遊んで、桃子さんのケーキも食べた。初めて食べたリニスの表情はとても良い笑顔だった。アリサにせずちゃんも食べた時はビックリしていた位だ。食べた後もゲームして、最近気になった事とか話して、もの凄く楽しくてあつという間に時間が過ぎて行つた。それでアリサとせずちゃんが帰る時間になったから迎えを呼んで玄関で話しているとお兄ちゃんが起きてきた。相変わらずの言動でアリサをからかうもんだからお灸を据えてやった。少しは反省しろ！で、迎えの車、リムジンなんか初めて見たわ。リムジンに乗り込んで手を振ってきている二人に私たちは手を振り続けた。そして見てしまった。二人の乗ったリムジンに衝突する車、車から降りてくる人、リムジンに近づきアリサとせずちゃんを引きずり出し連れていこうとしている。私は何が起こっているのか理解できなかった。理解したくなかったのかもしれない。目の前で起きている事を現実と認めたくなかったのかもしれない。私が呆然としていると横から声が聞こえた。

「アリサちゃん！すずかちゃん！」

とっさだったんだろう。でも何もできない私より全然良いのかもしれない。でも後から考えるとこの時声を出すべきでは無かったのかも知れない。その声で一人が此方に気付いた。腕をまっすぐにしてこっちにつきだした構えだ。手には黒い何かを持っている。銃だ。そう直感した。それでもなお私の身体は動いてくれない。構えている人がゆっくり引き金を引くのが分かる。普段なら絶対にそんな事

分かる訳がないのに、なぜか分かってしまう。それはまるで走馬灯の様だった。「ああ、私死んじゃうのかな？」そんな事を考えていた。すると横から押された。私となのちゃんとはやてその三人がリニスのいる家の玄関前に転がった。その直後

パン！

と乾いた音が響き、「ドサツ」と何かが倒れる音がした。ちょっとぶつけたお尻の痛みを我慢しつつ音の方を見る。そこにはお兄ちゃんが倒れてた。そのあと人が怒鳴りあう声が聞こえ、車の急発進の音が聞こえた。私は倒れて動かないお兄ちゃんを見て小さくつぶやいた。

「お兄ちゃん？」

呼ぶが返事がない。どんどん不安になっていく、近づいて身体を揺するうとして身体に触った時、

ベチャ

そんな音がした。恐る恐る手を見ると手は真っ赤に濡れていた。

「お兄ちゃん！お兄ちゃん！！」

私は悲鳴の様にお兄ちゃんを呼んだ。何度も、何度も、何度も！そこにリニスとなのちゃんが駆け寄る。私は思わず二人に抱きついてしまった。

「リニス、なのちゃん！お兄ちゃんが！」

なのちゃんは顔が真っ青だ、リニスは私をなだめようと必死になっている。

「落ち着いてください、亜夜。まずカズキさんの手当てが先です！」

そうやって私を引き離そうとするが私がなかなか離れない。頭では分かっているのだ。お兄ちゃんは手当てが必要だ。今すぐに。でも身体が言う事を聞かない。離れようとしてるのに離れられない。まるで自分の身体じゃないみたいだ。するとなのちゃんが、

「亜夜ちゃん、ごめんなさい！」

パチン！

乾いた音と共に、頬に痛みが走る。何が起こったのか分からずなのちゃんを見て呆然としている。

「落ち着いた？」

そう聞いてきた。私はようやく落ち着いた。よく見るとなのちゃんは顔は真っ青で、肩は震えて、眼には涙を浮かべている。そうだ私だけじゃ無いんだ。

「うん、なのちゃんゴメン」

私は謝り、お兄ちゃんを見る。既にリニスが横にいて手当てをしていた。するとお兄ちゃんが起き上がった。

いつてえええー！痛みと受けた衝撃とでしばらく動けなかった。しかし上手くいったみたいだった。俺の身体には胸に弾の当たった痕があり、そこから左周りに何かかすべるようにえぐられていた。血も出ていて着ている服が赤く染まり始めていた。

「弾丸すべり」

それが今の技、覚えてはいたけど使う機会がまったく無かった（当たり前）ので出来るかどうか分からなかったけど上手くいったようだ。撃たれる直前に全身を気功と魔力で強化、弾丸が当たった瞬間、身体を回転させ弾丸を滑らせる。覚えておいてほんとに良かった。痛みも引いてきたので起き上がるが、引いたと思った痛みが身体に走り上手くないかない。

「大丈夫ですか！ クソ野郎」

心配したのか声をかけてきた。どこか焦っているようにも感じるが、

「お前、こんなときでもその呼び方かよ、まあ良いや。連中をとらえてるか？」

「無論です。初めの車はその場に放置、もう一台の車で逃走します」

「よし、お前はそのままその車両を追跡してくれ」

「了解しました」

と会話をしているとリニスが隣に来た。

「カズキさん！大丈夫ですか！」

「うん、なんとか大丈夫」

「今手当てをします！」

そう言つて魔力を使おうとするが俺はそれを止める。

「駄目だ、魔力は使わないで。消毒液と包帯で応急処置して」

「ですが！」

「これから確実に戦闘になる。魔力を使うから供給できるかどうか分からなくなる。そうなたらリニスが消えちまう」

リニスがそれを聞き、唇を噛み、拳を強く握る。

「あと、三人をお願い。結構ショック受けてると思うから」

『一樹兄ちゃん（一樹お兄ちゃん）（お兄ちゃん）』

リニスに言っているとその三人が声を上げてきた。はやてはどうやら車椅子から落ちてしまったらしい。匍匐前進でこっちに近付いてくる。俺は痛みをこらえ立ち上がり三人の方に行く。まずははやてを車椅子に乗せる。

「一樹兄ちゃん！大丈夫なん！はよ医者に見せんと！」

「そ、そうなの！病院に行くの！」

「おに〜ちゃん!!!」

はやてになのちゃんは病院だと言い、亜夜は泣きながら抱きついてきた。亜夜、抱きついたら血で汚れちまう。

「大丈夫だよ。痛いけど何とか防げたから、それよりもなのちゃん、携帯で家に連絡して俺に代わって」

「わ、分かったなの」

そう言うとなのちゃんは携帯で自宅にかけ俺に渡してきた。

プルルルル、プルルルル、プルルル、ガチャ

『はい高町です。』

ちょうど良い、出たのは土郎さんだった。

「土郎さん、一樹です。」

『お、どうしたんだ一樹君?』

「緊急事態です。なのちゃんの友達のアリサちゃんと、すずかちゃんが誘拐されました」

『・・・それで?』

声のトーンが変わる。

「相手は銃で武装しています。人数は確認できただけで3人、おそ

らくもつというと思います」

『分かった、こっちも準備しておく。今どこにいるんだい？』

「今は自宅前です。なのちゃんと亜夜、はやては無事です。こっちにも念のため美由紀さんを連れてきて下さい。」

『分かった、一樹君も待っていてくれ』

「いえ、俺はこれから追跡に向かいます。じゃあ」

『何だって？おい一樹k』

ピッ！

そうやって電話を切つてなのちゃんに渡す。その際に土郎さんの電話番号を自分の携帯に入れておく。

「ありがとつなのちゃん」

「う、うん」

「それと、亜夜お兄ちゃんそろそろ行かないといけないから離れてくれるか？」

そう亜夜に言うが首を振って離れてくれない。参ったな。するとリナスが

「亜夜ちゃん、そのままだとカズキさんの手当てができません。ちよつとの間離れてもらえますか？」

そう優しく諭すように語りかける。すると亜夜もしぶしぶ離れてくれた。そのうちにリニスも手当てを始める。手当て自体は五分程度で終わる。終わると同時に亜夜がまたくっついてきた。ぬあ、どうしよう？

「あー、亜夜、お兄ちゃんそろそろ行かないといけないんだけど？」
ふるふると首を振る。

「でも、アリサとすずかちゃんを助けないと」
そう言つとピクリと反応する。

「直ぐに行かないと間に合わなくなっちゃうかもしれない。亜夜はそれで良いの？アリサとすずかちゃんにあえなくなっても良いの？」

「やだ」

短くそう答える。

「じゃあ、離れてくれるか？」

「ちゃんと帰ってくる？」

「当たり前だ」

「怪我しない？」

「……善処します」

「一樹兄ちゃんそこはしないって言わへんと・・・」

はあ、とため息をつき亜夜が答える。

「ん、良いのはやてちゃん。これがうちのお兄ちゃんだから」

そう言うと離れてくれた。まだ震えている。よく見るとなのちゃんとはやても震えていた。怖い思いさせちまったな。そいじゃさつさと助けてきますかね。

「じゃ、行ってくるよ。なのちゃんたぶん美由紀さんがこっちに来るからそしたら説明よろしく」

「え？そうなの？」

「そう士郎さんに言っといたからたぶん来るよ」

「分かったの」

「一樹兄ちゃん！アリサちゃんとすずかちゃん絶対助けてきてな！」

「そつだよ！もし二人に何かあったらしばらく翠屋のケーキ抜きだからね！」

・・・なん・・・だと！じゃあ、何かあっても助けなきゃじゃん！

「了解！何かあっても二人を守ってやるよ」

そう言うと俺は車の走り去った方向をスサノオに聞きそつちに全力

で向かうのだった。

第十六話（後書き）

長くなるかもだったので分けました。なんか出来が微妙なので後で修正入るかもしれない（汗）

第十七話

斎藤一樹

「スサノオ、方角はこっちであつてるんだな？」

『肯定です。このまままっすぐ行った町はずれに廃ビルがあります。逃走した車両はそこに停車しています』

「分かった。このまま飛んでくぞ」

『了解です。クソ野郎』

俺は今、スサノオを起動しバリアジャケットになり空を飛んでいる。流石に亜夜達の前では起動しなかったが、死角になった場所で起動し一気に飛び出した。そしてスサノオの案内で誘拐犯の隠れ家に向かっている。

「見えた！」

目的地が見えたので、徐々に高度を落とし手前で着地する。さてこの格好じゃ目立ち過ぎるな。

「スサノオ、バリアジャケットのカラーリングを変更、夜間迷彩で頼む」

『了解、夜間迷彩変更完了しました』

そうスサノオが答えると白から全身黒色に変更された。

「よし、それとビル全体をスキャン出来るか？敵の配置と装備が分かればなんとかなるかもしれない」

『了解。一分もらいます』

「頼んだ」

そう言ってスサノオは作業を開始した。俺は再びビルを見上げる。五階建てのビルで廃墟になって大分経つようだ。ちよつとした心靈スポットの様だ。周囲を確認すると本来あるはずの非常階段などはポロポロになっており使用するにはちよつと難がありそうだ。窓ガラスは所々割れていて外から丸見えになっている。うーん、突入は配置が分かっているからだけどどうするか？

『スキャン完了しました。敵の配置と装備です』

「分かった、報告頼む」

『了解、まず正面ロビーに二名、武装はハンドガンの様です。次に二階はクリアです。そして三階に二名、此方も武装は同じです。四階には六人います。内二名がアリサとすずかです。武装はハンドガンが二名、マシンガンを持っているのが二名です。』

「分かった、無線とか使って連絡はしているか？」

『否定、定時連絡はしていません』

ふむ、それなら何とかなるか？しかし少しでも音を立てればいちまちややはりここは同時に突入すべきかな？とりあえず土郎さん

に報告しなきゃ。そう言っつて携帯電話を取り出し土朗さんの携帯にかける。

プルルルル、プルルルル、プルルル、ピ

『はい、土郎です。』

「もしもし、土郎さん？一樹です」

『一樹！今いつたい何処にいるんだ！』

「町はずれの廃ビルです。ここにアリサとすずかちゃんか捕まっています。敵は全部で八人、二人がマシンガン、六人がハンドガンで武装しています。一人だとちょっと不測の事態に対応できないかもしれないのでなるべく急いできてください。今はまだ動きは無いですがどうなるかわかりません。こっちは突入準備をしておきます」

『・・・まったく！無茶すんじゃないぞ！直ぐにそつちに行く！』

そう言っつと電話を切った。ここから俺の家まで直線距離で約3kmどんなに急いでも10分以上かかる。それまで何もなければ良いんだけど。とりあえず突入準備だな。俺は屋上に行きそこから五階、ちようどアリサ達の真上に来た。気配を消し、耳を澄ます。気功と魔力で身体強化しているの聴力も上がっていてしつかりと下の階の音が聞こえる。どうやらアリサがかみついているようだ。はあ、あんまり犯人刺激してほしく無いんだけどな。出来るだけ時間を稼ぎたいのに！

「ちょっと、あんたたちこんな事して唯で済むと思ってるの!」

「いや、お嬢ちゃんには用は無かったんだけどな。俺達の用があるのはそっちの紫髪のお嬢ちゃんなんだよ」

「さすがに何の用なのよ!」

「ん？知りたか？後悔するぜ?」

リーダーらしき男は嫌な笑みを受けべながら言ってきた。

「どうせ碌でもない事なんでしょ!もったいぶらずに言いなさいよ!」

「ん、そこまで言うなら仕方がない。教えてやるよ。おじさん達はある人から依頼を受けてな、月村家の当主「月村忍」を捕えてほしいと言われてるんだ」

「お、お姉ちゃんを?」

「そう、その人は研究が好きでな。生き物の研究をしてる奴なんだよ。今まで色んな生き物を調べて来たんだけどある時「夜の一族」という生き物の噂を聞いたんだとよ」

ビクッ!とさすがの身体がこわばる。男はクックククと笑っている。

「なんなのよその「夜の一族」ってのは!」

さすがの様子に気付かずにアリサは聞く。

「夜の一族」って言うのはだな、人間より高い身体機能に再生能力。明晰な頭脳。後は人間を操ったりする能力を持っている生き物の事なんだとよ」

さすがが震え、顔も真っ青になっている。

「そして極めつけは人の生き血をすする吸血鬼ってことだな」

男はわざとらしく大げさに言ってくる。

「馬鹿じゃないの？そんなのいる訳ないじゃない！」

「それが実在するんだな、現にお嬢ちゃんの隣にいるじゃないか」

アリサはそう言われ、すずかを見るが

「そんな訳ないじゃない！すずかが吸血鬼のはずがないわ！」

「まあ、普通の反応はそうだよな。だからおじさんがサービスして証拠を見せてやるわ」

そう言っつて男は懐からナイフを取り出します。自分の腕を少し切る。切れた場所からは血が出て腕を伝い地面に落ちる。

「まあ、普通怪我をするところなる訳だ」

そう言いながらアリサに腕を見せる。

「でも、それが吸血鬼の場合は、」

そう言うはずかの腕をとりその腕にナイフを近づけていく。

「な、何してんのよ！やめなさいよ！」

「い、いや！やめて！」

すずかは抵抗するが縛られているため身動きが取れない。そうしている内にすずかの腕にナイフがあたり、小さな傷をつくる。が、それは数秒で何事もなかったかのように無くなってしまった。

「う、うそ」

「だから言っただろ。このお嬢ちゃんは吸血鬼っていう化物なんだって」

そう言うのとゲラゲラ笑いだした。

「いや、おじさん優しいからつい教えちゃったよ！お嬢ちゃんも災難だな！この化物のせいで誘拐に巻き込まれちゃったんだからな！」

そう言うて再び笑い始める。周りにはいる全員が笑っている。アリサは目の前で起こった事が信じられなかった。ぐるぐると、今日の前で起きた事が頭の中で渦巻く。

「ごめんね、アリサちゃん。私のせいで巻き込まれて。私ね、化物なんだ」

そう、震えながら恐怖に顔を滲ませ、言ってくるすずかにどう答えれば良いか分からなかった。

「さてと、それじゃそっちの金髪のお嬢ちゃんには用は無いからね、いてもじゃまだから死んでもらおうか」

そう言うと男は持っていたハンドガンをアリサに向ける。

「だ、駄目！」

そうすずかが叫んだ瞬間、

ドガアーン！

突如轟音が響き天井が崩れた。ちょうどその天井の真下にいた一人が巻きこまれた。更に、土煙の中から何かが三つ飛び出した。それは吸い込まれる様にして離れていた二人にあたる。

「ぐあ！」

「ぎゃ！」

そう声を上げ崩れ落ちる。そして最後の一つがアリサに銃をつきつけていた男に向かうが男は横に跳びそれをかわす。直ぐに銃を構え土煙の中に三発撃つ。

バン！バン！バン！

乾いた音が鳴り響く。 静寂 男は油断なく銃を構え警戒する。 徐々に煙が晴れるが、そこには自分の部下が瓦礫の下敷きになっている以外は何も無い。じりじりと近付いて行く。

ガコ

男の横から何か崩れる音がする。反射的に男がそちらに銃を向ける。しかしそこには何もいない。その瞬間瓦礫の中から飛び出す影、男もそれに気づき銃を向けるが、影に銃を払われて隙をつくってしまう。そして腹に何か触れたと思っただら凄まじい衝撃が襲い男は意識を手放した。

斎藤一樹

ふう、とりあえず四階は制圧つと。派手に音立てちまったから直ぐに下から増援が来るだろう。その前にアリサとすずかちゃんを連れ出さないとな。そう思って二人に近付く。落ちている武器の回収も忘れない。

「大丈夫か二人とも？」

「か、一樹さん？」

「ちょ、あんた何でここに！それに撃たれたんじゃ！」

「ん？まあその話は後。まだ犯人はいるからまずはここを離れよう」
そう言って、部屋から出ようとするが、

「おい、どうした！」

「何があった！」

下の階からこっちに向けて声が聞こえてくる。はあ、やっぱり

もう来るよな。あれだけ派手に音出して気付かれないなんて、そんな都合のいい事ないか。俺は回収した銃を手早くチェックする。銃はベレッタM92F、M9とも呼ばれアメリカ軍で正式採用されている銃だ。装弾数は15発+1発。使用弾薬は9?パラベラム弾。俺自身何度か過去に撃つたこのとある種類だ。久しぶりの感触だが手になじむ。マガジンを出し装弾数を確認、マガジンに12発残っていた。マガジンを戻しスライドを軽く引き薬室内を確認。一発装填されているようだ。弾は合計で13発。他にも武器は転がっているが今はこれだけで良い。確認が終わったのでアリサとすずかに声をかける。

「アリサ、すずかちゃん、ちょっと危ないからその柱の陰に隠れてて」

「そ、そんな!」

「だめよ!一人で勝てる訳ないじゃない!」

そう二人が言ってくる。

「大丈夫だって。泥船に乗ったつもりでいなさい!」

「ますます駄目じゃない!」

律儀に突っ込んでくれたWWW

「まあまあ、さっきだって大丈夫だったでしょ?だから大丈夫だよ」

そう言うと二人はしぶしぶながら柱の陰に隠れてくれた。二人が隠れたのを確認してからドアに向き直る。階段を上ってくる気配が

四つ。そろそろ到着かな？と思っていると大事な事に気がついた。顔が丸見えなのだ。さっきは土煙の中だったから大丈夫だったが、今はそうでもないそれにまだ太陽も沈みきってないので微妙に分かってしまう。どうするか悩んでいると、なぜか床にお面が落ちていた。そのお面はあの有名なキャラクターのものだった。

第十七話（後書き）

スサノオの喋るイメージは「フルメタ」のアーバレストのAIE「ア
ル」です。

第十八話（ちょっと改良しました12/11）

犯人グループ

上の階から轟音が聞こえた。何かが崩れるような音だ。このビルは廃ビルになってはいるが、崩れるほどボロボロじゃ無かったはずだ。ここを使う前に調べた時もそんな様な所は無かった。しかし

バン！バン！バン！

銃声が聞こえた。それはトラブルが起こった事を意味している。人質を撃つなら一発あれば十分だ。しかし銃声は立て続けに三発。人質に向けて撃つたんじゃない、他の何かに撃つたのだ。可能性として高いのは人質を助けに来た奴に向けて撃つた。それが一番高そうだった。何せ相手は吸血鬼。どんな手段で仲間の場所を特定したか分かったものではない。直ぐに一緒にいた奴と階段に行き、上の階に声をかける。

「おいどうした！」

「何があった！」

しかし、返事はない。俺は、もう一人に下にいる奴らと呼んでくるように指示し、ゆっくり階段を上る。この上には吸血鬼を助けに来た奴がいる。それは仲間か、それとも他の奴か。おそらく前者だろう。まったく下手な映画みたいなシチュエーションだ。吸血鬼と戦う人間。それは大体は人間側の勝利で終わるが、これは映画などではなく現実に今起こっている事だ。人間以上の身体能力を持つ相手に戦うのだ。無事で済む保証はない。そう思いながらも一歩また

一步と進んでいく。ついにそのドアの前に着いてしまった。俺は意を決してドアを蹴り開け中に入る。するとそこには、お面を付けた馬鹿がいた。

斎藤一樹

ちょうどお面を着け終わったとき、後ろのドアが勢いよく開かれた。そつちを見ると一人の男がいた。銃をこつちに構えて警戒している。

「誰だてめーは！」

ふっふっふ！待っていましたそのセリフ！言ってくれと信じてました！そう聞かれたら答えなければなるまい！

「ん？拙者でござるか？拙者、服部貫蔵でござるよ。ニンニン」

そう、落ちていたお面とはフラッシュアップフラッシュアップなくてAエースが描いた有名な忍者漫画の主人公だったのだ！どんぐりまなこと「へ」の字口、頬の渦巻きがトレードマークのあの顔だ。そう答えると、

「ちよつとあんた！真面目にやんなさいよ！」

とアリサに怒られてしまった。アリサの後ろではすずかちゃんがアリサを一生懸命抑えている。

「ふ、ふじゃけんじゃね！」

そう言うと男は持っていた銃で撃ってきた。

バン！バン！バン！

しかし、そこにはハツ　リ君の姿は無く男は消えたハ　トリ君を探
す。

「な！ど、どこ行きやがった！」

そうキョロキョロしていると後ろから、

「残像でござる」

と声がして、後頭部に強い衝撃を受け男は地面に倒れた。それを
確認してハット　君は次の作業に移る。とりあえず今倒れている連
中を一か所にまとめ、手足を縛っておく。後三人いるはずだがまだ
上がってくる気配がない。その事を不審に思いつつ作業をする。と
りあえず全員縛り終わって、武器も全部回収したので大丈夫だろう。

「アリサ殿、すずか殿もう大丈夫でござるよ。ニンニン」

「何時までやってんのよ！」

バシン！

頭をたたかれた。

「痛いでござるよ。アリサ殿」

そう言うとアリサの額にお馴染みの怒りマークが出る。

「いい加減にしろ！さっさとそのお面取んなさい！」

「アリサ殿が拙者の顔を剥ぐうとするでござる！無理でござる！拙者の顔は餡麵麴男あんぱんおとこの様に取り外し出来ないでござるよ！」

「いい加減にしろ！」

そう言つとトムとジェリーのようにならずかの周りをグルグル回る。その様子をポカンと見ているすずか。しかしそんな事をしていても警戒している一樹。すると階段付近にかすかだけど気配を感じた。止まる一樹。その後ろにぶつかるアリサ。

「ちょっと、急に止まってなんなのよ」

「アリサ、すずか悪いけども一度隠れてくれ。今度はちょっと不味いかもしれない。結構なてだれが二人いる」

さっきまでの口調はどこえやら、打って変わったような余裕のない声。それを感じたのかアリサとすずかも黙って従う。ゆっくりとドアに向き直る。そのドアは開いたままになっていてその先は暗くなつていて見えない。ドアに対し自然体で構えをとる。眼を凝らし感覚を研ぎ澄ます。するとドアから何かが飛んできた。飛針とばりいわゆる棒手裏剣だ。しかもご丁寧に一本目の陰に隠れてもう一本飛んできてくる。しつかりその二本をキャッチして投げ返す。同時に入ってきていた男はその行動に驚きつつも最小限の動きでかわす。チツ！流石に練習不足か！体制も崩せない。舌打ちしつつも間合いに入ってきた影を向かえうつ。俺は手に持っていたベレッタを構え発砲。

パン！ギャン！

パン！ギャン！

パン！ギャン！

乾いた音が部屋に響き、アリサとすずかちゃんが小さく悲鳴をあげたのが分かるが今はそれどころじゃない。なんせその相手はこの暗い中俺の撃った銃弾を叩き斬ったのだ。

「嘘だろおい！非常識にも程があんぞ！」

あまりの事に驚愕する。確認できたのは相手獲物おそらく刀、両手に一本ずつ持っている。さらに間合いを詰めるスピードも尋常じゃなかった。あつという間に懐に入られ右手に持っていたベレッタをはじき飛ばされる。

ガン！

さらに左から首めがけて、右からは腹部をめがけ白刃が迫ってくる。それを上下に弾き、から空きになった腹に中段突きを放つが、身体をひねりかわされる。それと同時に再び白刃が迫る。弾く。

ギャン！ガキン！ギン！・・・

耳障りな音が響く。何合と弾き、かわし、打ち込み、かわす。常に移動し止まる事は無い。一見して互角に見えるが徐々に、徐々にではあるが一樹が押されている。完全に相手の方が実力が上である。純粹な身体能力では此方に若干分がある。しかし相手の方が戦い方が圧倒的に上手い。かなりの数の修羅場を潜って来ているようだ。一樹もそれを感じているのかだんだんと追い詰められている。

（チクシヨウ！こいつ強い！何か、打開する方法は！）

そう思っていると、アリサとすずかに近付くもう一つの影が視界に

入る。

「ッ！アリサ！すずか！逃げる！」

その影を見た瞬間とつさに叫んでしまった。戦っている最中に度し難い隙をつくってしまったのだ。それを見逃す相手ではない。しまったと思った時にはもう遅かった。此方の右脇腹に白刃が迫る。

ドゴー！

鈍い音が響き、一樹が吹き飛ぶ。地面をバウンドしながらゴロゴロ転がり、アリサとすずかの隠れている柱にぶつかり止まる。

『一樹！（さん！）』

二人の悲鳴が響く。しかしそれに応える余裕はない。人体の急所である肝臓にもろに攻撃を受けたのだ呼吸は出来ず、手足はしびれ、身体を自由を奪う。それでも一樹は立ち上がり相手を見据える。相手が攻撃した位置から動いておらずじつと此方を見ている。しかも後ろからはもう一人。状況は最悪だ。どうすればこの状況を打開できるか考えるが思いつかない。

（こりゃ、魔法使うしかないか？）

そう覚悟を決めて使おうとした時、

「一樹君か？」

今まで戦っていた相手が獲物を下げ聞いてくる。その声は聞きおぼえがあった。

「え？もしかして土郎さん？」

「やっぱり一樹君か。お面してたから分からなかったぞ。」

「一樹、大丈夫か？」

そう後ろから声を掛けてくれたのは恭也さんだった。

「ちょ、あれ？え〜、土郎さんと恭也さんだったの！」

そう言っつて俺は地面に座り込む。

「ああ、すまない大丈夫か？」

「しばらくは無理つす。もろに入りましたから」

「ははは、すまない。一応加減はしたんだが」

「しかし、一樹も腕を上げたな。父さんと結構良い戦いしてたじゃないか」

「こつちは一杯一杯でしたよ。でも、それならそうと言ったださいよ。ホントにヤバいと思っただんですから」

「仕方ないだろ。一樹君から事前に人数を聞いていて下で三人しか倒してなかったんだ。あと五人いると無暗に声を出す訳にもいかなかったからな」

まったくもってその通りである。

「しかも、お面をした変な奴がいるんだ。敵じゃない保証は無かったからな。」

ぐうの音も出ない。こんなところでお面の弊害が出るとは。しかし後悔はない（キリ！ちなみにお面は土郎さんに吹っ飛ばされた時どっかにいってしまったようだ。

「まあ、こっちも全く気付かなかったすからおあいこつつう事で

あたりはすっかり暗くなっており、部屋もかなり暗くなっている。月明かりが入ってくる程度だ。それも気付かなかった要因の一つだ。

「ああ、とりあえず忍も下に来てるし、こいつら運んでおくか。」

そう恭也さんが言って犯人を担ぐ。恭也さんと土郎さんが二人、俺が一人という感じだ。そうしてビルから出るとそこには忍さんとその横にメイド姿の女性がたたずんでいた。

「すずか！」

「お、お姉ちゃん！」

そう言っすすずかちゃんは忍さんの元に走り抱きつく。俺はその姿を見て心底安心した。良かった守れて。本当に良かった。すずかちゃんは忍さんと少し話すと忍さんと一緒にこっちに来る。

「一樹君すずかを助けてくれて本当にありがとう。いくら感謝しても足りないわ」

「私からも礼を言っわ。ありがとうカズキ。あの時来てくれなかつたらきつと私殺されてた」

そう言ってお礼を言ってくる。

「でも、私たちの秘密を知ってしまった。」

あゝ、そう言えば聞いちゃったな。

「アリサちゃんだったわね。私たちの秘密を知ってどう思った？」

「・・・」

アリサは答えられない。まだ整理がついてないのだろう。しかし俺はそんな雰囲気をぶち壊すwww

「なんだアリサ、すずかちゃんが吸血鬼ってだけで友達じゃなくなるのか？」

「そ、そんな事ある訳ないじゃない！」

「で、でも、私吸血鬼なんだよ？人の血を吸う化物だよ？」

そうすずかちゃんは言ってくる。

「ん？すずかちゃん？化物って「人の血を吸う」ってことなのか？」

「え？そ、そうだけど？」

「じゃあ、吸血蝙蝠なんかも化物か？」

「・・・え？」

「だってそうだろ？「人の血を吸う」事が化物なら自然界には沢山いるぞ？」

「え、でも動物は人を殺したりしないよ！」

「それはすずかちゃんもだろ？」

「そ、それはそうだけど、でも人よりすごい力があるんだよ！ちゃんと手加減しないと人を傷つけちゃうんだよ！」

「ん？じゃあ俺と勝負して見るか？」

そう言う俺はビルの近くに放置されていた机を持ってきた。俺はそこに肘を置きチョイチョイと指を曲げ軽く挑発する。勝負は簡単腕相撲だ。純粹に力が強い方が勝つ。実にシンプルだ。すずかちゃんは恐る恐る俺の手を握り体勢をとる。

「誰か審判お願いします。」

「し、仕方ないわね。私がするわ。」

そう忍さんが言うてくる。お決まりのごとく「力を抜いて」とか「始めの合図で」とか決めていく。そして準備が整った。

「じゃあ行くわよ。」

そう言う俺とすずかちゃんの手の上に手を置く。一息吐き、

「始め！」

その合図と共にすずかちゃんが力を込めるが、

「う、嘘」

俺の腕はびくともしない。

「どうした？もうおしまいか？」

そうニヤニヤしつつ、すずかちゃんに言う。

「ま、まだまだです！」

そう言って更に力を籠めるがまったく動かない。

「じゃ、そろそろ終わりにするか」

そう言うと実にあっさりすずかちゃんの手が机に着く。呆然とするすずかちゃんと忍さん。少なくとも二人にとってはあり得ない光景だったのだろう。しかし、負けた事が悔しかったのかすずかちゃんは、

「わ、私まだ成長途中だから力が弱いんだよ！お姉ちゃんなら勝てるもん」

なんて事を言ってきた。おいおい、そんなに自分が化物だって証明したいんかい！

「ん、さすがの言う事にも一理あるわね。次は私とで良いかしら？」

「・・・まあ、良いっすけど」

「決まりね！恭也審判お願い」

「構わないがなんでそんなに嬉しそうなんだ？」

「フッフ、秘密よ」

そして俺と忍さんはさっきと同じ様に机の上に肘を置きガシッと手を組む。

「手加減の必要はなさそうね」

「大丈夫ですよ。絶対に勝てませんから」

「あら、言うわね。じゃあ本気で行かせてもらおうかしら」

忍さんはそう言うと恭也さんに合図をする。俺も恭也さんに頷いて合図をする。

「よし、じゃあ行くぞ。・・・はじめ！」

恭也さんが合図をすると同時に忍さんが動く。

「はあああー！」

気合いと共に体重も左に移動し、最初から最大の力をかける。それ

を証明するかのように、俺と忍さんを中心にそこから衝撃にも似た風が外に向かって放たれる。

ブワッ！！

誰もが俺の負けだと思っただろう。現に俺の右手は机に今にもつきそうなのだから。がまだ着かない。手の甲と机との間にわずか2〜3センチ程の隙間がある。

「あ、あぶね〜！本気すぎじゃないですか？！」

俺は忍さんにそう言うが、忍さんは答えない。机に着いていない俺の手を見て驚いている。

「・・・う、嘘でしょ？！」

忍さんの手はプルプルと震えているがそれ以上俺の手が机に近づく事はなく、俺によってゆっくり試合開始の位置まで戻される。そしてそのまま反対の方に倒れていき、忍さんの手の甲が机に着く。

トン

静かにな音にも関わらずその場にいた全員に聞こえた。そして俺は月村姉妹に向けて一言。

「ん〜、人間に勝てないのに化物を名乗るなんぞ言語道断だ！出直してこい！」

そう呆然としている二人に言い放つ。

「いや、それは違うだろ」

恭也さんが冷静に突っ込む。俺はすずかちゃんの前にしゃがみこんで視線を合わせて話す。

「ん、まあそれは冗談として、「化物」なんていうもんは人によつて違うんだよ。勿論吸血鬼を「化物」という人間もいると思う、でもそれは吸血鬼は怖いとか人を殺すとかそんな先入観から生まれるものだと思うんだ。人間にだって沢山人を殺す奴だっている。俺はその殺人鬼とすずかちゃんを比べたら、間違いない殺人鬼の方が化物だと思うよ。「人の血を吸う」とか「力が強い」と言うのは些細なことだよ。その持つてる力を自覚して、溺れる事がないんだからすずかちゃんはまぎれもなく人間だよ。だから安心しな、アリサだつてなのちゃんだつて亜夜だつてはやてだつてそんな事気にしないでずつと友達でいてくれるよ」

「そうよ！すずかが吸血鬼だからって嫌いになる訳ないじゃない！」
そうアリサが言つてすずかに抱きつく。

「それに、すずかは私が撃たれそうになった時かばつてくれたじゃない」

そう言つてアリサが腕に力を込める。

「私たちはずつと友達よ」

そう言つてアリサはすずかに語りかける。呆然としていたすずかちゃんだがそれを聞いた後、ぼろぼろ涙を流し、

「ありがとう、ありがとう、アリサちゃん」

そう言って静かにアリサの胸の中で泣くのだった。

「時に、忍さん。秘密を知った人ってどうするの?」

気になったので聞いてみると、

「うーん、記憶の消去か私達に忠誠を誓うかってとこなんだけど・・・」

「つまり?」

「あなたとすずかが私と恭也見たいになるってことよ」

「マジッすか?」

「マジよ。まあ、それもすずか次第だけど」

忍さんはすずかを見てどうする?とでもいうような顔をしている。

「これはすずかちゃん、と婚約フラグか!?!と若干ドキドキしているよ」

「うー、うーめんなさい!」

「あら?じゃあ、記憶消去しかないわね」

と言われ、本気で泣きそうになった。

第十八話（ちょっと改良しました12/11）（後書き）

そろそろ無印に入れそうです！

第十九話（前書き）

若干短いですがよろしくです。

第十九話

斎藤一樹

あの後、犯人グループを忍さん、恭也さん、土郎さんが尋問して依頼主を吐かせ記憶を消去して警察を呼んでその場から立ち去った。その際に忍さんが、

「記憶を消す時間違いが起こっても私の所為じゃないわよね〜」

すごい笑顔で言っていた。ただし眼は笑っていないかったが。その瞬間は俺達三人はかなりドン引きしていたが。とりあえず全員ではやて家に戻る事になった。アリサとすずかちゃんがどうしてもみんなに会って安心させたいと言ってきたのだ。まあ、この面子がそろっているのだから今回の様な事は起きないだろう。はやての家に着くと、初老の執事服を着た男性が飛び出してきた。「お嬢様ー！」と言いながらアリサに抱きつく。アリサも「鮫島！」と言いながら抱きつく。どうやら迎えに来た車の運転手の様だ。頭に包帯を巻いているが他は大丈夫のようだ。そして、そのあとから亜夜、なのちゃん、はやてが飛び出してきた。三人は勢いそのままにアリサとすずかちゃんに飛びついた。まあ、そんな事をしたらどうなるかは誰でもわかるとおり、

ドシャーン！

五人は纏めて倒れる事になった。地面に倒れながら全員で再開を喜ぶ。眼には涙を浮かべているが全員がもの凄く嬉しそうだった。俺はこの笑顔を見て、本当に守る事が出来て良かったと心の底から思っただった。それと同時に安心したからなのだろう、全身の力が

抜け、目の前が暗くなり俺は意識を手放した。

高町恭也

目の前で一樹が倒れる。地面にぶつかる直前で支える事が出来たのは幸いだった。

「おい！一樹！」

俺の声に気付いた忍と父さんが近寄ってくる。

「恭也、一樹君は大丈夫か？」

そう言われてから一樹の状態を確認する。脈はある、呼吸もしている、ただ意識がない。恐らく家に着いた事で緊張の糸が切れたのだろう。俺はそう結論付ける。

「ああ、大丈夫そうだ。たぶん緊張の糸が切れたんだと思う」

そう言うと父さんも安心したようだ。短く「そうか」と言って息を吐く。

「恭也、その子いったい何者？」

忍が聞いてくる。まあ、気になるのは当然だろう。まだ子供とはいえ、すずかとの腕相撲で圧勝しているのだ。普通であればこれは当然の結果だろうが、すずかは「夜の一族」なのだ。その力は成人男性を軽く超えるもので、中学生程度の力で如何にかなるものではない。おまけに忍との勝負にも勝ってしまったているのだ。普通であればあり得ない事、一樹はそれを覆した。それも圧倒的な力で。聞

きたい事は沢山あるのに何時もはぐらかされてしまう。俺はため息をつき忍に言う。

「それは俺も知りたいよ」

何時も一緒に稽古をしている弟分を見てそう思っただった。

「ん？そう言えば一樹兄ちゃんはどないしたん？」

今、一樹がいない事に気がついたはやてがキョロキョロし始める。そして恭也に支えられてる一樹を見つけると器用に車椅子に乗り近付いてくる。

「か、一樹兄ちゃん！どないしたん！」

「心配ないよ。疲れて寝てるだけだから」

俺はそう言うとはやては心配そうに言う。

「そつなん？でも早く手当てとかした方がええんとちゃうか？」

「いや、怪我らしい怪我はしてないぞ？」

「え？一樹兄ちゃん、銃で撃たれたんよ？」

「………え？」

ギョツとして父さんを見る。父さんも同じく眼を丸くしている。

「まさか、一樹兄ちゃんから聞いたらんの？」

俺は慌てて一樹の上着を脱がせ、傷を確認する。そこには包帯が巻かれていて、所々赤く血がにじんでいた。大出血している訳では無いが、放っておいて良い物でもない。

「ノ、ノエル！救急箱あるか！」

「リ、リニス！救急箱や！救急箱取ってきて！」

そう言つて二人で慌てて手当てを開始するのだった。

斎藤亜夜

みんなで再開を喜んでた。つい勢い余つてアリサちゃんとすずちゃんに突つ込んだけど、みんなで笑つてた。みんな目に涙を浮かべている。あの光景を見て、絶望的な状況を味わつて、それでもこうして再開できた。恭也さんと土郎さんには本当に感謝だ。お兄ちゃんも無事に戻つて来てくれた。あ、今更だけどお礼言わなきゃ。そう思ってお兄ちゃんを探す。キョロキョロする私にみんなが気付いたようだ。

「どしたのよ亜夜？」

「あ、いやお兄ちゃんを探してて」

「あ、そうだね。一樹さんにもちゃんとお礼しなきゃ。ね、アリサちゃん」

「うー！そ、そうよね命の恩人だしね。」

「にはははは、アリサちゃんは素直じゃないの」

そう言いながらアリサとすずちゃんの言葉に驚く。お兄ちゃんが命の恩人？え？恭也さんと土郎さんが助けてくれたんじゃないの？私がそう聞くと、

「始めに助けに来てくれたのはカズキよ。私が銃を突きつけられた時助けてくれたの。あっという間に周りにいた犯人四人を片付けちゃったわ」

「うん、そうだよな。あの時は私もびっくりしたな」

なん・・・ですって！あのお兄ちゃんが大人四人をあっという間に片付けた？てつきり恭也さんと土郎さんの手伝いだけかと思つた。しかもそのあと敵と勘違いして土郎さんと戦つたと言うじゃない。いつもはネタで私や明お兄ちゃんを弄つて最終的に怒られてるのに。そう言えばなのちゃんの家にある道場に通り始めてから雰囲気が変わつたような？それでもないような？ええい！わかんないなら私もいつそ高町道場通い始めようかな？そう思っているとはやての声が聞こえ、

「リ、リニス！救急箱や！救急箱取ってきて！」

と何やら慌ただしい。はやてに近付くと恭也さんに抱えられているお兄ちゃんがいた。

「お、お兄ちゃん大丈夫！」

そう言って慌てて近くによる。するとリニスさんともう一人メイドさん・・・メイド！初めて見た！リ、リアルメイドホントにいた

！つて違つ！今はそんな事を気にしている時じゃない！そうぶんぶん頭を振つて、その考えを吹き飛ばす。そうしている間にテキパキと治療を済ませていく二人。治療が終わつたのか報告してくる。

「脈拍、呼吸共に安定しています。命に別条は無いようです」

これはメイドさん

「ええ、恐らく貧血と疲労、家に戻つて安心したためだと思いますよ。右脇腹と銃創以外は怪我はありませんし」

これはリニスさん。二人の手際の良さに驚きつつ、お兄ちゃんを見る。その顔はどことなく嬉しそうに笑っているように見える。それを見て私も嬉しくなったのと同時に、私も誰かを助けられたらと思う。いいな、と思つている自分がいた。こんな事にならなかつた私はこんな気持ちにならなかつたかもしれない。恭也さんの隣にいる土郎さんを見るとどこか気まずそうにしている。そんな土郎さんに声をかけた。

「土郎さん、お願いがあります」

これからの為に私も強くなろうと決意するのだった。

斎藤一樹

痛みで眼が覚めた。眼を覚ますとそこは自分の部屋のベッドの上で横には父さんがいた。

「お、眼が覚めたか一樹」

読んでいた本から目をはなし俺にいつてくる。俺は上半身を起こし父さんに聞く。

「父さん、俺が倒れてからどの位経った？」

「ん？そんなに経ってないよほんの二、三時間ぐらいだ」

「みんなは？」

「もうみんな帰ったよ。お前によろしく言っといってくれだつてさ」

「そっか」

「もう大丈夫そうだから父さん下に行くぞ？」

「うん、ありがとう。スサノオのおかげで2人を助けられた」

「それは良かった」

そう言つて父さんは部屋から出て行つた。俺は軽くストレッチをして身体の調子を確かめる。痛みはあるけどもう大丈夫のようだ。士官学校の時から怪我の治りも早かつた。だがしかし流石に今回の若干かかりそうだ。なんつっても銃創だからな。傷跡残つちまうかな？まあそうなつたら仕方ないか、と諦める。後数日は大人しくしておこう。怪我が治つたら今回の反省を含めて土郎さんに稽古つけてもらわないと。高町道場通う日数多くしようかな？この状況だとそう思わずにはいられなかつた。もつともつと強くならないと助けられる人が助けられなくなる。俺はそう決意を新たにすのだった。

第十九話（後書き）

基本的に、一樹はあまり強くないと思われています。いつも馬鹿ばっかしてますからねWWW

第二十話

新暦65年 4月5日

ガサガサガサガサガサ

そこは森の中だった。青々とした木々が並び立ち、暖かくなった陽気からか木々の周りには様々な花が咲き誇っている。しかしそんなものは目に入らんと言わんばかりにその森を通る「ソレ」それは人ではなく、ましてや動物でもない。少なくとも地球にいる生物には該当しないであろう。「ソレ」はその体軀からは考えられない様な早さで走り、木々にぶつからず器用に避けて通る。「ソレ」は饅頭のような体軀に黒に近い灰色のような色、ウネウネとしていて姿は定まらない。赤く爛々と輝く眼の色は暗い森では不気味である。

タッタッタッタッタ

そして、それを追う少年がいた。背丈は130?前後だろうか? 民族衣装の様な服に端の方が擦り切れたマントをしている。髪の毛は金髪に翠の瞳、まだ幼さが残る顔立ちには焦燥にかられているものの、強い意志が見てとれる。少年は必死に「ソレ」を追う。すると、「ソレ」が一気に跳躍して、広場の様な場所に出た。その中央には池があり、近くにはボートなどが止めてある棧橋の様なものもある。公園の様な場所だった。そこで「ソレ」と少年が対峙する。「ソレ」は池の中央付近に立っており水中に沈む様子は無い。少年は手に持っていた赤い宝石の様なものを軽く握る。

「お前は、こんなところにいちゃいけない!」

しかし少年に加わっている衝撃も相当なものでうめき声をあげる。するとあらわになつていた青い宝石が再び「ソレ」の体内に取り込まれてしまい「ソレ」が少年と距離をとる。そして池の中央付近に再び陣取ると、「ソレ」が大きく膨れ上がる。

「つく！」

そして次にくる攻撃を悟つてか少年は棧橋から岸へと戻る。そして次の瞬間「ソレ」が爆発した。すると周囲に弾丸の様に飛び散り、棧橋を、建物を、ボートを破壊する。間髪「ソレ」をかわした少年が土煙の中立ち上がる。しかし「ソレ」は更に少年に向かって飛んできた。

「つく！」

少年はとっさに腕を突き出し魔方陣を展開するが、

ドン！ドン！ドン！ズガアアアン！！！！！！

「うあーーーーー！！！」

衝撃に耐えられずはるか後方の森に吹き飛ばされてしまった。「ソレ」は少年が出てこないのを確認すると一気に跳躍してその場を離れて行った。一方少年はダメージを受けながらも必死に立ち上がろうとしていた。

「う・・・追いかけて・・・なくちゃ・・・」

そう言って立ち上がるうとするが身体が動かない。そしてそのまま力尽きてしまった。すると少年が輝きだしその光が収まると少年

の倒れていた場所には一匹の獣と赤く丸い宝石が残されていた。

斎藤一樹

窓から差し込む朝日で眼が覚める。それと同時に、

「おお、ユーノよ。負けてしまつとは情けない」

どっかのRPGの王様の様に声を上げる。ついにこの日が来たんだと思う。なのちゃんが魔法と出会い、戦いの中に身を投じる。分かつてはいた、助ける為の準備もしてきた。後は俺自身の行動で今後が変わる。出来る事ならハッピーエンドで終わりにしたい。あの子たちに悲しい思いはさせたくない。また、何時か見た笑顔でいられるように出来る限りの手を打とうと決めた。そう思っていると部屋のドアがノックされ、亜夜が顔を出す。その顔はまだ起きたばかりの様で眼をこすっている。

「兄ちゃん、起きてる？」

「ああ、起きてるよ」

「ん、ご飯出来たって。お母さんが呼んでるよ」

「あいよ、直ぐ行く。なんだ亜夜も起きたばかりか？」

「うん、なんか変な夢見ちゃって」

「・・・なんですと？」

「変な夢ってどんな？」

「ん？なんか変なウネウネしたのと男の子が戦う夢」

・・・ホワッツ？

「夢見が悪かったのかまだ眠いのよ」

「そ、そうか。まあ、顔でも洗えば眼も覚めるだろう」

「ん〜、そうする」

そう言うと妹は下に降りて行ってしまった。・・・こりゃ、父さんとも相談した方が良くも知らない。そう思いつつ学校の準備を始めるのだった。

高町なのは

ピッピッピッピ、ピッピッピッピ、ピッピッピッピ、

携帯のアラームが鳴りその所有者に朝だと教える。ベッドのふくらみがかもそもそ動き布団の下から手が出て携帯のアラームを止める。布団から出たなのははさつき見た夢を思い返し呟く。

「う〜ん・・・変な夢・・・」

そう言うと壁に掛けてあった制服に着替え下のリビングに降りていく。そこには既に家族の面々がそろっていた。

「あら、おはようなのは」

そう言って一番に声をかけてきたのはお母さんだった。

「うん、お母さんおはよ〜」

そう言っつて、お父さん、お兄ちゃん、お姉ちゃんにも挨拶する。いつもの様に朝ごはんを食べていつもの様に学校に行くそれが私の日常、家を出て学校のスクールバスに乗り込むと、いつもの席バスの一番後ろの席にアリサちゃんとすずかちゃんと亜夜ちゃんがいた。亜夜ちゃんは少し寝むそうだった。

「おはよう、アリサちゃん、すずかちゃん、亜夜ちゃん」

「おはよう、なのは」

「おはよう、なのはちゃん」

「う〜、なのちゃんおはよ〜」

「どうしたの？亜夜ちゃんなんか寝むそうなの」

「うははは、なんか変な夢を見ちゃってね。それでよく眠れなかったみたいで寝不足なのよ」

「へ〜、変な夢ってどんな夢？怖いやつ？」

「うんにゃ、ウネウネした変なのと男の子が戦ってるやつ」

それを聞いて私も反応した。

「それって、森の中走ったりしてた？」

「お〜してたしてた。て言うかなのちゃん良く知ってるね?」

「うん、私も同じような夢見たの」

「え? そうなの?」

「へ〜珍しいわね。何かあったりして」

「ホントだね。何かあるのかな?」

そう不思議そうに聞いてくる。確かに一緒に夢を見るなんて凄い偶然なの。

「いや〜、単なる偶然でしょ、偶然。そんな事より私のこの眠気を何とかしてほしいわ」

そんな意見をばっさり一刀両断してくる亜夜ちゃん。相変わらずと
言うか何と言うか。

「ちょっと、亜夜も不思議に思わないの?」

「ん〜、そんな事ないよ? 十分不思議だけど、絶対ないって程じゃないじゃない? 私にとってはそんな事よりこの眠気で授業中に寝ないようにするのが苦痛なのよ!」

「亜夜ちゃん、相変わらずだね」

そう、苦笑いするすずかちゃん。

「ホントだね」

「まったくよ」

「いつその事睡眠学習でもしようかな？」

『それはだめ（なの）！！！！』

そんな事言った亜夜ちゃんに私たちは一斉に注意する。

「な、何よ。三人で一斉に言わなくたって良いじゃない！」

「亜夜、忘れたとは言わせないわよ！」

「そうだよ亜夜ちゃん！」

「あれは恥ずかしかったの！」

そうなのです。亜夜ちゃんが以前授業中に寝ちゃったときにそのままにしておいたら、寝言で私たちの事を言ってきたの。本人はいつものメンバーで遊んでいた夢を見ていたそうだけど、変な事を言い出したから慌てて亜夜ちゃんを三人で起こすっていう事態だったの。それ以来亜夜ちゃんが寝そうになったら全員で必ず起こすって言う暗黙の了解が出来あがったの。三人に言われてシヨボーンとしている亜夜ちゃんを眺めていると学校が見えてきた。今日も一日楽しく過ごそう。そう思いながらまた四人で話をし始めた。

放課後

私たちはいつも通り帰っていたの。アリサちゃんとすすかちゃん

も今日はお稽古がないから一緒に帰っている。亜夜ちゃんは一回家に戻ってから一樹お兄ちゃんと一緒に家の道場に来る予定になっているの。あの誘拐事件以来、亜夜ちゃんも家の道場に通い始める事になったの。その時お父さんに「私もみんなを守る力がほしい」って言うってもの凄く一生懸命頼んだの。亜夜ちゃんのお父さんとお母さんも始めは駄目だっけって言ったけど、最後は折れてお父さんをお願いしに来てた。その熱意にお父さんも負けたみたいで、じゃあまずは基礎稽古からと言う事で納得してもらったみたいだった。もうあれから数ヶ月経つけど弱音は一回も吐いてないみたいなの。お父さんのお兄ちゃんも筋が良いって誉めてたし。最近一樹お兄ちゃんが「亜夜に剣術で抜かれるかも」とぼやいてた。それを聞いて私はびっくりした。筋が良いってお父さんが言ってたけどそこまでとは思わなかったから。そんな感じで亜夜ちゃんも頑張っているみたいですよ。

「亜夜も頑張ってるわよね」

「そうだね。亜夜ちゃん毎日生き生きしてるもんね」

「最近一樹お兄ちゃんが「抜かれそう」て言ってたの」

『それ本当!?!』

「あ、剣術でっけって言ったけど」

「それでも十分すごいわよ」

「そうだね。まだ習い始めてそんな経ってなかったよね?」

「お父さんとお兄ちゃんも吃驚してたの」

そう話しながら歩いていくといつもの公園まで来たの。その公園は小さいけど池もあってボートに乗ったりできる場所もあって休日は家族連れでにぎわう場所なの。でもそこは変わってしまった、池にかかる栈橋は壊れ木屑になっていて、ボートは壊され、管理小屋も壊れていた。ひどい状態なの。でもこの場所って夢で見た・・・

「あ、君たち、危ないから入っちゃだめだよ」

此処の管理人さんが言ってきた。

「はい、でもこれどうしたんですか？」

そうアリサちゃんが聞く。

「いや、朝来たらこの状態だね。いたずらにしては度が過ぎてるから警察に来てもらったんだ」

「そうですか」

その話を聞いていると、

助けて

頭の中に声が響き頭痛がする。

助けて

もう一度声が響く。

「アリサちゃんすずかちゃん今何か聞こえなかった？」

「え？聞こえなかったわよ？」

「うん、私も」

おかしいの、確かに聞こえた。

「アリサちゃんすずかちゃんゴメン」

そう言っただけ私は声のした方に走り出した。道を外れ森の中に入って行く。

「はあはあはあ」

しばらく走るとそこにはフェレットが倒れていた。

「ちょっと、なのはどうしたのよ急に！」

「どしたのなのはちゃん」

アリサちゃんとすずかちゃんが追いついてきた。私はフェレットを抱きかかえ見せる。

「なのは、それどしたの？」

「イタチ？うんフェレットかな？」

「此処に倒れてたの」

「とりあえず病院に連れて行きましょ」

「うん、その方がいいね」

「分かったの」

私たちはそう言って近くの動物病院に向かっただった。

第二十話（後書き）

主人公は、格闘技以外は凡人です。対して亜夜は剣術は天才です。
W
W
W

第二十一話

槇原動物病院

診察台の上にはなのは達が拾ったフェレットが、包帯を巻かれた状態で寝ていた。治療を終えた先生が道具の片付けを終えフェレットのそばまで来た。

「あの、院長先生この子の具合は？」

「今見た限りだと特にひどい怪我はしてないみたいね。ずいぶん衰弱してるみたいだけど」

なのは達三人が心配そうな顔から安心して笑顔になる。

「先生。この子フェレットですよね？どっかのペットなんでしょうか？」

「うーん、フェレットなのかな？変わった種類だけど・・・」

「あのー、この後どうしたら？」

「そうね、しばらくは安静にしていた方がよさそうだから、とりあえず明日まで預かっておこうか？」

『はい！お願いしますー！』

「良いのよ。こっちも好きでやってる事だから」

そう言つて快く治療を引き受けてくれた。そしてなのは達三人は病院を後にした。

高町家

「ふうん、それでなのちゃんはフェレットを病院に連れて行つてたんだ」

高町家で晩御飯を御馳走になつてゐる俺と亜夜。今日は稽古に熱が入り遅くなつてしまつたため桃子さんの計らいで食べていく事になつたのだ。ちよくちよくあるので今ではすっかり日常の一部に組み込まれつつある。亜夜などは泊るときもある位だ。そして今日、なのちゃんの帰宅がちよつと遅かつたので氣になつた亜夜が聞いたのだつた。

「そうなの。特に大きな怪我がなかつたから良かったの」

「ふうん、でもアレだね。病院に連れてくより、お兄ちゃんに治してもらつた方が早かつたんじゃない？」

「……あ!」

今気付いたと言わんばかりになのちゃんが声を上げる。

「まあ、その方が早かつたかもな」

「一樹お兄ちゃん動物も治せたの!？」

「ああ、前にはやてと散歩してた時、猫を治した事もあつたからな」

「そ、それなら今からでも！」

「もちつけなのちゃん」

亜夜がそう言いながらなのちゃんをチョップする。ペシ、と音をさせなのちゃんを落ち着かせる。

「そうだぞなのは。だいたい今から病院に行っても開いてないだろ？」

そう士郎が言ってくる。

「にはははは、そうだね。」

「ま、今日は預かってもらえるんだから明日になったら連れておいで。思いっきりぶん殴って治すから」

「・・・それって大丈夫なの？」

「そこはほら、経験者に聞くといいよ」

そう言っつて俺は士郎さんを見る。つられる様に亜夜となのちゃんも士郎さんに視線が行く。三人に気付いた士郎さんはバツが悪そうに頬をかきつつ答える。

「いや、お父さん、いつの間にか治ってたから良く覚えてないんだよね。どっちかって言っとベットから落ちた方の痛みが残ってたような気がしたけど」

「だつてさ」

「……いまいち不安がのこる治療法よね。お兄ちゃんのやり方は」

「まあ、第三者から見たら絶対治療とは思えないもんね」

その場にいた全員が「ウンウン」と頷く。特に恭也さんは力強い頷きだったww。そんな話をしつつ食事も終わり帰りの準備をしているとなおのちゃんは既にパジャマ姿になっていて亜夜に「今日は泊っていかないの？」と聞いていた。亜夜は今日は家でやる事があると云っていた。俺と亜夜は「お邪魔しました」といい玄関を出て帰路についていた。しばらく二人で無言で歩いていると不意に頭の中に声が響いた。

(……聞こえますか?)

急に聞こえたので立ち止まると、亜夜が頭を押さえていた。

「亜夜? どうした?」

やっぱりか? と思いつつ亜夜に声をかけると

「ねえ、お兄ちゃん今声が聞こえなかった?」

どうこたえるか俺は迷っていた。

1 正直に答える

2 聞こえなかったと嘘を言う

3 「中二病か?」と言う

ファイナルアンサー? YES NO

「なんだ亜夜「中二び(僕の声が聞こえますか?)」「うっせえ! 黙

つてろ！……あ
「

とっさに声に反応してしまった。亜夜を見ると、頭を押さえているが「じと〜」とコツチを見ている。

「お兄ちゃん？」

「H A H A H A！亜夜、どうやらお兄ちゃんは憑かれているようだ！ちよつとお被いし〜」お兄ちゃん？「……何でございましょう？」

もの凄く低い声で呼ばれ思わず姿勢を正す。返事も敬語になっちまった。

「お兄ちゃんも今の声聞こえてるんだね？」

「イエス、ママ！」

「じゃあさつき何で（良かった！僕の声が聞こえ〜）黙ってなさい！（……はい）」

「お〜い、亜夜？どうしたんだ？怖いぞ？」

「お兄ちゃん？さつき、私の、質問に、何で、返そうつと、したの？」

怖え〜、超怖え〜。一言一言区切って、なおかつ声がもの凄く低い。

「いや〜、この声を〜まかしつつ、亜夜をからかおう〜」ふ〜〜〜ん「……」

この妹は何でこんなプレッシャーを放っているんだろうか？

「お兄ちゃん？私ね、さつきとても不安だったの。人には聞こえない声が聞こえちゃうのかな、とか、妄想癖でもあったのかな、とか、でもねまだお兄ちゃんがいたから、ちよつと心強かったんだよ？笑い飛ばしてくれるかな？つて思ってたんだ。でもお兄ちゃんにも聞こえてて、尚且つ私をからかって遊ぼうとした？私の気持ちを裏切りもて遊んだわけです」

と言いつつ、竹刀袋から日本刀をとりだした。・・・って日本刀！？

「あ、亜夜？ソレは一体どしたの？しかも何で取り出してんの？」

「ああ、これ？土郎さんが「素振りもこれでしなさい」つて言つて貸してくれたんだ。大丈夫。多分、きつと、刃はつぶしてあると思っわよ？」

「亜夜、それ確かめてからの方が良くね？万が一があつたら不味いでしょ！しかも今日はやたらと不機嫌だなおい！？」

「そうよ。朝から変な夢見るわ、学校でも寝そうになって先生に注意される事数知れず、その事で職員室に呼ばれて、その事を男子の馬鹿共にからかわれて、しかも帰ってる途中も同じ様な声が聞こえて、稽古の最中も土郎さんに注意受けるし、今日の私はすこぶる機嫌が悪いのよ！」

そう叫び、日本刀を鞘から抜く。すらりと抜ける日本刀、稽古始めて間もないのに日本刀を抜く動作も様になっている。月明かりを受け日本刀もあやしく光る。波紋も浮かび上がりソレは見方によつては幻想的に映っただろう。日本刀よりヤバいのは亜夜の目だった。

原理は知らないが赤く、それはもう赤く光っている。

「ちょ、ちょっと待て！人間は会話ができる！話し合おうじゃないか！しかもソレ八つ当たりじゃね！？」

「ダーイ！（しね）」

ジェイソンとフレディが肩組んで二人三脚して裸足で逃げ出すんじゃないかなと思うほど素晴らしい笑顔だった。

高町なのは

私は走っていた。動物病院に向かって走っていた。今日はもう寝ようかなと思いつ自分の部屋に行つて携帯でメールを送信した時だった。不意に頭痛がして昼間の時と同じ声が聞こえた。

（・・・聞こえますか？）

男の子の声で確かに聞こえた。昼間の時よりはっきりと。

（良かった！僕の声が聞こえて！黙ってなさい！）・・・はい）

あ、あれ？途中で亜夜ちゃんの声が聞こえたような？なんで？そう思つてしばらく考えていると、

（え〜と、もう話して大丈夫ですか？）

そう遠慮気味に聞いてくる。

（僕の声が聞こえる人、助けてください。あなたの力を貸してください

さい！)

だれが話してるの？私は不安になってくる。

(お願いします。僕の・・・ろに来てく・・・い！お・・・が・・・)

そして、その声は聞こえなくなったしまった。昏間聞いた声。その時その声の元に行ったらあのフェレットがいた。もしかするとまた助けを求めている子がいるのかもしれない。私が助けられるなら助きたい。そう思ったら行動していた。パジャマから私服に着替えてこっそり家を出た。そして動物病院に着く手前で嫌な音がした。私はとっさに耳をふさぐけど効果は無かった。

キイイイイイイン！

そしてその音が鳴りやむと周りを変化していた。空が赤や緑や黄色とか色んな色がオーロラみたいに絡まりあって複雑な色をしている。どうしてそんな事になっているか分からないけどとりあえず私は病院へと急いだ。そこで私は生涯忘れない出会いをした。そう私は魔法と出会った。

斎藤一樹

「おーーーーーたーーーーーすーーーーーけーーーーー！」

俺はひたすら亜夜から逃げていた。今の亜夜は、口は三日月の様になり、顔は暗く(色的には黒)、そして目が赤く爛々と光っている。漫画やアニメで見る分にはまあ面白いだろうけど、これ実際にやられるとめっちゃくちゃ怖え！下手すつとトラウマですよ！そんな訳で必死に逃げている。気功で身体強化しているはずなのに差はひ

るがらない。まあ、縮まらないだけマシかも知れんね。そうして
ると、

『クソ野郎 魔力反応あり。更に結界も張られたようです』

そうスサノオが言ってくる

「結界!?!どこから!」

『このまま直進、約500メートル先です』

あちゃ〜、ユーノはこの先か。このままだと不味いな。俺はまず
亜夜を正気に……。戻せない。亜夜をチラツと見たけどあれ
に関わったら碌な事にならん気がする。ユーノには悪いがこのまま
合流するとするか。俺はそのままスサノオのナビ通り進むのだった。
走る事二分、目的の場所に着いた。すると反対からなのちゃんが走
ってくるのが見えた。

「あ、あれ?一樹お兄ちゃん?何でここに?」

肩で息をしつつ俺に聞いてきた。俺は後ろを指さし、

「亜夜から逃げてる最中」

と言うと、なのちゃんが俺の後ろをヒョイとみて、ガタガタ震えだ
した。

「か、一樹お兄ちゃん?亜夜ちゃんに何したの!?!」

「いや〜、いつも通りにからかったら虫の居所が悪かったみたいだな。そしたらああなったwww」

「wwwじゃないよ！あれどう見たって普通じゃないの！」

「なのちゃん、現実逃避は良くないぞ！現状をしっかりと把握しよう！」

「元凶は一樹お兄ちゃんだよね！？」

「いや、全ての元凶は変な夢と変な声らしいぞ？」

それを聞いてなのははハツとなる。

「え！もしかして亜夜ちゃんも聞こえたの！？」

「ああ、ついでに俺も聞こえた」

「そ、そうなの？」

「おう、そこで此処まで来たんだけど、「ドガアアアーン！！！」なんぞ？」

俺は音のした方向を見る。すると動物病院の庭から音がする。亜夜もそちらを向いている。俺となのちゃんは庭へと入っていくとそこには、ウネウネした化物の攻撃をかわすユーノがいた。何度かわすが体当たりの衝撃で宙に浮く。

「あー！」

「で、何なのあれは？」

そう言つてウネウネしてる化物を指す。

「あ、あれは「キエエ（ガゴン！）アベシー！」「お兄ちゃん二度目はつまんないよ？」・・・説明しても良い？」

頭を押さえのたうちまわる俺をよそに「どうぞどうぞ」と進める亜夜となのちゃん。

「あれは、ジュエルシードと言つて非常に強いエネルギー結晶の異相体です！今の僕の魔力じゃ何もできないけど、あなたなら何とかできるかもしれない！」

そう言つてなのちゃんを見る。

「え、え？」

「お願いします！僕に力を貸してください！お礼はします！必ずします！..」

そう言つて頭を下げるユーノ。

「え、ど、どうすれば良いの？」

「これを、それを手に、眼を閉じて心を澄ませて」

そう言つて器用に首にかかっていた宝石をはずしなのちゃんに渡す。なのちゃんが両手で受け取ると「ドックン」と心臓の鼓動の様

に鳴動する。

「管理権限、新規使用者設定機能フルオープン。」

すると、なのちゃんの下に大きな魔方陣が現れる。それを見ていた亜夜が「ホエエエエ」と声を上げていた。

「繰り返して言って。風は空に、星は天に」

「風は空に…、星は天に…」

「不屈の魂はこの胸に」

「不屈の魂はこの胸に！」

更に力強く宝石が鳴動する。

「この手に魔法を」

「この手に魔法を！」

「レイジングハート、セットアップ！」

するとレイジングハートが強く輝きだし、

『stand by ready・set up』

そう応えた。すると魔方陣から魔力があふれ、空に円柱状に伸びていく。螺旋状に帯が出てそれと共になのちゃんが宙に浮かぶ。

「なんて、魔力・・・」

ユーノがポツリと呟く。

「ふええええー！」

宙に浮いた事の驚いたなのちゃんが叫び声をあげる。そして目の前にあるレイジングハートがなのちゃんに挨拶をする。

『はじめまして、新たな使用者さん』

「え、あ・・・は、はじめまして」

『あなたの魔力資質を確認しました。デバイス、防護服共に最適な形状を自動選択しますがよろしいですか？』

「え」と、良く分からないけど、ハイ！」

『All right』

レイジングハートがそう答えると、光の奔流がなのちゃんを包み、来てた服が光になる。そこからデバイスとバリアジャケットが構築されていく。様々な部品が現れ、各部品が接続されていき先端にレイジングハートがついた杖型のデバイスになる。バリアジャケットは黒いインナーを身にまとい、胸部にプロテクターが現れ、そこから白をメインとしたバリアジャケットが構築される。どこか聖祥の制服と似たものがある。そして手首には青いプロテクターがついていた。そして杖をクルクルとまわし「ジャキッ！」と構える。それを見て俺は呟く、

「あれ？TV版じゃなくて劇場版タイプのバリアジャケットじゃん
！」

その咳きは幸い誰にも気付かれる事なく夜の闇に消えていった。

第二十一話（後書き）

レイ八さんのセリフが英語と日本語で別々になっていますが御容赦を。作者の英語レベルはかなり低いですwwww

第二十二話

高町なのは

私は空から地面に降りた。着ていた服は、聖祥の制服に似た服になっていて、手には杖の様なものを持つていた。亜夜ちゃんはこちらを見て目をキラキラさせていて、一樹お兄ちゃんは手を顎に当てて何かを考えているようだった。

「え？え〜〜！なに！？何なのこれ！？」

自分の姿をみても何が起こったのか全然わからなかった。そんなときジュエルシードの異相体って言われた怪物見たいのがコツチに攻撃してきた。踏みつぶそうとして落下してくる。私はとっさに後ろにジャンプすると空に浮かび上がった。

「え、えええっーーーーー！！！！」

驚いているとレイジングハートが聞いてくる。

『魔法についての知識は？』

「全然！まったくありません！」

『では、全て教えます。私の指示通りに。』

「はい！」

今度は怪物が身体の一部を槍のように伸ばしてきた。

「それ、跡形も残らないの・・・」

「おつといかん、豆鉄砲だった」

いかんいかんと言いながら一樹お兄ちゃんは頬をかく。そ、それよりも！

「か、一樹お兄ちゃん！何で空飛べるの!？」

「え!？」

そう言つて私を見て、左右を見て、下を見ると、

「あああああ—————!!!!!!!!」

その叫びはまるで自分が空を飛んでいるのにやっと気がついた様な感じだった。その時、上に浮かびあがろうと平泳ぎの様に何度か宙を泳いだ後落ちて行った。落ちる前、ご丁寧に亜夜ちゃんとフェレットを私に預けて。

「お兄ちゃん!？」

亜夜ちゃんの声でハツとする。この高さから落ちたらひとたまりもない。私は慌てて後を追う。地面がみるみる近づいていく。間に合わない！

ダン！

音が聞こえると同時に土煙が上がる。私は亜夜ちゃんをおろして一緒に落下した場所に駆けつける。

『お兄ちゃん（一樹お兄ちゃん）！！』

「呼んだ？」

そう呑気な声と共に土煙の中から一樹お兄ちゃんが出てくる。私たち二人は『だあ！』と言いながらずっこける。し、心配してそんなの。亜夜ちゃんも頬をプクーと膨らませている。

「ちよつと、お兄ちゃんこんな時までふざけないでよ！！」

「いや、悪い悪い。こうなんかなのちゃんから期待の籠った目を」
S「私そんな目してないよ！？」
「なん・・だと！？」

心底驚いた様に言われても。

「だってさつき「何で飛べるの！？」って振ってきたじゃん！」

「純粹に驚いただけなの！！」

「いきなり空飛んだら誰だって驚くに決まってるじゃない！」

そう私と亜夜ちゃんは抗議する。そう言つと一樹お兄ちゃんはちよつと「しゅん」となり肩を落としている。そして顔を上げると何か気づいたように「あつ」と声を上げる。その声を聞いて亜夜ちゃんと振り向くと怪物が体当たりして来る最中だった！？

『きゃあああ——！！？』

そう叫びながらとっさに杖を横にして防ぐ体制をとる。するとレイ

『封印のためには、接近による封印魔法の発動が大威力魔法が必要です』

そうやってきた。しばらくならみ合いが続くと三体はクルツと背中を見せて逃げ出していく。

「あ、逃げた！」

私はそのあとを急いで追うけど、

「速い！追いつけない！・・・あんなのが人のいる所に出たら大変な事になっちゃう！レイジングハートさっきの光遠くまで飛ばせない？」

遠ざかる怪物の背中を見る。悔しくてレイジングハートを持つ手に力が籠る。それにレイジングハートが反応する。

『あなたがそれを望むなら』

それを聞いて私は付近で一番高いビルに着地する。そこは逃げていく三体が良く見える恰好の場所だった。私は深呼吸をして息を整え集中する。すると胸の中で心臓とは別の何かが強く鼓動する。

ドクン

そこから溢れる力をレイジングハートに送るとレイジングハートの形が変形する。

『モードチェンジ、カノンモード』

するとレイジングハートの先端がレイジングハートを中心とした丸い形から、槍の様な鋭い形になり、手元にトリガーが出てくる。

「まさか封印法！？あの子砲撃型！？」

そして更に力を送り続けるとレイジングハートが、

『ロックオンの瞬間トリガーを引いてください』

そう言われると目に照準が映る。白い照準が三つそれぞれ怪物を追っている。照準はまだそろわない。焦りが出てトリガーを今にも引いてしましそうになる。まだ、まだ、

ピピピピ、ピー！

そろった！それと同時にトリガーを引く。撃ち出されたのは三発。三発目を撃った瞬間反動で後ろに吹き飛んでしまった。どんどん怪物に近付きまず一体。それとほぼ同時に二体目。そして一番遠くにいた三体目に命中する。

グオオオオオオー……

最後の叫びは空に消えそこに残ったのは三個の青い宝石だった。

斎藤一樹

……実際その戦闘を見ると絶対に信じられないよね。普通は空を飛ぶのだって難しく、いくらデバイスがインテリジェントデバイスだからってそうホイホイ空を飛べる訳でもない。現に飛べない

やつだつて沢山いるし、俺だつて飛んで戦闘は出来るがそれだつてかなり訓練したんだ。いやはや才能つて凄いよね、いやマジで。これからホント毎日「高町道場」かね〜？そんな事を思っているとなのちゃんの方も終わったようだ。俺は再び亜夜とユーノを小脇に抱えなのちゃんがいるビルの屋上に飛んでいく。

「お〜す、お疲れ様〜」

そう言つてなのちゃんに声をかける。

「あ、一樹お兄ちゃん」

コツチに気付いて近付こうとするが、上手く力が入らないのか上手く立てないでいる。それを見かねた亜夜がなのちゃんに近付き手を貸す。「ありがとう」と言つてなのちゃんは亜夜の手をつかみ立ち上がる。そうすると二人でこつちに近付いてくる。今俺の前には三つのジュエルシードが浮かんでいる。ユーノはどこか安心しているようだった。

「これがジュエルシードです」

「綺麗な石だね」

そう言つてきたのは亜夜だ。まあ、そんな可愛らしい物ではないのだが。するとユーノがなのちゃんに、

「レイジングハートをジュエルシードにかざしてください」

「いじつ?」

首をかしげつつなのちゃんはレイジングハートをかざす。するとジュエルシードはレイジングハートの中に吸い込まれた。

『ジュエルシード、ナンバー18、20、21を回収しました。』

そうレイジングハートが報告する。するとなのちゃんのバリアジヤケットが解け私服に戻る。その手にはレイジングハートがしっかりと握られている。

「危ないところをありがとございました」

ユーノがそう言って頭を下げる。フェレットの状態でやると何とも変な感じだ。

「ま、お互いまだ自己紹介もしてないしそっから始めるか。そのフェレットは事情説明もよろしく！」

俺は全員を見渡し提案する。その提案に全員が頷く。

「そうだね。じゃあまず私からするの。高町なのは、聖祥大付属小学校の3先生だよ」

「私は、斎藤亜夜。なのちゃんと同じ学校のクラスメイトです」

「僕はユーノ・スクライア。信じてもらえないかも知れないけど、この世界とは別の世界から来たんだ。別の世界で遺跡の調査をしていてそこで見つけたのがさっきのジュエルシード。とても危険な物だって分かったから「管理局」保管してもらおう為に船を手配したんだけど、その船が運搬中に事故にあったみたいで、それでジュエルシードが落ちた場所がこの付近だって判ったから何とか封印しよう

としたんだけど・・・」

「魔力が尽きて、さっきの怪物に負けて負傷した所をなのちゃんに拾われた。そんなところか？」

「う・・・そうです」

ユーノが若干シヨボーンとしている。

「管理局には連絡したのか？」

「いえ、急いでたので連絡はしていません・・・」

「駄目じゃん。事件、事故があつたらまずそれを対応してくれる所に連絡。こつちの世界じゃ常識だぞ？」

「・・・すみません」

ズーン、と効果音が付いてそうな程ユーノが落ち込む。

「ねえねえ、お兄ちゃん」

「ん？何だ？」

そう言って振り向くと亜夜となのちゃんが「じー」っとこつちを見ている。

「お兄ちゃんまだ自己紹介してないよね？」

「それに、何で空を飛べるかも説明してもらってないの!」

おふう、そうでした。それも説明しなきゃだな。流石に誤魔化せそうにないし。ズーンと落ち込んでるユーノに対して自己紹介を始める。

「はじめまして、斎藤一樹だ。亜夜とは兄妹でなのちゃんとは友達だ。で、こっちが俺のデバイスでスサノオだ」

俺はそう言って首に下げてるドックタグを引っ張り出す。

『はじめましてみなさん クソ野郎 のデバイスのスサノオです。よろしく願いします。』

「「「え?」「」」

みんなは何に驚いたんだろうwww

「そんでもってユーノ、一応俺は「管理局」の士官学校を出てるからこれからジュエルシードの探索俺に任せてもらえるか?と言いたいところだけど人員がたんね からとりあえず協力ってことで良いか?」

・・・ちよつとした間を挟んで

「「「ええ~~~~~~~~!!!!」」」

案の定三人とも驚いた。はあ、これから土郎さんとかにも知らせなきゃなんないし気が重いな。大丈夫かな俺?この後の事を考えるとそう思わずにはいられないのだった。

クロノ・ハラウン

今日の仕事を終え、デスクで書類整理していると久しぶりにあいつから連絡が入った。メールが届いていてそれに気付いたエイミィが声をかけてくれた。

「ん？クロノ君。カズキからメールが来てるみたいだよ？」

「ホントか？」

「うん、ほらそこ、受信欄にカズキのメールが」

・・・ここで僕は一瞬開けるかどうか迷った。はっきり言ってカズキが関わるとかなりの確率で碌な目にあわない。士官学校時代に嫌と言うほど巻き込まれたのだ。そう思っていたがエイミィが、

「じゃ、開けるよ。えっつと何々？」

クロノへ

元気ですか？

楽しいですか？

最高ですか？

特に何もないですか？

「何これ？」

そんな事僕が知りたい！そう思っていると、

「クロノ執務官、封書が届いています」

そう言つて一人の事務官が僕に近付いてきた。

「誰からだ？」

「えー、カズキ・サイトウと書かれています」

エイミーと顔を見合わせる。とりあえず事務官から封書を受け取る。しかし何と言うタイミングで届くんだ。封書を確認しているとちよつとした厚みがある中には数枚の紙が入っているようだった。そしてもう一つの事に気がつく。

「消印がない・・・」

そう呟く。エイミーも「え？」と言う顔になっている。僕は慎重に封書を開け中の紙を取り出す。中にはA4の大きさの紙が三枚程入っていた。一枚目は普通の手紙だったなんてことは無い。最近あった事が書かれている。そしてもう一枚目を見てみる。それを読むと僕は頭を抱える。その様子を見てエイミーが声をかけてきた。

「どしたのクロノ君？また何か厄介事？」

「ああ、それも結構事が大きくなるかも知れない。エイミー、僕はこの事を艦長に報告してくる」

「分かったよ。後は私でも出来そうだからやっつくよ」

「ごめん、助かる」

「良いつて、後でちゃんと埋め合わせしてもらおうから」

「分かったよ」

そう言つて僕は艦長室に向かうのだった。カズキから届いた「報告書」を持って。その報告書にはこう書かれていた。

事故発生報告書

1 発生時間（現地時間）

新暦65年4月5日 20時35分頃

2 発生場所

第97管理外世界 地球 日本 海鳴市

3 当事者

漂泊民族 スクライア一族

ユーノ・スクライア

4 事故内容

上記当事者が遺跡から発見した「ジュエルシード」が管理局へ運搬途中事故に遭遇し上記場所に散らばったもの。当事者が回収している所に本職が居合わせ事情聴取したところ発見したもの。なお「ジュエルシード」について判明している事は以下の通りである。

5 ジュエルシードについて

スクライア一族が遺跡において発見したもの。古代に製造されたエネルギー結晶体、ロストログアと判明。個数は全部で21個と判

明している。暴走した際次元震が発生する可能性があり。早急な封印処理が必要。暴走時、そのまま「暴走体」となるか周辺の動植物を取り込む「暴走体」のいずれかになる。動植物をとりこんだ際その特性を引き継ぐため非常に厄介となる。

6 その他

現在、現地協力者と共に、封印処理を実行中。しかし上記の特性から早急の処理が必要なため、増援を要求するものである。

以上 斎藤一樹

第二十二話（後書き）

クロノ君久々の登場！主人公なのは邪魔しかしてないWWW

第二十三話

斎藤一樹

俺と亜夜となのちゃんはユーノを連れて高町家に戻っている。今どう説明したら良いか考えてるけどいかんせん中々思い浮かばない。まあ、ありのままを話して、御三方（士郎さん、恭也さん、美由紀さん）の協力を取り付けられれば戦闘になってもある程度余裕が生まれるだろう。幸いさっきの戦闘は全部スサノオが録画済みだし。これとセットでユーノがしゃべれば大丈夫だろう。原作ブレイクになるがこの時点ではつきりさせといたほうが良いんじゃないかと考えている。気持ちに余裕があるというのは思いのほか重要だと俺は思っている。コソコソするより堂々と行動出来た方が良いしな。そう考えていると間もなく高町家に着くと言う所でのちゃんが口を開く。

「ねえ、一樹お兄ちゃん。どうしてもお父さんたちに話さないと駄目?」

「駄目って事は無いけど、何で?」

「何でって言われても・・・」

「士郎さん達に心配させたくない?」

「・・・うん」

「じゃあ、大丈夫だ」

「え？なんで！？」

「その理由はたった一つ、シンプルな答えだ。テメーは俺を・・・じやなかった。話さない方が心配だからだよ」

「それはそうだけど、でもとっても危ないんだよ！？」

「いやいや、それは俺のセリフですよ？」

この子は自分の事を棚にブン投げて何を言いやがりますか。

「それに、いくらなのちゃん魔法を使えるからって実力は士郎さん達の方があると思うぞ？」

まあ、空を飛ばないっていう条件は付くけど・・・でもそれも何とかしちやいそうだから怖いんだよなあ。戦闘民族は。

「そ、そうなんですか？」

ユーノが驚き聞いてくる。

「うん。多分戦い方に次第だとは思っけど一般隊員には絶対と言っていいほど勝ち目がない気がする」

「その人たちは魔法は・・・」

「使えない人です。リンカーコアねーし」

それを聞いて黙ってしまったユーノ。まあミッドの常識で考えたらあり得ないからな。そりゃー吃驚するだろう。でも実際稽古とか

しているとホントそう思うんだよね。確か「とら八」かなんかのOV
Aで銃弾かわしてたし。あり得ねーっての！

「ね〜ね〜、お兄ちゃん。私にもリンカーコアだっけ？ソレあるの
？」

「うん、亜夜もあるみたいだね」

「ホント！やった！魔法使える！それならなのちゃんの事手伝える
！」

グツとガッツポーズする亜夜、しかし俺は、

「でも、デバイスがないから無理だね」

「なん・・・ですって？」

ギギギ、と首を動かし聞いてくる。そんなショックだったのか。

「お、お兄ちゃん！」

「なに？」

「デバイス貸して！」

「無理」

「何で!?!？」

「これ、普通のデバイスじゃないし、俺専用だから他の人には使え

ない」

「え〜!」

「まあ、その辺は何かする予定なのでとりあえず今まで通り」高町道場「で稽古しとれ」

そう言うと亜夜は「む〜」とむくねながらも納得してくれた。それを聞いてなのちゃんは亜夜に聞く。

「亜夜ちゃんも手伝ってくれるの?」

「うん!みんなで探せばきつと早く見つかるよ!」

「で、でも・・・」

「危ないってこと?それなら大丈夫でしょ。お兄ちゃんも付いてるし。土郎さんと恭也さんもいれば百人力でしょ!」

むん!と言いながら力瘤を出す真似をする。

「ま、とりあえず土郎さんたちも心配してるだろうから家に入ろう。詳しくはそれからだ」

「え?でもこっそり出てきたよ?」

「いやいや、絶対に気付いてるから。多分玄関あたりで待ってるぞ?」

「確かにその通りかも」

俺と亜夜がそう答える。なのちゃんはいまいち信じられないのか
「そうかな」と首をひねっている。そして全員で高町家の門をく
ぐるとそこには恭也さんと美由紀さんが立っていた。俺はなのちゃ
んをみて、

「ほらね」

そう言うのだった。

高町家

今、俺達は高町家のリビングにいる。そこには高町家全員と俺と
亜夜とユーノがいる。初めはなのちゃんが抱いていたユーノにみん
な興味があるみたいで見ていたが、俺が出来事を話し始め、ユーノ
がしゃべり始めると終始無言になった。魔法の事、ジュエルシード
の事、怪物との戦闘の事、等々それを説明して俺が録画していた映
像を見せてみんな驚きを隠せなかった。何せ空を飛んで、ビームを
撃つのだ簡単に信じられる訳がない。映像ならCG技術で作れるか
らそう言われた方がまだ信じられる。最終的になのちゃんがみんな
の目の前で変身して納得するのだった。

「と、言う訳で力を貸してもらいたいのですが」

と俺は士郎さんと恭也さんに聞く。

「うーん、見た限りだと私と恭也だけでも何とかかなりそうだが？な
のはが一緒じゃないと駄目なのかい？」

「そうですね。ジュエルシードですがこれを封印するには魔力が必

要です。それは現状俺となのちゃんしか出来ません。そして最悪、魔力でしかダメージを与えられない可能性があるので、そうなるとなのちゃんにも参加してもらおうのが現状では最良だと思っんです。そうなるとう郎さんと恭也さんには困りになって貰ってなのちゃんがその隙に攻撃準備。そうするのが基本になりそうです」

そう俺が提案するととう郎さんが聞いたきた。

「さっき言ってた管理局の動きは？」

「連絡はしてあるのでそのうち来ると思います。ただ直ぐに来れるかどうかは分かりません」

「何でだ？」

恭也さんが聞いて来る。

「あゝ、万年人手不足つても理由ですね。後はこれ以上に重要な案件があればそっちが優先されるでしょうし」

自分で言ってるなんか情けなくなってきた。

「管理局って言うのはどんな組織なの？」

美由紀さんが聞いてくる。

「えゝつと、次元世界をまとめて管理する、警察と裁判所が一緒になった様などころで、他に各世界の文化管理とか、災害救助とかを行う場所で、他に細かい仕事は多くあるんですけどおおざっぱに言えばこんな感じですかね」

「警察と裁判所が一緒になってるの？それって大丈夫なの？」

「良くは無いと思いますよ？管理局が法を決め、法を適用して、法を執行してますし。権力が集中し過ぎてますから」

「・・・それは、まずいな」

「え？どういう事？」

亜夜となのちゃんが聞いてくる。

「え〜とな、極端に言うとな管理局が有罪って言えば無罪の人でも有罪になっちゃうしその逆もあり得るんだ。日本じゃそんな事ないだろ？どんなに偉い人でもその法律でちゃんと取り締まられるだろ？管理局の場合偉い人が悪い事をして無罪になっちゃうかもしれないんだ」

「何それ！駄目じゃない！」

「そんなの良くないよね？」

亜夜となのちゃんがそれぞれ言うてくる。そうだよな。その通りだよな。

「そんな組織で大丈夫なのか？」

「大丈夫だ問題n・・・いえすつごく心配ですけど、連絡したのは信頼のおける人物なので大丈夫です」

恭也さんの問いについてネタで答えそうになるが言いなおす。

「その人物ってどんな人なんだい？」

「え、正義感が強くて、そういう不正が許せないタイプの人間です。士官学校の時の同僚ですよ」

「実際にあってないから何とも言えないが一樹君がそう言ってるのなら大丈夫だろう」

ある程度納得してくれた土郎さん。これなら大丈夫そうだ。

「一樹、それでそのジュエルシードってのはどんな形をしているんだ？」

「あ、それは実際に見てもらった方が早いので見せますよ。なのちやんジュエルシード出して」

「うん」

そう言うとななのちゃん（桃子さんが写真撮影していたためバリアジャケット姿）レイジングハートからジュエルシードが一つ出てきてテーブルの上に置かれる。

「これがそうなのか？」

恭也さんが手に持って近くで見る。

「ええ、今は封印処理してるから手に持っても大丈夫ですけど、それ以外は触れないください。何が起こるか見当がつかないので。」

後は・・・何か注意事項あるか？ユーノ？」

「えーっと、ジュエルシードは願いをかなえるって言われていますけど願いが叶ったって言うのは聞いた事がないんだ。だからやっぱり見つけたらすぐに連絡してくれるのが一番だと思う。全部で21個、そのうち3個を見つけたから後18個だね。注意事項としてはそれぐらいしかないと思う」

「そっか、とりあえず現状はこんなもんですね。無理にとは言いませんし、なのちゃんに絶対危ない事をさせたくないと言うのであれば探索には同行させません。この件は無かったこととしてもらっても「待つて!」・・・なのちゃん？」

「一樹お兄ちゃんどうしてそんなこと言うの？」

なのちゃんが悲しそうな顔をして聞いてくる。

「・・・さつきも言ったように凄く危ないからだ。下手をすれば命に関わる。そんな事に関わってください何て俺は頼めない」

「それは私が子供だから？」

「それも理由の一つだ。他にもあるけどね」

そう言うとななのちゃんは土郎さんと桃子さんに向き直り力強く言う。

「お父さん、お母さん、私ユーノ君と一樹お兄ちゃんのお手伝いしたい！」

「・・・」

「なのは!？」

士郎さんと桃子さんは黙っていて、ユーノが驚いて声を上げる。

「このままじゃみんなが危なくなっちゃう。亜夜ちゃんも、アリサちゃんも、すずかちゃんも、はやてちゃんもいる海鳴が危なくなっちゃう。私それを黙って見てるのなんか絶対にやだ。それに私、手伝う事が出来る力がある。レイジングハートも協力してくれるって言ってる。だからお願い、私もお手伝いしたい!!」

それを聞いて士郎さんは考えているが桃子さんが、

「私は反対はしないわ」

そう言ってくる。

「お母さん!!」

なのちゃんが嬉しそうに声を上げる。

「なのはが此処まで言う事なんて今まで無かった事だもの。私はなのはの好きにさせてあげたい」

そう言っつて優しく微笑んでなのちゃんの頭をなでる。

「・・・なのは、さつきも一樹君が言っつた様にとつても危ないんだよ?それは勿論分かっているね?それでも手伝いたいのかい?」

「うん!!」

「・・・ふう、分かった。なのはの好きにしなさい。お父さんのと恭也もいるから大丈夫だと思うけど、ちゃんと一樹君の言う事を聞くんだぞ?」

「ありがとう!お父さん、お母さん!」

そう言っただけのちゃんは嬉しそうに二人に抱きついた。良い家族だ。俺は改めてそう思う。これなら予想以上に早く終わるかも知れない。そう思っていると聞き忘れていた事があつたのを思い出した。

「ユーノ、そう言えば怪我とか大丈夫なのか?まだ真の姿に戻ってないけど?」

「え?ああ、怪我とかは大丈夫大した事ないから。姿の方は魔力がまだ戻ってないから当分はそのままだね」

「え?お兄ちゃん、真の姿ってどういう意味?」

気になった亜夜が聞いてくる、高町家の面々も気になっている様でこっちを見ていた。

「あゝ、言っただけじゃなかったっけ?ユーノはジュエルシードを集めて真の姿に戻ろうとしているんだ!」

「な、なんだって!」

そう言つと驚く亜夜となのちゃん。

「そして、真の姿に戻ったユーノはその巨大な力で次元世界の征服

を目論んでいるのだ！！そしてその目的を阻止する為に魔法の力を手に入れた一人の少女が立ちはだかる！！その少女は仲間と力を合わせてユーノを倒す事に成功する！！だがしかし！次元魔王ユーノは死ぬ間に不吉な言葉を残す！「例えこの僕を倒しても第二、第三の僕が現れジュエルシードを狙うだろう！」そう言い残すとユーノは消えていくのだった。かくしてこの海鳴につかの間の平和が訪れるのだった……。即興としては割と良く出来たと思うんだけどどうよ！」

「「どうよ」「じゃないよ！僕そんな事しないよ！次元魔王って何なんだよ！」

「不覚にもちよつと面白そうって思った自分が情けないわ！」

「だ、駄目だよユーノ君そんなことしたら」

「しないよ！！！」

なのちゃんそこ信じちゃうんだ。

「あれ？じゃあ、真の姿って言うのも嘘なの？」

「ん？真の姿は本当です。ジュエルシードは全く関係ありませんが」
美由紀さんが聞いてきたので答える。

「今は魔力が無くなっちゃってるから戻れないけどしばらくしたら戻れます。なののはもう見てるよね？」

ユーノはそう言ってなのちゃんを見るが、

「え？私見てないよ？私が拾った時はもうフェレットだったよ？」

「え？そうなの？」

「じゃあ、元も姿に戻るか。俺の魔力少し分けてやるよ」

俺はそう言っただけでユーノに魔力を分ける。まあ、満タンにできるほど上げられないけどね！ユーノはAランク保有なので満タンにすると俺が枯渇するwww

「ありがとう、カズキ」

そう言うとユーノが光に包まれ、光が収まるとそこには民族衣装の様な服を着た少年が立っていた。

「あれがユーノの・・・本当の姿」

俺はそう呟いた。誰からも突っ込みがないと悲しい物である。

「ああー！！夢でさっきのと戦ってた男の子！！」

二人がユーノを指さして叫んでいる。あ、そっか。二人とも見た事はあったんだ。どうやって夢に出たのかは知らないけど謝っている所を見ると何かしらやったのか？それとも二人が魔力を感じてその光景を無意識に見たのかは分からなかった。ペコペコ謝っているユーノをほっとして土郎さんに聞く。

「じゃあ、土郎さん、恭也さん、明日から探索お願いします。俺はいったん家に帰ります。亜夜はもう遅いので泊めてもらっても良い

ですか？」

「別にかまわないけど、一樹君は泊らなくて良いのかい？」

「ええ、この事を父さんにも言つとかないと不味いので。ちょうど家に戻っている事ですし」

「一馬さんも関係者なのかい？」

「ええ、一応管理局員です」

「・・・そうか、じゃあなのはがお世話になると伝えておいてくれるかい？」

「ええ、分かりました。伝えておきます。」

そう言つて俺は玄関に向かう。それに気付いた亜夜が聞いてくる。

「あれ？お兄ちゃん帰っちゃうの？」

「ああ、この事父さんにも伝えておかないといけないしね。亜夜は今日は泊つても良いつて言つてたぞ？」

「何でお父さんにこの事言つつの？」

「あれ？言つてなかったっけ？父さん管理局員だよ？」

「え〜！そうだったの！」

「うん、そんでもって俺のデバイスは父さんの手製なんだよ」

「そ、そうなの！じゃあ、私も帰ってお父さんに話する！」

「そうか？もう夜遅いし明日でも大丈夫だぞ？」

「善は急げって言うでしょ！」

「わ、分かった。それなら帰る準備して来い」

亜夜の剣幕に押されつつ俺はそう言い、亜夜と一緒に帰る事になった。土郎さんに一声かけ、亜夜と一緒に帰路につく。これからジュエルシードをめぐるのひと騒動、何とか穏便に済まさないとな。フェイトとプレシアの事もあるし。リニスにも言っとかないとな。そう思いながら家に向かうのだった。

第二十三話（後書き）

ちよつと長くなりましたがこんな感じになりました。初めはフェイトとかチラツと出す予定だったのにWWW

第二十四話

?????

そこはとあるビルの屋上、あたりは暗くなっており屋上からは海鳴市が一望できて、街の明かりが綺麗に輝いている。その屋上には一人の少女が立っていた。屋上だけあって強い風が吹いていてその長い髪が風で揺れている。その少女は海鳴市を眺めている。年のころは8〜10才くらいだろうか？金髪を黒いリボンでツインテールにしており、黒い服に黒のブーツ、そして手には三角形の金色のプレートを持っていた。

「第97管理外世界・・・現地名称「地球」母さんの探し物、ジュエルシードは此処にある。行こうバルディッシュ」

『yes , sir』

少女が呟くと、手に持っているプレート、バルディッシュがそれに答える。そしてその呟きは誰に聞かれる事なく夜の空に消えていった。

斎藤一樹

ジュエルシードの搜索が決まり、チームを組み翌日から開始した。俺となのちゃんを分けて俺の方に恭也さんと亜夜、なのちゃんの方にユーノと土郎さんと美由紀さんって感じに決まった。俺は学校を休んで探しているが、亜夜となのちゃんは学校終了後に搜索する予定だ。そんな感じで今はユーノ、土郎さん、恭也さん、美由紀さんと一緒に回っている。ユーノは土郎さん達の実力を知らないのを見

たい、と言ってきたので一緒にいる。見つけて戦闘になれば色々試す予定だったのでちょうどいい機会だった。なのでスサノオとユーノに索敵してもらいながら色々回っているが中々見つからない。なのちゃんが劇場版のバリアジャケットだったのでTV版であった所にあるか分からなかった為、今はそれを確かめるため第一発見場所である「神社」に向かっている最中である。そして神社の階段の下に着いた時、スサノオが反応した。

『魔力反応確認しました　クソ野郎、この階段の上です。現在暴走状態の様です』

「げ！マジで!?!」

不味い、今回は結界も張られていない。急がないと誰かに見られちまう。俺とスサノオの会話が聞こえたらしく士郎さん達が直ぐに反応する。

「一樹君急ごう。」

「そうだね、ぐずぐずしてたら不味いんでしょ？」

「そうだな。急いだ方が良い」

そう言ってくる士郎さん達。少し興奮状態なのか？すつごくウズウズしてるように見えるんだけど？まあ、急いだ方が良いのは事実なので全力で階段を駆け上る。その間にスサノオの中に保管しておいた士郎さん達の武器を出し渡しておく。流石に堂々と持ち歩くのは不味いのでこういう手段をとる事にした。隠し持つのもありだけど万が一って事もあるので念の為に事だ。そして神社に到着するとそこには、オオカミの様な見た目からして狂暴そうで3〜4mは

あろうかという怪物と、ジャージ姿の女の人が倒れていた。すると怪物が女の人に飛びかかった。そこからの俺達の行動は速かった。まず俺が化物と女の人の間に割り込み女の人に振り下ろされる前足を「ドン！」と受け止める。その際地面が「ボコ！」とへこみ小さいクレーターを二つばかりつくる。そのすきに美由紀さんが女の人を抱えその場を離れ、恭也さんが俺が受け止めた前足を切断。土郎さんが怪物の首をねらい斬りかかる。しかしそれは間一髪のところであつてしまった。怪物が後ろに大きく跳躍し距離をとる。俺達は美由紀さんをかばうように陣形を組む。即席の連携としてはまあまあだろう。怪物は俺達を警戒し、「グルルルウウ」と唸り威嚇している。土郎さんと恭也さんが斬った傷はたちまち治ってしまった。しかし攻撃がきかない訳では無さそうだ。致命傷があるかどうかは疑問だが。とりあえず色々試してみるか。

「カズキ、結界を展開したよ！」

「サンキユ、ユーノ！土郎さん、どうやら攻撃がきかない訳では無さそうなので、色んなところを攻撃して見てください。ただ致命傷がないかもしれないので注意してください」

「分かった。恭也、久しぶりの実戦だ。じっくり感覚を掴んでいくぞ」

「分かった」

すると二人は警戒している怪物に向かって行く。そこからは一方的な展開だった。スピードで勝るはずの怪物が攪乱されている。二人の連携は息もぴったり合っており、確実に怪物に攻撃を加えている。相手の攻撃は絶対に受けず、かわしていく。時には飛針とほりや鋼糸を使い確実に相手を封じていく。しかし、与えた傷は直ぐに治って

しまつ。ここで二人は致命傷を与える事に切り替える。今までは足や胴体を軽く斬る感じだったが、それが深く急所に近い位置になって来ている。そしてそれは起きた。土郎さんの攻撃が怪物の首をはねたのだ。怪物は数歩進むと「ズウウウン！」と音を立てて倒れた。

「カズキ、土郎さん達って何者？」

「え〜つと、多分地球でトップレベルの剣士かな？」

流石に裏世界一の用心棒と答える訳にもいかないので無難に答える。ユーノの問いにそう答える。ユーノがブツブツつぶやいている。まあ、シヨッキングな光景ではあったからな。すると警戒していた二人が此方に向かって歩いてきた。

「とりあえず終わったよ。一樹君封印してもらえ「土郎さん！」な！」

俺はそう叫ぶと土郎さんの背後に回る。そこには首がない状態で動き土郎さんに攻撃をしようとしていた怪物の身体がいた。薙ぎ払うように攻撃を加えてくる。俺はその前足に肘を叩き込み攻撃をはじき返す。魔力を籠めるのも忘れない。すると前足は千切れ飛び怪物がまた跳躍して後ろに下がる。

「大丈夫ですか？土郎さん」

「すまない、助かった」

「いえ、流石に死んだふりをしてくるとは思わないですよ」

「まっただくだな」

しかし、そうすると物理的な攻撃はほとんど意味がないようだ。それを証明するように俺の攻撃した部分は未だ再生が始まらない。首の方は切れた部分から生えてきた。こっ、何と云うかアレだ。ナツク星人の腕の再生みたいな感じに生えてきた。それを見ていた美由紀さんは「うえ〜」と嫌そうな声を上げる。

「しかし、そうなるとやはり魔法による攻撃しかダメージは与えられないのか？」

「いえ、似たようなものみたいです。再生する速度が遅いだけで結局再生しちゃいましたし」

「そうか、そうなると封印しかないのか」

「みたいですね。スサノオ、ジュエルシードはどのあたりにある？」
俺はそうスサノオに尋ねる。

『ちょうど胸のあたりの様です』

よし、そしたらいつちょやりますか。そう決めると俺は魔力と気を練りはじめ合わせる。それを全身に流し、身体能力の強化をする。三人が驚いたようにこっちを見ている。そして俺は、地面を蹴り怪物に接近する。怪物との距離はおおよそ10m。その距離を一瞬で詰める。「縮地」そう伝えられる特殊な歩法、最近やつとものに出来た技でもある。怪物はまだ気づいていない。そして俺はその一瞬で怪物の胸に「貫手」を叩き込む。指をまっすぐに伸ばしその状態で突く攻撃だ。「貫手」は怪物の皮膚を裂き、肉を貫き、その奥に

あるジュエルシードを掴み引きずり出す。そして俺はその手に魔力を籠め、

「ジュエルシード封印！」

そう叫んだ。すると怪物が霧散し、そこには小さな子犬が横たわっていた。屈んで確認すると気を失っているだけで生きているようだ。女の人も無事だしとりあえず一段落だ。「ふう」とため息をつき土郎さん達の所に行くとき恭也さんが聞いてきた。

「一樹、さっき一瞬で距離を詰めたがあれは何だ？」

「えーっと、「縮地」って言う特殊な歩法ですよ」

「神速とは違うのか？」

「そうですね、神速とは別物ですね。」

そう聞いてくる恭也さん。神速は脳のリミッターを自力ではずす感じの技で、縮地は純粹に技術だ。死ぬほど頑張れば誰でもものもに出来る・・・多分。すると、美由紀さんが診ていた女の人が呻く、そろそろ目を覚ますかもしれない。

「まあ、一つ封印出来ましたし、一度戻りましょう。そろそろなのちゃんも帰ってくると思いますし」

「そうだな、とりあえず戻ろう」

「この人はどうしよう？」

「まあ、幸い怪我もないし、犬も気を失ってるだけだからそのままだな」

「そっか、仕方ないね」

神社も若干破損しているし、変に怪しまれてもゴメンである。仕方ないがそのままにする事になった。そして俺はジュエルシードをスサノオに入れ、神社を後にするのだった。

高町家

高町家に戻るとまずリビングでさっきの戦闘で分かった事や個人で気がついた事を話し合う。まず、攻撃自体は通じるのはほっとした。幽霊みたいにスカスカとなったらどうしようと思っていたところだこれは良い事である。ただダメージは与える事は出来なかった。攻撃した場所はあつという間に元通りになってしまった。それと致命傷と言える攻撃をしても無駄だった。下手に真つ二つにして分裂したら厄介だ。現に死んだふりなんぞしてきた訳だし。これだと非魔導師組は困るのみになりそう。後下手にジュエルシードを攻撃して、ヒビでも入ったりして壊れたらどうなるかわかったもんじゃないので、事前にどのあたりにあるか言っておいた方がよさそう。攻撃は受けるのかなりの重さだったのでかわす事、それが無理なら勢いを殺すなりしないと此方が致命傷を負いかねない。等々各自意見を出し合う、そう話していると「ドクン」そう音が聞こえ俺とユーノが顔を見合わせているとなのちゃんから「念話」が来た。

(一樹お兄ちゃん、ユーノ君聞こえる?)

俺が頷き、ユーノが答える

(聞こえるよ？なのはも今の感じた？)

(うん。近くでジュエルシードが発動した見たいなの、ここから近いから先に行くね)

それを聞いたら、スサノオが

『魔力反応を確認しました。此処からおよそ3キロの地点です』

それを聞いた全員が立ち上がる。

(まって！なのは！一人じゃ危ないよ！！)

(大丈夫！レイジングハートも付いてるから！)

(なのちゃん！まずどこかで合流しよう。ユーノも言ったが一人じゃ危ない！)

(大丈夫だよ、それに早く封印しないと危ないでしょ？大丈夫、無理はしないから)

(だから、それじゃ危ないって、もしもし？なのは？なのは！？)

そう言って念話を通じなくなる。あ、そう言えば確かこの後って確か「あの子」との戦闘になるんだっけ？原作を思い出してどうするか考える。このまま戦闘になって、土郎さん達の目の前でやられたらまずいかも・・・それに、この時の為に色々準備したのだ。このイベントは逃す訳にはいかない！そう強く思い準備を始めるのだった。

その隙に封印しようとしたけどあと一步のところまで空に逃げられてしまう。だけどそこにはさっきの女の子が待ち構えていて、

「ジュエルシード封印！」

そう言って暴走体をもっていた鎌で真っ二つにしてしまった。ジュエルシードは封印されたみたいだけど、あの子は一体何者なんだろう？一樹お兄ちゃんの言ってた「管理局」の人なのかな？私は話を聞いてみたくて、女の子のそばに近付いた。

「・・・あのー！」

呼びかけるとこっちを向いてくれた。

「あ・・・あなたは「近付かないで」・・・え？」

「それ以上近づいたら・・・」

そう言うと女の子は周りに魔力で出来た球を浮かばせた。

「ま、まって。私はお話がしたいだけなの。あなたも魔法少女なの？とか、どうしてジュエルシードをとか・・・」

そう聞いてみるけど女の子は答えてくれなかった、緊張が高まっていて私が近付こうとした瞬間、

「合意と見て宜しいですね!？」

聞きなれた声が聞こえ。この声は一樹お兄ちゃんの声だ。どこか

らともなくファンファーレの様な音楽も聞こえてくる。声のした方を振り向くと一樹お兄ちゃん？がいたけど服装がいつもと違っていた。前に見たバリアジャケット姿じゃなくて私服でもない。白いワイシャツに赤の蝶ネクタイ、黒いズボンに黒の靴、ぱっと見何かの審判さんみたいな恰好だった。首にはデバイスのスサノオさんがかかっている。顔は良く分からないお爺さんのお面を付けていた。

「か、一樹お兄ちゃん？」

恐る恐る聞いてみると、

「いいえ、私は一樹ではございません！」

「え？え？でもその首にかかっているスサノオさんだよな？」

そう指摘すると、一樹お兄ちゃんは自分の胸元を見て一瞬固まり、スサノオさんをワイシャツの中にしまい何事もなかったようにふるまう。

「はて？どこにそんなものが？」

「今しまったよね！？ワイシャツの中にしまったよね！？」

「私はD S A A（デイメイション・スポーツ・アクティビティ・アソシエーション）公式魔法戦競技会の審判！ミスター・ウルチです！！このバトルは公式、まほうしゅうじょうバトルMSBと認定されました！」

「スルーされた！？」

そんな私にお構いなく、説明を続けていく。

「ルールは簡単！お互いに非殺傷設定で魔法戦を行い、ギブアップ、若しくは戦闘不能と判断されたら負けとなります！ダウンのカウントはテンカウントとします！今回は特別ルールとして勝者にはこのジュエルシードが与えられます！」

そう言つて手に持っているジュエルシードを私たちに見せる。

「え？」

そう言つて慌ててさつきジュエルシードがあつた場所を確かめるとそこには何もなかった。女の子も吃驚している様で啞然としていた。

「それでは宜しいですね？MSファイ#ト#！！」

そう言つて高く上げた手を振りおろした。

「え？え〜〜！？」

私は状況が飲み込めず混乱していると女の子が魔力球を使って攻撃してきた！？慌ててガードしたけど間に合わず、

ドガーーーン！！

「キヤーーーーー！！！」

防ぎきれなかつた魔力球の一つが直撃してしまい落ちていく。地面に叩きつけられる。何とか直前に魔法で衝撃を和らげられたけど、身体がピリピリ痺れて動かない。そんな中、

「ワン！・・・ツー！・・・」

カウントを取る一樹お兄ちゃん（怒）なんだかとっても悔しい！！

「ナイン！・・・テン！勝者！謎の少女！！」

カン！カン！カン！カン！どこからともなくゴングの音が鳴り響いてきた。それを聞いてなぜか「負けた」という感じが襲いかかってきたの・・・どう考えても理不尽だと思う。そう思っただけでジュエルシードの受け渡しをしている一樹お兄ちゃんを見るのだった。

斎藤一樹

ありやく、なのちゃん瞬殺されちゃった。まあ、仕方ないかかなり混乱してたみたいだし。その点ではフェイトは直ぐに攻撃できたのは良いね。直ぐ立ち直ったし、この辺は戦闘経験の差なのかな？そう考えつつフェイトに近付く。目の前まで行くと、流石にフェイトも警戒しているがジュエルシードを出すと幾分警戒を解いてくれた。

「どうぞ、今回の賞品です」

「・・・ありがとう。・・・あの子は大丈夫ですか？」

「ええ、大丈夫ですよ。あなたの魔法で痺れているだけでしょう」

「そうですね、良かった」

そう言うとフェイトは安心したように「ホッ」と息を吐く。

「もしよかったら、名前を聞かせてもらえませんか？」

「・・・フェイト、フェイト・テストロッサ」

「フェイトですか。良い名前ですね。・・・おお！それとこのお手紙を預かっております」

俺はそう言つと手紙を差し出す。

「え？・・・私にですか？」

フェイトも驚いている。そりゃそうだろう、あつた事もない人からいきなり手紙を渡されるのだそりゃあ驚く。しかしそれでも受け取ってくれるのがフェイトだった。裏を見て更に驚いていた。そして俺は何かを聞かれる前に、

「それでは、アデュー！！」

そう言い残しさつさとその場から撤退していった。その時なのちゃんを回収するの忘れない。後でなのちゃんに色々言われそうだけど今は我慢してもらつとしよう。そう言いながら全力でその場を離れるのだった。

第二十四話（後書き）

なのちゃん瞬殺でしたwww。やっとフェイトが出せました！

第二十五話

フェイト・テスタロッサ

「アルフ、そっちの調子はどう？」

私は使い魔のアルフに聞く。あの女の子と戦闘から大分経つけどこっちを探す様子は無い。どうやら追ってはこないようだった。でも途中で出てきたあのお面の人は一体何者なんだろう？戦闘の審判を始めて、ジユエルシードをくれて、あの手紙を渡されて……。考えてもはじまらないその手紙にあった待ち合わせ場所はここから少し離れた場所だった。

「ああ、フェイト。こっちはさっき発動前の奴を一個見つけたよ」

「ホント！」

「ああ、でもフェイトと戦ったあの子、何者なんだい？まさか管理局の人間じゃないよね？まだ追われるような事はしてないけど」

「管理局とは関係ないと思うよ？魔法も全然使えてなかったし」

「そうかい？まあ良いさ、いざとなったらあたしがギッタングリッタンにしてやるさ！それはそうとフェイト、あのヘンテコな審判？から何を渡されたんだい？」

「・・・その事で話があるんだ。こっちに来てもらえるかな？」

「分かったよ。ちょうどサーチも終わった事だしちょっと待ってて

よ

アルフにそう言ってこっちに来てもらおう、そこで私はもう一度手紙を見る。表には何も書かれていなかったけど裏を見ると右下に差出人の名前が書いてあった。

「リニスより」

短く、そう書かれていた。リニス。私に魔法を覚えてくれた先生だ。お母さんの使い魔で何時も私とアルフと遊んでくれて、バルデイツシユもリニスが作ってくれたデバイスだ。でもある日突然いなくなってしまった。お母さんに聞いても話してくれなかった。ずっと、ずっと心配してた。でももうすぐ会えるかも知れない。聞いた事は色々あるけど、またみんなで暮らす事が出来るんだ。そう考え手紙を出してもう一度読みかえす。

「今夜、20時に海鳴中央公園で待っています。」

手紙にはそれだけ書かれている。初めは何かの罠かと思ったけど、まだ行動を開始したばかりの私たちを罠にかけるというのは変だと思ふ。それにさっきアルフも言ったけど追われるような事はしていない。そう考えると罠の可能性は低いと思ふ。じゃあ何のために？それを考えているけど全然答えが出なかった。結局行ってみないと分からないそう結論付けた。

「フエイト、お待たせ」

そう言ってアルフがすぐそばに現れる。

「それで話って何だい？」

「・・・これ」

「手紙?・・・これ!」

「アルフはどう思う?」

「これはあのヘンテコな審判から受け取ったやつだよな?」

「うん」

「うん、罠には何か変だね?こっちは動き出したばかりだし」

「私もそう思う」

「どっちにしても行ってみないと分からないね」

「そうだね、念のためアルフはちょっと離れた所で様子を見てて。罠だったら援護して」

「でも、フェイト。それじゃ、フェイトが危ないじゃないか」

「でも、罠だとしたらアルフはまだ向こうに知られてないから、私一人で行った方が良いと思うんだ」

「それは、そうだけど・・・」

「大丈夫だよアルフ」

フェイトはそう言ってアルフに微笑む。

「あゝ、分かったよ。でも少しでも危ないと思ったらずぐに出て行くよ」

「その時はお願いするね」

そう言って私とアルフは手紙に書いてある場所に行く事にした。

海鳴中央公園

そこは海鳴市の中央付近、周りにはビルが立ち並びオフィス街の中心にある公園、普段であればそこは運動をする人や、サラリーマンやOL等々そういう方々の憩いの場若しくは休憩の場になっているだろう。だがしかし今は夜間で公園は人気がなく静まり返っていた。周りに街灯が設置されていてそこそこ明るくなっている。唯一、噴水がライトアップされてそこが明るくなっている位だろう。

(何処にいるんだろう?)

そんな中フェイトは進む。アルフはその様子を遠くから見つめる。時刻は既に20時を回っている。手紙の内容を信じるのであれば既にリニスは此処にいる事になる。ただ手紙には公園の何処とまでは書かれていなかったので見つけるまでは適当に歩き回るしか無さそうだった。それらしき人物を探していると他の所より明るい所を見つけた。そこは噴水になっていて、ガラスで出来た柱を伝い水が落ちていくタイプの様でガラスの中からライトアップされて中々綺麗だった。少し見とれていると後ろから声をかけられた。

「そんなに噴水が珍しですか?フェイト」

それはとても、とても懐かしい声だった。私に魔法を教えなくて、バルディッシュを作ってくれた。いつも私を気にかけてくれて優しくあったあの声。振り向かずにその問いに答える。

「ううん、綺麗だったから見とれてたんだ」

「そうですか、しかし待ち合わせの時間に遅れるのはいただけないですよ？」

「う、ごめんなさい。でも公園で待ち合わせとしか書いてなかったから」

「あ、それは此方の落ち度ですね。すいませんでした。フェイト元気でしたか？」

「うん」

今でも自分を心配してくれる声に、

「背も少し伸びましたか？」

「うん」

自分の成長を喜んでくれる声に、

「アルフが見当たらないですけどどうしました？」

「うん」

アルフの事も知っている声に、

「うん、じゃわかりませんよフェイト」

「うん」

声を震わせ、肩を震わせ、ただただそう答える。

「まったくしょうがないですね」

「あ……」

そう言うとりニスにはフェイトを後ろから抱きしめた。

「心配かけてしまいましたね」

「心配したんだよ」

「すみませんでした」

「急にいなくなっって、まだ色々リニスから教わりたい事があったの
に！」

「すみません」

「もう急にいなくならないで！」

「ええ、分かりました」

「う、うわあああああーん」

フェイトはついに耐えきれず泣き出してしまった。黙っていないくなった怒りが、再会する事が出来た嬉しさが、触れあえた温もりが抑えきれなくなつてフェイトの感情を爆発させた。一向に泣きやまないフェイトをただただ抱きしめているリニス、そのリニスも頼に伝うものを抑えきれなかった。

アルフ

フェイトの後を着いて行つて、何かあつたらすぐに飛びだせるように準備も万端。来るなら来いつて意気込んでいたけど、噴水でフェイトが立ち止つて、その後ろに出てきた人影に警戒した。でもその人影が明るい所に出てその姿が確認できてアタシは警戒を解いた。その姿は見間違えるはずがない、アタシとフェイトに色んな事を教えてくれて、三人で一緒に遊んだ事もある。フェイトの後ろにはリニスの姿があつた。アタシもそばに行こうとしたけど、

「し〜っ、今良いとこだから待つて！」

「そや、ここで出てつたらあかん！」

「そつだよ！もうしばらく待つて！」

と、いきなり隣から声が出た！何時の間に！気配を全然感じなかったよ！アタシはいきなり現れた三人から距離をとり警戒レベルを上げる。

「あんだ達何mもが！」

そう言おうとしたけど後ろから口をふさがれる。

「だから、静かに！二人に気付かれちゃうって！」

そうやってきたのはさっきの三人のうちの一入だった。そんな馬鹿な！アタシは距離をとったはずなのに！一瞬で後ろに回り込んだのかい！

「ちゃんと自己紹介もするから落ち着いて！」

そう小声で言ってくる。後ろをとられて、口もふさがれご丁寧に腕まで極められた状態だ。仕方なくアタシは頷く。そうするとゆっくり極めていた腕と口をはなした。さてどんな奴なのか改めて観察する事にした。

斎藤一樹

アルフに掛けていた関節技をはずすと軽く距離をとられた。まあそりゃあ当然か。

「すまない、まずは自己紹介から、俺は斎藤一樹、リニスと仮契約してるのが俺、そしてこっちが斎藤亜夜、俺の妹だ。そもそもってこっちが八神はやて、リニスのうくん雇い主かな？簡単だけどこんな感じかな？」

「八神はやてです、よろしゅう」

「斎藤亜夜です。さっきはお兄ちゃんがすいません」

そう言って全員が自己紹介してくる。

「そ、そうかい。アタシはアルフだよ。て、リニスと仮契約してるのかい!？」

「まあ、その話はみんなそろってからって事で」

そんな感じで木陰から二人を見守っている。(イメージ的には「巨人 星」の明子ねーちゃんみたいに見守っている感じだ)そんな感じで見ていると、何やらフェイトが泣き出しリニスがフェイトを抱きしめ二人で泣いているようだった。感動の再会である。そんな様子を見て亜夜と、はやては、

「良かったね、リニスさん!」

「ホンマにその通りや〜!」

号泣してるし。隣のアルフをみると、

「良かったよ、フェイト〜!リニスが生きててホントに良かったよ〜」

こっちも号泣してるし……。みなさん徳光さんばりの涙である。しばらくしてリニスとフェイトが泣きやみ、噴水の近くにあるベンチに座つたのをみて俺達は二人に近付いた。

「お〜っす二人とも、もう落ち着いたかな?」

「カズキさん。ええ、もう大丈夫です」

リニスはそう答えるが、フェイトは此方を警戒しているがリニスが俺を紹介してくれた。

「フェイト、此方は私の恩人のサイトウ・カズキさんですよ。警戒しなくても大丈夫ですよ。」

「はじめまして。斎藤一樹です。ミッド風に言つとカズキ・サイトウだな」

「え〜っと、はじめまして斎藤亜夜です。リニスさんには何時もお世話になってます」

「うちは八神はやて、リニスが家に来てからホンマ助かつとるんよ」

「あ、え？え〜っと、フェイト・テストロツサです。リニスを助けてくれてありがとう」

そう言つてペコリと頭を下げる。ホントに良い子だねフェイトは。

「そこでフェイトちゃん、リニスの事と「コレ」の事でお話があるんだがちょっと時間をもらつていいかな？」

そう言つて、俺はジュエルシールドをフェイトに見せる。するとフェイトはバルディッシュを起動し直ぐにバリアジャケット姿になり、アルフも距離をとり構える。

「それを、渡してください。大人しく渡してくれれば手荒な事はしません」

「そうだよ、痛い目に遭いたくなかつたらそいつを大人しく渡しな！」

「そいつは勘弁だ。ほらよ」

俺はそう言ってフェイトにジュエルシールドをほおり投げる。

「え？あ・・・」

フェイトの意識がジュエルシールドに向かう。そしてフェイトがキヤツチして俺を再び見るがそこには誰もいなかった。

「フェイト！後！！」

アルフが鋭い声をあげ、フェイトに知らせる。フェイトはそれに反応して振り向きざまにバルディッシュで薙ぐ。しかしバルディッシュの柄を掴まれ足を払われいとも簡単にバルディッシュをとられてしまう。

「それを返せー！！」

そう言ってアルフが拳を振り上げ向かってくるが、

「やれやれ、血の気の多いこって」

そう言ってアルフの拳に合わせ、カウンターで顎先をかすめるように拳を振るう。

コッ！

と軽い音がしてすれ違う俺とアルフ。

「ハン！そんな軽いパンチでアタシを倒せると思ったたら大間違い・・・」

・あれ？」

そう言うとアルフはペタンと尻もちをついてしまう。立ち上がるうとするが立ち上がれず更に前のめりに倒れてしまう。

「ど、どうなってるんだい!？」

「ア、アルフ！」

フェイトがアルフに駆け寄る。アルフは状況が理解できないのか困惑している。

「お兄ちゃん！なにをしたの！」

「そや！いくら一樹兄ちゃんいうてもやり過ぎや!！」

そうやってアルフとフェイトの前に立ちはだかる。あれ？俺今、悪者ですか？そう思っているとリニスがフェイトとアルフのそばに行く。

「リニス！アルフが！」

「フェイト大丈夫ですよ。アルフは軽い脳震頭を起こしているだけです。少しすれば立てますよ。それとカズキさん後でちょっとお話がありますので」

そう言うとフェイトはホツとして胸をなで下ろし、俺は冷や汗をたらしていた。しかし何時までもその状態にいる訳にはいかないの。そばに近寄るとフェイトが警戒する。自業自得とはいえそういう反応をされると結構ショックである。

「はい、これ。無暗矢鱈に攻撃するところなるぞ」

そう言つてバルディツシユをフェイトに渡す。そしてアルフの上半身を起こし側頭部を軽くペシ！と叩く。

「どうだ？これで大丈夫だと思っただけど？」

「え？・・・ホントだ。あんた一体何をしたんだい？」

そういうとアルフはあっさり立ち上がる。その様子を見ていたフェイトは啞然。亜夜とはやては「お〜」と拍手している。

「簡単な事だよ。顎先に攻撃を受けると頭蓋骨の中で脳が揺らされる、そうすると平衡感覚の麻痺、もろに入れば意識消失、まあKOだな。そういう症状がでる。今のは、その揺れた脳を外部からの衝撃で元に戻した。そんな感じだ」

全員で『へ〜』と納得してくれたようだった。

「まあ、相手の力量を見極めないうちに突っ込むところという事になる、という教訓にしてくれ。それに初めから高圧的な態度をとるのも頂けないな。兎も角此処じゃ何だから場所を移すか、はやての家で良いか？」

そうはやてに聞くと、はやては何やら頬を赤く染めニヤニヤしながら言ってきた。

「一樹兄ちゃん！夜中に乙女の家にかかるなんて大胆やな！」

「はて？？乙女？？どこにいるのやら？」

「目の前にいるやら！アホ！」

そんな軽口を言い合いつつ、全員ではやての家に向かうのだった。

第二十五話（後書き）

リニスとフェイトが会えたらこんな感じかな？と思いましたWWW
アルフの脳震頭を治したのは、某海王さんと同じ原理ですWWW

第二十六話

新暦64年9月2日 八神家

車椅子に乗ったはやての膝の上のリニスに乗せはやての家まで帰る。そして現在八神家のリビング、はやては膝の上に乗っているリニスを撫でて御満悦の様だ。誰が見ても分かるほどに顔がゆるんでいる。しかしリニスが汚れている事に気付き、お風呂に入れると言い、風呂場に行ってしまった。そんな中俺とリニスは念話で会話を
する。

(え〜っと、リニスさんだっけ？さっきの念話途切れ途切れで拾ったんだけど、何でまたあんなところにいたの？)

(・・・その前に聞きたいのですがカズキは魔法が使える様ですが、「管理局」と言う組織は知っていますか？)

(うん、とりあえずその士官学校を卒業してるよ。でも正式な管理局員じゃないけどね)

(そうですね、でしたら大丈夫ですね。私は使い魔で、とある事情により契約を更新せずそのまま消えようとしていました。何故そこにいたかは正直分かりません。自分でも意識しないで適当に転移魔法を使用したので)

(そうなの？しかし何で契約更新しなかったの？)

(私の主人、プレシアというのですが、重い病気にかかっていて私と契約することでそれが負担になり、病気を加速させてしまう事が

分かったので契約を更新しませんでした)

(さっき念話で「助けて」って言ってたのはリニスの事？それともプレシアさんの事？)

(・・・プレシアの事です)

(そのプレシアさんは病気を治せば助けられるの？)

(それは・・・)

その質問にリニスは答えに詰まってしまふ。例え病気を治したとしてもプレシアは助けられない。フェイトの事もそうだ。

(違うのか、それはさっき言ってた「二人を」って所に関係する？)

(・・・そうです)

(あゝ、断片的な話じゃらちがあかねーや。とりあえず事情説明してみ？案外如何にかなるかもしれないぞ？)

(しかし、(しかしも案山子^{かかし}もね)ですよ。諦めたらそこで試合終了ですよ？)・・・分かりました。お話します。その代わり聞いて後悔しないでくださいね？)

(・・・何それ怖い)

そしてリニスは語る。プレシアの事、アリシアの事、フェイトの事、リニスの事、リニスの知る全てを話し終えると俺は漂々と言つてのけた。

(良かったな。まだ何とかなるかも知れないぞ？ただ可能性は初号機の起動確率より低いかもしれないけど)

それを聞いたリニスは信じられないという顔をしていた。それはそうだプレシアを助けるにはアリシアの蘇生が条件として付いてくる。しかし俺はそれが何とかなるかもしれないと言ったのだ。そりゃ驚く。

(気休めを言わないでください。そんな事出来るはずがありません！)

(まあ、信じられないのは仕方ないけど、リニスはプレシアとフェイトに幸せになってほしいんだろ？それが手の届くところまで来たのに出来るはずがないで斬り捨てちゃうのか？)

(嘘じゃないんですね？ホントなんですか？)

そう言ってくるリニスの声は震えていた。

(可能性はゼロに限りなく近いけど、ゼロじゃないよ。どうする？この分の悪い賭けにのってみる？)

俺はそうリニスに尋ねる。リニスは少し考え答える。

(・・・分かりました。その希望にかけてみます)

その声はもう震えておらず、凜々しい声だった。

(分かった俺も最善を尽くすと約束するよ)

「リニスがどうかしたのか!？」

「えらい、別嬪さんの女の人になってもうた!!」

「・・・は?」

そんな事を言ってきたのでリニスに念話で話しかけると、

(リニス?どしたの?)

(す、すすす、すみません!はやてが転びそうになったのでとっさに助けちゃいました!)

(あゝ、そういう事なら仕方ないか。)

「はやて、とりあえず落ち着け?今扉を開けると色々まずそうだから、リニス?が着れそうな服はあるか?」

「一樹兄ちゃん、自ら「お風呂でバッテリーフラグ」をへし折るとは、ここは誉めるべきなんやろか?」

「あ、しまった!開けとけばよかった!」

「無意識やったんかい!」

「ガッテム!しかし今からでも遅くない!この扉を開ければ桃源郷が!」

「今開けたらおばちゃんに言いつけるで!」

「・・・ファツキン！」

そう言われ悔しがる俺だった。そんな事があり結局はやてに魔法がばれ、魔法の説明をして、リニスと仮契約を結び、普通に生活する分には問題ないくらいに魔力を供給する事になった。ただ、リニスの魔力容量が思いのほか多く俺の魔力だけじゃ満タンまで回復する事が出来ない事に若干へこんだりした。だってリニス俺より魔力量多いんだもん。チートっぽく魔力を少し分けただけで全回復って便利だな〜と、思わずにはいられなかった。

新暦65年4月7日 八神家

思えばリニスとの約束からついに此処まで来たのか。さて、フェイト達に接触出来たのは良いけどこれからどうしよう？馬鹿正直に真実を話す訳にはいかないし、ジュエルシード集めをやめるとも思えない。まあ、とりあえず事情説明をしないとどうしようもないのでまずはそこから話してみよう。

「え〜つと、フェイトちゃん、とりあえずこっちの事情から説明するけど良いかな？」

「分かりました。お願いします」

「じゃあ、まず立場的なものから。まずジュエルシードの件に関しては既に管理局に連絡済みだ」

「え！」

「俺は正式な管理局員じゃないけど、士官学校を出ていてね。今回の件は信頼のおける友人に既に連絡してあるんだ」

「そ、そんな・・・」

「だから、もうすぐ管理局もこっちに着くと思う」

「・・・」

それを聞いたフェイトちゃんは黙ってしまった。それはそうだろう。管理局の介入始まればジュエルシードを集めるのは困難になるのだから。

「・・・今日の事はもう報告したんですか？」

「いや、今日の事はまだ報告していないし、するつもりもない」

「どうしてですか？」

「いや、あれを報告すると俺が怒られるって」

そう言ってケラケラ笑う。それを見てはやてが聞いてくる。

「報告出来ないって、一樹兄ちゃん一体何したん？」

「記録とってあるし見てみるか？」

そう言ってスサノオをテーブルの上に置く。するとスサノオの上にウィンドウが現れ映像が流れた。それを見るはやてと亜夜とリニス。そしてその映像を見てあきれ顔になる。

「また一樹兄ちゃんはしょうもない事をして、うちとしてはGガン

ムのスーカーの方が良かったんやけど」

「なのちゃん大丈夫なの？怒ってなかった？」

「はあ、一樹さん。こういう事は程々にしないと」

若干一名反応がおかしかった気がするが概ねあきれられた。

「いや、なのちゃん怒っちゃって口きいてくれないんだよ。だからこの件にも呼ばなくてな」

そうなのである。あの後なのちゃんを回収してその場を離れたが、顔を膨らませプリプリ怒って後から来たユーノと一緒に帰ってしまったのだ。念話も全く受けてくれずしようがないので今回連れてくるのを断念したのだ。それはそれでまた怒りそうなのだが仕方ない。ちなみに何で亜夜とはやてが一緒にいたかと言うと、はやては「リニスの雇い主はうちやー！」と強引に、亜夜に至っては、説得しても聞かず時間になってしまったので仕方なく連れてきたという事だ。

「お兄ちゃん後でしっかり謝つといた方が良いよ？」

「ああ、勿論そうするつもりだ」

そう話していると、

「あの審判は、あんだだったのかい」

アルフがそう答える。

「あ、そっか。お面してたんだっけ」

「しかし良くフェイトに気付かれないでジュエルシードをとれたね？」

「フッフッフ、こつそり動くのは得意なのですよ」

「そうは思えないけどね」

「人はみかけによらんです。偉い人にはそれが「いや、それは違うやろ」「・・・とりあえず最後まで言わせてくれても良いじゃん」

「甘いで一樹兄ちゃん！まだまだや！精進しいや！って言うか使いどころ間違ってるやろ！」

「まあ、それは兎も角、話を戻すと今日の事は報告しないから安心して良いよ。後は今後フェイトちゃんはどうかだよな。俺達とは別に動いてジュエルシードを集めるか、俺達と協力するかどうかだけ？」

「別に動いた時、もしぶつかったらどうするんですか？」

「うーん、今日と同じかな？」

「ちょ、お兄ちゃん？反省してるの？」

「勿論。反省はしている。でも後悔は無い！（キリ）

「駄目やこの人、早く何とかせえへんと・・・」

とか言いつつ、グツとサムズアップする俺とはやてだったりする。

それを見て亜夜は「なのちゃん頑張つて!」と思わずにはいられなかった。

「……どうしてですか?」

「それについては「今のところは」と答えておこう。そっちの事情聞いてないし」

まあ大体知ってるけど、イレギュラー的な何かがあっても困るし。

「……」

「ジュエルシードの使用目的が極端に悪い事じゃ無ければ協力だつて出来る。報告なんぞでつち上げてても構わね〜し」

「さらりとんでもない事を言いますねカズキさんは」

「まあ、正規の管理局員でもないし、位置づけとしては民間協力者だからな。事後処理はクロノに任せるとしよう」

「クロノって人に同情するわ」

「まあ、そんな感じだ。後はフェイトちゃんの答え次第何だけど?」

しばしの沈黙。しかしフェイトちゃんはポツポツと答え始めた。

「……分からないんです」

「分からないって何が?」

「集める理由です。母さんに言われただけで何に使うかは分からないんです」

「・・・そっか」

「でも、母さんがどうしても必要だって、だから私はジュエルシードを集めて母さんに渡してあげたい」

「例えそれが俺達と敵対する事になっても？」

「はい」

「そっか、・・・それ以外は何も聞いてない？」

「はい、どうしても必要としか聞いてないです」

そう真剣に言ってくる。まだ決定ではないがイレギュラーは無さそう。原作でも集めてる理由知らなかったし。そうすると目的はやっぱりアリスアを生き返らせる為にアルハザードに行くってことか。そうなるってやっぱりプレシアさんと話し合うしかなさそうだけど・・・どうすっかな。確認のためリニスに念話を飛ばす。

(リニス、どう思う？やっぱり目的はアリスアの蘇生かな？)

(まず間違いないと思います)

(止められると思う？説得で？)

(かなり難しいと思います)

(やっぱり別の線で行くしかないのかな)

(手はるのですか？)

(あんま自信ないけど、最悪強硬手段に出ても良いし。出来れば丸く収めたいんだけどね)

(でしたら今うつてる手はうつておきましょう。あの時ああしておけばよかったと後悔しないように)

(そうすつか、もしかしたらリニスにも動いてもらうかもしれないからそのつもりで)

(分かりました)

ふう、とため息をついて再びフェイトを見る。その瞳は強い意志が見てとれる。まったく本当の事を言えないのはもどかしい物である。

「フェイト達はこれからどうするんだ？」

「ジュエルシード集めをやめるつもりはないです」

「うーん、やめるとは言わないけど敵対はしたくないんだよね」

「はい、それは私も同じです。リニスを助けてくれた人を傷つけたくないです」

「お互いに妥協点を探さないと、ちなみにそっちは何個集めた？」

「さつき、カズキさんから受け取ったのを合わせると3個です」

「フェイトちゃんのお母さんは何個必要って言った？」

「21個全部集めてきてって言われました」

分かってたけどいきなり妥協が難しい状況です。残りは15個か。確か海に6〜7個あるのは分かっているから、実質8〜9個を探さないといけない訳だ。

「こつちで集めたのも3個だから残り15個。まあ、当分は封印することを優先するとして、そうだな出来るだけコツチとぶつからないようにしてくれるとありがたい。正直俺としてはジュエルシールドが暴走する脅威が消えればそれで良いので。とりあえずはそれで手を打たないか？勿論そつちから連絡してくれればそつちを手伝う事も出来る」

「・・・分かりました。でも残り全部集め終わったら・・・」

「そんなときはまた話し合い！いきなり物騒な話はなしです！！」

リリカルな魔法少女はどうしてこつちも好戦的なんだ？

「・・・分かりました。あ、あと、リニスはどうするんですか？」

「うーん、どうするか？フェイトちゃんのサポートについてもらうか？」

「それだと、はやてちゃんはどうでしょう？」

「うちは大丈夫やけど、どうせなら家に泊らへん？部屋余っとるし」

「お、そうだな。フェイトちゃん達は拠点とかもつあるの？」

「と、とりあえずマンションを借りてます」

「そっか、残念や。どの辺にすんどるん？」

「え、え〜っと、その、あ、あそこです」

そう言つて、窓のから見えるマンションを指さす。あ、なんかデジヤブ。俺は「こんなところでイレギュラーかよ」と思わずにはいられなかった。

第二十六話（後書き）

フエイト達との話し合いとリニスを持った時のお話でした。何か詰め込んだ感が出てしまっていて拙い気がしてきました。なのは対フエイト、今後どうしよう……

第二十七話

齋藤一樹

結局、リニスはフェイトと一緒に住む事になり、はやての所には朝から夕方（俺達が帰ってくるまで）の間いる事となった。それが決まった時はやては少し寂しそうな顔をしていたが、夜は齋藤家にお世話になるといふ話が出ると途端に笑顔になった。そして今日のところはフェイトとアルフが泊るといふ事になり腕に縋りを掛けて料理すると張り切っていた。一人の時から料理をしていて、リニスが住んでからは一緒に料理をしてメキメキ腕を上げていった。かなり遅めの晩御飯をみんなで頂き帰宅する。自室に戻り今日の事を謝るためなのちゃんに念話する。

（なのちゃん？聞こえる？）

（・・・なに？一樹お兄ちゃん）

良かった答えてくれた。さっきより幾分機嫌が直ったかな？

（良かった、やっと答えてくれた。いや、今日はすまんかった。もう二度とやらんとは言えないけど、許してくれ！）

（全く反省してないよね！？）

（流石にその謝り方はどうかと思うよ？）

会話を聞いていたユーノが言ってくる。

(いや)、出来ない事は約束しない主義なんだ。それにこの時だけ「もうしない」って言うのは不味いだろ?)

(それはそうだけど、でも何か違うよね!?)

(細けえ こたあー気にすんな!)

(・・・それ謝ってる人の態度じゃない気がするの)

(まあ、それは兎も角、相手のフェイトちゃん心配してたぞ?)

(ふえ?一樹お兄ちゃんあの子と知り合いなの?)

(違う違う、リニスが使い魔だっけって言うのはもう話したよな?)

(・・・初耳だよ)

(え?そうだった?)

(そうだよ!リニスさんが使い魔さんだなんて聞いてないよ!)

(ありゃ?そうだったか?まあ、それならそれで説明するからいいや)

そんな訳でかくかくしかじか斯斯然然と説明中、(プレシアとアリシアの事は省き)それを聞いてなのちゃんとユーノが黙ってしまった。

(およ?どうしたのお二人さん?)

(・・・ううん、リニスさん大変だったんだなって思って。フェイ

トちゃんもリニスさんとまた会えて良かったなって)

(そうだね。でもカズキ、何でジュエルシードを渡してもらわなかったの？アレの危険性は知ってるでしょ？)

(ユーノ君、一樹お兄ちゃん、ジュエルシードってそんなに危ないの？)

なのちゃんが聞いてくる。そう言えば説明して無かったな。

(そうだな、良くて海鳴市が無くなる。最悪地球が無くなる。大雑把だけどこのくらい危険な物だよ)

(・・・ふえ！？レ、レイジングハート！大丈夫！？)

『大丈夫です』

テンパってなぜかレイ八さんの心配をするなのちゃん。

(なのは、封印処理されてるから大丈夫だよ)

(そ、そうなの？)

(これはあくまでも暴走してそのまま放置した場合だから。とりあえず向こうの持ってるやつも、封印はされてるから大丈夫だよ。ん、話は変わるけど、しばらくの間は協力ってわけじゃないけどジュエルシードの封印を最優先という事になりました)

(え？)

(お互いに邪魔しないってこと。向こうが封印した分は向こう持ち、こっちが封印した分はコッチ持ちって事。同じジュエルシードを一緒に封印する時は戦闘はしない方向で話が付いてる)

(い、何時決まったの?)

(ん?ついさっき)

(えええー!何で私も呼んでくれなかったの!?)

(いや、いくら念話で話しかけても答えられなかったじゃん)

(う!で、でもユーノ君に言ってくれたって・・・)

(いや)、正直時間があまりなくてな。亜夜とはやて説得してたら時間になっちまってな)

(え?亜夜ちゃんとはもかく、何ではやてちゃんが?)

(おお、はやては魔法の存在知ってるぞ。原因はリニスでな、今回リニスの雇い主って事で強引にな連れてくはめになった)

(・・・もう何が何だか分からないの)

(まあ、ある程度はもう説明し終わったからゆっくりまとめとけ。明日はまた搜索だから)

(そうするの。)

(おう、じゃあ、また明日)

(うん、一樹お兄ちゃんまた明日)

そう言つて念話をやめる。明日また頑張りますかね。そう思い俺は準備をするのだった。

プレシア・テストロッサ

今、私は自分の机に座り研究成果を纏めている。プロジェクト「F」は一定の成果を上げたが私の望んだものではなかった。研究者としての性なのか成果はきっちりまとめられている。そして一通りまとめ終わると異変に気付く。微かな違和感、いつもと違う感覚、私は「時の庭園」のセキュリティをチェックする。セキュリティは正常、何か補足した訳でもなく何時も道理稼働している。思いすごしかと思うがどうにも違和感がぬぐえない。念のため庭園内をサーチしているとその急に現れた。

「誰を探しているんだ？」

いきなり後ろから声を掛けられ、とつさに魔力弾を放つ。しかしそこには誰もおらず魔力弾は壁にあたり炸裂音を立てる。

「いきなり攻撃とは怖い怖い」

今度は正面の方から聞こえてくる。振り向くとそこには覆面にサングラスを付けた男が立っていた。服は上下共に黒く、その上から黒のコートを着ている。

「あなた何者？あたしに何か用かしら？」

私は冷静になるように自分に言い聞かせ、その男に問いかける。

「そうだな、まずは自己紹介からだな。私は反管理局組織「こたわりのある革命家の集い」と言う組織で、そうだな「K カリウム
「とでも呼んでくれ。我々はあなたをスカウトしに来たのだ」

男はそう答えてきた。

「ふう、残念だけど私は忙しいの。別を当たってちょうだい」

私はKと名乗った男にそう告げ、退室を促す。更に自分の周りにスフィアを浮かべ威嚇する。

「そうか、ならば仕方がない。では、此方もカードを切る事にしよう」

カリウムはそう言って私の目の前にウィンドウを開く。そこに映っていたのはフェイトだった。リアルタイムの映像の様で寝ている様子が映し出されている。

「これがどうしたの？」

「おやおや、自分の娘をコレ呼ばわりか」

「当てが外れた様ね。私はコレの事は何とも思っていないわ。人質にはならないわね」

「ふっふっふ、まあ、人質には違いないがプレシア君は何か勘違いをしている。私が言っているのはこの娘が殺される事により君の悲願が達成しなくなると言う事だ」

それを聞いた瞬間私は息をのんだ。この男、カリウムとは何者だ？
なぜそんな事を知っている？

「そつだ、私が言っているのはフェイトの事ではない。アリシアの
事だ」

そう言われた瞬間、私はスフィアを放っていた。数十発のスフィアがカリウムに着弾しあたりを爆煙が立ち込める。爆煙が晴れるがそこにカリウムの姿は見当たらない。すると直後、後ろから強い衝撃を受け前方に吹き飛ばされてしまう。その際持っていたデバイスが手から離れ床に転がる。

「ぐっ・・・」

「まったく、先ほどもそつだがいきなり攻撃してくるとはな、そんなにこの娘を殺してほしいのか？それならそつと言ってくれ、合図をすれば私の手下がすぐにでも実行する。そのウィンドウでその様子を確認出来るだろう」

「や、やめなさい」

「命令出来る立場かね？それでどうするのだ？我々「違いの分かる赤軍派」に協力するか？」

「・・・さつきと名前が違うわよ」

「・・・気にするな、些細なことだ。それに君には拒否権はない」

「・・・そのようね、それで私は何をすればいいのかしら？」

「なに、簡単な事だ。今第97管理外世界にジュエルシードなる口ストロギアが散らばっているな。それを集め私に渡してくれればいい」

「ふざけないで！私があれば必要としているのは知っているのですよー!？」

「それは君の都合で私には関係ない。それにこの条件を呑めば君の悲願はかなう」

「……なんですって?」

「まあ、どう思うか君の勝手だ。しかし協力はしてもらおうぞ？我々もあれが必要なのね」

「……今言った事は本当なんでしょうね?」

「本当だ。アルハザードなんぞに頼るよりよほど現実的だ。その証拠がこれだ」

そう言うところカリウムは懐から、ビンを取り出す。そのビンは濃い青色をしていて、液体が入っている様な線がビンの縁のすぐ下に薄っすらと確認できる。しかし驚くのはその恐ろしい程の魔力と神々しさだ。一目みてあれならば何とかなるのではないかと期待できる程だ。それを見て息をのみ私は少し考え答える。

「分かったわ。じゃあ、出て行ってちょうだい私には時間がないのよ」

「そうか、では失礼するとしよう。・・・お邪魔ついでに質問しても良いか？」

「・・・なにかしら？」

「君は何故そこまでフェイトを嫌う？アリシアのクローンなのだろう？いわば家族、姉妹と言っても良いはずだ」

「馬鹿を言わないで。アリシアとあれを一緒にしないで」

「一緒になどいないだろう。いくらクローンと言ってもそれは違う人間だ。アリシアではないし、アリシアにはなれない」

「・・・」

「それに、君の悲願はもうすぐかなうだろう、その後はどうするんだ？用済みになったから処分でもするのか？アリシアはどう思うだろうな自分の母親が妹を手にかけるのを」

「質問は終わりかしら？」

「答えを聞いてないが？」

「答えると言ったかしら？」

「む、それもそうか、邪魔したな」

「ホントにね」

「では、これから「素材にこだわる解放戦線」の為に働いてもらう」

ぞ」

「・・・あなた、わざとやってない？」

「何の事だ？」

「まあ、良いわさっさと出て行って」

そう言うとかリウムは出て行った。その姿を確認して私はデバイスを拾い再び机に座る。サーチャーでカリウムを追うが直ぐに撒かれてしまった。魔法に対する訓練も受けているようだった。本当に何者なのだろうか？そしてさっき言われた事を思い変えず。

「いわば家族、姉妹と言っても良いだろう」

「クローンと言ってもそれは違う人間だ。アリシアではないし、アリシアにはなれない」

馬鹿馬鹿しい、今更何だと言うのだ。そんな事は当の昔に分かっていた事だ。姿かたちは似ていても私から受け継いだ魔力資質はアリシアには無かったものだ。そうだ、あの人形はアリシアではない出来そこないだ。しかし、

「君の悲願はもうすぐかなうだろう、その後はどうするんだ？」

・・・これからはどうするのだろうか？あの男、カリウムの言葉を信じるならアルハザードに行く必要がなくなった。アルハザードにはあの人形は連れて行かない予定だった。そしてアルハザードでアリシアと二人、今までの分幸せに暮らすはずだったのだ。だがその必要は無くなった。そうなると三人で暮らす事になる。それともアリ

シアと二人だけでどこか遠くの世界に旅立つのか……。少し考えていて自分の身体の異変に気付く。何時もであれば魔法を使った後は大体咳き込み、酷い時は吐血したりする。しかし今はどうだ？心なしか体調がいつもより良い気がする。カリウムが何かしたとも思えない。一体どういう事だろう？そう思いながら私はこれからの事を考えるのだった。

Ｌ級艦船第八番艦　アースラ

「エイミィ、目的地まではあとどれくらい？」

「そうですね、後二日もあれば着きますよ」

「クロノ執務官。あれからカズキ君から連絡はありましたか？」

「いえ、艦長。あれから連絡はありません」

「そう、なら今のところ大きなトラブルは無いようね」

「そうだと良いんですが・・・」

そう言っただけはため息をつく。あいつの性格を考えると、周りを巻き込んで面白おかしく行動してそうだ。仕事は出来るのに真面目にやろうとしない。しかも怒られても漂々としていてまた同じような事をして周りを巻き込む。士官学校の時に何度巻き込まれた事か・・・、その時の事を思い出しているとエイミィが話しかけてきた。

「しかし久しぶりだね、カズキ君に会うのは」

「そうだな、最近ミッドの方にも顔を出してないみたいだったから

な」

「最後に会ったのって、確かクロノ君が執務官に受かった時にお祝
いした時だっけ？」

「ああ、確かそうだ。遊びに来る連絡は来ても中々予定が合わなか
ったからな」

「そうだね、クロノ君執務官になってから忙しかったもんね」

「まあ、仕方ないさ」

「そしたらさ、時間が取れたらカズキの世界を案内してもらおうか。
いつもこつちが案内してばかりじゃ不公平だよ」

エイミーがそうニコニコしながら言うてくる。

「それはそうだが、エイミー本音は何だ？」

「う！・・クロノ君には隠しきれないかな？前にカズキ君が向こ
うの料理さしいれしてくれた時あったじゃん、その料理がおいしか
ったからそれをまた食べたいな〜っと思って」

「ああ、アレか。確かにアレは美味しかったな」

「でしょでしょ！クロノ君もそう思うでしょ！」

「でも、それはこの事故を解決してからだ」

「まっ、それもそうだね。それじゃクロノ君！さっさと解決しちゃ

「つてね！」

「・・・はあ、まあ、善処するよ」

そう言っつて僕はブリッジを後にした。しかし実際三人で会うのも久しぶりだ。カズキの世界にも興味があるし良い機会かもしれないな。それに士官学校以降カズキと模擬戦もしていない。負け越してしまっているからこのあたりで挽回しておきたいのもある。あれから色んな訓練や、事件に遭遇して実力も結構上がったと思う。今なら結構いい勝負ができると思う。そう思うとじつとしていられなくなり、僕はトレーニングルームに向かうのだった。

第二十七話（後書き）

なんか、変な違和感が作者にまわりついてます……。ストーリー
Iと云うか、無印の結末が定まってないのが原因かもしれませんw

w
w

第二十八話（前書き）

投稿が遅くなりました。すみません！

第二十八話

高町なのは

昨日、一樹お兄ちゃんから色々突然すぎる説明を受けてから一晩たつて早朝、私はユーノ君と一緒に丘を少し登った公園にいる。人気は無く、公園と言っても遊具なんかはなくて広場の様な感じの所なの。ユーノ君はフェレット状態だ。怪我は一樹お兄ちゃんが治したんだけど魔力がまだ十分溜まってないみたい。

「でもなのは、ホントに良いの？」

「うん。ていうか私にも手伝わせてジュエルシード集め」

「分かっているとと思うけど凄く危ないよ？」

「うん、でもやっぱり私に魔法の力があって一樹お兄ちゃんやユーノ君を手伝えるんなら手伝いたい。それにあの子、フェイトちゃんとも直接話してないし」

まあ、正確には話す間もなくと言った方が良いかもしれないけど。

「だからユーノ君、私に魔法の使い方を教えてほしいの！」

私はそうユーノ君に伝えた。

「分かった。じゃあ、一つずつゆっくり行こうか」

「うん、よろしくねユーノ君」

「此方こそよろしく。じゃあ、まず基本的な事から。え〜っとなのはは魔法についてはどの程度聞いてる？」

「まだ詳しくは聞いてないよ」

「じゃあ、まずはそこから説明するね。まず魔法は「リンカーコア」っていう魔力の生成器官がないと使えない。この器官が大気中にある魔力を体内に取り込んで蓄積したり、外部に放出したりするのに必要なんだ。これがないと魔法は使えないね」

私は頷いてユーノ君の話聞く。

「次にデバイス、これは魔法を使う際の補助の為の道具だね。レイジングハートは「インテリジェントデバイス」といって、ある程度意思があつてレイジングハート自体が魔法をつかったりも出来るんだ。相性とかもあるけど、使えば使うほど魔法の威力だったり、無詠唱で魔法が使えるようになるんだ。インテリジェントデバイスを使いこなす事が出来れば、1+1が2じゃなくて1+1が5にも10にもなるんだ。なのはとレイジングハートは相性はバッチリ見たいだね」

「そうなの？レイジングハート」

『ええ、マスターは私との相性は非常に良いようです』

それを聞いて私は嬉しくなった。

「じゃあ、次は実践して見ようか。なのは、リンカーコアに魔力を集めてみて。その時自分の魔力じゃなくて空気中から集めて固める

感じてイメージして見て」

「うん、やってみる」

そう言うとなのはは自然体で立ち、余計な力を抜く。そして魔法を始めて使った時の感覚を思いだす。すると胸のあたりが暖かくなり、身体から桜色の光がたち始める。

「わ、わ。ユーノ君胸のあたりが暖かいよ？」

「・・・僕としてはあっさり出来た事がビックリだけどね。まあ、それは兎も角、その暖かい所に「リンカーコア」があるんだ。そして今なのはがしているのが「魔力運用」コレを練習すれば、魔法を早くスムーズに使えるようになるし、無駄な魔力を消費しないで済むようにもなるんだ」

「へ、そうなんだ」

「うん、だから当分は慣れる意味も込めてコレをすると良いよ。基本だしね。」

「うん！」

「とりあえずはそれぐらいかな？僕はあんまり砲撃系の魔法は使えないけど、防御系の魔法は得意だからわからなかったら聞いて。基本補助役だから戦闘に関してはあんまり教えられないけどね。後、レイジングハートとイメージトレーニングも出来るからその辺はレイジングハートに任せるよ。でも無理しすぎたら駄目だよ？」

「大丈夫だよユーノ君。そんなに無理はしないから。レイジングハ

ート、これからよろしくね！」

『はい、マスター』

私はそうユーノ君とレイジングハートに言った。そしてふと時計が目に入ったから時間を見てみると、

「いつけない！もうこんな時間になっちゃった！ユーノ君、戻ろう！」

「分かったよ、なのは」

そう言っただけで私とユーノ君は公園を後にした。それからいつも通り朝ごはんを食べて学校に行く。バスに乗ってアリサちゃんとすずちゃんに挨拶して、途中から乗ってきた亜夜ちゃんも加わっていつものメンバーがそろった。いつも通りの登校で、学校に着き授業が始まった。そこから私の日常が少し変わり始めた。授業中にレイジングハートが念話で訪ねてくる。

『マスター、魔法のトレーニングをしますか？』

（うーん、したいけど今授業中だよ？）

『問題ありません。マルチタスクをしてもらいます』

（まるちたすく？それって何？）

『マルチタスクと言うのは、複数の事を同時に処理する事です。簡単に言えば私と会話をしながら他の人と会話をするという事です』

(ふえ？わ、私そんなこと出来ないよ！?)

『大丈夫ですマスター、初めは私がサポートします。それに魔導師にとつてマルチタスクは必須です。早く出来るようになった方が良いでしょう』

(そ、そうなの?)

『勿論です』

(じゃ、じゃあ、お願いします！)

『了解しました。では開始します』

そう言うつと私はいつの間にかバリアジャケット姿になっていて、空に浮かんでいた。そこからの景色は綺麗だった。下に広がるのは海、上には青い空、それは普段では見れない景色、遮るものは何もなくて水平線がはっきり見える。水面は太陽の光を反射してキラキラ輝いている。

「ふあゝ、凄ゝい!」

『どうですか？マスター』

「あ、凄いな！全然違和感がないよ！本当に空を飛んでるみたい」

『それは何よりです。これは仮想データですので状況に応じて様々な空間をつくる事が可能です。それではトレーニングを開始しまし
』
『よし』

「はい！お願いします！」

『ではマスター、戦闘には速度やパワーも必要ですが、それより必要なものがあります。なんだか分かりますか？』

「うーん、負けないっていう気持ちとか？」

『良い答えですがそうではありません。戦闘で必要なものそれは「戦術」と「知性」です。そしてこれからそのトレーニングをします』
レイジングハートがそう言うと、空中に魔方陣のような丸い物が沢山出てくる。

『それでは始めましょう』

そして、初めての魔法の訓練が始まった。

斎藤一樹

なのちゃんが学校から帰って来てからジュエルシードの搜索を始めた。そして昨日決めたグループに分かれ探し始める。出発前に亜夜が俺に聞いてきた。

「お兄ちゃん、なのちゃん何かあったのかな？」

「何かって？」

「うーん、なんだかね今日の授業中変だったんだ。なんか心ここにあらずと言うか、ボーっとしてると言うか、でもその割にはちゃんと指されたら答えてるんだよね。アリサちゃんとすずちゃんも不思議

議がつてた」

とそんな事を言ってきた。

「ふうん、もしかしたら魔法の訓練でもしてたのかもしれないな」

「え？でも授業中だよ？」

「ああ、なのちゃんレイ八さん着けてたろ？多分レイ八さんがつくつた仮想データの中で訓練でもしてたんだろ」

「へー、そんな事も出来るんだ」

「うん、スサノオも出来るしな。っと、そつだ忘れるところだった」

出発前に亜夜に渡すものがあつたんだ。

「亜夜、コレ渡しとく」

そう言つて俺は亜夜に向かってそれを投げる。それは山なりに放物線を描き亜夜の手に収まる。

「わ、お兄ちゃん何これ？」

そう言つて亜夜は首を傾げ手の中のそれを見るそれは日本刀のアクセサリーだった。

「父さんからだ。亜夜のデバイスだつてよ」

「・・・え？」

「亜夜のデバイス、インテリジェントの豪華仕様になってるってさ。形状は日本刀、待機状態はその状態だそうだ」

「これが、私の？」

そう言っつて、亜夜はそのデバイスを眺める。すると、

『お主が、主か？』

そう言っつて女性の声が話しかけてきた。

「うわ！わわわわ、っと、そっか喋れるんだっけ、うん。まあそうなるかな。」

『そうか、このチンチクリンがそうなのか。仕方がない、次の使用者が決まるまで我慢するか』

ビシッ！

・・・あ、なんかデジャブ。

「へへ、御主人様に対して中々素敵な言葉遣いじゃない？」

『御主人様？ハッ、笑わせるでない。お前みたいな小娘がワシを扱えるわけなかるう』

笑い声が聞こえそうな言い回しである。って言うかこいつは何でこんなにペラペラしゃべっているのだろう？普通、レイ八さんみたいな感じで喋るんじゃないのか？年数がたったヤツならいざ知らず・

・・・もしかして・・・。

「なあ、ちょっと聞きたいんだけど、お前って前に誰かに使われてた？」

「何じゃ、お主は藪から棒に。まあ確かについ最近まで使われておつたが？」

何かやな予感がしてきた。普通であればインテリジェントデバイスを手放す魔導師なんぞそうそういない。優秀なうえに値段も馬鹿みたいに高い。しかしそれに見合った働きをするのだ。手放す事なんてそれこそ引退するか、使用者が死亡するかぐらいだ。例えば引退したとしても、魔力資質のある身内に受け継いだり、信賴する人に譲ったりするし、死亡した場合でもデバイス本体が次の使用者をその前使用者の近に人間や親友に頼んだりするので此方もそうそう来る事は無い。しかもメインデバイスとしなくても補助専用にしても良いのだ。だからこそそういう繋がりが必要なければ普通インテリジェントデバイスはまっさらな状態で手元に来る。こういう風に自我があると言つのはあり得ないのだ。しかし何事にも例外がある。極稀に初めからこのレベルで自我を持っているインテリジェントデバイスが出来るのだ。原理はまったくもって不明。性能自体は通常のもの比べるには優秀なのだが、いかんせん性格がひん曲がっていたりするのが多いのだ。使用者を貶す^{けな}、罵るは当たり前。最悪なものになると四六時中罵詈雑言を浴びせるモノまで出てくる始末。ノイローゼになった者もいるそうだ。冷や汗を流しつつ更にそのデバイスに聞く。

「もしかしてお前、高性能欠陥機？」

「無礼な！今までの使用者がワシを上手く使えないだけじゃー！ど

いつもこいつも戦闘中にワシがサポートせんと何もできん愚図共だったのだ！腕に自信があると云っておきながらボコボコにやられおる！！そんな奴らになんぞ使われとうないわ！！」

・・・父さんは何でこういうデバイスを送ってくるのだろうか？こいつしかり、スサノオしかり。まあ、父さんが送ってくるのだから性能の部分では文句なしなんだろうけど。

「ふん、つまりあんたはそういうやつらじゃなければ良いのね？」

『まあ、そうじゃな。とは言っても、お主の様なチンチクリンのお子様にはワシが使えるとはとても思えんがな』

「まあ、魔法に関しては初心者だから訓練しないと何とも言えないけど、絶対あんたが納得する力を付けてやるわ！」

『ふん、威勢は良いようじゃな。後はワシの訓練にどこまで付いてくれるかじゃな』

「ふん、見てなさい。あんたになんか負けないわよ」

『言っておれ』

そう言うと黙り込んでしまった。それを見かねたのか、恭也さんが話しかけた。

「まあ、言い合いも終わったんだらう？自己紹介でもしたらどうだ？」

恭也さんの言うとおりだ。普通だったらそれが一番最初だらう。俺

とスサノオだつてそうだったのだ。

「・・・そうですね、私は亜夜、斎藤亜夜よ。あなたは？」

『ワシの名前は無い。好きに呼べば良い』

「そう、じゃあね、天照アマテラスにしよう」

「へ、何でまたその名前を？」

天照あまてらす、日本の神様の名前。正確には「天照大神」（あまてらすお
おみかみ）日本神話に登場する神である。自然神として神社などに
祀られたりもしている。伊邪那岐イザナギより生まれた三貴神の内の一柱。
かなり有名な神様である。

「え、つとね。お兄ちゃんのスサノオの名前を聞いた時調べたのよ。
姉弟なんだよね？まあ、これだとアマテラスの方がお姉ちゃんにな
っちゃうらしいけど」

理由はとてもシンプルだった。なのちゃん家のレイ八さんみたい
なそれらしい名前を付けると思いきや俺の真似？をしてきた。なん
だかとってもこそばゆい。

「ま、あ、名前負けしなければ、良いんだけど」

ニヤニヤしながらアマテラスにむかって言い放つ。が、

『ふん、何を偉そうにしてるか。そもそも貴様、魔法を使った事
がないのであろう？そのようなガキがワシに偉そうに言うでないわ。
ワシがいなければ何にも出来ない極潰しが。そんな事言うのは千年

早いわ！いくら素質が優れていようともしそのような心構えでは碌な魔導師にならん。今のうちに魔法なんぞ忘れて元の生活に戻った方が良いぞ？半端物の魔導師なぞいても邪魔なだけだからな。そんな事も分からん馬鹿は、今のうちに百万回死んだ方が良いのではないか？もしかしたらその低能が治るかもしれないぞ？さつさと母親のところに行つて慰めてもらえ、まだ乳離れも出来ておらんのだろう？乳臭さが匂つておるわ。だいたい「もうやめてー！亜夜のライフはとつくにゼロよ！」「む？」

見てられないし、聞いてられなかつたのでアマテラスを止める。既に亜夜は「燃え尽きたぜ」と言わんばかりに真つ白である。目には涙をためている。ちよつとからかつただけで此処まで反撃を食らうとは思つていなかったのだろう。それにしてもこれなら使用者がノイローゼになるのもうなずける。これ以上の罵詈雑言を四六時中聞いていたらおかしくもなる。

『ふん、この程度でダウンとは情けない』

さらりと言つてのける当たりまだまだ上があるようだ。まあ、それは兎も角俺は亜夜からアマテラスを渡してもらい小声で話しかける。

「まあまあそう言つなよ、まだ小学生何だから。でも意外だな。亜夜の事少し認めてるのか？」

『・・・何故そう思う？』

「だつてさつき、」いくら素質があるつと「って言つてたじゃん。それって亜夜が素質あるつて事だろ？」

『ふん、亜夜には黙っておれ。天狗になられては適わん。それに初めの内に主従関係をはつきりさせておいた方が良いのでな』

「いやいやいや、お前が主になってどうするんだよ」

『知れた事。主を駒としワシが管理局の頂点に、待て待て待て！冗談じゃ！そんな面白い事はせん！』

俺が拳に気と魔力を籠めて振り上げると慌てて訂正してきた。

『まあ、小娘が一人前になるまでと言ったところか。それまで耐えられるかは知らんがな』

フッフッフ、と不吉な笑いをしている。そんなアマテラスを見て俺は呟く。

「こんなデバイスで大丈夫か？」

「・・・一番良いやつをお願い」

俺の質問に答える亜夜。ただ残念な事に、このデバイスが一番良いやつだった事だ。

高町なのは

私とユ一ノ君とお父さんは、海鳴市街を搜索していた。近くにジエルシードの反応はあるけど、どうも正確な位置がつかめない。三人で探しているけど、なかなか見つからない。うーん、どの辺にあるんだろっ？

「ユーノ君、まだ場所は分からないかい？」

お父さんがユーノ君に聞く。

「すみません。正確な位置はまだ・・・このあたりはずなんです
が」

そう探していると、突然ビルの屋上から魔力流が広がっていった。
ユーノ君と私は同時にそのビルを見上げる。ビルの近くは風が吹き
荒れ、暗雲が集まって来ている。街を歩いている人達も異変に気付
いて空を見上げていた。

「どしたんだ急に」

そうお父さんが言ってきた。お父さんは魔力を感じてはいないけど、
周囲を警戒し始めたみたい。

「そんな！こんなところで強制発動！？広域結界！」

ユーノ君がそう言うと私たちを中心に結界が広がっていく。周囲か
ら人氣が消えて私達三人しかいなくなる。

「・・・凄いな。魔法つてのはこんな事も出来るのかい？」

お父さんが周囲を見ながらユーノ君に聞いていた。そっか、お父さ
ん魔法を間近で見るの初めてなんだっけ。

「ええ、空間の一部を切り取って特殊な性質を付けるんです。僕の
得意な魔法の内の一つです」

ユーノ君が胸を張って説明していたら、

ドオーーーーーン！

そう音がして、近くから魔力の柱が空に向かって一直線に伸びていく。

「あそこだ！レイジンググハートお願い！」

『スタンバイ、レディー！』

そうレイジンググハートが答えると私は一瞬でバリアジャケットを着て魔力の柱のある処に急いで向かう。したからは、お父さんとお父さんの肩に乗ったユーノ君が追いかけてくる。そうするとユーノ君から、

「なのは！すぐに封印を！そのまま放っておいたら街が無くなっちゃうー！」

ふえ！そ、それは駄目なの！私は急いでジュエルシードの場所に行く。そして見通しの良い直線にでると、その先の交差点にジュエルシードがあった。

「あつた！レイジンググハート！」

『カノンモード』

私は、空中で止まって魔力を溜める。レイジンググハートに魔力を集中させる。どんどん魔力が集まって行って直ぐに溜まった。そして前を見るとジュエルシードの更に向こうに、金色の光が見えた。

きつと一樹お兄ちゃんの言ったたフェイトちゃんだ。そう思っているよ、

『デイベインバスター』

レイジングハートの合図、それと同時に魔力を打ち出す。

「あああっー!!」

気合いと一緒に振り上げたレイジングハートを振りおろしてトリガーを引く！打ち出した砲撃がジュエルシードに向かって一直線に進んでいく。そして反対側からも金色の魔力が一直線に向かっていく。そしてほとんど同時にジュエルシードに命中する。でもジュエルシードの魔力が強くてなかなか本体にあたらない。

「う~~~~!!」

私はさらに魔力をこめて、

「ジュエルシード封印!!」

と叫んだ。そうしたら砲撃の威力が上がってジュエルシードの所で爆発した。周囲には土煙が上がってどうなったか分からない。少し経つと、そこには魔力の治まったジュエルシードが浮いていた。それを確認して私は地面に着地した。ちょっと頑張り過ぎちゃったみたいで息が荒い。

『デバイスモード』

レイジングハートが始めの形にもどる。そして後ろからお父さん

が声をかけてきた。

「凄いじゃないか！なのは！」

お父さんはそう言って頭を撫でてくれた。それがとても心地よかった。

「それじゃ、なのはジュエルシードを確保しよう」

そしてジュエルシードに向かうと、

「待ってください」

声のした方を見ると、ジュエルシードを挟んで正面の看板の上にいる間の女の子、フェイトちゃんが立っていた。

第二十八話（後書き）

久々の投稿です。仕事が忙しくなって遅くなりました。出来るだけ早くあげたかったのですが思うようにいきませんでした。

そして今回、読んでいただいている皆様の力を貸していただきたいのですが良いでしょうか？

今回、主人公の妹亜夜のデバイスを出したのですが、「高性能欠陥機」としたのですが、こうネーミング的にしっくりこないのです。

ですのでその「高性能欠陥機」の隠語等を募集したいと思います！良いのがありましたらどしどし送ってください！お願いします！！

第二十九話（前書き）

イヤッホー！！フルメタ続編決定おめでとう！！何でも最終回から十年後を書いたストーリーが始まるようです！！今から楽しみでしょうがない作者です！！

第二十九話

フェイト・テスタロッサ

今はアルフと一緒に街を一望できるビルの上にいる。ジュエルシードの気配を感じたから正確な位置を掴むため今アルフが更に細かいサーチしている。

「駄目だよフェイト、正確な位置が特定できないよ」

しばらくサーチを続けていたアルフがそうやってきた。

「そう、じゃあちよつと乱暴だけど魔力流を撃ち込んで強制発動させよう」

「でも、大丈夫かい？」

「大丈夫、私は強いんだから」

そうやって私はバルディッシュに魔力を込めて周囲に開放する。そうすると、暗雲が集まりゴロゴロと雷が唸りをあげる。そうしたら、街の中から魔力を感じる。一瞬ジュエルシードかと思ったけど結界が張られただけだった。

「むこうも気付いてる。フェイト向こうより先にジュエルシードを回収しよう」

アルフがそうやってきた。カズキとの約束でジュエルシードは先に回収したらその回収した人に任せるってなってるから、先に回収

すれば、向こうも手は出してこないはず。そう考えていると

ドオオオーーーーン！！

と音がして、街の中にカミナリが落ちてその場所から魔力の柱が空に向かって伸びあがった。

「あつた！あそこだよフェイト！」

「うん、行こうアルフ！バルディッシュュ！」

「あいよー！」

『イエッサー』

私は二人にそう言って、ビルの上からジュエルシードに向かって飛んでいく。立ち並ぶビルの上を飛び最短距離でジュエルシードに向う。そして、砲撃の邪魔になる建物がなくて、ジュエルシードが見える位置に到着した。

「バルディッシュュ」

『イエッサー』

バルディッシュュが短く答えると、私の足元に魔法陣が広がる。バルディッシュュに魔力を込めると魔法陣から雷光がたちあがる。どんどん魔力が溜まっていき規定値に達する。私が魔法を打とうとした時、反対側に桜色の魔力光が見えた。

（あの光・・・確か、あの時の）

その光は、私が最初のジュエルシードを回収するために戦闘した時、途中から戦闘に加わってきた魔導師の魔力光だ。まずい、向こうも準備は出来ているみたいだ。私は振り上げたバルディッシュを振りおろし、

「スパークスマツシャー!!」

ジュエルシードを封印するために砲撃した。

「くっ!!」

でも思ったよりジュエルシードの魔力が強くて砲撃が通らない。でもここで諦める訳にはいかない。ジュエルシードは母さんが必要だと言ったんだから、母さんの為に集めるんだ!そして私は更に魔力をバルディッシュに流す。そうすると一回り大きくなった砲撃がジュエルシードの魔力を上回る。

「ジュエルシード封印!!」

そう言うと同時に、ジュエルシードのあった場所から爆煙があがる。土煙が上がってジュエルシードがどうなったかは確認できない。でも、今まで荒れ狂うような魔力が落ち着き、静かになっている。どうやら封印には成功したみたいだった。私は直ぐにジュエルシードの近くまで飛んでいくと、そこにはこの間の魔導師の女の子とその使い魔の獣と男の人がいて、女お子が男の人に褒められ頭を撫でられていた。女の子はとても幸せそうな笑顔だった。それを見ていて昔を思い出す。母さんが家にいて、私の大好きなおやつをつくってくれた。私わとてもうれしくてリニスと一緒に母さんに近付いて「早く食べよう」とせかす。そうすると母さんが優しい笑顔で笑

つてくれた。ジュエルシードを回収して持っていけばきっと母さんも笑ってくれる。昔みたいに優しくしてくれる。リニスも戻ってきた、そうすればまたみんなで昔みたいに一緒に暮らせる。そう思っている。魔導師の女の子がジュエルシードに近付いて行く。そこに私は声をかけた。

「待ってください」

その声を聞いて女の子はこっちを見る。

「あ、え〜つとフェイトちゃんだよね？この間は自己紹介出来なかったけど、私高町なのは。私立聖祥大付属小学校の三年生。フェイトちゃんの事は一樹お兄ちゃんから聞いてるよ」

そう言って自己紹介してきた。

「・・・フェイト、フェイト・テストロツタ。そのジュエルシードを渡してください」

「え、でも・・・これはユーノ君が探してる物だし・・・」

「・・・それじゃあ、実力でいきます」

戦闘はしないようにと思ってたけど仕方がない。そう言って私はバルディツシュを構える。お互いに視線がぶつかる。私が踏み出そうとした時、

バシャン

と音がする。あたりがなぜか暗くなってしまった。ジュエルシード

の光も見えない。

「わ!!! な、何!? なんなの? フェイトちゃん! 何かした!?!」

前からなのは声が聞こえてくる。相当混乱しているみたいだった

「わ、私は何も」

それに正直に答えた私も混乱していたのだと思う。そうするともう一度音が聞こえた。

ガシャン

その音が聞こえた瞬間、ジュエルシードのあった場所の近くに円錐状の光が降っていた。どうもさっきの音は光をつけたか何かの音だったみたいだ。その光を見るとその中心に誰かがいた。背もたれのない丸椅子に足を組んで腰を掛けている。上下赤いスーツにピンクのシャツ、青の蝶ネクタイ、髪の毛はオールバックになっていて右目には眼帯をして口ひげをはやしている。誰だろう? と思って良く観察すると、昨日リニスと一緒にいた人だった。

「な、何してるのー 一樹お兄ちゃん?」

そう、なのはが聞いているけど返事は無い。二人で呆然としていてと静かに語り始めた。

「本日の対戦カードは、高町なのは対フェイト・テストロッサ。先日フェイトに敗れ猛特訓をし、リベンジマッチに挑むなのは。ジュエルシードを賭け、お互いに譲れないもの為に少女達はまた戦おうとしている! 少女達の間でぶつかる力と力、技と技、思いと思い!

！その先には一体何が待ち受けていると言つのでしょつか！……
・今日皆さんはそれを目撃することになるでしょう。」
カズキ？は語る内にどんどん熱くなっていつて、抑えきれないと言
わんばかりに椅子から立ち上がった。

「それでは！」

そう言つて、スーツの上着を片手に掴んで一息に腕を振りぬいた。
どういう原理か分からないけど上着が脱げてどこかに飛んで見えな
くなる。それと同時にいつの間にか右手にマイク（小指がピン！と
立っている）、左手に眼帯を持ち、声高らかに宣言した。

「MSファイト！レディイイイッゴオオツ！！！！！！！」

斎藤一樹

はやての希望だった、某ガンダムのナレーション役で戦闘開始の
合図をする。子供のころ何度も見ていたので懐かしさも込み上げて
きた。良い作品だよねGは。元の姿に戻りながらそう思っている
二人が戦闘を開始した。先制したのはフェイトちゃんだった。周り
にスフィアを浮かべて、そこから魔力弾を打ち出す。確か「フォト
ンランサー」だったかな？多数の魔力弾がなのちゃんに向かつて行
く。それをなのちゃんは空に飛びかわす。そのすきにフェイトちゃ
んが後ろをとりなのちゃんの後ろから魔力弾を発射する。

バシユン！バシユン！バシユン！バシユン！

発射された魔力弾はなのちゃんに襲いかかる。

「くう！」

それをなのちゃんはフェイトちゃんの方を向きつつかわしていく。横に周り、宙返りをしかわしていく。つーかなのちゃんホントに初心者か？何でこんな見事に空戦が出来る？こんなの士官学校の教官が見たら卒倒するぞ？まあ、五味教官あたりは動じなさそうだけど。自分の担任教官だった人物を思いだし苦笑する。そんな事を思っていると今度はなのちゃんが攻撃する。フェイトちゃんと同じように周りに魔力弾が浮かび上がる。

『ダイバインシューター』

「シュート！」

ヒュン！ヒュン！ヒュン！

魔力弾がフェイトちゃんに向かって行く。そのまま直進するかと思っただがフェイトちゃんに向かって軌道を変えている。どうやら誘導タイプの様だ。そしてすぐさま高度をとり魔力を溜め始める。一方フェイトちゃんの方は、なのちゃんの攻撃を危なげなくかわしているが、一瞬なのちゃんを見失ったようだ。そこになのちゃんが、

『ダイバイン・バスター』

「ヤアアアアア！」

気合いと共に打ち出される砲撃。シューターを囮としてバスターを撃つ為の時間を稼ぐ、良い攻撃だ。

「クッ！」

フェイトちゃんの攻撃をよかれずまともに受け、吹っ飛ぶのかな。ドガアアーン!!と凄まじい音を立てて地面に激突する。土煙が晴れ、そこには地面にクレーターをつくり目を回しているなのちゃんがいた。

「勝った」

グツとガッツポーズをするフェイトちゃん。あるえ〜?こんな事する子だったっけ?あまりに予想GAIだったので何が起こったか分からなかった。アルフですら啞然としてるぞ。

「あ〜、フェイトちゃん?今のは流石にどうかと思うぞ?」

「い、ごめんなさい。隙だらけだったからつい・・・」

・・・ついつて、あんたどこぞの戦闘民族見たいなことをおっしやいますか。あ〜あなたのちゃん完璧にダウンだよ。こりやまた機嫌悪くなるな。地面に若干埋まっているなのちゃんを抱え、フェイトちゃんに近付く。

「はあ〜、まあ仕方ないか。はいよ、これが今回の賞品だ」

そう言っつてフェイトちゃんにジュエルシードを渡す。

「あ、ありがとうございます」

お礼を言っつて受け取るフェイトちゃん。そこで、フェイトちゃんに聞いてみる。

「フェイトちゃん。ジュエルシードはいつお母さんに届けるの?」

「あ、そろそろ届けようと思ってます」

「じゃあ、その時に理由聞けるかな?」

俺がそう言つと俯いてしまった。

「分かりません。聞いてはみませけど・・・」

「まあ、出来たらで良いからさ」

「・・・分かりました」

そう話していると、スサノオが俺に話しかけてきた。

『《クソ野郎》通信が入っています』

「ん?誰からだ?」

『クロノ執務官からです』

「お!ついに来たか!つないでくれ」

『了解しました』

そう言つと俺の目の前にウィンドウが開かれる。

「聞こえるか?カズキ」

「此方一樹だ。感度良好、久しぶりだなクロノ」

「ああ、しかし今回はまた厄介な事に巻き込まれているな」

「なぐに、いつも通りだよ。イベントが多くてありがたくて涙が出るね」

「相変わらずだな君は、それはそうとその二人は？」

「ああ、こつちの金髪の子がフェイト・テスタロッサ、俺が抱えているのが高町なのは、二人とも現地協力者だよ」

それを聞いたフェイトが若干驚いた顔をしたが俺が手でジエスチャ―して黙っててもらった。

「そうか、しかし感心しないな。このレベルの事故の手伝いを民間人にさせるのは」

そうクロノが言ってくるがそんなのは関係ない。

「しゃーねーだろ、俺一人じゃ確実に次元震が起きてたぞ？そこに封印処理が出来る魔導師が二人も出てきたんだ手伝ってもらおうほかなかったよ。第一、管理局自体がもつと早く動ければこんな事態にはならなかったぞ？」

「確かに、それを言われると耳が痛いな。それはそうと先ほど戦闘行動が確認されたが？」

「ああ、それはフェイトとなのちゃんの模擬戦だ。ジュエルシードを封印した方には御褒美があるからな」

「御褒美？」

クロノが聞いてくる。フエイトちゃんも何の事？と聞いたそうさ。

「なのちゃんのお母さんの桃子さんは腕の良いパティシエールでな、頑張った方に特製ケーキが与えられ「それは本当なの！」・・・リンディー艦長、聞いてたんすか」

突然画面に割って入ってきたのはクロノの母親のリンディさんだった。この御婦人、大の甘党である。俺もかの有名な「リンディ茶」をのんだ被害者の一人だ。その後リンディさんには「抹茶オレ」を勧めてみたのだがどうもお気に召さなかった様だ。何でだろう？まあ、それは兎も角、

「ねえ、カズキ君その御褒美って私たちにも適応されるのかしら？」

「・・・おい。あまりの事にクロノを見ると、クロノも頭を抱えていた。」

「ああ、艦長！私欲で部隊を使わないでくださいよ！？」

「ていうか、俺らはそれが仕事でしょ！？御褒美出る訳ないじゃん。もし出たとしても封印処理する人達だから隊員の人達に出るんじゃないかね？」

「なん・・・ですって！？」

リンディーさんの後ろに「ガンー！！」って見えたのは気のせいだ。しかもこの世の終わりみたいな顔をしている。そこまで食べたいの

かよ。

「分かった、分かりました！差し入れて持つていくのでそんな顔せんでください！！」

お手上げとばかりに両手を挙げ観念する。その瞬間リンディさんの顔が笑顔になったのは言うまでもない。

「あ、じゃあ私の分もお願い！」

更に割り込んで来たのはエイミイだった。

「安心しろ、とりあえず人数分は持つていくから。それと久しぶりエイミイ」

「うん、久しぶりだね。元気にしてた？」

「おう、エイミイも元気にしてるようだな。クロノとはよろしくやってるのか？」

「もう、そんな当たり前事聞かないでよ！昨日だってクロノ君が寝かせてくれなかったんだから」

「なっ！！何を言ってるんだエイミイ！！」

そう言っつて、慌てて否定してくるクロノ。リンディさんは「あらあら」とニヤニヤしている。

「ん？何を言っているんだ？書類整理で徹夜したのだろう？眼の下にクマが出来ているぞ？」

「そうだよ。クロノ君徹夜で処理したじゃない」

「・・・あ」

「やれやれ、クロノ一体何を想像したんだ？まあ、男の子だから仕方ないと思うが」

「そうだよクロノ君、何を想像したの？」

俺とエイミィでニヤニヤとクロノを見る。クロノはプルプルと震えていた。ああ、やっぱり久しぶりだなこの感覚はwww。ちなみに画面の後ろに映っているオペレーターやら操舵士の人たちも、口元を隠し笑いをこらえていたり、ヒソヒソ話をしている。

「き、君たちは！！しかもカズキは何でその事を知っている！？」

「フッフッフ、情報出所は明かせません！まあ、それは兎も角よろこそ日本へ。こんな事故がなければ観光案内の一つでもしたいんだけどね今はジュエルシードが先だな。それが終わったらゆっくりして行ってね！！」

御丁寧にスサノオに記録した「ゆっくりボイス」で答える。

「はあ、あと少しでそちらに着く。事情はその時に話してもらおうよ」

「ああ、それまでゆっくり休んでおけ」

「・・・そうさせてもらおうよ」

「では、リンディ艦長またの連絡を待っています」

「分かりました。そちらに着いたら連絡を入れます。それまでよろしくねカズキ君」

そう言っただけで通信を切る。さて、これからが正念場か、俺はプレシアとアリシアを助けて尚且つ罪を軽くするためにどうすればいいか頭をフル回転させるのだった。

第二十九話（後書き）

クロノ君達早めの到着です。さてこれからホントにどうしようっ？ス
トーリーが中々決まらない（涙）

第三十話

L級艦船第八番艦 アースラ

その部屋は長方形の形の部屋で結構な奥行きがある。入口付近から部屋の奥の方まで伸びる机、その机を挟む様に椅子が並べられている。そこはアースラの中にある会議室だ。戦闘前などに使うブリーフィングルームとは違い、それなりの人数が入る事が出来る部屋だ。今そこには俺のほか、リンディさん、クロノ、エイミィ、亜夜、なのちゃん、ユーノ、フェイト、アルフ、土郎さんがいる。それぞれ座っている席の前にウィンドウ型の画面の明かりが部屋を薄暗く照らしている。そんな中俺はリンディさんに今回の事故の件に関する報告をしている。なのちゃんとフェイトちゃんの模擬戦から3時間ほどしてアースラが到着しそれに乗り込んだと言う訳だ。

「そんじゃまず紹介から始めますか。え〜っと、俺の左隣にいるのが知り合いのフェイトちゃんとその使い魔のアルフです。んでもって、右側にいるのが妹の亜夜で、その隣が高町なのはちゃん、その隣がユーノ君、更に隣がなのはちゃんのお父さんの高町土郎さんです。」

それぞれ頭を下げ挨拶をする。何やらフェイトちゃんが、「使い魔じゃなかったんだ」と呟いている。どうやらユーノを使い魔と勘違いしていたらしい。

「そんで、正面に座ってるのがこの艦の艦長のリンディ・ハラオウン艦長、その隣が息子さんのクロノ・ハラオウン執務官、俺の士官学校時代の同期だ。その隣が通信主任兼執務官補佐のエイミィ・リミエッタだ」

此方もそれぞれ頭を下げ挨拶をする。すると亜夜が、

「ねえお兄ちゃん。艦長とか通信主任っていうのは分かるんだけど執務官って何？」

と聞いてきた。ユーノとフェイトちゃん以外の人たちは気になるのか此方を見ている。

「あゝ、アレだ。簡単に言つと刑事だ^{デカ}」

非常にざっくりとした答えだが概ねあっている。それを聞いて亜夜は「へえ」とクロノを見ていた。

「んじゃ、紹介も終わったし報告につつります。まず事の発端はスクライア一族が発掘したロストロギア「ジュエルシード」が運搬中に事故に遭い海鳴市に散らばった事です。そこからユーノ君が単独で回収を試みるも失敗、負傷したところを通りかかったあのちゃんに助けられた。その後現地時間で4月5日20時35分ごろ、海鳴市においてユーノ君が再度ジュエルシードの異相体と戦闘をしていたところに、なのはちゃんが居合わせ魔法の力に目覚めると共にジュエルシードの異相体を撃破、三個のジュエルシードを回収し封印しました。なお、その時の映像は此方になるので確認してください」

そうやって俺は画面を操作し、スサノオからデータを送る。それをエイミイが受け取り画面に流す。そして、その映像を見たリンデイ、クロノ、エイミイは食い入るように画面を見ている。相当驚いているようだ。

「か、カズキ？このデータで間違い無いのか？」

クロノが聞いてくる。

「ああ、間違いない。なのちゃんが魔法と出会ってから戦闘に入る所も映ってるしな。編集してないノーカット版だぞ？」

「これ、初戦闘なのか？」

「ああ、そうだが？」

「あらあら凄いわね」

そう言ってきたのはリンディさんだった。どこか嬉しそうなのは気のせいか？まあ良いやとりあえず続きだ。

「んで、その後高町家と相談しチームを組み手分けをしてジュエルシードを搜索、途中フェイトちゃんも合流し現時点までに9個回収しました。後ほど詳しい報告書と映像データを上げます」

俺がそう言つと、なのちゃんが聞いてきた。

「あれ？一樹お兄ちゃん、私達の回収したのって7個じゃなかったっけ？」

そう言つと、俺とは別のチームだった人たちが「うんうん」と頷いていた。

「ああ、言つてなかった。なのちゃん達さっきのを回収している間に2個回収したんだ」

「ふえ！？2個も一辺に！！ど、どうやったの！？どこにあったの！？」

そう聞いてくるなのちゃんに俺達のチーム（と言っても亜夜だけが）は苦笑いしている。

「あゝ、なのちゃん。なのちゃんが歩いていると足元にお財布が落ちていました。さて、なのちゃんは どうする？」

突然まったく関係ない事を聞かれキョトンとしていたが答えてくれた。

「それは勿論警察に届け・・・え？」

どうやら気付いた様だ。

「正解だよ。海鳴警察署に行ってみただけ。そしたら何と2個も届いてたんだ。いやゝ、親切な人に拾われて助かったよ」

「な、なにそれゝゝ！！」

そうなのだ。落とし物として警察に届けられていたのだ。俺も冗談半分に行ってみたのだがまさか本当にあるとは思わなかった。こんなところでイレギュラーが発生しているとは。まあ、早く回収が出来たので問題ないと言えば問題ないのだが。なのちゃんが「納得いかないの！」と言わんばかりだが気にせず報告を続ける。

「残りのジュエルシードは12個、しかし現時点で何処にあるかまでは分かっていません。報告は以上です」

俺はそう言っただけで席につく。背もたれに体重を預け「ふう」とため息をつく。残り12個、海には6〜7個ぐらいまとまっていたはずだから残りは実質5〜6個。今まで通り分かれて探せばそんなに時間はかからないだろう。後はプレシアさんをどうするかだな。そんな事を考えているとリンディさんが話しかけてきた。

「大まかな状況はわかりました。残りのジュエルシードについてはアースラの索敵機能も存分に使って探しましょう。エイミーお願いしますね」

「了解しました」

エイミーが短く答える。

「実働班についてはクロノとカズキ君の2チームで行ってください。人員は此方から出しましょう」

「了解」

更に俺とクロノが答える。

「それと、なのはさんにフェイトさん、アルフさん、ユーノ君に土郎さん此処まで手伝っていただいて本当にありがとうございます。管理局員代表としてお礼を申し上げます」

そう言っただけでリンディさんは頭を下げる。

「今後は管理局が引き継ぎますので普通の暮らしの戻ってください。ユーノ君はスクライアー族の世界まで送りましょう」

そうリンディさんは言ってきた。さてどうなるかな？原作通りだと例の言い回しをしてくるんだが、今は保護者の土郎さんもいるし、イレギュラーの俺もいる。更に現時点でこれは「事件」ではなく、「事故」扱いになっている。戦力が必要な訳でもない。さて、どうなるのかな？。すでに観戦モードの俺であった。

「あ、あのー！リンディさん。最後まで手伝わっちゃダメでしょうか？」
お、なのちゃんが動いたか。

「ぼ、僕からもお願いします。最後まで手伝わせてください」
更にユーノ君の援護も入った！

「しかし、これは次元干渉に関わる事故だ。何の訓練も受けていない人間を使う訳には・・・いや、しかし此処まで封印処理したのは彼女達だ。これからは此方からのサポートも出来る。迅速に回収するには手伝わってもらうのが最善だが、いやしかし・・・」

おおっと！これは予想GAIです！クロノが賛成派に傾きつつある！
一体どういう風の吹きまわしだ！？

「土郎さんはどちらでしょうか？」

リンディさんが保護者の土郎さんに声をかける。

「そうですね、命の危険がある以上そちら管理局に任せるのがベストだと思います。これ以上危ない事に関わってほしくないという気持ちもあります。それと同時になのはの意見を尊重してやりたいというのがあります。ですのでもしなのはが中途半端な気持ちでは

なく本当に手伝いたいというのなら、私からは何も言いません。出来たらなのは同行させてもらえるありがたいですが」

「お父さん！良いの!?!」

「ああ、さつき言ったとおりだよ」

そう聞いたなのちゃんは土郎さんに抱きついた。きつと反対されると思ったのだろう、本当に嬉しそうにしている。

「カズキはどう思う?」

そんな事を思っているとクロノに意見を求められた。早くも観戦終了です。

「そうだな、なのちゃん達に手伝ってもらえば間違いなく早く回収できる。今回の事故の事を考えると迅速に回収した方が良いのは間違いない。それに人数が増えればクロノを待機させて緊急時の遊撃としても使う事が出来る。ただし現場に出るのならこれからみっちり訓練した方が良いと思う亜夜しかり、なのちゃんしかり。あんま無茶されても困るし。とりあえずそのぐらいか?」

「「「.....」」」

「ん?なんだよ。みんなして黙って」

「お兄ちゃんが真面目だな〜って思って」

そう言ってくる亜夜に、

「うんうん」

首を縦に振り頷くのちゃん。

「何時もこのくらいちゃんとしてくれれば」

そう言っただけため息をつくクロノ。

「失敬な、俺は何時でも真面目だ」

「真面目な行動がアレだったら余計たち悪いの!!!」

一番被害にあっているであろうなのちゃんが突っこむ。

「何を言っ!どんなことにも真面目に取り組むと教わらなかったのか!?!」

「過大解釈しすぎだよ!!!」

そう言ってきたのは亜夜だった。

「過小解釈するよか良いだろ」

「いや、むしろそっちの方が良かったかもしれない」

冷静に突っ込むクロノ。

「やれやれ、俺に味方はいないのか」

「みんな少なからず被害にあってるからね。いないと思っよ?」

苦笑い気味にユーノが言ってくる。

「ガツデム！なんて世の中だ！！」

「自業自得だな」

クロノがため息交じりに言ってきた。

「はいはい、漫才コトはそのくらいにして話の続きをしましょう」

漫才扱いされた。まあ、間違っちゃいけないので反論できない。

「ふう、亜夜となのちゃんに関してはそんなもんですかね。次にフエイトちゃんですが、彼女は既に魔法訓練を積んでいるので直ぐに現場でも問題ないでしょう。しかし、体力的、精神的に見ても不安が残るのは事実です。ですので俺とチームを組むのが妥当かと考えます」

「その理由は？」

「まず第一に俺の魔力量ですね。そう何度も封印処理なんか出来ません。そうするともしジュエルシードが複数固まっていた場合、俺と隊員だけでは不安が残ります。その点フエイトちゃんなら問題ないでしょう。俺が前衛、フエイトちゃんが後衛アルフがサポートにつけばそれだけで十分です。封印処理はフエイトちゃん任せになりますが魔力量から言っても問題ないでしょう。次にフエイトちゃんとは知り合いです。行動に関しても気心の知れた人の方が動きやすいでしょう。フエイトちゃん人見知りしますし。そして最後にこれが一番重要かもしれません。それは・・・」

「それは？」

「男性隊員より、可愛い女の子と一緒にの方が俺のモチベーションが上がる」「バシイーン！！」・・・痛いぞクロノ」

俺のすぐ横には張閃はりせんを振りぬいた状態でワナワナと震えるクロノがいた。

「またか？またなのか！？また漫才をするのか！？」

「落ちつけクロノ。じゃあ何か？お前はフェイトちゃんみたいな美少女より、ガチムチで良い笑顔の兄貴とチームを組んだ方がモチベーションが上がるというのか！？」

「そんなわけあるか！！」

「だろう？だからクロノ、今からお前に名言を送ってやろう」

「・・・なんだ」

「可愛いは正義！！」

ズパアアアアン！！！！

本日二度目の張閃（Mk2と書かれている）が炸裂した。

「少しでも期待した僕が馬鹿だった！！」

「そうだ、期待したクロノが馬鹿だったんだWWW」

「こっのバカズキ！！今日こそ泣かす！！」

「やれるもんならやってみなwww、最近俺の方が勝ち越してるからな！」

「後悔するなよ！この会議が終わったらトレーニングルームに来い！」

「上等だ！受けて立つ！」

そう二人で言い合っていると、静かな声で、

「終わったかしら？」

「ゾクツ！！」

俺とクロノは背筋を凍らせた。二人でギギギと音を出しながら声のした方に顔を向ける。そこには良い笑顔をしたリンディさんがいて、その背後には某漫画の「地上最強の生物」がいるのが見えた。周りの連中もガタガタと震えているが、フェイトちゃんだけ顔を真っ赤にして俯いてしまっている。あ、可愛いとかが、美少女とか言い過ぎた。しかしこの状況でこの反応、これがフェイトちゃんクオリティーか！！しかしそんな事を考えると大抵碌な目に遭わない。リンディ裁判官（検察、弁護士兼任）が直々に死神の鎌を振り下ろす。

「クロノ執務官と斎藤一樹臨時三等陸士、この後トレーニングルームで「特別訓練プログラムS」を行います」

「「ゲツ!!」」

特別訓練プログラムとは、主に精神的に追い詰める訓練プログラムである。難易度も豊富に用意されており、F、E、D、C、B、A、S、SS、SSSとなっており、自主訓練するにはCが限度とされており、それより上は上司の許可が必要になり、Sから上にあつては指定された医師と一緒にいなければならないという程ものである。C難度ですらそれなりに追い詰められるのにその三段階上の難易度だ。どうなるか分かったものではない。

「か、艦長？それは流石にやり過ぎなんじゃ・・・いえ、何でもありません」

見かねたのがエイミイが庇おうとするが、リンディさんと目を合わせた瞬間自分の意見を覆した。後にエイミイは語る。

「アレは無理だよ。声には出てないけど」「一緒にする?」って言うてたもん」

目は口ほどにものを言うとは良く言ったものである。その後会議は俺の意見が通りフェイトとペアになり、他はクロノが遊撃、なのちゃん、ユーノ、亜夜、土郎さんとなった。亜夜の訓練が終了したらもう1チーム増える予定だ。なのちゃん達はあくまでも現地協力者という形になり非常時は管理局の指示に従うと相成った。そして会議が終了し各自が準備する中、トレーニングルームからは俺とクロノの悲鳴が絶えず響いていたそうなの。

第三十話（後書き）

そろそろ終盤になりつつあります。

第三十一話

プレシア・テストロッサ

「ママー、こっちこっち！」

そう言ってくるアリシア、今私達は小高い丘の上にいる。そこは芝生が生えていて、大きな木もあって日差しを避けるにはちょうどいい日陰を作ってくれている。時折吹き風も心地よく、此処まで歩いて来て火照った身体を冷やしてくれる。私はシートを日陰に敷き、持ってきたバスケットを置いてシートの上に座る。

「アリシア、あんまりはしゃいでると転んじゃうわよ」

「平気！平気！行こうリニス」

そう言ってアリシアはリニスと一緒に芝生の上で遊んでいる。ああ、ようやくアリシアと一緒にいる時間を作れるようになった。研究も終わって、部署も変わりこれからはアリシアの為に色々してあげる事が出来る。そう思うと自然と笑みがこぼれる。おやつの準備をしながらそう思っていると遠くで、金色の光が上がる。初めは柱の様に空に伸びたかと思うと次はそこを中心として半球の様になって私達に迫ってくる。そしてあつとゆう間にその光に巻き込まれる。

暗転

そして次に私が目を覚ました時周りの風景は一変していた。地面は所々焼け焦げ、綺麗に生えていた芝生は見る影もない。シートを敷いていた場所にあった木は、途中からへし折れ燃え上がっていた。

心地よく吹いていた風は、今はどこからか焼け焦げた匂いや、巻き上げられた土煙りを運んでいる。私はハッと思いだしアリシアを探す。そしてそんなに離れていない場所でアリシアを見つける。

「アリシア！！」

私はアリシアに駆け寄り直ぐに抱きかかえる。外傷はない。まったく言っていていいほど無かった。服さえ汚れていないのだ。そして直ぐに脈の確認をする。手首に指を当て脈を測るが・・・無い。アリシアの胸に耳を当て心臓の音を聞こうとするが、私の耳にはその音は聞こえてこなかった。

「あ、ああ、あああああー！！！！！！」

私は力の限り叫んだ。ああ、また、まただ。もう何度目になるだろう。分かってはいた。これが現実でない事は。わかっていた。これが夢だという事は。でも、何度でも見てしまうそれが分かっている、そう願わずにはいられなかったのだから。娘との時間を取り戻したいと・・・。

「アリシア！アリシア！！アリシア！！！！」

私は愛しの娘の名を呼び続ける。いくら揺すっても返事は帰ってこない。そして何時もなら此処で眼が覚めるのだが、今回はすこし違っていた。

「母さん、大丈夫だよ」

そう言ってきたのは女の子の声だった。私は振り返るがその女の子の姿は逆光になっていて分からなかった。でもこの声には聞きお

ぼえがあった。そしてもう一つ、

「大丈夫です。助かりますよ」

その横にはもう一つシルエットがあった。声からして男の様だけど女の子と同じで姿は分からなかった。そして二人はアリシアに近付くと懐から何かを取り出しアリシアに飲ませる。すると、

「う、うくん、・・・ママ？」

閉じられていた目が開き私の名前を呼んでくる。しかし私が見る事が出来たのはそこまでだった。

海鳴市郊外

「あ、あの大丈夫ですか？」

そう俺に声をかけてきたのはフェイトちゃんだ。あの訓練後直ぐに二つのジュエルシードの反応が出てしまい、ただちにに出勤となつてしまった。流石にこれは予想外だったのかリンディさんも「大丈夫？」と聞いてきた。それについて俺は、「大丈夫だ。問題ない」と軽く死亡フラグを立てつつ現場に向かったが、ジュエルシードの異相体との戦闘も問題なく終了し、無事封印して一息ついている所だ。

「ちょっと、ふらつくけど大丈夫。それよりこっちこそ悪かったな。プレシアさんに報告行くの待ってもらって」

「あ、いえ大丈夫です。ジュエルシードが全部集まってないので」

「そっか、それでもちよつとは会いたくないんじゃないのか？」

「・・・少し」

「だよな。・・・じゃあさちよつと会ってくるか？」

「え？」

「プレシアさんに。俺もちよつと話したい事あつたし」

「良いんですか？」

「構わねーだろ。家に帰るぐらい。報告しない訳でもないんだから」

俺はそう言うとフェイトから少し離れた所でアースラに連絡をする。その様子を見てフェイトの近くにいたアルフがフェイトに話しかける。

「でも、大丈夫かね？あの鬼婆がまたフェイトに酷い事しなきゃ良いんだけど」

「アルフ！」

「・・・でもフェイト、あたしはフェイトが心配で」

「アルフ、お願いだから母さんの事悪く言わないで」

「ゴメンよフェイト」

フェイトにそう言われ「しゅん」となるアルフ。耳がペタっとな

って、尻尾がダランと元氣なく垂れる。なんつーかこんなアルフも良いね！と思っただのは内緒だ。まあ、そんな二人の会話は全部聞かしているんだけどね。やっぱりと言うか何というか、この事に関してはイレギュラーは発生していない様だ。まあ、どこまで説得できるか分からないけどやってみますか。

「フェイトちゃん、リンディさんから許可もらってきたよ」

俺はなにくわぬ顔でフェイトちゃん達のところに行く。

「なんだい、やけにあっさり許可が出たね？」

そうアルフが言ってくる。

「そりゃーそうだろう、今のところ緊急性もないし家に帰るぐらいどうってことないよ。なのちゃん達だって今は家から通ってたぞ？」

「そう言えばそうだったね。」

そうなのだ。今のちゃん達は家においてそこにアースラから連絡を受け直接現場に向かっている。訓練についてはレイ八さんにプログラムとスケジュールをインプットさせ自宅で訓練している。ユーノ君もそれを手伝っているようだ。今アースラでは亜夜を集中的に訓練している。なのちゃんと違い魔法に慣れている訳でもないの二人見るより別々の方が良いとなったのである。その為現在急ピッチで亜夜を訓練している。聞く話によると、実際に訓練をしつつ、マルチタスクでなのちゃんがしていたような訓練を行っていて、アマテラスがかなり絞っているらしい。まさに怒涛の訓練漬である。そんな中亜夜は弱音を吐かずに頑張っているようで、クロノから話

しを聞いたところ、なのちゃん程ではないが才能はあるようだ。スポンジが水を吸収するようにほとんど覚えていつているとの事だった。魔法の才能に剣術の才能、天は二物を与えずと言うが全然そんな事はなかったぜ！全然、コレぽっちもうらやましい何て思っただんか無いんだからね！勘違いしないでよね！・・・ごめんなさい。嘘つきました。沢山才能がある亜夜がうらやましいです。なんだか亜夜の方が俺より主人公っぽいよね。スキルとか才能的な意味で。まあ、それは兎も角、亜夜の仕上がりが予定より早いのもうこの分なら明日あたりにでもジュエルシードの搜索に参加できるようだ。そうすればジュエルシードの回収も2〜3日中には終わるだろう。そう中りをつける。

「そんじゃ、フェイトちゃんの家に突撃しますか！」

「はい、じゃあ行きます」

そう言うと俺達の足元に魔法陣が出てきた。

「次元転移、目標地点 座標 876C・4419・3312・D6
99・3583・D146・0779・F3125、時の庭園」

そう言うと足元の魔法陣が光り出し、一際輝いたと思っただらそこは見慣れた海鳴市ではなかった。時の庭園プレシアさんの本拠地、フェイトちゃん達の家、今俺がいるのは転移用の部屋の一室の様だ。そこは何もない部屋でそれなりの広さがある。これは転移事故を防ぐための処置だ。実際転移する時は明確な位置情報がないと出来ないうし、転移した先に障害物があるとそれはそれは恐ろしいことになる。コンクリートの壁にめり込んだりするっていうのもあったらしい。そういう理由からこの様な部屋が用意される事になったという訳だ。まあ、そんなに頻繁に転移する訳じゃないからこういう場所はそん

なはない。珍しいというのもあってキョロキョロしていると、アルフが声をかけてくる。

「何キョロキョロしてんだい？こっちだよ」

そう言っつてフェイトちゃんとアルフは部屋の出入り口に向かっている。その二人の後を俺は着いて行った。しばらく歩いて行くとそこには大きな扉があった。その扉を見た第一印象は「無駄にデケエ！」である。トラックぐらいなら余裕を持って通り抜ける事が出来そうな大きさなのだからそう思っつても仕方ないだろう。第一人の住居なのに此処まででかくする必要あんのか？まあ、そんな事考えてもどうしようもないので置いておくけど。そうこうしているうちにフェイトちゃんが扉をノックする。

「母さん、戻りました」

そう言っつとやや間があり、

「入りなさい」

と、返事があった。触れてもいないのに勝手に扉が開いていく。

「アルフはここで待っつてて」

「・・・でも」

「大丈夫だよ。安心して」

「・・・分かつたよ」

おい、アルフあからさまに心配し過ぎだ。わからんでもないがもつと隠せ。念話とかいくらでもやり様はあるだろうに。

「ん？なんだ？なんか心配するような事でもあんのか？」

「あ、な、何でもないよ！」

俺の質問に慌てて答える。アルフ・・・それじゃあ何かありますって言ってる様なもんだぞ？まあ、とりあえず知らないフリしとかないとな。

「ん？そうか？なら良いんだけど」

「じゃあ、行こうかカズキ」

「ああ」

そう言っただけで俺とフェイトちゃんは扉の中に入って行った。扉の向こうは広い空間に執務机（結構高級そうな）が正面にあるだけだった。部屋自体は上品な雰囲気になっており非常に好ましく思える。そして机には一人の女性が座っていた。髪の毛は長く左目が前髪で隠れてしまっている。顔立ちはフェイトちゃんに似ているがどこか疲れている感じがにじみ出ている。間違いないプレシアさんだ。

「ただいま戻りました」

「・・・挨拶は良いわ。で、ジュエルシードは？」

プレシアさん、俺は眼中にないって訳ですか（泣）

時の管理局員で？母さんとジュエルシードの事で話がしたいって事だったから連れて来たんだけど・・・」

フェイトちゃん何故、所々疑問形なんだろうか。まあ、今までの行動を振り返ると手伝っていたかは疑問であるが。

「じゃあ、さっきの事は関係ないのね？」

「さっきの事？」

「・・・分からないのなら良いわ。それでジュエルシードは何処？」

「それは・・・」

「・・・まだ集まってないのかしら？あれだけ時間をかけてまだ一つも集まってないの？」

「ち、ちが」

フェイトちゃんは違つと言いたかつたんだろうけど叱られるという恐怖からか上手く言う事が出来ない。プレシアさんは椅子から立ち上がりゆっくりとフェイトちゃんに近付いて行く。

「残念だわフェイト。あなたはお母さんをそんなに困らせたいの？」

そう言ってプレシアさんは持っていたデバイスを鞭の形にする。

「言う事の聞けない子にはお仕置きが必要だわ」

「フェイトに何するつもりだい！」

「黙ってなさい」

そう言っつてプレシアさんはアルフにバインドを掛ける。

「な！くそ！これを解け！」

そうアルフが言うがプレシアさんはそれを無視して鞭を振り下ろした。アルフは直ぐ後に聞こえるだろうフェイトちゃんの悲鳴と苦しむ姿を見たくないのだろう目を閉じ顔をそむけて、フェイトちゃんは数瞬後に襲ってくるであろう痛みに耐えるために身を固め、必死に耐えようとしている。

バチイッッン！！

確かにそう音がしたがフェイトちゃんは痛みが来ない事に違和感を感じ、アルフは悲鳴が聞こえなかった事から恐る恐る目を開ける。

「いッッッッッてええええー！！！！！！」

俺は背中に手を回し打たれた場所を必死に撫でるがあまり効果は無い。例えるならば海に行っつて背中を真つ赤に日焼けして、そこにバチーン！と張り手をくらった様な痛みだ。

「だ、大丈夫かい？」

のたうちまわる俺を見て心配したのかアルフが聞いてくる。

「だ、大丈夫！我々の業界では御褒美です！！！！」

涙目になりつつもそう宣言すると、いくらか周りが「つつー」と身を引いたのが分かった。ああ、このネタって知らない人に言うとしたの変態だよな。言った後に軽く後悔する。ただフェイトちゃんだけは分らないのか首をかしげている。

「あ、あんたそう言う趣味があつたのかい？」

「変態はさっさと出て行きなさい。フェイトその変態から離れなさい」

そう言ってプレシアさんはフェイトちゃんに言う。それに従いプレシアさんの元にトテトテと行くフェイトちゃん。そしてフェイトちゃんを後ろに庇いながらめちゃくちゃ警戒するプレシアさん。やべ、遊び過ぎた。

「すみませんでした!!ふざけ過ぎました!!なので、そんなに警戒しないでください。そういった趣味はこれっぽっちもありませんので!!」

そう言って正座をして額を地面に「ゴッ!」と叩きつけひたすら謝る。自業自得なので仕方がない。そうするとプレシアさんも若干警戒を解いてくれたのか話しかけてくる。

「・・・それで、管理局員が私に何の用かしら？」

俺は額から血を流しつつプレシアさんに聞く。

「ジュエルシードの使い道について聞きに来ました。答え次第では俺はプレシアさんに協力しても良いと考えている」

「そう、でもその必要はないわ」

うわーい、気持ちいいくらいにバツサリだ。しかし此处で諦める訳にもいかないので再度説得を試みる。

「現在管理局側で確保しているジュエルシードは六つ、フェイトちゃんが五つ合計11個のジュエルシードがある。プレシアさんの目的には幾つ必要なんですか？」

「全部よ」

「ジュエルシード全てを使って何をするつもりなんですか？」

「あなたに言う必要があるの？」

「そりゃ、管理局が回収しているロストログアを使おうとしているんだから管理局が納得しないところちで保管しているジュエルシードは渡せないですよ」

「そう、理由は人命救助よ」

「何処で？誰を？」

「それは言えないわ」

「何故？」

「依頼者からの意向ね。その依頼者も明かす事は出来ないわ」

はあ、なにこのピグザム並みの装甲は？これじゃ、何を言っ

も無駄なんじゃなかるうか？しかし分かっちゃいたけど硬すぎやしないか？どうやって切り崩していったら良いか……。

「そうですか、しかし何でまたフェイトちゃん一人に？いくらアルフがいるからって危険すぎやしませんか？」

「あら？それはあなた達管理局も同じなんじゃないかしら？」

「ファツキン！！それを言われるとぐうの音もでないZE！

「それを言われると耳が痛いですが、どうしてプレシアさんは手伝わないんですか？」

「フェイト一人で出来ると思ってるからよ。私が手伝う程の事ではないわ。私はほかにやらないといけない事があるのよ」

「……もう、ゴールしても良いよね。コラそこ！「諦めんの早！」とか思うな！そこも！「諦めんなよ！」とか言うな！後「お米食べる！！」は関係ないだろ！ゲフンゲフン、それは兎も角、明確に犯罪をしているって訳じゃないからなあ〜今のところ。次元震だつて発生させてないし、経緯はどうあれなのちゃんとの一戦は模擬戦になってるし、クロノに攻撃やら妨害した訳じゃないからなあ〜。は！コレ自分でまいた種じゃね！？自分の行動の結果がこれだよ！いや、すこしは予想してたけどさ。ああ、知ってる事を全部ぶちまけたい！！フェイトちゃんもいるから変な質問も出来ない！ぬあ〜！会うの失敗だったかもしれないな。タイミングが悪い。しかも嘘は言っていないようなので性質が悪い。

「確認しますが本当に人命救助なんですか？」

「そつよ」

俺はふう、とため息をつきフェイトちゃんを見る。プレシアさんの後ろでアルフと一緒にこつちを見ている。

「フェイトちゃん、いったん戻ろう。まだ渡しても良いって程事情を話してくれてない」

「そ、そんな」

「この理由だけで渡しても良いとは判断できないよ」

俺はフェイトちゃんにそう言う。するとフェイトちゃんが、

「じゃあ、私達の協力関係は此処までです」

そう宣言してきた。うあちゃ、そう来たか。

「い、良いのかいフェイト？」

見かねたアルフが声をかけてきた。

「うん。私は母さんがジュエルシードを悪い事に使うとは思えない。私は母さんを信じてる」

ふう、失敗だったかなこりゃあ。

「そつか、じゃあ次に会うときは敵同士か。容赦しないぞ・・・なの
ちゃんが」

「あんたじゃないのかい!？」

「はっはっは、当たり前じゃん。俺は女の子を殴る様な鬼畜ではありませんよ。でもまあ、邪魔するとお堅い頭の連中が公務執行妨害とか騒ぐから、事前に連絡くれるとありがたい。もし一人じゃ無理そうだったら俺に連絡すれば自由に動けるから」

「分かりました。その時は連絡します」

此処まで来て変な罪状を追加する訳にもいかんしな。それと、

(アルフ、聞こえる?)

(っと、いきなり念話で話しかけるんじゃないよ。ビックリするだろ)

(いや、フェイトちゃんの事でな、今はああ答えてるけど多分連絡してこないかもしれないからホントにまずいと思ったらアルフから連絡してくれ)

(・・・そうだね、そんなときは連絡するよ)

(ああ、よろしく頼む)

(悪いね、色々心配かけて)

(気にすんな。仲間だろ)

(さっき、次会うときは敵同士って言ってなかったかい?)

(プライベートまで敵になる必要な無いだろう)

(まったく、あんたらしいね)

「それじゃ、俺はそろそろ御暇おいとまするかな」

「カズキ、今まで協力してくれてありがとう」

「そりゃあお互い様だ。こっちも協力してくれてありがとう。これは選別だ。とつといてくれ」

俺はそう言ってスサノオから俺の回収したジュエルシード二つをフ
イトちゃんに渡す。

「え？良いんですか？」

「ああ、今までの報酬とでも思ってくれ」

「でも、それほど協力してませんよ？」

・・・考えてみればその通りだ。あくまでもお互いに干渉を出来る
だけしないようにするっていう体勢だったっけ。

「ん、じゃあなのちゃんの模擬戦の相手役の報酬って事で受け取っ
といてくれ」

「・・・分かりました。ありがとうございます」

そう言って俺はフイトちゃんにジュエルシードを渡し握手をし
て部屋から出る。今回の事で多分シナリオ(原作的な意味で)通り

に進む事になると思うんだよなあ。そうすると次は海上戦になるのか。そんなとき戦わないようにしっかりと審判しないと。次は何で行くかな？そんな事を考えて、初めに来た部屋に戻った時俺はある事に気がついた。

「あ、俺転移系の魔法使えねーじゃん」

はあ、とため息をつきプレシアさんの部屋まで戻るのだった。

第三十一話（後書き）

一樹はあえてあまり突っこんで話をしてません。フエイトがいると
いうのもその原因ですね。

第三十二話

Ｌ級艦船第八番艦 アースラ

「ただいま戻りましたよ〜っと」

そう言っただけ俺はブリッジに顔を出す。その後フェイトちゃんに海鳴市に転移してもらってからそこで分かれ、アースラに連絡してそこからさらに転移して戻ってきたのだ。

「あ、お兄ちゃんお帰り」

「戻ったか」

ブリッジにいたのは亜夜とクロノ。そして良く見ると亜夜が私服ではなく、道着姿だった。しかもいつもの剣道着と若干違いどちらかと言うと色違いの巫女服だ。白の道着に黒の袴、額当てや、籠手、更には胸当てに足袋、草鞋、御丁寧に道着の袖が邪魔にならないように襷掛けまでしてある。そして日本刀のアマテラスが腰にさしてある。髪は後ろで纏めてある。これからどこかの戦に行くのかと聞きたくなるような格好だった。

「亜夜？どつたのその格好？」

「あ！これ？ふっふっ、カッコいいでしょ！私のバリアジャケット
！」

そう言っただけその場でぐるっと一回転する。そう言えば亜夜のバリアジャケットを見るのは初めてだ。

「まあ、似合ってはいるな。しかしずいぶんと和風だな？」

「うん、私デバイスが日本刀だからいつもの道着姿の方が慣れてるから良いかなって思ったんだ。それにこっちの方が気合いが入るし」

亜夜が力瘤をつくるように腕を曲げ「ムン！」とポーズをとる。

「ふ〜ん。で、何で今バリアジャケット姿になってんだ？」

「へっへ〜、それはね〜」

亜夜はそう言っていると日本刀の状態のアマテラスを鞘ごと腰から抜き、

「じゃ〜ん！ たった今クロノさんと一緒にジュエルシードを封印してきました！！」

そう言つてアマテラスから出したジュエルシードを見せてきた。それを見た俺はギギギとクロノの方を向くと、

「カズキがスタロツサと一緒に行って、少したつたらもう一つ反応が出たんだ。丁度その時亜夜の訓練が終わったから実戦の空気を感してもらおうと思つて一緒に行つてきて、いましがた封印して戻つてきたところだ」

と言つてきた。

「ちよ、ちよつと待て。訓練はもう終わったのか？いくらなんでも早すぎだろっ！？」

昨日の今日でいくらなんでも早すぎである。

「それについては嬉しい誤算だった。元々下地が出来ていたというのもあってどんどん覚えていったからな。戦闘についても問題なかったぞ。どっかの誰かさんは魔法習得にやたらと手間取っていたが」

クロノがニヤニヤしながら言うてくる。何時もやられる側だから反撃できるときに反撃しようという魂胆の様だ。はあ、兄より優れた存在が目の前にいるよ。どうせ俺は魔法習得に年単位でかかりましたよ〜だ！〜と言うかあのころを思い出して若干涙目だ。あの時は結構不安だったもので、マジでこのまま魔法使えなかつたらどうしようと思つた。真剣に悩んだ時期もあった。それもあってスサノオを使つて魔法が使えた時はホントに嬉しかった。テストルームで魔力がなくなるまで使いまくつたのだ。今思えばはしやぎすぎたな〜と思う。それは兎も角、言われっぱなしは糞に障るので、

「でも、魔法の使えない相手に模擬戦でずいぶんと手こずっていた人がいた気がするな〜」

「うっ！」

「しかも士官学校の時の戦績は負け越したよな〜、魔法が使えない人との戦績なのに」

「嘘を言うな嘘を！五分だつただろ！」

「やっぱ覚えてたか」

「仕方ないだろ。模擬戦だと相手になるのがカズキしかいなかったんだから」

「まあ、確かにな。結局クラス内で賭けの対象になってたし」

「そうなのだ。士官学校時代は相手になるのがクロノしかおらずいつも模擬戦をしていた。しかも結構白熱した模擬戦になるもんだから、自然と賭けの対象になった。そこに五味教官が悪乗りしていつも訓練の最後のメインイベントとなってしまうのだ。その結果、勝敗が管理されどっちがどれだけ勝ったかを覚えているのだ。ちなみに学校最後試合は卒業式で学校生全員の前だった。そんな事を思い出していると亜夜が声をかけてきた。」

「あれ？お兄ちゃん、フェイトちゃんは？」

「フェイトちゃんは家の都合で離脱した。これからは単独で行動するってさ。何かあったら連絡するようにって言うておいた」

「えー、そうなんだ。残念、一緒に回収できるかもって思ったのに」

「残念だったな。でもどっかで一緒になるかも知れないぞ？」

「でもでも、その時に限って「興が乗らん！」とか言うて離脱しちゃったらどうしよう？」

「何それ面白いwww是非仮面をつけて登場してほしい！」

「何を言ってるんだ君たちは」

「そう言うてクロノが突っ込んでくる。」

「君たちはいつもそんななのか？」

「いや、最近亜夜がネタを理解してきた。兄としては喜ばしい限りである」

俺がそう言つとクロノは亜夜の方を向き、

「・・・良いのかそれで？」

と、問いかけた。

「不本意だけど、日常になつちやつたんですよ。それにお兄ちゃんが進めてくる漫画とかアニメって面白いし」

「・・・そうか」

クロノは、はあくため息をついた。クロノこの程度でため息なんかついてたら、はやてと会った時胃に穴が開くぞwww。そんな会話をしていると、

「高町なのは！ただいま戻りました！」

と元気よくなのちゃんが戻ってきた。

「よ、お帰りなのちゃん。怪我は無いか？」

「あ、一樹お兄ちゃん。うん、大丈夫だよ。ユ一ノ君も手伝ってくれたし」

「なのちゃんお帰り！見て見て！私も回収したよ！」

亜夜はそう言っただけなのちゃんにジュエルシードを見せている。

「ええー！ホント！あ、亜夜ちゃんその服もしかしてバリアジャケット
ツト？」

「うん！そうだよ」

「わ、凄い良く似合ってるの！」

「へへ、ありがとうなのちゃん」

そう言いながら二人でキャッキヤと騒いでいる。そんな二人を後目に人型形態のユーノに声をかける。

「ユーノお疲れ、どうだった？」

「あ、カズキ戻ってたんだ。こっちは問題ないよ、なのはも順調に魔法覚えてるし、今回はジュエルシードも危なげなく封印出来たよ」

「そっか、しかし凄いななのちゃんは」

「うん、そうだね。此処まで才能を持っている人はそうはいないよ」

「まったくだ。高町家は化物ぞろいです」

「・・・ホントにそうだから何も言えないよ」

「そんなに凄いのか？なのはの家族は？」

そう俺とユーノに聞いてきたのはクロノだ。そういや、クロノは会ってないもんな。

「ああ、今俺と亜夜も道場に通わせてもらってるけど魔法無しだとまず勝てない。多分一般局員が魔法ありで戦っても勝てないぞ？」

「そ、そんなに？」

まあそうだろうな。俺が魔法なしで平均的な局員と模擬戦してもまず負ける事はない。その俺が勝てないのだ。一般局員には絶対に無理だろう。

「ああ、この間なのちゃんが魔法ありで模擬戦したけど、なのちゃんのデイベインシューター木刀で弾はじいてた。流石にアレにはびびったわ〜」

「そうだね、普通の木刀だったもんね。真剣だったら叩き斬ってたんじゃないかな？」

「・・・出鱈目だ」

だよな〜、なんつうか「公式チート？」俺の知ってる原作では全く関わってなかったから何とも言えないが、実際に関わってたらこのくらいはしてたのかも知れんね。

「そう言えばクロノ、亜夜はどうだったんだ？初戦闘したんだろ？」

「ああ、訓練でした事は出来ているんだがあんまり魔法を使わなかったんだ」

「へ？そりゃあなんでまた？」

「あゝ、見せた方が早いかな？」

そう言っつてクロノは目の前にウィンドウを開き操作してデータを呼び出し再生する。そこにはジュエルシードの異相体と対峙する亜夜が映し出されていた。異相体は鼠が元の様だ。巨大化＋狂暴化。うん！今までと同じだ。これが縮小化＋穏和化したらそれはそれで面白いけど。亜夜はアマテラスを抜き正眼に構えている。しばらくすると戦闘が始まりその映像をみる。すると亜夜は魔力で身体能力の強化を行い、後はアマテラスでの攻撃を中心に戦っている。時折魔法を使用するがそれは避けられない攻撃を防御しているだけにとどまり、攻撃魔法の類はほとんど使っていない。うん、訓練では問題なく出来てたっつて聞いているからこれは意図的に使っていないんだらう。攻撃魔法が必要ないと判断したかはたまた他の理由か、そんな事を考えていると動きがあった。徐々に亜夜が押し始めている。確実に相手の力を削いでいく。そして異相体が大きな隙を見せた瞬間、アマテラスに魔力が流れ光り出す。そして一気に間合いを詰めると、異相体を唐竹割りに真っ二つにしてしまった。そして亜夜がアマテラスを一振りしてから鞘に納める。「チン」と鞘に納まる音が聞こえたと思ったら、後ろの異相体が霧散しジュエルシードが浮かんでいた。

「クロノ」

「なんだ」

「何で爆発しないんだー！！」

「え！突っ込むところこそー！！」

ユーノが反応した。

「当たり前だろ！最後亜夜の後ろで爆発でもあれば良い絵がとれたのに、霧散するとは何事だ！ちよつと亜夜に説教してくる」

そう言つて俺は亜夜の方に歩いて行くと、

「やめんか」

と声が聞こえると同時に、頭に「ゴツ！」と何か当たる。あまりの痛さに床をゴロゴロと転がる。痛みが引いてきたので後を見るとデバイスを起動して肩に担ぐようにして持っているクロノがいた。

「何すんだよ」

「そんな理不尽な理由で説教なんかするな」

「そつだよ、流石にそれで説教されたら怒られるよ？」

「かー！分かってない！分かってないな！二人とも！！あそこで異相体が爆発してその爆風でなびく髪！炎で照らされるシルエツト！それが王道つてもんだろ！だいたい倒された怪物は爆発と相場が決まっているもんだ！それが霧散だと！肩すかしにも程がある！二人はもうs」

「何処の戦隊ものよ！」

ガン！

再度頭に衝撃を受け、その場で後頭部を抑え再度床を転げまわる。後ろを見るとそこには亜夜となのちゃんが立っついていて亜夜がアマテラス（納刀状態）を両手持ちで振りぬいた状態だった。

「亜夜、両手持ちで人の後頭部を強打するのは割とシャレにならない」
後頭部をさすりながら亜夜に言う。

「お兄ちゃんが変な事言ってるからでしょ!!」

「む、聞いていたのか？」

「あんだだけ大きな声で喋ってれば誰でも聞こえるわよ!!」

それもそうか、周りを見てみるとみなさん「またか」と言う感じだ。

「なら、俺の言いたい事は分かっているな？」

「分かってるけど、爆発までは私にはどうにもならないよ？」

（（わかっちゃうんだ・・・））

その時三人の気持ちは言うまでもなく同じだった。

「それはほら、事前に準備しておけば何とかなるんじゃない？」

「なるか！」

「ですよね〜」

いつも通りの会話をしていると、そこにエイミィがブリッジに戻ってきた。

「あ、みんなお疲れ様。今日のところはジュエルシードの反応もなししゅっくり休んで良いって。それと明日一日は各人しゅかり休息するようにだつて。亜夜ちゃんも訓練終了したから帰つても良いって許可が出たよ。」

「ホントですか！やったー！久しぶりに帰れるー！！」

『ふん、良いのか小娘？訓練を一日休むと三日遅れると言われているぞ？』

アマテラスの一言に「ピク」と反応する亜夜。さつきまで喜んでいたがいきなりフリーズする。

「こら、アマテラスあまり無理をさせんな。ただでさえ詰め込み過ぎの内容なんだ。ここいらで身体休めとかないと身体壊す事になるぞ。因みにこれはなのちゃんにも言える事だからな」

「」「うっ」「」

「だから、二人は明日一日はゆっくり休め。何かあつたら俺とクロノで対処します」

「そうだな、二人は明日一日休んで疲れを取るべきだな」

「でも、そしたら二人はどうするの？二人も私達と同じくらい休んでないよね？」

俺とクロノを心配したのかなのちゃんが聞いてくる。

「その点については大丈夫。士官学校時代に不眠不休で仕事をする耐久訓練受けるから。俺とクロノは最低限水と食料があれば五日間は問題ない。それに比べれば睡眠も食事もとれる現状は全く問題ない」

今思えば士官学校時代で一番つらかった訓練かもしれない。不眠不休で五日間、二日目までは問題なかった。こつちの世界に来るまではよくあることだったから大丈夫だった。しかし三日目を過ぎたあたりから調子がおかしくなってきた、目がかすんできたり、自分で何を言ってるのか分からなくなったりとだんだんヤバくなってきた。四日目になると他に一緒にいた連中はほとんどダウン、何とか起きていたやつも見ると他に顔色が悪くかなり狂暴になっていた。五日目になると俺とクロノ以外はダウンして、そう言う俺達も二人で言い争ったり、模擬戦したり、かなり好戦的になっていた。そして初回の耐久訓練が終了した。その後は二日間の休息のち再度耐久訓練に入る。それを五回、全体で約一ヶ月弱行う。今まで行ってきた訓練の中で五指に入るほど辛かった。そんな事をクロノとしてみじみ思いだす。

「あの訓練と比べたら今の状況なんて軽いもんだよ」

「だな、流石にアレはおかしくなるかと思っただよ」

「ただ起きてるだけじゃなくて、通常通り座学やら訓練もやるんだからホント困る。あのときばかりは本気で殺意を覚えたね」

「僕はそんな状況になってもいつも通り絡んでくる奴に殺意が湧いたよ」

「……うわ」「」

それを聞いた三人がかなり引いていた。まあ、こんな話をすればそうなるだろう。

「ま、そんな訳で俺とクロノの事は気にしないで大丈夫だ。ゆっくり休んでおけ」

「それに、僕たちも休まない訳じゃないから大丈夫だ」

俺とクロノはそう言ってなのちゃん達を納得させる。

「じゃあ、一旦解散だ。何かあったら連絡入れるから明日は存分に休んでくれ」

「……はい」「」

三人が声をそろえて返事をする。

「あ、お兄ちゃん。晩御飯どうするの？こっちで食べてくの？」

「ん、こっちで食べてく。書類仕事とか少しやってかないといけな
いから」

「うん、分かった。お母さんに言っとくね」

「おう、よろしく頼む」

「じゃ、あんまり遅くならないようにね」

「はは、善処する」

そう言うと亜夜達は転送ポートに行き転送されていった。そのを見て「ふう」とため息をつき、更にその場で伸びをする。

「んんんんん。」

「大分お疲れの様だな」

その様子を見てクロノが言ってくる。

「あいつらが居る手前弱音は吐けねえからな。ああ言ったけど流石に特別訓練した直後は正直しんどい」

「確かにその通りだな」

そう言うクロノも若干疲労の色がうかがえる。

「正直明日が休みになってくれてよかったよ。このまま続けてたらぶっ倒れてたかもわからんね」

「珍しいね。カズキがそこまで疲れるなんて」

そう聞いてきたのはエイミィだ。

「そう言えばそうだな。いつも漂々としてたからなカズキは」

「ちょっと気になる事があったな」

「フェイトの事か？」

それを聞いて俺は目を丸くした。

「何で分かった？」

「伊達に執務官をしてる訳じゃ無い。まあ、確信していたかと言えば嘘になるが、カズキがそういう反応をしてくれたおかげで助かったよ」

「・・・ガツデム！かまかけられた！」

「え？フェイトちゃん何かあるの？」

「・・・あんまり家庭の方が上手くいってないみたいなんだよ」

「そう言えば知り合い何だったな？どこで知り合ったんだ？」

「あれ？話してなかったけ？」

「ああ、アースラに初めて来た時は知り合いの協力者ってだけだった」

「そうだったけ？まあ、隠すほどの事でもないから話すけどフェイトちゃんのお母さん、プレシアさんって言うんだけどその人の使い魔を助けて保護してたんだ。それでフェイトちゃんに連絡して来て貰ったって訳だ」

・・・まあ、嘘は言ってないよな。嘘は。

「そうだったのか。で、その家庭の事情とやらは解決できそうなのか？」

「あゝ、今のところ六分つてところかな？」

「ずいぶん頼りない数字だな」

「過大評価はしない主義なもんで」

「まあ、僕達に出来る事なら協力するぞ」

「そうだね、少しだったけど一緒に手伝ってくれた仲間だもんね」

クロノとエイミイがそう言ってくれた。不覚にも「じゅん」と来た。やっぱりもつべきものは友達である。

「分かった、そんなときは頼む」

そう言って俺は腕を伸ばし、拳をクロノに向ける。

「ああ、頼まれた」

そう言ってクロノは俺の拳に自分の拳を軽くぶつけたのだった。

第三十三話

八神はやて

「はあ」

「どうしたんですか？ため息なんかついて」

リニスがうちにそう聞いてくる。

「なんや最近、なのはちゃんと亜夜ちゃんがおかしい言ってるアリサちゃんとすずかちゃんから相談されてしもたんよ」

「あゝ、ため息の理由はそれですか」

「そうなんよ。アリサちゃんとすずかがちゃんが心配しとるのも分かるんやけど、なのはちゃんと亜夜ちゃんが話してない事をうちが話してええもんか思ってたな」

「確かにそうですね」

「せやから二人に聞こう思たんやけど、忙しいみたいで全然連絡つかないんよ」

「それでしたら私から連絡して見ましようか？」

「ホンマ！？そやったらお願いしてもええか？」

「はい、ちょっと待っててください」

リニスはそう言うて黙ってもった。どうやら「念話」をしてるみたいや。一樹兄ちゃんから聞いたけどつくづく便利やと思う。うちも使えたらええのに。そう考えているとリニスがうち話しかけてきた。

「はやてちゃん、亜夜ちゃん達は今家に居るみたいですよ。明日一日は休みだそうですので話してみたらどうでしょう?」

「そっか、明日は日曜日やし丸一日ある訳やな。ええ機会やし、魔法の事どうするのか聞いてみんとな」

「そうですね、確かに決めておいた方が良いでしょう」

「よっしゃ!そうときまれば明日家に押し掛けるで!」

「その必要はない!!」

「「ひゃあ!」」

そう意気込んでいた所に不意に声をかけられビックリしてしまった。リニスも予想してなかったみたいや。声のした方をみるとそこには一樹兄ちゃんがおった。小脇に亜夜ちゃんとなのはちゃんを抱えて……。ていうかなんでなのはちゃんはぐったりしとんのやろ?なんかあつたんか?

「お兄ちゃんおろしてよ!」

「うっぷ、気持ち悪い〜」

「ちょ、なのちゃん大丈夫!？」

「うっっ、とりあえずおろしてっ」

よわよわしい声でなのはちゃんが言うてくる。よほど気持ちが悪いみたいや。とりあえず説明してもらわなあかな。

斎藤一樹

「と、言う訳なんだ」

そう言っつて俺は全員に説明し終わる。書類仕事を終えた俺はアースラから高町家に向かい、なのちゃんと魔法の事で話していた所にリニスから連絡が来たのだ。ちょうどその事でなのちゃんと話していた事もあつて桃子さんに許可とりなのちゃんを小脇に抱え自宅までダッシュ、帰宅後バリアジャケット姿を家族に披露させていた亜夜を小脇に抱えはやての家にお邪魔したのだった。短時間とはいえ全力疾走状態で小脇に抱えられたなのちゃんはかなりシエイクされたようでリビングのソファアの上で休んでいる。見かねた亜夜が介抱している。

「その話をするために来ておいて、なのちゃんはダウンさせてどないすんねん!」

「いや、いつも模擬戦やら実戦やらで、とんでも機動するもんだから大丈夫だと思っつてつい」

「つい、じゃない!」

「ふははは、サーセン」

正座させられ、亜夜とはやてに説教を食らう。

「まったく、他にいくらでも運び方はあったでしょう!」

「ん? 肩に担いだ方がよかったか?」

「違うよ!」

「カズキさん、女の子の運び方としてそれはどうかと・・・」

それは無いだろうと言わんばかりにリニスが言ってきた。

「いやいや、古今東西、お姫様だっこやら、おんぶなんかの運び方だとフラグが立ちますよ?」

「なのちゃんは兎も角、私に立つ訳ないでしょ!」

「H A H A H A! 当たり前だろ、今更「義理」なんてオプションが付いたら迷惑だ」

「わ、私にもたたないよ!」

「今、なのちゃんに振られた件」

「告白すらしてへんに振られるとかうけるWWW」

どうやらなのちゃんはメインヒロインではないようだWWW。それは兎も角なのちゃんもそろそろ話が出来るぐらいには回復した様なので会議をする。

「そんじゃ、なのちゃんも回復してきた事だし会議と行きますか」

そう言っつてリビングのテーブルの周りに集まる。テーブルの上にはリニスの入れたお茶が置かれていた。ちなみにお子様達の前にはホットココアが置かれている。

「まずジュエルシードも順調に集まってもうすぐ回収完了ということころまで来ているけど、はやてがすすかちゃんとアリサちゃんから最近亜夜となのはちゃんの様子がおかしいと相談を受けたそうだ。その件に関して二人共何か心あたりは？」

「うん」

二人して考え込む。

「私ものちゃんも授業はちゃんと受けてたし・・・」

「そうだよ、訓練自体はマルチタスクでやってるから他の人にはわからないと思うし」

そう言っつて二人は「何でだろう？」と首をかしげる。

「あ、多分授業中にマルチタスクで訓練してるからだと思っつぞ？それに最近訓練やら、回収やらであんまり余裕なかったからな。考えごとしてる雰囲気が出てたんじゃないか？」

「え？」

「俺から見ても考えごとしてるのがわかったぞ」

「そ、そうなの?」

「ああ、特になのちゃんは以前より笑わなくなってたからな」

「「「あゝ、確かにそうかも」「」」

「え?え?そ、そんなに違う?」

『うん』

全会一致で肯定されたなのちゃん。

「何をそんなに考えとつたん?」

気になったのかはやてがなのちゃんに尋ねる。

「え、え〜つと、魔法の訓練の事とか、フエイトちゃんの事とか、ジユエルシードの事とか・・・」

指折り数えていくなのちゃん、おいおいそんなにあんのかよ・・・。そりゃあ余裕も無くなるわ。

「あかん、なのはちゃん。それ明らかに考えすぎや。もっと気楽にしたらええんちゃうん?」

「で、でも、もし失敗しちゃったらって思うともっと頑張んなきゃって思っちゃって・・・」

「今は前とは違うからな。管理局組もいるし亜夜も戦力に加わって

るから大丈夫だぞ。頑張り過ぎてダウンでもされた方がよっぽど拙い。だからもつと気楽に構えて大丈夫だぞ？」

「そ、それはうなんだけど・・・」

「何かほかに気になる事でもあんのか？」

「うう、だってフェイトちゃんにまだ一回も勝ってないから・・・」

「あ、そう言えばそうだな。今のところ二戦全敗って成績だったけど？初戦は秒殺で」

「その原因をつくったのは一樹お兄ちゃんだよね!？」

「言いがかりデウス、なのちゃんの油断が負けに繋がったのデウス」
有名な某カードゲームのキャラクターの真似をする。

「うううう~~~~~!!」

そう唸りながらポカポカ叩いてくるなのちゃん、がしかしまったく痛くない。

「もう、お兄ちゃんあんまりなのちゃんをからかわないの!」

「了解。まあなのちゃんに色々悩み事があるのは分かったけど、結局すずかちゃんとアリサちゃんにはどうするんだ？魔法の事話すのか？」

「ううん」

俺がそう聞くと二人とも考え出してしまった。

「なんだ？話す気がいのか？」

「あ、そう言う事じゃないんだけど」

「話すつもりなんだけど、どのタイミングで話せば良いかわかんなくって・・・」

「でも、話さないでいるとそのままずるずる話せないままになっちゃうぞ？」

「うーん、何かきつかけでも有れば良いんだけど」

そんなふう二人が悩んでいると、

ガチャ、バン！

と玄関から音がして、

ド
ド
ド
ド
ド
ド
ド
ド
ド
ド
ド

と廊下を走る音が二つ程聞こえてきた。

バン！

とリビングのドアが開けられて、

「「はやて（ちゃん）！大丈夫！？」」

そこに現れたのはアリサとすずかちゃんだった。

「な！ど、どないしたんや！？二人とも？」

「何って、一樹が「はやてが腕を押さえて苦しみ出したからすぐ来てくれ」ってメールで」

そう言っつて携帯の画面を見せる。

「「「え？」「」」

「わ、私は「目を押さえて苦しみ出した」だったよ？」

そう言っつてすずかちゃんも携帯の画面を全員に見せ、それぞれを見たはやてが

「何処の中二病患者やねん！」

と突っ込みを入れる。

「ん？不治の病とかにした方が良かったか？」

「もっと悪いわ！」

アリサが突っ込んでくる。

「だ、駄目だよそんなことしちゃ！ホントになったらどうするの！？」

「オーストラリアに遺骨撒いてもらっから大丈夫や」

「「せかちゆう」ですね分かります」

「そうじゃないでしょ！」

そんな会話を聞いてなのちゃんが首を傾げ聞いてきた。

「「せかちゆう」ってなに？ポケモン？」

「そうそう、ライチュウが究極進化するし「ナチュラルに嘘を教えるな！」」

ガゴン！

と頭部に衝撃を受け転げまわる。

「ぬおおおー！。あ、相変わらずの突っ込みだな・・・お？」

涙目になり頭をさすりながら亜夜を見る。そこで一ツ気になったので聞いてみる。

「ところでアヤノック」

「誰がアヤノックよ！」

「そんな装備で大丈夫か？」

「はあ？何をいって・・・あ」

そこにはバリアジャケット姿の亜夜がいた。はやては笑いをこらえており、なのちゃんはおろおろしている。アリサとすずかちゃんは「ポカーン」としながら亜夜みている。そりゃそうだろう、一瞬にして亜夜の姿が変わったのだ。手品で誤魔化すには少々無理がある。光りながら粒子みたいなのをまといて変身したし。まさに「魔法」の事がばれた瞬間である。亜夜はだらだらと冷や汗を流している。

「亜夜、ちゃんと説明してくれるんでしょうね？」

良い笑顔でアリサが亜夜に問いかける。

「・・・はい」

アリサの問いに観念したようにうなだれる亜夜、犯人が自供を始める様な光景をちょっと懐かしく思ったのは内緒だ。

説明中

「ふ〜ん、で協力する事になったんだ」

「大変だね」

二人にあらかた説明を終えて一息つく。亜夜は相変わらずバリアジャケット姿で、今はなのちゃんもバリアジャケットになっている。例によって二人に見せると言われ変身した。

「そう言えば一樹のバリアジャケット姿ってどんななのよ？」

「あ、そうだね。まだ見せてもらってないです」

そう二人が俺に言ってくる。

「ん？もう二人は見てるはずだぞ？誘拐された時の服装がそれだ」

「へへ、あの時のやつがそうなの」

「でも真っ黒だったね？いつもそうなの？」

「うんにゃ、状況に応じてカラーリングは変更してるよ。基本の白色、夜間迷彩、都市迷彩、ジャングル迷彩そんなもんなかな？他にも色々用意しておきたいんだけどね」

「ふん、でも一樹お兄ちゃん何でそんなにあるの？」

不思議に思ったのかなのちゃんが聞いてくる。

「そりゃあ、任務がいつも街って訳じゃないからな、砂漠にジャングル、夜間、まあ色々な場所や時間であるからな。更には偵察や潜入みたいに敵に見つかっちゃいけないものまである。そんな任務に例えばどっかの大尉みたいに金ピカの装備で潜入するか？見つかって八チの巢にされるのがオチだ」

「当たらなければどうという事は無いんやろ？」

「そうそう、って違うから！見つかっちゃいけないんだから見つかった時点でアウトだよ！」

はやてにツツコミを入れ続ける。

「まあ、そんな理由でカラーリングが色々あるんだ。実際、誘拐の時は夜間迷彩が役に立ったしな」

「そうなんですか？」

「ああ、実際二人がいた階の上に行く時間に紛れる事が出来たからな」

「ふうん」

「ま、亜夜やなのちゃんには今んとこ必要無さそうだしそのままが良いんじゃないか？カラーリングの変更は割と簡単に出来るし、必要になってからでも問題ないし」

「そうだね、これ以外の色にしたら可愛くなさそう」

「・・・やっぱり判断基準ってそれなのか？まあ、確かになのちゃんや亜夜のバリアジャケットに迷彩柄とかは微妙だろうけど。見てみたいというのはあるけどね！それはさておき、

「さて、今日はみんなはやての家に泊って行きなよ。幸い明日は休みだろうし」

「あ、でもお母さんに連絡「あ、大丈夫」・・・へ？」

「もう了解とってあるし、準備もしてあるから」

そういつて俺はなのちゃん、すずかちゃん、アリサの前にバッグを置く。その上にはそれぞれ手紙が置かれている。三人とも不思議そうにそれを見つめ、上に置いてある手紙を読み始めて・・・

「「「はあ〜」「」」

とため息を一つ。

「なんで一樹お兄ちゃんはこう用意周到なんだろう?」

「ホントよね」

「出来れば事前に連絡してほしいです」

「いや〜、基本的にサプライズ好きなもので」

だってそうしないと面白くならないじゃないかwww。隣でははやてが嬉しそうに眼をキラキラさせていた。

「久しぶりやなお泊り会!」

「でも大丈夫なのはやてちゃん。布団の準備とかしてある?」

「フッフッフ、こんな事もあるうかと!布団の準備はオールオツケーや!今リニスが布団敷きに行つとるで!」

俺に向けてグッとサムズアップするはやて。俺もそれにサムズアップで返す。

「あ、あんたらは・・・」

そんな様子を見てため息をつくアリサだった。

リビング

大部屋で五人全員が寝付いたのを確認して俺はリニスと話し始める。

「それでフェイトちゃんの様子は？」

「良くも悪くも無いですね、今のところは無茶はしていないようですけど」

「プレシアさんからも暴力は受けてないようだからな」

「ええ、この間プレシアの所から戻って来た時は問題なかったですし」

「プレシアさんがフェイトちゃんの事をちつとは気にしてくれてるってことなんだろうか？」

「そうですね。フェイトを人形と見てない感じは出てきました」

「そっか、会話したかいがあったかな？」

「それはどうですかね？」

「厳しいね、まあ実際引つ掻き回してる感じしかしないんだよね・・・。少しでも良い兆候がみられるならそれで良いけど」

「・・・本当に大丈夫ですか？」

俺はテーブルの上に置いてあるお茶を飲み一息つく。

「プレシアさんを単純に「助ける」ってだけなら良かったんだけどな。フェイトちゃんにアリスアの件、更には今回の件で起こしそうな犯罪を止めるとなると難しいよね……。はあく、厄介極りねえな」

「でも、助けられるんですよね？」

「今のところは大丈夫だと思うけどな。フェイトちゃんとプレシアさんも今のところ犯罪を犯してる訳じゃないし。むしろこれからが大変だ」

「カズキさんなら大丈夫ですよ」

「……その根拠はどこから？」

「これまでカズキさんは出来ない事は出来ないって言ってたじゃないですか。そして私と始めて会った時助ける事が出来るって言ったじゃないですか。だからです」

「……期待されてんな」

「はい」

「じゃあ、期待にこたえないと男じゃないな」

そう言っつて俺は苦笑する。

「そうですね、じゃあ、失敗したらちよん切っちゃいましょう」

「何を!？」

「さく、ナニをでしようかね？」

リニスの言葉に冷や汗がたらたらと止まらない。冗談だと思いが若干見え隠れする黒いオーラが恐い。

「でも、カズキさんも無理しないでくださいね。今一番無理してるのは間違いなくカズキさんですよ？」

「いやいや、この程度なら大丈夫だよ。睡眠も食事もとれてるから」

「それでもですよ。今ここで倒れられても、この先で倒れられても困るんです。倒れるなら全部終わった後にしてください」

「・・・なんだかりニスが冷たい気がするのはいのせいかな？こういうときってそれなりに励まされるもんじゃないのか？」

「なあ、リニス？なんか機嫌悪くないか？」

「そんな事ないですよ？「庭園」に行ったカズキさんがプレシアを困らせたたり、フェイトを惑わせたたりした事を怒ってなんかいないですよ？」

「・・・怒っていらしゃる！この分じゃ失敗したらマジでちょん切られるやもしれん！こんな事で失敗できない理由が追加されるとは思わなかった！」

「でも大丈夫ですよ。カズキさんは失敗なんかしないんですから」

リニスの言い方に戦慄しつつ、渴いた喉に味が分からなくなったお

茶を流し込むのだった。

第三十三話（後書き）

やっと投稿する事が出来ました。遅くなつてすみません。連日の暑さに参っている作者です。

三十七話を二重投稿していました。申し訳ありません。

第三十四話

斎藤一樹

一日休みを入れ、なのちゃん達は昨日一日を使つてずいぶんと遊んだようだった。アリサちゃんやすずかちゃんに魔法の事を話したためかずいぶんと晴れやかな顔をしていた。魔法の事を話している時はオロオロしていたがあっさり魔法が受け入れられた事もあり、その後はいつも通りのなのちゃんに戻っていた。アリサちゃんの家から戻つて来た時は満面の笑みだった。フェイトちゃんの方にもリニス経由で連絡を入れ手おりしつかり休むように言ってもらった。フェイトにもアリサ達見たいな友人がいればいいのだがまだそこまですてないのだから今はまだ我慢してもらおう。そして今現在……

「ちくつす。三河屋でくす。差し入れお届けにまいりました」

俺はアースラに差し入れを届けに行っていた。前にリンディさんと約束したのでそれを果たすため差し入れ持参である。

「おいカズキ、艦長室なんだから入り方ぐらいちゃんとしろ」

「あゝ、すまん。艦長室にはテキストに入るっていう家訓があるんだ」

「ずいぶん限定的な家訓だな!？」

「ま、それは兎も角、ほれ差し入れ……ありや?」

そう言つて手に持っていた箱を胸の高さあたりまで持ち上げよう

として気付いたのだがいつの間にか箱が無くなっていた。あれ？と思いきヨロキヨロしているとリンディさんが既に来客用のテーブルの上に箱の中に入れていたケーキを取り出している最中だった。前にもこんな事あったけど、いつとられたか分からなかった上に、動きすら捉える事が出来ないなんて初めてだ。

「クロノ・・・」

「言っな、何も言っな」

クロノも若干諦め気味に言ってくる。リンディさん、あんたどんだけ糖分に目がないんだよ！

「あら、どうしたの二人とも？そんな顔して？」

全ての元凶であるリンディさんがにこやかに尋ねてくる。

「母さん、少し糖分は控えてください。いくらなんでも食べすぎです！」

「でも、健康診断では異常はなかったわよ？」

「マジで！？あんだだけ甘いもん食ってんに！？」

「失礼ね、そんなに食べてないわよ？」

「嘘だ！！この間だってケーキホールで食ってたじゃん！！」

「母さん流石にそれはどうかと思う」

きつとリンディさんが「身体は砂糖で出来ている」って言ったらしい信じざるうえない。そのうちアンリミデット・シュガー・ワークスとかしそうな気がする。それともアレか？某ノートの人みたいに頭を使ってるから糖分が必要なのか？そんな俺達をよそにリンディさんはにこやかに、

「とりあえずお茶にしましょう」

と言ってきたのに対し俺とクロノはその場で盛大にため息をつくのだった。その後エイミイを呼びお茶の準備を始める。

「クロノ、コーヒーで良いか？」

「ああ」

「エイミイは？」

「あたしは紅茶で」

「リンディさんは？」

「いつも「茶でも飲んでろ」・・・カズキ君、私あなたの上司で艦長なんだけど？」

「では、もう差し入れはいらん」お茶で良いわ！」・・・それで良いんですか？」

「プライドでは満たされないのよ」

どこか遠い目をして言うてくる。

「糖分ですね。わかります」

「母さん……」

クロノががつくり肩を落としている。そんなクロノを放っておいて飲み物の準備をする。最近士郎さんにコーヒーや紅茶の入れ方を教わっているので自分でいれたりするのが趣味になりつつある。サノオに道具一式入っただけでもどこでも入れられる。デバイスマジで便利。某青狸じゃ無かった、青猫のポケット並みに便利である。ケーキの準備は向こうに任せて俺はみんなの飲み物を入れ始めた。艦長室にコーヒールと紅茶の匂いが漂いテーブルの上には色とりどりのケーキが並ぶ。お茶の準備も完了し全員に配る。リンディさんは今か今かと待ちきれないのがはたから見ているよ。犬であったなら、尻尾を振りまわしさぞかしよだれを垂らしている所であろう。

「リンディさん、お待たせしました。どうぞ」

「じゃ、いただくわね」

「いただきます」

「いただかれます」

そう言うと三人はそれぞれのケーキにフォークをさし口に運ぶ。ぱくつと一口、すると三人は動きを止める。

「どうしたんすか？三人とも？」

全然動かない三人を不思議に思い声をかける。

「おいし〜!!」

とエイミィ。

「ああ、美味しいな」

とクロノ。

「ベリーッシモ!とても良いわ!!」

とリンディさん。反逆はしないでほしい。

「このケーキは上半分はチョコムース、下半分はブラウニー、間にピスタチオのムースがサンドされて、それらをチョコレートでグラッサージュ（アメ状、ゼリー状のものでつやを出す）して、ハート型というか、ブーメラン型をしているのが特徴的ね。チョコムースの濃厚なココの割にあっさりした甘さ、ブラウニーのしっとり感と濃厚な甘さがマッチして、味が濃いのに何個でも食べれそう!」

「「「「「」」」」」」

「カズキ君!このケーキは何処で売っているの!?!」

「なのちゃんの両親が経営している喫茶店ですが・・・」

「なん・・・ですって!!!」

リンディさんは雷に打たれたようにショックを受けていた。

仲良く飲み物を吹き出すエイミィにクロノ。真っ赤になって慌てるなのちゃん。何の事だか分かってない亜夜にユーノ。笑いをこらえる俺。良く見るとリンディさんの目が渦巻状にグルグルしてる。

「か、母さん！なに言ってるんだ！？」

「か、艦長！？急にどうしたんですか！？」

「これでもクロノは優秀で有望よ？今の内につばつけとけば将来安心よ？」

「そうだぞ。同期の中でも出世頭で、人望も厚い、性格も真面目ときたもんだ。優良物件なのは間違いないな」

「こごとばかりに便乗し、ずずいとなのちゃんに迫る。」

「え？ええ！？」

さらに混乱するなのちゃん。

「急な事で混乱するのは無理ないわ！でもこれは私の幸せのためなの！」

「そうだぞ！これはリンディさんの幸せのためだ！」

「わ、私の幸せは！？」

「「え？」」

「そこで疑問形！？」

「いい加減にしてくれ!!」

その言葉と共に俺とリンディさんの頭に張閃が振り下ろされたのは言うまでもない。クロノの張閃で正気に戻ったリンディさん。優しく微笑みながらなのちゃんに謝る。

「ごめんなさいね、時々あんなうちゃうらしいのよ」

「び、ビックリしました」

「しかしそれだけ翠屋のケーキが美味しかったのだろう」

「そうね、今まで食べてきたケーキで一番美味しかったわ。お母さんによるしく言っておいてね」

「あ、分かりました。伝えておきます」

なのちゃんも桃子さんのケーキが好評で嬉しかったのだろう、直ぐに笑顔になった。

「じゃあ、みんなそろった事だし、ミーティングを始めましょうか」

リンディさんはそう言って自分の机に戻る。

「エイミィ、お願いね」

「はい」

そう言ってエイミィは手元に現れたウィンドウを操作して俺達の前

に画面を出す。

「じゃあまず昨日と今日の結果報告を先にしちゃいましょうか」

「「「え？昨日と今日？」「」」

亜夜、なのちゃん、ユーノが疑問の声をあげる。

「すみません、良いですか？」

「何かしら？亜夜さん？」

「昨日の報告ならともかく、今日の報告ですか？私達まだ出てませんよ？」

その疑問になのちゃんとユーノも頷いている。

「ふふふ、そうね。今日はまだ出勤してもらってないわね。でもこの件に関して出勤できるのはあなた達だけだったかしら？」

リンディさんはほほ笑みながら言うてくる。

「おーい、三人とも本来はお手伝いだったこと忘れてんのか？アースラにはこの件に関して対応出来る「武装隊」てのがちゃんと乗ってんだぞ？」

「「「・・・あ」「」」

「今までは偶々、俺達の時にジュエルシードが見つかったっただけで、他の隊員も搜索してんだぞ？」

そうなのだ、基本的に俺達が学校に行っている時間帯はアースラの隊員がちゃんと搜索しているのだ。偶々その時に発見できないで、偶々なのちゃん達の方が遭遇率が高いだけである。まあ、このあたりは修正力やら得体のしれない力が働いているのやもしれないが。

「まあ、そう言う事だ」

「じゃあ、続きを話すわね。昨日と今日で新たに搜索したポイントで三つのジュエルシードを確保しました。これで残りは7個になるのだけど、今日探したポイントで最後だったからもう地上では搜索する場所はもう残ってないのよ。」

「え？もう全部サーチし終わっただんですか？」

まだ見つかってないジュエルシードがあるのを不思議に思ったのか、ユーノが聞いてきた。

「そうなると残りのジュエルシードは・・・」

「そりゃ地上に無いんなら海中なんじゃないか？」

「あ、そっか」

「御名答、それで海中をサーチした結果なんだけどコレなんだよね」

そう言ってエイミィが画面にサーチ結果を出す。

「うわ〜」

「これはまた」

なのちゃんと亜夜が呻く。そりゃあこの結果を見たらそんな感想になるか。画面を見ると海中の地形が映っていて、3000×3000メートルの範囲の水深20〜40メートルの付近にジュエルシードの反応が7つ固まっている。一個でもそこそこ厄介なのにそれがひと塊りに7つ、まだ反応してないから良いがどれか一つでも反応すれば連鎖反応でたちまち7つ全てが反応し、あっという間に次元震が起こる可能性がある。

「で、どうやって回収する予定ですか？リンディ艦長？」

原作だと、フェイトちゃんが無理して強制発動して、なのちゃんと二人で封印したけど・・・。

「その前にカズキ臨時三等陸士に確認したい事があるのだけれど」

「俺にですか？」

はて？また何かやらかしただろうか？しかしわざわざ階級つけて呼ぶくらいだから仕事関係か？

「あなたは魔法無しでどの程度水中活動出来るかしら？」

ふむ。

「そうですね、基本的なスキューバの装備があれば空気が続く限り問題ありません。限界深度は測った事がないのでわかりませんが40メートル以内の水深なら活動に問題ないです」

普通はこんな事あり得ないんだけどね。本来、水中での活動というものは普通は大きく制限される。水深10メートルで3時間半程度、水深20メートル45分程度、水深40メートルで9分程度を超えて潜水すると危険なのだ。それはなぜか？減圧症があるからだ。減圧症とは高圧環境下で体内に溶け込んでいた窒素が、急浮上などにより急速に周囲の圧力が低下することにより気泡化するケースが典型的である。症状としては関節痛が典型的であるが、重症例では呼吸器系の障害（息切れ・胸の痛み）やチアノーゼが見られる場合もある。生涯にわたる神経系の損傷等、重篤な後遺症を招くケースも少なくない。よって先に挙げた限界時間近くまで潜水していた場合には、地上で3時間程度の休憩が必要となる。例外もあるみたいだが一般的にはこんな感じだ。しかし俺の場合、これらの水深や時間をオーバーしても全く問題なかったのである。まったくもってこの世界にきてから頑丈になったものである。

「相変わらず馬鹿みたいな身体能力だな」

「そう誉めんなよ、照れるだろ」

「いや、お兄ちゃん誉められてないよ」

軽くボケているとリンディさんが再び話し始める。

「そうですね、分かりました。では回収プランはカズキ三等陸士を中心としたものにしましょう」

「は？・・・何で？どうして？ホワッツ？」

「今回はジュエルシールドが密集しているため下手に近付くと発動してしまう恐れがあります。よって今回は魔力を一切使用せずジュエ

ルシードを一つ一つ回収し、現場海域から十分な距離をとった所まで運びそこで封印作業に移ります。封印作業についてはなのはさん、亜夜さん、クロノ執務官に担当してもらいます。一応バックアップに武装隊もいるからで安心してね」

「一切って事は、バリアジャケットも使用しないって事ですよね？」

「そうなるわね、勿論緊急時には使用して良いわよ。必要な装備はこつちでそろってるから問題ないわ。時間がかかってしまうけど発動させずに回収するのならこれが一番安全でしょう」

「……てつきり強制発動させて7個一気に封印でもするのかと思ってましたけど」

「それも一つの手段ではあったけど、発動させないで回収できる手段があるのだから、それをやるに越したことは無いわ。発動させると何が起きるか予測できないもの」

安全第一ですね。分かります。

「分かりました、ミーティング終了後装備の確認及び点検を行います。作戦開始時刻は？」

「作戦開始時刻は今から二時間後の現地時間18:00時とします。装備については武器保管庫^{ガンケース}で受領するように」

「了解しました」

俺とクロノは敬礼で答える。

「あの〜、今回私達はどうしたら・・・」

「さっきも言ったように、後方でジユエルシードの封印を担当してもらいます。指示はクロノ執務官に従ってください。特に必要な装備は無いのでいつも通りで構わないわよ」

「分かりました」

「あの〜、僕はどうすれば？」

あ、そう言えばユーノの役割説明されてなかったな。

「ユーノ君はカズキ君のサポートをお願いするわ。でも一緒に潜るんじゃないくて海上にボートで待機してもらいたい。作戦時間が長くなるから休息を入れつつ回収する予定よ」

「分かりました」

「よろしくなユーノ」

俺はそう言ってユーノに手を差し出し握手をした。

「では、各自準備を始めてね。これでミーティングは終了します」

リンディさんがそう言ったので装備を受領して点検でもしていますかね。そう思って武器保管庫に向かおうとした時、

ビーー！ビーー！ビーー！ビーー！

と艦内に警報が鳴り響く。艦長室のモニターには「WARNIN

G」の文字が躍る。するとリンディさんの前のモニターにメガネをかけた金髪の男性が映る。確かエイミィの部下のランディだったか？

「艦長！現在作戦予定エリア上空に魔力反応を確認しました！至急ブリッジまで戻ってください！」

「分かったわ。直ぐにそちらに向かいます。エイミィ？」

「既にブリッジに向かいました」

「そう、それなら直接聞いた方が良いわね、ってカズキ君？どうしたの？」

「・・・いえ、何でもないです」

俺はorzになっていた。このタイミングで魔力反応ついたらフイトちゃんしかいないし。あれほど行動する時は連絡しろと言ったのに！アルフもアルフだ！何やってんだ！？

「カズキ！何やってんだ！なのは達はもうブリッジ向かったぞ！さっさと行くぞ！」

「了解！」

そうやって俺はクロノと共にブリッジに向かうのだった。

第三十四話（後書き）

中々最後にたどりつけない作者です。リンディさんが壊れ気味です
いませんwwww

第三十五話

フェイト・テスタロッサ

今私の下には海が広がっている。晴れ渡る青い空とは言えない曇った天気、海も若干荒れている。所々に岩肌がみえて、そこに波がぶつかり飛沫をたてていた。昨日はカズキさんからの連絡をもらったりニスが一日休む様にと言ってきたので休んだけど、そんな事よりジュエルシードを早く集めたかった。こっそりサーチして街中を探していたけど結局見つからなかった。それをアルフと相談して明日は海を探してみる事になった。結果、海の中に沈む7個のジュエルシードを見つけた。ただ正確な位置はつかめなかった。

「フェイト、大丈夫かい？流石に7個一辺に封印するのは無理なんじゃ・・・」

アルフが心配そうに言うてくる。

「大丈夫だよアルフ。それより先に回収しちゃおう、カズキさんが来たら厄介な事になりそう・・・」

「あゝ、確かに厄介な事にはなりそうだね」

アルフも一連の事を思い出したのか「はあ」とため息をつき肩を落とす。今までの事を思い出すとカズキさんは戦闘では頼りになる？と思うけど今までの行動を思うと来る前に終わらせた方が得策だと思う。ちゃんとしてる時はしてる・・・と思うけど、漂々としていて掴みどころがない。でも私の事を助けてくれてるのも事実だ。何で助けてくれるのかは分からないけど。私は深呼吸をして気持ちを

切り替える。

「アルフ、バルディッシュ、行くよ」

「分かったよフェイト」

『イエッサー』

私は、バルディッシュを両手で構え魔力を流す。足元には魔法陣が浮かび上がり、その周囲にスフィアを浮かべる。この間街中でやったものより更に広範囲に魔力流を周囲に撃ち込む。スフィアを通し雷に変換された魔力が降り注ぎ海の中に消える。少しすると海中から青い光が空に向かって伸びていった。その数は7つ。

「来る」

その光の柱はしばらくすると、海水を取り込み大きな竜巻になっていた。そのすべてが私達に向かって来る。

「フェイト!」

アルフが注意をしてくる。

「くっ!」

7本のうち2本が私に向かってくる。私はいったん上空に上がりその攻撃をかわす。竜巻は海面に激突し、轟音と水しぶきを立てたけどまたすぐに元に戻ってしまう。そしてすぐさま追撃が来る。

「はあああー!」

私はその竜巻にバルディッシュで斬りかかる。が、

「な！」

しかし竜巻は私の攻撃をモノともしないですぐに元に戻って私に突っ込んで来た。

「きゃ！」

私はそれをかわす事が出来ず海に叩きつけられ海中に沈んでしまった。

「フェイト！フェイトー！」

アルフは片足を掴まれてしまって、こっちへの援護は期待できない。一人で何とかするしかない。すぐに海上に出たけど、今度私に向かってきた竜巻は更に数が増えていた。

「くっ！」

私は周辺に複雑にそびえる岩礁を縫うようにして飛行して、襲いかかる竜巻をかわす。後方では竜巻が岩礁に激突しながらそれでもなお追ってくる。

「はあ、はあ、はあ……」

おかしい、もう息が上がって来てる。魔力の残りも心もとない。このままじゃ……。そう考えていて注意力が落ちていたのか、正面に回り込んでいた竜巻に気付くのが遅れてしまった。

「あ……」

そう呟いた時にはもう竜巻は目の前まで迫っていた。とっさにシルドを張るけど何処までもつか……。私はすぐに来るであろう衝撃に備えて力を込めた。そして次の瞬間、

「スーパァー稲妻キーーーーック!!!!!!」

という声と共に目の前の竜巻が真っ二つになり、水をたたく轟音、巨大な水柱が上がった。突然の事に何が起こったのか分からなかったけど、海の中で強い光が見えて、少し経つと海の中から胸の前で腕を組んでゆっくりと上がってくるカズキさんの姿を私は呆然と見ていた。

斎藤一樹

アースラに鳴り響く警報を聞きブリッジにクロノと駆けつけると、メインモニターに映し出されていたのはフェイトとアルフが作戦予定エリアにおいて、あるうことが広範囲に魔力流を撃ち出そうとしている所だった。

「フェイトちゃん!?!」

先に来ていた亜夜となのちゃんが声をあげる。そりゃそうだ。一人で7個のジュエルシードを封印しようとするのは無謀ではなく自殺行為に等しい。普通であればただけどな! フェイトが魔力流を撃ち終わり、少し経つと7つの光の柱が空に向かって一直線に伸び、その後海水を取り込み7つの竜巻を作り上げた。やはり原作と同じ展開になっていった。

「まったく、無茶をするものね」

モニターを見ていたリンディさんがため息をつく。そして周辺を観測していたエイミーが、

「艦長！このままだと7個が融合する恐れがあります！」

そう報告する。

「カズキ」

クロノが声を掛けてくる。

「ああ、分かってる。おゝい何やってんだ？さっさと助けに行くぞ」

と、心配そうにモニターを見て固まっている連中に声をかける。

「そうね、このままだと危険だね。7個のジュエルシードが融合でもしたらそれこそ手がつけられないわ。クロノ執務官、カズキ臨時三等陸士、ユーノくん、なのはさん、亜夜さん、至急フェイトさんの救援に向かってください。」

「「「はい！」「」「」「了解」「」」

俺は若干怒気をはらんだ返事をする。

「ん？どうしたんだカズキ？」

それに気付いたクロノが聞いてくる。

「ちょっと、こっちのアドバイスとか注意とかをまるっと無視して危険行為をしている馬鹿二人に説教してくる」

その声にも怒気がこもっていて、亜夜、なのちゃん、ユーノがおろおろしていた。クロノはそれを聞いて、

「確かに今回はちょっとやり過ぎだな。でもカズキも人の事言えな
いから程々にな」

「む、失礼な。俺はしっかり事後処理もするし、此処まで無理な事
はせん」

そう言うと、おろおろしていた三人が円になって話し始めた。

「でも、作戦中にぶざけてるよね？（ヒソヒソ）」

「何度も邪魔された気がするの（ヒソヒソ）」

「いつもぶざけてばかりだからね（ヒソヒソ）」

上から順に亜夜、なのちゃん、ユーノである。

「おい、聞こえてるぞ！そう言うのは本人に聞こえないようにし
る！まったく、そこまで言うなら今回は真面目にやってやるっじゃね
ーか！」

「「「ホントに？」」「」」

「か、勘違いしないでよね！今回だけなんだからね！」

「真面目にやるのは今回だけなの！？」

「ていうかもう駄目じゃないですか！」

「・・・さて、さっさと助けに行きますか！」

「誤魔化すな！」

三人のツッコミを背中に受けつつ転送ポートに向かう。

「エイミィ！転送よろしく！」

「了解！みんなも早く転送ポートに乗って！」

「」「」「はい！」

「じゃあ、頑張ってるね！」

「任せてくれ」

エイミィにそう答えるクロノ。

「じゃあ、行ってらっしゃい」

リンディさんの言葉を聞くと同時に俺達は作戦エリアに転送された。

ゴオオオオーーーーー

転送された次の瞬間感じたのは勢いよく身体に吹き付ける風だった。しかしそれは地面に立っている状態では無く、竜巻の直近という訳でもない。耳には風を切る音が聞こえ、身体は下に引っ張られている感じがする。そして眼下には海が広がっている。どうやらずいぶんな高度に放り出された様だ。

(スサノオ、現在の高度は?)

『現在高度三千メートルから落下中です』

およそ一分前後で地表についちまう訳か、そついやあみんなはどうしたのかな? 少なくとも俺の下にはいない。となると上か? そう思つて仰向けになると、そこには同じように落下している皆がいた。流石全員飛行経験があるだけあつて慌てている様子は無い。が、

「 } x } } ! ! ! ! 」

「 | @ > } ! ! ! ! 」

流石に生身でのフリーフォールは経験がないようでも必死に何か叫んでいるがまったく聞こえない。それはそうだと落下中は風の音等が大きすぎて会話なんて出来る訳がないのだ。まあ、もしかしたら出来るようにする訓練があるかもしれないが。まあ、そんな感じで叫んでいる二人に念話で話しかける。

(亜夜、なのちゃん、念話で話せww)

そう伝えると二人から念話が届いた。

(お兄ちゃん! 下! 下! 下! ! !)

(フェイトちゃんが!!!)

俺はそれお聞いて慌てて下を向く。そこにはモニターでみたとおり7個の竜巻に、そのうちの一本にとらわれているアルフと、数本に追われているフェイトの姿があった。

(クロノ!!! 先行する!!! 援護よろしく!!!)

(了解。行つて来い!)

(亜夜、なのちゃん、ユーノは安全圏で待機しててくれ)

(うん!)(はい!)

(スサノオ!!!)

『了解、「クソ野郎」』

そう言つて俺はバリアジャケットを纏う。現在、自由落下中の速度は約200km/h、空気抵抗があつてうつ伏せの状態で出る最高速だ。俺はそこから身体を気おつけの状態にして頭を下に向ける。こうする事により空気抵抗を減らし、速度を上げる事が可能になる。しかしそれでもまだ足りない。もっと早く行かなければ間に合わない。そこで俺は前面に円錐状にプロテクションを張り空気抵抗を無くす。それと同時に速度がぐんと上がっていく。400?/h・・・500?/h、みるみる内に海面が近付いてくる。フェイトちゃんを確認するとまだ竜巻には追いつかれていないが様子がおかしい、動きが鈍い。更には進行方向に現れた竜巻に気付いていない。「ツチ」と舌打ちし落下地点の修正をする。目標は新たに現れた竜巻に

する。そしてフェイトちゃんが進行方向の竜巻に気付く。しかしそれはかわす事の出来ないタイミング。竜巻は既に攻撃態勢、その攻撃がフェイトちゃんに迫る。フェイトちゃんはとっさにシールドを張り防御の姿勢をとる。が、

(間に合った！)

俺は速度を保ったまま空中で姿勢を変える。身体丸め回転し勢いをつけ、伸身で二回転し一回捻りを加える。いわゆるムーンサルトという技だ。そして右足を伸ばし、左足は曲げ右膝あたりに添える。そして渾身の一撃を加えるべく叫ぶ。

「スーパードー稲妻キョーック！！！！」

俺は一瞬の内に海中に突っ込んだ。しかし右足に残る感覚は竜巻を切り裂き、海面をぶち抜いたものだ。十分な手ごたえに満足して目の前にあるジュエルシールドを掴み封印する。

(スサノオ、コレ頼む)

『了解、ジュエルシールド確認』

そう言っただけジュエルシールドをしまう。そして俺はおもむろに腕を組みそのままゆっくりと海面から出てそのまま上昇していく。いわゆる「ガイナ立ち」だ。そしてそのまま呆然としているフェイトちゃんの前まで上がっていく。

「時空管理局次元航行部アースラ派遣！地上本部首都防衛隊所属臨時三等陸士！！斎藤一樹！！そして！Withリンディ軍団！！」

そう言った瞬間俺の後に巨大なウィンドウが現れみんなが映る。突
然の事でフェイトちゃんは啞然としている。

「大丈夫か？フェイトちゃん、怪我は無いか？」

「え、あ、ハイ大丈夫です」

啞然としているフェイトちゃんが返事をする。

「そっか、良かった。怪我してないのなら気にしないで良いか」

「え？な、何をですか？」

俺はニコツと笑うとフェイトちゃんの肩をつかみおもむろに拳を振
り上げ、

「こんの馬鹿者！！！！」

と怒声と共に振り上げた拳をそのままフェイトちゃんめがけて振り
下ろす

ゴッ！！

と音と共にフェイトちゃんが頭を押さえてうずくまる。

「フェイトに何するんだい！」

そう言ってアルフが拘束を破り拳を振り上げ俺に向かって突っ込ん
でくる。

バシィ!

「クッ!」

アルフの拳を受け止め、そのまま引き寄せ、

「お前もだアルフ!!」

ゴッ!!

とフェイトと同じように拳骨をお見舞いする。そしてフェイトと同じようにうずくまるアルフ。

「俺は二人に言ったよな?無理そうだったら連絡してくれって。何で連絡してくれない?そんなに俺は頼りないか?」

正直、一切連絡がなかったのはショックだった。

「あの、そ、それは・・・」

「も、もとはと言えばあんたが(お兄ちゃん後!)」

「分かってる!」

亜夜の叫びと同時に振りかえり、蹴りを入れる。

ズパアアアーン!!

水を叩く音と共に竜巻が蹴りの衝撃で真っ二つになる。が、すぐに

再生してしまう。ちい！相性悪！！

「フェイトちゃん、アルフ、説教は後回しだ。今上空に亜夜となのちゃんがいるから合流してくれ」

「か、カズキさんはどうするんですか？」

まだ痛むのか涙目だ。

「なぐに、こいつらを引き受けるだけだ。俺とは相性が悪いけど融合を防ぐぐらいは出来る」

そう言っただけ俺は竜巻を指さす。

「一人で大丈夫なのかい？」

こっちも涙目でアルフが聞いてくる。

「言っただけ、融合を防ぐぐらいは出来るって。心配すんな」

俺はそう言っただけ、竜巻の方に近付いて行く。

「ほれ、さっさと合流してこい」

俺がそう言うと、フェイトちゃんとアルフは頷きななのちゃんの方に向かって行った。その後ろ姿を見送って竜巻に向き直る。

「さっさと、上げていこうかー！！」

どっかの銀河な美少年の様にテンションを上げる俺であった。

高町なのは

私は今空で待機していて、亜夜ちゃんとユーノ君も一緒なの。下を見ると一樹お兄ちゃんがフェイトちゃんを助けた所で、何か話している。あ、あ、拳骨した。痛そう、フェイトちゃんもうずくまってるし。あ、アルフさんが・・・って殴りかかっている！？あ、受け止めて・・・また拳骨した。アルフさんもうずくまってるの。私も叩かれていないのに頭をさすってしまった。そして何か話している。そうしている和一樹お兄ちゃんの後から竜巻が接近している。

(お兄ちゃん後！)

私が言う前に亜夜ちゃんが念話で叫ぶ。でも一樹お兄ちゃんはそれに気づいてたみたいで、綺麗弧を描いたキックを入れて竜巻を吹き飛ばした！？え！？キック一発で！？

「あ、亜夜ちゃん？」

「ど、どうしたのなのちゃん？」

「今のみた？」

「うん」

「私には普通に蹴った様に見えたんだけど？」

「うん、私にもそう見えた」

「カズキって強いんだね」

「なんだ、三人ともカズキの実戦を見たのは初めてなのか？」

「「「はい」「」」

「・・・あいつは今まで何してたんだ？」

「「「・・・はははは」「」」

そう聞かれて私達は乾いた笑いしかできなかったの。

「あゝ、だいたい分かった。すまない。迷惑をかける」

「いえ、此方こそお兄ちゃんが迷惑かけます」

亜夜ちゃんとクロノ君が一樹お兄ちゃんの事でペコペコしている。もっと初めから真面目に探してくればこんな事にならなかったのに。そんな事を思っていると下からフェイトちゃんと、アルフさんがこつちに向かってきた。

「フェイトちゃん！大丈夫？」

「あ、うん。まだ頭はジンジンするけど」

「ホントだよまったく。まあ、忠告も聞かないで無茶をしたこつちも悪いけどさ」

「「「めんねうちのお兄ちゃんが、後できつく言っとくから」

「ううん、大丈夫だよ。それより・・・」

そう言っつてフェイトちゃんは心配そうに下を見るけど、

「大丈夫だ。カズキなら時間を稼ぐくらい問題ない。相性は悪いみたいだけどな」

そうクロノ君が言ったので下を見てみると、

ドパアアーン！！バシャアアアーン！！

と音がするたびに竜巻が一つ消えては、すぐあらわれる。その繰り返しで下で起こってた。竜巻は一定以上進めないで、竜巻同士も融合出来ないでいる。

「凄いね」

ユーノ君が呟く。

「うん」

私もそれに頷く。

「私達も負けられないね」

亜夜ちゃんが言ってくる。そう言ってる間に一樹お兄ちゃんが一つ封印出来たみたいだ。そしたら、

(お〜い、もう俺は封印出来ねーからそっちで頼む。時間稼ぎはするからよろしく！)

と念話が来た。それなら、

「レイジングハート！」

『はい、マスター』

「フルパワーのディバインバスターでいっぺんに封印出来る？」

『はい、出来ますが竜巻の一つ一つが離れすぎています。もう少し寄せた方が良いでしょう』

「それなら僕が「あたしもやるよ」・アルフさん？」

「このままだと後味悪いからね。手伝わせてもらうよ。良いだろフエイト？」

「うん、そうだね。手伝おうアルフ」

「それでこそ私のご主人様だよ！！」

「じゃあ、フエイトちゃんコレ受け取ってもらえるかな？アマテラス！」

『しょうがないのう、ほれ受け取れ』

そう言って亜夜ちゃんがフエイトちゃんに魔力を渡す。

「え？でも、こんなに？」

「うん、実は私砲撃魔法苦手でそんなに威力が出せないんだ。だから

「代わりをお願い」

「・・・分かった」

「よし、決まりだな。ユーノとアルフはバインドで竜巻を寄せてくれ。ポイントはカズキの周辺で良いだろう。なのはとフェイトは集まった所に封印砲を叩き込んでくれ」

「」「」「はい！（あいよ！）」「」「」

「よし！じゃあ開始だ！」

クロノ君がそう言うのとみんなそれぞれ行動をし始める。

「まずは動きを止める！」

「任せときな！」

そう言ってユーノ君とアルフさんがチェーンバインドで竜巻を次々に縛っていく。

「くっ、重い！」

「でも、負けないよ！」

徐々に竜巻が一樹お兄ちゃんの周りに集まっていく。

「フェイトちゃん」

「うん」

私とフェイトちゃんは魔力を込めていく。

「デイバイーン」

「サンダー」

どっどん魔力を込めて放つ瞬間に、

「今だ！ユーノ、アルフ離れる！」

クロノ君が指示を飛ばす。

「レイジ！！！」

フェイトちゃんはそう言って足元の魔法陣を叩いた。そうすると
凄い数の雷が竜巻全部に命中して動きを止める。そしてそこには竜
巻が密集していた。そこに私もフルパワーで魔法を撃ち込む！

「バスターーーーー！！！！！」

レイジングハートから光があふれて、竜巻の中心に突き刺さって、

「ギヤアアアーーーー！！！！！！！」

ドガアアアアーーーーン！！！！！！！！

つていう悲鳴と爆発音を・・・悲鳴？あれ？爆発音だけじゃない？
みんなにも聞こえたのか全員で顔を見合わせている。

「そう言えば誰かカズキに連絡入れたか？」

クロノ君の問いに全員が首を横に振る。って事はさっきの悲鳴は……。

「あゝ、とりあえず報告なんだけど、ジュエルシードは全部無事封印出来たよ」

目の前にウィンドウが開いてエイミーさんが教えてくれた。

「あゝ、エイミー、カズキなんだが……」

「うん、見事に浮かんでるね。海面に」

エイミーさんがそう言うつと画面が切り替わって海面に浮かんでいる一樹お兄ちゃんを映し出した。

「「「きゃあああー！ー！ー！ー！」」」

私達は叫び声をあげて慌てて一樹お兄ちゃんの元に急ぐのでした。

第三十五話（後書き）

やっとジュエルシードが全部回収出来ました！もっと早い話数で集められるかと思っていたのですが結構かかってしまいました。

生してしまう。それを何度か繰り返した時だった、そこに翠とオレ
ンジのバインドが全ての竜巻を拘束していく。

「お、やっと始まったか。じゃあ、俺も退避しようかな」と

そう思って退避しようかと思ったのだが、なぜか俺を中心に竜巻
が集まっていく。すっかり囲まれ退路が無くなってしまった。

「おいおい、俺の退路は何処だよ・・・」

てつきり俺が退避してからだと思ったがそうでもないみたいだっ
た。こうなると上空に上がるしかない訳で、しかし上空に上がると
何故か周囲の竜巻から迎撃が来る。上がれない事は無いが時間がか
かってしまう。かといってどれか一つ吹き飛ばして変に今のバラ
ンスが崩れてしまっても困るので仕方なく、迎撃を捌きつつ徐々に上
に上がっていくが・・・すこし遅かったようだ。

「今だ！ユーノ、アルフ離れる！」

ちよ、クロノ！俺は！？まだ退避していない俺には警告の一つもな
い。そこへ、

「サンダーレージ！！！」

フェイトちゃんの容赦ない攻撃が突き刺さる。流石に竜巻の攻撃
を捌きつつ、フェイトちゃんの攻撃まで防ぐ事は出来ない訳で、

「アバババババ」

と感電する。竜巻からの攻撃自体が無くなったのは良かったが、身

体が麻痺してしまつて動けない。

『「クソ野郎」退避を推奨します』

若干焦っている様にスサノオが進言する。俺だつてそんな事は分かつているが身体がまつたく言う事をきかない。流石にフェイトちゃんの全力攻撃をノーガードで受けるべきではなかったと後悔する。

「むり、うごげない」

『では御愁傷様です』

俺はその言葉を聞いて気付いた。そうだったこの後なのちゃんの全力全壊の封印砲が来るんだつた。背中に冷や汗を流しつつ、不味いと思つて上を見上げるがそこには桜色に輝く魔力が見えるだけだつた。しかもこっちには全く気付いてないようで、念話すらとんでこない。クロノは何してんだ!?

「デイバインバスターー！ー！！！」

桜色に輝く魔力がなのちゃんの声と共に唸り上げて此方に向かつてくる。ほんの数日前までは魔法の「ま」の字も知らなかつたのに今ではこんな大出力の封印砲を撃てるようになるとは、この学習能力の高さ、教えた事をすぐさま実践できる吸収力、そして天賦の才と言える魔力量、原作とほとんど変わらない。その見事な姿をみて、

「まつたく、小学生は最高だぜ！」

そんな呟きと共に桜色の砲撃に飲み込まれ、襲つてきた衝撃に叫び

声をあげ意識を手放した。

斎藤亜夜

なのちゃんと、フェイトちゃんの攻撃が終わって海面には五個のジュエルシード。・・・とお兄ちゃん。三人でお兄ちゃんを引き上げに行く。ちらりと横目でジュエルシードを見るとちゃんと封印出来ている。凄い、私じゃあんな砲撃は撃てない。

『悔しいか小娘』

「アマテラス？」

アマテラスが私に声を掛けてきた。

『悔しかったら今日、この瞬間を忘れるでない。あの金髪小娘に魔力を渡すしかなかった自分の無力を忘れるな。そうすれば貴様はまだまだ強くなれよう』

「優しいね、アマテラス」

『ふん、ワシを使うなら今より強くなって貰わねば困るのでな。たまには飴を与えねばなるまい』

「そんなことまで言わなくても・・・」

『ふむ、では何時も道理の罵詈雑言がおこのm「私は誉められて伸びるタイプだよー!」・・・ふん』

そんなやり取りをしていると下の方から私を呼ぶ声がした。

「あ、亜夜ちゃん。ちよ、ちよっと来て〜！」

なのちゃんが呼んでる。何だろう？

「どうしたの？」

私は近寄ってなのちゃんに声をかける。そこにはぐったり下を向いているお兄ちゃんを支えるなのちゃんとフェイトちゃんがいるんだけど……。

「ちよ、それどうしたの!？」

私はお兄ちゃんを指さしなのちゃんに聞く。

「そ、それが……」

「二人で引き揚げた時にはもう……」

改めてお兄ちゃんを見ると、両手首にバンドが巻きついていてそれで引き揚げられていて、十字架に磔になった某Yesな人みたいになっている。所々煤けていたり、焦げていたり若干ボロボロのバリアジャケット。二人の砲撃の強さを物語っているんだけど、問題はその上なのだ。フツサフサになっているのだ。髪の毛が。つまり、アフロになっている。それはもう大きめのまりもをそのまま頭にのつけた様な見事なアフロになっているのだ。本来短髪のお兄ちゃんの髪の毛の量より明らかに多い量のアフロである。それを見てもう一度二人を見ると、笑いそうになるのを必死にこらえていた。なのちゃんは今にも吹き出しそうにしている、フェイトちゃんは顔をそ向けてみないようになっているけど、肩が少し震えている。

「す、凄い髪型だね。くっ、ぷー！」

控えめにこらえるけど、こらえきれなかったユーノ君。

「くっくっく」

口元を押さえ笑うクロノさん。三者三様の反応だった。まあ、今の状態を見たらそうなるよね。アフロで磔けにされてれば誰だって笑ってしまうと思う。

「み、みんな。笑っちゃ、駄目、だよ……」

フェイトちゃんも一生懸命こらえているけど今にも笑ってしまいそうになってる。

「ま、まあ、ジュエルシードも全部回収出来た事だし一旦アースラに戻ろう。テストアロツサ、君もだ」

クロノさんは笑いをこらえているフェイトちゃんにも声をかける。

「そ、そうだね！無事に回収も終わったんだし！」

その意見に賛同する私。っていつかこのまま笑いをこらえるのも辛い。さっさとお兄ちゃんをアースラの医務室に運んでしまおう。そう思っているとクロノさんがなのちゃんとフェイトちゃんからお兄ちゃん受け取り肩を貸して支える。

「……はい」

「よし、エイミィ転送頼む」

『分かったよ、クロノ君。じゃあ、みんな集まってね』

「了解、こつちは大丈夫だ」

『ん、じゃあ転送するね』

エイミィさんがそう言うのと私達の足元に魔法陣が現れて全員をいっぺんに転送した。ちよつとした浮遊感がしたと思つたら次の瞬間には私達はアースラにいた。

「みんな、おつかr……」

リンディさんの声が聞こえたけど途中で途絶えてしまった。まあ、原因はわかりきってるんだけど。良く周りを見るとみんな堪えてたり、クスクス笑ったりしていた。そんな中、

「ん、うん」

そうつめき声をあげてお兄ちゃんが目を覚ました。

「カズキ、気付いたか」

クロノさんがお兄ちゃんに声をかける。

「クロノ？……アースラに戻ったのか？」

周囲を見て、頭を左右に振りながらクロノさんに聞く。頭を振るたびに左右にワサワサ揺れるアフロ。それが更に笑いを誘う。

「ああ、そうだジュエルシードも全部無事回収完了した」

「そうか、肝心な時に役に立たなくて悪かったな」

「いや、囿役は問題なかった。こつちも悪かった。カズキに報告しなかったし、退路も確保しなかったからな」

「ああ、その事か。次は気よつけるよ？・・・とすまん肩借りっぱなしだな」

お兄ちゃんはそう言って一人で立つ。

「いや、しかしなのちゃんとフェイトちゃんの攻撃は効いたな。綺麗に意識をすつ飛ばされたわ。」

そう言ってなのちゃんとフェイトちゃんに向き直る。

「い、いえ。こつちこそすいませんでした」

なのちゃんとフェイトちゃんが仲良くはもる。

「まあ、次は気よつけてくれ。流星にもうくらいたくねわ」

そう言って首をゴキゴキならす。左右に揺れるアフロ。

「・・・・・・・・・・」

なのちゃんとフェイトちゃんは頬を膨らませて一生懸命耐えている。

ズパアーン

と良い音がしたと思ったら「ポサツ」と何かが落ちた。

『!?!?』

私を含めた全員が驚いた。

「ああ!? クロノ! なんて事をするんだ!」

「カズキ・・・お前、それ・・・」

「ん? ああ、見ての通りヅラだが?」

それが何か? とでも良いそうなお兄ちゃん。

「あゝあ、後もうちょっと見てたかったんだけどな」

「・・・何をだ?」

「みんなが笑いをこらえてる所。特にその二人は思いっきり我慢してたからこう、何て言うかつい?」

「いつから気付いてたんだ?」

「んー、二人に引き上げられたあたりかな?」

「ほとんど最初からじゃないか!」

「おう、因みに皆さんの我慢している所はしっかり映像に収めてい

るので」

『此方になります』

スサノオがそう言うとお兄ちゃんの後ろに大きめの画面が現れてその画像を映し出した。まあ、なんと言いますか、みんな変な顔になっている。

「ちょ、一樹お兄ちゃん！酷いよこれ！こんな顔画像残さないでなの！」

「あ、あの、これはちょっと・・・」

流石に画像を見てなのちゃんとフェイトちゃんが講義する。そりゃ、女の子としてこの画像を残されたら・・・ねえ。

「黙らっしやい！フレンドリーファイアしたんだからこのくらいの罰は当たり前だろう」

「「うっ！！」」

「それと、フェイトとアルフはまだ説教が残ってんだからな！」

「「え！？」」

「当たり前だ！あれだけの危険行為をしたんだじつくり説教してやる」

「「・・・はい」」

しゅんとうなだれるフェイトちゃんにアルフさん。それを見て可愛
そうになったので手助けをする事にした。

「ところでお兄ちゃん」

「ん？なんだ？」

「この画像いくら？」

「ん？3枚1000円で桃子さんが買い取って・・・あ」

「ふん」

「は、謀ったな！」

「そんな事ないわよ、私もほしかったから聞いただけだし」

「明らかに棒読みでそんな事言っても説得力ねーよ！」

「でも、どうするの？あれ」

そう言って私はなのちゃんを指さす。そこには何やら異様な雰囲気
のなのちゃんがいた。

「一樹お兄ちゃん・・・」

「な、何でしょうか？」

「・・・少し、頭冷やそうか？」

「ちょ、それはまだ早すぎるし相手が違うから！」

と言って逃げ始める。

「知ってる一樹お兄ちゃん？」

「なにを・・・え？」

「大魔王からは逃げられないの」

「自分で言っちゃった!？」

い、今起こった事をありのままに話すわ。私の目の前にいたはずのあのちゃんがいつの間にかお兄ちゃんの前にはいたわ。何を言ってるのか分からないと思うけど、何が起こったのか分からなかった。催眠術だとか超スピードとかそんなちゃんもんじゃない、もっと恐ろしいものの片鱗を味わったわ・・・。

「大魔王的な意味でか!？」

「うん」

「・・・亜夜ちゃんも頭冷やそうか」

飛び火した!？反射的にお兄ちゃんの言う事にうなずいちゃった!

「ヒヤハ―! 亜夜! 貴様も道連れだ―!!」

「ちょっと! 私関係ないじゃない! 一人で逝ってきてよ!」

「亜夜が変な質問するからだろ！」

「そもそもお兄ちゃんがアフロにならなきゃよかったんじゃない！」

「あんな見事な攻撃でアフロにならん方が失礼だ！」

「意味分かんないわよ!？」

「大丈夫だ。いずれわかる時が来る！」

「来ないわよ！」

「いい加減にしろ」

「スパン！スパン！ズギャン！！」

クロノさんの呆れた声が聞こえたのと、同時ぐらいに頭を叩かれた感触が残った。

「「な、何で私達まで」」

「こつちで叩かなかっただけでも良いだろ」

そう言ってクロノさんは右手に持っている「張閃Mk3」（金属製）を見せてきた。因みに、不意打ちで叩かれたお兄ちゃんは前のめりに倒れている。どうやら気を失っている様だ。

「主に悪いのはカズキだがブリッジで魔法を撃とうとするのは頂けない」

「う、うめんなさい」

「まあ、元凶はこれだから仕方ない。僕はカズキを医務室に運んで来る」

クロノさんはそう言ってお兄ちゃんの襟をつかむと引きずって医務室に行ってしまった。私達はそれを見送って、

『はあ・・・』

と盛大にため息をついたのだった。

第三十六話（後書き）

更新が遅くなつてすいませんでした。最近身体の調子を崩してしま
い通院生活でした。検査の結果は問題なかったなのでこれから少し
ペースを上げられると思います。

第三十七話

リンディ・ハラオウン

クロノがカズキくんを引きずってブリッジから出て行く。カズキ君の言動は今に始まった事ではないので、今ではいつもの光景として馴染んでしまっただけ。まあ、悪い事ばかりではない。クロノが規律や規則にガチガチに固まった考えをしなくなったのもカズキ君のおかげだろう。しかも作戦中のカズキ君は、どちらかと言えば優秀の部類に入る。此処で「優秀」と言いきれないのが彼らしい。まったくこれでもう少し真面目に任務をこなしてくれれば「優秀」と言いきって構わないのだけれど。何度かクロノとチームを組まないか打診して見たのだけれど、「クロノが美少女だったらOKなんですけどね・・・」と断られてしまった。その代わり「必要な時は何時でも声を掛けてください」と言われたのだけれど・・・、なかなかいい顔されないのよね、地上本部から。どうも引き抜きをしようとしていると思われる様なのよね。まあ、出来る事なら引き抜きしたいけど。カズキ君の所属は地上本部になっていて、既にカズキ君に模擬戦で勝てる局員はいない。地上本部首都防衛隊のエース、ゼスト・グランガイツ一等陸尉には勝てていないみたいだが負けてもないそう。その為、二日間（土日出勤）しか顔を出さないから長期の捜査などには参加できないが、突入や救出作戦がある時は必ず声が掛かる様で、関わった作戦の成功率は今のところ100%だそう。ただ、上司をからかったり、作戦時にふざけたりするため一部であまり良い印象がないようだ。それでも「陸」の事情を考えればゼスト一等陸尉に匹敵する戦力の為、おいそれと「空」や「海」に渡せないのも事実の様だ。今でこそ囑託魔導師だが、今後正式に管理局員になれば「陸」の未来を背負うかもしれないのだ。既にゼスト一等陸尉と二枚看板になりつつある。そうなれば今回の様

な事でもない限り出向は難しいだろう。そして今回の件のジュエルシードは全部無事に回収完了、後はフェイトさんからジュエルシードを渡してもらっただけなんだけど……。とりあえず話し合いをしないといけないわね。私はなのはさん達に向き直り挨拶をする。

「さて、みんなジュエルシードの回収お疲れ様。いくつか反省すべき点はあるけれど、ここまで頑張ってくれてありがとう。艦長として、また管理局代表として感謝します」

「い、いえ！そんなに感謝されるほどの事じゃ……」

「そんな事ないわ。私達が到着するまでの間、暴走したジュエルシードを封印してくれた。もし、あなた達がいなかったらもっと多くの被害が出ていたわ。ロストロギアが起こす被害と言うのは生易しいものじゃない。それこそ、あなた達の住んでいる街はおろか、国、最悪の場合星そのものに影響が出るほどのものよ。だからあなた達はこの事を誇っていいわ」

「……あ、ありがとうございます」「」

ふふふ、まだ実感がわかないみたいだけど仕方ないわね。魔法やロストロギア何てものとは無縁の世界だし。

「後日改めてお礼をしたいと思います。もし希望があればそれに出る範囲でかなえましょう」

そう言うと亜夜さんが「うん」と考え始めてしまった。何か希望があるのかしら？

「世界征服も、永遠の命も、これから地球にやってくるサイヤ人を

倒してほしいってのも無理でしょ？」

「亜夜ちゃん!？」

「いや、なのちゃん流石に冗談だよ？あ、でも世界征服あたりは出来そうなの……」

「本気になっちゃったの!？」

横で聞いていたユーノ君も驚いている。

「うそうそ。冗談だよ。それに急にそんなこと言われても決まんなって」

「そ、そうだよね」

「なによ、なのちゃんホツとしちゃって！お兄ちゃんじゃないんだからそんなお願いしないって」

「あ、あはははは」

そんな会話を聞いて「やっぱり兄妹ね」と思ってしまった。なのはさんやユーノ君をからかっている姿がカズキ君と少し似ていた。

「じゃあ、もし何か決まったら教えてもらえるかしら？カズキ君に言えば連絡出来るから」

「」「はー」「」

「じゃあ、お願いね。フェイトさんも良いかしら?」

これまでずっと無言のままのフェイトさんにも声をかける。

「あ、はい。わかりました」

フェイトさんはハツとしながらも返事をしてくれた。

「それと、フェイトさんが集めたジュエルシードだけど、此方に渡してもらえるかしら?」

「……すみません、それは無理です」

「なぜかしら?」

「……今、持っていませんから」

「どうしてかしら?」

フェイトちゃんもっていたジュエルシードは七個。一体どうしたのだろう?」

「母さんに、全部渡しましたから」

「あら?フェイトさんは元々カズキ君と一緒に回収していたんじゃないの?」

「いいえ、私は元々母さんから言われてジュエルシードを集めてました。その途中で知り合ったのがカズキさんです」

「そうだね。元々の知り合いじゃ無くって途中で知り合っただけだよ。それに私達はカズキに協力してただけで、管理局に協力はしてないよ。」

今まで聞いていたアルフさんが答える。

「そうね、確かに協力するっていうのは聞いてなかったわね。でも、あなたはロストログアの危険性を知らない訳じゃないでしょ？それにロストログアの個人所有は認められていないわ。勿論例外はあるけど今回の件についてはその例外にも当てはまらないのよ？最悪「強制捜査」もありえるのよ？」

「……………」

「フェイトさん？お母さんがジュエルシードを何に使うのか知らない？」

「……分かりません。でも以前カズキさんが話した時は「人命救助」って言っていました」

「人命救助？」

「はい」

「他に何か分からないかしら？」

「いえ、それ以外は……」

長い沈黙が続く。なのはさんと亜夜さんとユーノ君も此方を見ている。しかしフェイトさんは俯いて黙ったままだ。このままでは埒

が明かない。実際今ジュエルシードが手元にないのだから仕方ない。この状況も私の望むものではない。

「仕方ないわね。フェイトさん今すぐとは言わないけどお母さんとお話させてもらえないかしら？」

「・・・え？」

「流石に今の話だけでは決められないわ。直接話せばそれが一番ね」

「・・・はい、分かりました。聞いてみます」

「お願いね。あ、それと確認んだけどカズキ君はお母さんと会ってるのよね？」

「？はい。一度ですけど」

「そう、ありがとう。じゃあ今回はこれで解散にします。みんなお疲れ様。ゆっくり休んでね」

「」「はい！」「」

そう言って全員がブリッジから出ていく。全員が出て行ったのを確認した後通信回線を開きクロノに連絡する。

「クロノ、聞こえる？」

「はい艦長。どうかしたんですか？」

「カズキ君の様子はどう？」

「まだ目を覚まさないですね。やっぱり無理してたみたいですよ」

「そう、目を覚ましてで良いから艦長室まで来るように伝えてもらえるかしら？」

「了解しました。あ、それとカズキから艦長に渡すように言われたデータそちらに送ります」

「データ？どんなデータなの？」

「中身は聞いてません」

「そう、・・・コレね」

開いていたウィンドウにデータが届く。そしてそのデータを開く。そのデータを読み進めていくうちにその内容に驚く。一体いつの間に調べたのだろうか。そこにはフェイトちゃんのお母さん「プレシア・テストロツサ」についての報告書だった。過去の経歴から現在の状況。会って会話した時の印象等々、詳細が書かれていた。まったくホントにこういう事が出来るのだから普段ももっとしっかりしてほしいものだ。そう思いつつ報告書を読み進めていくとそこで盛大にため息をついた。

「何で名前の由来が書かれてるのかしら？」

報告書の最後にはさっぱり意味のない事が書かれていた。

目を覚ますとそこは知ってる天井だった。アースラの医務室には何度か世話になっていたので見覚え位はある。あたりを見渡すと隣にクロノがいた。

「目覚めたみたいだな」

目を覚ました俺に気付いたクロノが声を掛けてくる。

「最悪だ、何で目覚まし一発目で見る顔がクロノなんだ？」

「残念だったな。さっきまでみんな心配して来てくれていたけど、もう時間も時間だったから今はもう家に帰ってるぞ」

「みんな、フェイトちゃんもか？」

「ああ、アルフと一緒に帰ったぞ」

「・・・そうか」

そうなるとこの後はアルフが保護されるイベントがあるかどうかだな。今回ジュエルシード回収後の攻撃は無かったからな。若干の誤差はあるけど概ね原作通りに進んでいる様だな。

「ああ、それと艦長が目覚めたら艦長室まで来いと言ってたから行って来い」

「ん、了解。所でクロノ、俺はどの位寝てた？」

「ん？そうだな、ざっと3〜4時間って所か？結構疲れてたんじゃ

ないか？」

「うえ、そんな寝ちまつたのか。うん、もうちょい頑張れると思うっていたけど駄目だったか」

「まあ、それなりに気の張る状況だったからな。知らず知らず疲労がたまってたんだろ。それに回収は完了したんだ。そのぐらい休んでも問題ないだろう。艦内の警戒レベルもグリーンまで落とされてるからな」

「ん？そうなのか？だったら後2〜3時間寝ても問題「艦長カズキが目を覚ましました」・・・おい」

この野郎、問答無用で艦長に報告しやがった。

「さっさと起きろ。艦長室に行くぞ、休むならその後に休め」

「仕方がない、そうするか」

そう言っただけ俺はベットから立ち上がりクロノと艦長室に向かうのだ。
った。

艦長室

「斎藤三等陸士、入ります」

「クロノ執務官、入ります」

そう言っただけクロノと艦長室に入る。

「いらつしゃい。身体の方はもう大丈夫かしら？」

「はい、充分休んだので問題ないっす」

「そう、なら良かったわ。報告書については目を通したわ。よくもまああれだけの情報をこの短い期間に調べたものね」

「なぐに、俺が死に物狂いで頼めば調べてくれる人がいるので」

「・・・てつきり一人で調べたのだと思っただけけれど」

「HA！HA！HA！そんなめんどくさい事する訳ないじゃないですか」

「言い切るな！で、あれは結局何の報告書だったんだ？」

「ん？ああ、ありゃあフェイトちゃんのお母さん「プレシア・テスタロッサ」に関する報告書だ」

「何時の間にし・・・ああ、カズキが調べたんじゃなかったな」

「おう、まあ半分位はクロノのおかげだけだな」

「何でだ？僕は何もしてないぞ？」

「エイミイに「調べてくれたらクロノがデートしてくれる」って言うたらその場で仕上げてくれたぞ。だから非常に間接的だがクロノが手伝ってくれたと言っても良いだろう」

「な！？本人の許可も無く勝手にそんな約束をしたのか！？」

「ん？許可なら取ってあるだろ？この間「僕に出来る事なら協力する」って言ったじゃねーか」

「・・・確かに言ったが、こういう協力のつもりじゃなかったんだが」

「何だ？別に初めてじゃねーんだから良いじゃんか」

「「な！？」」

「何でカズキがそれをs「カズキ君それは本当！？」艦長！？」

「ええ、本当ですよ。此処に証拠写真もありますし」

そうやって俺はスサノオに保存してある画像データをリンディさんに送る。

「あらまあ！」

リンディさんのウィンドウにはいくつかの画像データが映し出されていて、エイミーとクロノが仲良く映っている画像が表示されていた。ただ、いくつかの画像のエイミーはカメラ目線になっているが、クロノはカメラ目線になっていないものも一つもない。何故かというただ単に俺がエイミーに気付かれただけであって事前に打ち合わせしたとかそういうのは一切ない。クロノが気付いてないのにエイミーに気付かれるとは思わなかったけど。まあ、この事で昼食一週間分とデバガメしていた画像全部コピーして渡すという事で許してもらえた。

「クロノも隅に置けないわね」

「か、艦長！からかわないでください！」

「いいじゃない、クロノのお嫁さん候補なんだから。もしかしたら娘になるかも知れないじゃない」

「良かったなクロノ。親公認になったぞ」

「いや、これはこれで問題だろ！？」

「何処が？」

俺とリンディさんが綺麗にハモって答える。

「.....」

クロノが必死に考えているがいい答えが見つからない様だ。

「まあ、クロノのデートに関しては置いといて、艦長呼び出された理由ですけど何かしました俺？」

「したと言えはしたわよね今回も、報告書や映像をみる限りだと殆ど回収の邪魔しかしてないわよ？」

「はっはっは！そんなに誉めないでください。照れるじゃないですか」

「今のをどう聞いたら誉めた事になるんだ？」

「ねえ、カズキ君？もう少し真面目に出来ないの？今回の件の事件報告書や、私達が来るまでの対応については及第点、他にも要所要所での対応は申し分ないわ。この報告書だって、先を読んだ結果でしようし、戦闘に関しては言うまでもないわ。でもロストロギアの封印作業中にふざけるのはどうなのかしら？一歩間違えばそれこそ大惨事になりかねないのよ？」

「確かに艦長の言うとおりだな。今回ふざけてなければもっと早く回収出来たんじゃないか？」

ぬ、確かにその通りなんだけどこっちにも事情があるからなく、そんな早く回収完了する訳にもいかないし、フェイトちゃんの事だって準備しなきゃならんし、かといってその事を言う訳にもいかないし。今のところ原作に沿ってるから大丈夫だけど。仕方ないからここは謝っておこう。

「はい、すみません。次回からは気おつけます」

「・・・給与三ヶ月間30%カットにしましょう」

「うえ！？そんなご無体な!!！」

「謝るならもつとしつかり謝りなさい。棒読みで謝っても仕方ないわよ。それとも、もっとカットした方が良いかしら？」

「イエス・マム！30%で構いません！」

「残念だったなカズキ、せつかく10%カットが明けるころだったのに」

クロノがそう言って肩を叩いてきた。

「これだと来月は給与40%カットか・・・チクシヨーム!!!!」

「自業自得だろ」

「知ってるよ」

「他にも何かしてたの？」

「いや、この間気に入らない上司を模擬戦でボコボコにし過ぎちゃって。ゼストさんが止めてなかったらちよっと不味かったかも。」

「やり過ぎだ！」って事でめでたく10%カットに」

「相変わらずね」

「いや、ついカツとなってやった。後悔はしていない（キリッ）」

「反省してるのか？」

「反省はしてるよ。もうちょっと絶望感を味わってもらった方が良かったし」

「駄目だこいつ全く反省してない」

そのため息をつくクロノを後目に艦長に聞く。

「艦長、話つてのは今回の件の説教ですか？」

「ええ、そうね。ホントはプレシアについて聞きたかったんだけど、

報告書があるからいいわ。この報告書に書いてある事以外で知ってる事はあるかしら?」

「いえ、「プレシア」に関してはその報告書以外の事は知りません」

まあ、答える訳にもいかないし。

「そう、分かったわ。じゃあもう下がってもらって構わないわ」

「分かりました。それじゃあ、自宅に戻りますので何かあったら連絡ください」

「ええ、その時はお願いね」

「それじゃ失礼します」

そう言っただけで俺は艦長室から出て行った。さてここからの失敗は許されない。テストロッサー家を助けるための正念場、原作とは違う道。ここからは完全にイレギュラー。もともとバッドエンドは好きじゃないからハッピーエンドにしたい所ではあるが、全部が全部上手くいけばいいけどそうもいかないだろうし。少なくとも原作で起こる現象には対応出来る準備はしてある。後は、

「俺の実力しだいなのかね」

ため息をつきつつ歩いて行くのだった。

アルフ

ジュエルシードが回収し終わって、家に戻るとフェイトは鬼婆の

所に行ってしまった。どうもさつき言われた事を報告するみたいだ。そんな事をしないで放っておけばいいのに。下手な事を言ってたフェイトが傷つく所をあたしやみたくないんだよ。そう思うと脳裏にフェイトの傷ついた姿が浮かぶ。何度も何度も鞭で叩かれ気絶するまでそれが続く。母親が娘にする行為とは思えない。でも、今はただフェイトが無事に戻ってくる事を願うだけだ。しかし、

「遅いねえ、フェイトは・・・」

報告に行つてかれこれ一時間は経つ。報告だけならここまで時間はかからないはずだ。

「・・・まさか！」

嫌な感じが全身を駆け巡る。向かうのはあの鬼婆の部屋だ。それほど距離がある訳じゃないのに遠く感じる。そして部屋の扉が見えてくる。あたしは、勢いよく扉を開ける。

「フェイト！」

扉を開けた瞬間、眼に飛び込んできたのは仰向けになって倒れているフェイトの姿だった。あたしは慌てて駆け寄るとフェイトを抱きかかえる。バリアジャケットはボロボロになっていて、身体の至るところには鞭で叩かれた跡がある。そして今も苦しそうにうめいている。その姿を見てあたしはキレた。フェイトをそっと横たえてつけていたマントをはずしてフェイトにかける。そして改めて部屋をみる。そこにあの鬼婆はおらず、部屋の奥にもう一つ扉があるだけだ。あたしはゆっくり扉に近付き触れる。押しても引いてもびくともしない。が、

「オオオオーーーー！！！！」

拳に魔力を込め力いっぱい殴りつける。

ドガアアアーーーーン！！！！

扉の碎け散る音が響いて、もう一つの部屋が現れる。その奥にヤツの姿を見つける。その瞬間頭の中が真っ白になった。

「ウオオオオーーーー！！！！」

雄たけびを上げて突っ込んでいく。拳を振り上げ、勢いそのままにヤツを殴りつける。

ガアン！！

でも殴る事は出来ずにプロテクションで防がれ、自分の攻撃の威力の反動で後ろに弾き飛ばされる。反動を殺しながら、バク転をして着地する。

「チッ！」

それでもまた攻撃を仕掛ける。今度は展開しているプロテクションを両手でこじ開ける。

「オオオオオーーーー！！！！」

少しずつ、少しずつ隙間が出来てくる。そしてそれが大きくなるにつれて抵抗が弱くなって、顔が入る位の大きさになると一気に抵抗が弱くなりそのままの勢いで左右に思いつき引き裂いた。その

事に驚きの表情をしている鬼婆の胸倉をつかみ持ち上げる。

「なんで、なんであんなに一生懸命に頑張っている子にあんな事が出来る！」

勢いのまま鬼婆を問い詰めうる。

「あんなに頑張ってるじゃないか！あんたの言う事に嫌な顔一つせず、いつも「母さんの為に」って言って頑張ってるのに！」

そう言って今までの事を思い出し、その行動が報われず、頑張ってきた仕打ちがこれだ。悔しくて、悲しくて、泣き出しそうになる。

「あの子はあんなの娘で、あんたはあの子の母親だろう！？何でこんな事が出来るんだ！！」

胸倉をつかんでいる両手に更に力が入り締め上げる。

「黙りなさい」

そう短く鬼婆が言ってきた。ちょうど腹部に魔力を感じ不味いと思った時には遅かった。とっさに腹部に力を入れ、衝撃に備えるがいつまでたっても衝撃が来ない。不思議に思っただけ正面を見ると、

「ガ、ゴホッ、ゴホッ」

と鬼婆が苦しそうに咳き込んでいる。よく見ると、口の端に血がにじんでいる。そんな姿を見て慌てて掴んでいた胸倉を離す。

「ど、どしたんだい！？」

今まで怒っていた相手を心配する。変なことだけど、いきなり吐血されたら誰だってビックリするだろう。

「近寄らないで！」

鋭い声に少し後ずさりする。どうすればいいのか戸惑っていると、

「困るな、協力者を痛めつけるのは」

という声がしたのでその声のした方を見ると、円柱の上に人が立っていた。服は上下共に黒く、その上から黒のコートを着ていて、覆面にサングラスを付けた男が立っていた。

第三十七話（後書き）

やっと投稿できました。ゼストさんのこの時点での階級が分からなかったなので、部隊長クラスとして「一等陸尉」にしてみました。もし正確な階級とか知ってたら教えてください！すぐに修正します
んでwww

主人公がリンディさんに怒られますwww。無印ではあまり活躍の場は無いかもしれませんがwww

第三十八話

アルフ

あたしは声のした方を見る。円柱の上に立っているやつがいる。声からして男だろうか？全身黒づくめの上に、真っ黒の覆面をしていて、その上からサングラスをかけている。匂いも変な匂いしかない。するとそいつは柱の上から飛び降りる。魔法の類は使っていない様で自由落下してくる。自然と目で追う形になって着地した瞬間あたしは確かにそれを聞いた。

ゴキヤ！

そいつの足首から妙に痛々しい音を。

「だ、誰だい？あんたは？」

脱力しつつ警戒しながらそいつに問いかける。

「カ、カリウムと、な、名乗っている」

答えてくる声は何処となく痛そうなのは気のせいじゃない。

「カリウム？変な名前だね？何でここにいるんだい」

「なに、協力者の、成果を見に来たら、この場面に、居合わせた、だけだ」

「協力者？この鬼婆がかい？」

「そつだ」

「勝手なこと、言わないで、ちょうだい。」

鬼婆が苦しそつに言ってくる。

「こつちはこつ言ってるけど?」

「それもそつか、こつちが脅迫して無理やり協力させているのだつたな」

「何だつて?」

その言葉に反応する。そいつは足首をプラプラさせながら軽く言うてくる。

「言ったとおりだが?」娘を殺す」と脅して協力させている」

「ハッ、お笑いだね! あんたみたいなのがフェイトを倒せるはずが無いだろ!」

「ふん、何も馬鹿正直に正面から挑む必要はない。狙撃、毒殺、爆殺、人質等々そいつを殺す手段なんてもんはいくらでもある。まあ、正面から行っても問題なかな」

「それなら、あたしを倒さなきゃ無理だね。私が生きているうちはフェイトを絶対殺させやしない!」

「そつか、じゃあお前を「殺す」か」

そいつがそう言った瞬間、あたしは三回死んだ。

一回目は質量兵器で頭を打ち抜かれ、

二回目は首を折られ、

三回目は心臓を潰された。

力が抜け四つん這いになる。吐き気が襲ってきて耐える事も出来ずにその場で吐く。ビシャビシャと音を立てて床にぶちまけるけど、中々止まらず吐き続け、最終的に黄色い胃液がでてきてやっと止まった。な、何だったんだい！今の！？全部一瞬の内だった。抵抗と呼べるもの何一つも出来ずに一瞬の内に殺された。まだ震えて言う事を効かない手足を無理やり動かして立ち上がる。

「はあ！はあ！はあ！」

「お、まだ立てんのか？」

そいつはゆっくりあたしの方に近付いてくる。

「無理しない方が良くぞ？そうすれば痛くないように殺してやる。

抵抗すれば抵抗しただけ苦しむ事になるぞ？」

「馬鹿なこと、言ってんじゃ、ないよ。絶対に、フェイトを、殺させや、しない！」

「その気概は認めるが、俺に勝てると思っているのか？」

・・・無理だ。あたしじゃ絶対に勝てない。こいつの「殺気」をあてられただけであのざまだ。戦えば間違いなく殺される。今だつて立っているのがやっとの状態だ。手足は震えて力が入らないし、気を抜けばまた吐きだしそうになる。怖くてこの場をすぐにも逃げ出しそうになる。けど、

「言っただろ？あたしが生きている内はフェイトを絶対殺させやしないって！」

そう言つて自分自身に言い聞かせる。私がいいつに殺されたら次はフェイトが殺されるかもしれない。そんな事は絶対にさせない。あの時、あたしを助けてくれた。まだ小さくて、死病にかかつて群れから追放されて、弱つてたあたしを助けてくれた。そんな優しい御主人様を殺させるなんてことは絶対にさせない！

「そうか。じゃあ、少しは楽しませてみる。もしかしたら何とかなるかもしれないぞ？」

そう言つてそいつは自然体で構える。

「ハッ！言つてな！」

私はそう言つて、床を蹴つてそいつに接近する。狙うは顔面、右ストリートで思いつきりぶん殴る。

ドガン！

という音があたりに響いて、そいつがかけていたサングラスが壊れ四散する。サングラスで隠れていた目があらわになる。が、

「痛っ！」

殴った右の拳に激痛が走る。

「ふむ、体重の乗った良いパンチだが、それだけじゃ駄目だ」

そいつはあたしの攻撃を額で受け、何事も無かったように言ってきた。右手を見てみると赤く腫れ上がっている。どうやら折れたみたいだ。

「本当の打撃はこう打つんだ」

そいつはそう言うと、あたしの右腕を掴み、ゆっくり拳を腰だめに構え、打撃を放つ。次に感じたのはお腹のあたりに「トン」と拳が当たる感触と、壁に背中がめり込む感触だった。

ドゴオーン！！

何をされたのか全く分からなかった。打撃自体はそんなに速いものじゃ無かった。この目でしっかり確認できたのだから。でもその後だ、気が付いたら吹き飛ばされていて、壁にめり込んでいる。そして、遅れて痛みが伝わってくる。その痛みは、打たれた前面より、背中の方が痛かった。前面にあるのは触られた様な感触だけで、その次がお腹の中をかき回される様な痛みと、それが背中に抜けたような衝撃だった。

「ガ、ガハッ！」

あたしの口からは真っ赤な血が出た。お腹を押さえて蹲り必死に呼吸をしようとしますが上手く息が出来ない。ヒュー、ヒューと口か

ら空気が漏れる。痛い、いたい、イタイ！今までこんな痛みを感じた事は無かった。それほどの痛みだ。そして動けないあたしにゆっくりと近付いてくる足音が一つ。その足音が目の前まで来て止まる。

「何だ？もう終わりか？」

その問いに答える余裕はもう残っていなかった。

「そうか、この分だとフェイトとか言う娘もそれほど強くないのだろうか」

「ただ、それを聞いて黙っていられるほどあたしは弱ってはいなかった。」

「あ、あなたは、何を、する、つもり、なんだい？」

「おっと、目的を話してなかったか。それなら冥土の土産に話してやる。我々の目的は管理局の壊滅だ。この世界にばらまかれたジュエルシードを使ってミッドチルダを壊滅させる事にある。そこで目的を効率よく果たす為に我々は彼女に目を付けた。魔導師、技術者としても非常に優秀な彼女がいればとても心強い。しかし、ここで誤算があった。彼女はそんな事に手を貸すのは御免だと言って、我々への協力を拒んだ。それなので仕方なく娘を人質に取った訳だ。どうだ、分かったか？ドワー・ユール・アングスタン・ドゥ？」

「そ、それなら、余計に、負ける、訳には、いかない、ね」

あたしじゃ勝てない、でもここから逃げてあいつに伝えられれば、あいつなら何とかしてくれる。そんな気がする。今あいつは格下の相手だと思って油断している。今なら逃げられる。

「それじゃあ、お別れだ」

そいつはわざわざそう宣言して拳を振り上げる。ここだ！そこからは今までにない速さで魔法を打つ事が出来た。一瞬のうちに魔法陣が展開して、自分の真下の床を打ち抜く。

ドゴオオオーン！！

あたしは自分の真下を開けた穴に飲み込まれて落下していく。待っててねフェイト。必ず、戻るから。そう誓いを立てて、最後の力を振り絞って転移魔法を使いあいつらと出会った街に転移した。

プレシア・テストロツサ

舞い上がった、煙があたりを包む。どうやらアルフはすんでの所で逃げたようだ。カリウムはその場を動かさず、地面に開いた穴をじっと見ている。しばらくすると「ふう」とため息をついてこっちによってくる。

「失敗した。逃げられちゃった」

まったく気にしていないように言ってくる。

「どうするの？これで管理局に知られるわよ？」

「気にする事はない、あなたは言われた通りジュエルシードを集めればいいだけだ。管理局と戦争になったとしても今の戦力なら俺一人でも何とかなる。それに、」

「それに？」

「さっきの嬢ちゃんならもう長くない。よほどの事がない限り管理局には知らされんだろ？」

「そう・・・」

「所でジュエルシードの方はどうなっている？」

「集める事が出来たのは七個、残りは管理局が持っているわ」

「七個か・・・残りはどうやって回収するつもりだ？」

「フェイトに回収させるつもりよ」

「ふむ、それなら七個のジュエルシードをフェイトに持たせた方が
良いだろう。管理局とジュエルシードを掛けさせれば向こうも乗っ
てくるだろう」

「そうね、じゃあそのプランでやらせるわ」

「精々上手くいくように祈るんだな」

「・・・」

「ではこれで失礼する」

そう言つとカリウムは部屋から出て行ってしまった。それを見届けてから私はフェイトの元に向かう。ジュエルシードを集めさせるために。

アリサ・バニングス

お稽古ことが終わって鮫島の運転する車で帰る途中、なのはと亜夜からメールがあった。例のジユエルシードとかいうのが全部集め終わったって連絡が入った。これからはいつも通りの生活に戻るみたい。なのでせっかくの休みという事で久しぶりに全員で遊ぼうという事になった。集まるのは私の家、そこでちよつとしたパーティーでもしようかと思ってる。まあ。「慰労会」みたいなものだ。この事を送ったらカズキからもメールが届いて、「俺の上司とか仲間もおk?」と窺いのメールが来たので、仕方がないのでKしておいた。明日は久しぶりに楽しくなりそうだ。メールも返信し終わって携帯を閉じた時、車が止まる。

「どうしたの鮫島?」

基本、家まで止まる事がないルートを走るから途中で止まる事は珍しい。何かあったのかしら?

「いえ、お嬢様。道路の真ん中に大型の犬が倒れておりました」

そう言って来たので運転席の後ろから顔御出して前を見る。するとそこにはアスファルトの上で酷くぐったりしている大型犬がいた。

「た、大変じゃない!鮫島!」

「かしこまりました。お嬢様」

そう言って、私は車から飛び降りる。鮫島も私についてくる。

「酷い怪我！」

車にでも轢かれたのか、口からは血が出ていて、前足はひどく腫れている。呼吸も弱い。

「お嬢様、これはもう・・・」

確かに、素人目に見てもこの犬がひどく弱っていて、もう長くない事が見てとれる。けど、

「鮫島、この犬を早く車に乗せなさい！後、家に帰る前に亜夜の家
に寄るわ」

「かしこまりました」

そう言うと、鮫島はテキパキ作業を開始した。流石に何度も同じような事をしているので手際が良い。一方私は携帯で亜夜を呼び出した。

『もしもし、アリスちゃんどうしたの？』

「至急確認したいんだけど、一樹は家にいる？」

『お兄ちゃん？まだ帰ってきてないけど？どうしたの？お兄ちゃん
また何かした？』

亜夜の中では一樹はトラブルメーカーの認識らしい。まあ、その通り
りんだけど。ただ、今回の要件はそうじゃない。

「そう、なら良いわ。直接かけてm」あ、ちょっと待って。今帰っ

てきたみたい』ホント!？」

それを聞いて思わず大きな声を出してしまった。

『う、うん。ホントどうしたのアリサちゃん?そんな大声出して?』

「う、ちょっと助けてほしいのよ」

『助けてほしいって、まさかまた!?!』

「ち、違うわよ!そっちじゃないわよ!そんな状況でこんなんびり携帯で話なんかできないわよ!」

『あ、そっか。それもそうだね』

鮫島が犬を、車に乗せ終わったのを見て、私も車に乗り込む。そして車はなめらかに走り出す。

「お稽古の帰りに怪我してる犬を拾ったのよ。ちよつと重傷で病院じゃ間に合いそうにないから」

『ああ、なるほど。あ、お兄ちゃんと代わる?』

「そっね、お願い」

『はい、お兄ちゃん、アリサちゃんから。ワンコの治療のお願いだよ、・・・はいよ、お電話かわりましたよ〜と。此方一樹!雷電、聞こえるか?』

「誰が雷電よ!」

『じゃあ、ツンデレの方がいいと申すか!?!』

「誰がツンデレよ!」

『あ、そうだった。デレる相手がいないからツンツンか』

「そうじゃないわよ!で、大丈夫なの!?治せるの?治せないの?」

『あゝ、死んでなけりゃ大丈夫だと思うぞ多分。土郎さんの時も大丈夫だったし。つか、拾い過ぎじゃね?今まで俺が何回治したよ?』

「い、良いじゃない!犬が好きなんだから!」

『まあ、俺も好きだから良いけど』

「そう、そうよね。それならいいわ。今そっちに向かってるから」

『ん、了解。じゃあ、もし助かったら治療費は3000万円頂くが?』

「分かったわ、キャッシュの方が良いかしら?」

『そこは「一生かけても払います」って言えば』

「?、だから即金で払うわよ?」

『ああ、これだから金持ちは!家に来たら無免許医師の漫画読ましたる!お金は冗談だからいいよ。その代わり慰労会での食事は期待』

しているのですよろしく』

「分かったわよ」

『そう言えば、どんな犬？大型特殊犬？大型犬？中型犬？小型犬？マイクロ犬？』

「な、何なのよその種類は？え〜っと、大型犬ね。見た事ない犬種だけど。オレンジ色で額に宝石見たいのが埋まつてるわ」

『アリサ、それ間違いないのか？』

一樹の声色が途端に恐いものになる。一瞬息が詰まる。

「あ、当たり前でしょ！すぐ隣で見てるのに間違える訳『じゃあ、ぶっ飛ばしてこい！一分一秒でも早く！絶対そいつを死なせるな！』な、何よ急に。どうしたのよ？」

途端に一樹が緊迫した声で指示を出してくる。

『そいつは、俺の知り合いだ！詳しい事は着いてから話す！だから今は早く来る事だけを考える！それと、そのいつの耳元に携帯をあててくれ！』

「わ、分かったわよ」

『アルフ！聞こえるか！アルフ！いいか、絶対に死ぬなよ！絶対に助けてやる！だから「カ、カ・カ・ズ・キ？」そうだ俺だ！聞こえてるな？なら、絶対死ぬな！お前が死んだらフェイトはどうするんだ！フェイトを悲しませるんじゃないぞ！』

携帯からは一樹の声が聞こえ、その声を聞いた犬が喋った。確かに喋った。聞き間違え何かじゃ無くてしっかりと喋った。

「カ、カズ・・・キ、フエ・・・イト・・・たす・・・け」

『馬鹿野郎！甘えんな！助けたきや自分で助ける！俺は手伝いしかなかったぞ！』

「そ・・・こと・・・たす・・・あげ・・・とくれ・・・よ」

『アリサ！アリサ！』

「は、はい！」

『あと俺ん家までどの位だ！？』

「あ、後5〜6分で着くわ」

『遅い！2分以内に来い！』

「ッ！分かったわよ！鮫島！」

「かしこまりました。お嬢様」

そう言うと車は更にスピードを出して道路を駆け抜けていった。

第三十八話（後書き）

今回は早めに投稿できました！

第三十九話

斎藤一樹

治療が終わって、アルフを客室に寝かせておく。危なかったかどうかは、確認する前にさっさと治しちゃったのでわからんが、鮫島さんやアリサの様子を見る限りだと相当危険だったのかもしれない。そしてリビングに戻るとリニスが一番に声をかけてきた。

「カズキさん！アルフは！」

「まだ意識は戻らないけど、命に別状はないよ。とりあえず治療は間に合った」

「良かった〜」

そう言つとりビングに安堵のため息が上がる。まあ、電話で俺がああいう態度をとっちゃまったってのもあるんだろうけど。しかしこれじゃあ、

「慰労会は中止かな」

「む、どうしてよ？」

アリサが怪訝そうに聞いてくる。

「少なくともこれは事故じゃない、事件だ」

「どうして事故じゃないってわかるのよ？」

怪訝そうにアリサが聞いてくる。

「何も知らない一般人であるなら、「車に轢かれた犬」と言う事故になるだろうが、俺達から見たらアルフが車に轢かれるなんてことはあり得ない。鮫島さん、アルフはどういう状態で見つかったんですか？」

「はい、道路の中央に横たわっていました。外傷は、前足が腫れていたのと、口から血が出ていたぐらいでしょうか？」

「そのあたりに車の部品や、タイヤのブレーキ痕はありましたか？」

「いえ、そういったものはありませんでした」

「確かに、ちょっと変ね」

「お母さん？」

鮫島さんの答えに、母さんが反応する。

「普通何かしら飛び出してきた場合、急ブレーキを踏むわ。そしてそこに残るのはタイヤ痕に接触したときに破損した車の一部。まあ、破損するかどうかは当たり所にもよるけど、よほどの事がない限りブレーキ痕は残るわ。そして轢いた対象が動物であるなら、証拠隠滅の類はする必要がない。そうなれば現場に残っているわね」

「流石警察官、補足あざーす」

「普通だったただけだね。どんなことにも例外はあるから」

「まあ、決めつけるのはよくないけど九割がた決定だろうね」

「それじゃあ、どうするのよ？」

「どうするも何も、本人から話しを聞くのが一番だろ。生きてんだから」

「フエイトちゃんには話さなくて良いの？」

「ん〜、それがだな、今連絡がつかないみたいなんだよ」

「え？何で？」

「いや、俺に聞かれても知らんがな。リニス経由でも連絡がつかないんじゃない？」

「ちょっと、何とかなんないの!？」

「無茶言つな。現状じゃ何にも分かってないんだ。何もできないよ」

「じゃあ、後はアルフさんが目を覚ますのを待しかないって事？」

「ああ、そうだな。看病は俺とリニスでやる。見知った顔があった方がアルフも安心だろう」

それを聞いた亜夜が胡散臭そうに俺を見てくる。

「・・・お兄ちゃん、念のため言っとくけどアルフさんに落書きしちゃ駄目だよ？」

「・・・H A！H A！H A！そんな事する訳ないだろ？」

「ちよつと間があつたわね？」

「いやいや、バリカンで額の毛を「肉」って切るうなんて思つてないですよ！・・・ん？あれ？アルフって犬形態で毛切つたら人間形態で禿げになったりするのかな？」

「そんな碌でもない事考えてるんじゃないわよ！！」

ドスッ！

とアリサのツツコミが人体の急所の一つである肝臓に突き刺さる。殴られた所を押さえ蹲る。自業自得なのだが、なぜこつもうちの女性陣はツツコミが過激なのだろうか？と思わずにはいられなかった。

「じゃあ、リニスさんお兄ちゃん（バカ）はほつといてアルフさんの所に行きましょう。私も手伝います」

「ええ、そうですねカズキさん（バカ）はほつといて行きましょうか」

「ちよ、おまいら人の事バカ言うんじゃないねー！」

「否定できないでしょ」

「まあ、そうなんだけどね」

今までの事を考えればいたしかたないだろう。そうこつこつしてらう

ちに亜夜とリニスは客室に行ってしまった。あ、そっだーっ忘れてた。

「アリサ」

「な、何よ」

声を掛けられ警戒するアリサ。

「お前のおかげでアルフが助かった。本当にありがとう」

そう言っつて俺は頭を下げる。

「べ、別にあんたの為に助けた訳じゃないわよ！」

「それでも、アリサが助けた事に変わりないよ」

「治したのはカズキじゃない」

「アリサが見つけたから助けられたんだ。もし見つけてなかったらと思うとぞっとするよ。だから、ありがとう俺達の仲間を助けてくれて」

そう言っつてアリサの頭を優しく撫でた。

「う~~~~~／／／」

「ん？なんだ？照れてんのか？」

「ち、違うわよー！」

「ほんとあんがとな。お礼に何でも言う事を聞いてやる。一週間語尾に「なの」ってつけてほしいとか、一週間下着をつけないでいてほしいとか、一週間裸エプロンで起こしてほしいとか、一週間浣腸ダイエットにつきあってほしいとか何でもいいぞ？」

「あんた！私をどんな目で見てんのよ！」

「あ、いや、すまん。流石に一生とか言われると流石に引くわ」

「なっ！違うわよ！自分のマニア度を低く評価された事に怒ってんじゃないわよ！！って言うかそんな事死んでも言わないわよ！！！」

「・・・なん・・・だと!？」

「驚愕してんじゃないわよ！！あたり前でしょ!？」

「それもそうだな」

「ほんとに腹立つわね。でも急にそんな事言われても決めらんないわよ。だから今は保留にしとくわ」

「了解。お手柔らかにたのんます」

「今後の態度次第ね」

「そうか、じゃあ問題ないな」

「大問題よ！！ああもう！あんたと話していると時間がいくらあっても足りないわよ！」

「よせよ照れるじゃねーか」

「誉めてないわよ!」

「まあそれは兎も角、明日は普通に遊ぶくらいだったら問題ないと思うからいつもの度五人で遊んでて大丈夫だ。なのちゃんは連絡しとくからずかちゃんの方よろしく」

「・・・分かったわ」

「おう、じゃあ気おつけて帰れよ。あ、そうだ。ちゃんとあれ持ってるか?」

「大丈夫よ、ちゃんと持ってるわ」

そう言ってアリサは首に下げていたペンダントを見せた。凝った意匠のもので値打物である事は容易に判る。しかし凝った意匠とは裏腹にこれには発信機が内臓されているのだ。以前誘拐騒動があった時、忍さんお手製の発信機を五人に渡してあるのだ。必要なのはアリサちゃんとずかちゃんだろうけど、ついでにという事で全員の分をつくってしまったらしい。まあ、巻き込まれる危険性が高いと言えば高いので正直ありがたい。

「よし、なら安心だ」

「ふん、あんたなんか頼りにしてないわよ」

「おう、俺も頼りになんかされたら困る」

「あたしは助けたくないって言うの!？」

「そうじゃなくて、めんどい」

「な、何ですってー!？」

「お嬢様、そろそろ・・・」

「むゝゝゝ!行くわよ鮫島!」

そう言うと玄関の方にズンズン歩いて行ってしまふ。

「かしこまりました、それと一樹様。程々になさってください」

「すみません、期待道理の反応をするからつい」

「お願いします」

「はい、次からは気おつけます」

「では、我々はこれで」

「判りました」

そう言っつて鮫島さんも玄関の方に向かって行った。少しするとエンジンが掛かる音がして車が遠ざかって行く。ふう、アリサには感謝してもしきれないな。原作通りだがこんな大怪我とは思わなかった。流石にひやっとした。やっぱり原作の流れに沿って物語が進むみたいだ。そうなると次はなのちゃん?Sフェイトになる訳だが・・・。イレギュラーが発生しないかどうか非常に心配だ。ため息をつ

いて肩を落とすが、頬を両手でパシン！と叩き気を引き締める。ただまだこれからだ。後一息気張って行こう。そう俺は気合いを入れるのだった。

フエイト・テスタロッサ

意識が戻って最初に目に入ったのは天井だった。一瞬何処だか分らなかったけど、母さんの執務室の天井だった。あの後、母さんに報告に行って結局ジュエルシードが七個しか集まらなかったと報告したら母さんを怒らせてしまった。そして、そのまま母さんにお仕置きされて気絶してしまった事を思い出した。身体を起こそうとしたら、全身に痛みが走る。見れば酷い恰好だった。バリアジャケットはボロボロになっていて、体中ミミズ腫れが出来ていた。それでもこのままでいる訳にもいかなかったから我慢して身体を起こす。起こし終わった後、膝の上に落ちていた布を見つけた。手にとって見てみると、アルフがいつもつけていたマントだった。何でだろうと不思議に思っ

「アルフ？」

声を出してアルフを読んでみる。けど返事は帰ってこなかった。とりあえずマントを羽織って立ち上がる。すると部屋の奥の扉が開いて、母さんが入ってきた。

「母さん」

母さんと呼ぶけど、いつも通り返事は無く無言のまま執務机にっいている椅子に腰かける。少し、考えるように背もたれに体重をずけていた。

「フエイト」

「は、はい」

突然呼ばれて少し声が上ずってしまつた。

「ジュエルシードだけれど、残りは全部管理局が持っているのよね？」

「はい、そうです」

「じゃあ、管理局から残りの十四個奪つてきなさい」

それを聞いて愕然とする。はつきり言って、あの戦力に一人で立ち向かつて残りのジュエルシードを奪ってくるのは不可能に近い。ちよつとだけ一緒だったけど、みんなもの凄く強い。あのなのはつていう子は私より魔力があるし、亜夜つて子は剣の扱いがもの凄く上手い。そして多分もっと強いのが、カズキさんと、クロノつて言う執務官。もしかすると戦いにすらならないかもしれない。それほどどの戦力だ。とてもじゃないけど私とアルフだけじゃ敵いつこない。

「で、でもどうやって」

私は思わずそう聞いてしまった。

「今からあなたにジュエルシードを預けるわ。それを全てかけて管理局と一対一に持ち込みなさい。そうすれば向こうも乗ってくるでしょう。此方のジュエルシードがほしいのは向こうも同じなのだから」

「で、でも」

それでもし、カズキさんか執務官が出てきたらどうする？ ほぼ間違いない負ける。此方から相手を指定しても向こうが乗ってくれるかどうか……。

「やりなさい」

「……はい」

でも母さんはそんな事は関係ないとはかりに言ってきた。どっちにしる私のする事は一つだけだ。そう思って部屋を出ようと出口に向かう。だけどその前に、

「あ、あの！ 母さん」

「……なに？」

「アルフを知りませんか？」

そう、私の唯一のパートナー。いつもだったらそばにいるのに今回は姿が見えない。扉の向こうにも気配を感じられない。一体どこにいるんだろう？

「……知らないわ」

「そうですか……」

しかし、母さんから帰ってきた答えは私の期待したものではなかった。私はそのまま部屋を出ようとして扉を開けた。

「フェイト」

でも、その途中で母さんに呼びとめられた。何だろうと思って振り返ると、

「もうすぐで終わるわ、だから頑張りなさい」

そう言われた瞬間、今まで暗くなっていた気分が嘘の様に晴れた。全身に力が戻ってくる。不思議と身体の怪我なんか気にならなくなっていた。

「はい！頑張ります！！」

元気よく声を出してそのまま勢いよく部屋を出て行った。途中でバリアジャケットは修復されて、さっきまで勝てないと思っていたのが嘘の様に今なら誰が相手でも勝てそうな気がする。そんな気がする。私はそのまま街に向かうために転送ポートに向かった。

執務室

「頑張りなさいか、何故私はそんな事を行ったのかしら・・・」

フェイトが去った執務室ではプレシアが自分のいった言葉を繰り返して、自分の言葉を不思議に思っていた。

アルフ

「はッ！」

急に意識がはつきりする。次の瞬間跳ね起きて周囲を警戒する。

「アルフ、落ち着いて下さい」

毛を逆立てて「グルルウウ」と唸っていたけど、見知った顔を見て驚いた。そこにはリニスがいた。

「亜夜さん、カズキさんを呼んできてください」

「はい！」

そう言うと、もう一人いたフェイト位の女の子が部屋から出て行った。よく見れば、その部屋には布団が敷かれていて、掛け布団が大きくずれていた。だんだんと警戒心が薄れていき何とか状況を把握しようとする。

「リニス？」

「はい、そうですよ。身体は大丈夫ですか？」

それを聞いてハツとした。慌てて自分のあのカリウムとか言うのと戦ってかろうじて逃げ出して、途中で力尽きて倒れたんだ。あいつから受けたダメージも相当のものだったはずだ。でも不思議な事に痛みを一切感じない。治すにしてもそれなりの時間が必要なはずだ。何があったのか考えていると、部屋に誰かが入ってくる気配を感じた。

「おう、アルフ。起きたか」

それはまた見知った顔だった。

「な、何であんたがいるんだい!？」

「これは異な事をおっしゃる。ここは俺んちだぞ？」

「は？」

「まあ、落ちつけ今から順番に説明してやるから」

ゆっくりとした動作で説明しようとしているカズキを見て、それどころじゃない事を思い出す。

「そ、そんな事はどうでもいい!お願いだフェイトを助けてやっておくれよ!お願いだよ!」

「どういう事だ？」

「あたしにも詳しい事は判らないんだよ、ただ「時の庭園」に戻った時黒ずくめの変な奴がいて、そいつがフェイトを殺すって言うて鬼婆を脅してるんだよ」

「なっ!」

アルフの言葉に驚きを隠せないリニス。

「何とか逃げてこれたけど、途中で力尽きて・・・」

「アルフ、よく思い出して答えてくれ。そいつはどんな奴だった？」

「わからない。体格なんかはあんたと同じくらいだったけど、黒ず

くめで顔も変なマスクをしてたし・・・、ああ、でも眼の色は赤と碧のオッドアイだったよ」

「他には、何か無いか？」

「後は・・・ああそうだ。管理局を壊滅させるのが目的だつて言つた。ジュエル シードを使ってミッドチルダを壊滅させるとかどうとか・・・」

「目的はジュエルシードか、ミッドチルダの壊滅とは大きく出たな。リニス、俺とアルフはアースラに連絡して情報を整理しなおす。アルフも一緒に連れていく。なのちゃんと亜夜にはこっちから連絡するから今はまだ話さないでくれ」

「待つておくれよ！フェイトはどうするんだい！すぐに助けないと！！！」

「落ちつけアルフ、フェイトならまだ大丈夫だ」

「どうしてそんな事が言えるんだい！！！」

怒っているあたしを見て呆れたのか、ため息を吐くカズキ。

「いいか、まずその黒ずくめの目的はジュエルシードなんだろう？そしてプレシアさんは既に七個持っている。その事はその黒ずくめの奴もプレシアさんから報告を受けているはずだ」

「それがどうしたんだい」

「七個集まったのはちょうど俺が「時の庭園」に行った時だ。それ

以降もジュエルシードを回収していただく？つまりジュエルシード七個じゃ足りなんだ。何個必要なのか知らないけど、少なくとも今アースラに保管してある十四個を狙っているのは確かだ。近いうち何らかのアクションがあるかも知れない。それはつまり、アースラにフェイトちゃんが来るか、連絡してくるかもしれないってことなんだ」

「あ！」

「だからアースラで情報を整理すると、向こうがどう出るかを確認する必要があるんだ。なんせ、敵さんにあってるのはアルフだけなんだからな。だから今のうち、その黒ずくめと会話した内容を一言一句思い出せ。その会話にどんなヒントがあるか分からないんだから」

「わ、わかったよ」

「よし、じゃあこれからアースラに連絡を入れるからちょっと待ってる」

カズキはそう言ってアースラに連絡を取り始める。いつもと違うカズキを見て、

「リ、リニス？こいつ本当にカズキかい？」

と隣にいたリニスに聞いてしまった。

「ええ、非常に稀ですけど真面目な時もあるんですよ？」

「何で疑問形なんだい？」

「私も見るのは片手で数える程しかないので」

「そ、そうかい」

「ええ、いつもこのくらい・・・いえ、この半分でも真面目ならいいんですけど」

「あんたも苦労してんだね」

リニスの言葉を聞いて同情せずにはいられなかった。

第三十九話（後書き）

アリサの頭を撫でたけど、別にナデポじゃないですよwww。純粹にアリサが恥ずかしかっただけですwww。アリサとの会話が書いてて楽しいのは何だろうか？www

第四十話（前書き）

今回、会話が長くなってしまいました。ストーリー的にはあんまり進んでないです。すいません。

第四十話

クロノ・ハラウン

「どういつ事だカズキ！」

カズキから連絡が来て何事かと思ったら案の定厄介事だった。

『どうもこうも、ジュエルシードを狙ってる阿呆がいるから艦内の警戒レベル引き上げとけて事だ』

「その情報は確かなのか？」

『ああ、信憑性は高い。けどアースラが襲われる可能性は低い。警戒レベルの引き上げはあくまでも念の為だ』

「・・・分かった、艦内のレベルは引き上げとく。カズキはどうするんだ？」

『今からその情報提供者を連れてアースラに行くので転送よろしく』

「まで、今そこにいるのか？」

『ああ、お前も知ってる人物？・・・あれ？アルフって人物でいいのか？獣人か？』

「そんな事はどっちでもいい！とにかくアルフと一緒に来るんだな？」

『ん？ああ、こっちは準備出来てるからすぐに頼む。あと、取調室取っついてくれ』

「はあ、分かった、今から転送するちょっと待ってる。あと、取調室は今使い放題だから安心しろ」

『おう、悪いな』

「気にするな」

そう言ってから一旦通信を切ってエイミイにつなげる。

「エイミイ聞こえるか？」

『はいはい、聞こえてますよ』

「至急カズキとアルフの二人をアースラに転送してくれ。向こうの準備はもうできている」

『え？何、また厄介事？』

「ああ、ジュエルシードの回収よりずっと厄介だ」

『はあ、了解』

ため息をついてエイミイはすぐに準備に取り掛かる。それを見て僕は執務室から出て、取調室に向かった。僕が取調室に着くと同時にカズキも姿を現す。アルフも人型で一緒だった。

「おう、クロノ悪いな」

「で、どういう事なんだ？しつかり教えてもらおうぞ」

「ああ、詳しい内容をアルフから聞かなきゃならないしな」

「分かってるよ、だからフェイトを必ず助けておくれよ」

「ああ、約束しよう。とりあえず中に入ってくれ」

「分かったよ」

そう言っただけでアルフが取調室に入っていく。取調室は四畳ほどの広さで、中には中央に机とその机を挟んで向かい合うように椅子が二つ置いてある。入口のすぐ横にもう一つ椅子と机があり、そこで会話の内容を記録できるように端末が置かれている。僕は入り口付近の椅子に座る。

「さてアルフ、聴取を始めるとするか。アルフ、ゆっくり思いだしながら起きた事を話してくれ」

「そうだね、あの後、ジュエルシードの事を鬼婆に報告しに行ったんだ。いつも通りフェイトが一人で報告しに行ったんだけど、今回はいつもより出てくるのが遅かったんだ。心配になって部屋に入るとフェイトがうつ伏せに倒れていたんだ。慌てて駆け寄ったら、バリアジャケットはボロボロになって、体中あざだらけだったんだ」

「はあ、それはやっぱり・・・」

「そつだよ！鬼婆がやったんだ！これが初めてじゃない！！何度も何度もあつたんだ！！」

「アルフ、興奮しすぎだ。落ちつけ」

カズキはそう言って、アルフをなだめようとする。

「そんな事言っただって！」

「言いたい事は分かるが、いま重要なのはそこじゃないんだ。落ちつけ。」

「~~~~ツ!・・・ハア、すまないね」

「気にするな、で?その後何があった?」

「ああ、その後我慢できなくて鬼婆をぶん殴ってやるって思って、部屋の奥にあった扉を開けてその部屋に入ったんだ。そしたらその部屋の奥に鬼婆がいたから、駆け寄ってぶん殴ろうとしたんだけど・

」

「プロテクションなんかで弾かれたのか?」

「・・・そうだよ、よくわかったね」

「そりゃあ分かるよ、なあクロノ」

そう言ってカズキが話を振ってきた。

「まあ、会話の流れと君の性格を考えたら、自然と出る答えだな」

「・・・そうかい」

アルフが不機嫌そうに言う。まあ、そんな事言われたらあまりいい気はしないな。

「で、弾かれた後は勿論もう一回突っ込んだ訳だ」

「そうだよ！悪かったね単純で！」

「あゝ、すまん。でどうなったんだ？」

「・・・プロテクションにしがみついて両手で引き裂いてやったさ。その後胸倉をつかんで問い詰めたんだ。何で母親なのに、自分の子供にあんなひどい事が出来るんだって。でもあいつはそれに答えな^いであたしを攻撃しようとしたんだけど、」

「どっ？」

「突然吐血したんだ。急に咳き込んだと思ったら口を押さえて蹲^つてさ」

「吐血したのか？別に殴ったりはしてないんだろ？」

「ああ、胸倉をつかんではいたけど殴ったりはしてないね」

「何か病気だったのか？フェイトから何か聞いてるか？」

「いや、そう言う事は何にも」

「・・・そうか、で吐血した後どうなったんだ？」

「急にそんな事になったもんだから、どうすればいいか分からなくなっちまってね。オロオロしてたらあいつが現れたんだ」

「その黒ずくめの奴か？」

「そうさ、全身真っ黒で覆面にサングラスをしてたよ。身長とか体格はちょうどあんたと同じぐらいだったね」

「ふうん、そうするとだいたい175？前後か、体格も中肉中背って感じか。でその後は？」

「そうだね、あたしが誰だといって聞いたら、カリウムって名乗ってるって言って、鬼婆の協力者だって言って来たんだよ」

「協力者？」

「そうだよ。そしたら、その後鬼婆が違うって言ったらあっさりそれを認めてね、しかも「娘を殺す」って脅してるって言ってきたんだ」

「何だって!!」

それを聞いて僕は立ち上がる。

「クロノ！」

カズキに呼ばれてハツとする。そうだ、落ちつけ、まだ落ちついてなきゃいけない。まだ話は終わってないんだから。

「ふう、それで、その後は？」

「勿論、そんなこと出来る訳がないって言ってやったさ。あたしもいるし、フェイトだって強いんだ殺される訳がないって思ってた」

「思ってた？」

「ああ、そうだよ。その時フェイトを殺したかったらあたしを倒してからに言って言ってそいつと戦う事になったんだけど、あいつが「お前を殺す」って言った瞬間あたしは三回死んだ」

「はあ？何言ってた？生きてんじゃないかよ」

「仕方ないだろ！実際そういうのが見えだし、上手く説明何かできないんだからさ！多分あたしはそいつから「殺気」を受けたんだと思う」

「カズキ、そう言うの何か聞いた事ないか？」

僕はカズキなら何か知ってるんじゃないかと思って聞いてみる。

「あるっちゃ、あるけど実際そんな事が起こるかどうかは知らん。条件とかもあるだろうしな」

「なんだい？その条件ってのは？」

「うーん、まあ、「殺気」に慣れていなかったら影響を受けやすいと思うし、後はそいつとの実力の差が桁違いだったって事だな、多分なのちゃん達だったらその場で戦意喪失するぞ」

「そんな事出来るのか？」

「似たような事なら出来るし、された事もある」

「そうなのかい!？」

「ああ、高町道場に行けば経験出来ると思うぞ?」

「・・・なのは家族は何者なんだ?」

「世の中には知らんでいい事が満ち満ちているんだよ」

「「そうか(い)」」

それを聞いて僕とアルフが同時にため息をついた。

「っと、話がそれだな。で「殺気」を受けた後どうなったんだ?」

「そりゃあ、立ち上がったそいつを一発ぶん殴ってやったさ。返り討ちにあっただけだね」

「お、そこから反撃できたのか」

「あいつも、あたしが立ちあがった時驚いてたよ。まだ立てるのかって。そこからそいつの顔をぶん殴ってやったんだけど、額にあてられちゃってね、多分そんときに拳が壊れたんだと思う」

「前足が腫れてたのはそれが原因か」

「その後、腹に一発もらってお終いだよ」

「一発？腹にもらっただけであんなったのか？」

「悔しいけどそうだね」

「どういう事だカズキ？」

不思議に思って声をかける。

「あゝクロノ、ボディーに一発もらつとどうなる？」

「どうなるって、もらい方にもよるだろ？大抵の場合は呼吸困難になったり、全身が痺れたように動かなかつたりするぐらいじゃないのか？まあ、当たり所が悪ければ内臓が損傷する事もあるけど鍛えていれば大丈夫だろ？」

「まあ、普通はそうだろうな。普通は」

「だからどういう事なんだ？」

「アルフはボディーに一発もらつただけで死にかけたんだよ」

「な！？」

「多分、普通に殴ればクロノが言った症状が出るだろう。例え内臓が損傷したとしても治療すれば十分間に合う程の時間があるはずだ。アルフ、海鳴市にきてどの位で気を失った？」

「うゝん、わりとすぐだった気がするよ。転移して地面に降りたとこまでは覚えてるから」

「どんな攻撃だった？向こうは武器を持っていたか？素手か？」

「武器らしい武器はもってなかったね。素手だったから。攻撃自体は拳を腰だめに構えてそこから一直線に打つ感じだったかな？」

「こうだったかな？とってアルフがその場で見よう見まねで動きを真似する。」

「中段突きっぽいな」

「それで、その攻撃を受けたら動けなくなっちゃってね、変な打撃だったよ。そんなに速い打撃でもないし、威力があつた訳でもないのに、受けたら思いつきり吹き飛んで壁にめり込んでたからね」

アルフがしきりに首をかしげている。しかし、それを聞いたカズキは盛大にため息をついていた。

「何か分かったのか？」

「ああ、多分「寸勁」って呼ばれるものかもしれない」

「「すんけい？」」

「ああ、「発勁」とも言われてるかな？」

「どういう技なんだ？」

「あゝ説明か、うん、そうだ」

何を思ったのかカズキは机の上に置いてあつた紙コップを掴んでア

ルフの方に置く。

「アルフ、このコップの前にプロテクション張っててくれるか？」

「いいけど何するんだい？」

「ん、実演」

「は？」

「いいからいいから」

「わ、分かったよ」

そうやってアルフは紙コップの前にプロテクションを張る。カズキの方はさっきアルフがしていた構えをして準備している。

「ほら、これで良いかい」

「おう、じゃあ行くぞ？」

その様子を見逃すまいとしっかり見る。

「ほっ！」

カズキがそう言って軽くプロテクションを打つ。その拳はしっかりと阻まれて紙コップに届く事は無かった。が、

パカン！

という音が鳴って紙コップが飛んでいく。紙コップはそのままアルフに当たって床に落ちる。

「「はあ!?!」」

僕とアルフが驚愕する。プロテクションでしっかり拳を止めていたはずなのに紙コップはいとも簡単に吹き飛んでしまったのだから。

「これがアルフが受けた攻撃の正体だと思っぞ」

「な、なんなんだいこれは!?!」

「だからこれが「発勁」だって」

「一体どういう原理なんだ!?!」

「原理って言われてもなあ、うん」打点をずらす「感じか?」

「「打点をずらす?」」

カズキは床に落ちた紙コップを拾って机の上に置く。

「ああ、普通だったらこの場合の打点はプロテクションになる訳だ」

そう言ってカズキはまだ張ってあるプロテクションに拳をあて、あたってる部分を指さす。

「その打点をこっちに持ってくるんだ」

そう言ってカズキが指さしたのは紙コップだった。

「そんな事出来るのか!？」

「実演したじゃん」

「……………」

僕とアルフは黙ってしまふ。はっきり言ってこんな事はあり得ないからだ。通常プロテクションで防げば攻撃が通る事は無いからだ。勿論攻撃によつては、重いものもあるし、そういうものをプロテクション越しに感じる。でも、衝撃をそのまま通すなんてことは無かった。そういうときはプロテクションが割れたりするのが一般的だけど、今見たものはそうならなかった。

「アルフ、この攻撃を受けた時、腹の中と、背中の方になんか感じなかったか？」

「ああ、その通りだね」

「多分だけど、アルフの内臓相当ひどい事になってたと思うぞ？ 衝撃を内部に通して背中から一気に抜けて言ったんだと思う」

「まったく非常識な奴だな」

「ああ、まったくだ」

「いや、あんたも入ってると思うよ?」

「……なん・だと」

「「当たり前だろ」」

カズキは犯人だけ言われてると思ったのだろう。しかしここまでの情報で犯人を捜すと、

「なんかもう、僕はカズキが犯人に思えてきたぞ？」

「確かにそうだね、黒ずくめにしたらそっくりだね」

「いきなり何言っちゃってんの!？」

「カズキ、悪い事は言わない自首しろ」

「そうだよ、あたしにした事は許してやるからさ」

「いきなり犯人扱いしてんじゃねーよ!!アルフ!だいたい犯人はオッドアイだったんだろ？」

「ああ、そうなんだよね残念な事に」

「残念扱いされた!?!こういうときって普通犯人じゃ無くて良かったって言うはずじゃね？」

「カズキは普通じゃないからな」

「ガツデム!!なんて世の中だ!!」

カズキが頭を抱えてしまった。

「で、アルフ。オッドアイって今言ってたが？」

「ああ、あたしが一発入れた時そいつのしてたサングラスが吹き飛んだんだよ。それで見えたんだ。赤と碧みどりのオッドアイが」

「そう言う事が、で後他にはあるのか？」

「え〜っと、あたしが蹲って動けないでいたら近寄って来て止めを刺そうとしてたんだ。であたし何が目的なんだって言ったらジュエルシードを使って管理局を壊滅させるって言ったんだ。冥土の土産だって言ってたけどざまあみろさ、こっして生きてるんだからね」

「何だって！？カズキ！！」

「大丈夫だよ、もうエイミー経由で地上本部には報告してある。こ丁寧ていねいにミッドチルダを御指名したからな」

「まあ、まだジュエルシードがこっちにあるから大丈夫だと思うけどな」

「そうか」

「ああ、後アルフはフェイトとプレシアさんの安全が確保できるまでじっとしてもらおうぞ？」

「ああ、その方がいいだろう」

「ちよ、どういう事だい！？」

「アルフ、そのカリウムとかいうのが何て言った？冥土の土産にっ
て言っただら？多分そいつはアルフの事を「死んだ」と思っ

るはずだ。だから当然俺達はプレシアさんの背後にそいつがいるって事は知らないと思っっているはずだ。そこでもしおまえの無事が確認されてみる、最悪プレシアさんとフェイトが殺されるぞ?」

「なっ!」

「そうだな、人質を取って無理やり聞かせている時は、相手に何らかの要求をしているはずだからな。この場合「ジュエルシードを集めて来い」って言うのも要求だろうけど、「この事を管理局に知らせるな」っていうのも言われているはずだ。そして、管理局員の僕達と一緒にアルフがいるのがばれたら・・・」

「ジ・エンドだな」

「ど、どうにかなんないのかい?」

「気持ちは分からんでもないが今はじっとしててくれ。念には念を入れておきたい」

「~~~~ツ!」

「何かあったら、アルフにはフェイトだけでも助けてもらおう。それまで待つててくれ」

「・・・分かったよ」

「よし、じゃあ、これから作戦会議だ。クロノ、リンディさんへの報告たのむ。俺はなのちゃん達に口止めの連絡しとくから」

「分かった、会議室で待つてるから早めに来いよ」

「了解、アルフはクロノについて行ってくれるか？」

「わかったよ」

そう言って僕たちはこれからの準備を進めるのだった。

第四十話（後書き）

私自身もボディーブローをもらって蹲った経験がありますwww、あれって意識がはっきりしてるから気を失うって中々ないんですよwww。呼吸困難で手足がしびれたりしますけどwww

第四十一話

斎藤一樹

「状況を説明する。雇主はいつものA R F社から、目標は人質とされている御主人の救出任務だ。場所は「時の庭園」、敵さんは「カリウム」と名乗る手練れの「ノーマル」だ。やっこさん「フェイト・テスタロツサ」を殺ろうとしている。そいつが殺られちまう前に救出しろとのお達しだ。「カリウム」の攻撃手段は近接戦闘、恐らくプロテクション等の防御を「抜ける」攻撃手段を持っている。射程内に入ればひとたまりもないだろう。まあ、要は遠距離から弾幕を飛ばせば問題ないって事さ。特に特別な攻撃手段が必要って訳でもないさ。こんなところか？悪い話ではないと思うぜ。連絡を待っている」

今俺がいるのはアースラの会議室。そこに座っているのは、リンディさん、クロノ、エイミー、アルフ、俺の五人に武装隊の面子がそろっている。会議室正面モニターに映し出されていたのは、A CでG Aの作戦説明によく似た物だった。無駄に高画質でC G等が使われていて、「時の庭園」の見取り図や「カリウム」の外見や攻撃手段が分かりやすく説明されている物だ。つくるのは意外に簡単、というかスサノオがやってくれた。時間もそんなに掛からないで仕上げるものだから結構驚いた。つうか、何でこんな事できるんだ？アレか？家で調子に乗ってインターネットにつないだのが原因か？ちなみに説明している声もスサノオだ。で、そんな力作？の報告をしたんだが・・・、クロノとエイミーは頭を抱え、リンディさんはにっこりと笑い、

「カズキ君？真面目に報告してちょうだい」

と許容量を測り間違えて、リンディさんにマジでキレられた。目のハイライトが消えてキラれたのはゾツとした。よく見ると、クロノとエイミイも「!？」っとして、震えてたし、武装隊の連中は「私見てません」というように顔をそらしていた。俺は慌てて直立して敬礼し、

「了解！説明しなおします！」

と言い、最初から説明しなおした。

「事の発端は、重体だったアルフを保護、治療し本人の証言から発覚しました。詳しく聴取したところ、カリウムと名乗る人物が、プレシア・テストロツサ、以降プレシアと呼称します。プレシアに対して「娘を殺す」と脅し、「ジュエルシードを集めさせている事」、「プレシアを仲間にしようとしている事」が判明しました。なお、娘にあつてはフェイト・テストロツサで、以降フェイトと呼称します。カリウムの目的は先ほどあげた二点と「ジュエルシードを使用した管理局及びミッドチルダの壊滅」という事が判明しており、この件に関しては、自分の上官である地上本部首都防衛隊所属ゼスト・グランガイツ一等陸尉にエイミイ主任経由で報告済みです。次にカリウムの戦力ですが、今のところ個人なのか組織なのかは判明していませんが、管理局を標的にしている事と、プレシアを仲間にしようとしている事から、何らかの組織の一員である可能性が高いと推測されます。個人の戦闘能力は自分と同じ近接格闘を主体としているものと思われませんが、ミッドチルダ言うシューティング・アーツではなく、ストライク・アーツに近いでしょう。更に言えば、第97管理外世界、以降地球と呼称します。地球の「中国武術」が一番近いと思われれます。攻撃されたアルフの証言から、衝撃を内部に与える事が出来る「発勁」や「寸勁」と言われる技を使用してい

と思われます。この技の注意点として、プロテクション等の防御魔法では恐らく防げないという事です。カリウムの攻撃の全てにこれが組み合わされているとしたら、遠距離からの狙撃あるいは弾幕を張り接近させない事、中距離、近距離戦闘では「防御」ではなく、「回避」する事を前提として戦闘を行う事を推奨します。あと、アルフに対して冥土の土産にと言い自分の目的を話している事から、アルフは死んだものと考えており、管理局に知られているとは知らないと思われます。最後に、現時点でプレシア側に渡っているジュエルシードは七個ですが、本職が接触したとき既にその個数であり、それ以降も回収を行っていた事から、カリウムが必要としている個数は七個以上と推測されます。報告は以上になります」

長い説明が終わり、席に着き一息つく。

「・・・そう、状況は分かりました」

リンディさんがそう言って会議室の雰囲気はやや硬くなる。

「厄介な奴が出てきましたね」

「まったくだ」

「カズキ、過去の事件で「カリウム」ってヤツ聞いたことあるか？」

「いや、無いな」

「エイミィ、管理局のデータベースには？」

「うーん、ないね。該当無しだった。身体の特徴とオッドアイでもヒットは無し」

「過去は真つ白か……。新興勢力か？艦長、管理局を標的にしている組織に動きはありますか？」

「いいえ、反管理局を掲げてる組織に動きは無いみたいね。ここ最近は静かなものよ。こっちに悟られないほど水面下で動いている事も考えられるけど、新興勢力の線が強いかもしれないわね。……カズキ君、聞きたい事があるのだけど」

リンディさんが真剣に聞いてくる。

「何ですかリンディ艦長」

「勝算は？」

「よくて五割」

「クロノと一緒になら？」

「六割〜七割だけどそれは出来ないっす」

クロノは俺とは別行動をしなければならぬ。

「他のメンバーなら？」

「連携出来ないからいない方が良い」

「……そう、分かったわ。それじゃあ今後の方針を決めましょう。ジュエルシードが狙われている以上、いくら艦に保管されているといても油断は出来ないわ。警備は武装隊に担当してもらいます。」

テスタロツサ側が持っているジュエルシードを確保したら本局に戻ります。本件はジュエルシードの確保を最優先とします」

「何だつて？」

リンディさんの言葉にアルフが反応する。

「聞こえなかったかしら？最優先はジュエルシードと言ったのよ」

「フェイトはどうなるんだい！？」

「落ちつけアルフ、誰も助けないとは言っていない」

「言ってるようなもんだろ！？あの言い方は」

「当たり前な事を言ったんだ」

「クロノ！」

「当然だ。ミッドチルダが狙われているんだ。数千万の命と二人の命、どちらを優先すべきかは一目瞭然だ」

「何だつて！」

「だあ！アフル！おめーはこっちに来い！！」

そう言つて俺はクロノに飛びかかろうとしていたアルフの首根っこをガツチリつかんで会議室を出る。

「ちよ、カズキ！放せ！あいつをぶん殴つてやるんだ！」

そういうアルフの抗議を一切受けず俺は会議室を出て行った。通路を少し行った所でアルフを放す。

「くおーのバカチンがあー！ー！！」

ゴッ！

そうやって俺はアルフの頭に拳骨を落とす。

「痛ウウウー、だっ、だっ、だっ、あいつらフェイトの事」

アルフは頭を押さえながら言ってくる。よほど痛かったのか、耳は垂れ、尻尾は元気がなくペタンとなっている。

「仕方ないんだよあの二人は。艦長と執務官って立場にいるからああ言わなきゃ行けない時もある。いいか、あの二人も本心じゃそんなふうにしてなんか無い。ただ、上に立ってる人間ってのは、今のアルフみたいな感情を抑えて判断しなきゃならない時があるんだ。今回みたいに数千万の命と二人の命を比べたみたいにな」

「それでも！」

「アルフの気持ちもよくわかる。俺だって赤の他人の命より知り合いや身内の方が大事だ」

「だったら！」

「でもそれを堂々と言えないんだよ。管理おれたち局員は身内が人質になっていてもそれは一つの命として考えなきゃならない。それを切り捨

てる事で他の何百、何千、何万の命が助かるならそっちを選ばなきゃならないんだ」

「あんたはそれで良いのかい!？」

「いい訳あるか!だから俺は別で動くんだよ」

「・・・別で？」

「そうだ、どういふ状況でプレシアが脅されていて、フェイトがどういふ状態で人質になっているのか、それがいつからなのか、戦闘になった際の対処、二人の救出手段、等々、そういうのを調べてそれからまた作戦を立てるんだよ。状況がもっと詳しく分かれば別の作戦も出来るかもしれないからな」

「そ、そうだったのかい。でも、それならそうと言ってくれればいいじゃないか」

「あの時とりあえず静かにしていってくれば話せたんだけどな」

「う・・・」

「まあ、いいよそれほど問題ないし。じゃあこれから情報をあつカズキ三等陸士」・・・なんぞ？」

いきなり目の前に画面が現れてアルフとの会話を中断する。通信の相手はリンディさんだった。

『とってもかわいい彼女から連絡が来たわ。ブリッジに来てもらえるかしら?アルフさんはそのまま客室に行ってもらえる』

「何であたしは行けないんだい？」

「何でって、さっき説明しただろ。少なくともここにアルフがいるって知られたらまずいんだから」

「・・・わかったよ」

『今そつちにエイミイが行ったわ。後はエイミイに任せてこつちに来てもらえる？』

「了解しました」

『じゃ、よろしくね』

リンディさんはそう言つと通信を切つた。それと同時にエイミイが来る。

「お待たせ、待った？」

「いや、今リンディさんから事情を聞いたとこ。じゃ、後はよろしく」

「うん、まかされました。じゃあアルフさんこつちに来てください」
エイミイがそう言ってアルフを連れていく。それを少し見送つてから俺はブリッジに向かった。

ブリッジ

ブリッジに入るとメイン画面には、金髪ツインテールの可愛い女の子、フェイトのアップが映し出されていた。

「艦長、来ましたけど？お、フェイトちゃんじゃなか。トゥットウル」

俺はそう言ってフェイトに挨拶する。

『あ、はい。こんにちは』

「違う違う、そこは「トゥットウル」と返すべき。今地球で流
行ってる挨拶なんだぞ？」

知らないのか？とばかりにフェイトを見て首をかしげる。

『そ、そうなんですか？』

「おう、マジマジ大マジ。亜夜もなのちゃんもこの挨拶だぞ？ほれ、
言ってみ？出来れば「トゥットウル」の後に自分の名前をつけ
るとなおいいぞ」

『・・・トウ、・・・トゥットウル、フェ、フェイト・・・です』

フェイトちゃんがそう言うと、ブリッジに静寂が訪れた。そんな中
で俺は声を上げる。

「ランディ管制官！今のは！？」

「バツチリだ！！」

「よしー！」

そう言っただけで二人でグツツとサムズアップする。照れながらもしっかりと言われた通り挨拶をしてくれた。そんな可愛い映像を残さないなんてもつたない！

「もういいかしら？」

「あ、はい呼び出してなんで・・・す・・・か」

そう言っただけでリンディさんの方を見るが、見た瞬間声がかすれた。そりゃあ見事に背後には真っ黒いオーラが湧きあがってんだもん。リンディさんの隣にいるクロノは合掌していた。

「要件はフェイトさんがカズキ君を呼んでたからなんだけど、不思議ね、もう一つ増えたわ」

「そ、そそそそそですか」

「まあ、その件に関してはこの後で構わないわ。それでフェイトさん？カズキ君に何の用かしら？」

リンディさんがそう聞くと、フェイトちゃんは少ししてこう答えた。

『私と、ジュエルシードを全部かけて戦ってください』

「だが断る（キリッ）」

再びブリッジを沈黙が支配する。

『な、何ですか！？』

再起動したフェイトちゃんが聞いてくる。

「え？だって俺、よほどの事が無い限り女子供とは戦わないし」

『これはよほどの事じゃないんですか？』

「これだったら俺じゃなくてよくな？それにこの間言ったじゃん。容赦しないって・・・なのちゃんが」

『あの子なら良いんですか？』

「うーん、どうしますリンディさん？」

「そうね、フェイトさん。申し訳ないのだけれど少し時間をくれるかしら。急に言われても此方にも準備があるわ。そうね、明日またこの時間に連絡くれるかしら？勿論それ以前に何か決まったら此方から連絡するわ。それで良いかしら？」

『・・・分かりました。それで構いません』

「じゃあ、今日の所は家に帰ってしっかり休んでおけよ」

『はい、連絡を待ってます』

フェイトちゃんがそう言うと画面には何も映らなくなった。

「どう思うカズキ君」

「どうもこうも一風変わった人質ですね」

そりゃあそうだろう。人質って言ったらどっかに監禁されてたりして身動きが取れなかったりするもんだ。

「そうね。少なくとも誘拐、監禁されてる訳じゃなさそうね」

「アルフが嘘を言ってる感じじゃないし、瀕死になってたのも事実だし」

「そうね」

「で、どうしましょう。向こうから出された挑戦状は。此方としてもジュエルシードを回収したいってのもありますけど」

「そうなのよね。でもカリウムの動向も気になるのよね。向こうからすればこれはジュエルシードが二十一個全部集まる恰好の機会よ。奇襲でも受けたら対処できるのはクロノとカズキ君ぐらいでしょうし、フェイトさんと戦わせる訳にもいかないわ」

「じゃあ、フェイトにはなのはをあてるのが理想的か」

「そうだな、亜夜だとまだ不安が残る」

とクロノの呟きに答える。

「それにフェイトちゃんに対決して勝って保護するのは良いけど、それと同時にプレシアさんにも手をうたないと、次はプレシアさんが消される可能性があるぞ」

「人手が足りないわね」

「なのはがフェイトと対決、カズキが奇襲に備えて待機、武装隊はアースラの警備、となるとプレシアの保護は僕が行くしかないか。艦長、武装隊から何人が連れて行けますか？」

「難しいわね。恐らくカリウムが現れる可能性が一番高いのは、対決の最中にジュエルシードを狙ってくるでしょうし。だからそこに増援という形で送り込みたいのよね。亜夜さんはどうする？」

「亜夜はクロノにつけます。カリウムが出てきたら不味い。俺と一緒にいっても足手まといになりそうですし。それとリンディ艦長、戦力に關してですが、三名程当てがあるんですけど」

「あら、まだ知り合いの魔導師がいるの？」

「いえ、その三名は魔導師じゃないんですよ」

「魔導師じゃない？でもそれじゃあ足手まといにならないかしら？」

「いえ、それは無いですね。多分武装隊と戦っても勝てると思えますよ」

「なっ！そんな戦力ある訳・・・まさか」

「そのまさかだよクロノ」

どつちらくクロノは気付いたらしく驚いている。

「で、カズキ君その戦力って言うのは誰なのかしら？」

「高町士郎、高町恭也、高町美由紀、なのちゃんのお父さんとお兄さんとお姉さんですよ。管理局から正式に依頼してみたらどうですか？」

俺はそうリンディさんに尋ねてみた。

高町家

「と、言う訳なんですけどどうでしょうか」

そう言っただけでリンディさんの説明が終わる。リンディさんはテーブルに用意された紅茶を一口すすする。今、俺とリンディさんとで翠屋の営業時間が終わった後に、高町家にお邪魔した次第である。勿論事前に電話したので問題は無い（ケーキの確信的な意味で）今はリビングのテーブルをばさんで士郎さん、恭也さん、美由紀さん、桃子さんと向かい合って話している。

「なのはにこの事は？」

「まだ言っていないっす」

俺は正直に話す。

「俺達は魔法を使えないぞ？」

「カズキ君の推薦があつたので問題ないと判断しました。あなた方なら大丈夫だと。もちろん簡単なテストをする予定ですが」

恭也さんの問いにリンディさんが答える。

「一樹、知っているだろ。父さんはもう「仕事」からは足を洗ったんだ。あの病室で母さんにそう言ったんだ。それ以来もう「仕事」はしていないんだ」

「いえ、知りませんよ?」

まあ、知識としては知っているがその会話は聞いてない。事実そんなとき恭也さんにぶん殴られて気絶してたし。

「そんなはずは・・・そうだった」

恭也さんは否定しようとしたが、俺を殴った事を思い出したらしくため息をつく。

「ねえ、お父さんと恭ちゃんに分かるけど何で私も?」

自分がメンバーに入っている事を不思議に思ったのか聞いてきた。

「そつつすね、鍛錬見てて思った事なんで自分の勘違いかもしれないですけど、美由紀さんって恭也さんより才能あるんじゃないっすか?」

「ほ、ホントに!?!」

美由紀さんが俺の言葉にやたらと反応する。テーブルに手をついて身体を乗り出して聞いてくる。いつもと違う反応に驚きつつ続ける。

「あ、あくまでも自分が何となく感覚的にそう思ったただけですよ?」

「ねえ！何処！？どこらへんが才能ある！？」

「あゝ、そうですね………いい子です！あと………凄くいい子です！！」

「才能関係ないじゃない！！」

勢いよく突っ込んで来た。そんな事言われても困る。こちらら感
覚で言っただ、確証なんぞ無いんだから。そんな話をしていると
桃子さんが話してきた。

「一樹君、どうしても土郎さんの力が必要なの？」

静かに話を聞いていた桃子さんが聞いてくる。その顔は今までみた
事の無いほど真剣だった。

「はい」

俺は桃子さんの目をみて答える。沈黙がリビングを支配する。

「ただいま………って、リ、リンディさん！？何でいるんですか
！？」

そんな中、帰ってきたあのちゃんが「その沈黙をぶち殺す！！」
と言わんばかりにリビングに入ってきた。それはそうとなあのちゃん
は俺がいる事には気付いてないようだ。

「なのは、丁度よかったわ。こっちに来てくれる？」

そう言つて桃子さんがなのちゃんを呼び、横になのちゃんを座らせる。

「え？え？」

何が起つてるか分からないなのちゃんは絶賛メダパ二中だ。

「今度の管理局のお手伝い、お父さん達も参加する事になつたわ」

「え？」

なのちゃんがヒロイン（候補）にあるまじき声をだす。

「ほ、本当なんですか？」

なのちゃんと一緒に帰ってきたユーノも聞いてくる。俺とリンディさんも驚いて桃子さんを見る。

「お願いします土郎さん。なののを、一樹君を助けてあげて。私達家族の恩人を助けてあげて」

桃子さんは土郎さんにそう言った。その言葉を聞いた土郎さんは、

「分かつた、協力しよう」

そう答えるのだった。

第四十一話（後書き）

どうも感想が少ないのは何でだろう？と考える不知火です。

ちよっと時間が掛かってしまいました。私自身「とらハ」はプレイした事ないのでグーグル先生達に頼るのみですww。今回の美由紀さんの才能の関係もその情報をもとに推測した結果なので間違ったり、もっと正確な情報があつたら教えてもらえるとうれしいです

ww

ではまた次回で！

第四十二話

アースラ訓練室

『状況終了です。お疲れ様でした』

訓練室にエイミイの声が響く。高町家にお邪魔して土郎さん達の協力を得て、アースラに戻り武装隊一個小隊と模擬戦をしたところ、土郎さん達の圧倒的勝利で幕を閉じた。

「……今まで話し半分に聞いていたけど実際に目のあたりにすると凄いわね」

「……一体なのはの家族は何者なんだ？」

「戦闘民族高町家だ」

「ちょ、一樹お兄ちゃん！変な名前つけないで！」

「でも間違っていないじゃん。唯一の非戦闘員って桃子さんだけだし」

俺がそう言つとなのちゃんは何か言い返そつとしたが事実である事に気付いて、

「……どうしてこうなったの!？」

と頭を抱えていた。

「まあ、それはこいつが全ての元凶だ」

俺はそう言って、フェレットモードのユーノの首をつかみ持ち上げなのちゃんの前に出す。ユーノを見たなのちゃんは首をカタカタさせて、

「フッフ、ソッカ。ゆーのクンガワルカッターダ」

と言葉が片言になって、眼のハイライトが消えていく。おや!?なのちゃんの様子が・・・!

「ちよつとなのは!?もの凄く恐いんだけど!?」

「ユーノ!BBBBBBBBB!」

「いきなり何言ってるの!?」

「ゆーのクン、ムコウデ H A N A S H I ショウカ」

「なんで!?!」

「おめでとう!なのちゃんはN A N H A に進化した!」

俺がそう言うとスサノオからお馴染みのBGMが流れる。残念ながら進化キャンセルは間に合わなかったようだ。その傍らでユーノがなのちゃんに捕まる。

「ぼ、僕が何したって言うんだああー!ー!ー!ー!」

ユーノの悲痛の叫びを聞き、なのちゃんと一緒に部屋を出ていく(連れてかれる)姿に俺は合掌しつつ、俺、クロノ、エイミィ、リ

ンデイさんの四人は訓練室のモニタールームで先ほどの模擬戦を見る。状況は「時の庭園」での任務を予測し室内戦闘にして、武装隊に仮想敵役アグレッションをしてもらい、士郎さん達が救出チームで模擬戦を行った。アースラに配備されている武装隊は一個小隊で、通常一個小隊は第一、第二、第三分隊とあり、一個分隊は六〜七名で構成されていて一個小隊は約二十名前後になる。武装隊は決して弱くは無い。厳しい訓練を日々行っている。しかし士郎さん達はその人数をたつた三人で制圧してしまったのだ。しかも魔法を使えない「民間人」として。今士郎さん達は「仕事」の時に使っていた服装になっている。ミリタリーブーツにカーゴパンツ、インナーの上に濃紺のミリタリージャケットを着ていて、手にはタクティカルグローブをはめ、腕やジャケットの下には様々な暗器が仕込まれている。唯一違うのは、カーゴパンツの色だろうか、美由紀さんは赤、恭也さんが緑、士郎さんが黒になっている。そして三人とも手には「小太刀」を握っている。因みに「小太刀」とは約30?以上60?以下の長さの刀の事をいい、長さが約70以上90?以下になると「太刀たち」や「打刀うちがたな」と呼ばれ、90?以上だと「大太刀おおたち」又は「野太刀のたち」と呼ばれる。士郎さん達は「小太刀」を両手に持ち自在に扱い、次々に武装隊員を倒していく。

「しかし出鱈目だ。魔力弾は斬るし、バインドで捕まんないし、背後の誘導弾を見ずにかわすし、おまけに全隊員が一撃で気絶させられるし……」

モニターを見たクロノが呟く。

「でも、嬉しい誤算よこれは。正直これほどとは思ってなかったわ」

「それなら報酬は……倍ブッシュだ」

「それも検討しないとイケないかもしれないわね」

「マジで?」

自分で言っというてなんだがまさかノータイムで答えられるとは思わなかった。

「マジよ。このレベルの人を雇うと此方の提示した報酬の倍以上掛かるわよ?でも私の知る限りでもここまでの実力者はいないわ。EイーSSケレットにもね」

「それはまたずいぶんと高評価ですね。ESSは小さいけど質で言ったら業界トップクラスですよ?いないって事は無いんじゃないですか?」

「そうね、多分いると思うわ。でも武装隊一個小隊を魔法を使わずに、三人で制圧出来る人はいないと思うわよ?ホント、管理局に来てくれないかしら?」

リンディさんがため息をつきそう言った。

「まあ、今はスカウトしてる場合じゃないっすからね。その話はまた今度にしてください」

「そうね、またの機会にしましょう」

「それじゃあ艦長、作戦を詰めましょう」

「そつだな役者も揃った事だし」

そう言っただけ俺たちはモニタールームを後にした。

高町なのは

「以上が作戦プランだ。何か質問は？」

クロノさんが説明をしてくれる。ジュエルシードを狙っている悪い人がいて、フェイトちゃんとフェイトちゃんのお母さんのプレシアさんが危ないみたい。今は亜夜ちゃんも呼ばれてみんなで作戦会議しているの。

「なのちゃんに任せるのは重要なポジションだ。今度のフェイトちゃんとの戦闘は負けられない。出来るか？」

「今まで散々邪魔してたくせに！」

「え？まったく記憶に無いのだが？」

「む~~~~~~~~！」

「なのちゃん落ちついて。お兄ちゃんのペースになってるよ。」

一樹お兄ちゃんのとぼけた態度に怒ると亜夜ちゃんがなだめてくれた。危ない危ない、また一樹お兄ちゃんのペースに引き込まれるところだった。

「亜夜ちゃんありがとう。一樹お兄ちゃん、私今度こそ絶対負けないもん。あれからレイジングハートとたくさんトレーニングしたもん。だから絶対勝ってフェイトちゃんを助ける！」

私がそう言うで一樹お兄ちゃんが、「ニツ」て笑った。それはからかっている笑い方じゃ無くて、安心している様な笑い方だった。

「よし、なら大丈夫だな。それと、亜夜は士郎さん達の足引っ張んじゃねーぞ?」

「うっ! ちょっとそれは自信ないかも・・・でもお兄ちゃんもへましないでよね」

「HA! HA! HA! 心配するな。何時でも、何処でも、どんな時でも楽しむのが俺のジャスティス!」

「偶にはまじめにやれ」

クロノ君がそう言うで一樹お兄ちゃんの頭を張閃で叩く。スパンと良い音が会議室に響く。

「じゃあ一樹、俺達はその「時の庭園」って所に居るプレシアって人の保護をすればいいんだな?」

「ええ、お願いします。出来る限り見つからないように動いてください。プレシアさんの警備態勢がどうなってるのか分からないのでクロノと亜夜が一緒なので戦力は問題ないと思います。最悪プレシアさんと戦闘になるかも知れないので。アースラからも出来るだけサポートをしますので、そう言う事でエイミィよろしく」

「はいはい、任せてバッチリサポートするよ!」

「保護のタイミングはクロノが出すんだったよな?」

「ああ、こっちは任せてくれ」

「よし、そんなじゃ作戦開始と行きますかね」

「そうね、一樹君フェイトさんに連絡お願いできる？」

「時間は現地時間の1200時でしたっけ？」

「ええ、そうよ。各自それまでの時間しつかりと休息と作戦の確認をしておくように。それでは解散とします」

そうリンディさんが言ってみんな席を立つ。その中で私は一樹お兄ちゃんを呼びとめる。

「一樹お兄ちゃん」

「ん？どうしたなのちゃん？模擬戦ならお断りしますが？」

「ち、違っの！模擬戦じゃ無いの！・・・フェイトちゃんに連絡するんでしょ？」

「そりゃするけど、もしかしてなのちゃんは連絡しないで奇襲作戦の方がいいと申しますか？そりゃ、そっちの方が勝率は上がると思っけど流星にそれはty「ち、違っよ！ちょっとお話しただけなの！・・・ユーノにした H A N A S H I と申したか、フェイトちゃん相手にも容赦しない、流星なのちゃん」

「にゃー！違っの！普通にお話したいの！それに通信で話すのにそんな事出来る訳ないの！」

「む、それもそうか。そんなじゃ今から連絡するからついて来て」

「うん！」

「なのちゃん、どうしたの？」

会議室から出てこないのを不思議に思ったのか亜夜ちゃんが戻ってきた。

「あ、ゴメンね。今一樹お兄ちゃんにお願いしてフェイトちゃんとお話させてもらえるようにお願いしたの」

「え、そうなの？それじゃ私も話したいな」

「ん、じゃあ亜夜も一緒についてこい」

「はい」

そう言っただけで私達はブリッジに移動した。

ブリッジ

「いいか二人とも、分かっていると思うけど作戦の事は絶対に話すなよ？絶対にだぞ？」

「お兄ちゃん、それはどっちにも取れちゃうよ？」

「冗談だ、よしつなげるぞ」

そう言っただけで一樹お兄ちゃんは手元で何かを操作して通信回線を開

く。するとブリッジのモニターにフェイトちゃんが映し出された。

「フェイトちゃん聞こえるか？」

『あ、はい。聞こえます』

「フェイトちゃんの申し出を話し合った結果、この申し出を受ける事になったよ・・・なのちゃんが」

『そうですか』

「おうそれでな、なのちゃんが今までの借りを全部返すから命をかけて掛かってこいだとs」にやー！そんな事言ってるの！！」
あべし！」

変な事を言い始めた一樹お兄ちゃんの脇腹をレイジングハートで思いっきり叩く。よほど上手く入ったのか蹲って呻いている。

「はあ、はあ、ひ、久しぶりだねフェイトちゃん」

「やっほー、フェイトちゃん私もいるよ」

『う、うん。どうしたの？』

私と亜夜ちゃんはそう言って挨拶をする。

「うん、ちょっとフェイトちゃんに聞いておきたい事があって」

『聞いておきたい事？』

そう言ってフェイトちゃんは首をかしげる。

「うん、ジュエルシードを集めてる理由は一樹お兄ちゃんから聞いたけど、分からない事があったから」

『・・・なんですか？』

「フェイトちゃんはどうしてあんなに悲しそうなの、寂しそうな顔をするの？」

『・・・そんな顔してない』

「嘘だよ。街で模擬戦した時もそうだったもん」

『そ、そんな事ない』

「ううん、私も同じ時があったからわかるんだ。一人ぼっちで寂しくて、悲しくて。今のフェイトちゃんからはそんな感じがするんだ。でも私にはその時声をかけてくれた亜夜ちゃんがいた、一樹お兄ちゃんが父さんを助けてくれた」

あの日を思い出す。何時も一人で家にいて、一人でご飯を食べて、誰もいない家に「行ってきます」と言って学校に行つて、「ただいま」と言つて帰ってくる。それはとても寂しくて、悲しくて、辛くて・・・でも助けてくれた人がいた。

『・・・』

「亜夜ちゃんは何時私の事を気にかけてくれた。一樹お兄ちゃんには何度もからかわれたりしたけど、それでも毎日が楽しかった。

あの日、亜夜ちゃんに声をかけられて、一樹お兄ちゃんと知り合つて本当に救われたんだ。だから私はそんな思いをしているフェイトちゃんを助きたい」

『でも、敵同士だよ』

「そんなん関係ねえーよ」

蹲っていた一樹お兄ちゃんが復活して立ちあがって言った。

「敵だつて助けたいと思つたら助ける。味方でも気に入らないやつはぶちのめす。それがなのちゃんだ!」

「ち、違つよ!私ぶちのめしたりなんかしないよ!」

「そうか?今から10年後ぐらいに教えを守らない生徒をぶちのめす気がするんだが」

「なにその予言!?!」

「まあ、そんな感じで敵だ味方だつてのを気にする必要は無い訳だ」

『でも、それでも私は母さんの力になるつて決めたから』

「うん、分かつた。でも私はフェイトちゃんを助ける。この気持ちには変わらない」

「ま、お互い全力でぶつかることだ。悔いの残らないように。今回は俺も見てるだけだし」

一樹お兄ちゃんはそう言うけど、実際何かしてきそつで安心できない。

『分かりました。私も全力で戦います』

「おう、よろしくな」

一樹お兄ちゃんはそう言って通信を切る。

「勝手に切つちまつたけど良かったか？」

「うん、私の気持ちも伝えられたし大丈夫だよ」

「そうか、亜夜は大丈夫か？」

「あゝ、流石にあんな会話してる最中に話しに入っていけないよ」

「まあ、それもそうか」

あんな会話？私変な事言つたかな？良く見ると亜夜ちゃんはちょっと顔が赤くなつてて照れている感じがする。

「もしかしてなのちゃん気付いてない？亜夜に助けてもらったとか言つてたじゃん。流石にいきなりそんな事言われたら恥ずかしいやら、照れるやらでこんなふうになるぞ？」

そう言つて一樹お兄ちゃんは亜夜ちゃんを指さす。そつちを見ると複雑な表情をした亜夜ちゃんが照れ笑いになっていた。冷静になつて考えるとかなり恥ずかしい事を言つた気がしてきた。

「ああ！えーっと、違うの！そうだけどそうじゃなくて、すごく感謝してるし、一樹お兄ちゃんにからかわれるのは嫌だけど楽しくてえーっと、その、つまり二人にはすごく助けられたって事なんだよ！」

なんだか急に恥ずかしくなってきたので一気にまくしたてて説明する。

「クッククック、プー」

「いや、あのねなのちゃん。落ちっこうよ。」

一樹お兄ちゃんは笑って、亜夜ちゃんは顔が真っ赤になって照れている。

「う~~~~、バカーーーー!!」

「ひでぶー!」

耐えきれなくなつて、つい手に持ったままのレイジングハートで一樹お兄ちゃんを叩いてしまった。今度も上手い具合に顎に入ってしまった。その場に崩れ落ちてびくびく痙攣した後動かなくなった。

「あゝ、なのちゃん今のはちょっと理不尽だったんじゃない?」

「い、いいんだもん。何時ものお返しなの!」

「まあ、いいけどね。・・・これどうしよっか?」

そう言って亜夜ちゃんは倒れている一樹お兄ちゃんを指さす。

「とりあえず医務室に運ぼうか」

「そだね」

そう言っただけで運ぼうとした時亜夜ちゃんがふと思いついたように声を上げる。

「あ、そう言えばお兄ちゃん、フェイトちゃんに時間と場所って伝えたっけ？」

「え？・・・そう言えば伝えてないかも」

少しの間私達に沈黙が流れる。

「お、お兄ちゃん起きて！フェイトちゃんに時間と場所教えてないよー！」

「にゃー！起きてなの！」

そう言っただけで私達は一樹お兄ちゃんを起こすのでした。

斎藤一樹

「いちいち」

そう言いながら今だ痛む顎をさする。不意打ちで、しかも笑っている最中だったから避けられなかった。あの後気絶した俺を二人が起こして、改めてフェイトちゃんに時間と場所を教えた。フェイトちゃんも気付いてなかったみたいでそれを聞いて「そう言えば」って感じになった。その後は作戦の最終チェックに「時の庭園」の侵

入経路の確認と監視カメラのハッキング等々土郎さん達と吟味していた。それもやっと終わって今家に帰るところだ。アースラに泊ればいいという声もあったがリニスにもちゃんと報告しておきたかったので家に帰る事にしたのだ。リニスには事前に連絡してあるからもう家で待つてはるはずだ。俺はアースラの転送ポートに向かっている。

「しかし、もうすぐ無印も終了か……。助けられるかな二人を」

ふとそんな事を思う。今まで細かいイレギュラーはあったものの大きな流れは変わっていない。という事は今回も恐らく流れは変わらないはずだ。100%じゃないから油断はできないが大丈夫だと思う。最悪力技で持つていく。俺の事をばらしてでも助けてやる。ここまで来たんだ助けられませんでしたなんて事にはさせない。決意を新たに歩いていると転送ポートのあるブリッジについた。今は夜勤体制なのか人は少なく最低限の人数しかない。そこにランデイさんがいたので声をかける。

「おいつす、ランデイさん。今日は夜勤つすか？」

「やあ、一樹君。その通りだよ。明日、と言ってももう今日か、作戦前に夜勤なんてとんだ貧乏くじだよ」

「まあ、当番制つすからね。運が悪かったとしか言いようがないつすよ」

「ははは、まっただね」

「で、ちょっとお願いがあるんですけど」

「ん？なんだい？」

「転送ポート動かしてもらえないっすか？」

「別に良いけど何処に行くんだい？」

「家に帰るだけですよ」

「分かった。準備が出来たら教えてくれるかい。座標は家の前で良
いかな？」

「充分です」

会話もそこそこに俺は転送ポートに入る。

「ランディさん、Kです」

「分かった、じゃあ行くよ」

そう言つてランディさんが操作すると俺は一瞬でアースラから実家前に現れる。そこには慣れ親しんだ我が家が目の前にある。ポケットから鍵を出して鍵を開け、ゆっくりと玄関のドアを開ける。時刻は既に深夜。家族を起こさないように音を立てないようにこつそりはいって、鍵を閉めなおす。靴を脱いだらそこから自分の部屋まで飛んでいく。足音が立たないので非常に便利だ。昔では考えられない。そこから二階が上がって突きあたりの自分の部屋の前まで飛ぶ。静かに着地するとこれまたゆっくり自分の部屋のドアを開ける。ドア近くにある電気のスイッチを入れると部屋が明るく照らし出される。机があつて、本棚があつて、ベットがあつて、そして部屋の中央には自分と瓜二つの顔をした男がいた。

「なっ！！！！」

突然の事に俺は驚きの声を上げる事しかできなかった。

第四十二話（後書き）

もうすぐ無印が終わりです。いや、まさかこんなに長くなるとは思わなかった。次あたりでなのはVSフェイト第三ラウンドになるのでそれが終われば一気にプレシア戦になります。戦闘描写とか上手くかけるか分かりませんが楽しんでいただけたら幸いです。

次回も頑張りますので、誤字、脱字気になった点、感想等ありましたら教えていただけると嬉しいですよ。
ではまた次回に。

第四十三話

クロノ・ハラウン

今、ブリーフィングルームには今回作戦に参加する全員がそろっている。高町家、斎藤兄妹、ユーノ、アルフ、武装隊、これだけの人数と戦力で掛かる作戦は最近はお目にかかってない。部屋はピリピリと緊張感に包まれ、作戦前の独特の雰囲気がある。

「全員そろったかしら？」

そんな中、母さんの声が部屋に響き母さんが入ってくる。するとざわざわしていた部屋が一瞬にして静かになり、管理局組全員が立ち上がり母さんに向かって敬礼する。若干遅れて、高町家と亜夜が立ちあがってお辞儀をする。

「楽しんでもらって構わないわ」

母さんがそう言つと各自席に着く。

「それでは最終ブリーフィングを始めます。クロノ執務官お願いね」

「はい艦長、それでは今回の作戦を説明する。今回の作戦目標は、テストロッサ親子の保護、及びジュエルシードの確保になる。「カリウム」なる人物がジュエルシードを狙っていてプレシア・テストロッサを脅迫し集めさせている。その為テストロッサ親子の持つジュエルシードを確保すると同時に、二名を保護する事になる。まず作戦の第一段階として、テストロッサ側と此方側のジュエルシード全てを賭け戦闘を行う。これによって、ジュエルシードの確保と、

フエイト・テスタロッサの保護を同時に行う。しかし、ジュエルシート21個が全てそろわぬ為、高確率で「カリウム」の介入があると予測される。よって、ジュエルシートを預かるのをカズキ三等陸士が担当し、フエイト・テスタロッサとの戦闘をなのはに担当してもらおう。準備を怠る事の無いように頼む」

「了解だ（はい！）」

「ここが上手くいかなければ作戦自体が破綻する可能性がある。カズキは常に襲撃に備えてくれ。なのはは出来るだけ時間を稼いで戦闘をしてくれ」

「え？どうしてですか？」

なのはが首をかしげて聞いてくる。

「その理由は、第一段階と並行して行う作戦の第二段階、プレシアの保護の為だ。これは、僕と土郎さん達と亜夜とアルフが「時の庭園」に侵入しプレシアのいる所まで行く時間を稼いでほしいからだ。「庭園」の見取り図とアルフの案内があるといっても最短で十分、最長で十五分程掛かるとシュミレーション結果が出ている」

「庭園内部に直接転送して訳にはいかないのですか？」

武装隊の一人が聞いてくる。

「ああ、庭園内部に直接転送すると警報が作動してどんな妨害装置が出てくるか分からない。その為、「庭園」上空から通信と探知を妨害しつつ「庭園」に侵入する。侵入後も各種監視装置をジャミングしつつ進む為、進行速度が遅くなる事が予測される時間稼ぎはそ

の為にしてほしいんだ」

「はい！」

なのはが元気よく返事をする。

「最後に第三段階だが、これは状況によって場所が変わる。これは「カリウム」が襲撃してきた場所に武装隊及び他の所にいる全員を転送して「カリウム」を逮捕する。直接戦闘はカズキ三等陸士のみ許可する。他の者は遠距離からカズキを援護、それを全員で行ってくれ。絶対に近付けさせるな。しかし、それでも逮捕できるかどうか分からない程の奴だ。よって今回「カリウム」の逮捕に関しては無理をしないでくれ。出来ないと判断したら深追いはするな。増援が来るまで時間を稼いでくれ」

「ちょっと待って下さい。この戦力ですよ？それでも逮捕出来ないんですか？」

「ああ、正直戦闘能力に関しては未知数で、実力としてはカズキ三等陸士並みと思われる」

僕がそう言うと武装隊がざわつく。それもそのはず、カズキは地上本部のエース、ゼスト一等陸尉と互角なのだ。それは意外と有名で、カズキを引き抜こうとしている部署も数多くある程なのだ。ゼスト一等陸尉の魔導師ランクはS+、カズキ自身ランク試験を受けていないからランク無しだがそれと同等の実力があるという事になる。しかし「カリウム」はそれ以上の可能性があるのだ。

「よって、今回「カリウム」の逮捕に関しては絶対に無理をするな。あくまでの今回の作戦目標はジュエルシードの確保とテストロッサ

親子の保護だ、それを徹底してくれ。他に戦闘可能と思われるものを増援として送る。以上だ。何か質問は？」

「ジュエルシールドが奪われた場合は？」

「僕と土郎さんと恭也さんが突撃する。それでだめなら撤退する」

「ちょ、待ってください！「カリウム」ってやつはジュエルシールドを使ってミッドチルダを壊滅させようとしてるんですよ？それを見すみす逃がすって言うんですか！？」

「そうだ。これで駄目なら「カリウム」を逮捕する術は無い。他に出来る事はこっちの被害を最小限に抑える事だ」

「納得できません！」

武装隊の隊員が声を荒げる。それは仕方ない事だろう。武装隊も決して弱くない。部隊として動き連携を駆使すれば強いのだ。毎日こつこつこのために厳しい訓練をしている。それなのに戦う事すらできない。それは武装隊の隊員からしてみれば侮辱以外の何物でもない。

「そこまでにしなさい。事実、先ほど名前の拳がった人達以外が戦えば無駄に死傷者が増えるだけです。よってそれ以外の人が「カリウム」と交戦する事を認めません。これは艦長命令です」

「・・・了解しました」

そう言って隊員は渋々座る。納得いかないのは分かるが今回ばかりは分が悪い。相手の実力が未知数なうえ魔法による防御がほぼ無

意味になる可能性が大きいのだから。そうになると自然と「カリウム」と同等の実力者でなければ相手にすらならないだろう。

「では他に質問は無いか？」

僕はそう言っつて全員を見る。しかし質問は無いようだ。・・・と思っただが一人が手を上げる。カズキだ。

「カズキ二等陸士、何かあるのか？」

こういうとき、必ずといっていいほど変な事を言うカズキを警戒ながら質問を待つ。

「作戦はこれだけか？確かに「カリウム」は危険だが見逃すことは無いんじゃないか？」

若干肩すかしをくらった感じではあったが質問に答える。

「それはお前に期待しているからだ。正直一対一でお前が負けるとは思えない」

こんな事を言うのは癪だが、実際こいつが負ける所は想像がつかない。まあ、勝てないかも知らないがこいつは絶対に負けないのだから。

「その評価は嬉しいが、保険は掛けるべきじゃないか？」

「それなら僕達が保険になるな」

「そうか・・・」

そう言うとカズキは黙り込んでしまった。どこか何時ものカズキじゃない。なんか変だ。

「他に質問はあるか？・・・無いようなのでこれでブリーフィングは終了する」

各自が席を立ち部屋から出ていく。そんな中僕はカズキに声をかける。

「どうしたんだカズキ？らしくないな」

「・・・そうか？何時も道理だと思っぞ？」

「・・・ならいいんだが。それよりカズキ、負けるなよ」

「当たり前だ」

そう言ってカズキはコツンと拳を合わせるとブリーフィングルームから出て行った。そんな後ろ姿を見送って部屋から出るのを確認すると、

「ああ、エイミイか？実はだな・・・」

気のせいであればそれに越した事は無いと思いながらエイミイに通信するのだった。

高町なのは

そこはとある海上にあった。それは大小様々な大きさのビルが建

ち並んでいて、どこかの都市が水没したような光景だ。そこからは人の営みは感じられない。それもそのはず、これはエイミイが海上に設置した戦闘訓練用レイヤー建造物なのだから。更に、周囲には上空までもカバーするように二重結界が張られていてそう簡単には破れない。例えなのは達が全力で戦っても問題ないほどに。そんな中の一つのビルの屋上に光があった。それは桜色に光るレイジングハートだった。その場所はビルの屋上で、庭園の様になっていて様々な種類の植物が育てられている。中央には噴水があり水を噴き出している。その噴水の縁になのはは立っていた。静かに、目を瞑り、瞑想する様に。その隣には一樹の姿もある。

「ここなら良いよね。出てきてフェイトちゃん」

するとその声に反応するように後から音がした。

タツ

ゆっくりと目を開けると水面に映るフェイトちゃんが見えた。

「私はフェイトちゃんを助けない。その気持ちは今も変わらない。でもフェイトちゃんも止まれない。きっかけはこのジュエルシードだったね」

『リリース、ジュエルシード』

レイジングハートからジュエルシードが出てくる。出したジュエルシードを一樹お兄ちゃんに預ける。

「よし、フェイトも出してもらえるか？」

一樹お兄ちゃんがフェイトちゃんに聞く。

「・・・バルディッシュ」

『イエッサー』

一言フェイトちゃんが言うのとバルディッシュがジュエルシードを出して一樹お兄ちゃんに渡す。

「こつちも確認した。じゃあ最後に確認だ。ルールは非殺傷設定である事以外は自由だ。勝敗は、気絶、若しくはギブアップのみ。こつちから止めるようなことはしない。俺の立場はあくまでの立会人だ。何か質問は？」

「ありません」

フェイトちゃんが答える。

「なのはは？」

それを聞いて違和感を覚える。何だろうなんか変だ。

「・・・一樹お兄ちゃん、今日は真面目だね」

私がそう言うのと一樹お兄ちゃんはため息をつく。

「はあ、俺が真面目だとそんなに变か？クロノにも言われたぞ」

「うん、いつもの行動見るとすごく变だよ。それがなんかいつにも増して变な感じ」

「・・・即答なのかよ」

「何かあったの？」

「いや、緊張しているだけだ。それともなのは何時もどおりの俺の方がいいのか？」

「う！・・・今は真面目な方がいいかも」

「ならいいだろ。ほらフェイトが待ってるぞ。行って来い。負けるなよ」

「うん！」

そう言っつてフェイトちゃんの所に行く。

「ごめんなさい、待たせちゃって」

「別にかまわない。勝つのは私だから」

そう言っつとバルディッシュから刃が出る。

「それじゃあ始めよう・・・最初で最後の本気の勝負！」

私はレイジングハートをフェイトちゃんに向ける。一瞬だけ周りが静かになって聞こえるのは噴水の音だけ。

「ハアッ！」

フェイトがその場からジャンプして切りかかってくる。それを避けてなのは空に逃げる。フェイトが追いかけて攻撃してくるけど、なのはビルの間を縫うように飛んでフェイトの攻撃を避ける。攻撃がビルにあたって轟音が響いて土煙が上がる。

ドン！ドガン！ドガアーン！！！

『デイベイン・シューター』

「シュート！」

のはが周りに浮かべた五つのスフィアを発射する。でもそれはビルを盾にされて命中しなかった。お互い攻撃が命中する事は無く、そのまま空に上がっていく。上空では雷光色と桜色の魔力が空を彩り、より一層戦いの激しさを増していくのだった。

クロノ・ハラウン

「始まったか」

「うん」

「しかし、二人とも常識外れだな。魔力量しかり、戦闘技術しかり・
・」

「しかもなのはちゃんはまだ魔法を使い始めてまだ一ヶ月もたっていないんだからホント信じられないよ」

「全くその通りだ」

今、モニターに映し出されているのは、とても魔法を始めたばかりの素人とは思えない動きをしているのはの戦闘が映し出されている。

「でも、クロノ君良かったの？なのはちゃんにプレシアの事教えなくて、それにあの事故の事も・・・」

エイミーが表情を暗くして聞いてくる。

「遅かれ早かれ知る事になると思っけど、今知らせる必要はない。余計な事を考えて勝てる相手でもないだろうし。それよりこれからの事頼む。「時の庭園」の警備システムを何とか騙してくれ」

「了解。まあ、任せてよ」

「すまない」

そう言ってエイミーの肩をたたく。

『あゝ、これでいいのかい？クロノ君、此方の準備は整った。何時でも行けるぞ』

「分かりました土郎さん、すぐ行きます。じゃあエイミーよろしく頼む」

「はいはい」

僕は部屋を出て転送ポートのある部屋へ急いだ。

「すみません、遅れました」

「いや、構わないよ僕達はクロノ君がいないとどうしようもないからね」

士郎さんがそう言うてきた。

「あの、クロノさん。お兄ちゃん変な事してませんでしたか？」

「ああ、今のところ何もしてないで静かに戦闘を観戦してるよ」

「……ホントですか？」

「ああ、本当だよ」

「……変ですね」

「やっぱりそう思うか？」

「はい、あのお兄ちゃんが静かに観戦？変ですよ。実況の一つでもしそうなのに。ブリーフィングのときだって静かすぎです。最後に「おやつは300円までですか？」とか聞きそうなのに」

「確かにそうだね」

納得と言わんばかりにアルフが答える。

「……その光景の方がじっくりするのは何故だ？」

想像して頭を抱える。

「まあ、一樹君も緊張したんじゃないのか?」「カリウム」ってやつはかなりの強敵なんだろ?」

士郎さんがフォローを入れるが、

「無いですね」

「無いな」

「絶対無いですよ」

「あり得無いよ」

上から順に、僕、恭也さん、亜夜、アルフの順に言いきった。

「でも流石に今は確かめようがないんじゃない?」

そう言ってきたのは美由紀さんだった。

「・・・それはそうなんです」

「もし、もし仮に一樹君が別人だとすると、そんな事をする人物は一人しかいない」

「「カリウム」ですね」

「ああ、そうするとこの状況で一番危険なのはなのはとフェイトちゃんになる」

士郎さんがそう言うと部屋に沈黙が落ちる。

「まだ、そうだと決まった訳じゃないが、そうなるこっちの作戦は全て筒抜け、戦闘終了後か戦闘中か、どのタイミングでジュールシールドを持って逃げるか分からない」

「可能性が高いのは戦闘終了後か？なのはとフェイトちゃんはほとんど力は残ってないだろうし」

「クロノ君どうする？このままプレシア保護に行くか？それとも一樹を警戒するか？」

「正直俺達は一樹の事をそこまで知っている訳じゃない。この中で一番つきあいが長いのはクロノと亜夜になる。こんな事を言うのは無責任かもしれないが判断は二人に任せる。俺はそれが最善だと思うんだが、父さんはどう思う？」

「確かに無責任かもしれないけど、それが良いかもしれないな」

「ここから二手に分けるのは？」

「それはしない方が良さだろう。二手に分かれるとしたらこっちに残るのはクロノ君になりそうだ。そうなるとプレシアの保護は僕達五人になると思うが、亜夜ちゃんとアルフさんに監視装置を無力化しながら進む為の経験があるとは思えない。そして僕達三人も魔法が使われている装置を無力化は出来ない。そうなると行くか行かないかの二択になる」

そう言われ僕は考え始める。今日のカズキはどこがおかしなところは無かったか？会ってからこれまでを思い出す。言葉づかい、癖行動、どこか違和感は無かったか？そこまで考えて思いたす。カズ

キじゃないという証拠を。

「・・・じゃない」

「何だつて？」

「あれはカズキじゃない」

「何か証拠が？」

恭也さんが聞いてくる。

「まず、静かすぎるって言うのも一つです。いつものあいっなららうという時でもふざけているはずです」

「それだけか？」

「いえ、さっきなのはとの会話を聞いていましたが、いつもは「なのちゃん」と呼ぶのにさっきは「なのは」って呼んでました。そんな急に呼び方を変えるものですか？」

「いや、普通変えないだろう」

疑惑がどんどん大きくなる。

「それにあいつ「スサノオ」をつけてなかった。作戦中にも拘らさずだ」

「決まりだね！」

「ああ、あそこにいるのはカズキじゃない。「カリウム」だ！」

「それならどうする？」

「やつがジユエルシードを狙って行動を起こす瞬間、裏をかくにはその瞬間を狙うしかない」

「確かに、目標を達成した瞬間が一番無防備になるだろうな」

「そこを叩きます」

自分の掌に拳をぶつけパシンと鳴らす。

「今はそれしかないか・・・、プレシアを保護しないとここで絶対に抑えなきゃならない。「カリウム」に立ち直る隙を与える事なく一気に逮捕した方が良いだろう」

「そうだな」

「よし、じゃあ準備にかかりましょう」

そう言っつて全員が準備を始める中一人だけ動かない。亜夜だ。

「クロノさん、お兄ちゃんはどうなったのかな？」

その声は小声だったにも関わらず全員が動きを止める。みんな気にしていたが考えないようにしてただけかもしれない。よく見れば亜夜の身体は震えていて、顔色も悪くなっている。

「分からない」

僕はそう答える事しかできなかった。

「生きてますよね？」

最悪の状況が頭をよぎる。「カリウム」が変装をしてあの場にて、今だカズキからの連絡は無い。どこかに閉じ込められているのか、あるいは……。

「当たり前だ。あいつがそう簡単にやられるはずがない」

「そうですよね。大丈夫ですよね」

「亜夜ちゃん……」

美由紀さんが亜夜を優しく抱きしめる。亜夜も美由紀さんに抱きついて泣くまいと必死にこらえている。

「カズキ……無事ならさつさと連絡しろ」

僕の咳きは誰にも聞かれる事なく消えていった。

ガン、ガン、ガン、ガオン！！！！

「きゃあ！」

一発、二発、とかわすが三発目で当たってしまふ。が、レイジングハートが張ったプロテクションで弾き、撃墜は免れる。なのはは進路上にあるビルに沿って、そのままの勢いで上空へ避ける。追尾しきれなかった四発目がビルにあたって轟音を立てる。なのははそのまま180度ループと180度ロールをしてフェイトの後方をとる事に成功する。インメルマントーンが成功した瞬間だった。フェイトを捉えたなのははレイジングハートに魔力を送る。

『デイベインシューター』

それにレイジングハートが反応して、なのはの周りに5つのスフィアが浮かぶ。

「シュート！」

今度はなのはがお返しとばかりに四発の射撃魔法を発射する。フェイトの様な鋭さは無いものの、狙いは正確で、不規則な弾道を描き追尾してくる。誘導弾。なのはがフェイトの高機動戦闘に翻弄されたため、その対策として覚えた魔法の一つだ。

『サイズフォーム』

フェイトの後方から誘導弾が迫るが、フェイトはそのまま、大きく円を描く軌道を取り、バルディッシュを鎌に変形させて誘導弾をかわし、すれ違いざまに一発を斬る。

た誘導弾を再びフェイトに狙いを定めコントロールする。空中にとどまっていた誘導弾が反応しフェイトの後方から襲いかかる。しかし、フェイトはなのはの微妙な変化から何かを感じ取ったのか後ろから迫る誘導弾に気付く。

『サンダーバレット』

フェイトが左手に魔力を集め、球状に形作る。

「ファイア！」

フェイトは、それをなのはのプロテクションの上から叩きつける。プロテクションに弾かれると思われたソレは、その予想を覆しプロテクションを破りなのはに直撃する。その直後、フェイトに迫っていた誘導弾を首を左に傾げスレスレの所でかわす。

「ああああー！ー！ー！」

なのははそのまま吹き飛ばされ、後方にあつたビルを突き破り、そのまま海面に激突して大きな水しぶきを上げる。誘導弾もコントロールを失いあさつての方向に飛んでいき霧散する。あたりは、爆煙と粉塵に覆われフェイトの視界からなのはが隠れ見えなくなる。フェイトはビルの屋上の手すりに静かに降り立つと、油断なくなのはが吹き飛んだ場所を注視する。煙が徐々に晴れていくなか、煙に桜色の反射光が見えた。それを見た時フェイトの感覚が危険と警報を鳴らす。すぐにその場を離れると、次の瞬間立っていた場所が消しとんだ。

ズドオオー！ー！ー！

フェイトは崩れた体勢を整え発射された場所を警戒する。煙が晴れたそこにいたのは油断なくレイジングハートを構えているものだった。肩で息をしていて、バリアジャケットは所々汚れているものの傷ついた様子はない。

『やはり実力的には彼女の方が上です。簡単には勝てません』

「知恵と戦術はフル回転中、切り札だって用意してきた。だから後は、負けないって気持ちで向かって行くだけ！でしょ？」

『オーライマスター』

レイジングハートが光ってそれに応える。なのははフェイトに向かって行きおいよくそこから飛び立つ。空中で何度も交差して切り結ぶ。

ギャンン！！ガキン！！

そのたびに火花が散り、衝撃波が大気を震わせ、衝突の激しさを物語る。ビルの間を縫うように飛行し相手の後ろをとるために複雑な軌道を描く。魔力弾をかわす為にビルに沿って飛行すればその衝撃で窓が割れ、更に魔力弾がビルを貫き破壊する。フェイトの後ろをとったなのはが再び魔力弾を周囲に浮かべる。

「シュート！」

シュン！シュン！シュン！シュン！

フェイトに向かって飛んでいく魔力弾。フェイトはそれを上空に上げることでかわしていく。フェイトは更に高度をとり雲の中に入

る。なのはもそれを追って雲の中に入っていく。雲を抜けたそこには一面青一色の空に輝く太陽、雲を見下ろす形になり戦闘中でなければその景色を存分に味わいたいと思うほどのものだ。しかし今のなのはにその余裕はなく、必死にフェイトを追いかける。しかしそれが仇になった。フェイトがいきなり両手両足を広げ大の字になり、全身で風の抵抗を受け急激にスピードを落とす。なのはから見れば一瞬だっただろう。スピードを落としたフェイトが頭上を越え宙返りをして背後をとる。見事なクルビットを決められた次の瞬間にはフェイトからマシンガンの様に魔力弾が撃ち込まれる。

ドッ！ドッ！ドッ！ドッ！ドン！

背後から迫る弾幕を回避し再び雲の中に入る。が、フェイトはそれを先回りし、なのはの上空からバルディッシュで斬りかかる。上空から迫るフェイトに気付いたなのはは間一髪のところではレイジンググハートで斬撃を防ぐ。そのまま二人はクルクルと回転し斬りむすび、一気に上昇。螺旋を描き更に斬りむすぶ。そして、一際大きな音がして、二人が左右に弾かれる。

「はあ、はあ、はあ」

二人は睨み合いながら呼吸を整える。二人とも肩で息をしていて体力の消耗も激しい。無理もない、これだけの戦闘をして消耗しない訳がない。これだけの航空機動を行えば相当体力を持っていかれている。しかも二人はまだ小学生なのだ。発達しきつてない未熟な身体、未熟な体力では限界が来るのも早い。むしろこれだけの機動を行えること自体が異常なのだ。

「流石だね、フェイトちゃん」

「そつちこそ」

短く言葉を交わす。現状お互いに手詰まり、決定的な一撃を加えられない。

「でも、私は負けられない。母さんのために勝つんだ！」

その決意と共にフェイトは飛び出す。

(クロノ君！お父さん！まだなの！？)

戦闘を開始して15分、一向に連絡が来ないのはに焦りの色が見え始めた。

フェイト・テストロッサ

もう何度攻撃しただろうか？10や20じゃ無い、それでもなのはに決定打を与える事は出来なかった。初めて会った時とはまるで別人だ。教え方が上手い人が向こうにはいるのだろう、私の攻撃を回避して、隙あらば攻撃してくる。何度もひやりとする場面があった。

(それでも、絶対に勝つんだ！そうすればきっと昔みたいに母さんも笑ってくれる)

思いだすのは何時も優しそうに笑ってくれる母さんの笑顔。一緒にピクニックに行つて、小高い丘の木の下でお弁当を食べる。母さんの手作りでもおいしいお弁当だ。

「沢山あるから大丈夫よ、アリシア」

え？・・・アリシア？違うよ母さん・・・。

「ただいま」

目を開けた先にいたのは母さんだった。毎日仕事で遅くなって、一緒にご飯を食べようと思ってソファで母さんの似顔絵を描いてたらいつの間にか寝てしまっていた。

「ごめんね、待たせちゃったわね」

うん、そんな事ないよ。

「もう遅いから寝ましようか」

そう言って、母さんと一緒にベットに入る。私がお仕事何時まで掛かるのと聞くと、

「後一週間で全部終わるわ。そうしたら何時も一緒に居られるわ」
良かった、後一週間我慢すればいいんだ。

「そうしたら一緒に色んなところに行きましよう」

うん！いっぱい母さんと遊びたい！

「そうね、いっぱい遊びましようね」

うん、約束だよ。

「ええ、約束。じゃあ、もう寝ましようか。おやすみアリシア」

母さん？・・・違うよ私はフェイトだよ・・・。

そして一週間たったその日、何時も通りリニスと留守番していて絵を描いていると、ふと気になって窓から母さんの働いているところを見ていると、その場所が光ってその光が私のところまで来たのは覚えてる。次にみたのは母さんの泣き顔だった。母さんに聞いたら、母さん仕事場で事故があってその影響で今まで私は眠っていたって教えてくれた。でも、その日から母さんはだんだん笑わなくなっていた。何時も一緒に食べてたご飯も一人になって、勉強した時も誉めてくれなくなっていて、夜も一人で寝るようになった。それと特に魔法を始めて使った時はすぐくつらそうな顔をしていた。それから母さんと会う事自体が無くなっていった。それから、ただ母さんの期待にこたえるように頑張った。たくさん勉強もして、魔法の訓練もたくさんした。それでも誉めてくれなかったのはきつとまだ足りないからだと思った。でも、今は昔の事はどうだっていい。このジュエルシードを集めてくれば昔の母さんに戻ってくれる。昔みたいに一緒にご飯を食べて、一緒に出かけて、一緒に寝てくれる。ただ私は母さんに笑ってほしい、だからこの戦いは負けられない。だから私は勝負に出る事にする。私はさっきまで打ち合っていたのはから距離を置き向き合う。かなりの距離をとったからなのはもすぐには追ってこないで警戒している。

「これで終わりにしよう」

そう言っ私はバルディッシュを横に薙いで魔法陣を展開する。なのはの周囲にもいくつかのトラップを仕掛け、私の周りにもスフィアを浮かべる。その数は100を超え、一つのスフィアからは一秒間に3発の高速連射をして10秒間撃ちつづけ、約3000発近

い魔力弾を叩き込む大技。

フォトンランサー・ファランクスシフト

それを見てなのはが息をのむのが分かった。こっちを見て何かしようとしていたからそれをさせないために私はトラップを発動させる。

「ライトニングバインド！」

私はバインドで両手を拘束する。そして一気に魔力を解放する。

「ファランクス・・・うち砕けえー！！！」

その号令と共にスフィアから一気に魔力弾が撃ち込まれる。なのはが防御している様で、弾かれた魔力弾が周囲の建物にあたって爆発する。あっという間に爆煙と、粉塵に包まれて見えなくなる。そして最後に左手を上げ周囲に浮かべていたスフィアを纏める。それは巨大な一本の槍になって浮かび上がる。

「スパーク・・・」

そして全てのスフィアを纏めあげ槍を完成させるとそれを思いっきり投擲する。

「エンド」

ドシューーーーーン・・・・・・・・ドドドドガアーーーーン！！！！

それは周囲の建物をえぐりながらなのはのいた場所に突き刺さっ

て爆発する。放電しながら周囲のビルを纏めて吹き飛ばして、海水をどかし、海底を見せる。最後に一際大きな爆発をしてそれは終わった。正直これを耐えられたら打つ手がない。そう思いつつなのはのいた場所を見ていると、煙の中から白い影が落下していくのが見えた。なのはだ。それは、海面に激突する寸前でカズキが拾い上げる。そして、なのはをビルの屋上に寝かせてこっちに近づいてくる。

「凄い技だったな」

「い、いえそんな事は・・・」

「謙遜するな。なのはあの通り気絶したからな」

そう言つてカズキはさっきなのはを寝かせたビルの屋上を指さす。

「そ、それじゃあ・・・」

「ああ、この勝負フェイトの勝ちだ」

カズキからそう言われた瞬間、胸の奥から熱いものが込み上げて来て叫びだしてしまいそうなのを必死に隠す。けどそれはほんの僅かしか味わえなかった。なぜなら、

「しかし、ジュエルシードは渡せないな」

そんな言葉を聞いたからだ。

「・・・どうしてですか？」

「これは組織に必要なものでね。フェイトのお母さんにも回収を頼

「あ、アヤ？」

そこにはアヤがいた。アヤはカズキの方を油断なく見ている。

斎藤亜夜

「亜夜ちゃん、一樹君は一旦家に帰ったんだよね？」

美由紀さんが私に聞いてくる。私は顔を上げて美由紀さんを見る。

「うん、家に帰ってやる事があるって言ってた」

「家に連絡した？」

「うん、でも誰も出なかった」

「え〜っと念話だけ？それは？」

「駄目。何度やっても返事がないです」

「そう、じゃあ私が確かめてくる」

「え？」

「もし人質になってたりしたら厄介だし、それに私じゃ空中戦は荷が重いしね」

美由紀さんは苦笑しつつ答えてきた。

「それなら私も一緒に行きます！」

そうだ、それなら私も一緒に行った方が確実だ。

「ううん、私一人で大丈夫だよ。確認するだけだし、不味くなったら逃げるから。その代わり私の分まで頑張つて来て」

そう言つて笑いかけてくれた。

「それに、一樹君がそう簡単にやられると思つ？」

「・・・そうですね。それは無いですね」

普段ふざけていても、実力は折り紙つきのお兄ちゃんだ。そう簡単にやられる様な事は無いと思う。

「うん、じゃあ私はとりあえず家に行つてみるよ。いなかったらとりあえず手当たり次第に探してみる。あ、連絡はどうすればいいかな？」

「それだつたらこれを使つてくれ」

リンディさんに報告しに行っていたクロノさんが手ひらサイズの黒い箱の様なものを美由紀さんに渡してきた。

「通信機です。アースラとの連絡はそれでとつてください。設定もされてるから後はこのボタンを押せば直接アースラに連絡が出来ます」

そう言つてクロノ君がそのボタンを押すとウィンドウが出てきてエ

イミイさんが出た。

『クロノ君、感度はどう?』

「艦内に居るんだ、問題あったら困る」

『ははは、それもそうだね。あ、すいません。ちゃんとした自己紹介、まだでしたね。私はエイミイ・リミエッタです。よろしくお願ひします。高町美由紀さん。そのボタンを押せば私に繋がります』

「あ、はい。高町美由紀です。お願ひします」

『カズキをお願いします。あんなのでも友達だから』

笑いしながら言ってくるエイミイさん。

「僕からも頼みます」

そう言っつてクロノさんも頭を下げる

「あ、美由紀さん。とりあえず家の鍵渡しときます」

そう言っつて私は家の鍵を渡す。

「うん、じゃあ行ってきます。お父さん、恭ちゃん後よろしく」

「ああ」

「こっちは任せてくれ」

「じゃあ、転送します」

クロノさんがそう言うのと地面に魔法陣が浮かび上がり美由紀さんの姿が消える。

「後は連絡待ちか・・・」

「なのはも時間を稼いでいるが結構厳しそうだ」

そう言ってみなが見ているのはスクリーンに映っているなのちゃんの戦闘映像。どっちも一進一退の攻防だけど、余計な制限がないのちゃんにはあるから余裕がある訳でもない。

「頑張つてなのちゃん」

応援の言葉がこぼれる。みんな真剣にスクリーンを見ている。

「魔力保有量自体はなのはが上だが、戦い方はフェイトが上か・・・」

「でもなのちゃんには切り札があるんでしょ？」

「ああ、ただそれを撃つためのチャージ時間がかかり過ぎるんだ。正直スピードで翻弄するフェイトにあてる事が出来るかどうか怪しいところだ」

「そ、そんなにチャージするの？」

正直そこまでチャージしたらどんだけ強い砲撃になる事やら。

「ああ、シミュレーション上の事だから何とも言えないがまともに当たれば間違いなくKOだろう」

「いまいちぱつとしないけどそれはどれ程の威力なんだい？」

「そうですね、この世界のイメージでいうと戦略核5・5発分の威力です」

「………は？」

私達はそろってポカンとなる。因みにユーノ君とアルフさんは戦略核の威力が分からないのか、そのぐらいの威力が普通なのか、驚いている様子は無い。私は前者だったら良いなと思う事にした。

「ちょ、は？え〜〜〜！？」

「………」

私は混乱して、土郎さんと恭也さんは頭を抱えている。それはそうだろう娘、妹がそんな高威力の攻撃をする事が出来るのだから。

「クロノ君、それは君達魔導師にとっては普通の事なのかい？半径10？前後に壊滅的被害をもたらすのは？」

「……！？」

あ、ユーノ君とアルフさんが驚いた。やっぱり前者だったみたいだ。

「少なくとも普通じゃないですね。そんな事が出来るのは管理局全体で1%いるかないかです」

「そうか・・・」

それを聞いて何やら複雑な表情を浮かべる土郎さん。そして部屋に沈黙が流れる。

『あ、クロノ君！美由紀さんから連絡がきて・・・どうしたの？』

そんな中エイミーさんから連絡がきた。

「ああ、いや何でもなし。で、どうだったんだ？」

『え〜っとね、結論から言うとカズキ君は無事だったよ』

「ほ、ホントですか!？」

『うん、命には別状ないって』

「で、本人は何て言ってるんだ？」

『それがまだ起きないんだよねカズキ君』

「は？起きてない？どういう事だエイミー？」

『それがね、ぐっすりみたいだよ？何をしても起きないって美由紀さんが言ってた。しかもこの顔で』

そう言って画面に移されたのは、それはそれは幸せそうに寝ているお兄ちゃんの寝顔だった。

「「「「「」」」」」」

『一応後頭部にコブがあるから今アースラに運んで検査する予定だけど・・・聞いている』

「ああ、心配した結果がこれか・・・」

「く、クロノ!? なんか出てるよ!?!?」

クロノさんから出ている何かに脅えるユーノ君。まあ、クロノさんの気持ちも分からない訳じゃない。自分たちが心配している時にこんな顔で寝られてたら・・・ねえ。

「ちよつと起こしてくる」

そのまま部屋を出ていこうとするクロノさん。

「ちよつと!? 駄目だつて! あクロノ! あれ! あれ! あれ!」

そう言つてユーノ君が指さした先にはフェイトちゃんが大規模な魔法を使おうとしているところだった。

「ここで、勝負を決めに来たか・・・よし! こつちも仕掛けよう。なのは! 良く聞いてくれ・・・」

そう言うとなのちゃんに指示を出し始めた。その内容にビックリした。なのちゃんに一通り説明し終わつてクロノさんがみんなのところに近付いてくる。

「予想外の事が起きていますけどここが勝負どころになりそうです。

気を引き締めていきましょう。それとアヤ。」

「はい？」

いきなり呼ばれて少し声が裏返る。

「トップバッター任せた。キツイ一発を奴にお見舞いしてやれ。ジユエルシードの回収も忘れるな」

「はい！」

自然とアマテラスを握る手に力が入る。

『小娘、どう攻撃するのだ？』

アマテラスに言われて考える。威力重視だとかわされたら無意味だし、そのほかだと威力が足りないかもしれない・・・あ、そうだからで威力を底上げしよう。

「居合で行く」

『む、それだと威力不足ではないか？』

「その為の「鞘」でしょ？」

『成程、「鞘」を使うか。それならば威力の底上げも充分だろう。スピードも最速。問題無さそうだな』

「ん？鞘に何かあるのかい？」

気になったのかアルフさんが聞いてきた。

「秘密！それは見てからの楽しみ！」

「アヤ！準備はいいか！」

クロノさんがそう言うてくる。モニターを見ればなのちゃんがフェイトちゃんの攻撃を受けて落下していくところだった。

「はい！」

私は居合の構えのままその時を待つ。モニターにはフェイトちゃんに近づくカリウムの姿。

ギュウー

手に力が入って籠手から革の絞る様な音がする。カリウムがフェイトちゃんと話していると急にフェイトちゃんの首をつかみ締め上げ始めた。首に指が食い込んでいて相当な力で締められている。

「クロノさん！」

「転送！」

私の声に反応して転送する。私が出たのはカリウムの真上、手を伸ばせば頭に手が届く程の近さだ。アマテラスは左腰にさしてある。狙うはカリウムの左の首筋。柄に右手を添えて右足を踏み込む、腰の回転と共に左手で「鞘」についているトリガーを引く。

バシユン！

と空気圧によって勢いよく刀身が射出される。0の状態から一気に最大速になる。音でカリウムが気付きよけようとするけど・・・

「遅い！」

そのときすでにアマテラスはカリウムの首筋に直撃して、私は勢いを殺さずそのまま振りぬく！

ガギャンー！！

凡そ人を斬ったとは思えない音が出て、衝撃が右手を襲う。か、硬い！右手がビリビリ痺れている。もし舞蹴まいけるじゅく拾式しゅうしき號で威力を底上げしてなかったら振りぬけなかったかも。

「ゴホツ！な、何が!？」

「フェイトちゃん!？大丈夫！」

「あ、アヤ？」

フェイトちゃん咳き込みながら喉を押さえてこっちを見ている。

「亜夜!どういっつもりだ!？」

吹き飛ばされたカリウムが怒鳴る。

「何時まで変装してるつもり?カリウムさん?」

「何の事だ?俺は変装なんかしてないぞ?」

「嘘ね！もうネタは上がってるんだから！」

「なに？」

「こつ言つ事だ！」

バガン！！

今度はクロノさんが現れてカリウムを吹き飛ばす。そして吹き飛ばす。だ先には土郎さんが待ち構えている。

ギャ、ギャン！

酷い金属音がしたと思ったらまたカリウムが吹き飛ばされ、それを今度は恭也さんが打ち落とす。

バシャーーーーーン！！！！

大きな音と、水柱を立てる。

「フェイト！！！」

アルフさんがフェイトちゃんに抱きつく。

「ア、アルフ今までどこに？」

「ゴメンよフェイト、あいつに殺されそうになった所をカズキに助けられたんだ。それでそのまま管理局に保護されてたんだ」

「????」

「アルフ、それじゃあ説明が足りない。フェイトが混乱してるぞ。亜夜！何個回収出来た!？」

クロノさんが聞いてくる。

「七個です!」

「こっちは十一個か、チツ！三個回収し損ねたか！テストロッサ事情は後で説明する。今は協力してくれ!」

「は、はい」

いきなりの事でまったく事情が飲み込めてないフェイトちゃん。すると、海面からカリウムがゆっくりと海中から出てきた。

「此方に来るのはもう少し掛かると思っていたんだがな……。何処で気付いた?」

その声に背筋が凍る。お兄ちゃんの声なのにすごい冷たい声だ。怖い。ただ怖い。

「はじめからと言いたいところだけど、気付いたのはブリーフィングの後だ。何時ものカズキとは明らかに違い過ぎた。それにデバイスもつけてなかった。これがほかの人間だったら危うく気付かないままだったよ」

「そうか、私の調査不足だった訳だ」

そう言つとカリウムは首のあたりから何かバーコードの様なものをはずして、更に顎のあたりに爪を立てると何かを掴んで一気に引き上げる。するとお兄ちゃんの顔の下から、黒い覆面に、オッドアイの目が出てくる。服装も黒一色の服装に代わる。おそらくバリアジャケットだろう。

「観念しろ、「カリウム」逃げ場は無いぞ！」

そう言つと周りから「ジャキ！」と音が聞こえる。いつの間にか周囲を武装隊が囲んでいる。

「これだけの戦力で如何にかなると思っっているのか？」

カリウムと言われた男がそう言った瞬間空気が一変した。声もお兄ちゃんのものじゃ無くなって、より冷たい声になっていた。

怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、
怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、
怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、
怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、

周りを見ると他の人たちも顔色が悪い。隣にいるフェイトちゃんとアルフも震えている。ここからは少し距離があるのにも関わらずこんなに「怖い」一体これは？

「全員撃て！」

クロノさんがそう言つて指示を出して、全員が魔力弾を撃ち始める。カリウムの周囲が弾幕で埋め尽くされる。避ける隙間なんてない。けど、

ガン！ガン！ガン！

「ぐあ！」

「ガッ！」

「ぎゃ！」

驚いた事に、カリウムは弾幕を受け流し、打ち消し、かわしながらその中のいくつかを選んで蹴り、殴って弾き返して武装隊の人達にあてていた。しかも弾き返した魔力弾は明らかに威力が上がっている。

「出鱈目な奴だ！」

「誉めても手加減はしないぞ？」

「言ってる！士郎さん、恭也さん！」

「「分かった！」」

「ユーノ、アルフ！二人のサポートを！亜夜、テストロッサ、も援護を！」

「「「はい！（はいよ！）」」」

クロノさんがそう指示をどんどん出していく。それでもカリウムは落ちる事なく攻撃をかわす。私も射撃魔法で援護するけどまったく当たらないで弾かれる。クロノさんも直接攻撃を仕掛けるけどま

まったく当たらない。

「チツ！父さん！」

「任せろ！」

「チツ、厄介だな」

土郎さんと恭也さんがカリウムに向かって行った。二人がカリウムを徐々に押している。流れるようなコンビネーション。カリウムに息をつく暇を与えない。合計四本の刀が上下左右様々な角度から襲いかかってくる。凄い、魔法も使わないのにあんなに強い。二人はユーノとアルフがつくった足場を巧みに使ってカリウムを攻め続ける。

「チツ、邪魔だ！！」

ズドン！

カリウムの放った掌底はカウンター気味に土郎さんの鳩尾に決まる。重い音を立てて土郎さんが吹き飛ばされる。

「ガッ！」

「父さん！貴様！」

「クッ！」

ギャン！

金属音の様な音がしてカリウムの腕で恭也さんの斬撃が防がれる。防いだ腕のバリアジャケットは斬り裂かれているけど腕は斬る事が出来なかった。

「なっ！」

「隙あり！」

「ちい！」

バガン！

カリウムの攻撃を受けた恭也さんが吹き飛ばされる。でも防御が間に合ったみたいでダメージは無いみたいだった。しかし、信じられない。恭也さんは間違いなく手加減抜きで斬りかかったはずだ。その証拠にバリアジャケットが斬り裂かれているのだから。バリアジャケット自体かなりの防御力を持っている。なのちゃんの戦闘を見ても分かるように、ビルに叩きつけられたり、海面に叩きつけられたりしても身体にはかすり傷一つ負わないのだから。それを斬り裂いたにも関わらずその下の腕には傷一つつかなかった。私が攻撃した時の感触も異常に硬かった事から、カリウム本人の防御力自体が高い事がうかがえる。

「おいおい、腕に何か仕込んでるのか？そんな感触は無かったんだが？」

「なに、人より身体が丈夫なだけだ」

「丈夫ってだけで刀で斬れないって非常識だな」

「・・・良く言われる」

「当たり前だ！」

恭也さんは士郎さんと合流して再びカリウムに攻撃を仕掛ける。私はその攻防に加わる事は出来ない。レベルが違い過ぎる。精々出来る事といったら牽制の射撃魔法を撃つことぐらいだ。

（アヤ！）

そう考えているとクロノさんから念話 came。

（は、はい！？）

（テストロッサと協力して、カリウムの周囲にトラップバインドをしかけられるか？）

私は隣にいたフェイトちゃんを見る。すると目があった。どうやらフェイトちゃんにも説明があったようだ。

（フェイトちゃん、さっきなのちゃんに仕掛けたバインド、また仕掛けられる？）

（多分大丈夫）

（よし、じゃあ奴の後方に仕掛けてくれそこに追い込む）

（分かりました）

言い終わるとクロノさんもカリウムに向かって、士郎さんと恭也

さんに加り攻撃していく。クロノさんは杖の様なデバイスを棍の様に使って攻撃する。

「やるなークロノ君！」

「カズキの相手をしていたら自然とこうなりましたよ！」

「まあ、そうなるだろうなッ！」

三人で会話をしながら戦闘をするという非常識な光景だけど徐々に戦況が傾き始めた。少しずつだけどカリウムが押され始めている。更に、周りの武装隊からの援護も勢いがつきはじめだんだんカリウムが被弾していく。

「グッ！ええい、ちょこまかと！！！」

被弾した時にバランスを崩すカリウム。その隙を見逃す程士郎さんは甘くない。

「御神流 貫！！！」

「なっ！グハッ！」

士郎さんが放った技に、カリウムは腕をクロスして防御するけど、「貫」はその防御をすりぬけてカリウムに直撃する。今度は胸のあたりにうつすらと血がにじんでいる。防御が間に合わなかったようだ。そして、士郎さんの身体の真後ろにつけたクロノさんが士郎さんが退くと同時に魔法を放つ。

「ブレイズカノン！」

ズガアアン！

ほぼ零距离の直射砲がまともにヒットしてカリウムを後方に弾き飛ばす。そして私達の仕掛けたトラップバインドに掛かって両手両足をガツチリ拘束する。

「なっ！チツ、こんなもの！」

カリウムは抵抗してあっさり壊すが、その上から更に二重三重にグリーンとオレンジバインドが絡みつく。アルフさんとユーノ君のバインドだ。両手両足に絡みついた上その上から更にグルグル巻きにされるカリウム。あれなら見動きは取れないだろう。

「今だ！なのは！」

クロノさんがなのちゃんに合図を送る。そしてそれに答えるように上空に綺麗な桜色の魔力光が現れる。よく見るとそれは常識外れの巨大な魔法陣に魔力の塊。それを中心にリングが回る。そしてそれを更に大きくする為にレイジングハートを構えているなのちゃん。その姿は所々煤けていたり、一部穴があいてたりしてる。そう、これが私達の作戦。全員でカリウムの注意を惹きつけてなのちゃんの切り札で仕留める。

『スターライトブレイカー！』

「使いきれずにバラまいちゃった魔力を、もう一度自分のところに集める」

「集束砲撃……！」

第四十四話（後書き）

修正終わりました。ちょっと追加されてる所もあるので長くなっ
てしまいました。前のよりは読みやすくなっていると思います。．．
多分

第四十五話

高町なのは

『最高の一撃です。マスター』

「はあ、はあ、はあ、はあ・・・」

なかなか呼吸が安定しない。全身が呼吸するたびに上下する。身体が重くて今にも飛べなくなりそうな程疲れてる。それだけの砲撃だったし、レイジングハートの言うとおりの最高の一撃だと思う。その証拠に、周りにあった建物は殆ど無くなっていて、海に開いた穴に海水が流れ込んでいる。フェイトちゃんが最後の攻撃をする前いきなりクロノ君から作戦変更の連絡が来た時はもの凄く焦った。

「カリウムがカズキと入れ替わっている」

クロノ君は初めに短くそう言ってきた。

「恐らく、そっちの決着がついたらジュエルシールドを奪う為に動くはずだ。だから魔力を温存して向こうに撃墜されたと思わせるんだ」

いきなりの事で混乱したけど、混乱しなかったのはフェイトちゃんのおかげかもしれない。目の前であんな大技の準備をされたら嫌でもそっちに注意がいく。だから表情に出さずに済んだと思う。

「向こうが動いたら、こっちも全員で逮捕に向かう。総力戦だ。それとなのはは気付かれないように切り札の準備をしてくれ」

切り札、レイジングハートと一緒に訓練して身に付けた大技。ただ準備に異常なほど時間がかかる。

「その時間は僕達が稼ぐ」

それを聞いて安心する。私一人じゃ絶対にあてる事は出来ないだろうから。でも、

「一樹お兄ちゃんは？」

気になっていた事だ。入れ替わったって言う事はここにはいないって事だから……

「カズキなら無事だ。美由紀さんが確認した」

良かった、それを聞いて安心出来た。そして丁度フェイトちゃんの方も準備が出来たみたいだった。それを見て反応したらいきなり両手をバインドで拘束されてしまった。にゃ！いくらなんでもこの状態からあんなの受けたら本当に負けちゃう！

「フアラックス……うち碎けえー！！！！」

（フェイトちゃん！ちょっと待ってえー！！！！）

そんな私の心の声が聞こえるはずもなく情け容赦なく攻撃を開始するフェイトちゃん。でも間一髪のところまでプロテクションを張る事が出来た。けどそこからがとても長く感じた。絶え間なく襲う衝撃と爆音。ビシ、ビシとプロテクションにひびが入っていく。しかもバインドも解けていない。その状態で良く耐えたと思う。どの位経っただろう？攻撃がやんだ。プロテクションもヒビだらけだ。後

から思うとここで気を抜かなければ良かったと思う。ホツとした瞬間今までの比じゃない衝撃が襲ってきた。ヒビだらけのプロテクションは砕けて、続いて起こった爆発で気を失ってしまった。ただ、どこかで意識をつなぎとめていたのか、誰かに運ばれる様な感覚だけは感じた。次に目を覚ましたのはビルの上で、レイジングハートが必死に私を呼ぶ声が聞こえた。幸いな事に気を失っていたのは数分だったみたいで、カリウムさんをみんな取り囲んでいる。

（なのは！気付いたか！？）

（く、クロノ君！？）

（時間がかかるんだろ！？早く準備をしてくれ！僕達がこいつを引きつける！）

（は、はい！）

そう言つてクロノ君達がカリウムさんと戦い始めた。すごい、武装隊の人達と亜夜ちゃんとフェイトちゃんが弾幕を張つて、その中をお父さんとお兄ちゃんとクロノ君が仕掛けている。それでも互角だった。カリウムさんは弾幕を弾き返して反撃しながらお父さん達の攻撃を、避けて、受け止めて、そこからさらに反撃している。信じられない。お父さん達が強いのは知ってたけど、それ以上に強いカリウムさんを見て勝てるのかな？って考えちゃう。

『マスター』

「あ、レイジングハート・・・」

『大丈夫です。みなさんは必ず勝てます。しかしそれはマスターの』

切り札が決まってこそです』

「・・・出来るのかな？」

『出来ます。マスターとみなさんなら。あんなに訓練したのですから』

「そうだね、ありがとうレイジングハート！」

『どういたしまして』

レイジングハートに激励されて私はカリウムさんに気付かれないように空に上がっていく。そして十分な高度をとったらゆっくり、気付かれないように周囲に散らばった残留魔力を集めていく。少しづつ、少しづつ、集めていく。魔力の粒子が集まってくるのを感じる。それはだんだんと大きくなっていく。ゆっくり、ゆっくり大きくなっていく。下では、みんながカリウムさんをじりじり追いこんでいる。私は常にカリウムさんをロックして、更に魔力を集めていく。

「今だ！なのは！」

クロノ君から合図がきた。それを聞いてレイジングハートに合図する。

「行くよ！レイジングハート！」

『スターライトブレイカー』

私はそこから一気に周囲の魔力を集めていく。私と、フェイトち

な感触が綺麗に消えて、直進したのが分かった。そしてその瞬間はつきりと目にした。カリウムさんが砲撃に飲み込まれたのを。

クロノ・ハラオウン

「・・・なんつー馬鹿魔力」

そう思ったのはきつと僕だけじゃないはずだ。周囲の訓練用建造物の九割近くを破壊しただけでは飽き足らず、海に大穴をあけた。その大穴には海水が流れ込んでいたが、いましがたやっと満たされた様だ。

「・・・カリウムは生きてるのか？」

そう呟いたのは恭也さんだった。確かに、今まで非殺傷設定で攻撃されて死んだ人間はいないけど、これは「そんなの関係ないんじゃないか？」と思わずにはいられないほどの一撃だった。まあ、それはこれから確認すればいい。

「小隊長、何人が連れて確認を頼む。大丈夫だと思いが油断はするな」

「了解！第一分隊ついてこい！」

『ハッ！』

そう言っつて小隊長が三人ほど連れてカリウムが落とされた場所に行く。しかし随分武装隊もかなり落とされた。今は三分の一程しか残ってない。残りは落とされた順にアースラに転送されていった。ホントにギリギリだ。管理局だけで対応してたら間違いなくアウト

だった。しかしカズキの奴、肝心なときに役に立たないなんて・・・。あの後美由紀さんをカズキの家に向かわせた。亜夜の話だと今日は家に誰もおらず、直接行く以外確認は出来なかった。結果、カズキは無事だった。人質になっていた訳でもなく、致命傷の傷を負っていた訳でもなく、部屋で簀巻きにされ、まったく動く事が出来ないうえに薬物を使われたようでぐっすり寝ていた。その時の寝顔の画像を見たがホント腹が立つぐらいに幸せそうな寝顔だった。まあ無事だった事にホッとしたが、未だに目を覚まさないというのは腹立たしいものがある。とりあえず今はアースラの医務室に運んで美由紀さんに見てもらっている。目が覚めたらさっそく尋問・・・じや無かった事情を聴きださないといけない。と考えていた時だった。

ドパアアーーーーー！！！！

と立て続けに海中から何かが飛び出し、四つの水柱があがり周辺に水しぶきが飛び散る。反射的に飛び出た何かを見ると、それはさつきカリウムを拘束しに行った四人だった。

「なっ!?!」

一瞬何が起こったのか分からなかったが、すぐに四人の救助に向かう。全員ピクリとも動かず気を失っているようだ。やな予感が出て四人が出てきた海面を見ると、そこから腕を組んでゆっくりと出てきたカリウムの姿を確認した。そのままゆっくり上昇してきて僕の目の前に来る。カリウムのバリアジャケットはボロボロになっていて、肌も所々煤けている。覆面はとれてオッドアイのほかに金髪に整った顔の20代ぐらいの青年の顔がそこにはあった。

「やってくれたな」

「・・・まだ抵抗する気か？」

「いや、正直これ以上は殺さずに戦う自信がない」

「なに？」

その言葉に反応する恭也さん。

「だから此処は別の手段で貴様らを痛めつけようと思う」

「どついう事だ？」

「なに、簡単な事だ。見ているんだろう？プレシア」

「・・・何かしらカリウム？」

カリウムがプレシアに呼び掛けるとカリウムの前にウィンドウが現れプレシアが応える。

「ああ、大変申し訳ないのだが例の約束は御破談にさせてもらおうよ」

「そんな勝手な言い分が通ると思っているの？現にあなたはジュエルシード全てを手にしたでしょう？」

「確かにそうだな。君とフェイトの協力があつて確かに手に入れる事は出来た。まあ、取り返された上にボコボコにされて、手元には三個しか残っていないがね」

「じゃあ、交渉は成立したはずよ？あの薬を渡しなさい」

「・・・あの薬？」

やはりプレシアは何らかの取引をしていたのか？一連の会話を聞き
そう思う。

「ふ、フッフッフ、プレシア君は本当によほど切羽詰まっている様
だな。この状況ではいそうですかと本当に渡すと思っているのか？
だとしたら相当おめでたいな。冷静な状態であるならこのような事
は無かっただろうに。いいかプレシア、この交渉自体初めから対等
なものではないのだよ。君は私が持っている薬を是が非でも手に入
りたい。あらゆる病気を治し、死者すら蘇生する可能性を秘めてい
るこの薬を」

そう言うときカリウムが懐から小瓶を取り出す。

「しかし君は、フェイトという人形がいなければ何もできない身体
だ。此方がフェイトを人質に取っている以上君はジュエルシードを
渡すという選択をせざるうえない。そして此方はジュエルシードを
手に入れさえすれば君たちに用はない。まあ、お礼としてフェイト
は殺さずに生かしておくぐらいはするかも知れんがね。更に言うて
しまえば、私はジュエルシードを是が非でも手に入れたいと言う訳
でもない。あれば事は楽に進むだろうが、別段無くてもいいものだ。
まあ、此方の致命的な弱点を握っているであれば交渉ぐらいはした
かもしれんが、結果は君を殺して終わりだろうがね。早い話、こっ
ちは初めからこの薬を渡すつもりは無かったのだよ。それぐらい何
時もの君ならすぐに気付いて対策ぐらいすると思うのだがね？人形
遊びに夢中だったのかな？」

『・・・（ギリッ）』

プレシアは悔しそうに顔を歪め、噛んだ唇から血が流れる。そんな中プレシアに声をかける人物がいた。

「・・・母さん？私がないと何もできない身体ってどういう意味なの？それに、人形って？」

フェイトだった。

『・・・・・・・・』

しかしプレシアはその問いに答えない。が、

「おや？管理局の人たちは教えてくれなかったのかね？」

その問いに対してカリウムが答えはじめた。

「プレシアは病気を患っていてね。本来ならば絶対安静の身だ。もつとも現在の病気の進行状況では手の施しようがないだろうがね。そして君を人形といった理由はな、君がアリシア・テストロッサのクローンだからだよ」

「・・・アリシア・テストロッサ？」

「そう、プレシアの愛娘の名前だ。26年前、プレシアの研究していた新型の大型魔力駆動炉が暴走してね。その時に巻き込まれて死んでしまったんだ。まあ、自分で殺したようなものだ。それ以来プレシアは我が子を蘇らせようと研究を始めた。そう、人造生命の研究だ。アリシアの細胞を寸分たがわぬ入れ物にアリシアの記憶をコピーする。初めこそ成功したかに思えたが、時が経つにつれ徐々にそれは食い違ってくる。何気ないしぐさや行動、聞き腕や魔力資

質。初めこそ小さなものだったそれは、やがて大きくなりこう結論をだす。「アリシアではない」とね」

カリウムが語る内容に全員が聞き入っていた。

「そしてプレシアは決断する。多くの次元世界の中で唯一死者蘇生や時間操作の魔法があるといわれるある世界を探しだし、そこにたどり着くのだと。失われた世界「アルハザード」に。しかしそのときすでにまともに動けるような健康状態で無かったプレシアは一つの駒を用意した。アリシアの出来損ない、愛娘の搾りカス、プロジエクト「F・A・T・E」の失敗作。いや、この場合は成功なのかな？まあいい、ここまで言えば分かるかな？そう君の事だフェイト。これが君の生まれた経緯だよ」

カリウムが説明し終わると、

『……り……い』

「ん？」

『だまれええー！！』

そうプレシアが絶叫して、カリウムの上空から雷が落ちる。

「なっ！次元跳躍法！？」

ほぼノータイムで打ち出された魔法に驚愕し見る事しかできなかつた。しかしカリウムに直撃するかに思われた雷は、直前でカリウムが魔力を纏った拳で殴りつけ消滅させた。

「静かにしてもらえるかな？」

『ぐくくゴホッ！』

プレシアは咳き込みその場に座り込んでしまう

「母さん！」

フェイトがプレシアの事を心配するが、

「……う、嘘だよね。母さん？」

『……』

「プレシア、答えてやったらどうだ？」「あなたはアリシアのクロールで唯の駒」だと

「嘘だよね？嘘だって言っつてよ……」

『……』

フェイトが懇願する様に聞くがプレシアは答えない。答えられない。

「だんまりかね？まあそれでも「五月蠅い！」……む？」

「私は、あなたの言う事なんか信じない！そんなの絶対に嘘だ！」

「ふむ、まあ確かに確固たる証拠がある訳でもないからな。信じる信じないは君の自由だ。まあ、過去の資料なんぞ山ほどある。自分で調べてみればいい。さて、もういいかな。そろそろ退席するとし

「よう」

「逃げられると思っているのか？」

「勿論だ。私は君たちの事はそれなりに知っているのでね」

そう言うとかリウムは持っていた三つのジュエルシードに魔力を込め始めた。

「さて、これにこのまま魔力を込め続けるとどうなるかな？」

「やめろ！そんな事したらこの星が無くなるぞ！」

「まあ、正解だな。ただ私はこれをここで暴走させる事はしない。暴走させるのはあっちだ」

そう言うのと、手のひらに魔法陣が現れて三つのジュエルシードが消える。

「転移魔法！？貴様！何処に送った！？」

「そのぐらい管理局自慢の次元航行船なら分かるだろう？」

「チツ！エイミー！ジュエルシードの転移先は！？」

『はいはいはい！ちょっと待っててね！来た！来た！k……う、嘘、拙いよクロノ君！ジュエルシードが「時の庭園」に転移してる！』

「じゃあ、あいつが暴走させる場所って言うのは！？」

『間違いないよ「時の庭園」で暴走させる気だよ!』

「くくくくなっ!」「くくく」

「さあ、クロノと言ったかな?この状況で君ならどうする?私を逮捕して、プレシアを見殺しにするか?それともプレシアを助け私を逃がすか?どっちを選ぶ?ああ、忠告すると両方取るうとするのはやめておけ。私を捕まえる前にプレシアが死ぬぞ」

「カリウム・・・貴様!」

「さあ、悩んでいる時間は無いぞ?私か、プレシアか?民間人か、犯罪者か?どちらだ?」

『クロノ君!ジュエルシードの暴走が確認されたよ!早くしないと』

時間がない、早く決断しなければ手遅れになる。いくら「時の庭園」で暴走しているからと言ってこの世界に影響が出ない訳じゃない。それこそ巻き込んで一緒に消滅っていう可能性だってある。しかしこいつを逮捕できるチャンスがこの先あるか分からない。これほどの手練を飼っている組織がどれ程の規模なのかすら把握できていない。しかし目的ははっきりしている。どちらをとる?どっちが正解なんだ!?たった数秒がとても長く感じる。そうしていると一つ念話が飛んできた。

(クロノ!何悩んでんだ!)

「カズキ!?!」

(さっさとプレシアさんを助けに行け！)

(カリウムはどうするんだ！？)

(後で俺が何とかしてやる！あいつらの目的はミッドチルドだ！そうなるとうち本部に所属している俺とはそのうちかちあう事になる。それまでに腕を上げて必ず奴を仕留めてやる)

(しかし・・・)

(しかしも案山子ねーよ。俺も奴には借りが出来た。俺が漫画とアニメやその他もろもろを思う気持よりでっかいやつがな)

(……それは大きそうだな)

(だから安心していいぞ。かみに誓って奴を仕留めてやる)

(お前のが誓う神様ってどんな神様だ？)

(さあ？俺、無神論者だし)

(一体何に誓ったんだ！？)

(「髪」かもしれないし「紙」かもしれないぞ？俺の未来の嫁さんの名前が「香美^{かみ}」かもしれんしな)

(お前は！) まあ、いいからさっさと行け行け。因みに俺はもう向かっているぞ (んな！？)

そんな会話をしているとエイミーからすぐに連絡が来た。

『く、クロノ君！カズキ君が美由紀さんと一緒に「時の庭園」に行っちゃったよ！？カズキ君やたらとフラフラだったけど大丈夫なの？クロノが行けって言ったの一点張りだったけど・・・』

「僕はそんな事言ってない！」

『え？』

「ああもうあの馬鹿は！全員に連絡！一時アースラに撤退する。その後「時の庭園」に転移してプレシア・テストロツサならびにカズキ三等陸士、ミュキ・タカマチの救助にあたる！」

「おや？いいのか？私を逮捕できる最後のチャンスかもしれないぞ？」

「うっさい！黙ってる！僕は今すぐあの馬鹿をぶん殴らなきゃ気が済まない！」

「……………」

「邪魔だからさっさと消えろ！」

「……………ならば、そうさせてもらおう。まあ精々足掻くがいいさ。では諸君また会おう」

カリウムはそう言って転移魔法を使ってその場からいなくなった。

「エイミー、みんなの回収を頼む」

『了解、でもよかったの?』

「ああ、もしかすると見逃されたのはこっちかもしれない」

『そうなの?』

「あのまま戦ってたらジュエルシードの暴走でこっちも巻き込まれるかもしれない。結局僕達はプレシアの救助に向かうしか無かったんだよ。念のため聞くけどエイミィ、奴の転移先は?」

『駄目だった。全然転移先がつかめない』

どこか「しゅん」として答えるエイミィ。

「やっぱりか。仕方がない、この件に関してはこれで終わりだ。さっさとあの馬鹿を殴りに行く」

『クロノ君、一応助けに行くって言おうよ』

エイミィはそう言うが実際あの馬鹿と会った時殴らないでいられる自信がない。そんな事を思っていると全員の転送が終わり、最後に僕がアースラに転送された。

「艦長!状況は!?!」

「慌てないでクロノ、まだ幾分余裕があゝ時の庭園内に魔力反応確認!数は・・・10・・・20・・・まだ増えます!」・・・る訳では無さそうね」

「艦長！時の庭園の駆動炉が異常数値を示しています！」

「なんですって!?!？」

「駄目です！このままだと駆動炉も暴走してしまいます！」

『クロノ！なんか変な鎧が出てきて足止めを食らってる！俺と美由紀さんだけじゃ敵しい!！』

そんな報告が矢次に上がってくる。

「カズキ！その鎧は美由紀さんでも倒せるのか？」

『大丈夫だ。でかいやつは流石に無理だけど、人間サイズの奴なら問題ない。ただ数が多いので前に進めん!』

「お前の調子は？」

『身体が思うように動かない、よくて六割だ』

「分かった。士郎さん恭也さん行けますか？」

「勿論だ」

「問題ないよ」

「ユーノ、アルフ、アヤ二人のサポートを頼む」

「分かった」

「勿論だよ！」

「うん！」

「小隊長！武装隊は後何人残っている！」

「全員魔力が殆ど残ってない。これであの鎧を相手にはできない」

「分かった。よし、このメンバーでい「クロノ君！」・なんだなのは？」

「私とフェイトちゃんは？」

「・あれだけの戦闘をして魔力が残ってるのか？」

「「うん！」」

「.....」

『あゝ、クロノ？その目の前に居る二人のロリっ娘は規格外だぞ』

「今それを実感したところだ」

『とりあえず増援なるべく早めに頼む』

「分かった、今から行く。よし、全員転送ポ-トに！時間がない急ぐぞ！」

そして僕達は「時の庭園」に転送された。

「こっちは中心のボールを壊せばいいから簡単だけどね」

「こっちも同じなんだけど大きい分硬くって」

「何か持ってきてないの？」

「ん〜、あるにはあるけどどうも火力不足っぽいものばかりなんだよね」

「う〜ん、ここ一番で使えないね」

「事実で言い返せないのが悔しい」

一樹君はそう言いながら悔しそうな表情をする。珍しい顔を見たので思わず目を丸くしてしまう。

「どうしたの？美由紀さん？」

「え？いや、一樹君がそんな表情をするからちよつと意外だっただけだよ」

「そうですか？」

「そうだよ」

何て軽口を叩きながら増え続ける鎧を迎撃していく。流石にこれ以上はまずいと思い始めた時、

「デイバイーーンバスターー！！！」

聞きなれた声が出たと思ったら、後ろから来た桜色のビームが私の横を通り過ぎて、わき出てきている鎧を一蹴する。一気に半分以上があっさりと消え去った。その威力を目の当たりにして私の苦労はなんだっただらう？と考えるしまったのは仕方ないと思う。

「お姉ちゃん！一樹お兄ちゃん！大丈夫？」

「ありがとう、なのは」

「サンキュー！なのちゃん」

私と一樹君はなのはにお礼を言って、まだわいて出てくる鎧に向き直る。

「カズキ！」

「よっ、クロノ」

「お前と言っやつはこの大事な時にハマしてどうするんだ！」

「それに関してはすまんかった。こっちも油断してた」

「その話は後でじっくり聞かせてもらう！今はプレシアの救助が先だ」

「そうだな、亜夜、なのちゃん、フェイト。三人であのジュエルシード封印出来るか？」

「うん、三人でやれば多分出来るんじゃないかな？」

一樹の質問になのはが答える。

「そうか、・・よしクロノ俺が駆動炉に向かう。そっちはなのちゃん達とプレシアの救助を頼む」

「待て、そんな身体で大丈夫なのか？」

「ああ、戦闘はしないで突き進む。幸い駆動炉までの道のりに敵は少ないみたいだからな」

「その後はどうするんだ？」

「スサノオに任せる」

「・・・大丈夫なのか？」

「ああ、どうも駆動炉の制御プログラムがウイルスにやられたみたいなんだ。そのウイルスの削除とプログラムの復旧がスサノオは出来るみたいなんだ」

『はい、問題ありません。以前来た時に色々見ていたので』

「・・カズキの指示か？」

『はい、半分は「クソ野郎」の指示です。言われた事が終わり暇だったので他の所も見て回っていました』

「ひ、暇だったのでって・・・」

それを聞いたフェイトちゃんが脱力している。まあ、暇だからっ

て自分の家のシステムを把握されたらたまったもんじゃない。

「それじゃあ、カズキと「あゝ、いいよ一人で」しかだな」

「どうせ戦闘なんてしないで駆け抜けるんだ。一人の方が速い」

「・・・分かった。じゃあさっさと暴走止めて合流しろ」

「ああ、じゃあ行ってくる」

一樹君はそう言ってさっさと進んで行ってしまった。確かに戦闘なんかしないで進んでいくからあつという間に姿が見えなくなった。

「よし、こつちも行くぞ！亜夜、なのは、フェイトは後方で温存。

露払いは僕達でする」

クロノ君がそう指示を出し、それにしたがって私達は鎧の敵を倒し突き進んで行った。

第四十五話（後書き）

予定では後一話か二話ぐらいで無印終了です。

第四十六話

駆動炉制御室

制御室はけたたましい警報の音がそこらじゅうから流れている。駆動炉の温度、出力、圧力、等々いたるところが危険値を示している。部屋の中はそのせいで赤一色に染まっている。ランプは回転し、モニターは異常を異常や危険を示している場所が赤くなっている。それは今も増え続け今では赤くなっていないところは無い。しかしそんな部屋の中、身動きをしないでその様子をじっと見ている人影があった。このスタッフであるならばじっと見ているなんてことはせず、今頃必死になって駆動炉を正常に戻す為にあれこれ作業をするはずである。しかしその人物はそう言った事を全くせずただただじっと見つめている。その人物は全身真っ黒の服装に、金髪、サングラスをしている。そうカリウムだ。カリウムの見つめる先には、ガラス窓がある。ただ普通の窓では無くとんでもない厚さのガラスがはめ込まれた窓だ。そしてその先にはこの「時の庭園」の駆動炉が動いていた。円盤の様な部屋の中心で今も動き続けている。どの位じっとしていただろうか？しかしカリウムは一向に動く気配はない。すると、カリウムの後ろにある制御室のドアがスライドする。その時初めてカリウムが動く。動くといっても身体は正面を向いたまま首を回し後ろを確認するだけの動きだが。そして入ってきた人物を確認すると今度はその人物に向き直り声をかける。

「やっと来たか」

どうやらカリウムはその人物をこの部屋で待っていたようだ。その人物は白がメインのバリアジャケットを着ていて、周りは黒く縁取りされており、肩から腕、腰から足に向かって赤いラインが入っ

ている。頭部は赤いヘッドギアを装備されている。ミリタリー風の上着にカーゴパンツ。靴は黒のブーツを履いている。腕には黒い小手をつけていて、手は赤いグローブを付けている。そう、斎藤一樹だった。

「はあ、はあ、すみません、遅くなりました」

息を切らしつつも挨拶をする一樹。何時もの一樹を考えると、珍しい挨拶だ。普段の一樹なら初対面であれ、顔見知りであれ、上司であれ、いい加減な挨拶しかない。こんな挨拶をするのはそうしなきゃいけない事態に直面した時だけだ。

「まあ、仕方ないか。戦闘はしないとは言ってもそれなりに距離はあったしな」

「そう言っていたらけると幸いです」

「んじゃ始めるか。いくらこのまま放っておいても大丈夫だと言っても流石に警報とかがうざい」

「そうですね、うざいというのは兎も角いい加減戻しましょう」

「しかしなんだ、もう元の姿に戻ってもいいんだぞ？リニス」

「カズキさんこそ。元の格好に戻らないんですか？」

カリウムと一樹はお互いにそんな事を言い出した。

お互いに自分の姿を指摘しあう。リニスは俺のバリアジャケット姿、俺は、黒のカーゴパンツに上着、更に金髪にオッドアイという姿になっている。そう、カリウムの姿だ。

「ん、そうだった。変装解くの忘れてた」

そう言う俺はサングラスを外し、自分の顎のあたりに爪を立て、皮膚の上についている特殊素材を掴むと一気に上に持ち上げ顔からはがす。それはベリベリとはがれ、その下からは何時もの俺の顔と髪の毛が現れる。更に目からカラーコンタクトを外して何時もの黒眼に戻る。そう、実は今まで俺は「カリウム」として行動していた。リニスは「一樹」として行動していたのだ。つまり、作戦に参加していたのは本物のだったのだ！まあ、偽物になるような言動をしていたので仕方ない、と言うかばらす為の言動だったので逆にばれなかったら多少厄介になる処だった。

「ふゝ、すつきりした。リニス、スサノオ返して」

「どつぞ」

そう言うリニスはスサノオを渡してくる。俺に渡すとバリアジャケットは解け、リニスは何時もの姿に戻る。

「よう、久しぶりだな相棒」

しばらくリニスに預けていたスサノオに声をかける。

「ええ、久しぶりです《クソ野郎》。しかし、ホントにこんな作戦を実行するとは思いませんでした。本来プレシアが起こすはずの犯罪全てを肩代わりするとは。輸送船強奪・爆破（ジュエルシードを

運んでいた船)から始まり、暴行(プレシアに龍掌で攻撃)、傷害罪(土郎さん、恭也さん、管理局員に攻撃し負傷させた)、殺人未遂(フェイトの首を絞める・アルフへの攻撃)、公務執行妨害(管理局員に対する傷害等)、遺失遺産^{ロストロギア}の違法使用による次元災害未遂(現在暴走中のジユエルシード)、これだけあれば執行猶予無し、実刑で懲役三ケタは確実ですね』

「まあ、ミッドチルダの刑法だとそのくらい行きそうだな」

因みに、ミッドチルダでの刑法は日本の様に「懲役刑は最高で何年まで」というのが決まっていない。日本では有期懲役は一ヶ月から二十年まで、ただし併合罪などにより刑が加重される場合は三十年までと決まっている。しかしミッドチルダの場合はそれがない。単純にどんどんたされていく。例えば、傷害で十五年、殺人未遂で二十年、日本だと三十年以上にならないが、ミッドチルダだと三十五年になる。なのでこれだけの犯罪を犯せば簡単に三ケタの懲役刑になってしまうのだ。まあ、その代わり司法取引で減刑される事はあるけど。

『万が一捕まった時は私は関係ありませんので』

「一緒に考えたくせに何言ってるの!？」

『当然です。《クソ野郎》に「考えてくれ」と言われたら逆らえませんで』

さらりと、言い逃れに保身?をするスサノオ。しかしそれをよそにリニス慌てて聞いてきた。

「ちょ、ちょっと待ってください!輸送船って!?!そ、そんな事ま

でしてたんですか!？」

「今思えばあんときはドキドキしたな」

驚愕しているリニスをよそに当時の事を思い出してしみじみ思う。こつそりパイロットと入れ替わってスサノオのサポートで操縦したのはいい思い出である。まあ、実際は数日前の出来事なので明確に覚えていたが。

「スサノオ!？あなたは止めなかつたんですか!？」

『リニス殿、そんなつまらない事をしてどうするのですか?』

「つ、つまらないって……。何時もそういう次元で考えてるんですか!？」

『はい、私は常に私も楽しいと思える方法を選択します。それが偶々《クソ野郎》と同じなだけです』

「……性質たちが悪いですね」

『そう言わない出ください。流石に今のは冗談ですが、今回の件はまともな方法が無いのも事実なのでから』

「確かにそうですね……。ここまでする必要あつたんですか?」

『ええ、やるからには徹底してやります。それに、この件に関しては共犯です。その覚悟も実行する前に決めただけではないですか。まあ、リニス殿の場合は今回の作戦前でしたが』

「まあ、そうですね。まさか事前にそこまでしているとは思わなかったです」

「言っていないからな。反対されても困るし」

「・・・はあ」

それを聞いて盛大にため息をつくりニス。

「まあ、そういう事だ。別にいいんじゃない？今回の犯罪は存在していない「カリウム」のした事になる訳だし。俺と「カリウム」を結ぶ証拠はスサノオ位しか今んとこ残してないし。今後俺が「カリウム」にならなければめでたく時効成立するし。今は手筈道理にやる事やっちまおう。スサノオ頼む」

『了解』

そうやって俺はスサノオを制御パネルの「デバイス接続パネル」の上にセットする。

「スサノオ、どの位で終わりそうだ？」

『五分程度で終了します』

「まあ、元々こっちで暴走直前まで出力を上げるようにプログラムを調整したんだ。元に戻すのにそんな時間は掛かんねーか」

「そうですね、でもカズキさん。なのはさんのあの攻撃を受けてよく無事でしたね？」

「いやいや、無事じゃないよ！？多分内臓系に多少ダメージはあるだろうし、骨はきしむ上に肋骨は衝撃で何本か折れてるし、くらった時一瞬だけど意識飛ばされたよ。非殺傷設定なのにこれだから解除されてたら多分「ジユツ！」って感じで蒸発すると思うぞ？」

「……………え？非殺傷設定だったんですよね？」

「ああ、多分」

「……………」

「強力だったのは分かってたけどこれほどとはね。危つく作戦がおじゃんになるうえに豚箱に入れられるところだった。流石なのちゃん。轟砲ロリは伊達じゃないな」

「じつぽろり？」

「説明しよう！轟砲ロリとは凄まじい火力で爆音を轟かせ、相手を亡き者にするロリッ娘の事である！」

「……………否定できないですね」

「因みにまだ増える予定です」

「……………悪夢ですね」

「うむ、流石にもうあんな砲撃くらいたくねーからな。まあ、時間が経つとロリじゃ無くなるけどな」

「安心出来る要因がないんですが……………」

「成長してパワーアップ！テンプレだな」

「安心できませんよ!?!」

そんなコントをしているとスサノオが報告してくる。

『もう間もなく修正完了します。リニス殿、そろそろ「時の庭園」から引いてください。異常状態が解除された場合転移反応なども観測されてしまいます』

む、もうそんな時間か。

「わかった、リニス」

「分かりました。カズキさん。プレシアとフェイトをよろしくお願
いします」

「おう、ここまで来たんだ助けて見せるさ」

「期待してます」

そう言ってリニスはほほ笑むと転送魔法で転移した。

「さて、久しぶりに全力で行きますかね」

『了解。カートリッジは使用しますか?』

「うん、まだ試作品だが使ってみるか」

『了解。駆動炉のプログラム修正完了しました。駆動炉正常運転開始しました。危険値、正常値までの回復を確認。オールグリーン問題ありません』

赤一色だったモニターがグリーンに切り替わる。

「よし、じゃあ戻るぞ。クロノ！こっちは駆動炉の暴走を止めた。今から合流する！」

『分かった！すまないが急いでもらっていいか？でかくて硬いやつが出てきてちよつと厄介だ』

「でかくて、硬い・・・何それ卑猥」

『バカ言っていないでさっさと来い！！』

「了解！」

そう言っただけクロノの通信を切つて、バリアジャケット姿になるとスサノオの格納領域から一発の弾を出す。改めて見るとその大きさに呆れてしまう。なんせその大きさは牛乳瓶程のサイズなのだ。通常ライフルで使用される弾は7,62mm弾が使用される。自衛隊で使っている六二式機関銃や六四式小銃に使われている物だ。後に出てくるであろうあのちゃんのカートリッジシステムの使用弾もこのくらいの大きさか一回り小さい5,56mm弾のサイズだろう。しかし俺が持っているのはその3倍はあるつかという大きさだ。例に挙げればこれは戦闘機などに搭載されているレベルの大きさだ。もしこれを使用する銃火器を使うとなると、地面などに固定して使うもので、間違ってもマシンガンのように人間が手に持って撃てるものではない。俺はそれを腕についている籠手の内側のスリットに

入れる。すると重い音がしてスリットが閉まる。

ガシャン！

右腕の籠手のスリットが閉まり準備が終わる。

「エイミィ、クロノ達の現在地送ってくれ」

『了解！カズキ？なんかするの？』

「おう、クロノがさっさと来いって言ったから一直線に向かおうと思っただ」

『・・・程々にしないとまた怒られるよ？』

「HA！HA！HA！HA！そんな事で俺は退かぬ！媚びぬ！！省みぬ！！！！」

『はあ、まあ良いか。ん、今サノオに送ったよ。後は何かある？』

「退避勧告を頼む。新システムを使用するから加減が出来ない」

『新システム？何それ？』

「カートリッジシステム」

『え？別に新しくないよね？』

「20mm砲弾を使っって言っっても？」

そう言つて俺は使用する弾をエイミィに見せると、

『・・・・・・・・』

俺が持っている砲弾を見て沈黙するエイミィ。しかしすぐさま再起動する。

『く、クロノ君！？カズキがまた馬鹿やるから逃げて！超逃げて！』

「む？馬鹿とは失礼だな？せめて大馬鹿と言え」

『そつちの方が失礼じゃない！？』

「さてと、ちよつと遠いけどやるか」

ゴキゴキと首を鳴らして静かに構える。右半身を引き右拳を腰につけ、左腕を曲げ左拳を顔の前に持つてくる。そしてそこから深く息を吸い込みゆっくりと吐く。体内で氣を練り身体を循環させていく。更にそこから魔力を混ぜていく。氣と混ざり合つた魔力を右拳に集めていく。充分に集まつたところでカートリッジを撃発する。

ガッシャン

そして一気に膨れ上がる魔力。撃発とほぼ同時に右拳を打ち出す。打ち出す為に回転したつま先から生み出された円運動は力を蓄積しながら肉体上部へ加速し、右拳に集約された回転力は氣と魔力によつて針の様に鍛えられ、円運動から直線運動になつた際には凄まじいエネルギーへと変化しそれらと一緒に打ち出される。淡い青色をして針の様に細いそれは見た目からは考えられない様な破壊力を伴

い、大気を経由して対象に伝達させ正面の壁を破壊しながら直進する。

鍛針功

いわゆる発勁と呼ばれる技。それはそのまま突き進んで抵抗される事なくそのまま「時の庭園」の外壁をぶち抜いて外へと消えていく。途中確かな手ごたえを感じたし目標の反応も消えたのでどうやら問題無さそうだ。

「予想以上の威力だな。反動も馬鹿にならんし」

俺は鍛針功を撃った右腕を見る。右腕のバリアジャケットは肘から先が吹き飛び、籠手の部分が残っていてそこから煙が出ている。壊れた訳ではなく、どうやら加熱したのを冷却している為のようだ。更に腕は煤けていたり、赤くなって血が滲んでいたりする。二、三回手を開閉し問題が無いかを確かめる。痛みはあるがそのほかの異常は無さそうだった。俺はぶち抜いた穴からクロノ達所に合流する。

「よ、クロノ。無事か？」

「こ、このバカズキ！何て事するんだ！」

「んだよ。問題ねーだろ？方向も威力もばっちりじゃん」

「いきなりすぎるんだ！何時も何時も何時も！」

「もう慣れたろ？」

「慣れる訳ないだろ！！」

クロノといつも通りの会話をしているとなのちゃんが近付いてきた。

「一樹お兄ちゃんその手どうしたの!？」

そう言っつてなのちゃんは所々焦げたり、焼けて血が出ている俺の手を心配してきた。

「ん?ああ、ちょっとな。未完成のシステムを使ったらこうなった」

「お前は・・・、はあ」

なのちゃんに説明したらクロノに盛大にため息をつかれた。

「もういい、速いところから移動してプレシアの所に行くぞ」

「おう」

「カズキ!ちょっと待ってよ!治癒魔法ぐらいかけるって」

「ん、そうだな。治療してもらうか。それとフェイトちゃん話がある」

「・・・なんですか?」

「さっきカリウムに言われた事だ」

俺がそう言ったらみんなが反応する。

「・・・おにちゃん」

「今奴が言った事は全部本当の事だ」

「そ、そんな・・・嘘だ」

「事実だ。フェイトはアリシアのクローンだ。リニスから直接聞いてる」

それを聞いて崩れ落ちそうになるフェイト。それを見て亜夜となおのちゃんが両脇を支える。しかしフェイトはうなだれて動かない。

「カズキ！今それを言う必要は無いだろ！」

「いやある。どっちにしるプレシアさんから聞かされるんだ。そんなところでこんな状態になったら邪魔なだけだ」

「お、お兄ちゃん！」

「いくらなんでも酷いよ！！」

俺が言った事に対して非難の声を上げる亜夜となおのちゃん。その声を無視してフェイトに近付く。

「フェイトちゃん、よく聞いてくれ。確かに君はアリシアのクローンだ。だけど、それがどうしたんだ？クローンの何がいけないんだ？どこが駄目なんだ？クローンだとプレシアさんに愛されないのか？本当の親子じゃないのか？一緒に暮らせないのか？」

「・・・で、でも造り物なんだよ！？何度でも同じ物が作れちゃうんだよ！！」

フェイトちゃんが目に涙を浮かべ言ってくる。

「フェイトちゃん、それはあり得ない。例えどんなふうにも生まれても全く同じなんてあり得ない。遣伝子とかそう言ったレベルでは同じでも、その後の行動や住む場所でもいくらでも代わる事があるんだから。第一、アリシアと違うからプレシアさんはフェイトちゃんに「フェイト」って名前をつけたんだろ」

「……でも！」

「まあ、どう思うかはフェイトちゃんの自由だし、実際プレシアさんにそう思われる可能性もある。でも、プレシアさんを助けてあげられるのはフェイトちゃんだけだと思っぞ」

「……！」

その言葉に若干反応する。

「さてフェイトちゃん、今フェイトちゃんの前には二つの道がある。一つはこのまま耳と目を閉じ、口をつぐんで孤独に暮らすか、一つはプレシアさんとアリシアを助けて家族一緒に仲良く暮らすかだ」

それを聞いたフェイトちゃんが顔を上げて聞いてくる。その目には光が戻り始めていた。

「……母さんとアリシアを助けられるの？」

「アリシアの方は確約できないが手が無い訳じゃない。もっとも成功するのは神のみぞ知るって確率だけだね」

「え？でもアリシアって子は亡くなってるんだよね？」

不思議に思った美由紀さんが聞いてくる。

「うん」

「生き返せるの!？」

「運が良かったらね」

『はあ!?!』

全員が驚愕する。そりゃそうだろう。死んだ人間が生き返る何て事は普通だったらあり得ないんだから。

「さあ、どうするフェイトちゃん!君はどっちが良い!?!」

外野を無視してフェイトちゃんに聞く。

「一つ聞かせてください」

「なんぞ?」

「どうしてここまでしてくれるんですか?」

そう思つのも無理もないだろう。実際フェイトちゃんと会つてまだそんなに経ってないし、そこまで仲が良い訳でもない。

「なんだ、そんな事か。いいかプレシアさんが助かったらアリシア

も助かる。そうしたらロリなのにお姉ちゃんキャラと言う属性になる！なんせアリスアが生まれたのは26年も前だからな！そして助けた謝礼にプレシアさんに頼みこんでフェイトちゃんのシスターズをつくってもらおう！一人人ぐらい！そしてたらテスタロッサネットワークとかを使ってフェイトちゃんの魔法の演算やらプログラムやらを肩代わりしてもらって新しい魔法理論を「何処の学園都市よ！！」あべし！！」

亜夜の痛烈な突っ込みを受けて悶絶する。

「しかしだな！フェイトちゃん雷変換できるんだぞ！リアルレーलगンだぞ！」「これが私の全力だー！」って言ってくれるかもしれないんだぞ！？ここまで条件がそろってんのになんでしないんだ！」

「法律に引つかかるからだバカズキ」

力説する俺に冷静にツッコミを入れるクロノ。

「なん・・・だと！？」

「それに全力でぶっ放すのはなのちゃんだけで充分だよ！」

「亜夜ちゃん酷い！？」

「それに一人人も名前考えるの大変じゃないかな」

「「フェイトちゃん突っ込むとこそこなんだ」」

亜夜となのちゃんがため息交じりに言う。

「何時も通りの一樹君だな」

「まあ、一樹は何時も通りだった事だ」

「そうだね、いつも通りだったね」

高町の御三方もほのぼの言い放つ。

「まあ、冗談はこのへんにして」

（ ）（ ）（ ）（絶対本気だった）（ ）（ ）

一樹のセリフに全員の考えが一致した。

「フェイトちゃんを助けるのは、俺やみんながフェイトちゃんを助
けたいと思っているからだよ」

「それだけで？」

「おう、十分すぎる理由だろ。そんじゃ、今度はフェイトちゃんの
答えを聞こうか」

そう言っつて俺はフェイトちゃんを見る。するとフェイトちゃんは意
を決して俺に言っつてくる。

「お願いします。母さんとアリシアを助けてくださいー！」

「よしー！引き受けたー！」

そう言っつて俺達はプレシアさんの場所に向つ。

「所でお兄ちゃん。もしフェイトちゃんがもう一つの方を選んでたらどうしたの？」

気になったのか亜夜が聞いてくる。

「あん？決まってるじゃん。無理やり立ち直らせてプレシアさんを助けに行かせたよ。手段なんか選んでる余裕はないからな」

けけけ、と笑う俺に「はあ」と、ため息をつく亜夜だった

第四十六話（後書き）

カリウムの正体を見破った人は作者泣かせ！見破れなかつたら作者の計画通りです！W W W
エピローグをいれて後二話位か・・・？

第四十七話

プレシア・テスタロッサ

私は呆然としていた。私のいる部屋はジュエルシードの暴走の影響で崩れ始めている。天井からはパラパラと破片が落ちてきて、床には穴があき、その先は虚数空間が出てきてしまっている。私は考える。カリウムが言ったとおり普段だったら気付いていただろう。それで初めて交渉の席に着く事が出来るのだから。やっぱり自分でも焦っていたのだろう。実験の失敗、進行する病気、集まらないジュエルシード。それでいてフェイトに対する気持。アリシアでは無い人形のはずだった。体のいい駒のはずだった。しかしそこに綻びが出始めた。きつかけは恐らくカリウムの言葉だろう。それは頭の中で反響する。「フェイトはアリシアでは無い」五月蠅い！「フェイトはアリシアの妹ではないのか？」黙れ！「アリシアはどう思うだろうな？」

「だまれえー！！！！！」

そんな事はとっくに分かっていた。それでも私はアリシアに、もう一度アリシアに会いたかった。もう一度一緒に暮らして今まで一緒に居られなかった分アリシアと共に歩みたかった。ただそれだけだった。それだけだったのに……。私はアリシアが入っているポットにもたれかかる。アリシアは事故当時のまま変わらない姿でそこに居る。もう終わりだ。私に残された時間はもう残り少ない。ジュエルシード三個ではアルハザードに行く事は出来ないだろう。それでもその希望を捨てきれない。アルハザードならきっと私の願いがかなう。もう、そう思わないと私は……。フラフラとジュエルシードに近付いて行く。三つのジュエルシードは膨大な魔力を放出

していてもじゃないが今の私には封印なんて出来そうにない。でもここで更に魔力を与え暴走させれば確実に次元断層を起こす事が出来るだろう。ジユエルシードに手を伸ばし魔力を与えようとした時だった。

バガアーン

突然扉が吹き飛んで部屋の中に土煙があたりに舞う。その中から話し声が聞こえてきた。

「たつく、クロノちゃんと訓練してんのか？上から落ちてきた破片にあたって流血とか笑えないぞ？」

「・・・最近仕事が忙しくてな」

「大丈夫なのかそれ？」

「疲れてるんだ！！だいたい何で僕のところにかズキに対する苦情が僕のところに戻ってくるんだ！？」

「俺が回してるから」

「お前が元凶か！？」

「ゼスト隊長とレジアス准将じゃさばききれなくなってきたな、親友だって言ったらクロノに御鉢が回っていったって感じだな」

「お前！准将に何やらせてんだ！？だいたい何したらそんな事になるんだ！？」

「まあまあ、そんな事よりお〜いプレシアさん、助けに来たよ！」

「そんな事じゃない！重要だ！あ、おいこらカズキ！」

くだらないやり取りをしながら手を振ってくるのはこの間フェイトが連れてきた管理局員だ。

「母さん！」

フェイトが私の元に走ってくる。が、

「近寄らないで！」

そう強く言い放ち近づかせないようにする。

「何を・・・しに来たの」

「・・・あ」

「消えなさい」

突き放つようにフェイトに言う。が、フェイトは臆することなく言ってきた。何時もであれば萎縮して答える事なんて出来ないのに。

「母さんに言いたい事があってきました。・・・私はただの失敗作で偽物なのかもしれません。アリシアになれなくて期待に答えられなくて、いなくなれって言うなら遠くに行きます。だけど生み出してもらってから今までずっと、今もきつと母さんに笑ってほしい。幸せになってほしいって気持ちだけは本物です。だからもう一度始めませんか？私達はまだ始まってもないから・・・」

そう言つてフェイトが手を差し出してくる。その手を握りたくなるのを抑える。

「私の、フェイト・テストロッサの本当の気持ちです」

「ふ……くだらないわ」

私はデバイスで床を突く。そこを中心に魔法陣が展開しジュエルシードが更に魔力を放ち始める。

「ちょ！プレシアさん！？何してんの!？」

あの局員が驚くが知つた事じゃない。

『拙いよみんな急いで！庭園が崩壊する！もう時間がない!』

「了解した！急げフェイト・テストロッサ!」

「私は行くわ、アリシアと一緒に」

「……母さん」

「私はあなたを駒として、人形として使つてたのよ」

そうフェイトに向かって言い放つと床が崩れる。天井からも一際大きな塊が落ちてきて私とアリシアは虚数空間に向かって落ちていく。

「馬鹿野郎!」

「母さん！アリシア！」

フェイトが手を伸ばすけど間に合わない。私はゆっくりと落ちていく。視界に映る物がゆっくりになる不思議な感覚だった。再びフェイトを見ると今にも泣き出しそうな顔をしている。ああそつだ。アリシアと交わした約束「妹がほしい」母さんが仕事の時でも一人で留守番しなくても済むと行って、仕事を手伝えると言ってくれた。だめね、私は何時も気付くのが遅すぎる。最後にもう一度フェイトを見ようと上を向くとそこにフェイトの顔はなく、代わりにあの局員がまっすぐ私に向かって落ちてきていた。

斎藤一樹

プレシアさんがアリシアと一緒に落ちていく。すぐにフェイトが駆け寄って手を伸ばすけど届くような距離では無い。俺はバリアジヤケットを解除してすぐに走り出し、腰につけていたポーチから紐のついたカラビナを取り出し、途中土郎さんにそのカラビナを渡す。

「土郎さん命綱預かって！」

「は？ちよつと？一樹君！？」

そう言つちや否や俺は手を伸ばすフェイトの隣から虚数空間に飛び降りた。シウルシウルと音を立てて腰のポーチから紐がのびていく。

「ア~~~~イ、キャ~~~~ン、フラ~~~~イ!!!」

「~~~~なつ!!!」

「カズキ!？」

飛び降りた俺を見てみんなが驚くがそんな些細なことはほつといで、俺は魔法が使えるうちに加速してプレシアさんに向かって行く。するとすぐに魔法が使えなくなったが、その甲斐あってすぐにプレシアさんに接触する事が出来た。プレシアさんのバリアジャケットも解けてタイトスカートにワイシャツ、白衣姿戻っていた。その時のプレシアさんの驚いた顔は中タイイ顔をしていた。

「あ、あなた馬鹿なの!？ここが何処だか分かってるの!？」

「馬鹿とは失礼な!俺は大馬鹿だ!無論、虚数空間だって分かっていますよ!」

「魔法が使えないのよ!」

「知ってる!さっき使えなくなった。その前にさつさと捕まってくれ!後アリシアをキャッチしなきゃならんだ」

身体で空気抵抗を受け姿勢制御する。特にバランスが崩れる事なく何とかプレシアさんとアリシアをキャッチする。

「そろそろ衝撃来るぞ!踏ん張れ!」

プレシアさんに一方的に伝える。何か言いたそうにしていたがその前に衝撃が来た。あいにくバンジージャンプとかに使われる様な紐では無いので、伸縮性は乏しくそのまま「ピン!」と紐が張りそのまま上にバウンドする。そのまま何度かバウンドしてやっと治まる。

「クツ・・・」

「あゝ、大丈夫ですか？」

「い、一体何が？」

「ちょっと待つてください。おゝい、引き上げお願いします」

そう大声で上に叫ぶと。俺達はゆっくりうえに上がっていく。ちやんと聞こえたようだ。しかしギリギリだったな。何とか捕まえられて良かった。そう思っているとプレシアさんが腰のポーチを見ていた。

「あ、気付きました？このロープがあったから助けられたんですよ。今頃上でみんなが頑張って引き上げてますよ」

「あ、あなた正気？こんな細いロープで飛び込んでくるなんて！」

「いや、大丈夫ですよ？こう見えてもこれカーボンナノチューブ製だからよほどの事がない限りこの程度の重さじゃびくともしないですよ。まあ、備えあれば憂いなし。魔法ばっかに頼ってちゃ駄目です」

「・・・」

それを聞いて沈黙するプレシアさん。今だゆっくり引き上げられている。今回ばかりはアリサに感謝だ。自分で頼んでおいてなんだが、かなり良いもの貰ったな。誘拐された時助けた報酬で頼んだ甲斐があったというものだ。しかしアレだ、上に着くまで幾分時間がありそうなので、俺はプレシアさんと会話することにした。

「助かつちやいましたな」

「助けたのはあなたでしょ？」

「まあ、何人かに頼まりましたからな」

「そう、でも残念ね。私はそう長くないわ。例え助かったとしても管理局は今回の事で私を逮捕するのでしょ？」

「いえ、今回の事では逮捕するような罪状はないですよ？逮捕するなら違法研究方面だけだと思いますよ」

「どづいつ事？」

「どうもこうもフェイトは管理局とは敵対してないし妨害もしてない。それにアルフの証言からプレシアさんはカリウムに脅迫されてたんでしょ？全部が全部無罪になるかって言ったら分らんけど今回の件に関しては殆ど罪状はないと思いますよ」

「そう・・・、一体私は何をしていたのかしらね？アリシアを生き返らせる為に手を汚し、上手くいかないのをフェイトのせいにして八つ当たりして、手を組んだと思ってた奴には裏切られ、拳銃管理局に助けられるなんてね。まるで道化ね・・・ウツ、ゴホツ、ゴホッ！」

プレシアさんが咳き込んだと思ったら抑えた手から血が流れる。

「あゝ、その前にプレシアさんの病氣治さないと駄目か」

「ハア、ハア、・・・無駄よ、もう、治らない、所まで進行、してるわ」

息も絶え絶えに言ってくる。

「それがそうでもないんですよ」

そう言っただけはアリシアのポッドを別のワイヤーで固定して腰から下げる。そしてスサノオに呼び掛ける。

「スサノオ応答できるか？」

『・・・・・・・・』

「おい！スサノオ！」

『ザツ・・・ハイ・・・クソ・郎・聞こえ・すか。クソ野郎聞こえますか？』

「お、やっと虚数空間を抜けたか」

『はい、システム正常、診断プログラムを流した結果各部異常ありません。クソ野郎なんでしょうか？』

「おう、アレを出してくれ」

『了解。アレですね』

そう言っただけでスサノオから出てきたのは、なんというか18歳未満には見せられない本だった。

「そうそう、これこれ今晚のおかずは何にするかなって、ちげーよ！ー！プレシアさんいるのに何てもん出すんだよ！ー！」

そう言っただけ俺は本を虚数空間にぶん投げる。

『しかし、今までは例外なくこれ等でしたか？』

「頼むから状況を考えてくれ！ヴァリトラからもらったヤツだ！ー！」

なのちゃん達が聞いたら一斉に「お前が言っな！ー！」と突っ込まれるであろう台詞を言う。

『ああ、そちらでしたか。了解しました』

そう言っただけスサノオから出てきたのはあの小瓶だった。カリウム（おれ）がプレシアに見せた小瓶そのものだ。そしてそれを見たプレシアさんは本日何度目かになる驚愕した顔をする。

「あ、あなた！それは！ー！ー！まさか！ー！」

「そ、つまりはそう言う事。詳しい話は後ですから今はこれを飲んでくれませんか？」

おれはそう言っただけ小瓶から結晶を取り出しプレシアに飲ませようとするが、

「お、お願い！それをアリシアに！ー！」

涙目になってすがってきた。ちよ、危ない！

「落ちついてプレシアさん！大丈夫！あと一個だけあるから！！」

そう言っただけ俺はスサノオからもう一つ同じものを取り出す。それを見たプレシアさんは、

「あ、あなたは一体何者なの？」

「うーん、平管理局員？階級は三等陸士で首都防衛隊に所属してる、しがない局員ですが？」

なにか？と言う感じに首をかしげる。

「そのしがない局員がなんでそんな物持ってるのよ？」

「ドラゴンからのもらい物。子供助けたらくれた」

「はあ！？」

「事実なんだから仕方ないでしょ？それよりちゃっちゃんと飲んじやつてください。もうすぐ到着しそうですね。あんまし見られたくないんですよ」

そう言っただけ俺はプレシアさんに結晶を渡す。

「ホントにいいのかしら？俗な言い方だけどこれがあれば巨万の富が得られるわよ？」

「良いの良いの、元々この為にもらってきたんだから。もしかしたらまた行けば貰えるかもしれないし」

「・・・もう、どうでもよくなってきたわ」

「人間諦めが肝心って言いますよ?」

「そうする事にするわ」

そう言ってプレシアさんは結晶をのみこんだ。すると一瞬全身が光ったと思ったら光はすぐに収まった。

「どづつすか?」

「・・・とんでもないわね。身体のたるさが全くないわ。しかも内側から魔力があふれる程出てくるわ」

「マジッすか?」

「嘘なんかつかないわよ」

そう言ったプレシアさんをマジマジと見る。顔色は青白い色から血色のよくなつた肌色に戻り、こけていた頬や、クマの出来た目、やせ細っていた身体も元に戻る。更には肌のハリやツヤまで戻ったように見える。若返ったんじゃないか?コレ?流石にこれだけじゃ病気が治ったかどうか分からないけど多分まあ大丈夫だろう。

「・・・すげーな。ここまで効果があるとは。でも念のため後で検査しておいてくださいよ」

おれが呆然としていると上から声が聞こえてきた。

「母さん！アリシア！カズキ！」

フェイトだった。おそらくずっと虚数空間をみていたのだろう。今にも落ちそうな程身を乗り出している。

「ちょ、フェイト危ねえ！いったん下がれ！二人とも無事だから！」

「ホント！」

「嘘ついてどうすんだ！ホントだからさーがーれ！」

「うん！」

そう満面の笑顔で頷く。ああ、可愛いなあ。あの笑顔が見れただけでもいいかもしれん。そんなフェイトの笑顔でホッコリしていると、

「・・・いくら恩があってもフェイトはあげないわよ？」

「・・・プレシアさん、いきなり親馬鹿っすか？」

プレシアさんに突っ込みを入れつつ、俺達の方をのぞいていた美由紀さんが手を伸ばしてきたのでその手を握り引き上げられ、無事地上？に戻る事が出来た。そこには紐を引いていたであろう土郎さん、恭也さん、クロノ、アルフが固まっっていて、亜夜、なのちゃん、ユーノ、フェイトが固まっていた。おそらく亜夜となのちゃんとユーノはフェイトを支えていたのだろう。どこか疲れた表情をしている。

「母さん！」

「・・・フェイト」

フェイトがプレシアさんに駆け寄ってプレシアに抱きつく。プレシアさんもフェイトを抱きしめる。

「良かった、無事で良かった」

「ごめんなさいフェイト」

抱き合っている二人は目に涙を浮かべ強く、強く抱きしめあう。俺はそんな二人を後目にクロノに聞く。

「クロノ！疲れてるとこワリーけどジュエルシードはどうなった？」

俺はプレシアさんとアリシアを下ろすとクロノに聞く。

「まだ封印出来てない！今艦長の応援があつて何とか持ちこたえてる！しかも拙い事に今のなのは達の魔力だけじゃ足りないかもしれない！知らない！」

「マジか！？この間五つ纏めて封印したろ！」

「その時とは状況がまるで違う！三人ともあれだけの戦闘行動をした上にここまで来てるんだ！魔力が無くならない方がおかしい！」

「それもそうか・・・仕方ない、プレシアさん封印魔法出来る？」

まだフェイトを抱きしめていたプレシアさん声をかける。プレシアさんはフェイトを離し此方に向き直って答える。

「残念だけど無理ね。デバイスがないわ」

あゝ、そうだった。二人を回収するのに手いっぱいまでデバイスまで手が回らなかった。どうすっかなと頭をガシガシ

かいて考えていると、

「母さん、コレ」

フェイトちゃんがバルディッシュをプレシアさんにさしだしてきた。

「お？」

「私のバルディッシュ使って。私殆ど魔力が残ってないからこのくらしいの事しか役に立てない」

とフェイトちゃんが言うてくる。

「フェイト……」

「お願い、みんなを助けてください」

そう言つて頭を下げる。プレシアさんはそんなフェイトちゃんの頭に手を置き優しく撫でる。

「馬鹿ね、娘を助けるのだから当たり前よ」

「母さん……」

プレシアさんはそう言ってフェイトちゃんからバルディッシュを受
け取る。

「バルディッシュいいわね」

『イエス、マスター』

それにバルディッシュも応える。

「カズキ、だつたかしら？封印魔法なら問題なく使えるわよ」

そう言ってきたプレシアさんの顔はどこか晴れやかな顔をしていた。

「使い慣れてないデバイスでも大丈夫なんすか？」

「当たり前よ。伊達や酔狂で大魔導師を名乗ってる訳じゃないのよ
？」

「え？そうなんすか？俺はてつきり・・・」

「・・・いいわ、その間違つた認識を正してあげるわ」

（・・・もう始まった。お兄ちゃんのプレシアさんいじり）（ヒソヒソ

（相変わらず時と場所を選ばないね）（ヒソヒソ

（で、でも母さんなら大丈夫じゃないかな？）（ヒソヒソ

そんなふうにヒソヒソ話している三人を横眼で見ていたユーノが、

「・・・こんな状況でもそんな話をしてるんだからなのは達も相当だよね」

「「「!!!」」」

と冷静な突っ込みをいれ、その突っ込みで何かに気付く三人娘。本来であればもつと緊迫した状況で、みんなで話し合ったりして対策を立てているのが正しい形なのだろうが、そんな話をする事なく全く関係ない話をしているあたり、この三人もそれなりに染まっている証拠なのだろう。三人ともorzになっている

「ユーノ、そこは黙っていてやるのが人情ってもんだろう」

「元凶が何言ってるのさ」

「まあ、そこでへこんでいる三人はほつといて」

「え？ほつといて良いの？」

「ああ、いくらなんでもなのちゃん達に頼り過ぎだ。たまには管理おれ局たちに任せてみんしゃい。良いだろクロノ？」

「ああ、流石にこれだけ何もしてないと面目が立たないからな。今回は僕達に任せてもらおう」

「と言いつつプレシアさんに手伝ってもらおうという矛盾・・・流石に情けなくなってくるな」

「・・・言っな」

世界は、いつだってこんなはずじゃない事ばかりだよ!!と哀愁漂う男二人の背中。しかしそう言いつつも黙々と準備をしていく。

「クロノ、カートリッジシステムは積んでたっけ？」

「ああ、お前と同じ奴が積んである」

「弾は？」

「ない」

「じゃあこれ」

ほいっとカートリッジを渡す。

「……ちょっと待て、なんだこれは？」

「何って、カートリッジだが？」

「大きすぎだろ!？」

「まあ、試作品だからな。でも威力は折り紙つきだ。安全が保証できないほどに」

「……おい、まさかさっきのがそうなのか？」

「イエス!まあ、あんだけあれば三人の魔力でも封印出来んだろ」

「はあ、まあ毎度の事か」

「もう慣れたる?」

「慣れるか!?!」

「よし、じゃあいつちよやりますか! クロノ魔力が一気に跳ね上がるからマジで気をつけるよ」

「言われるまでもない」

「プレシアさん! 俺とクロノがまずぶっ放します! 弱ったところを一気にお願ひします!」

「分かったわ」

プレシアさんが了解する。俺とクロノは頷き同時に構える。すると同時に足元に魔法陣が現れる。

「カートリッジロード!?!」

ガッシャン!

やたらと重い音がしてカートリッジがロードされ薬莢が排出される。

ズン!

その音が聞こえるぐらいの魔力の増幅、一気にコントロールが難しくなる。たった一発ロードしただけでこれだ。

「こゝ、こんなに凄いのか!」

「普通のカートリッジならここまででもないんだろっけどな！」

「なんで普通のにしなかつたんだ！」

「それが斎藤家のクオリティ！」

馬鹿を言いつつ巧みに制御する。さっきは「氣」も込めたが今回は魔力だけ。恐らく「氣」を使うとジュエルシードが壊れる。そのせいで前に任務でロストログアを一個ぶっ壊したから多分「氣」を込めたら今回も同結果になるだろう。どうも「氣」と「魔力」を混ぜ合わせると破壊力が恐ろしいほど上がり非殺傷設定やら封印等の効力を無視して結果が「破壊」に繋がる傾向があるようだ。多分人に向けて撃つと非殺傷設定であっても殺せる。それに気付いたのが人に向けて撃つ前で本当に良かった。あの時書いた報告書に始末書、顛末書等々百枚近い書類は決して無駄ではなかった。

「カズキ！準備はいいのか！？」

「おう！何時でも行ける！」

クロノはS2Uを突き出した構えで、俺は中段に構え、最後にプレシアさんに確認する。

「プレシアさん！」

「何時でもいいわよ」

そこにはバルディッシュを構えた白衣姿のプレシアさんがいた。俺達と同じように魔法陣が展開されているが、制御は一流、魔力量に至っては俺とクロノを超えてしまっている。流石条件付きSSラン

同時に放つ。クロノはS2Uを突き出し、俺は拳を突き出して魔法を放つ。青の魔力光と白の魔力光が突き進みジュエルシードに突き刺さる。

「はああああー！ー！ー！！！」

すると徐々にジュエルシードの魔力放出が弱まるが、やはり封印は出来そうにない。もしできそうなら押し切ろうと思ったが現実は甘くなかったようだ。なので、

「プレシアさん！」

俺はプレシアさんに合図を送る。そこには準備万全で今か今かと待ちわびているプレシアさんの姿があった。

「スパークスマツシャー！！！」

そして放たれた封印砲は全てにおいて一流、制御も、威力も、狙いも全て完璧だ。一直線にジュエルシードに向かって伸びる紫の魔力光、そしてそれは弱まったジュエルシードに突き刺さる。その瞬間プレシアさんの砲撃を受けたジュエルシードは瞬く間に弱まってきた。魔力の放出をやめ元の状態に戻りその場に浮かび漂っていた。その状況を確認した俺は地面に降り立ちその場にどつと座り込む。

「あ~~~~、終わった~~~~！もう働かないぞ！」

流石に限界に近い。つうか自分でもよく動けたと思う。武装隊と高町家との戦闘に、SLBの直撃、更には庭園内での戦闘に、カートリッジシステムの連続使用・・・これは疲れる。改めて思い返すとよく出来たものだと感心する。しかも今まで疲れが出なかったってこ

とは、結構ハイになってた様だ。今はやたらと身体が重い。このまま寝転がって寝てしまいたい。そう思っているとな横にクロノが降りてきた。その姿は若干煤けている。特に腕のあたりが酷い。S2Uにあつては所々ヒビがはいっている。カートリッジシステムの反動だろう。

「おうクロノ、大丈夫か？」

隣に降りてきたクロノに聞く。

「・・・酷いな、ここまでダメージがあるとは思わなかった」

「まあそうだろうな。使用カートリッジはまさに規格外の大きさだからな」

「そう言うお前は問題無さそうだな？」

「ん〜、まあ計算上大丈夫なように設計されて造られてるからな。魔力だけだったら問題ないぞ。反動はかなりきついけど」

「ん？じゃあさっきの怪我は・・・」

「ああ、「氣」を混ぜた結果肘あたりまでのバリアジャケットが吹き飛んであんなった」

「・・・何と言うかその「氣」って言うのは未知数だな」

「ホントだよ全く」

そう話しているとなのちゃん達が封印したジュエルシードを持って

こっちに向かってきた。プレシアさんとフェイトもこっちに歩いて来ている。

「まあ、なにはともあれ無事に終わってよかった」

「ホントだな」

「あゝ、早く風呂に入って休みたい」

そう言っただけはその場に大の字になって後ろに倒れこむ。しかし現実には非常である。

「そう言いたいところだがまだまだやる事は山ほどあるぞ」

「何が残ってんだよ？」

いや、まあアリシアの事とかチヨイチヨイ残ってっけどさ。

「書類作成」

「ですよね」

今度こそ俺は盛大にため息をついたのだった。

第四十七話（後書き）

無印編が以外に掛かってしまった。そろそろAS編に入れそうです。

第四十八話

アースラ

そこはある種の戦場だった。様々な人が動き周り、携帯端末片手に確認したり、怒号とまではいかないが様々な声が飛び交い、さらに机に座っている人達は端末から目を離さず、一心不乱に手を動かし打ち込んでいる。端末は文字で埋め尽くされていて、それが一つの画面に複数のウィンドウが表示されていて、そのウィンドウも文字で埋め尽くされている。一体何をしているのかと言うと・・・

「おい、クロノ！プレシアさん達の被害届誰がとってるんだ？」

「今エイミィがとってる最中だ！」

「早くしてくれ、実況見分が出来ない。鑑識も待機してもらってんだから」

「僕に言うな。エイミィに言ってくれ」

「クロノ執務官、ロストロギア回収報告書です。保管簿冊の方にもサインを。後此方が輸送手続きになっています」

「これで良いか？後、輸送はアースラがそのまま輸送予定だ。手続きもそうしておいてくれ」

「了解しました。ありがとうございます」

「カズキ、なのは達から調書は取ったのか」

「今、武装隊が手分けして担当してるからそっちに聞いてくれ。それよりアルフの第一発場所と発見者どうする？知り合いただけで管理^{じょうり}局の事は知らないぞ？」

「どうにか誤魔化せないか？」

「俺が発見者って事にすれば何とかなるか？」

「じゃあ、その線でいってくれ。場所は聞いているのか？」

「いや、聞いてないからまた後日改めて聞く」

「頼む。あまり遅くなるなよ？」

「了解。あ、後こっちが事件発生報告書な？確認よろしく」

「分かった。それとカリウムの顔を見てるのはどのくらいいる？」

「ん、どうだろう？プレシアさんとアルフあたりは見てそうだけどっ」

「後で此方が撮った映像で確認を取りたいんだ」

「ん、じゃあ後で全員に聞いとく」

「頼む」

「後どのくらい残ってる？」

「次元震発生報告書、作戦結果報告書、捜査報告書、指名手配手続き、僕達の公傷手続き、現地協力者に対する各種手続き、後は……」

「こっちは、遺留品関係、虚数空間の報告書、カートリッジシステム使用のデータと報告書をまとめて父さんに送って、ついでにクロノのS2Uもか、カリウムと入れ替わった時の戦闘報告書に顛末書と始末書、後は……」

二人で指折り自分が処理する予定の書類をつらつらと上げていく。

「……やめよう。さっさと終わらせよう」

「……そうだな」

二人してため息をつき自分の仕事に戻る。それでもまだマシンな方だ。これで逮捕者がいるとなると忙しさや書類の量が共に数倍にもなる。ましてやこんな大事件の書類ともなれば広辞苑ぐらいの書類の束が幾つ出来るか分かったもんじゃない。

「なあ、クロノ。俺達は何でこんなに書類作成を強いられているんだ！」（集中線）

「それが管理局員の仕事だからだ」

「ですよね」

クロノの当たり前すぎる答えに納得せざるう得なかった。

） 数時間後 ）

「お、＼（＾Ｏ＾）／」

「カズキ、発音が変だぞ？」

「いや、ある意味正常だ。まあ、この場面で使うものでもないけどな」

「まあいい、みんなが医務室で待ってる」

「了解、さて最後の仕事だ。上手くいくかね？」

「一体何をやる気なんだ？」

「ザオラル若しくは復活の呪文」

「はあ？」

やはり通じなかった。そんなクロノのために直球でいう事にした。

「アリシアの粗製、じゃ無かった蘇生だ」

「・・・字が違つと言つのは何となくわかったが・・・ん？蘇生？」

「おう、蘇生」

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

「はあ！？」

「なんだまだ分からないのか？つまりアリシアを生き返らせるって事だ」

「さっきのを聞けば嫌でも分かる！おまえ、そんな事出来るのか！？」

「あ、いや俺がするには変わりないんだけど俺の能力とかじゃないぞ。アイテム使うからな」

「アイテム？」

「ほら士官学校の時、銀制服と一緒シルバーに海上訓練に行った時ヴァリトラの子供助けたろ」

「ああ」

「そのときヴァリトラからもらったコレを使うんだよ」

俺は懐からそれを取り出した。それは涙形でビー玉より一回り程大きい。それ自体が黄金色に淡く光っていてどこか温かみを感じる。某大冒険に出てきた神の涙みたいな感じだ。

「・・・凄いな」

「ああ、貰った時は何に使えばいいか悩んだが今まで使わなくてよかったよ」

まあ、勿論これは嘘だ。そもそもプレシアさんとアリシアの為に貰ったものだ。

「効果の方はどうなんだ？」

「ヴァリトラ曰く、言えだすと万病を治し死者すら生き返るんだって。実例がないから使ってみないと分からんだとき。まあ、万病の方はプレシアさんの病気を治したからあながち嘘でもないんだろっけど」

「さて。プレシアの病気を治した？これは何回も使えるものなのか？」

「ん？プレシアさんには飲ませたから一回きりの使い捨てだぞ？」

「じゃあ、そこにあるのは何だ？」

「二個目」

「………フー」

クロノが両目の目頭をつまみながらため息をつく。

「クロノ、ため息つき過ぎじゃね？幸せがストレスでマッハだぞ？」

「誰のせいだと思ってるんだ！」

そんなやり取りをしていると医務室に到着する。ドアの前に立つとドアがスライドして開く。そこには何時もの面子がそろっていた。

「あ、お兄ちゃん」

「……」

最初に気付いたのは亜夜だった。俺は亜夜に手を挙げ挨拶をする。それを皮切りに他のメンバーも気付く。

「お、一樹君、クロノ君、もう良いのかい？」

「はい、今仕上げないといけない物はあらかた片付きましたから」

「後は今すぐじゃ無くても大丈夫です」

士郎さんの問いかけに応える。

「しかし、面倒なもんだな。協力する際にあんなに多くの書類にサインするとは思わなかったぞ」

「まあ、今回は地球が管理外世界つてのもあるんで書類が多くなっちゃうんすよ」

守秘義務やら誓約書やら色々あるからな。

「でも亜夜ちゃんとなのははサインしてる書類が少なくなかった？」
書類の量の違いが気になったのか美由紀さんが聞いてくる。

「ああ、あれはちよくちよくアースラに来れたからだいたいサインし終わってたんですよ。士郎さんと恭也さんと美由紀さんは今回一度にそれをしたからだと思いますよ」

「そうなんだ」

「と、そう言えばなのちゃんは？それにフェイトちゃんも」

「それならあつちだよ」

そう言つて美由紀さんがさした方にはテーブルに突っ伏してる二人がいた。なのはの横にはユーノが、フェイトの横にはアルフが座っている。この二人は平然としている。

「どしたんだあの二人？」

それを見たクロノも不思議そうに聞いてくる。

「さあ？」

そんな二人に近付き声をかける。

「おう、どうしたんだ二人とも。えらく疲れてるみたいだけど？」

「あ、一樹お兄ちゃん」

「カズキさん・・・」

「ユーノ二人はどうしたんだ？」

平然としているユーノに聞く。

「二人ともどうも調書が取り調べみたいだったから疲れたみたい。悪い事してないのに色々聞かれるから」

「「あゝ」」

そこで俺とクロノは納得した。調書なんかは結構根掘り葉掘り聞くからそう思っても仕方ないか。例えば単に「人を殴った」という文章ではなく、「右手で拳をつくって、正面に立っていた人の左頬を右腕をまっすぐ伸ばして殴りました」となったりする。これはどういふふうに殴ったかを明確にするためなので仕方ないのだが、今回の事をそんな調子で聞かれたらそりゃあ疲れもする。

「まあ、アレだなのちゃん・・・かつ井食うか？」

「食べないよ！ていうかそれじゃまるつきり取り調べを受ける犯人だよ！？」

「あ、因みにかつ井を頼んだ場合は自腹になるので」

「。。。え！？」「。。。」

ちょっと待て、驚く人が多すぎだろ。

「え、あれって警察の人の奢りじゃないの！？」

「いいえ、アレは基本的に本人が食べたいから警察の人に電話してもらって注文してもらうのです。なので自腹なのです」

「え〜そうなの？」

「何故亜夜は残念がるんだ？」

「だって、前に再放送の警察もののドラマで、かつ井を泣きながら食べてたシーンとかあってジーンときた感動が今のを聞いて台無し

になっちゃったよ」

それを聞いて高町一家がそろってウンウンと頷く。

「でもお兄ちゃんよくそんなこと知ってるね？管理局がそうでも警察が同じだとは限らないのに・・・」

「だってそりゃあ・・・母さんから聞いたからな」

あぶねえ、流石に警察官時代の経験とは言えない。母さんが警察官で助かった！

「あゝあ、知らなければよかったな」

亜夜がそう言っている横で、

「二人とも今の分かったか？」

「全然」

クロノの問いにユーノとフェイトがそう答える。蚊帳の外のミッド組であった。

「それはそうと、プレシアさんは何処？」

「あ、母さんならまだ隣の部屋です」

隣と言うと手術室だ。アースラには大規模なものは無理だが簡易的な手術が出来る設備が整っている。まあ、そこに運んでポッドから出しておいてくれと頼んだんだが。

「あれ？まだ準備出来てなかった？」

「いえ、出来ているんですけど・・・」

「うん、実際に見るとやっぱりね・・・」

む、どうやら直接見たことでまた色々ぶり返したみたいだな。

「ん、じゃあ準備は出来てるんだな？」

「は、はいでもまだそっとしておいてあげ「その必要はない」え！
？」

フェイトちゃんの手を途中で遮る。

「何だっけ辛い時間を長くしなきゃならんのだ」

「え？」

「もしかしたらまた一緒に暮らす事が出来るかもしれないんだ。そ
うちの時間を長くするべきだよ」

ドヤァ！とフェイトちゃんに言う。

「え？それはどういっ？」

「上手くいけばアリシアが生き返るって事だ」

「え？」

「「「えー！ー！！！」」」

期待道理に驚く子ども組。

「医務室ではお静かに！」

「驚かせた本人が言っていていいセリフじゃないぞ」

「まあ、そう言いなさんなクロノ。じゃ、俺はプレシアさんの所に行ってくるから」

シユタ！と手を挙げ医務室を逃げるように出ていく。とはいっても目的地は隣なので数秒で到着。ドアの前に立つと医務室と同じようにスライドして開く。そして医療器具等が置いてある部屋を通って手術室に入る。そこは日本の病院の手術室と殆ど変わらない部屋だった。中央にベットがありそのベットの上には大きな円形の照明装置が付いている。そして、ベットの横に無言で立ち尽くすプレシアさんとベットに横たわるアリシア。アリシアには手術着の様なものが着せられている。俺はそんなプレシアさんの正面に立つとアリシアの首に手をあてる。当然脈はなく冷たくなっている。顔は蒼白、髪の毛はポットから出して間もないのかまだ少し湿っている。苦しんだような顔でもなく本当に眠ったような死に顔だった。

「・・・良く笑う子だったわ」

訥々と語り始めるプレシアさん。

「一緒にピクニックに行った時私に花飾りをつくって嬉しそうに笑ってくれたわ。仕事が遅くなって帰って来ても私を待っていて「お

「帰りなさい」って笑顔で迎えてくれた。その笑顔がどれだけ私の支えになったか……」

「……」

「またこの子と一緒に暮らしたい、またあの笑顔が見たい一心で違法な研究にも手を出した」

「その結果フェイトが生まれた」

「ええ、でも思い知らされたわ。どんなに姿かたちを似せてもアリシアは一人だけ、フェイトはフェイトだったわ。どんなにフェイトが笑ってもアリシアの笑顔では無かったわ。今思えば当然なのだけれどね。フェイトの笑顔はフェイトだけの笑顔なのだから。でもあの時の私はそんな事にも気付かない程に追い詰められていたみたいね」

「それでフェイトに八つ当たり？」

「全く駄目な親ね。自分の失敗を娘のせいにするなんて」

「ちがいない」

クククと笑う。

「貴方達と出会って目が覚めた気分よ。改めて言うわ。ありがとう」

「うんにゃ、俺はリニスとフェイトに頼まれたからしただけっすよ。何とかかなりそうなアイテムも丁度持ってたし」

「そう、リニスは元気かしら？あの子にも随分ひどい事をしたから謝らないと」

「そうっすね。絶対謝った方がいいっすよ。俺が助けてからずっとプレシアさんの事心配してましたから」

「本当に色んな人に心配させたのね」

「そうです。だからこれからはちゃんと助けられるようになってください」

「肝に銘じておくわ」

「絶対ですよ？」

「ええ、大丈夫よ」

「さて、そろそろ始めますかね。プレシアさん」

「ええ、分かってるわ。失敗しようとして成功しようとしてフェイトは私の娘よ。今までの酷い事した分その何倍も愛する事を誓っわ」

「ん、それじゃ始めます」

そう言つと俺はまず、

1、アリシアの上半身を起こす。

2、口を開ける。

3、龍の涙をアリシアの口にシユウウ　　ツツ！！超！エキサイ
ティン！！

しかしプレシアさんの時の様な変化はなく何も起きない。駄目だったかと諦めかけたその時、アリシアの身体が光り始める。プレシアさんの時は一瞬だったけどアリシアはまだ光っている。不思議な光だった。眩しい程の光なのにアリシアの事はつきり確認できる。眩しいが目を閉じる必要を感じない。ただただ不思議な光だった。そしてしばらくすると光も引いていき、何時もの手術室に戻った。それを見てプレシアさんがアリシアに呼びかける。

「アリシア？」

「.....」

しかしアリシアからの返事はなかった。諦めず再度声をかける。

「アリシア」

「.....ん」

その声に反応したのか微かに声をあげる。良く見るとアリシアの顔が蒼白から血の通った肌の色に戻っている。それを見た俺は初めてしたように首筋に手をあてる。すると、

トクン、トクン、

と指先に微かな振動が伝わってきた。それを確認したのと同時に手術室のドアが開きフェイトが駆け込んで来た。

「カズキさん！さっきアリシアがすごく光ってたけど！一体何が？」

どうやら手術室をモニターでのぞいていた様だ。別に立ち入り禁止にはしてなかったんだがなあ。そしてまだ心配そうにこつちを見ているフェイトに親指を立ててサムズアップする。するとそれで悟ったのかすぐ笑顔になる。するとフェイトはまだアリシアを呼ぶプレシアさんに優しく声をかける。

「母さん、大丈夫だよ」

それを聞いたプレシアさんは一度離れ首に手をあてたままの俺を見てくる。

「大丈夫です。成功しました」

俺はそう答える。そしてプレシアさんはもう一度アリシアに声をかけた。

「アリシア」

するとアリシアの目がゆっくりと開き、

「う、うん・・・ママ？どうしたの？」

そう聞いてきた。プレシアはアリシアを抱きしめて

「何でもない、何でもないわ」

そう言いながら泣き続けたのだった。

第四十八話（後書き）

ふう、これで無印は終了予定です。次に書くのは多分エピローグ的な何かだと思います・・・たぶん。

第四十九話

斎藤一樹

単刀直入に言おう。仕事が増えた。

「どうしてこうなった？」

「事前の調整も無しに人一人生き返らせるからだ！」

「サプライズって大事だと思うんだ」

「ああ、ビックリしたよ！ついでに言えば母さんの鬼の様な形相をみて更にビックリだよ！！」

「ああうん、ゴメン。あれには俺もビビったわ」

俺の呟きに対しクロノが突っ込む。そしてその時の状況を思い出して反省する。だが後悔は・・・今回は少ししたかも。事前の打ち合わせは大事だよ。アリシアを蘇生させた後リンディさんに連絡を入れ、医務室まで来てもらい事情説明。そしてその結果、アリシアの蘇生方法をどうするかでもめた。

「あゝ、馬鹿正直に「龍の涙」で蘇生って書いたら拙いっすよね」

「当たり前です！唯でさえ近年ウォーターゴンの個体数が減少傾向で準絶滅危惧種に指定されているのに、こんな情報が出たらあつという間に絶滅するわよ！？」

そりゃそうだろう。なんせ万病を治し人を生き返らせる程のものだ。それこそ全財産をなげうつてでもほしい人間は腐るほどいるだろうし、そんなものを作り出せるウォータードラゴンが密漁者どもから乱獲されないはずがない。仮に造り出せるのがヴァリトラだけであるとしても、それを欲しがる連中が「ハイそうですか」といつてそれを信じる訳がないし、ヴァリトラが密漁者の卑怯で下劣で陰湿な攻撃から身を守る保証はどこにもない。因みにウォータードラゴンは比較的温和な性格で、好奇心が強く人懐っこい性格なのだ。なので生息域に行くと船に近寄ってくるため比較的高い確率で見ることが出来る。まあ、船が小さいとすり寄られて沈没する時があるのだが。しかしその性格が仇となり、密漁者に乱獲され個体数が激減してしまった。やはり高価なのだドラゴンの素材は。骨や肉、皮等余す事無く加工する事ができる。高級ブランド等にも龍革の製品があり、初めてみた時は店の前で大爆笑し、本物だと知った時の衝撃は今でも忘れる事が出来ない良い思い出もある。

「ですよね……マジでどうしよう」

流石に恩をあだで返すのは信条に反するのでそれは絶対にしたくない。

「ハッ！虚数空間の不思議パワーで生き返ったとか！」

「いや、虚数空間はどちらかと言うと命を吸い取りそうだけど？」

「……却下だな」

代案を出すもユーノの意見であっさり撃墜。

「元々、意識不明って事には出来ないの？」

これは美由紀さんだ。

「それも無理だろうな。意識不明でも生きていれば成長はする。髪も伸びれば背も伸びる。確か26年だったか？その間意識不明で子供の姿じゃ厳しいだろう」

「更に言えばアリシアの死亡診断書も出てるんだよね・・・ほら」

士郎さんが欠点を挙げ、エイミーが止めをさす。エイミーが出した画面にはヒュードラの暴走事故の際の関係書類が出され、そのうちの一つにアリシアの死亡診断書があった。よって元々生きていたと言っているのは却下。

「俺の「氣」の不思議パワーで生き返ったとか？」

「その場合高確率で一樹がどっかの研究所で実験体になるんじゃないか？」
モルモット

「良いんじゃないかそれで」

「ク、クロノ君!？」

「・・・ド却下で」

恭也さんの物騒な発言で却下。しかしクロノ、真顔で肯定するな。地味なのちゃんが驚いとる。その様子を見てリンディさんが動く。

「ふう・・・クロノ、最後に暴走していたジュエルシードの数は幾つだったかしら？」

「三つですね」

「仕方ないわね、その三つのジュエルシードでアリシアさんが偶然蘇生した事にしましょう。ジュエルシードはその時に砕け散ったが妥当かしら？」

リンディさんが新たに提案してくる。

「そうするとそのジュエルシードはどうするんですか？」

「今の所それが問題ね。下手に捨てようものならどこかで必ず発動するでしょうし、預けるにしてもこれほどのものを預けるとなるとちょっとね……」

流石のリンディさんでもロストロギアを管理保管出来る人の心当たりはないようだ。となると父さんも無理ってことか。そしたら駄目もとで言ってみるか。今後使う可能性があるし。

「艦長、それ俺が預かっちゃ駄目ですか？」

「カズキ？」

何時もと違う様子の俺を不思議そうに見るクロノ。

「元はと言えば俺の責任です。俺が責任を持って預かります」

リンディさんがじっと見てくる。俺もじっと艦長を見る。こういう場合目をそらしたらいかんと某大正桜に浪漫ろまんの嵐なゲームに出てきた。しばらくならみ合い？が続くとリンディさんが視線を外す。

「良いでしょう。このジュエルシード三つに関してはカズキ三等陸士に一任します」

「母s、艦長！良いんですか!？」

「ええ、構わないわ。珍しく真剣な目をしてたから。碌でもない事には使わないでしょう」

「艦長……」

「ありがとうございます」

まあ、碌でもない事には使わないよ……たぶん、恐らく、きっと、そんな事を考えていると、

「話は変わるけどカズキ三等陸士、書類は仕上がったのかしら？」

「っこりほほ笑むリンディさん。」

「はい、あらかた提出しましたが？」

「そうですね、一連の書類は提出し終わって今私のところまで来ています」

「？」

それが分かかっていて何故その事を聞いてくる？

「私もだいたい確認が終わって、後は本局の方に送るだけだったか

ら、失った脳の糖分を補給するために、楽しみにしていた「翠屋」のシュークリームを食べようとした所で貴方に呼び出されたのよ」「それを聞いてサーと青ざめる。隣のクロノを見ると同じように青ざめている。

(さ、最悪だ！最悪のタイミングで連絡しちゃった！！)

「そしたらこの状態、これは書類を差し戻して訂正して、そしてまたあの膨大な量の書類を確認しなきゃいけない訳よね？あらあら、カズキ三等陸士は私の一時の楽しみを奪ったうえに、あまつさえ同じ事をもう一度やらせようとしている訳よね？」

凄まじくイイ笑顔で俺に迫ってくるリンディさん。そのプレッシャーに耐えきれずクロノに助けを求めるが、

「く、クロノ！お前からmっついていねえ！？つか誰ひとりいねえ！」

さっきまであんなにゴチャゴチャしていた医務室はいつの間にか俺とリンディさんの二人だけになっていた。状況が状況ならドキドキものかもしれないが、今のリンディさんからはそんな感じは一切感じれず、むしろ怒気怒気である。

「覚悟はいいかしらカズキ三等陸士？」

「・・・＼(＾o＾)／」

その後、正座でみっちり説教をされ、例の訓練プログラムをやらされた後、亜夜、なのちゃん、フェイト、対俺の3対1の模擬戦でボ

ツコボコにされた。最後に翠屋ケーキ食べ放題（代金俺持ち）を約束させられた。その時何故かリンディさんだけでなく、あの場にいた全員（高町家を除く）にも奢る羽目になった。逃げたくせに、逃げたくせに、逃げたくせに！まあ、それはそれで構わないんだけどね。しばらく書類整理をしていてふと思いついた事があった。

「そう言えばプレシアさんはどうなる？」

気になったのでクロノに聞いてみる。

「ああ、今回の件では特に犯罪行為もしていないし立場的には被害者だ。ただ、やはり違法研究の件に関してはどうにもできない」

「やっぱり？」

「ああ、流石にこればかりはな」

「何とかならないか？」

「まあ、例によって司法取引でかなり軽減されるだろうけどな。プレシアの能力なら問題ないだろう」

「条件付きSSだっけか？」

「ああ、管理局くわんりょくとしてはのどから手が出る程欲しい人材だ」

「まあ、そんな人材を放っておくほど管理局に余裕もないか」

「情けない話だけだな」

「人材で思い出したがあの三人、亜夜となのちゃんとフェイトはどうすんだ？」

「管理局くわんりょくが放はなつておくとも？」

「そうなるよな。つつか俺が昔言った事覚えてつか？」

「ああ、覚えてるよ。僕だってそんな危険な所に送るつもりはさらさらない。もし三人が入隊する事になってもしばらくはアースラで預かるように進言する。幸い母さんも人事部に伝手があるからな」

「それは良いけど、さりげなく強力な戦力を三人も確保しようとするな別にアースラじゃなくて俺と同じでも良いだろうが」

「カズキ、それ本気で言ってるのか？お前この事件の前何してた？ククロノが呆れた顔して聞いてきた。」

「確か偶然居合わせた不正取引の現場でドンパチしてた」

「その前は？」

「最近新しく出来た密売ルートを探るのに、組織のアジトに潜入した」

「その前は？」

「確か、人質救出の緊急出動だったと思う」

「因みにその任務全般がランクA以上じゃないと担当出来ないし、

解決できないと判断されてる危険なものだぞ？」

「・・・なん・・・だと!？」

その時俺に電流走る。

「ちょっと待て！俺まだ魔導師ランク無いぞ!？」

「・・・なんだって?」

「まだ受けてねーぞ?魔導師ランクの試験」

「年二回あるだろ!？」

「学校優先じゃボケ!」

「じゃあ今までどうしてたんだ!」

そう言われて考える。ちよろちよると思い当たる事がある。

「多分ゼストさんとレジアスのおっさんあたりが調整してたんだと思う。俺がいるときって必ず部隊の一人が後方待機になるから。突発で緊急出勤した場合はゼストさんと合流してサクツと片付けるけど・・・そついや最近やたら偶然に犯罪現場に居合わせるような気がする」

「・・・身代りか、若しくは・・・カズキお前自分のランク確認できるか?」

「・・・端末からアクセスすれば見れるけど・・・」

クロノの言わんとしている事が分かってしまった。恐る恐る自分の履歴を確認する。俺の魔導師ランクの欄には、

魔導師ランク A(仮)

と入力されていた。

「何時の間に……つうか「カツコ仮」って何だ!!」

「現場昇進だな。恐らく、現場での対応を審査してランクを取得させたんだろう。正式な昇進じゃないから「仮」なんだろうな。しかし、本試験を全く受けずに現場だけでAランクまで行くとは……」

「何だろう、素直に喜べない」

因みに現場昇進とは、勤務中やプライベート中に自分のランク以上の犯罪現場に立ち会い、それを解決した際に昇進するシステムである。本試験と違い、正式では無い上に高ランク魔導師の援護等もあるため認められるには、二名以上の上司の推薦とその映像の審査の他に、結構な数をこなさなければそうそう昇進する事はないので本試験を受けた方が昇進は早いのだ。まあ、本試験は本試験でキツイうえにえげつないトラップが仕込まれたりするので簡単と言うほど簡単ではないのだが。

「それは兎も角、実際どうなんだ？本局の方は何か言ってきてんのか？」

「いやまだ報告してないからな。まあ、したらしたでうるさく言うてくるだろうけど」

「今のうちにこっちで決めた方が安全かもしれないな」

「ああ、下手に危険な部署に行かされるよりはアースラに所属した方が安全だろう」

「三人ワンセットに出来るか？」

「今その方向で母さんが動いてる」

「地上本部回せないってのはちとキツイな」

「ああ、これじゃまた何を言われるか・・・」

「すまんね。レジアスのおっさんには俺から伝えておく」

「頼む。そこから言われないだけでずいぶん楽なんだ」

「・・・おっさんから普段何言われてんだよ」

「地上本部の状況を説明するだけなんだが、聞けば聞くほど気の毒になるんだよ。って言うか僕にそんな話をしてどうするんだ?! しかも良く聞いて考えると八割がカズキの事の愚痴になるし!」

「・・・おっさん、一介の執務官に地上の何を話してんだよ」

「はあ、とため息をつく。」

「まあ、いがみ合ってる訳じゃなさそうだから良いとして、三人の事任せたぞ?」

「良くはないが三人の事は任されたよ」

そう言うと俺は立ち上がってドアに向かう。

「ん？どこ行くんだ？」

「プレシアさんのところ。家族水入らずに水差してくる」

「おい馬鹿やめろ！書類もまだ終わってないだろ！」

「だが断る！」

そう言ってそそくさと部屋を出ていく。出て行ってすぐに何かを倒した音に、悲鳴のようなものが聞こえた気がしたがきつと気のせいだろう。クロノなら、足をバインドで固定して転んだ先がトリモチ状になっているトラップに引っかかるなんて事はないだろうからな（キリッ！まあ、クロノの事は置いといて俺はスサノオに話しかける。

「スサノオ準備は？」

『何時でも大丈夫です』

「おし、じゃあ頼む」

『了解しました』

そう言うとスサノオは黙り込んで作業を開始する。そして俺は少し歩いてプレシアさんの所に着く。コンコンコンとドアをノックして

一声かける。

「ちわくっす、カズキです。プレシアさん入ってもよござんすか？」

「ええ、構わないわ」

了解が取れたので部屋に入るとそこには、フェイトとアリシアにサンドイツチされた状態のプレシアさんが聖母のような微笑みを浮かべていた。その状態に「うお！まぶし！」と引きつつ部屋をみると、隅っこの方で所在なさげに丸まっているアルフを発見したので今の状況を聞いてみる事にした。

「ちよいとアルフさんや、これ、どゆこと？」

「ああ、カズキかい。どうもこうも、今までの事を素直に全部話して二人に謝って和解したんだよ。アリシアには怒られて、フェイトにはもうどこにも行かないでって涙目をお願いされて。そんで最後には御覧の通りだよ」

「ああ、なるほど。でアルフは空気を読んでそこで丸まっていたと」

「仕方ないだろ！？あの状態にどうやって混ざれっていうんだい！？」

全くもってアルフの言うとおりである。本人達はそんな気はさらさらないだろうけど他者から見たら混ざれるような雰囲気ではない。しかし、何時までもこの状態にいるわけにもいかないので声をかけようとするが、

「あ、変態さんだ」

こちらに気付いたアリシアの一言で俺は凍りついた。

「何故その事を？」

「否定しないのかい!？」

ば、馬鹿な!？アリシアとは初対面のはず!！それが一発で見破られただと!？驚愕している俺にアルフが突っ込みを入れる。

「ママから聞いたよ。鞭で打たれてご褒美って言ったんでしょ？」

ああ、確かに言ったよ。ネタ的な意味で。しかもそのあと謝ったし。

「で、そういう人達の事は変態って言うんだってママが教えてくれたんだ」

「ちゃうわ!変態ちゃうわ!たとえ変態だとしても、変態と言う名の紳士だよ!！」

「もう変態で良いんじゃないかい？」

アルフが呆れ気味に言うてくる。

「か、カズキさんどうしたんですか？」

「ん?ちょっとプレシアさんに話があったね」

そう言つとプレシアさんがピクッと反応する。

「そう。三人ともちょっとはずしてもらって良いかしら」

「ああ、ちょっと亜夜となのちゃんのところにも顔をだしておいてくれるか。二人とも心配してたし」

「でも・・・」

「大丈夫だ。別にどうこうするってもんじゃないから。ただ、ちょっと大人の話をするだけだ」

「・・・」

フェイトちゃんとアリシアがプレシアさんを心配そうにみている。それを見かねたプレシアさんが二人に告げる。

「大丈夫よ二人とも。ほんとにちょっと話すだけよ。お話が終わったらすぐに知らせるわ」

「うん」

「ありがとう二人とも。アルフお願いね」

「分かってるよ」

そう言うと三人は部屋を出て行った。ドアが閉まりロックがかかる。

「ふう、さてどこから話したものか・・・」

「初めから全部お願いして良いかしら？さすがにこちらも分からない事だらけよ」

「了解」

そう言っただけは話し始める。今日ここまでに至った理由を。

「……信じがたい話ね」

「まあ、そう簡単に信じられるもんでもないですからね」

とりあえず一通り話し終わった。俺の事についてはレアスキル持ちと言っ事しておいた。流石に「アニメの世界に来ちゃいました。てへぺろ（・>）」なんて言っても信じてもらえないか分かったものではない。なので未来の事を夢で見るといふ都合のいいレアスキルにしておいた。これなら似たようなスキルもあるので信じられる範囲ではあると思う。

「そうそれであの時ああ言ったのね」

「あの時？」

「私を助けた時よ。」「もともとこの為に来た」って言ったじゃない」

「……」

「無意識だったの？」

「完全に無意識です」

プレシアさんの問いかけに素直にうなずく。

「こんな大それた事をやる割にはどこか抜けてるわね」

「仕方ないっすよ。いくら頑丈なワイヤーだったとはいええ、万が一切れたら一巻の終わりだったんですから。ちょっとドキドキもんだつたんですよ？」

「それでもちよつとなのね……。で、死ぬ予定だった私を危険を冒して、貴重なアイテムを使ってまで助けた理由は一体何なのかしら？」

「助けたい子がいます」

「知り合い？」

「ええ、名前は八神はやて、俺達の知り合いでまず間違いなくフェイトとアリシアとも友達になります」

「……そう。それもレアスキルで？」

「はい、夢で見たのははやてが「闇の書」と言うロストロギアの融合型デバイスの主になっていました」

「「闇の書」……ね」

「知ってるんですか？」

「まあ、そこそこね。魔力を蒐集して完成させると、所有者は巨大な力を得る事が出来る。それこそ世界を滅ぼせるような巨大な力を……。さらには闇の書を守る守護騎士と言う強力な矛と盾を手に入

れる。私が知っているのはの程度よ。それにあくまでも噂みたいな情報よ真偽のほどは分からないわ」

「まあ、大体あってますね」

「実際と言うのも変な言い方だけれどもあなたの見た「未来」ではどうなの？」

「まあ蒐集して巨大な力が手に入ると言えば入りますが、蒐集に関してはどうしてもそうする必要があったからなんですよ」

「と言うと？」

「はやては現在下半身麻痺で車椅子生活です。でもそれは闇の書がはやてのリンカーコアの魔力を侵食しているからなんです」

「・・・」

「そしてその麻痺は現在も進行しています。それをそのまま放置すれば・・・」

「命に関わる。そう言うことね？」

「はい、そして守護騎士達ははやてに内緒で蒐集を始めます」

「はやてという子の指示では無いの？」

「ええ、はやては守護騎士達に「人様に迷惑かける蒐集は禁止や！」って言うって蒐集を禁止したみたいですよ」

「自分の命が危ないっていうのにすごいわね」

「ほんとっすよ。それで内緒で蒐集するんですけどやっぱり嗅ぎ付けるんですよ管理局が」

「でしよっね」

「で、管理局でも「闇の書」について調べなおすんですけど面白い事が分かるんですよ」

「面白い事？」

「ええ、「闇の書」はもともと「夜天の書」と呼ばれていて、本来、各地の偉大な魔導師の技術を収集し、研究するために作られた収集蓄積型の巨大ストレージデバイスなんですよ」

「なんですって？」

「それが歴代の「書」の主が何をどう思って改竄したのか「夜天の書」は今の「闇の書」になってしまったと言う訳なんですよ。完成すれば主もろとも飲み込みまうところでもデバイスにね。しかも主が死んだら他の素質あるやつのところ転生するっていう厄介な機能もついているときたもんだ。しかも主以外システムのアクセスを認めないうえに、強引に操作すれば持ち主を呑み込んで転生するっていうおまけ付き。全く持ってけしからんもんです」

「・・・ほんとに厄介ね」

「で、ここまで言ったら分かると思うんですけど」

「私に「闇の書」を直せつてこと？」

「YES! 「未来」だと時間が足りなくて碌な対応が取れなかったけど、今からなら半年以上時間がある。まあ、それでもギリギリかもしれないけど」

「流石に私一人じゃ無理よ？ デバイスは専門外だし」

「あ、いえ、プレシアさんにはそれとは別で動いてもらおうと思つてます」

「？」

そう言うつと俺はケースに入った一枚のDVDをプレシアさんに見せる。

「これがこちらの最後の切り札です」

「それが？」

「はい、ちょっと待ってくださいね」

俺はそう言うつとスサノオからパソコンを取り出し、DVDをセットし再生する。そして画面に出てきたのはさまざまなグラフやデータ、数式等、何かの論文か研究の内容のようなものだった。それをじつと見ていたプレシアさんは徐々に驚きの顔になる。

「なるほどね。これなら確かに何とかなるかもしれないわね」

「ええ、プレシアさんにはこれを「対闇の書用」として作ってほし

いんです」

「軽く言ってくれるわね。正直半年でも厳しいわよ？」

「お願いします。こちらでも知り合いにあたってはいるんですけど多分プレシアさん以上の人はいないと思うんです。それに今回も絶対に失敗したくないんです」

俺はそう言っと思っていきり頭を下げる。

「・・・わかったわ」

「ほんとですか!？」

「ええ、でもさっき言った様に一人じゃ厳しいわ。カズキの息のかかった信頼できる技術者をつけてくれないかしら？」

「分かりました。狂気のマッドサイエンティストを用意しておきます」

「・・・普通の技術者で構わないわ」

「まあ、まあ、遠慮なさらずに」

「別に遠慮してる訳じゃないわよ!」

そんな事を話しているとプレシアさんが思い出したように効いてくる。

「でもいいの?この話をここでして。ここ監視カメラがあるわよ?」

「ノー・プロブレム。話し始めた時からダミー画像が流れてる」

「用意周到ね。流石「カリウム」ね」

「あゝ、プレシアさん根に持ってます?」

「少しぐらい仕返ししても罰は当たらないでしょ」

「まあ、俺が悪いのは分かってるから良いんですけどね」

「最後に質問しても良いかしら?」

「答えられる範囲なら」

「何故カズキはもう一人、執務官だったかしら?に知らせてないのかしら?」

「あゝ、今いる俺の相棒は11年前に闇の書の暴走で父親を亡くしてるんすよ……」

「そうだったの……」

「クロノが闇の書についてどう思っているのか分からないのでまだ話してないんです」

「乗り越えられると良いわね」

「まあ、大丈夫だと思いますよ。クロノなら」

「そう」

「じゃ、そう言う事でよろしくお願いします」

「ええ、お願いするわ」

そう言って俺はプレシアさんと握手をして部屋を出る。ようやくインフォースを助けるカードがそろった。後は時間との勝負になりそうだ。俺はそう思いながら今できる事を片付けるために書類作成していた部屋に戻るのだった。

第四十九話（後書き）

ようやく無印が終了しました！次からはA・Sになります！頑張つて書きますのでこれからもよろしくお願いします！！

第五十話

斎藤一樹

俺は今階段を駆け下りている。一段飛ばし何ぞ生ぬるい事はせず、壁を使い三次元的な機動で降りていく。なまじエレベーターを使うよりこっちの方がはるかに速い。俺の後ろには後を追ってくるスーツ姿の人達。しかし「氣」で身体強化をした俺に追いつけるはずがなくぐんぐん引き離されていく。そして俺は建物の正面玄関まで来ると。自動ドアの前に立ち空くのを待つ。自分の体がギリギリ通れる隙間があった瞬間スルリと外に出て、建物の正門前にいる報道陣に向かって持つていた紙をバツと広げる。そしてその紙には、

「勝訴？」

と書かれていた。

「……どつちだよ!?!」「」

それを見た報道陣の何名かから声上がる。それについて俺が話そうとすると、

「またやったか!この馬鹿者が!?!」

ゴギャン!?!!

とおおよそ人体から出るような音では無い音が周囲に響き渡る。俺は殴られた衝撃で顔が地面に突き刺さり、ちよつとした穴ができた。俺はゆっくりと顔を地面から離し、殴られた頭を抑える。良く見る

と地面には俺の「顔拓」が出来ていた。

「痛ううー！！痛いつすよゼストさん！！なんばしよつとですか!？」

そう言つて俺はゼストさんを見る。金髪で大雑把な髪形、大柄で口を一文字に結んでいて、身長は俺より頭一つ分高く190位ありそうだ。いかにも寡黙とか武人と言つ言葉が似合う人である。

「そんな事も説明しなければ分からんのか？」

「いえ、分かりきつてますけどね」

「・・・」

「いや、一度でいいからやってみたかったんですよ。これ」

そう言つて俺は手に持っていた「勝訴?」の紙をひらひらさせる。それを見てゼストさんが額を抑えたため息をつく。

「お前はもう少しまじめに仕事を出来んのか？」

「俺は何時でも全力ですが？」

「方向が盛大に間違つているぞ」

ゼストさんと他愛もない話をしていると周りのマスコミがヒソヒソと話をしていた。

(おい、あれゼスト一尉じゃないか?)

(ああ、間違いない。どうしてここに地上本部のエースが?)

(護送担当なんじゃないか?)

(なるほど。しかし、あの陸士はだれだ?)

(さあ?ゼストの部下じゃないか?しかし、上司にため口とは・・・)

(地上本部の人手不足つてのはほんとに深刻なんだな)

(ああ、あんないい加減な奴でも使わないといけないのか)

(ゼストも大変だな)

(地上本部は大丈夫か?)

と何やらひどい言われようである。ふう、と一息つきゼストさんの方を見ると苦笑いしていた。俺とゼストさんは報道陣から見えない位置まで移動する。するとゼストさんが話しかけてきた。

「あれが今のお前の評価みたいだぞ?」

「まあ、あれだけ見ればそうなるんじゃないですか?今までマスクミに騒がれる様な事件解決してないですし」

やっぱりと言うかゼストさんにも聞こえてたみたいだ。

「」どの口でそれを言う。今までだって解決してきただろうに」

「や、それ参加したの俺だけじゃないうえに公式には俺は参加してないでしょ?」

ゼストさんは「むっ」と唸る。

「・・・今回の事件はどうしたんだ?」

「ん〜、メインで解決したのは俺じゃないので」

「そうなのか?」

「ええ、俺は裏でコソコソしていたので。はたらか見たら邪魔してたようなもんですし」

「・・・何をやっているんだお前は」

「裏工作です」

「法に触れるようなことはしてないだろうな?」

「・・・さ〜て、そろそろプレミアさんが出てくるどころですね!」

「おいサイトウ。また何かしたのか?」

「イイエ、ナニモシテマセン」

「片言になっているぞ」

「キノセイデス! HA! HA! HA!」

「・・・何をしているんだお前達は？」

俺がゼストさんに問いただされている所に来たのはレジアスのおっさんだった。身長は俺とゼストさんの中間位で、角刈りっぽい髪形に、モミアゲに顎鬚に口ひげすべてが繋がっていて、しかも眉なしという儼つい恰幅の良いおっさんだ。しかしこのおっさん侮る事なかれ、恰幅が良いがデブではなくかなり鍛えられている。たとえて言うなら脂肪を無くした力士のような感じだ。この間徒手格闘訓練に参加してきたのだが、その際某天空の城に出てくる親方のごとく上半身をパンプアップさせ、Ｔシャツをはじけさせるという事をやってのけた。流石にあれにはど肝を抜かれた。原作では魔導資質は無く、戦闘シーンも無く、あっさり退場してしまったので、てつきりそうだった方面はからつきしだと勝手に思っていたからだ。しかしふたを開けてみれば、魔力を使用しない徒手格闘はクイントさんと以上と言うチートぶり。重量級の体からは考えられない程軽いフットワーク、そしてそこから繰り出される打撃は脅威の一言である。流石は准将と言ったところか。そしてその横には、青味がかつた紫の髪をポニーテールにしている明るい雰囲気の女性、クイントさんに、紫の絹糸の様な髪を腰まで伸ばし物静かそうな雰囲気をまとっていてさながらどこかのお嬢様のような感じのメガー又さんがいた。二人とも美女と言って差し支えないほど綺麗な容姿をしている・・・がいざ戦闘が始まると普段の様子はなりを潜め、かなりイケイケな感じになる。初めて会った時はメガー又さんのポジションは召喚師のフルバック。所謂「後方支援」だ。なのにやたらと前に出たがる理由を聞いてみたら「クイントばかり前衛をしててずるい」だそう。ポジションの事を言ったら「前衛も出来ますよ」なんて言ってきた。なんでもここに来る前はクイントさんと一緒に前衛をしていたらしい。そして以前とある犯罪グループのアジトの制圧作戦の時、いざ二人で前衛をしたなんかそりゃあもう無双だった。初めは二対二でやり始めたのだが調子が出てきた上に久しぶりのコンビだった

為クイント・メガーヌペアは初めに戦っていた相手二人を倒したら他の場所にも乱入していき次々に制圧して、終いには二人で6〜7割の犯人を捕まえた事があった。その際テンションが上がりまくった二人は嬉々として笑いながら犯人を制圧したそうだ。まあ、そのあとゼストさんに注意されたようだが。で、そんな二人が声をかけてくる。

「カズキ君また隊長をからかったの？」

「あまり誉められたものではありませんよ？」

二人にそう言われるが……。

「……美女に挟まれて両手に花とか……死ねばいいのに」

「レジアス、ずいぶんとお盛んだな」

「き、貴様らは（怒）」

俺とゼストさんの言った事に青筋を浮かべるレジアスのおっさん。

「あら、うれしい事言ってくれるわね。でも私はゲンヤさん一筋なのよ」

「「知っている（っす）」」

照れながら答えるクイントさん。

「私ももう少し年の近い人でないと」

「「・・・」」

ばっさり切り捨てるメガー又さん。

「ワシは妻に娘もあるわ！！何が悲しくてこの二人と関係を持たなければならん!?」

「「あ」「」

余計なひと言を言うおっさん。俺とゼストさんは声をあげた。三者三様の答えだったが最後のは余計だった。なぜかと言うと、

「あら？それは私達では役不足だという事？」

ガシイ！

「いくら少将でも言うて良い事と悪い事がありますよ？」

ガシイ！

おっさんの肩をクイントさんとメガー又さんが掴んでいるからだ。はたから見ても肩に手が食い込んでいる。

メリメリメリ!!!

その痛みで我に返ったのか自分の発言の迂闊さに気付いたようだ。

「あ、いや、言葉のあやだ！決して嫌だという訳でハイダダダダ！
！こら、待て！どこに行くんだ！襟を掴んで引きずるな！」

二人に引きずられていくおっさん。

「何処つて、体育館の裏ですよ？」

「古今東西、そこはいろんな事が起きる素敵な空間らしいですよ？」

「ま、待たんか！体育館はここにはない！しかも何だその変な知識は！？誰が教えん・貴様かサイトウ！」

これ見よがしにイエーイ！とダブルピースしてみる。アへ顔ではないが。

「カツアゲ、告白、草むしり！なんでもござれの体育館裏！おっさんの場合は「おい、ちよつと来い。シメテやる」見たいな感じか？」

「「さて、もう言い残すことはないかしら？」」

クイントさんとメガー又さんがきれいに声をそろえて言う。

「あ、コラ！やめんか！おい！……ぬわーーーーーっ
！！」

ズルズルと引きずられて離れていく。声もだんだん小さくなるが、建物の陰に入り見えなくなってしばらくして悲鳴が聞こえた。

「一体どうなった事やら」

「まあ、あいつらも加減ぐらいしているだろう」

「でも常識的に考えて准将を体育館裏に連れ込んでポッコボコにす

るってどうなんすかね？」

「お前が常識を語るか？」

「失礼な。俺にだって一般常識位ありますよ？」

「お前の普段の行動は非常識だ」

「ですよ〜。しかし、どこから漏れたんすか？マスコミに」

「分からん。正直候補がありすぎて調べきれん。反対派の工作の一つであるのは確かなのだがな」

「予想はしていましたが結構な数つすね」

「ああ、流された情報もかなり偏ったものだったからな。まるで修復が失敗するのが前提と言わんばかりのものだ。それが連日放送されてしまったからな。自然と世論が修復に否定的になってしまった。失敗すれば危ないのは局員だけではないからな」

そう言つて俺とゼストさんは再び裁判所の正門に目をやる。そこには数多くの報道陣が詰めかけていた。待っているのは恐らくさつき連れて行かれたおっさんとプレシアさんだろう。何故こうなったかのかはちよつと前にさかのぼる。「P・T事件」正式名称は「プレシア・テスタロツサ殺人未遂および次元災害未遂事件」である。それから少し経ち、今は四月の終わり。俺は今ミッドチルダの裁判所にいる。何の裁判が行われているかと言うとはプレシアさんの裁判だ。早すぎじゃないか？と思うがこれにはある理由がある。その理由は今連れて行かれたレジアスのおっさんが管理局の月例会議で爆弾発言をかましたからだ。

「闇の書修復を行う」

これには当然さまざまな場所から反対があつた。本局しかり、地上本部しかり、特に本局の一部からは猛反発された。「出来るわけがない」「無謀だ」「11年前を忘れたか」「あんたバカア？」等等。色んなところから色んな意見が出た。特に古参の連中からの反対が多かつた。何故か？闇の書との戦闘を経験しているのは今となつては古参の連中だけだからだ。その当時の凄惨さを身にしみて知つていからだろう。唯一反対しなかつたのは聖王教会だろうか？闇の書自体が古代ベル力時代に作られているのは知られており、もしこれが修復されれば聖王教会が得る利益はかなりのものだろう。しかし、積極的に協力しようというのでもなく、美味しい所だけ取れたらいいなと言う考えが見て取れる。正直ウザイ。手伝わないなら余計な事はしないでほしい。俺は政治的なものだったり駆け引きだったり、そう言った事は本来さっぱりなのだ。今はまだ原作知識が役に立っているからいいが、正直余計な事にいらん心配をしないで全力で事にあたりたいのだ。まあ、そういった事はおっさんがしてくれるそうだが。

今回おっさんがこんなことを言い出したのは俺が持ちかけたからだ。俺は「P・T事件」が終わつてすぐにユーノの首根っこ掴んで無限書庫にぶち込んだ。もちろん探してもらおうキーワードは「闇の書」「夜天の書」の二つ。最初はかなり渋っていたが、報酬を用意すると二つ返事でOKをしてくれた。報酬の内容は・・・まあ、やつも男だつたと言つておこつ。そしてほぼ缶詰状態で無限書庫にもる事二週間。原作以上の情報を引き出してきやつた。助手として俺とリニスも一緒だつたというのもあると思うがね。原作では三週間ほどかけて情報を探し出していたはずだ。それを一週間で縮める事が出来たのは助かつた。おかげで月例会議に間に合つた。

因みに、俺とリニスが助手として付いた理由はもちろん無限書庫内に「カリウム」の情報が混じっていないかというのを確認するためでもあったのだが・・・こちらは早々に諦めた。はっきり言おう。無理だ！片手間に調べるには量がありすぎる。まあ、無限書庫については管理世界の情報を制限なく集めるようなので管理外世界の事は大丈夫だろうと思う事にした。これが終われば時間も出来るからその時じっくり探す事にしよう。で、実際ユーノの仕事ぶりを見ると圧巻の一言だった。次から次へと関連書物を探し出してくる。おまけに片手間だと言わんばかりに整理も始める始末。ユーノマジパネエ！これからは「ユーノさん」と呼ばなければならぬだろうか？これならクロノがスカウトした理由もうなずける。これだけの能力を使わずにいるのは惜しい。

実際現場では情報が違ったり、情報なんてまるでない状態やで突っ込む事が多々ある。しかしこの無限書庫には正しい情報の宝庫だ。ここを使えるように出来るなら現場の死傷者数も減るだろうし、今まで着手出来なかった案件も出来るようになる。しかし、それが出来るようになるのはまだ当分先のようなのだが。そして俺はその情報を元におっさんの説得を始めた。そこはおっさんの執務室。マホガニ―色の重厚で高級そうな机で作業をしていたおっさんは手を止めて話を聞いてくれている。知り合いが闇の書の主の可能性がある事、まだ起動していないが何時起動してもおかしくない事、闇の書のせいで下半身が麻痺している事、そして、何とかしなければその知り合いの命が危険だという事を正直に話した。

「サイトウ。それは何の冗談だ？」

「レジアス少将。今言った事は全て事実です」

そう言つて俺はスサノオを操作しウィンドウを開き画像を見せる。そこに映つたのははやてちゃんの情報と、部屋の本棚の片隅に置かれている闇の書の画像だ。それを見たおっさんの表情が変わる。

「……どうやら本当のようだな」

「分かつてもらつて何よりです」

「また厄介な案件を持ち込みおつて」

「む、そんなに厄介な案件ばかり持ち込んでないですよ？」

「……そうだな。今回の件と比べれば他の事はままごとみたいなものだ」

「……すいません」

「構わん。で、どうするつもりなんだ？」

「闇の書を修復します」

「……すまん。もう一度言ってくれ」

一瞬の静寂。おっさんが耳の穴を指で掃除して聞きなおしてくる。

「夜天の書に戻します」

「さっきと違つではないか！」

「聞こえてるんなら聞き返さんで下さい」

「ふう、・・・貴様といると退屈せんよ」

「ありがとうございます」

「誉めとらん。で、どうするのだ？はつきり言って闇の書は厄介事だらけだぞ？」

「と言いますと？」

「まず、これは上の連中に言える事だがほとんどが闇の書は毛嫌いしているな」

「・・・厄介事だから？」

「それもある。が、実際に地獄を見ているのだよ。闇の書と戦い、守るべきものを守れず、上司を、部下を、同僚を、家族を、恋人を殺されている。悲劇を止めるために全員が一丸となって解決しようとした。闇の書を直すプロジェクトもあった。しかし結果は・・・無残なものだったよ。それに携わった人全てが犠牲となった」

「・・・」

驚いた。闇の書を直すプロジェクトなんてあったのか。

「そして、それ以降管理局の佐官以上ではこのような取り決めが出来た。「闇の書の主については何らかの犯罪行為を行った場合、可及的速やかに処理をする事」とな」

「んな!？」

「これは佐官以上しか知らされていない情報だ。大丈夫だと思うが気をつける」

「・・・ずいぶんな取り決めなこつて」

「しかたあるまい。今までの主は例外なく犯罪行為に走っている。闇の書には洗脳機能まであると言われてもいるぞ？実際のところは知らんがな」

「そりやまたいい加減な推測っすね」

「例外が無いのだ。犯罪をせず一生を終えたという例外がな。寄りによつて全員が闇の書にのまれている。その場にいる者全てを道連れにしてな。しかも闇の書には転生機能まで付いている。転生する先は決まって「闇の書」を扱えるほどの魔力資質のある者だ。再度起動するまで多少時間はかかるようだが、転生先で起動しないで一生を終える確率なんぞ無いに等しい」

「まったく聞けば聞く程厄介ですね」

「違くない。で、さっきも言ったがどうするのだ？どう修復する？」

「そうですね。その前にこれを見てもらつて良いですか？」

そう言つて俺はスサノオを操作して新たにウィンドウを開く。

「これは先日知り合つた協力者と共に無限書庫で「闇の書」を調べた結果です」

「ほづ、どれどれ……」

そう言うとおっさんは自分の前までウィンドウを持っていき資料に目を通し始めた。

「……………」

その資料に黙って目を通す。時折ウィンドウを操作し次の資料へと切り替える。部屋には切り替える際の電子音が響く。初めはどこかほころんでいた顔が次第に真剣な顔つきになっていく。資料の全てに目を通したおっさんは静かにウィンドウを閉じた。

「サイトウ、この資料の信憑性はどの程度だ？」

そう言うって「闇の書」の資料を指さす。

「恐らく8〜9割、翻訳の違いで若干の誤差があるかも知れませんが作業したのはスクライアー族、遺跡発掘の専門家スペシャリストです。致命的な間違いはあり得ません。それにその資料が間違っていたら無限書庫は存在自体が無意味です」

「そうか、あのスクライアー族か……」

「はい」

「ふむ、「闇の書」の経緯についてはおおむね理解した。これだけの資料があれば上の連中の説得は出来るだろう。次は具体的なプランだが」

「はい、まず守護騎士達の説得。これは恐らく問題ないでしょう。」

主から直接命令させれば問題ないと思います」

「そこが出来ねば話しにならない。資料を見た限りでは修復には守護騎士の協力が必要不可欠だ」

「次に蒐集についてはですが、無人世界のリンカーコアを所有している生物からの蒐集および管理局員の有志からの蒐集を考えています。無人世界での蒐集の際は生態系の調査の名目で許可をもらいたいですか?」

「調査の件については良いだろう。手付かずの無人世界がいくつもあったはずだ。その中からとびきり凶悪な生物のいる所を見つくるってやるう。しかしもう一つの方は・・・いるのか?」

「まあ、地道に声をかけてみますよ。とりあえず同期あたりに頼んでみます。ネックとしては蒐集すると二三日動けなくなるって事ですかね?穴があいたら俺をその分使ってもらってことで」

「それなら、その穴のあいた部分に守護騎士を入れた方が良いでしょう。少なくともそれならゼストの部隊からは全員からの蒐集が可能になるはずだ」

あ、そっか。

「まあ、事がすんなり運ぶか分からんがな。なにぶん恨みを買い過ぎていて。余所に行った時無用なトラブルに巻き込まれんとも限らん」

「運用は慎重にならざるうえませんね」

「ああ、しかし犯罪者からは取り放題だ。捕まえれば捕まえただけ蒐集出来るぞ?」

「地上は平和になるし一石二鳥ですか?」

「いや、うまく親睦を深める事が出来れば地上の部隊に入ってもらえて一石三鳥になる」

そう言つてガハハと笑つおっさん。どうも原作のキャラとの違いがありすぎて困る。まあ、いい人なので問題ないのだが。

「蒐集はそれを予定しています」

「分かつた。それで進める事にしよう。不都合が生じたら常に修正していく必要があるな」

「予定通りにいけば楽なんですけどね」

「それは無理だろう」

「そうつすよねえ。で、第二段階なんですけど、これは蒐集と並行して闇の書のバグを探していきます」

「大丈夫なのか?資料によれば強制的にいじろつとすれば転生してしまうのだろう?」

「はい、強制的にしようとするだけです。主の許可があれば問題ないでしょう」

「それはそうだが・・・大丈夫なのか?」

「まあ、無理そうだったらやめておきますよ。これに関しては必要な人材がいるのでおっさんの力で何とかできないかと思って」

「何だ？」

「プレシア・テストロッサの協力が必要です」

「・・・何故だ？技術者というのであれば優秀な者は他にもいるぞ？」

「優秀という理由ならそうでしょう。ですが今ここで必要なのは「信頼」です」

「なるほどな。確かに他から呼べば反対派の工作が絡んでくる可能性はあるか。ではプレシアにはそれほどの「信頼」があるのだな？」

「はい、プレシアさんなら絶対にこっちを裏切ったりなんかしない」

「家族が人質になる可能性は？」

「こっちで最高のボディガードを付けます」

「しかし、魔法が使えないのだから？」

「魔法無しでなら俺以上です。多分ゼストさんクラスじゃないと仕留められないですよ？」

「・・・何者だ？」

「知り合いの父兄ですよ」

「・・・人間か？」

「人間です」

「・・・そうか」

おっさんがため息をつき「世界は広いものだ」と呟いた。まあ、あの辺りは公式チートだから仕方ない。

「で、どうにかなりそうですか？」

「あ？ああ、それなら裁判を早めてスピード判決にするか。弁護人もこちらで困んで、上訴無しで話を通してあげばよかろう。確かプレシアは魔導師だったな？」

「はい」

おっさんは机の端末を操作するとプレシアさんの経歴を引っ張り出す。

「管理局への奉仕と、「P・T事件」の現地協力者からは事件解決の報酬がプレシアの減刑が願いだそうだ。流石に無罪は無理だが、これだけあれば執行猶予位はもぎ取れるだろう。その間に闇の書を直した功績で刑罰も帳消しか・・・。貴様が考えた筋書きにしてはまあまだな」

「何も言っていないのにそこまで推測しますか」

「この位出来ねば今の地位には到底なれんぞ？」

「俺はそこまで偉くなりたいとは思わんので」

「貴様がそう思うのならそれで構わん」

「ま、勝手気ままに動けるってのも強みなので」

「ふん、まあいい。プレシアには貴様から伝えておけ。面会位出来るのであるっ？」

「ええ、今度プレシアさんの娘と一緒に行く予定です。その時に伝えましょう。取り合えず方針はこんなとこですね。他はまたその時期に話します。守護騎士が出てこないと分からない事もありますし」

「そうか。何かあれば最優先で知らせろ。出来る限り協力をする」

「あゝ、でも流石にゼストさんとか送れないっすよね？」

「無理だな」

「では、アースラと協力体制をとってほしいのですが」

それを聞いたおっさんは顔をしかめる。

「……海の連中とか？」

「そう露骨に嫌そうな顔しないでください。結構重要な事なんですから」

「何だ？」

「一つ、拠点となる場所を作っておきたいんですよ」

「それでアースラか？」

「正確に言えばアースラ組ですね。アースラ本体はおまけ。これには「信頼」のおける人達がいるので」

「女狐か」

「悪口ばかり言わんで下さい！これが成功すればちったあ仲良くなれるかもしれないでしょ！？」

「ふん、向こうがそう頼むのなら仕方ないかな」

「・・・頑固おやじ」

「なんとも言え。ワシが何度煮え湯を飲まされてきたか・・・！」

「あゝ、はいはい。それはまた今度。協力の件お願いしますよ！どっちにしろ海が横やり入れてくるのは分かり切ってる事なんだから先手を打たなきゃどうしようもないでしょ！？」

「・・・しかたあるまい」

「はあ・・・。あゝ、後は・・・うん、無いな。今のところはこのぐらい・・・。」

あ、そう言えばおっさんはどうなんだろう？ふと気になったので

聞いてみる事にした。

「おっさんは「闇の書」をどう思ってるんっすか？」

俺がそう言つとおっさんが黙る。目を閉じ、顎に手を当て考えている。その姿は何か昔の事を思い出しているようにも見えた。

「ワシは非戦闘組だったからな。当時の事は映像と数字でしか知らん。しかし、親しくしていた上司を同僚を殺されたと言う部分もある」

「.....」

「その時何度も思つたものだ。ワシに戦える力があつたらとな。そうすればどうにかなつたかもしれん。自惚れうぬぼれかも知れんがそう思わずにはいられなかつた。さっきまでは闇の書何ぞどうでも良い代物であつたからな」

「さっきまで？」

「ああ、貴様が持つてきた資料を見るまではな。あれが全面的に正しいとしたうえで考えれば、管理局の被害は回り回つたツケで、今の主は犯罪者でも何でもない。管理局われわれが守るべき一般市民だ。今までの闇の書の罪ツケを背負う必要は何処にもない。それに・・・」

「それに？」

「こんな年端もいかぬ少女を犠牲にしなければいけないというのは認められんな。娘を持つ親としても必ずこの少女を助けるぞ。それが私達の仕事だ」

「・・・・・・・・」

あり？こんなキャラだったけ？ちょっとジーンと来ちゃった。

「どうしたサイトウ？」

ボケっとしていた俺を不思議に思ったのか声をかけてきた。

「あ、あゝ、いえ、なんでもないっす。でもおっさんがそう言ってくれてありがたいっす。これで心おきなく修復に望めますよ」

「そうか。報告は定期的にしる。判断は現場に任せる」

「了解。あそれと今更ですが少将昇任おめでとunggざいます」

「確かに今更だな」

おっさんは少しほほを緩め言ってくる。俺は敬礼をして部屋を出て行った。その後プレシアさんに面会して裁判の話して手はずを整えておく。闇の書の事を話していたのであっさり納得してくれた。でも、重要なのはそこでは無く一分一秒でも早く二人・アリシアとフェイトと暮らしたいようだ。話している時にやたらとその辺を気にしていた。そして今に至る。もう裁判も終わってしばらくたつのでそろそろ出てくるはずなのだが・・・と、噂をすれば。正面玄関からはプレシアさんが出てくる所だった。報道陣もそれに気付いたのかそちらに移動していく。それを見たゼストさんと俺はプレシアさんの元に向かう。ちょうどその時おっさん達も戻ってきた。おっさんはボロボロになっている。

「む、行くぞサイトウ、クイント、メガーヌ」

「了解」

プレシアさんの所に付くと前から報道陣が詰めかけてくる。俺とゼストさんでそれ以上来れないように抑える。それでも進もうとしするががちり押さえられているので進めない。やっと進むのを諦め俺の肩越しにマイクをプレシアさんに向ける。

『プレシアさん！今の心境を一言！』

『闇の書は直せるんですか！？』

『危険ではないのですか！？』

『罵ってください！』

誰だ最後の？！

「大丈夫です。直せます。危険がないとは言いませんが確実に直せる切り札がこちらにはあります。闇の書の悲劇をこれで最後に見せます。この豚野郎！！」

「……………」

「質問は以上でしょうか？」

あまりの事に周りが沈黙しているとプレシアさんが報道陣に聞く。

「無いようですね。それでは失礼します。行きましょう」

そのプレミアさんの姿にあってとられた俺達だった。

第五十話（後書き）

ちよつと更新が遅くなりました。話数が減っていると思いますが無印前の短かった何話かをつなげました。極端に変わった訳ではありません。こちらの勝手に直してすいませんでした。

この話からA、S編になります早く守護騎士を出したいな。

第五十一話

齋藤一樹

プレシアさんの裁判も無事終了し、予定通りに執行猶予ももぎ取る事に成功した。保護観察にリンディさんが付く事になり、十分想定内である。四月も終わり現在五月一日、闇の書起動まであと三十四日約一カ月である。それまでに海鳴に拠点を設置完了するのがベストなだけど……。まあ、ちよいちよい時間があるから忍さんあたりにも相談してみよう。研究の件も話さないといけないし。あ、そつたらアリサあたりにも話を持っていくか？そうすれば使っていない別宅の貸出位してくれるやもしれん。見返りが何になるか分からないが変な事は頼まないだろう。そんな事を考えながら歩いているといつの間にか自分家の前まで歩いて来ていた。

「さうで、久しぶりの我が家だ！」

ここ最近帰ってなかった家を見て何やら色々懐かしく感じる。そう言えば何時から帰ってなかったか？「P・T事件」が終わって、いったん帰ったのが最後だったか？事後処理や、書類整理、はたまたプレシアさんの護送なんかもあったからミッドにずいぶんいた気がする。学校も結構休んでるけど大丈夫かな？ま、今日は家でゆっくりして明日にでも考えつか！そう結論を出して玄関のドアを開け家に入る。

「ただいま〜と」

そう言いながら家へ上がろうとすると、

「おや？一樹もう学校は終わったのですか？」

「は？」

いるはずのない人物から声をかけられた。

「「は？」ではないでしょ。学校はどうしたんですか？」

「に、兄ちゃん？何時アメリカから帰ってきたの？」

「ついさっきですよ。ん？一樹は知らなかったのですか？おかしいですね、家には連絡を入れておいたのですが」

「あゝ、俺しばらく家に帰ってなかったから」

「ん？家に帰ってない？どういう事ですか？」

「ミッドに行ってた」

「父さんの仕事場にですか？」

「違う違う、俺の仕事場」

「一樹の？一樹は労働基準法というのを知っていますか？」

「知ってるけどこっちの法律は無意味だよ？」

「む、そうでしたね」

「つつか兄ちゃんもどうしたんだよ？大学は？夏休みはまだ先でし

よ？」

「ええ、夏休みは六月からなのでまだ先ですが、ちょっと日本に用が出来まして、しばらく日本にいますよ」

「ふうん、じいちゃんとはあちゃん元気にしてた？」

俺は向こうにいる生物学者の祖父母を思い出し兄ちゃんに聞く。

「ええ、元気ですよ。この間も調査に行つた島で自給自足してました。とても80過ぎの老人とは思えませんね」

「それなんて黄金で伝説な番組？」

「全くです。まあ、玄関で話すのもなんですからリビングに行きましよう。色々教えてもらいたい事もありますからね」

「あゝ、そだね。じゃあ改めて。お帰り兄ちゃん」

「ただいま。一樹こそお帰りなさい」

「ん、ただいま」

そう言つて俺は靴を脱いで家にかかる。俺が今話していた人物は齋藤家の長男、齋藤晃だ。身長は俺より低いが170ちよいある。髪はちょっと茶色っぽい感じで七三分にしているが、昔のような七三では無く今風？ラフな感じとでも言えばいいのだろうかそんな感じだ。体格は細身、黒ぶちの眼鏡をかけている。俺の五つ上で現在大学一年生。専攻は生物学らしい。兄ちゃんも魔法の事は知つているが魔法は使えない。リンカーコアはあるにはあるみたいなのだが、

戦闘が出来る程魔力が無いらしい。

そしてこの兄、それ以外は全ての分野でチート野郎である。成績優秀、スポーツ万能、品行方正と三拍子そろっていて、しかも通っている大学は海外、超一流大学のハーバード大学である。今の日本人で通っている人数は片手で数えるほどしかない。兄ちゃんの大学受験の時何処受けるか聞いて吃驚したのと、東大を滑り止めに受けるというのを聞いてさらに吃驚した。つうか東大を滑り止めに受ける輩を初めてみた。しかもそれが身内だとは思わなかった。しかも現役合格したもんだから通ってた高校はお祭り騒ぎ、合格祝賀会に送別会までしてもらったというのだからすごいものだ。新聞（地方新聞）にも載ったのだから父さんと母さんもやたらとはしゃいでいた。今も大事にその新聞を取っというてある。

正直俺が兄ちゃんに勝てる所と言ったら運動面だけで、他は言うまでもなく惨敗である。勉強にしたって中学レベルは付いていけるけど高校レベルになったらあつという間に普通レベルになる事間違いない。どっかの世紀末な世界の兄も言ってたしね。「兄より優れた弟などいない！」まさにその通りである。しかも、兄より優れた妹はいるので困ったものである。ハッ！俺って斎藤家ヒエラルキーの最底辺じゃね！？兄ちゃんは天才、妹は剣術で天才、俺凡人。格闘技は「ラーニング」のおかげだし。それがなかったら単なる局員Aって感じじゃね！？驚愕の新事実に気付く俺。どうすれば抜けられるのか？自分で素早くシュミレーションし18パターン程想定する。そして却下。こうしてネタにまみれている時点で脱出不可能である事に気づく。

「ま、あんま関係ないから良いんだけどね」

「ん？何か言いましたか？」

「うんにゃ、独り言だから気にせんといて」

「そうですか」

兄ちゃんは特に気にした様子はなくリビングに行く。

「あら、お帰りなさい。もうひと段落付いたの？」

リビングに行くとそこには母さんがいた。どうやら今日は休みのようだ。

「ひとまずはかな？これから色々起こる予定だし」

「あら、そうなの？」

「下手すると今年いっぱいそれにかかりつきりになるやもしれんのです」

下手すると言って言うかほぼ決定事項だけど。

「ほんとに？」

「うん」

「一樹、学校は大丈夫なの？」

「うん、今のところは」

「いくら聖祥がエスカレーター式だからといっても休みすぎると目

をつけられるわよ?」

「うん、気をつける」

「まあ、今のところ学校の方も何も言っていないから良いけれどね」

「一樹はそんなに学校を休んでいるのですか?」

「最近はやっと多めになってきてる」

「まあ、母さんが強く言っていないから良いですが学生の本分は学業ですよ?」

「それは分かったっちゃいるんだけどね。勉強自体おろそかにしたくないし」

「管理局の仕事が警察の仕事と似ているのは理解していますが、いくら腕が立つからと言ってもまだ中学生なんですから無理はいけませんよ?」

母さんと兄ちゃんからお小言をもらう。ある程度二人も理解しているのでそんなに強く言っていないが。

「あ、母さん。そっぴゃあ、亜夜はどうすんだ?この間なのちゃんフェイトちゃんと一緒に嘱託魔導師試験受けるって意気込んでたけど?何か聞いてる?」

「話しただけなら聞いてるわよ」

「む?亜夜も魔法が使えるのですか?」

兄ちゃんがちょっとうらやましそうに言ってくる。

「うん。しかも魔力量で行ったら俺の倍以上あるんだもん」

「そう言われても基準を知らないので何とも言えませんがそんなにすごいんですか？」

「うん、ランクはSSS、SS、S、AAA、AA、A、B、C、D、E、Fって分かれて、今俺の魔力量が平均A位で、一般的な隊員の魔力量はB〜D位、亜夜はAAA前後。これはエースとか隊長とか呼ばれる連中と同レベルの魔力量なんだよね」

「それはまた・・・すごいですね」

「これだけ力があるとちゃんと制御できないとかえって危険だからな」

「それじゃあ、一樹と同じように士官学校でしたか？そこに通うのですか？」

「まあ、最終的にはそうなると思うけどね」

「そうですか。それは兎も角そろそろ事情を説明してほしいのですが」

「ん？あ、そうだった」

いかん。忘れとった。母さんもいるし今回の件の報告もしてしまおう。兄ちゃんにそう言われると俺は「P・T事件」を話し始めた。

もちろん表向きの内容で俺が裏でしていた事は内緒である。

「私がない間にすごい事があつたんですね・・・」

「でもよかつたわね、フェイトちゃん家族で暮らせるようになったんでしょ？」

「うん。プレシアさんに保護観察は付いてるけどそれもあり合いだし、リニスも正式に契約しなおしたしね。何か困った事があれば聞いてくる様について言つてあるし」

「P・T事件」の後、リニスは再びプレシアと契約しなおした。それはもうあっさり。もしかしたら感謝の意味も込めて俺の使い魔になってくれるかと思つたけどそんな事はなかつたぜ！

「今までありがとうございました」

と言つてプレシアさんと再契約。ほんとあっさりしたものである。まあ、ご近所さんなのでこれで会えなくなる訳でもないのが良いのだが。元からその約束だったしね！

「あら？じゃあ、はやてちゃんはしばらく一人？」

「うん、リニスもしばらくアリシアにつきつきりになりそうだって」

現在アリシアは体の筋力が低下している為、一人では何もできない状態である。なのでそのリハビリにリニスが付いている状態だ。

「はやてちゃん？」

「お隣さんよ。八神はやてちゃん」

「それで、一人とはどういう事ですか？」

「どうも事故で両親を無くしたらしい。それでずっと一人で暮らしてたみたい。しかも下半身に麻痺があつて車椅子生活なんだ。流石にヘルパーさん雇つてたみたいだけど」

「それはまた・・・おかしな話ですね」

「そうなのよね。一樹が連れてくるまで八神さん家が一人暮らしだなんて知らなかったし。そしたらご両親が亡くなつて言つて言つていない、いい人だったんだけどねえ」

「ん？かあさんはやての両親知ってるの？」

「ええ、少しだけね。ご近所さんなのよ？町内会の寄り合いで顔ぐらい合わせるわ。最後に会つたのは一樹が士官学校行つてる時だから、四年位前かしら？」

「それから俺が連れてくるまで知らなかったの？」

「ええ、不思議とね。行く用事もなかったし」

「お葬式とかは？」

「あら？そう言えばしてないわね？」

今気付いたのか母さんが考え出す。

「おかしいですね、お葬式位親戚が行うのでは？」

「確かに変ね、はやてちゃんの事といい、ご両親の事といい何か不自然ね……」

「まずい、母さんが気にし始めた。あんまり余計な事をされても困るのでごまかさないと。」

「あゝ、母さんそれ以上はちょっと、それ俺が今調べてる別件になる」

「まあ、嘘じゃないしな。」

「そうなの？」

「うん、ちょっと気になってはやての家を調べたら魔法が掛けられてた。認識阻害みたいな魔法が」

「「認識阻害？」」

「簡単に言えばそこにあるものを無い様に見せたりする感じ」

それを言った瞬間母さんが無表情になる。

「そんなものをはやてちゃんの家に仕掛けてたの？信じられないわね。あんな可愛い子を一人にするなんて」

「信じられませんね。四年前となると五歳ですか？そんな子供を一人にするなど正気の沙汰とは思えません」

まあ、ふたりの言い分は全面的に正しい。世間一般的に見れば五歳児が一人暮らしなど正気とは思えない。普通はしかるべき施設か、親戚の家で暮らすのが妥当だろう。

「一樹、必ず犯人を捕まえなさい。そして必ず豚箱にぶち込んでやるのよ」

「同感ですね。こんなことをする人は反省した方が良いでしょう」

「あゝ、頑張るよ」

適当に返す俺。・・・グラム提督を豚箱にぶち込むかあゝ。無理だな。階級の関係もあるけど、なにぶん管理局で上げた功績がある。もし逮捕となっても恩赦があるだろうから無理だろうな。結果が分かっている分テンションが上がるはずもない。

「あ、それと母さん。しばらくはやての事宜しく頼む。また一人になっちゃうから。リニスもひと段落したらまた来てくれるって言うてたから」

「分かったわ。休みの日はこっちに来るように言うておくわ。むしろしばらく家にいてもらった方が良くないかしら？」

「ん、じゃあそれはやてに聞いてみて。でも絶対遠慮しそうだから多少強引じゃないと無理だと思う」

「そうね、はやてちゃん結構遠慮しそうだし」

「それだったら今呼んだらどうですか？どうせなら夕飯も一緒にした方が良いでしょうし」

「あ、そうだね。じゃあ俺ちよっくら行ってくるわ。ついでに夕飯の買い物でもしてこようか？」

「あら、お願いしてもいい？」

「ん、何買ってくればいい？」

「そうね、今日は天ぷらにしようと思ってたからその材料お願い」

「エビ、イカ、サツマイモ、かき揚げ、他って感じで良い？」

「ええ、その位置ってきてくれれば問題ないわ」

「了解、何かあったら携帯にお願い」

「じゃあ、お願いね」

「アイアイサー」

俺はそう返事をして服を着替えてはやての家に向かう。徒歩三十秒といったところか？門を開けて玄関に行きチャイムを鳴らす。

ピンポン

一度鳴らすが返事はない。

ピンポン、ピンポン

今度は二回。しかしそれでも家の中からは何の応答もない。

ポーン

今度は連打してみたがやはり応答はなかった。

「いねーのか？」

頭をかきつつどうするか考える。

「連絡は・・・とねーな。そう言えばはやてが携帯持つてるかどうかもしらねーな」

携帯を開こうとしてその事実を思い出しそつとポケットに戻す。

「ま、とりあえずは図書館に行きますか。出かけたとしたらそこだろつ」

俺は先ず心当たりを探す事にした。はやてと言ったら図書館。これはもはや切っても切れないものだろう。そんな事を思いつつ図書館に向かっていている最中それは起きた。

「結界か・・・はてさてどなたが来るのやら」

そう呟くとまるで聞こえたかのように俺の前に現れる。身長は俺と同じくらいで、白くて、眼の下からほほにかけて赤いラインが入っている仮面をつけている。白地の服は青いラインで縁取りされていて、手には白い手袋をしている。体格は中肉と言ったところか。距離しておおよそ10メートル程前に立っている。一瞬でつぶせる距離だ。

「さて、あんたが結界を張った人か？」

「そうだ」

「理由を聞こうか？」

「闇の書の修復をやめろ。あれは貴様の手に余る代物だ」

「いや、俺が直す訳じゃないので俺の手に余るとか言われても、そんな事は百も承知なのだが？」

「そうなのか？」

「俺にそんな事出来る訳ねーだろ。俺はどちらかと言えば使いつぱしりだ」

「しかし、貴様が中心となって動いているのは変わりないだろう？」

「それについては否定しないけどね」

「ならば同じ事だ。闇の書の修復をやめろ」

「ん、分かった」

「・・・は？」

予想外の事だったのか聞き返してくる。

「だから分かったって言うてるじゃん。闇の書の修復をやめればいいんだろ？やめるからさ。もう用事は終わりか？これから夕飯の買

い出しに行かなければいけないので結界を解いてくれるとありがたいのだが？」

「いや、そこは普通「何者だ!？」とか「何故だ!？」聞くところでは無いのか？」

「うんにゃ、俺にとってはそんな事より、夕飯の買い出しに遅れてうちの家族に半殺しにされる方が割と死活問題なので。あんたが何者とか何をしようとしているとか割とどうでもよかつたりする」

まあ、知ってるし。相手の「氣」を探ってみてもやつぱりあのぬこ姉妹の片方だし。魔力は変えられても「氣」は変えられないようだ。

「しかし、貴様が本当にやめるとは思えんな」

「・・・じゃあどうしろと?」

「決まっている。少々痛い目に会ってもらっしかあるまい」

「いや、そうなるのが嫌だからやめるって返事をしたんだが?」

「それを信じられると思っているのか?」

「それを言ったら俺をたたきのめした位で、このプロジェクトが止まると思っているのか?」

「・・・」

その質問で帰って来たのは沈黙だった。

「え？マジ？ほんとにそう思ったの？」

「だ、黙れ！」

「うわ、マジ引くわ。第一あれだけ大々的に発表してんだから
そう簡単に止まる訳ないじゃん。ある程度研究して修復不可能って
分かるまでやんなきゃ中止にならないぞ？」

「そ、そんな事は分かっている！中止にするのに他の手段だってあ
る！」

「例えば？」

「た、例えば・・・関係者全員を襲ってやる！」

「・・・ずいぶん短絡的な発想だな。関係者の中には高ランク魔導
師もいるが返り討ちにあわないか？」

プレシアさんあたりならあっさり返り討ちにしそうだ。

「じゃあ、他に何かあるって言うんだ？！」

「関係者で一番身分の高い人の家族を誘拐して脅迫する」

「そう！それだ！それをしてやる！」

「因みに重要人物保護プログラムに従い現在高ランク魔導師の護衛
及び所在地の隠匿がされてるけど？」

「・・・・・・・・」

また沈黙してしまった。まあ、保護プログラムについては半分嘘なのだが。

「なあ、悪い事は言わない。やめとけ。今ならなんにも罪は犯してないんだから」

知り合いだけになんだか可哀相になってきた。

「それに、まだ闇の書だつて起動してないんだから。起動してからまたくれば良いじゃねーか」

「くっ」

悔しそうな感に呻く仮面男。そこで俺はティーン！ときた。

「そうだ！俺は今日ここで会った事は誰にも言わない！むしろ俺は誰とも会わなかった！」

「そ、そうか。そこまで言うなら仕方がない。今日のところは引いてやる。いいか？お前は誰とも会わなかった！そうだな！？」

「ああ、俺は誰とも会わなかった」

「よし。次は覚悟しておけよ！」

「おう。首を洗って待っててやる」

「覚えてろ！」

そう言うと仮面の男は転移魔法を使ってその場から消えていった。それからすぐ結界が解けいつもの街並みが戻ってくる。まあ、仮面の男と会う事は多分もう無いと思うが。って言うか、

「覚えてちゃ駄目だろ・・・一体なんで出てきたんだか」

ため息をつかづにはいられなかった。

八神はやて

今日、うちは図書館に行つとった。日長一日やる事もない上に、なのはちゃん達も学校でまだ帰って来てへん。最近まではリニスがおったんやけど、色々あつて今はうちの方には来れないみたいや。まあ、ひと段落したらまた来てくれる見たいやけど。それまでしばらくまた一人や・・・。そう思うとやっぱり寂しいなあ。そこでため息について顔をあげるとちょうど時計が目に入った。

「あ、もうこんな時間や」

時計は四時を少し過ぎた所やった。読んでいた本を元の位置に戻して、新しく借りる本をカウンターに持っていく。

「あら、はやてちゃんもう帰るの？」

「はい、もうええ時間になつとるので」

「そう、今日借りる本はこれ？」

「そうです」

「ちよつと待ってね。・・・はい、これでいいわよ。気をつけて帰ってね」

「おおきに。またお願いします」

「ええ、また来てね」

そう言つてカウンターのお姉さんといつもの会話をし、図書館を出る。夕暮れ時、いつもと変わらない街並み。一人さびしく家路につく。周りを見てみると買い物帰りの親子が手をつないで歩いた。

「お母さん！今日のご飯はなあーに？」

「今日は、マー君の好きなカレーにしましょうか」

「ほんと！？やったー！」

晩御飯を聞いて喜ぶ男の子。楽しそうに母親と帰っていく。それを見て思う。

「あかん。ほんまに美味しいカレーを作るんやったら二、三日前から仕込むべきや」

美味しいカレーを作るならじっくり作らなあかん！玉ねぎはちよつと多めにきつね色になるまで炒めて、一日目はルーを入れて終了！後は二日程かけて一時間づつ煮込むんや。ここで重要やと思うんはやっぱり寝かせる所やと思うんよ。そしてお肉や！使うお肉によつてもちよつと違うんや。豚肉やったらパイナップルを入れた方が相性がええし、牛肉やったら断然筋肉や！コクがでるうえに安い！こ

れは重要や。でも煮込むだけで数時間かかるんよ。そこが難点やるか？そして鶏肉やったら、鶏ガラをつこうてだしをとるんや！これも時間がかかるんやけど美味しいカレーが出来るんよ。せやから美味しいカレーは一日にしてならずなんや！そんな事を思つとると声をかけられた。

「何ぶつぶつ言ってるんだ？はやて」

「何って、美味しいカレーの作り方や。聞いて分からの？」

「いや、何を言ってるかまでは聞こえなかったし」

その声を聞いて反射的にこたえてしもうた。

「まあ、それについては後で聞くが、残念な事に家の今日の晩御飯は天ぷらと決まっているのだ」

「天ぷらなん？そんじゃうちはなんにしようか？お肉系か、魚系か、何にしよう？」

「残念だがはやての晩御飯も天ぷらだ」

「へ？なんで？」

「もちろん一緒に食べるからに決まってるじゃん。今日兄ちゃんが帰って来ててな。はやてに紹介ついでにみんなでご飯って事なんだがどうする？」

それを聞いてうちは迷わず答えた。

「もちろん一緒にがええ！」

「お？何かいつもより食い付きが良いな？」

う、あかん。嬉しくてつい大きな声が出てしもた。

「そ、そうか？いつも通りやけど？」

照れくさくて慌ててごまかす。

「それは兎も角一樹兄ちゃん何でここにおるん？今北産業で答えて
み」

「よし北！」

- ・帰って来て家で今回の事を説明。
- ・はやてを晩飯に誘いに家に行ったが留守。
- ・図書館方向に探しに来て見つけた。

今ここ」

「なるほど、よう分かったわ」

「そうか？舞弥^{まいい}。今から買い物に行くんだけどどうする？」

「それやったら一緒に付いてったる。食材選びなら任しとき！」

「お、それは助かる。買うものは分かるけど、いいものを選ぶとなるとなかなか上手くいかなくてな」

「あかんで、一樹兄ちゃん。そんなんやったら一人暮らした時大変やで？」

「まあ、一人暮らしは自分だけ食べるから別に良いんだけどな」

「駄目や、駄目駄目や。何時でも安く美味しく食べるのはええもんやで？」

「確かにな。それまでにはスキルアップしてみるよ」

「それでよし。そう言えば一樹兄ちゃん頑張ったみたいやん。三人とも言っとったで」

「へえ、何て？」

「何時も邪魔ばっかしたり、敵と入れ替わられたり使えへんけど、最後にええ仕事したって言っとった」

「……誉められた気がしない件」

「多分誉めてへんよ？」

「やっぱり？でもまあ、事件も無事問題なく解決しました。しばらくは通常運転に戻ります。あ、それとはやてはリニスがまた来るようになるまで家に泊まりと言う事になってますので」

「……かまへんけど、そう言うのって本人から了解をとってからなんとちゃうん？それに迷惑やあらへん？」

「迷惑な訳ないじゃん」

「でも、車椅子なんよ？足動かないんよ？色々頼む事になるんよ？」

「構わないっての。なんだってしてやるよ。ちったあ斎藤家を頼れ。お隣さんで、俺と亜夜の友達なんだから」

「ええの？ほんとにええの？」

「構いません」

「・・・ホンマに？」

「男に二言はねえよ」

「そんなら宜しくな。一樹兄ちゃん！」

「おう、よろしくなはやて」

そう言うで一樹兄ちゃんは頭をなでてくれた。その手はゴツゴツしてて堅かったんやけど暖かった。

「それはそうと一樹兄ちゃん」

「ん？」

「舞弥のネタは分かりずらくあらへんか？」

「はやてなら気付いてくれると信じてた（キリッ！）」

「さやか。それより一樹兄ちゃん！早よせんとタイムセールが始ま
つてまう！急がんと！」

「お？もうそんな時間か？じゃあ、主婦たちの戦場に行きますか。半額弁当を求めに！」

「あかん！今日はウイザードクラスが来るんやで！」

「なん・・・だと！？仕方ない。天ぷらの材料だけ買って帰るか」

「賛成や」

「はやては何か食いたいやつあるか？」

「タコ！ゲソ！豚肉！」

「何故酒がすすむ様なラインナップなのか？」

そんな会話をしながらうちと一樹兄ちゃんは買い物に行ったんや。二人で買った買い物はとても楽しいかった。楽し過ぎてちょっと買い過ぎてしもつたんは仕方のない事やと思うんよ。

「買い過ぎちまったな」

「でも、このくらいの量なら一樹兄ちゃん食べられるんとちゃうか？」

「待て。いくらなんでもこの量の天ぷらは無理だ」

一樹兄ちゃんは両手に持っている袋を持ち上げ言ってきた。

「そんなら、何日かに分けて使っしかあらへんな。そうなるなら、三日はシーフードづくしになりそうやな」

「まあ、バリエーションがあるなら問題ないな」

「任じとき。明子さんと一緒に美味しいご飯作ったる」

「はやてを呼べ！って言われないうつにな」

「雄山乙」

そんな他愛もない話しをしとるといつの間にか家に着いとった。

「はやてちよっと待っててくれ。これ置いてくるから」

「かまへんよ。用意位一人で出来るで？」

「遠慮すんな。荷物位持ってやる」

「うん、そんじゃお願いするわ」

「おう」

そう言っつて一樹兄ちゃんは一袋の物袋を持って家に入るとまたすぐ出てきた。

「そんじゃ行くか」

「と言っつても隣やけどな」

「徒歩三十秒つてすこいよな」

「せやな。そしたら一樹兄ちゃんはリビングでまっとなって。すぐ用意できるし」

「了解」

そしてうちは自分の部屋に着替えをとりに行っただんやけど、その時それが起こったんよ。着替えとかを用意しといたら後ろの本棚が光り出したんよ。正確に言うとその本棚に置いておいた本が光り出したんよ。

「な、何なん!?!」

その本はうちが生まれる前からあった本で、本に十の字に鎖がかかっとなって、どうやっても開けなかつた本や。それがいきなり光り出して、本にしてあった鎖がちぎれて、勝手にページがめくられていく。

「な、なんなんや! 一体!?!」

そしたらひときわ強く光ると目を開けてられんかった。少ししてゆっくり眼をあけると部屋の床に漫画でよくある様な円の中に三角形を重ねた六芒星の魔法陣かくるくる回っとなってその上には五人の人がおった。

「どうしたはやて!」

そう言って部屋に入ってきたんは一樹兄ちゃんやった。

「か、一樹兄ちゃん!」

何が起こったのかわからず、入ってきた一樹兄ちゃんに抱きつく。
そして一樹兄ちゃんを見ると一樹兄ちゃんも固まっとった。

「五人・・・だと!？」

一樹兄ちゃんがそう言ったのが確かに聞こえた。

第五十一話（後書き）

守護騎士を勢い余って一人増やしてしまった。・・・どっしり

第五十二話（前書き）

今年最後の投稿かな？多分次は新年になると思います。

第五十二話

斎藤一樹

はやての叫びを聞く前に強い魔力を感知した。それと同時にスサノオが報告してくる。

『クソ野郎、はやての位置から強い魔力反応有り』

「知ってる！」

『な、なんなんや！一体！？』

聞こえてきたのははやての叫び声。と言うかこの状況で考えられる事は一つ「闇の書の起動」だ。襲撃の可能性も無くはないがはやてに会う前に丁重にお帰り願ったのでその可能性は低い。しかし、はやての誕生日まで一カ月以上あるというのにもう起動するのか？ちよつと早すぎないだろうか？そう思いつつ気配を探ると、はやての部屋から感じた気配は五つ。

「ッ！？」

全身に緊張が走る。おかしい。ヴォルケンリッターならシグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラの四人のはずだ！それが五つあるという事は襲撃者か！？不味い！ほんとにそうならこの遅れは致命的だ。俺は急いではやての部屋に向かう。リビングから飛び出し、廊下を駆け抜け、はやての部屋のドアを勢いよくあける。

「どつしたはやて！」

「か、一樹兄ちゃん！」

俺が部屋に飛び込むと、ドアの近くにへたり込んでいたはやてが飛びついてきた。俺ははやてを受け止めて前を見ると、そこにはヴォルケンリッターがいた。ヴォルケンリッターだった事にほっとしながら急いで確認する。が、

「五人・・・だと!？」

驚いて声に出す。そこにはシグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィラそして・・・?誰だ?顔はうつ伏せになっていて見えないが、髪の色は黒、短く切りそろえてあり、体格は普通より鍛えられている感じだ。って言うか、何で一番後ろで傷だらけでボロボロになってぶっ倒れているんだ?!そんな事を考えていると四人が話します。

「闇の書の起動確認しました」

桃色髪をポニーテールにしたけしからん胸を持つシグナムが応える。

「我ら闇の書の蒐集を行い、主を守る守護騎士でございます」

金髪でショートボブのほんわかした雰囲気のリック訂正、シャマルが応える。

「夜天の主の元に集いし雲」

犬の耳と尻尾を付けた盾役のザツフィーが応える。

「ヴォルケンリッター、何なりと命令を」

最後に赤い髪を三つ編みで二つにわけたエターナルロリータのヴィー
ータが応える。

「……………」

もちろんヴォルケンリッターの後ろに倒れてる人からの応答はなかつた。大丈夫か？他の四人は後ろの人の事気付いているのだろうか？そろそろ本気で倒れている人の事を心配し始めた時、

「キユウ~~~~」

と言つてはやてが可愛い声を出して目を回し意識を失う。脳が考える事を放棄して機能を一時停止したか、闇の書の起動の反動かは分からないが、このタイミングはつきり言つて最悪である。ヴォルケンリッターの皆様が俺をぬつ殺すフラグが立つてしまった。

「おい！はやて！？」

俺はそれを回避するためはやてに声をかけるが、

ジャキ！ヒュン！

と音がしたと思ったら、首のあつた位置を何かが通り過ぎ空気が流れ、頬をなでる。それはいち早く動いたシグナムのデバイスであるレヴァンティンの通つた音だった。俺は寸でのところで体を後ろに引き斬撃をかわす。どうやらフラグは折れなかつたらしい。

「…今のをかわすか。貴様我が主に何をした」

言いがかりです。どちらかと言うと俺がしたのではないのですが…
…。徐々に殺気を強めていくシグナムに声をかける。

「落ち着けピンク」

「誰がピンクか！私はヴォルケンリッター、烈火の将シグナムだ」

「同じく、鉄槌の騎士ヴィータ」

「湖の騎士、シャマル」

「盾の守護獣、ザファイラ」

「……………」

もう、後ろの人はとりあえずほったこと。気配を感じるってことは
とりあえず生きてるみたいだし。

「え〜っと、マグナムにPSPにランスロットにザッフィーか？ず
いぶん個性的な名前だな？」

「ちげーよ！ほとんどあつてねーじゃねーか！テメー、馬鹿にして
んのか!？」

「うん。厨二チックな二つ名を名乗る人にはその位がちょうどいい」

「決めた。テメーはアイゼンの頑固な汚れにしてやる！」

「自分の武器を好んで汚すとか、馬鹿なの？死ぬの？」

「ぶっ潰す!!」

ヴィータが顔を真っ赤にしてデバイスを起動し、振りかぶって襲いかかろうとするが、それをシグナムが止める。

「落ち着けヴィータ。まだ我が主がやつそばにいる。そのまま攻撃するのは不味い」

「フウーハハハハハ！貴様らの主は我が手中！おっと動くなよ？動いたら主の首が胴体とお別れする事になるぞ？」

俺ははやての首筋に手を置く。

「クツ！貴様！卑怯だぞ！」

「ありがとう」

「誉めてないですよ?!」

「貴様！それでも男か！」

「テメー！」

ヴォルケンリッターの皆様が悔しそうに歯ぎしりする。やべえ、何か楽しい。そう思ってさらにからかおうとすると、

スッ

と首筋に刀が添えられた。そして底冷えする程冷たい声で聞かれた。

「何してるの？お兄ちゃん？」

その声の主は亜夜だった。

「あ、亜夜？どうしてここに？っていつか何時からそこに？」

震える声で亜夜に聞く。この妹、放つ殺気が半端じゃねー！

「お兄ちゃんの高笑いが聞こえた時ぐらいから。ここにいる理由は、ちょうど学校から帰って来たときに、はやてちゃんの部屋から魔力を感じたからアマテラスに頼んで索敵したら何かもめてるみたいだったから助太刀しに来ただけど・・・敵はお兄ちゃんだったんだね？」

ペチ、ペチと俺の首筋を起動して抜刀した状態のアマテラスの平地で叩く。亜夜？これ非殺傷設定だよな？

「まってまって！あつちに訳の分からん連中がいるぞ！？俺よりそつちを疑うべきじゃないのか？！」

そう言うと亜夜は視線をヴォルケンリッターに向けるがすぐに俺の方を見る。

「さっきの会話を考えると、はやてちゃんを守ろうとしている人達ヴォルケンリッターに、はやてちゃんを人質にとる悪役（お兄ちゃん）だよな？」

ジャキ！

と音がして、今まで刀の平地の部分がペチペチ当たってたがそれが返り、刃先が首の方に向く。

「ちょ！危ない！非殺傷設定でも刃先を向けちゃ駄目だろ！」

「殺傷設定だよ？」

「もつと駄目だよ?!」

亜夜のとんでもない一言に驚愕する。そして俺の意識が完全に亜夜に向く。するとシグナムが鋭く声をあげる。

「シヤマル！今だ！」

「ええ！」

そう言うとシヤマルが持っていた闇の書が開き、目の前に円形の空間が出てきてその空間に手を入れる。

「やばっ！」

それを見た瞬間やばいと感じるが時すでに遅し。俺の胸から手が生えてきて、その手にはリンカーコアが握られていた。

「お、お兄ちゃん!？」

俺の胸から生えてきた手にビビる亜夜。対する俺は、

「おゝ、これが俺のリンカーコアか・・・」

シヤマルの手の平の上に浮かんでいるリンカーコアを見て感嘆の声を上げる。

ツンツン

さらにつついてみると何か胸のあたりがくすぐったかった。

「リンカーコア捕獲！蒐集開始！」

シャマルが声を上げ蒐集を開始する。リンカーコアから魔力が抜かれていき、闇の書のページが埋まっていく。

「す、吸い取っちゃらめ~~~~~!!!!」

「ぶ~~~~~!!!!」

あまりのくすぐったさに変な声を上げる俺に、それを聞いて嘔き出す亜夜。蒐集は一瞬で終わった。それと同時にその場につつ伏せに倒れ、

「く、悔しいでも感じちゃう」

ビクンビクンと痙攣する。

「ちょ、お兄ちゃんやめてよ。はたから見るとかなりキモイよ？」

「……それもそうだな」

そうやって俺は体を起して立ち上がる。その際はやてを抱え（例によって小脇に抱えている）ベッドの横に移動し寝かせる。その様子を見てヴォルケンリッターの皆様がかなり驚いていた。

「な、何で動けるんですか?!」

シヤマルが代表して俺に聞いてくる。

「む?失礼な。怪我もしてなけりや意識もある。動けるのは当たり前だろう?」

「・・・そうではない。リンカーコアから魔力を残らず吸い取ったのだ。普通なら二、三日は動けんはずだが?」

それを聞いたシグナムが答えてくる。

「魔力が空になっただくらいで動けなくなる訳ないだろ?」

「今まで蒐集してきた連中は例外なく動けなかったぞ?」

俺の答えに突っ込むヴィータ。

「鍛え方がたんねーんじゃね?」

「ほんとに貴様は何者だ?」

ザフィーラが人外でも見ている様な表情になる。ザッフィーにその目で見られるとは思わなかった。

「あゝ、そうだった。自己紹介がまだだったな。俺は斎藤一樹14歳、管理局地上本部、首都防衛隊所属三等陸士だ。はやてとは家が隣同士でここにいる亜夜の友達だ。まあ、俺ともそうだが。あ、ジヤミル「闇の書」何ページ埋まった?」

「シヤマルです！え、え〜と九頁半ですね・・・じゃなくて管理局？！」

そう言うとヴォルケンズは一斉に戦闘態勢に入る。が、

「あゝ、待った待った。戦う気はさらさらないよ？しかし、九頁半とか・・・しよぼ。オリ主ならどーんと三ヶタ位埋まるのが常識だというのにorz」

地味に落ち込む俺にシグナムが追撃する。

「ふん、存外大したことはなかったのだな」

「おふう」

俺のハートがブラウクンファンタズム。それは兎も角気を取り直して答える。

「本当に戦う気はないので安心してください」

「信用ならんな」

「ええ〜！じゃあどうすれば信用してくれる？」

「先ほどまで我が主を人質にしていた輩の言う事を信用出来ると思っっているのか？」

.....すごく正当な意見です。

「え〜っと、じゃあはやてからの説明なら納得するって事？」

「そうだな。我が主からの説明ならば問題無い」

「じゃあ、はやてが起きるのを待つか。亜夜すまん母さんにご飯は遅れると言っといてくれ。トラブルがあつて立て込んでるって」

「うん、分かった。あ、すみません兄が迷惑かけました」

亜夜はそう言つとペコリと頭を下げて謝る。

「いや、少々驚きはしたが被害はない。頭を下げないでくれ。それに下げるべき者はそいつだ」

そう言つて俺の方を指さす。

「それもそうですね。お兄ちゃん！この人達にちゃんと謝つてよね
「！」

「フヒヒ、サーセンすいません。マジごめんなさい。すみませんでした」

亜夜がまたアマテラスを首に突き付けてきたので慌てて姿勢を正して土下座する。

「よろしい。じゃ、私は戻るから。あ、お母さんに言ったらまた来て良い？」

「良いけど、ご飯はどうすんだ？食つてくれば良いじゃねーか？」

「・・・あのね、はやてちゃんが倒れたんだよ？心配するのは当た

り前でしょ！ご飯は後でも食べられるから良いの！」

「ああ、それもそうか。まあ、大丈夫だと思うけど来たいんならどうぞ？」

「うん、分かった」

「じゃ、よろしくな」

「はい」

亜夜はそう言っつて部屋から出ていく。

「よく出来た妹だな。ほんとに貴様の妹か？」

「正真正銘、俺の妹です。親が再婚してその時の連れ子とか、俺が捨て子で実は本当の兄妹じゃないとか、その逆で亜夜が捨て子とかじゃないので安心してください」

「何の安心だ」

「実は義理の妹でしたっつていうフラグ。大きくなったら告白されて大いに困るフラグです」

「……貴様は妄想癖でもあるのか？」

「んな訳ない」

基礎知識のない人にこう言っつた話をすると、こう言っつ答えが返っつて来るといふ事を思い知らされました。

「所で、後ろで倒れてる人はどちらさま？一緒に出てきたみたいだけど？」

俺はいまだに倒れている人物を指さしてヴォルケンリッターの皆様
に聞く。流石にこのままではあまりにも不憫でござる。

「「「「え？」「」「」

そう言われて初めて気が付いたのか倒れている男を全員が見る。

「シグナム、おめーの知り合いか？」

「いや、知らん。シャマル心当たりはないか？」

「ないわね。誰かしら？ザフィーラは？」

「知らん」

どうやら全員知らんらしい。

「知らないなら知らないで良いんだけど、怪我してるみたいだから
手当てしてあげたいんだけど？それともそつちで手当てしてくれる？」

「む、そうだな。もし仮に我々と一緒に出てきたのなら我等の仲間
の可能性がある。シャマル、頼めるか？」

「ええ、大丈夫よ」

「問題ない」

「何でテメーが答えんだよ？」

「勢いでつい」

ヴィータの突っ込みに平然と答える。そんな俺はほっというてシャマルが治療を開始する。

「クリアールヴィントお願い」

そう言うと男を緑色の光が包み込み怪我がみるみる治っていく。

「お、傷があつという間に治っていくな。相変わらず回復魔法って便利だよな」

俺は龍掌で人の怪我は直せるが自分の傷は治せない。何とも不便なものである。なので回復魔法を習得しようとしたのだが才能がないのか適正がないのかほとんど使えなかった。一応かすり傷程度なら直せるのだが、自分の体の回復とほぼ同じなのであまり意味がない。それは兎も角、男を回復したは良いが目を覚ます気配はない。

「完治した？」

「ええ、傷は全部ふさいだわ。でもダメージがまだ残ってるのみたいね。バイタルは安定しているけど、目を覚ますにはもうちょっとかかりそうよ」

「ふん。つかぬ事を聞くけど今まで五人じゃなかったの？」

「ああ、守護騎士と言う意味では我等は五人では無く元々四人だ。」

前回起動したときもそうだった」

「増える可能性はあるの？」

「なくはないだろうが、初めての事なのでな何ともいえん」

まあ、そうだな。しかし起動が一月近く早まるとは予想GAIです。まあ、早まった分早く蒐集出来るのは良いけどはやての病状の進行が早まるとか勘弁願いたい。

「おい、カズキとかいったな？管理局の目的は何だ？」

「目的？」

「惚けんじゃねー！管理局が「闇の書」を狙う理由だ！」

「あゝはいはい、その事ね」

「やっぱり管理局はまだ「闇の書」を追っているんですか？」

「うゝん、どう説明したもんか」

ここで話して良いもんか？いきなり「闇の書」を「夜天の書」に修復するぜ！って言っても信じてくれそうにないし、しかもはやてはまだ起きないし。今のヴォルケンリッターの方々警戒心マックスだしな。

「……答えられん理由でもあるのか？」

「ん？そうじゃないんだが、話して信じてもらえるかどうか分かん

ねーし」

「それを決めるのは我々だ」

「・・・さつき俺の事信用できないって言ったばっかじゃなかったけ？」

「信用は出来ん。が、聞いた情報の正誤を決めるのは我々だ」

「ま、その通りか。じゃあ話すけど心の準備は万全か？」

「良いからさっさと話せ」

俺は一度深く呼吸をして話す。

「管理局の目的は「闇の書」を修復して「夜天の書」に戻す事だ」

「ふん、出鱈目を」

「ほれみる、信じねーじゃねーか！」

「そのような事信じられるか。管理局とは長い間敵対していた。それこそ貴様が生まれる前からだ。それがいきなり修復だと？「闇の書」は壊れてなどいない」

聞く耳もたんといった感じのシグナム。

「そつちがどう言おうが管理局の目的は変わらない。これは地上本部と海との合同プロジェクトだ。過去の管理局員が「夜天の書」を改編し「闇の書」にしてしまった事の清算を俺達がする事になった

んだ」

「ふん、勝手にしろ。そっちが本当の事を話さん限りこっちが貴様らを信用する事はない」

「ほんとだつてのに」

ふう、とため息をつく。ファーストコンタクトがどうであれこの話
が通じるとは思っていない。誰だつて「あなたは壊れています。修
理するから手伝つて」何て言つても信じられるもんじゃない。やっ
ぱりここははやてと一緒に少し過ごしてもらうしかないだろうな。
それまでに拠点作らないとだな。そんな事を考えているとシャマル
が話しかけてきた。

「え〜つとカズキ君？ちょっと聞きたいんだけど、私達の主、はや
てちゃんつて言つたわよね？」

「ん？そうだけど？」

「はやてちゃんどこが悪いの？」

そう聞いてきたシャマルの視線の先には車椅子があつた。

「ああ、こっちの医者だと原因不明の下半身の麻痺だけど、シャマ
ルなら原因分かるだろ？」

「ええ、どうも「闇の書」が負担をかけてるみたいね」

「・・・ほんとか？」

シグナムが聞いてくる。

「ええ、どうも過剰に魔力を吸い取ってしまったているみたいね。それをどうにかしないと麻痺は治らないわね」

「書を完成させれば治るのか？」

「そうね。多分そうだと思うわ」

「そうか、ならば「あゝ、ちよいと待ち。蒐集に関してはまだするな」・・貴様には関係ない」

「まずは主に許可をとってからするのが筋ってもんだろ？」

「む、確かにそうだな」

蒐集する気満々のヴォルケンリッターの皆様。

「まだはやてと話もしてないんだから起きるまで待つとけ」

「言われるまでもない」

はあ、早くはやて起きてくんねーかなー。亜夜も妙に遅いし。だんだんと無言の時間が増えていった。

八神はやて

うーん、ちょっとしたぬくもりを感じながら寝返りをする。何や変な夢を見た気がする。自分の部屋で泊るための準備をしといたら、本棚の本が勝手に動き出して、しかも床に出てきた魔法陣から人が

出てきよった。でも今こうしてベッドの上にいるちゆうことはきつと夢やったんやな。そらそうや、本が勝手に動いたり、いきなり魔法陣が浮かび上がってそこから人が出てきたりするはずがあらへん。漫画やアニメや小説やないんやから。そんな事を考えながらふと思っ。

(はて？うちは何時の間にベッドに入ったんやろか？)

確かに今日は朝にしっかりと起きたはずや。そのあと朝ごはんを食べて、勉強もして、そのあとに図書館に行ったはずや。その帰り道に一樹兄ちゃんにあって……………

「!？」

まさかと思いなながらベッドから身を起こす。足は動かないので手で体を支えている。

ガバ!

体にかかっていたタオルケットが床にずり落ちる。そして起きたうちが見たんは、一樹兄ちゃんと、黒いピッチリとしたインナーをきた四人と、違う服装で横になっている一人やった。

「お、やっと起きたか」

「か、一樹兄ちゃん？そっちにおるんはどちらさん？」

「ん？覚えてねーのか？」

「うっすらとしか」

「そうか、じゃあ改めてもう一度聞くと良い」

ほれ、そう言っつて一樹兄ちゃんが促してくる。うちはそれを見て、四人の方を見ると、四人とも片膝着いて下を向いとつた。なんやかしこまった感じじゃ。

「そ、そやね。ゴホンツ。それじゃ改めて、あんさん達は誰で何でここにおるん？」

「ハツ、我等はヴォルケンリッター。主と闇の書を守る守護騎士に御座います。闇の書が起動したため参上いたしました」

「闇の書？」

「これにございます」

そう言っつて金髪の人に本を渡された。それは部屋の本棚に置いておいた鎖で開かんようになつとつた本やつた。今は鎖はなくなつて、自由に開くようになつとる。ちよつと気になつたんでペラペラとめくると、始めの数頁まではなんや知らない文字で書かれとつたけどそのあとは全部真つ白やつた。

「始め以外真つ白なんやけど？」

「それは「蒐集」をしていないからです」

「蒐集？」

「はい、魔力のあるものから魔力を奪い、「闇の書」の力にするの

です。「闇の書」が完成すれば主の足も治り、巨大な力が手に入ります」

「と、言う事はもう誰かから蒐集した言う事やな？」

「はい。それはs「アホー！ー！！」あ、主？」

「あかんやんか！その人は大丈夫なん？奪うなんて人様に迷惑をかけるようなことしたら絶対にあかん！それやったらうちはこのままの方がましや！それで誰からとつたんや！？謝らんと・・・」

「あ、はやてそれ俺から」

「は？」

「だから俺が蒐集されたんだよ。だから俺に謝れ」

「・・・ハッ。一樹兄ちゃんやったんか。どうせまたしょうも無い事して困らせたんやろ？それやったら自業自得や。うちが謝る必要は何処にもあらへんし、この人達が謝る必要もあらへん。むしろ一樹兄ちゃんが謝れ」

「鼻で笑うとか信じらんねー。しかし、事実なので言い返せません」

「まあ、蒐集やったけ？それをされたんが一樹兄ちゃんて良かったわ」

「俺の心配とか一切無しな事に視界がぼやけそうです」

「・・・で大丈夫だったん？」

「くすぐったかった」

「死ねばええんとちゃうか？まあ、それは兎も角、今後は蒐集は禁止や。うちはそんな力要らんし、みんなと楽しく暮らせればそれでええよ。だから、みんなの名前おしえてな」

「ですが主。よろしいのですか？」

「ええんよ。人様を不幸にしてまで幸せになりたいと思わんよ。そんな事より名前教えて」

「分かりました。私は烈火の将、シグナム」

「鉄槌の騎士、ヴィータ」

「湖の騎士、シャマル」

「盾の守護獣、ザフィーラ」

みんなが順番に答えていく。

「うちは八神はやて。よろしゅうな。新しい家族が出来て嬉しいわ
そう言ってみんなと握手をする。

「うちの家族はお払い箱ですね分かります」

「んな訳あるかアホ！昔っから家族やる!？」

「俺とはやてがいつの間にか結婚してた。とんでもない飛躍に俺も驚きを隠せない」

「・・・ハッ！そう言う事は鏡を見てから言いや」

「・・・はやての突っ込みが何時になく容赦がない気がする」

若干へこんどる一樹兄ちゃんは置いてってと。どうするか考えていると玄関が開く音が聞こえた。誰やる？

「はやてちゃん起きた？」

部屋にきたんは亜夜ちゃんやった。

「お、亜夜遅かったな」

「うん、ご飯の手伝い頼まれちゃって。とりあえず作り終わったから来たんだけど、どうする？ご飯出来たけど？」

「ん、じゃあみんなで食べっか。はやてもそれでいいか？」

「ええよ、その前にみんな何か着いへんとあかな」

「俺はこのままでも良いけど？」

「「おまわり明子さんこっちです！！」」

「嘘です。ごめんなさい」

そんな事を言いながら準備を始めるうちらやった。

第五十二話（後書き）

五人目は次あたりに分かると思いますww
皆さんは年越しはどう過ごしますか？作者は恐らく一人さびしく過
ごすと思いますww。今年は緑のためきで年越しそばかな？ww
wそれでは皆様よいお年を！！

第五十三話（前書き）

あけましておめでとつ御座います！今年も頑張つて書きますので宜しく願ひします！

第五十三話

斎藤一樹

ヴォルケンリッターを引き連れて家に行く。服ははやての両親の服とはやて自身の服でちょうど良いのがあったのでそれを着て貰っている。玄關を上がりリビングに行くとすでに配膳は終わっていて、母さんと兄ちゃんが俺達を待っていた。

「戻りましたか一樹」

「いらっしやいはやてちゃん。え〜つとそちらの人達は？」

「おじやましています。え〜つとですね、魔法関係なんですけど、どうもうちを守ってくれる人達みたいなんです。詳しい事情はこれから聞きます。そんで、そちらが一樹兄ちゃんのお兄さんでいいやるか？」

「ええ、斎藤晃です。宜しく」

「こちらこそ。八神はやてです」

兄ちゃんとはやての自己紹介が終わる。それを確認した母さんがはやてに聞く。

「あら、はやてちゃんも魔法が使えるの？」

「いや、まだ使えない」

「まだ、と言う事はそのうち使えるようになるんですか？」

「予定だとな」

「え？ホンマなん？一樹兄ちゃん」

「おう、時間はかかるけどな。なのちゃんやフェイトちゃん、亜夜みたいに魔法も使えるようになるぞ。やったね！これではやても轟砲ロリの仲間入りだ！」

「魔法が使えるようになったら真っ先に一樹兄ちゃんを打ち抜いたるわ」

「あ、賛成ー！女の子に対して失礼だよねその言い方」

「なん・・・だと?!」

どうやら自分で死亡フラグをおっ立ててしまったらしい。

「はいはい、それじゃあご飯を食べましょうか。そちらの方々も座ってくださいな」

「あ、いえ私達は・・・」

「良いから座れって、そうしないと食事が始まんねーんだから。それともそのままはやてを待たせるのか？」

「む、仕方ないか」

そう言うとヴォルケンリッターの面々も席に着く。

「うし、じゃあ食うべ。全ての食材に感謝を籠めて、いただきます」
「トリ」

「「「いただきます」」」

そう言っただけで食事が開始された。雑談をしながらみんなが思い思いに食べ始める。見る見るうちに天ぷらが減っていく。ヴォルケンリッターはその様子に啞然としていた。

「あ、母さん塩とって」

「はいよ」

そう言っただけで母さんは塩を渡してくる。

「一樹、天つゆをとってください」

「うし」

俺はそばにあった天つゆの原液を渡す。

「一樹兄ちゃんエビとってーな」

「残念エビはこれが最後だ。うまうま」

「な、なんやてー！」

「あー！私まだ二匹しか食べてないのに！ー！お兄ちゃん食べすぎ！」

「！」

「食事は戦いだ。強ければ食べられ、弱ければ食べられない。弱肉強食でござる。」

「はあ、全く。二人ともこれをどうぞ。」

「「良いの？」」

「良いですよ。私はもう十分食べましたから。」

「「ありがとうー！！」」

「全く一樹は。少しは妹に譲るといふ考えはないのかしら？」

「そんなものはとうの昔に捨ててしまった。」

母さんに聞かれちょっと遠い目をして答えると、はやての目が「カッ」と見開く。

「隙あり！これもろたで！」

「ぬあ！俺のかき揚げを！？」

「私も！」

「あ！俺のイカ天！」

「では私も」

「おふう！兄ちゃんまで！俺の豚天を！つつかみんなで集中攻撃とかひどくね？いじめ？」

「自業自得やる？」

「その通りですな」

「仕方ないよね」

「ふえふふおふえー、ふあれ？ふおふいふあんふあ？ふふあふふおふあ？」

副音声（ですよねー、あれ？どしたんだ？食わんのか）

俺はいまだに手を食事に手をつけていないヴォルケンリッターに聞く。

「あかんよ好き嫌いは」

「はやてちゃん多分違つと思う。きつと箸が使えないんだよ」

「亜夜、それも違つと思いますよ？」

「なんだ違つのか？」

「・・・何時の間にフォークをとりに行つたんですか？」

「あ、いえ気にしないでください。なにぶんこう言った食事に慣れていないもので・・・」

「あら？和食は駄目だったかしら？」

「母さん、それも違いますよ。シグナムさんが言っているのは「賑やかな食事」という意味では無いですか？」

兄ちゃんがシグナムに聞く。

「・・・はい。その通りです。主と一緒に食事をする等今までありませんでしたので」

「そうなん？」

「ええ、こんなふうに食事をした事はありませんでした」

ちよつとしんみりした空気になる。

「それやったらこれからはこんな感じになるで？食事はみんなで食べた方が美味しいしな！」

「そうだな。ほれ、遠慮しないで食べちまえ。冷めたらせつかくの料理が不味くなっちまう。熱いうちに食べ」

そう促すと先ずヴィータが箸を握る。しよっぱなから上手く使える訳がないのでグーで握る感じだ。そして目の前のさらに分けてあつた分の天ぷらに箸を刺して、天つゆにつけ食べる。その行動にみんなの視線が集中する。

モグモグ……

何度か噛んだ後不意に動きが止まる。そのあと少し、ほんの少しだが顔が綻んだ。

「美味いか？」

俺が声をかけると「ハッ」として周りを見る。自分に視線が集まっているのに気が付いたようだ。すると、少し顔を赤らめてから、

「う、うるせー！」

と答える。まあ、そう言いながらも箸で食べ続けているので美味かったのだろう。その様子を見て他の三人も食べ始める。シャマルとザフィーラは俺の持ってきたフォークを使っているが、

「なあシグナム」

「・・・なんだ」

「何でおめーは箸が使えるんだ？」

「変か？」

「いや、他の三人が使えないみたいだから」

そう言って他の三人と見比べる。

「見よう見まねだ。しかし、なかなか便利だな」

「はあ、シグナムは器用なんやね」

「ありがとうございます」

「初見で箸を使いこなすとか・・・お前「騎士」じゃなくて「武士」だろ？」

「む、貴様！騎士を愚弄する気か？」

「いや、シグナム誉めてもおらんけど愚弄はしてへんよ。うちもちよつと納得しそうになってしまたし」

「そうですか・・・」

ちよつと「しゅん」となるシグナム。なぜだ？

「所で「ぶし」ってなんなんですか？」

気になったのかシャマルが聞いてきた。

「武士と言うのは10世紀から19世紀にかけての日本、私達の国ですね。そこに存在し、戦闘を本分とするとされた宗家の主人を頂点とした家族共同体の成員ですね。古代末に発生した武士はその武力で古代を終焉させ、中世社会で主導的役割を果たし、近世で完成された社会体制を築き上げました。同義語として兵者^{つわもの}、侍、武者などがありませんね。「ものふ」の読みは物部氏が語源とされていますよ。こつちで言う騎士と武士は似たような部分もありますしね。決して悪い意味ではありませんよ」

「そうだな。極端に言えばベルカ式かミッド式かって違いかな」

「そうなのですか？」

「そやね。「武士道」って言葉もあってな。「恩義のある者に仕え

る心」とか「裏切りは卑怯」「主君と生死を共にするのが武士」って考えやね。「信・義・忠を重んじ、気高い振る舞いを行なうのが武士」っていうふうにも言われとるんよ。だから落ち込まなくてもええんよ?」

「お、落ち込んでいません!ですがその精神は確かに騎士に似ている部分もありますね」

あ、表情が明るくなった。なんだ、武士の意味が分からなかっただけか。つつか、

「俺ははやての知識にびっくりです。普通小学三年生がそんな事知ってるか?」

「伊達に本ばつか読んどる訳じゃないんよ。歴史の本も好きやし」

「亜夜は分かった?」

「うつ!・・・武道のあたりはこう感覚的にそんな感じだっというのは分かるけど・・・」

「後はちんぷんかんぷん?」

「う、うるさいな!しょうがないでしょ!」

「それでいいのか?剣道少女よ。せめて武士あたりは知っておいた方が良くないじゃね?」

「うつ、そんな事言ったらお兄ちゃんはどうなの!?格闘技の歴史とか知ってんの!?」

「まあ、格闘技って言ったらここ100年位だしな。ビバ近代スポーツ!」

そう言ったのだが、

「おや?一樹は中国拳法もしてませんでしたか?」

「じゃあ、四千年分の歴史を知らないと駄目だね」

「/(^o^)\・・・ナンテコッタイ」

ファツキン!3900年も増えちまった。兄ちゃんみたいにチートじゃねーんだ。そんな事いちいち覚えてられつか!そんな事を思っているとヴィータの箸が止まっている事に気付いた。どうしたかと思っただけは残っているのにご飯が空つまり、

「母さん、ヴィータがおかわりだって」

「あら、そう?まだあるからいっぱい食べてね」

そう言って母さんにヴィータの茶碗を渡す。

「あ、・・・礼は言わねーかな!」

「あー、まあ俺には良いけど他の人の時は言えよ?あとおかわりの時は、二杯目は元気よく!三杯目はそつと出す。これ基本」

「そ、そうなのか?」

「ヴィータちゃんそれ嘘だからね？うちではそんな事しないで大丈夫だよ」

「なっ！て、テメー！！」

「フーハハハア！ヴィータはからかいやすくて良いのうー！そして亜夜ばらすの早すぎ」

「ぶっ潰す！！アイゼン！！」

ヴィータがアイゼンを起動し振りかぶる。

「ストップ！」

俺が少し鋭く声を上げる。するとヴィータもアイゼンをあたる寸前でピタッと止める。

「なんだ？命乞いか？」

「そうだな。からかった佯びとしてデザートを用意するが？いかなかな？」

ヴィータがピクッと反応する。そして他の二人も反応する。

「あ、ずるい！私も！」

「うちも！」

「それなら私もお願いします」

亜夜にはやて、兄ちゃんまでもがデザートを所望してきた。

「待て！それじゃあ侘びの意味がなくなる！俺がヴィータにぬっ殺される」

「全員に用意するんならうちがヴィータを止めたるで？」

「・・・了解、それで頼む」

取引完了。はやてがヴィータに声をかける。

「ヴィータ、今から一樹兄ちゃんがデザート作るからその辺にな」

「ち、命拾いしたな。美味くなかったら承知しねーからな」

「・・・頑張ります」

「じゃあ、よろしくな一樹兄ちゃん」

「はいよ」

そう言つて俺はヴィータにおかわりのご飯を渡し、台所にむかう。さてと、作るデザートは……………ガトーショコラのアイス添えにすつか。メニユーを決めさくさくととりかかる。リビングでは楽しそうな声が聞こえ、その声を聞いていると若干疎外感を感じる。そんな事を思いながらデザートを作っていくのだった。

斎藤亜夜

今台所でお兄ちゃんがデザートを作っている。料理は普通だけど、

お菓子は桃子さんから教わっているから家で一番お菓子作りが上手い。もつとも桃子さんと比べるとまだまだけど。それでも美味しい事には変わらない。食事も終わったから、私達は出来上がるまでの時間を使って自己紹介をする事にした。

「じゃあ、始めは私ね。斎藤亜夜、九歳！聖祥の小学三年生！はやてちゃんとは同い年です！魔法も使えます！デバイスはこれ「アマテラス」です。形態は「刀」です」

《アマテラスじゃ。宜しく頼む》

アマテラスもそっけないが返事をする。また何か言われるかと思つてちよつとドキドキしていたけどなくてよかつた。

「次はうちや！八神はやて、九歳！学校は今休学中やけど勉強はちゃんとしとるで。一樹兄ちゃんと偶然知り合つて亜夜ちゃんと友達になれたんや。そんで今日は新しい家族ができたんよ！」

はやてちゃんはすごい笑顔で言つてきた。

「え〜つと、この「闇の書」って言うのを守る守護騎士のヴォルケンリッターって言うんやて。はい順番に自己紹介！」

「はい、ヴォルケンリッターが将、烈火の騎士シグナム。闇の書の起動により主はやてを守護するため参上しました」

「同じく、鉄槌の騎士ヴィータ」

「湖の騎士シャマルです」

「盾の守護獣ザフィーラだ」

「五人そろって？」

「八神戦隊ヴォルケンジャー！って何やらすんや！一樹兄ちゃん！」

「おいしい！どつかの特戦隊みたいに全員がポーズをとれば尚よかったです！」

「む、それは確かに一発芸としてはアリやね」

「無しだよはやてちゃん？！お兄ちゃんも黙って美味しいデザートを作る！」

「へーい」

お兄ちゃんに釘を刺して、危険な方に進もうとするはやてちゃんを引き止める。お兄ちゃんはカシャカシャと何かをボールでかき混ぜている。

「主よ、流石にそれは・・・」

流石にそんな事をしたくないのかザフィーラさんが止める。

「冗談や、冗談。あ、それとあと一人おるんやけど何故か怪我した状態で出てきてな。今はうちのベッドで休んどるんやけどまだ目が覚めてないんよ。名前も分からんし」

「ん？その人もヴォルケンリッターなんですよね？」

「そうだと思うんですけど・・・」

「そうだと思う？」

「知らないんです。いつもヴォルケンリッターは四人なんですけど、今回の起動では何故か一人増えてました」

首をかしげながらシヤマルさんが答える。

「その様子だと過去に例はないんですよね？」

「メンバーが増えたのは今回が初めてだ」

「そうですか・・・その人を一人にして大丈夫なんですか？」

「あ、それは大丈夫だよ兄さん。お兄ちゃんが自分のデバイス置いてきたから。何かあったらすぐ連絡が入るって」

「それに結構な怪我でしたからすぐに動けないと思いますよ」

「しっかし何であんな怪我してたんだ？あいつ」

「それは本人に聞くしかあるまい。ここで話し合っても答えが出る訳ではないからな」

「それはそうだけだよ」

「まあ確かにそうだよ。気になるけど本人から聞かないと分かる事でもないしね。と言う訳で自己紹介続き！」

私は兄さんに振る。

「次は私ですね、斎藤晃です。19歳、ハーバード大学に通っています。今はこっちに用が出来たので帰って来ています。魔法は使えません。リンカーコアと言うのは有るみたいですが、戦闘が出来る程魔力はありませんね」

続いて兄さんが自己紹介をする。

「は、ハーバード大学やて!?めちゃくちゃ頭ええやん!!」

はやてちゃんが驚く。

「はやてちゃん、その大学ってそんなにすごいのか?」

「すごいも何も、国内やなくて世界でもトップクラスの大学やで!」
「?」

「へへ、すごいんですね」

「・・・シャルほんとは分かつとるんか?」

「いえいえ、私より頭のいい人なんて沢山いますよ?あそこはほんとにすごいところですよ」

「マジ!??」

私、兄さんより頭良い人見た事ないんだけど……。

「マジもマジ、大マジですよ。各分野で専門家がそろってますからスペシャリスト

ね。その人達から毎日色々な話しを聞けるから毎日が楽しいですよ」

「あゝ、私無理だ。そこまで好きになれないなあゝ。て言うかこれ以上頭の良くなる兄さんに吃驚だよ」

「うちはちよつと興味あるなあゝ」

「それでしたら夏になったら此方に来ますか？確かサマースクールがありますから連絡していただければ話してみますよ？」

「せやけど、うちこの足やし・・・」

「一樹がいれば大丈夫じゃないですか？」

「まあ、確かにお兄ちゃんがいれば大丈夫そうだけど・・・」

「あゝ、すまん兄ちゃん。行けるかどうか分かんねー」

台所から聞いていたのかお兄ちゃんが言ってくる。

「おや？そうですか。向こうでみっちり勉強を教えようと思っただけですが」

「嬉しい提案だけど厳しいかも。もし時間が出来たら考えるよ」

「そうですか・・・しかし来る時はくれぐれも正規のルートでお願いしますよ」

「・・・善処します」

「ちょっとお兄ちゃん？聞き捨てならない内容なだけど？」

「黙秘権を行使する」

「ああ、私がこっちに忘れ物をしたので送ってほしいと言ったら文字通り飛んできましたよ。一樹が」

「ちょっと兄ちゃん!？」

「どづいつ事？」

「・・・つい最近なだけどな。ここからアメリカまで飛んでった」

「「はあ?」「」

「いや、兄ちゃん普段忘れものなんかしねーからさ、どんな顔してるか気になって気になって、そしたら何か変にテンション上がったな。アメリカまで飛んでつちまった。いやー楽しかったぞ?途中イルカの群れを見かけたり、アニメや漫画よろしく自分が通った後は水しぶきが上がるし。終いには戦闘機から追いかけられるし」

「「「なっ!!!」「」

「調子ぶっこいて高度をとったのが不味かったな。どうもレーダーに引っ掛かったみたいでな?F 22がスクランブルで発進したみたいで追っかけっこだったよ。捕まる訳にもいかないし攻撃なんかもつての他だろ?だからずっと無視してただけど陸地が見えてきたらミサイル攻撃してきてな。流石にスサノオが教えてくれなかったら危なかったかもしれな。で、とりあえずミサイルを防御してそのまま海に逃げたってことだ。やっこさんから見たら撃墜したよ

うに見えたんじゃない？」

「それである時ずぶぬれだったのですか・・・」

「いやーちよつとヒヤヒヤしたけど楽しかったし、兄ちゃんの吃驚した顔が見れたから良いんだけどな」

「よくありません！あの後色々調べたら米軍内で問題になってたんですよ？」

「・・・え？」

「当たり前でしょう？人型の偵察機だとか有人単独飛行が可能な新装備とか宇宙人とか！しかも最新鋭機であるF-22が機動性能で完璧に負けたんですよ？今米軍では撃墜地点で血眼になって残骸を探していますよ。それに伴い特別予算が組まれ、戦闘機の機動性の見直しに、新技術開発といったプロジェクトが立ち上がっています」

「何それ怖い」

「自分でやっておいて何を言ってるんですか？」

「いや、そもそも忘れ物をした兄ちゃんが悪い」

「私はちゃんと宅配で良いからと言いましたが？急いでいた訳でもありませんでしたし」

「・・・まあ良いじゃん。身元がばれてる訳でm」ピンポン」・・・え？」

（（あ、結構動揺してる））

お兄ちゃんがあからさまに動揺する。けど、すぐに携帯電話を取り出して、

「・・・私だ、礼の件が組織にはれた。緊急事態に付き拠点を破棄してすぐに逃げる。合流地点はB-3で。・・・ああ分かってる。すべては運命石の扉シュタインズ・ゲートの選択のままに。エル・プサイ・コングルウ！」

「動揺してると思ったらそれかい！」

すぐにネタに走るのはすごいと思う。

「む、敵か？」

「おもしれー。あたしたちに挑むとはいいい度胸だ」

シグナムさんとヴィータちゃんがデバイスを起動する。

「怪我しても大丈夫ですよ！」

「主には指一本触れさせん」

シヤマルさんにザフィーラさんも後衛は任せろって感じで言ってきた、立ち上がるヴォルケンリッターのみんな。

「「あんたらもか!!」」

「はあ・・・」

私とはやてちゃんが突っ込んで兄さんがため息をついている。

「しかし先ほどの会話のたとええんよ、シグナム。敵だとしても一樹兄ちゃんを突き出して終わりやから」・・・そうですか」

「・・・ひどくね？」

そう言いながらもデザートを作っているお兄ちゃんも大概だと思つあ、オープンに入れたそろそろかな？

「それは兎も角、誰かしら？」

そう言つてお母さんが玄関に向かう。そう言えば誰だろう？こんな夜中に。

「あら、こんばんわ一樹ですか？いますよ。ちょっと待って下さい。一樹〜！」

「・・・俺ちよつと姿くらますわ」

そう言つてまどから出て行くこととするお兄ちゃん。

「一樹。観念して逝つてきなさい」

「嫌でござる！豚箱にはまだ行きたくないでござる！しかも兄ちゃん字が違つー！」

「おや？よくわかりましたね」

「シグナム！ヴィータ！シャマル！ザフィーラ！取り押さえるんや

「武器は使用禁止や」

「ハッ！！」

お兄ちゃんとヴォルケンリッターの追いかけてっここが始まった。

「おいこら！大人しくしろ！」

「テメー！いい加減捕まれ！」

「ザフィーラ！そっち行きました！」

「任せろ！」

四対一で逃げまくるお兄ちゃん。これだけ逃げてるのに物が倒れたりしないから不思議だ。

「あ！お兄ちゃん！天井走らないでよ！」

「一樹、逃げるなら床の上だけにしなさい」

「・・・この異常な光景は何なのよ？」

「あれ？アリサちゃん？」

そこに現れたのはアリサちゃんだった。どうやらお兄ちゃんが行かなかったから上がってもらったみたいだ。

「こんばんは、亜夜、はやて。上がらせてもらったわ」

「ん？何だ、バーニングだったのおおお！！！！！！」

アリサちゃんに気付いたお兄ちゃんが立ち止まる。そこにヴォルケンリッターが飛び込んで捕獲する。

「バニングスよ！……って相変わらずね一樹は。また何かやったの？」

「ははははは……はあ」

私は乾いた笑いとため息しか出なかった。

「亜夜？此方のお嬢さんは？」

「あ、え〜つとね私の同級生のアリサちゃん。同じクラスなんだ」

「そうですか。こんばんはアリサちゃん。亜夜と一樹の兄の晁です。亜夜が何時もお世話になってます」

「あ、いえ、こちらこそ」

「……そうだよ。これが普通の自己紹介だよ」

「何かあったの？」

「うん、いつもの如くね」

「……分かったわ」

アリサちゃんに納得してもらったところにお兄ちゃんがバインドで

ぐるぐる巻きの状態でほつり投げられる。

「おし！捕まえたから持って帰っていいぜ！」

「……いらないわよ」

「ひどい！私との事は遊びだったのね！」

「遊びにすらなっていないわよ？」

「ぎゃふん。所で何用かね？」

「あんだ、人に用事頼んどいてそれ？」

「ん？もう見つかったのか？早くね？頼んだの昨日だぞ？」

「うちの鮫島ならこの程度片手間で終わるわよ」

「鮫島さんパネエつす。……資料は？」

「これよ」

「サンキョー！」

「礼の件忘れないでよね」

「おう。あ、そつだそろそろ出来上がるから食ってけ」

「何を？」

「食後のデザート」

チーン

とタイミングよくオープンの音が響く。

「あんたが作ったの？」

「うむ、まだまだ桃子さんには遠く及ばんがな」

「当たり前よ。そう簡単に辿り着けるレベルじゃないわよ。あれは」

「そうなんだよな。でも桃子さんが背中ですついで来れるか？
ついで言ってる感じがする」

「・・・何でそんなに男前なのよ？」

「何処のエミヤやねん！」

はやてちゃんが出っ込む。

「ヴィータ、バンドといてくれ。ほれ、亜夜。手伝え」

「はい」

「ち、しかたねーな」

そう言ってバンドを解かれて自由になったお兄ちゃんがケーキを切り分けていく。あたりにチョコレートの良いにおいがたちこめる。丁寧に粉砂糖を振って、アイスを乗せる。ちょっとしたアクセント

にミントを乗せて完成みたい。テーブルまで運んで準備完了！

「さあ食べー！」

「見事なものですね」

「ホンマやな」

「ほんとだね」

「これで普段がまともなら・・・」

「」「」「はあ・・・」「」「」

「仕方ねーべこういう性格なんだから」

「あんだね・・・直そうと思わないの？」

「うんにゃ、これっぽっちも。んなこと良いからさっさと食べれ。感想が気になるんだから」

「分かったわよ」

お兄ちゃんがそう言うときみんなが一口食べる。うん、美味しい。

「むー！」

「あー！」

「ほっ」

「・・・美味しい」

ヴォルケンリッターのみんなにも好評のようだ。みんなあつという間に食べてしまった。

「ふむ、好評のようだなによ・・・ん？」

お兄ちゃんが不意に黙り込む。

「どうしたの？」

「どうやら怪我人が起きたらしい」

「本当か？」

「ああ、スサノオから連絡が入った」

「ほんなら行こか。事情も気かなあかんしな」

「じゃあ、聞きに行くか。みんなはちょっと待っててな。あんま大勢で行っても仕方ないし」

そう言うとお兄ちゃんは、はやてちゃんとヴォルケンリッターと一緒に出て行った。ちょっと気になったのはお兄ちゃんの顔が「P・T事件」の時に見せた顔をしていた事だ。

「これから何が起こるんだらう？」

ちよつと不安になる私だった。

第五十三話（後書き）

・・・すみません。五人目の紹介が次に伸びました。次は必ず紹介
します！あとザフィーラがガトーシヨコラを食べたところですが・
・ご都合主義です！チヨコレート位へっちやらなんです！皆様の広
い心で許してください。デザート作るの早すぎね？ってのもご都合
主義です！気にしないでくださいwwww

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5838r/>

魔法少女リリカルなのは ~その拳で護る者~

2012年1月2日00時47分発行